

## 【日記翻刻】 奥田八二日記（1985・87年）

香川，忠雄  
元福岡県職員

城島，泰伸  
元福岡県遠賀福祉事務所所長

藤岡，健太郎  
九州大学大学文書館：准教授

<https://doi.org/10.15017/2740944>

---

出版情報：奥田八二日記研究会会報．4，pp.1-328，2020-03-31．奥田八二日記研究会(九州大学大学文書館内)

バージョン：

権利関係：

【日記翻刻】

奥田八二日記（1985・87年）

翻刻 香川 忠雄（1985年）

城島 泰伸（1987年）

校訂 藤岡健太郎

凡 例

1. 1987年日記の原文は縦書きであるが、横書きに直した。
2. 漢字の旧字体および異体字は固有名詞や漢詩の引用等を除き、常用漢字体または印刷標準字体に直した。また原文に「𠄎」と記されたものはすべて「經」とした。
3. 明らかな誤字・脱字については適宜修正した。疑問のあるものについては「ママ」を付した。判読できなかったものは「<sup>(不明)</sup>□」とした。
4. 踊り字のうち「くの字点」は文字に直して表記した。
5. 原文の振り仮名はそのままとした。
6. 原文では句点と読点が明確に判別できない書き方がなされているため、本翻刻においては文脈等から適宜句点・読点を判断した。
7. [ ] で記されたものは原文の記述である。
8. 日記本文記入欄以外に記入されたものは【欄外記入】とし、各日の末尾に掲載した。各巻末等に記載された記事については【「○○欄」への記載】とした。
9. 原文中に差別用語等がみられるが、歴史資料としての意義に鑑み、すべて原文のとおりとした。
10. 日記に貼付または挟み込まれている新聞記事等については、その記事名・掲載紙の情報等を【 】で記し、文面については掲載しないこととした。
11. 翻刻は原則として日記全文を対象としたが、研究会の判断により省略した部分がある。

## 1985年

新年にあたって

年頭にあたっては、一年の計は元旦にありとの言葉どおり、その年頭所感中でも計画や決意をのべるのがほんとうであろう。しかし、なぜに、年頭云々のなのか、なぜ人々は年頭の諸言動をするのかということを考えてみるのも意味があるのではないだろうか。もし、年のあらためがなかったら、平素の惰性をどこかで反省する機会が失われるのではなからうか。毎月1回とか半年に一度とかいうのも妙である。結果論ではあるが、年に一度四季めぐると同じ時に区切るのはよい思いつきであろうと思う。世界の他の諸国の慣行は知らない。が、それぞれに何らかの慣行ができて年に一度ふりかえってみる慣行ができていない。日本に旧暦であれ新暦であれ、新年の区切りが祝日とされる慣行ができていないことを、大変よいことと思う。その対応の程は各自違おうが、この時ほど各自が利害、思想、年齢、性、立場、位置等々の差を縮めて言動する時、チャンスはないと思う。謹賀新年、あけましておめでとう、等々交わす言葉もこの時ほど共通性の多い機会はない。東京など大都会に集中している人が一せいに故郷に散っていく。こんなのは年頭だけである。着る物もだが、とりわけ食べるものは各自極めて近似的なものとなる。誰が言い出し考え出しというのではないのに、年頭はこのように人々が差をなくして無限に近似的になる唯一の機会となった。この慣行はどの社会的な力よりも強力に人々の言動を支配する。ところでこの新年、正月を「おめでとう」という言葉で相互に表現する。「喪中につき」ということわりのはがき書かないと、喪中の人はみんなの仲間入りをできない。逆にそう書くことによって年賀の仲間入りをするのである。これを例外とすると、すべての人は年頭を祝日として表現する。始めだからめでたいという以外に説明のつけようがない。旧年中に処理すべき課題、金銭問題であり、積年の汚れであれ、すっかりきれいに処理して、改めてスタートしなおすということ、そのことがめでたいという以外にめでたさはない。昔流に、新年に一つ年をとるという観点に立つと、冥土の旅への一里塚であったり、めでたさも中ぐらいということになってしまうほかはない。正月は子供の時代は文句なくうれしい。お年玉がもらえるとか、遊んでも文句はいわれなとか、珍しい物を買ってもらいごちそうを食べる、学校が休みになるとかの理由が加わるからであろう。が年を重ねるにつれ、めでたい正月も、特別に改まった感想もなく、或る面では面倒ですらある。改まった決意や感激がなくなる。それでも「おめでとう」を連発しながら初対面していくのである。

1月1日（火）

山なす賀状を前にして

精神的に不安定はない。隣原田さんが今日亡くなったというので、同年たる私がいつそ

ういう日を迎えるかという不安がないではないが、本来的に、自分には、そういうことがあると思わないのが人間だろう。机辺が全く旧のままで正月を迎えてしまった。ままよという気で、郵便受け一ぱいに賀状が来た。毎年賀状の整理に正月の時間をとられるのだが、今年は又格別で、どう整理したらいいかわからない。知らない個人名義<sup>ミヤギ</sup>のものがとりわけ気になる。企業、外郭団体なども多いが対応の仕様はあとで考えるほかない。役所、議員などはもう秘書室で対応してくれているはずだから、心配しなくていいだろう。個人名義<sup>ミヤギ</sup>のものはあとで県民の会に処理をお願いするしかないのではないか。私の住所録はもう30年ほど使っているのではないか。汚く、ボロボロになっている。アドレス変更など次々とやっていると耐えられなくなる。もうそろそろ限界がきているので、次の対策を考えるしかない。賀状——こちらが出してない場合、あいさつされて黙っていいのか、これが良心を痛める点である。賀状の交換——これは無用とは思わない。だったら、その整理はどうしても年に一度は通らねばならぬ苦痛の門だ。

1月2日（水）

甘木線廃止問題に直面して（1）

秘書室から来客応接手伝いと称して古沢、松尾が来宅。また年末には三光園からおせち料理2重ねが届けられた。私は何もしないでいいといていたのに、もしかしたらということとで秘書室は交代で手伝いに来ることにしたという。元日は誰もこないだろうから2日と3日と計算したという。はたして今日は多少の来訪者があった。しかし協会系大坪、衣笠、嶋津らである。明午後甘木から甘木線問題で来訪者ありという点につき、社会党の政審側でも早速対応を考えてもらわねばならぬということになって、白石、長谷川両県議に大坪、嶋津で連絡してくれた。それはいいとして、社会党も、この重要問題に、ローカル線廃止問題全体に、どう対応するかにつき、廃止反対ということ以外に何の方針も出してないのだから、困ったものだ。知事は重要事項の決意には社会党の政審によく相談してくれという筋はあるものの、この両者は次元を異にする場合が少くない。ローカル線廃止は交通弱者の足を奪うものだという基本線だけを確認して運動の戦略を決めたとしても、廃止という現実がどんどん進んでいるのに、原則だけを繰返し主張しても知事の対応にはならないのである。

1月3日（木）

甘木線廃止問題に直面して（2）

約束どおり午後3時にあらわれた13人の陳情者には秘書の者が知らない形にしておきたかったのだが、今日は特別に秘書室から多く来ていた時で、事はオープンになってしまった。佐々木君ら秘書関係は私の甘木線対応を心配しているので、明日以降どう反応ができるかが問題だ。現実<sup>ミヤギ</sup>に直面してみないと何ともいえないが、半ば不安がつきまとう。陳情<sup>ミヤギ</sup>に来た

甘木の要人たちは、私の気持はよく理解してくれたと思う。私は否と応との綱引きですよ  
とっておいた。政治で決定要因の力だけが今後の問題である。このことをいっておいた  
ので陳情に来た人達はよくわかってくれたろう。塚本市長はカケだからやってみないとわ  
からないので知事が応援してくれれば勝てるといっている。私が応援できる雰囲気を作っ  
てほしいのだ。正直なところ甘木線を残すには資金、冒険、他線との調整の問題がつきま  
とうが、成功したら面白いことこの上なしだ。ローカル線問題で無策では通らない。一本  
や二本は残さないでは笑い物になる。だからこういう冒険は価値あるものなのだ。

1月4日（金）

年頭記者会見

年頭記者会見は知事所見表明ということで注目される。職員への知事訓示も同じ。どちら  
も準備はしていたので、まあ好評の部類だったと思う。記者たちは思いのほか次期知事選  
を意識している。私をとりまく者敵味方をとわずみんながそうなのかも知れない。こっち  
がまじめに選挙を意識せずに、まともに問題提起や対応姿勢をのべても、選挙用と受け取  
る者が多いわけだ。自分の意識は、これまで奥田県政はわかりにくいという声が高かった  
ので、今年こそわかり易いものにするため全力投球するということ、奥田カラーを出して押  
してきて選挙にそなえる構えと解釈する。記者も敵味方両方ともそう解釈する。記者は具  
体的に奥田カラーとは何なのか言ってほしいというが、昨年初すでにいい始め今日も強調  
している、「県民総立ち」だという外はないと説明している。題目は高度技術、国際化、  
情報化、高齢化を柱とするが、そして目標は県勢の振興におくがこうした課題ハードルを  
乗り越える仕方が自立自助を基本として行政がこれに調和するという意味での「県民総立  
ち」であるということである。昨年は三悪追放（ガン、交通事故、少年非行）にしぼって  
それを唱えてきたが今年には21世紀にらみでハイテク化、高度化などにつき試行していく  
ということだ。

1月5日（土）

ひとりになりたいと思うとき（つつきまわされて仏のようになるのもいいが、やはり現実  
の身）

かくて今日も一日暮れにけりといいたい。土曜というのに夜の7時半まであれこれの集り  
に出席して似たような祝辞をのべ人々に頭を下げ名刺を交わし、旧年中は、今年もとの言  
葉をくりかえす。ある意味では機械のごとく、個性のない激務。あいさつが長すぎたとか  
言葉づかいが不適當とか、ある人にはあいさつが欠けて知らぬふりをしてしまったとか、  
時間がないので急いでくれとか、秘書が傍らで一々注文をつける。秘書だけではない、女  
房もあだこうだと注文が多い。これらが全くなくても大過ないはずなのに、一々注文が  
つく。県議会での野党攻勢と遜色のない状況である。このようにみんなからなぜこつきま

わされねばならないのか、と思うと、いくら忍耐が肝腎といっても内心は正直いってむかむかすること甚だしい。とくに自分で少し話が長すぎたかなというふうに、あれこれ反省している所をつつきまわされると、とくにそうである。気付かない点を指摘されると忠言として承るのにやぶさかではないのに、これはいけないと思っただけでついそうなることがあるのに、わざわざ注意されると腹の虫がおさまらない。仕事が一ぱいあって片付けているのに早く風呂に入れと何回も催促される場合も同じ。一人になりたい。

1月6日(日)

#### 県子連の第1回カルタ会

県下の小学校の3~6年生の子供たちを対象に県子連の主催で初のいろはカルタ取り大会が社教総合センターで開催され、上位3チームに楯が知事賞、教育委員会賞、県子連賞として、3校に贈られた。私の発想を予算の裏付なしに県子連が早速にも実行に移してくれたもので、その態度の立派さには感服した。私はこれを一つの試行例としてではあるが、高齢者の生きがい対策と結びつけて県下に広く普及させたいと思っている。マスコミが協力してくれればもっといい。同様の筋を、他の事例によって試み、どんどん地域にモデルを作っていくてくれればとも思う。カルタ会だけではないのだ。子供の健全育成が学校の教師だけの責任であるかのように論ずる自民党県議の主張が、学校、地域、家庭の3分野の一体化によって、誤りであることが実証されることが待たれる。今は、地域がその責任において高齢者対策なり青少年健全育成の具体的対策にとり組むための組織論の提起、成熟が待たれる。この分野での理論の成熟は、実践例の集積と相携えて進展する以外にはないであろう。その意味で今日のカルタ会が、巨大な前進のための第一歩であることを切望する。

1月7日(月)

知事補佐の役からの逸脱は困る。

樺島君が政策上のことを知事に提言してくれるのはよいが、時に保守陣営の考え方をそのまま強引に押しつけがましく出してくる。今日県行革について、人員整理はするてもありしなくてもありうる結果論だと私がいうのに対し、県行革の目的にまで高める必要性を彼は強調する。以前に企業誘致に関しても似たようなことがあった。自民党の言い分とそりを合わそうとの意図がある。県政運営の円満を旨とするそりを合わすことも一手段ではあるが、何もそれをこちらからいう必要はない。自民党側は奥田とその支持母体とを衝突させることを狙いとして、行革の目的に人員削減を入れることにより、衝突させる一つの方途を得ようとしているのだが、樺島がこれをあえて私に進言するのはおかしい。知事の「県独自の行革」を、自民は国の方針に沿った行革にせよともいい、人員削減なき行革はないともいって批判している。そうすると「県独自」ということをどう考えるのか、自治とは何かがわからなくなる。県は国の行革は否定も拒否もしない、がその外で「県独自」

といっているのである。樺島のいうようになると、それはなくなる。これでは知事の補佐という役割を逸脱しているのではないかと思う。

1月8日（火）

北九地評の苦悩

北九地評の新春旗開きに行った。今年はすぐに市議選があるためか集りがもう一つ少なかった。横佐古体制から永野体制に北九地評は改められた直後でもあった。旗開き前の時間を利用して新執行部との懇談会を約一時間もったのだが、北九は今全体的に失業問題の重圧が各民間企業にのしかかっているが、とりわけ国労では何千人という労働者が減員の危機に直面し、反対闘争の士気を失っているのが実態である。他面労働運動のあり方にも問題がある。賃金と労働時間と雇用というような労働問題の核心に、何ら武装することなくとび込み、そこに執着し、資本家に対決してきた。資本家側は市民、政治、マスコミ、教育その他あらゆる方面の援軍を用意してこれに対応した。春闘10連敗のなかにあると三井ハイテク出身の田中副議長は自嘲的ヒュを出して運動の方向転換論を説いたが、10連敗はもう闘いのうちに入らない。軍勢を全面的に再編成しなおすこと、ゼロから再出発しなくてはならないことをこの現実が示している。北九地評は深刻な雇用情勢をみずからのものとして（相手のせいだとの転嫁意識をすてて）取り組むことが肝要ではないかといわれる。少なくなった組織でもそれなりに再出発することはできる。その道を真剣に探してほしい。

1月9日（水）

筑後地方の生きようとする息吹き

今日は一日中筑後川を中心に沿岸をかけめぐった。家具の大川、水管理の筑後大堰、筑後川下流土地改良事業、北野町での水耕式野菜栽培、それから国鉄ローカル線廃止対象の甘木線、いろいろ教訓に富む視察の1日であった。母なる筑後川というが、筑後のいのちの源泉であるばかりか、鳥栖、福岡地域にも水を供給しているこの川の偉大さがかなりよく理解できた。河口有明海の海苔産業を視察すればもっとよかったのかも知れない。田園はそれなりに生きていく方法がある。その方法をみずから考えてくれなくてはならないし、そうしてくれているのがこの筑後である。都市化しないならしないでもいいのではないか。だのに工場誘致を至上命令とする意見はいまだに消えない。消えなくてもいいが、それに頼って、それを待つて何がえられるだろうか。甘木線存続運動は福岡市への出口を求める運動ではあるが、甘木朝倉を定住地化しようとの運動でもあり、これは工場誘致に甘い期待をするよりもはるかにいい傾向である。そういうことを考えながら一日をすごした。筑後の田園地帯がそれなりに独自に生きていく道をさぐってくれることを切に期待するのだが、そこにはじめて文化が独自に育つと思う。

1月10日(木)

頼もしい若者もいる

成人の日に向けた知事対談がRKBスタジオで録画された。3人の成人がゲストだが、看護婦になる人、中国から九大工学部に留学してきた人ともう一人末継という農業大学校の人がいた。3月で卒業、嘉穂町の青年で3町ほど耕地をもつ農家の後継者である。これはしっかり者である。親がトマトを作り、自分もそのあとをとるが親と意見違いで争いごとにならないように自分はメロンを、親と分野を分けてやりたいと語っていた。昨日は北野町で五人で共同でやっている盛華園を視察したのだが、これは主としてみつばを水耕式で手広く栽培している。県の農業普及所が指導しているというのだが、年に2億円の出荷があるという。経費が半分とすれば1億円のあら利、5人で割ると1人2000万円になる。みんな37~8歳の若者である。今日の末継君もこれからだが、米作にたよらず野菜で立っていくといっている。親がかり傾向が強い今日、このような独立心の強い若者が育っているということはたいへんに頼もしい。末継君の場合は筑豊である。石炭後遺症となげく声ばかりが多い今日、筑豊の生き方に一つの示唆を与えとも思われる。必ずしも前途洋々ではないだろうが、やる気がある点、文句なく頼もしい。

1月11日(金)

知事の支持者を遠のけようとの自民の議会利用

県議会の決算委員会で自民党委員から「県民の会」が新年に出した「グリーン21C」(新聞)につき、政治新聞を県庁内で配布したこと、その紙面に県の広報室から提供されたといわれる写真が掲載されているの二点につき追及があり、これまた審議先送り(資料要求にこたえられぬとしたため)という事態がおこったという。前者は配布職員を懲戒せよ、後者は県民の税金でとった写真が特定政治団体に利用されているとの自民党の注文である。後者については、いかなるものも自由に県民に利用されるようサービスしているから問題はないとのことであるが、いずれにせよ、自民党は知事とその支持者の間を裂くことに精力を集中し、そのための県費支出をもものもしない態度で一貫している。対話集会は予定どおりの回数がおこなわれていないとか、そんなのは県費の浪費だからやめよとかいう主張も決算委員会でも出され、資料提出をめぐって紛糾している。紛糾がねらいという議会運営だからどうしても紛糾する。自民多数ということ、他党派がそれにふりまわされているという事実がこのような事態を呼びおこし、県民不在、政策論不在との非難があがりはじめているときく。やらせておけばいいのではないかと思う。

1月12日(土)

自民党の挑戦模様

広報の安達が来て今の議会状況にからみ執行部対応の問題点を話していった。自民党が、



昨年とは違った角度から攻撃をかけてきており、特に広報に鋒先を集中している。執行部は戦々競々としていて、自分のところに鋒先が向かなければホッとしている。鋒先を向けられた部署は全く日常業務ができず、空虚な感をもっている。コントロールタワーがない状況だと安達はいう。このままでは行政がマヒするのではないかと。職員の中には自民党と密接に通じている者がある。問題点が示唆され、そのための資料がつつ抜けになる。しかも即日性をもっている。ある意味ではやむをえないが、問題性（弱点）をもっていること、そういう通報者を内に宿していることが問題だろう。だが自民党は何を考えているのだろう。いってみれば些事をわざと誇大にして日常性の中に波瀾を求めている。次期知事選を意識し、自己陣営の候補擁立を急ぎ、波瀾を求め挑戦するに急である。今日夕刻の印刷工業界の年賀の会の時、主来賓の中にいた江口利雄の私に対する態度。つんとしてこちらがものをいわないとわざと横を向きものをいっても応答しない。江口なんかどうでもいいが、これが自民党の態度を代表していることは間違いない。

1月13日（日）

協会の旗びらきに色紙を配る

社会主義協会県支部の新年旗びらきの宴会会議が山ノ上ホテルであり、私もそれに途中から出席した。80人ほど出席していただろうか。福岡県はとくべつに協会運動に活況があり、今もそれがつづいている。2ヵ月前から中川君がみんなに色紙をやるから書いておいてくれと100枚もってきておいたので、今日それを出席者に配ることができた。彼がいうにはこれら活動家が背後にもつ活動家にも欲しいというならその要求に応じてほしいのだが、ざっとみて3000枚ほどになるのではないかということである。私もこれまでどんどん書いてきたが、3000枚といわぬ枚数にすでに達していると思う。書きすぎという批判が内部にあることは事実。しかし、それも有力な方便であるに違いない。多量に印刷することも考えられたが、印刷すると意外に高価につく。ひまを見ては書きだめするというやり方で、できるだけのことをするというのでこの要求にこたえるしかないだろう。久しぶりにみる協会員の顔々、みんな元気。飯塚で最近三木県議のことでピラまきをやったという連中も、中西衆議院議員、白石県議も来場していた。いい旗びらきだったという感想がもっばら。

1月14日（月）

筆先、手先が自由でなくなりつつある。

字を見ると、それに年齢が反映される。そのことを感じていて自分の字については特別にそれを感じたことはなかったが、ここ数年、とくに最近ではペン先、筆先が思うように動いてないの気づくことが多い。近眼のせいもあるだろうがそれだけではない。先が思うように動いてない。どこかの筋肉に衰えがあるのだろうか。よくふるえた字をみる。年寄りらし

い手紙はそれらしくわかる。こんなになってほしくないと思いつつ、自分もだんだんそちらに進んでいるようだ。字の順序を間違え、あとに書くべき字を先に書いてしまうことが、これまたしばしばある。これは筋肉というよりは頭脳のどこかに変調がおこっているのではないだろうか。かつ他人にはなく、私だけのことなのかも知れない。今日も所用あって色紙を20枚ほど書いたが筆が思うように運ばないのを痛感した。個性差はあろうが、こうして人間は、部分部分ごとに老化していくのであろう。歯の痛みも一本、二本、三本とふえていくのがよくわかる。治療に行くのが面倒なのでどうにもならなくなるまで放っておくつもりだが、ままよ枯れるなら、と思うが、苦痛の増加の中で枯れるのだけはかんべんしてもらいたい。

1月15日(火)

議会引きのばしのリミットが来た

夕方になって樺島君から「かわさき」に来てくれという。永井君は福島県に出張しているが、近藤副知事ら出納長、総務部長、次長、広報室長らが集って明日の議会対策として代表者会議招集要請、その場合の知事の発言内容その他対策を練っていて、これでよいかと私にたずね、よしということになった。昨夕副知事、林社党幹事長らとその前段折衝を自民の浜中、住吉、三木らと行って、かなり詰めたところまで話ができている模様。登島室長に帰りの車の中できいてみると、自民党との調整ができたというのではないので、これでうまくいくというのではないらしい。しかし自民党もいやがらせはもう限界ということので16日一ぱいか精々17日早目には終了にもちこみたいとしていること確実。18日から北九州市議選公示追込みという日程があるはずだからこういうリミットがあることを今日の新聞も解説している。私からいわせれば、知事の重大な失点をねらったものではない今回のいやがらせなのであるから、選挙のような他律的リミットより、自主的幕引きの方が彼等にとっても有利だと思うのに、どうしてこうまでするのかということだ。他党がだまっ

1月16日(水)

何故ここまで紛糾した12月県議会

知事陳謝で幕引きと、何回かくりかえしたことが今日もくりかえされることとなった。多数野党中でも自民党がそうさせるのだから、これまた自民党の作品といってよい。年末二十一日に終わる会期が4度延長になって今日11時45分ぎりぎりの深夜まで、何のためにこうなるのか。彼等の心理はこちらには測りかねるが、すべて自民党の党略先行のためと断言できる。自民党は紛糾の原因は知事発言にあり、会期延長県費「無駄づかい」も知事発言のせいだとあらゆる場で強調するが、スモウはひとりではできないものではない。どんな発言にしろ、会期中に終了する腹があればその方法はいくらでもある。それを、問題を末

節をもってゆき、資料提出を求め、それができないと審議に応じられないとするその方法一本槍でくると、今日までのような事態になるわけである。自民党内にも、野党にもそうした態度をいましめる声がない。いわば少数の意図ある者のしたい放題のような所がある。その上篠田栄太郎という自民党県議団会長が全くの能力不相応というか、ひとりよがりてまとめる器でないときている。策がない、信もないようだ。彼は全責任は知事にあると強弁する。

1月17日（木）

県民の会の創刊号が県議会で追及される種となった

夜、県評の岩崎氏の案内で東京赤坂の「はやし」で焼肉の夕食をすることになった。津田所長と佐々木補佐が同行。岩崎は県議会のあれこれを最後までよく知っていた。社会党の控室にはいつも来ているらしい。県民の会もようやく動き出し、10万人の会員はできるといっていた。後援会というものではないが、独自に動く。それが正月に「グリーン21」という機関紙を出したまではよかったが、それに借用した県知事関係の写真原版を秘書室がどう出したか云々で室長がこんどの12月議会でほんの最近まで追及された。追及する方も「ぼうず憎けりゃ、式の追及で品がないが、される方も、もっと用心してかかるべきだったろう。結局大山鳴動鼠一匹も出なかったのだが、もし出たとすれば発行者の岩崎隆次郎の名だけということか。20万枚配布したと岩崎はいう。天神でまけば、新聞で有名になっただけに、注目されるだろうとの笑い話。それにしても美食家の岩崎氏がこの「はやし」に案内したのは津田氏もびっくり。これから誰かを案内するのに利用させてもらうのいいと。岩崎は九州にいた経験の報道マンたちとこのあと飲むことになっているという。私は彼らの到着をまってあいさつのみで別れた。

1月18日（金）

（このページ19日に書く）

東京はどこまで伸びるのか（1）

佐倉の国立歴史民俗博物館に、所望して見学に行った。この3月で満2年になるという真新しい全国ではじめてという新式国立大博物館である。大阪の民族博と似て構想施設は大へんに新しい。しかし、やはり場所が気になる。都心から車で高速を使って1時間余の時間だから、一般客は、学生にしても2時間はたっぷりかかるだろう。入館者は1年半で百万人というから1日に2000人ほどになる。近かったらもっと多くなるだろう。設立に300億円の経費といっていた。福岡にも国立の博物館をという要望が出されてからずいぶん久しいが、オイルショック後の事情からなかなかそこまで手がとどかない。佐倉は成田空港建設の一つの代償ともいわれるが、明治100年の記念として建設されることになったので、それからでも十数年はかかったわけだ。こういうものは思いの外時間がかかるもので、九

州のそれも、辛抱強く要望しつづけねばなるまい。佐倉からの帰りは羽田に直行したのだが、意外と少い時間で行けた。東京湾のかわりようは大変なものようだ。ディズニーランドの特徴ある建物は上部だけしか

1月19日（土）

東京はどこまで伸びるのか（2）

見えなかったが、駐車場もたっぷり取ってあって、巨大企業というにふさわしい。その他高速道路、鉄道、をはじめ、ビルがどんどん建てられつつある。福岡に帰ってくると、ほんの一寸だけ、どこかに工事があるという程度にすぎない。東京の集積の巨大さがつくづく感じられてならなかった。ただ、すべてが石油に依存するしろものである。そして、地震が心配される。そうでない限り、世界一を誇ってもいいだろうが、二つの心配はしないといけなはず。耐震の建物、施設とはいうが、それは部分すべてをカバーするものであるはずはない。弱い部分が破壊されると、全体が機能しなくなるに相違ない。それからもう一つ。工事に稼働されている資本が、いつまでつづくのか。需要がなくなったらどうなるのか。もちろん、今日の政治はそうした基本雇用の要請に応じうるように運営される仕組みになっているだろうから安心とはいえよう。それにしても今の東京湾の急速な変容ぶりには驚きを覚える。千葉に新日鉄が立地し、神奈川、多摩、埼玉方面が行き詰ったからに違いない。どこまで東京は伸びるのだろうか。

1月20日（日）

還暦に際して思う。

島津登三氏が夕方来訪。近しい人達でみゆきの還暦祝いの夕食会を企画するため、都合のよいのはいつかとの話をもちかけてきた。そういえば私の記念文集を出してから4年余になり、とっくに60歳を過ぎてしまっていたわけだ。今は人生80年ときえいう。まだまだという見方もあるが、客観的にはたいてい年とったものだ。爺、婆のたぐいになってしまったわけだが、気分はまだまだというのがいつわらざる心境。昨年の学文の会で土井仙吉氏がこの3月で停年退職だといっていた。みんなそれぞれに年齢を進めているのだ。今日、姫路からの所望で、旧制中学、高校時代の名簿につき、こんど姫路での福岡物産観光展に際し私が訪姫のとき茶話会をするから、ピックアップしてくれとのことだったので、名簿を見てみると、物故者名も目についた。すでに聞き及んでいる人が殆んどだが、クラスの1割をこえている。なぜに死んだのか、逆になぜに生きのびているのか、それぞれに理由はあるだろう。但し、死んだ人の顔色や動作を思い浮かべてみると、若い時から逞しさがなかったなと思われる人が多いことは事実だ。若い時の鍛錬だ。

1月21日（月）

60年度の予算編成について

社会党政審（県）の人達と庁議室で次年度予算編成に対する態度を論じ合った。大筋において変更の余地のないことは誰しも否定できない。が、細部において、とくに福祉分野において、こまごま配慮されていて、立派だと思った。ずっと前に公明党から要望が寄せられたが、これも大筋で納得できるものが多かった。共産党からも要求が出されている。筋は理解できるが、さて実現させるにはどうすればよいか道がないというのがかなり多かった。自民、民社からは要望は出ていない。これで各党の態度がおよそわかる。国との関係では前年並みといえる予算額は予定されるものの、補助金カット分がかなり大きく、これを地方債でまかなえということになりそうで、そうなると、県財政の硬直性が一段と強まってくる。まだ、国との関係で不確定の要因が残っており、明、明後日の総務部長会議、財政課長会議でそのあたりが明確になるだろうが、今財政課職員はてんてこまいの忙しさである。2月県議会に向けての予算編成は大変である。紛議の諸要因が一ぱい内蔵されている。

1月22日（火）

向坂先生の死（1）

向坂先生が今朝1時ごろなくなられた。新聞によると昨年12月上旬からもう意識が不明だったという。東京女子医大に入院、多発性脳こうそくのためと報道されている。87歳。私より2まわり多いサル年だった。和氣君がずっと付添っていたらしいが、彼もそばにいない時、眠るように息を引きとったと書いてある。半年以上もの入院ではなかったか。人目をさけて、偽名での入院だったらしく、ごく近い人しか会わせてもらえなかった。私は川口氏に昨年末とその前九月頃だったか、二度にわたって上京の際に電話連絡したし、奥さんには最近手紙でお見舞申上げたところだった。奥さんからは賀状もいただいた。昭和42年の協会分裂が最後で、その後音信も絶えていたが、知事選立候補を機に岩崎らが向坂先生と関係が冷えたままではいけないということで、暑中、年賀のあいさつは復旧していたし、先生も知事選には激励して下さったときく。昭和21年だったか、追放からの九大復帰で、川口氏と共に博多駅ではじめてお目にかかってから20年間の接触で多大の影響を受け、忘れ得ぬ「恩師」というに値する唯一人の先生であった。

1月23日（水）

向坂先生の死（2）

昨日の夕刊は各紙とも向坂先生の死去を大きく報道した。大牟田出身だから、郷土の偉人の一人であるに違いない。誰かが「<sup>（不明）</sup>□一人惜しい人だった」とはいわないともらしていた。いろいろピックアップされてマスコミにコメントした人々の誰もがそういわなかったから

である。私もコメントしたうちの一人だが、なぜかそういえなかった。もちろん社会主義協会分裂が念頭にあったわけでもなく、先生からのくんどうの恩を忘れたからでもない。

“向坂協会”の現役指導の面で早くから退いた人だったし、協会の影響が衰えていたからでもある。左翼ばなれの世情を反映しているのであろう。いわゆる向坂派といわれる人達も、一人去り、二人去りして、数少ない人が先生の周辺を守っていただけといってもよかった。すなわち向坂城は孤塁化していたので、巨星おつといえても巨城落つとはいえなかったのではあるまいか。マスコミは「向坂教室」を中心に三池闘争を中心に懐古していたようだが、戦前からの労農派、資本論研究の功績が大きい。但し、労農派が向坂派同様次第に分解していったのはやはり先生のどこかにあった欠陥の一つだろう。

1月24日(木)

行政職の若手幹部を激励するのだが。

庁議室で係長たちと知事の初の意見交換会が開かれた。約2時間をかけた、将来の県幹部候補生たちの集会といえる程のもの。40歳をこす者ばかり。やがて50にもなる人も中にはいる。大学なら教授候補か教授。福岡県では人事が滞留しているといわれる。これら係長はエリートコースを歩むにしても年があとあまりない。上がつかえているのである。厳しさと奨励と兼ねそなえた人事管理が必要であることを、とくにやる気をおこすための奨励策に重点をおくことを、私は強調した。そういうことを部長会あたりで主張し、人事課長に指示することが知事のリーダーシップだと彼らもいった。誰でも、どこでもそうだろうと思うが、ひとは上役、上に立つ者の顔色に敏感である。県のように、選挙で知事がどっち向くか違ってくるとなると、誰しも口が堅くなる。顔色をうかがい、懐疑的になる。臆病になる。こういう人達を前に励ましの言葉をいうのも変だが、言わぬ方がもっと変だろう。学問の世界で一人前の教授になるのとはいささか差が大きすぎるこの政治がらみの世界なのである。“大過なく”といううまい表現が、これら秀才の処世術として今も通用するだろう。

1月25日(金)

帰去来

今日、北原白秋生誕百年祭。次々にこの詩聖を記念する行事がくりひろげられる。柳川市民会館での式典に行ったが、その前にあった碑前祭には行けなかった。帰去来の詩碑。

山門は我が産土、  
雲騰る南風のまほら、  
飛ばまし今一度。

筑紫よ かく呼ばへば

恋ほしよ潮の落差、  
火照沁む夕陽の湯。

盲ふるに、早やもこの眼、  
見ざらむ、また葦かび  
籠飼や水かけろふ。

帰らなむ、いざ、鶺鴒  
かの空や櫛のたむろ、  
待つらむぞ今一度

故郷やそのかの子ら、  
皆老いて遠きに、  
何ぞ寄る童ごころ

1月26日（土）

福岡県経済浮揚の問題の考え方

毎日新聞の家令福岡総局長のインタビューに応じたのだが、彼は私に近い意見をもっていると思う。私は、県経済の浮沈に知事の責任といういい方にこれまでも強い異論をもっていたが家令氏も同様である。たとえば島根県経済が勢いをもたぬとすれば知事の責任だろうか。亀井前知事は退任あいさつの中で、雄県福岡の実を挽回できたのは自分の功績ということをはこらしげにいい、16年間に1200企業を誘致し、7万人に職を造出したと演説している。反面で企業倒産や縮小撤退がどれだけあり、何万人が職を失ったかには口をつむんでいる。自民党県議もこのような亀井が偉大な知事だったとほめたたえるが、家令氏はそういう宣伝には批判的である。大分の平松知事は西日本新聞にとっては寵児だが、家令氏にいわせると、中身は空虚だのに宣伝がうまいだけと冷やかである。そろそろ平松氏もいうことにゆきづまりを感じているらしい。福岡県経済はエネルギー革命、中進国の追上げ、それに中央資本が県内から撤退するのみという支店経済の弱味が、下請的非独立的企業のあり方が県経済を困難にさせているのであって、誰が知事でも同じこと。

1月27日（日）

次期に備えての体制論議

午後3時半頃から7時半頃までスシ、酒をまじえて、県政の体制固めについて、とくに人事配置のことについて懇談した。衣笠、八丁、安達、近藤副知事、浅井人事課長と6人拙宅で。浅井氏ははじめての来訪、自治省からの課長を昨年地元育ちの浅井氏にかわっても

らったのだが、信望はある。話の中で中央省庁からの人事を抑制しようとの声が、昨日の県職支部長会の場合と同様に出た。又、同じ中央人事でも重要ポストではやりにくいので、もっと軽い位置でいいとの声も出た。亀井体制の一つの弊害が中央人事の多いこと、第二は、上意下達ばかりだったこと、第三は財界とのつながりが強く、入札指名まで知事がチェックしており、汚職も少なかったこと、こんどはそういう風がなくなり、職員も明るい気分になってきたという話が出た。清潔を売物にする知事はクリーニング屋をしたらどうかと、自民橋詰県議は議会質問で毒ついたことがあるが、少々の汚れもいとわないのが自民、亀井の体質だったらしい。近藤氏も林県議も汚れはないとはいえぬので、汚れは自分たちでかぶり処理するから、知事だけは絶対清潔を守らねば主張する。当然であろう。

1月28日（月）

白島石油備蓄基地着工（昨年10月15日）後の工事現場視察

午後寒風吹く中を白島石油備蓄基地の建設現場の初視察をおこなった。昨日は北九市議選の投票日で、それへの影響を懸念して日程を今日にのばしていた。テトラポットが次々に製作され、ケーソンも次々に建設沈設されていく、その規模の巨大さには全く驚かされた。科学技術の粋を集めた大工事だとはわかるが、機械というものが、航空機のそれのように相対的に大きくすればどんなことでもできるということを見せつけられたようにも思った。それにしても70万トンの石油のタンカー8隻を繋留するという。この荒海にである。安全について十分な検討がなされているようだが、2000億円余を投入してこの大工事で蓄積された石油は、金利や基地建設費の減価償却など考えて、かなり高価なものにつくのではないだろうか。五島、志布志にも同様の工事がなされるらしい。ある意味では経済の安全保障手段だが、戦争を念頭においたとき、交戦覚悟なら、恰好の攻撃目標、全く弱い目標であるに違いない。タンカーでここまで運んで備蓄し、又タンカーで汲み崩していくその二度手間も考えると、平和ほど安いものはないと思うのだが、どうだろう。戦闘に入るのが目的でなく、他国の交戦による石油輸入の途絶に備えるのであろうが、何とも……

1月29日（火）

消費者被害の妙な世相

広報室企画の対話集会に、消費生活相談員の主婦たちが中心に参集した。話題は訪問販売、青少年非行、食品公害など尽きることがないほどあった。昔なら薬売り、乞食、ボロ買いなどしてその日を食べていった人達が今はなくなった。その代わり、あの手この手でひとの懐からカネを抜きとる割にきれいな手口が考案されてきた。そう、子供の塾のこと、近頃の子供が遊ばなくなったことが話題になった。先生さえもが、子供に、あんたはどこの塾かときくこの頃だという。塾が子供に必要ななら、親の塾への支払い（教育費名目）も必須であり、その財源かせぎに母親たちはアルバイトに走りまわり、その世話がまた営業対



象になっているともいわれる。塾一つ一ヵ月に2万円、二つなら4万円、家計がそれだけ膨張する。塾に行かずにすむ世の中、せめて小学校時代だけでも自由に遊ばせうる世の中にならないかと参集した女性が口々に叫ぶ。子が子なら親も親、訪問販売でうまくだまされる。訪問販売者は子供達の下校時をねらうともいわれる。とくに指摘されたのは年寄り留守番者が狙われ高価な品物の取引、信用買い、賦払い契約に捺印させられ、大金をかすめとられるという結果をまねく。人のスキを狙う者が近頃ぐんと悪質化したという話題であった。

1月30日（水）

総寄りかかり主義のこの世の中

年末に県から国に大挙陳情に行ったと同様に、一月末のこの頃は、県下のあれこれの団体がひっきりなしに知事陳情にやってくる。あの予算、この予算と、補助金のぶん取り合いといってもよい。県議会の各党別々に、各先生がバックの団体を案内してという具合に、そのような議会人の先導のない団体もいくらかでも陳情に来る。市、町の幹部が来る場合もある。返事の仕様が問題になるので窓口となる課から事前に説明に来るが、それを役所ではレクという。レクは陳情問題に限らないが、部下が知事に行く進講のことである。私立学校は幼稚園、高校が主体であるが補助金額は巨額にのぼる。農業、漁業への補助金も巨額である。行革といわれ誰しもその推進を唱えながら、誰しも補助金目あてで行政に寄りかかってくる。総論賛成各論反対が行革の宿命であるが、今日の県行革実施案決定による記者発表に際しても、記者は局廃止に県は熱意がないと不満げであった。がこれも反論反対のなせるところであって、反対を押し切ったら自民党もむくれるだろう。総よりかかりが体質になってしまっている今日の社会、行政マンを減らしさえすれば人件費が浮くはずと一般人も保守派も記者連中も考えている。これらが寄りかかり主義の裏をかくそうともしないのだ。

1月31日（木）

過去帳に名をつらねる候補になりつつある

早朝石川達三氏が、夕方田中六助氏がそれぞれ死去した。この寒さのためかも知れぬ。一人一人知った人がなくなっていく。そして時代が改まっていく。新しい時代を担う若者が育ってくる。知らず知らず、去りゆく人の仲間に自分も加わりつつあるわけだ。元気な限り死ぬまで、自分のことは考えないのが人間だろう。今日田中氏の死の知らせが入ったのはグランドホテルで県下農協系六団体の首脳たちと夕食会をしている時だった。みんな年をとっている。私も彼も年をとっている。やがて順番がくると誰が意識しているだろうか。農協の人達は農協も高度情報化の波の中にとらえられつつあると報告し、それに後れまいとすると、情報機器の装置に巨額の資金が必要といていた。又今日来庁した県美術協会の

人達は7月に新装成る県美術館にオーディオテレビを入れてくれと陳情。これなしには新装成る意味がないともいう。農協にしろ、美術館にしろ、高度情報化の波にとらえられるということになると、近頃のカメラもデジタル時計も操縦しえぬ自分がいかに時代にとり残されてしまっているかに気づくと同時に、過去帳に名を連ねる候補になりつつあることをそれとなく感じさせられるこの頃である。旺盛な人こそが時代を背負っている。何とかして自分を満足させる時間が欲しい。

## MEMORANDUM

### 行革方針への非難

30日に行革方針につき記者発表したら31日の新聞は一せいに非難めいた解説を書いた。行革というけれど、①その理念がはっきりしない、②人員整理のない行革、どれだけのカネの節約が可能かはっきりせぬ行革は行革とはいえない、③各論反対で事柄を見送るのでは知事のリーダーシップのなさが露呈した云々と。早速社会党の林県議も来ての話に、いろいろ非難があがっているが一寸もこわくない、非難させておきましょうと私はいっておいした。11月の行革審中間答申で跡地対策局、消費生活局、水資源対策局の3局廃止が提案されていたのだが、3局廃止は見送った。これに非難が集中した。社会党はもちろん、福岡、北九州の両市、自民党県議、建設省関係国会議員などこぞって水資源局存続を強く要望したのであった。新聞はリーダーシップを発揮して「やれ」と書いているのである。私はあわてることはないと考えている。こうした非難が土光臨調を無批に一部だけつまみ食いした公務員攻撃であり、自民党県議の奥田攻撃に脈を通じて出たものであることは明らかである。第一中間答申が人員削減などこまかい点にまで言及する時間的ゆとりがなかったことぐらいはわかっているはずだし、知事部局が先まわりして、中間答申のいわないことまでできるはずもない。理念がはっきりしないというが、自分達が勝手に作っている行革理念とピントが合わないだけで、中間答申にも明確に述べてある。私も言っている。批判のための批判でしかない。

2月1日（金）

### 大牟田での交通事故ゼロ啓発運動

交通事故ゼロ県民の日の啓発活動のため大牟田に行く。ガーデンホテルでの会議で明らかにされたのは、この一年筑後全域で交通事故がふえているのに、その中で大牟田署管内では逆に減少しているということだ。農業地域ではどの家庭も各人が一台ずつ四輪車をもつ傾向になっており、それが事故増につながっているようだ。大牟田でのこの話し合いでは婦人の自動二輪運転者の増加、それに伴う交通事情の複雑化、が指摘され、自動二輪を使う人達の事故防止への意識向上のための自発的運動例が紹介された。私の平素知らない分野でこのような自発的運動がひろがっているということは感服させられる。今日の啓発運

動の重点は「シートベルト着用」であった。駅前で3色の餅つきをしてそれを配布するとの趣好をこらしたやり方も面白いと思った。シートベルト着用は現段階では全く地についでいない。車の1割にも達してないのではないか。私はこの数ヵ月乗ると必ず着装するようになっているが、習い慣れ、癩になるまで到達するしかない。人の命の大切さを十二分に強調しようと思っている。

2月2日（土）

田中六助氏葬送

昨日は午後の日程を三つ倒して上京。ふつうなら関知しないのに知事なるが故の自民党前幹事長田中六助氏の通夜参詣のためである。午後7時から1時間築地の東本願寺が会場。意外と質素、いや逆に豪華との解釈もあるだろう。東京のどまん中にあるこの近代風のお寺そのものが経済性からみれば豪華といえよう。田中氏は62歳、だから私より2歳下。自民党内ではここまでくるにはかなりの政治手腕があったのであろう。糖尿病でほとんど目が見えなくなっていたといわれる。思想上などどこが偉いのか知らないが切れ味のいい政治家だったと聞く。宏池会、池田勇人元首相のじき弟子であった。逐鹿戦で巨星墜つといえる一例であろう。筑豊再浮揚のため「産炭六法」の延長などで力を貸した人といわれるが、産炭六法で筑豊問題が片づかないことは彼も十分知っていた筈なのに、彼もまた問題の解決を先送りして済ませたにすぎないと私は評する。死人に酷だが、自民党自体の恥部でもある筑豊問題である。農民過保護もまた同じ。「いい子になって、といいたいのである。

2月3日（日）

宇美町子供かるた会

宇美町の子供会育成会連絡協議会の第6回宇美町子供会かるた大会（中央公民館で開会式、住民福祉センター体育館これは公民館隣接）に出席した。昨年友野教育長に全県かるた会をやったらとすすめていたのが、今年1月6日に篠栗の社会教育総合センターで「いろはカルタ」で行われた。これは県子連主催だが、私の希望がこういう形で実現したものといえる。今日の宇美町のは今年で6回目で「百人一首」しかも競技方法は全くプロの形式。小中学校の子供600人が参加。グループごとのトーナメント方式にとどまるが、水準が驚くばかり高い。世の中は広く知らぬことばかりである。県下他にもこの種のものがあると聞く。子供の健全育成を願う親たちが、冬の遊びの一つとして思いついたという。組織者がプロ級の人だったらしい。問題はどのように成長した宇美町のケースを、県下他の箇所にもどう普及させるかではないだろうか。それは当然に県の役目である。立派な事例には事欠かないわけで、それをどう広めていくか、組織者をどう掘りおこして活力を与えるかであろう。このあたり、県庁内には誰も積極性のある者はいないのだろうか。

2月4日（月）

60年度県予算編成に思う（1）

県来年度予算の編成作業・査定と問題処理が大詰めの段階に来た。昨日は与党社会党の政策関係者と山ノ上ホテルで数時間にわたる論議、今日は11組の一般陳情をうけるなど、作業への外圧がつづいている。どの項目にはどの団体、県議がどう絡んでいるというような背景も話題に出て、それが査定のいかんを左右することが少くない。あれこれの項目で少々刈込みをしても、このような事情をくみとってOKにすると忽ち1億2億の額がふくれ上がる。刈り込みの成果など軽く吹っとんでしまう。かなりずさんな要求項目もあるので、そのことを理由に、又時期をずらせてはどうかなどの理由をつけてことわることになるのが精々である。昨年後半に各部に私が出向いて話し合った結果、部長たちが張り切って新規予算要求をしているのが今年の特長という。いいことだが、要望に思いつき傾向が少くない。補助金カットという政府からの圧力で県予算が難渋しているのが最大の特長。これで財政調整基金210億円を喰いつぶすしかなかったという今回の予算は、自民党からの知事攻撃の好餌となろう。

2月5日（火）

60年度県予算編成に思う（2）

今日もまた60年度県予算案の査定に全精力を注いだ。査定をその結果の申渡し、その後の微調整も終わった。論議すればする程額は少しずつ上っていく。財政課は若干隠し財源をもっているとのうわさもあるが、数字上の操作がわからぬところでありうることも亦当然だろう。反面、税收や交付税など不確定な要素もかなりある。これで二度目の予算編成になるわけだが、昨年とくらべて今年はぐっと身が入ったように思う。こんなにじっくり取り組まなかった昨年であった。だが反面取り組み方の足りなさ、始動の遅れも痛感させられた。次の予算はもっと前以って適時適確な指示を行うべきものと思う。労働部長や民生部長らが高齢化に備えて今から何か始めようとしている姿勢がよく見えて嬉しかった。ただ、副知事や財政課レベルでそうした感覚がまだ伸びてきてないためか、問題に対する感度のちがいが見受けられた。辛抱強く、事あるたびに、そういう姿勢を私が見せておれば、彼等も事改めることなく理解できると思うし、否応なしに社会全体が、その方向に動くだろうから、無理する必要はない。次の議会の目玉論点たる教員互助会補助金はゼロとした。

2月6日（水）

一寸暇ができて……

11時ごろ済生会福岡病院での人間ドックに入り。年に2回ぐらいはそれが必要ということなので今回の試みとなったのであるが、この前はいつの事だったろうか、忘れていた。予算査定の結果のお礼ということで日赤の藤井事務局長が来室。日赤も使ってくださいとの話に

なり、では両方で年に一回ずつふり合いましょうとって笑ったことであつた。小川副院長が来て、佐々木、森山の二人の付き人に、知事を使いすぎるのは諸君の罪とさとしていた。そうはいうものの馬耳東風の結果となつてしまい勝ち。秘書にもそれなりの立場と顔があるからである。むしろそうになっている世の中の仕組みこそが問題であらう。午後3時に今日予定の検査が終わり中食となり、以降自由時間となつた。朝のうち福岡経済人余技展と兵庫県の物産と観光展が、岩田屋八階催場で隣合わせでオープン。テープカットが行われて両社に出席して感じた第一は、各社社長連中は誰しも立派な余技をもっていること、平素からの心がけと余暇の必要であることが痛感された。それととくに、絵をかくことを習っておくべきだったということだ。もう思つてもおそすぎである。

2月7日（木）

自然の流れこそわが師

一枝春という句が墨場必携に出ている。暖い数日がつづいているせいもある、梅花がほころび始めた。わが家のはと思つて久しぶりに裏庭に出てみた。暖いひざしだが紅梅白梅とももう少しである。坂の下のうちのはぽつぽつ咲いている。まだ寒い日もこようが、春への歩みは確実である。正月に取ったきり放つてあつたキンカンの実を取る。もう若干しなびかけている。人間ドックの検査が終つて午後早く帰宅する前に済生会の小川副院長が検査の結果を報告して下さつた。血糖値が依然高いほかは特別指摘すべき故障はなさそうだとのこと。院長のいわく、食物は小量多種類、小便は流れ出るままにして中断させないこと、夜の睡眠にはシビンを利用するのもよいとのこと。要は自然にさからうなというのである。小川先生は佐々木秘書を特に呼んで、知事には無理な日程を組まぬよう強く要請されたとか。痛いほどわかるんですがねと彼はいう。小川先生はどこにでもある平均寿命と主要死因の明治から今日までのわかり易い表を見せて、私に、まだ15年も働いてもらわねばならないのだから、呉々も健康保持には注意をといつてくれた。肉体的にも精神的にも欲するように、なるようにまかせねばならないのである。

2月8日（金）

県職員の汚職事件の扱い

塔野という行橋土木事務所長が昨夕300万円収賄汚職で逮捕された件につき、夜は電話が相つぐやら、今朝は異例の部長会記者会見やらで、いやな時間がすぎた。何でも道路舗装に用いられるエフイー工法の材料納入業者との間に、暴力団名義の口座を使って収賄をつづけていたという。そのことはそれとして、正当に対応すべきだが、ここでいいたいのは「清潔をモットーとしている奥田知事のもとで、はじめてこのような汚職事件が起つたがこれをどう思うか、どう処理するか」という記者たちの質問題であり、議会でも同様の質問が出るだろうとのことである。裏を返せば「清潔をモットーにしてなければ……」この

種事件があってもよいということなのかということだ。だから、「清潔云々」とは関係ないはずなのに、なぜそれをくっつけてくるのかということになる。そんなわけで庁内で余分の緊張が生じたわけ。塔野は人前まじめでとてもそういうことをする人とは思えないという。土木部長は塔野の位置でそれができる状況は考えられないともいう。上手の手から水がもれるとかだんまり助平という言葉があるが、世の中には常識では判断できないようなことがよくおこるものだ。

2月9日（土）

みゆきの還暦祝賀会

薬院の梅幸で5時からみゆきの還暦祝賀パーティがあった。嶋津夫妻ら私らが媒酌した5組の夫妻のほか昭和30年代から協会系研究会に出ていた中村誠、篠原文治、篠田広らが来てくれた。ざっと20～30年の古い人達だし、嶋津にしても長女が20歳、舩越、境ら子供が高校中学に行っている。吉村も。私は、われわれが幸せと思う第一の要件は健康にあり、健康の基本は子供を小児時代から思い切り鍛錬することにあると思うという意味のあいさつをした。だが、もうみんなかなり年とっている。苦労もあったろう。それが顔ににじみ出ている。それなりに幸せそうだ。知事選にみんな頑張ってくれたらしい。子供が自発的に学校にピラをもって行って友人にくぼったりした話が出た。私の選挙の場合、子供たちが異常に燃え、それが母親達を引っぱったと一般にいられているが、今日集った人達の子供もその例にもれなかったし、それ以上アクティブだったらしい。みゆきに花束が贈られ、思い思いに買い集めた商品で福引会、当方から男物女物のプレゼント、色紙贈呈などして一夜を楽しませてもらった。知事がこんなにゆっくりしてくれてよかったと、みんなによるこんでもらった。市立福商高の人が飛入りで来たりした。

2月10日（日）

寒風のなか、県民マラソン大会

社団法人福岡県青少年育成県民会議主催第8回福岡県民マラソン大会が行われた。コースは大濠公園一周。グループは小学生1～6年生まで6、中学は男、中学及び高校の女、高校及び一般の男、壮年男、一般女子、オープン計6で合計して12グループが順次スタートする。開会式の時は小雨が風まじりで心配された天気もスタートが始まる頃には小雨止み、私が小1のスターター、2年と一しょに走る。50メートルも行くころは子供達は100mも先という具合でとても話にならない。一周は2000mに200mほど多いようだ。ゆっくり走った。樺島君が伴走したが彼はまだゆとりがあるようだ。息を切らしながら、去年は半分どころで200メートルほど森山のすすめで歩いての一周だったが、今年は完走できた。次のグループの先頭が追越しはしないかということだったがそうではなかった。5分ぐらいで走れるなら立派なものだが、私は15分かかっていたようだ。こういう催しは大変よいこと

だ。県下各地からの参加のようだが、県下各地で開催するのがよいのではないか。母親たちが、子供をはげましている光景がみられる、地域の現地の方が参加しやすいだろう。

【欄外記入】

申込数

1.地区別	2.層別	3.種別
福岡	1506人	小学生 1677人
北九州	244人	中学男 266人
筑豊	109人	女 71人
筑後	343人	高校男 64人
計	2202人	壮年男 33人
		(40以上)
		一般女子 29人
		オープン 37人
		マラソン 2137人
		駅伝 13チーム
		65人

2月11日（月）

コミュニティ・グループ・ダイナミクスについて

三段階目の提案という題で原稿を書いているが、なかなか完成しない。遊びが多いからである。今日は森祐行氏がマージャンに来たので、そのついでに一読してもらった。彼は、そのコミュニティ・グループ・ダイナミクスというのを本題にしたほうがいいのか、その発表には新聞記者を利用して解説してもらったほうがいいのか意見をのべていた。又、それが「奥田カラー」といえるものであろうと肯定していた。あと、高齢者対策について20枚ぐらい書いてみようと思っているが、なかなか筆が進まない。もちろんあと一気に書くつもりでいる。高齢化が進むと、雇用、ボランティアなどの社会参加、老人医療などが次々に問題になる。行政のかかわりがだんだん順次に重くなる。自立自助がだんだん重要視されてくる。そういう問題の解決のためにコミュニティ・グループ・ダイナミクスが応用されるといいと思うのである。高齢化問題だけではなく、他の諸問題についても同じことが応用されてよいという論法である。はたして「奥田カラー」として通用するかどうか、マスコミをうまく利用できるならいいがと思っている。

2月12日（火）

曾左小の時の同窓会（姫路市森富にて）

ヤマトヤシキでの福岡県物産展に私が出席するというので、早くから吉田繁太郎君ら小学校の同窓が集まるスケジュールを組み、それが今日午後五時半、東二階町の森富で実現した。みんなに書いてもらった色紙でこれを見ると、前田重夫先生のほか、田中豊、為則はつ子（梅宮）、和泉てる子（若松）、山井たまえ（川島）、秋田正行、岸川博、内海光子（山

田)、梅宮芳太、富永好春(大坪)、吉田繁太郎、黒川庸、井上三郎、小松ゆりゑ(池田)、中島きぬ子(山田)、坊垣しな子(辻)、福本久子(中村)、大坪あや子(岩田)、江原健三の諸君であった。三島くまえ(鋤田)、大森しげ子の二人があいまいである。みんな同年だが、年とってみえる人もかなりある。黒川もよく世話してくれた。近々に九州旅行を計画しようという声が高まった。今のうち行っておかないと、逃がしてしまうおそれがあるなどの気持がそういう声になったのだ。私は、みんな残り少ない人生だから、今のうち楽しんでおくべきだといっておいた。前田先生は先生というものはいいな、といていた。いろいろ話をきいていると多くは私より記憶のはっきりした人ばかりのように思えてならない。同級生49人中19人が現に死亡、うち戦死が10人だと黒川君が報告していた。消息不明が4人、うち3人が刀出の女性である。昭和9年の12月以降私は佐方に行ってしまう、50年会わなかった人も少くないのである。

2月13日(水)

グリーンピア三木(大規模年金保養基地)を視察して

ヤマトヤシキでの福岡県物産展でのテープカット、福岡紹介のティパーティ、中学校時代の同窓の集り、そのあとに三木にある年金保養基地の見学に行った。車で姫路から70分、神戸まで40分の距離にある山地の開拓地に展開する広大な施設。今福岡県黒木町に着工した年金保養基地は、その規模が半分もないとのことである。ホテル部分、体育施設、遊歩、サイクリング、芝生、山林など、余暇さえあれば何でもできるようになっている。施設はむしろ超デラックスの感じ。ゆとりがありすぎるというか、空き施設が少なからずある感じであった。説明によると一泊二日客が多いという。もっと長期に滞在してくれることが期待されるのだが、日本の社会で許され習慣づけられた休暇はそれほど大きくない。この種施設のためには日本のバカンスがもっと大規模である必要があるだろう。物の方が先んじてソフト面がおくれているというのが実感である。それに、この施設はアクセスに若干問題がある。新神戸から40分の車の距離である。福岡の黒木ではこの点とてもハンディが大きい。何故黒木が選ばれたのか知らぬが、これは将来とも問題として残るだろう。黒木が三木の半分以下というけれども、背後が半分以下だから、一そう閑散としたものになるかも知れない。利用率を高めるため一工夫も二工夫も必要のようだ。

2月14日(木)

小倉モノレールに試乗

小倉ニュー田川で新北九空港予定地埋立計画と北九港浚渫土捨処理との関係処理の会があって出席したついでに、谷市長のはからいで近くの旦過から競馬場前までこのほど開通したモノレールに試乗した。車輪が先日開かれた姫路ヤマトヤシキでの福岡県の物産観光展に出品されていたこともあって、この新モノレールの規模の大きさには感ずるところがあ



った。乗客数はもう一つというところ。予定していた半分もないとのこと。最大の欠点は小倉駅と連結してないということにあるようだが、このことには今回は誰もふれなかった。痛い所だから皆遠慮したのであろう。あとでの宴席で私がプロ野球誘致の話を持ち出したら谷市長も賛意を表明。モノレール沿線にある球場利用でモノレールの収支が少しでも好転するならばとの気持も手伝ってのことである。昨日の兵庫の年金保養基地といい、近頃はどうも容れ物が豪華な割には利用度が低い。投資過剰と需要停滞が併行しているためだろうが、小倉モノレールにしてもこれでうまくやっっていけるだろうか心配する。省力に徹して人件費の切りつめをやっているのはいいが、北九州がモノレールに沿って発展していく見込みは薄いのではないだろうか。設備は近代的でも、大いなる浪費にならぬことを祈る。

## 2月15日（金）

奥田カラー、知事の政治的ふりつけということ

昨日の記者会見について樺島ら秘書の方で私の発言にかなり物足りなさを感じたらしく、今日樺島が「知事の政治的ふりつけについて」なる提言を書いて私に手渡した。彼がいうのは、知事自身と知事の周辺が、知事の行政マンとしての側面だけではなく、政治家としての側面を一そう自覚して言動することが今や強く求められているというのである。彼がいうのは尤もである。が、一つには私自身政治的にふるまうに足る背後の力が不足している。政治的にふるまうよりは行政的にふるまう方が安全という状況が原因している。二つには、私自身、政治的にふるまうことへのはにかみというか、それへの嫌悪心が底にあった。樺島は奥田カラーというものをマスコミの求めに応じてはっきり宣伝の意図をもって大胆に表明してよいのではないかという。そうかも知れないが、私はまだ控えめでありたいと思っているし、控え目に発言してきた。徐々にわかるとか、カラーなどというものは自分でいうものでなく、他から見て形容すべきものだともいった。樺島は県民にわかりにくい知事の発言という。それをカラーともいって、わかりやすくセールスポイントをいえという。ほんとうは、私は自分をセールする積りはないのだが、周辺はセールスポイントがあるべきだし、今それが求められているのだという。わかったようで判りにくいことがらだ。口だけでなく、言動でわかるのではなからうか。

## 2月16日（土）

勤労協の県連合会の出発にあたって

大手門会館で県勤労協連合会の結成準備会が2時から開かれた。糸島地区労の田中、協会の高橋新八氏が事務局長で、結成ずみの校区が90で準備中が80とか。これはもう30年も前から県下各地で（宗像、岡垣、筑後その他）出たり消えたりしていたもので、三池闘争の副産物として大牟田ではかなりのびるかにみえたこともあった。私が挨拶で強調したの

は次の2点であった。第一は、労組やその集団である地区労、県評など地域の問題に取組むには、その本来的な組織(住民組織)が必要であり、自治体はその対象である。地区労等々は正確な住民運動体とはいえない。同じ刃物でも肉、野菜、木材等々により刃物の種類が違いうように、住民運動は地区労では扱えない。そのために勤労協の必要性が再発見されたものと思う。これから自治体問題として生起する諸問題への取組み組織として勤労協に大きく期待できるということ。第二は、組織を有効に動かすのは人であるから、適切な役員配置が必要である。この人のいかんによって組織は生きもするし、死にもする、ということ。とくに第一の点の認識はまだ一般にはよく知られていない。動きは多分奥田再選を狙ったものではないかと思う。

2月17日(日)

高齢者の就労をどうするかは今後の重要課題だが

昨日労働部長を慰労しようということで結局は来宅してマージャンをすることになったのだが、伊藤部長は失対に改革の強い関心を持ち、五十嵐氏の考え方にかなり共鳴しているようだ。私もその気持はよく理解できる。田川地区など70歳をこえる失対就労者がたくさんいる。どう考えてみても異常というしかない。65歳以上は高齢者の部類に入り、労働力人口に入れることはできない。労働問題というよりは福祉の問題、社会保障の問題である。65歳で線引して、それ以上の人達には別口で生活できるよう工夫すべきだろう。筑豊では65歳線引反対の声が強い。「失業者を首切る」のかとさえいわれる。労働部長が先に60年度県予算要求のときに出してきたシルバーアンドグリーン事業というのは60歳から65歳までの人達に就労の場を与えようとの考えから出たもので、県の予算で例えば川の堤防の草刈りをするとか、広場の掃除をするとかいう内容のものだが、県の他の幹部たちは第二失対になるおそれがあるとして、この案に反対した。五十嵐氏が考えているのと共通するわけだが、今一度構想を練り直してみる必要があるだろう。

2月18日(月)

日本フィル福岡公演をきく(30周年第10回)

日本フィルハーモニー交響楽団の九州公演が2月7日の佐賀を皮切りに明19日の北九州での九州厚生年金会館で最終を迎える。福岡県では久留米も加え三箇所、全九州で11箇所という。今日福岡市ではサンパレス、2200席ほどあると思うが1800人ほどの入りであった。久しぶりにきくオーケストラだった。指揮小林研一郎、曲目はモーツァルト歌劇フィガロの結婚序曲と交響曲第40番ト短調、ベルリオーズ幻想交響曲であった。6時半からの2時間、幻想と陶酔の境に迷い込んだかの感であった。音痴のわが身ながら、でもやっぱりよかった。何回も何回も馴れ親しむことが必要だろう。こういうチャンスが多くならないと文化水準は高くない。今日知事室に明日から福岡美術館で西部二紀展がある旨あいさ

つにみえた時私見をのべたのだが、チャンスが身近かに何回もある必要があるだろう。その点われわれはまだ文化水準が低いというしかない。今日、指揮の小林氏がいやな思いをさせられたように、きき手の方のマナーが実に悪い。子供連れで子供の声が指揮者に気になるようなことがあったからだ。時間になっているのに、座席の間の通路をうろうろしたり、大きな持ち物をさげてうろついたり、まだまだ福岡は水準が低いなとつくづく感じた。途中ハナをかむ、もってのほか。

2月19日（火）

生活保護行政の正常化に踏み出す

庁議で決め、記者会見で発表、夕刊一面でトップになった問題。——県生活保護連絡協議会の発足、これは行政の横の連絡をはかることによって保護行政の正常化にふみ切ろうというもの。井上民生部長が先日原案をもってきて私が承認したもの。また、夏、太宰府でのサマー・インの時から構想を練ってきたものでもある。関係各部から15人の課長をその委員として構成させる。県の生活保護が全国で突出していること、その中にいわゆる不正受給のうわさがたえないこと、暴力団の温床にもなっていることなどの弊を除去する一歩だと思うのである。調査の結果、県下に3091台の自動車が保護世帯で保有されているというが、現状では県民の納得がえられるものとはいえない状況である。仕事に行くにも車が必要といういい分もあるようだが理由とはし難い。こういう問題に亀井知事は取組もうとしなかったようだ。不思議なことにマスコミはこんな県の方針も「奥田カラー」とはいいたくない模様。（当たり前だ、といてしまう）私もそういうマスコミには、カラーなるものを宣伝しようとは思わぬが、秘書たちは宣伝すべきだという。カラーなど、自分でいうべきものではないのではないか。マスコミがどうか、扱うかはどうでもよい。よかれと思うことを勇気をもってやるのが大事と思う。カラーとか宣伝は意識する必要は感じない。

2月20日（水）

県議会の時期になった

二月県議会が明日にせまった。補正予算案の査定も午前中にすませた。提案理由の説明、が刷り上ってきて、これを再読し、息継ぎのしるしをつけた。三年目の県政担当の予算の中味は新味あれこれありとはいえ、苦悩にみちたものである。自民党の攻めはあれこれのポイントで予想できる。もちろんうしろめたい点は何一つない。攻めのための攻めならいろいろあるというだけである。財政調整基金200億円取崩したこと、教職員互助会への補助金支給ストップの九月議会決議の後始末のこと、土木部塔野の汚職事件などだ。ここまで来て少しずつ財政問題の内容が私なりに理解できるようになったと思うが、まだまだ五里霧中のようなところもある。4年も知事をやっていると、だいたいわかるようになるだろ

うとの展望もでてきた。県債とか、特別交付税とか、国、県、市町村の分担システムなどまだまだわかりにくい。財調取崩し、埋戻しについてもトリックがあるようで自民党攻撃に対しては財政課の答弁にまつしかない。又わからないのは県税収入の見とおしについてである。全国レベルの地財状況よりも福岡県がなぜ悪いのかわからない。関西、首都圏の部分だけが好景気突出ということでもあるらしい。中央集権状況が経済界にもそのままあてはまっている。

2月21日（木）

県行政の総合的視点

県行政の縦割り偏重を是正せよとの声が、今日、福岡地方行政連絡会議でも地域福祉基金幹部との懇親会でも期せずして問題にされた。全く当然といえるケースが末端にいけばいくほど痛感されるようだ。先日民生部長が生活保護の適正化について部課の横の連絡会議（委員会）を提案し、私が推奨したことと同じ意味のものといえる。私はこう説明した。医者は田舎に行くと婦人科も小児科も外科もなく、医者でなければならぬように、住民のニーズは専門分化と総合化の二方面から受け止めなければならない。田舎では医者はそれ以上に、人々の先生であり、政治家でもなければならぬ。逆に政治家は医療についても人々の相談相手であり、時には宗教上の先達でもなければならないということと同じであろう。但し、人は誰でも何かの分科の専門家でなければならないという条件で……要は、一つの社会的な問題は総合的な観点から取り組む必要があるのである。青少年育成にしても一般福祉にしても同じことがいえる。君子不器という言葉があるが、器而不器というのが正しかろう。知事は行政の分科化の現状の中でつねにその総合化の、総合的視点での、処理の態度を忘れてはならないであろう。今日二つの場でそうしたこと出されたのに深い教訓を感じたわけ。

2月22日（金）

“甘木線の存続に県は努力する”との暴言を吐くわけにはいかないか

“僕が暴言を吐けるなら”と記者たちの新年会の席上、私の横の某記者にいった。“甘木線を残すように県も努力しよう”とみんなの前で言ってやるのに、と。赤字補填に毎年5千万円10年出しつづけても5億円じゃないか。そのことで地域住民がよろこび地域発展に弾みがつくのであれば決して無謀な捨てがねではない。10年かかっても赤字がなくならないのであれば、第三セクターでの甘木線存続は失敗であったことになるし、地域住民の努力が足りなかったことになる。それだけのことではないか。10万人ほどの県民の生活にかかわることなのだ。それくらいの冒険があってもいい。よい結果を生むならそれにこしたことはない。苅田2号地の造成に投じた債務が今、毎年24億円の赤字（利子負担）要因を県に強いている。それと比べるとたいしたことではない。今日現地出身の中島県議が面会

を求めて私に、地元住民の立ち上がりに水をさすような知事発言は困る、3月上旬の一般質問の折に甘木線への県の最終態度を示してもらうための質問をする、と指摘した。両副知事、総務企画両部長、両次長、交通対策課長ら誰一人甘木線存続に積極姿勢をもたない。中島県議はソロバンではなくこれはこの際政治なのだという。私もその通りだと思う。行政屋は理くつばかりいっているわけだ。

2月23日（土）

県共済農協連の子供作文コンクール授賞式に参加して

昨年同様今年も共済農協連の小中学生作文コンクール授賞式に出席した。今回が20回目という。知事賞の授与にだけ立会したのだが、前の方に受賞者の子供たちが並んでいて実にかわいいと思った。原課が準備した挨拶文をはなれて私なりの作文コンクール論をはさんで話したら、随員の樺島君が実によかったといていた。私がいいたかったのは、作文コンクールという行事を通じて農協が少年健全育成に大きな貢献をしてくれていることに対する感謝であった。作文に意を用いるということは実によいことだ。文字を正しく読み易く書くこと、文章表現を適切にすること、その訓練である。そして自己の個性ある思想、事物に対する観察力を鍛え、それを文を通じて客観化し、自分及び他人に、とりわけ他人に伝達する力を養う。こういう訓練を受け意識して自己を鍛錬しようと努める者は必ずや立派な青年へと成長していくに違いない。これは今日の余りにも機械化が進み、映像文化が進んだ社会では看過され易い人間形成の側面である。それを共済農協がやって、学校教育の補充を果たしてきたというように思うのである。私はできれば漁協、商工会議所、商工会、労働組合などもこういう活動をしてくれることを期待する。

2月24日（日）

知事という仕事は面白いか

先日の「あと山、での記者クラブでの懇親会の時、某記者が「又たずねるけれど……知事というのは面白くないですか」という。「そうね、……やはり面白いとは思いませんね」と答えた。したいことができない、するひまもない、家族だって不自由しているに違いない。車の中から自由に街を歩いている人の顔、姿をしげしげ見て、この人達は自由だなど思うことがよくある。先日の朝日の記者のインタビューでも同じような感想をきかれ、同じく答えた。そこでは県議会を意識してこうも答えた。知事というのは、てっぺんに持ち上げられたり、足蹴にされたり奇妙な存在ですねともいった。政治が上げたり下げたりするのだ。何時もひとが見ている。随行する者がいる。玄関から玄関まで、途中は全部護送である。なぜそんなにするのか。今日の日曜、部屋の中ばかりにいる。自由のようで自由でない。見方によっては閉じこめられているわけだ。そういうなかであってなお、そこに自由が見出せるなら、知事というものは面白いというべきなのかも知れない。野党が絶対多数

だから面白い云々ではなく、このように封鎖された中に自由を見出す心境になるかならないかであろう。

2月25日（月）

人事異動を問題にすべき時期に来た

林県議が来室して、4月はじめ発令の人事の中に生じている問題につき、あれこれ語った。総務部、人事課で練っている案にはまだ甘さがあると彼はいう。亀井時代の余韻がまだ残っている、このことに気付かないからだというのである。人は石垣といわれるのだが、その事はわかっていながら、石が判別できないので、石垣にするのが五里霧中なのである。それは知事を3年や4年やっても似たりよったり、確信のもてる状況にはなるまい。だから「腹心」の部下がイモづる式になければならないのだ。そうであるかどうかははっきりしない側近が与えた人事で仕事をやってきたとなると、寒々とした感じになる。だが役人はそれぞれが保身本能をもっている。よほど大胆不敵というのでない限り、道具のごとく、器のごとく、使う人のいう通りに動くのである。それらの中道をいく事情から、今まで約2年間まあまあやってこれたのだろう。2~3の悪がいることは事実。野党の知事攻撃にはっきり手を貸している者もいる。器として、道具として動かないのだ。昔なら知事暗殺も考えまじき者もいるわけで、それらをよく区別してかかるのが真の「腹心」、人事というのであろう。

2月26日（火）

知事就任2周年記念出版企画について

2年を過ぎたところで、知事が県民に県政執行の基本姿勢を訴える本を出そうということが、社問研・県民の会レベルで話になっており、昨年暮からその準備に入っていたが概要構想もできたということで、今日最終的に打合わせることになり、黒田荘に集って話合ってみた。3回の拙宅での座談会テープを東定君がまとめたのが150枚（半ペラ）に出来上がり、その他私が今書いているものその他どういふものを入れたらよいか討議。およその見当がついた。半ペラ500枚ほどになると一応の形がととのう。県民党について、総立ちについて、など、まだわかりやすく説明すべき点が追加的にいくつか残っているし、総立ち事例を、先進的なものについて紹介する必要もあるというので安達、樺島らに筆をとってもらうことにした。八丁君が東京の本屋と連絡を取って企画の中心になっているのだが、内容はおおむね認められた。議会関係については、さわらないようにしようということになった。例えば「提案理由説明」などがそれである。あれはむしろ事務官が作ったものだが、最初の議会の冒頭部分は私が書いたものであるから、それだけは別だろうと思う。私自身執筆する内容は今まだ若干流動的だ。

2月27日（水）

NHKによる県議会の初実況放映

いよいよ2月県議会が始まった。こんどの議会は放映のことが一番の話題になり、それをめぐってあれこれの動きがある。NHKが1～6時の実況、ロングラン放映である。知事側が得かそれとも議会野党かということも話題で、もし前者だとすると自民がよくもOKしたものだということになる。が自民党は自己宣伝になると思ったのではなかろうか。ここで亀井を褒め、奥田をこきおろし、県民の茶の間の話題にしたいと思ったかも知れない。自民の代表質問は頭の固い高山だった。彼は緊張した発言ながら、例のごとく、いいたいだけ奥田の悪口をいった。県民がこれを茶の間で見ていてどう思ったか知らないが、私の答弁はできるだけはぐらかすことであった。彼は再、再々質問に立った。スタンドプレーとしか思えない。これまでの議会も同じようだったが、自民党の場合、使命感をもって奥田攻撃に立ちあがる。私からみると物笑いになるような役を担って立っている。無理な、そして無内容な、言葉だけの攻撃をいきり立って行う。議会史の中に記録として書き込まれていくのだから、あまり無理をしない方がいいと思うのだが、それをする。秘書たちの意見をきいてみると、NHK実況放映は知事にぶがあるとの判断である。私への注文は服装と仕草についてであった。

2月28日（木）

奥田悪玉、亀井善玉の念仏

昨日も今日も（明日も）NHKの県議会の実況放映である。今日前半の緑政連の松山も、いわば意地悪質問の役を買って出た。昨日高山がやったように、先だつての土木事務所長汚職をあたかも奥田のせいだとのいい方で、その責任をどう取るのだという。今日、田中六助氏の地元葬があつている時刻で、松山は田中を褒めちぎつてあと、私に喰つてかかった。これ又煮ても焼いても食えそうにない男のようだ。教育委員会への質問だったので私は答弁しなくて済んだが、国旗国歌を掲揚高唱する者が愛国者であるということをとくに強弁した。土木汚職は、清潔をとなえる奥田県政のはず、そうでなかったことの証明だといういい方の高山、筑後地方の圃場整備がおくれ、農業予算の伸びが少ないのは農業軽視だという松山。亀井なら同じことがあつたはずなのに、今になってそのことをことさら取り出してつく。16年間の亀井がそうしてきていた事をまず認め、奥田はそれをやめよというならよくわかるのだが……。よかつた事は亀井のせいにし、悪いことは何でも奥田のせいにする。財政調整基金を積んだのが亀井で取り崩しているのが奥田だという。こういうてあいには、シレッとして対応するしかない。

MEMORANDUM

3月1日、田川農林高校では、卒業式に国歌斉唱させるシーンで、これまで生徒、教師に起

立しない者がいた、が代表質問で県教育長が起立しない教師は嚴重に処分するといわせられた。そのため、高教組は戦術を転換して起立することにしたらしい。ところが、田川農高で生徒がほとんど起立しなかったという。高教組のこの戦術転換は了としたい。大塚書記長は形は屈しても心は屈しない旨新聞報道でのべていた。これに関連してであるが、日教組方面から、福岡県両教組の処分犠牲者救済金が莫大なので、知事選で勝利したら、処分解除等でそれが少くてすむようになるとの思惑から選挙資金も挙げたのに、その効果があらわれないとの不満があるといわれている。それとの関連で、さきの県教委の補充のとき、筑豊から野見山というのが出て、それが教育委員会でかなり反動的に立ちまわっているの、これを提案した知事がわるいとの意見が出ているようだ。もちろんこれについては反動的であることはわかっていたが副知事人事との取引があったし、その事は教組側にも了解ずみとの説明がおこなわれている。何しろ、野党が絶対多数の状況の中では政治的取引も時には必要だし、なお肝腎なのは、与党側の及び支援団体側の、多数野党及び教委に対する攻め、及び相手に攻撃の隙を与えないような戦術駆使ではないだろうか。第一、社会党県議は議会において教委に対し、実損回復をめぐる論戦を挑むべきだし、教組側も高教組がやったように、臨機に戦術転換をなすべきではないだろうか。教員の定数増は社党も教組も熱心に要求するが、教頭校長に授業をもたせたり、その行動記録の提示を求めるような県議会質問を展開すべきではないのか。自分らが選んだ知事が自分らの思うような処理をしてくれないと単にうらむだけではどうにもならない。野党多数下である事を十分に認識してかかることが必要であろうと思う。欲しがるだけの者には与えることはできない。それにふさわしく且つ有効な行動が伴わねばならぬ。知事を取ったからとて議会でかくも少数しか取れないでは、知事の効用にも限界がある。労働組合運動も、その時代に適応した運動、戦術を駆使しなければならない。単なる抵抗体では問題は解決するどころかかえって拡大する。教員組合は犠牲者救済資金がますます多くいるようになり、組合加入率は下降をつづけているとき。若い、新入の者の加入率が極度に小さく、平均年齢が上昇さえしている。運動に若さがなく硬直化していることは外からみても容易に想像がつく。知事を取ったといっても自分達の実力というよりは、他の偶然的要素が大きい。県議選で大敗したということ自体それを示している。だったら知事への注文の前に、この時こそ大胆に自己陣営内部の体質改善への、自己革新の試みを模索すべきではないか。知事への提言も結構だ。が、自分たちの力量の高揚もそれに増して大切であろう。

3月1日(金)

松風剣法とはいいたくない

民社の近藤氏が質問のはじめの方で、千葉周作の北辰一刀流松風剣法とやらをもち出して私を批判した。要はわかりにくく、何もしないということいいたいのだが、今日の議会が終ったあと朝日新聞の倉成氏が歩む私を廊下で沿い歩きしながらとい正したので(新北九



州空港の件について）、このついでに、近藤氏指摘の松風剣法論はいかんといい、仙厓の「気に入らぬ風もあろうに柳かな」の心境だと答えておいた。雅号を10年ほど前に決めるにあたり、同じ仙厓の「よしあしの中を流れて清水かな」から「葦水」としたのと同じ心境である。倉成氏に私の異論をいったのは、松が風によって鳴るというのでは受身で、柳に風という場合、柳が主体になっている。だから両者のうちどちらかといえば松ではなく柳なんだというのである。風によって松の鳴り具合がちがってくるなどという、いかにも剣法を用いているようにもきこえて術策を弄しているといわんばかりでもある。私にはそのような術策を弄する気は全くない。むしろ仙厓のように、軽妙さをもつ禅の境地といったほうがよいと思う。近藤氏のこの発言は一時議場を沸かせたが、あとで苦笑に終わった。

3月2日（土）

知事支援団体の欲求不満について

八丁君が「知事の座標軸」に関して云々ということで、どうしても話しておきたいというので、午後二時から一時間ほど問研の部屋で会談。衣笠君が立会った。きいてみると、総じて県民の会系列で知事との間の対話欲求不満が大きくなっており、それを発散させる必要があるという状況がらみの話である。彼の指摘は知事は行政議会对応の仕事に少秘を奪われ、「政治家としての側面」の動きが制約されているから、その制約を解けということでもあった。私は、それは知事の側に原因があるというよりは、支援諸団体の側で、そういう場を作ればよい、とくに、土曜の午後とか、日曜にはそういう時間にあてられるよう秘書室と連絡をよくとって強く要望すればできるし、又そちらの側で、組織、運動のあり方を再考すればよいと答えておいた。県の当初予算編成方針などは社会党県議、政審に伝わるようにしてあるのだから、竹村委員長が知らないというのは党の組織機構に問題があるのではないかと、何も知事が社党竹村委員長と特別の会をもたなくても社会党の方でそれがわかるように党運営を行うべきではないかと私は答えておいた。又社党県議の議会での質問は、教委が問題なら知事がこれを左右できない事情にあるのだから教委攻めをすべきではなからうか。

3月3日（日）

みんなが私に合いたがっているように思える

大坪君も電話してきて具島先生のところにわれわれ夫妻であいさつに行くようにとのことだったという。あれこれ周囲の者は気になるらしい。来る6日に向坂先生の追悼式をすることになるが、私の方から弔電は打たなくていいと大坪はいう。これ又気になるらしい。八丁君が気にしていることとは違うが、それぞれ似た心理なのである。ある意味では疎外感であろう。欲求不満といってもよい。このような状況は支持者で、身近だった人ほど深

刻にあらわれるのではないだろうか。そういう意味で、昨日八丁君に話したように、土曜、日曜などに、「政治の時間」をあけておいたらよいだろう。マージャンをして家族の息抜きを作っているように、みずからもそれで息抜きをしているように、欲求不満は適宜発散させる必要があるようだ。何でもないようだが、こういうことへの配慮が必要であることが近頃とくに感じられる。多くの時間が自由でなければならないわけだ。誰かそういうことに専らたずさわってほしい。姫路に行った時も、似たようなことを感じた。そういえば、あらゆる局面でそれがいえる。それに専ら関係して時間を配分してくれる人がいて、私が心配しなくてもよいならと思う。

3月4日（月）

知事の行動のもう一つの政治的側面

八丁君は知事の政治行動的側面の必要性を強調するが、それは野党の最も嫌う点でもあるわけで、今日話題に一寸出たのは、自民の一県議が「ふるさと対話」の前後に知事は後援団体の人達と会合したりしているだろうから、過去のその事業の資料を出せといっているらしい。どうでもいいじゃないかといいたいが、彼らにとっては、そうはいかないらしい。当たり前と開き直りたいところだ。ところが、知事の政治的行動といえば、八丁君やこの野党県議が指摘していない日常的行事の中に無数にあるということを知ってほしいものだ。その点もっと広い視野でものを考えるべきではないだろうか。子供かるた会に出たり、マラソン大会に出たり、いろんな所に行政的立場から出席する。高速道の開通式に出るのもそうなのだ。そうなると、行政的と政治的と区分して論ずることが、おかしくなってしまう。だから先日八丁君がいったことは、支援者にも、もっと顔出して直接語り合う場を作る必要があるということになるだろう。だから、それは、支援者の中でそういう場を企画し、知事への出席要求をすればよいのであって、むしろ支援者側の企画不足か遠慮のいずれかを正せばすむことなのである。野党がどういおうと、どう対応するかはこちらの勝手なのだから、遠慮する必要はない。現職の強味ということは、このことだろう。

3月5日（火）

貧しい内容の県議員

三瀧に緒方しのぶという4年生の女の子がいて久しぶりに手紙をくれたので昨夜早速返事を書き、今日投函した。この子の手紙には勉強は好きでないけれど自分のためだと思って頑張っているとのくぐりがあった。先日の代表質問で緑政連の松山県議が、今の先生は子供に自分のためという教え方をして、国のためと教えないから少年非行がふえるのだといういい方をしたことを思い出して、私も一瞬はっとした。松山県議より緒方しのぶちゃんの方がはるかに人間というものの理解が正しいものを含んでいるということだ。県議会でもよくもそういう意味の質問演説をしたものだとびっくりものである。そういう感覚で物を

見る人が多数党として県政界に幅をきかそうとしているのだからたまらない。この話を今晩来た佐々木、樺島の両秘書にしたら二人とも笑っていた。道を歩いていてゴミを拾う人と捨てる人の差があるが、しのぶちゃんは前者、松山県議は後者であると思う。保守政界の中の偽善者がかくも多いと誰しも思わないだろうか。今の県議会の質問を聞いていてもそんな気がする。みんな目あり鼻あり口ありの同じ人間の顔をしていて、中味が反対なんだから驚き。

3月6日（水）

程度の低い一般質問に今回は今日で終り

今日、ようやく一般質問が終った。あとで林県議が来室しての話だが、今議会は特別に荒れる材料はないのではないだろうかと事後感想。それでもどんなタネがかくされているかはわからない。しかし嫌な県議も少ない。自己顕示欲が強いというのだろうか、一寸した言葉尻をとらえたり、しゃにむに知事否定の発言に声を高める。今日は自民党ばかりだった。10人のうち高岡、橋詰の二人がはね役、「総立ち」というばかりで役に立たん、何もしてない、という。高岡は私が答弁している最中に否定的なヤジを連発する無礼ぶり。私は少々高い声でヤジを打消しつつ、大牟田（高岡のまち）の婦人自動二輪クラブのメンバーたちが自発的に交通事故をなくする運動をして事故減少に貢献しているのに頭の下がる思いをしているということをいってやった。役に立たないどころかということなのだ。高岡らはそういう運動は思いもよらないし、自分がしようとは思わないのであろう。自民党はその種の人間の集りである。だから「総立ち」はわからんとか役に立たんという。橋詰は対話集会は、無駄づかいで知事の約束に反するから止めて、そのカネは自分たちの活動費にまわせとうそぶいた。

3月7日（木）

財界の一面を忘れないこと

嶋崎秘書の館氏が来県、知事に一寸伝えておきたいということで面会した。嶋崎側の耳に入ったことで福岡に関したことということだ。福岡の自民党は奥田県政下では県庁跡地は扱わせないときめているという。それを裏付けるように、県議会では跡地について動きがないし、質問にも出てこない。江口利雄が特別委員会の委員長をしている。何かうまい汁を吸いたいと虎視眈々と構えているように見える。奥田にやらせると人気上がるだろうからとの政治判断もあるらしい。他方、東京方面では鹿島建設が跡地をめぐる企画には是非参画したいと意思表示しているようであるとも館はいう。この種問題はふつつなら街並みとか市民憩いとか緑地とかかなり純粋に意見を出すものだが、さすが自民党や財界はそれを政治と利益に結びつけてはなさない。その執拗さ、瓦林潔氏の名も話の中に出たと思うが、福岡の財界が私に何か距離をおくことに執着しているのもこの跡地問題に彼らなり

の思惑があるからであろう。財界とはそういうものと思ってかからなければいけない。甘くはない。それにしても恐れ入った。

3月8日（金）

地方同盟の役員と初対応

地方同盟の幹部驚頭、土井ら数人が来訪し30分ほど歓談した。彼らは県への要求書を知事宛にもって来た。私と同盟とはこれが初の対面である。ここに至るにも、伊藤労働部長は大変気をつけて打ち合わせも彼我の間で慎重にやったらしい。何しろ同盟は亀井支持だったから、距離を向うから置いてくるのが自然な一面がある。しかし、県民の一部として知事に対すべきだというもう一つの側面もある。幹部も部長もその側面が常に気になっていた。そこで要望書ということならということになった。そういうことでという努力があったわけ。部長はできれば懇親会までいきたいがいきなりということもできないので、要望書提出ということで、一まず会っておいたらとの話ができたわけ。要望書なるものをみると、政府要望みたいな項目ばかりで、彼らに地方自治の観点がほとんどないことがよくわかる。でも、今日は垣根が一つとれただろう。ただ、幹部は一般組合員への顔向けができるかどうか心配しているらしい。しかし、私は一般組合員の多くは幹部よりこの点ひらけているはずと思う。敵だった知事に会うことをそう気にしないはず。

3月9日（土）

初春を思う

梅花は満開というよりは散りはじめというこの頃、裏庭の白、紅いずれも枝の切りすぎとか、以前のようなはなやかな枝でないのが淋しい。大濠堀端の柳は日に日に黄緑の色をまし、中には小さな葉を出す程に芽がふくらんできた。春がもう始まったとの感が深いこの頃であるが、知事というような仕事をしていると一向になまの、じかの、こういう自然に接することが少い。むしろこの初春は県議会での当初予算審議という味のない政治の季節である。国会もまた同じ。今日予算案が衆院本会議を通過したというが、かなり荒れ模様の議会だった。巷では入学試験、卒業式、就職など各人各様の悲喜劇がある。できたらこういうのはこのよき季節でない方がと思う。臨教審で9月入学を俎上にのぼせているようだが、これが実現すると一寸かわった3月になろう。ついでに新年度も9月からということになると気分がかわるだろう。この春という時期をもっと違ったことに使えるならと思うのである。県議会は篠田発言で一寸したさわぎになっている。攻めばかり考えている自民党が又一つ躓きをしたわけだ。じっくり攻めること知らないのだ。

3月10日（日）

「地方の時代」の新潮流

広報室の安達氏が神奈川県自治総合研究センター発行の季刊自治体学研究（23号）の「自治体の政策研究——政策自立への新戦略——」を読むようにすすめていたので、これを手にしてみた。自治体学という言葉に少々ひっかかりを思うが内容は自治体政策研究交流会議（1984年10月18日神奈川県民ホール大会議室で神奈川県及び自治体政策研究交流会議実行委員会主催）のレポートである。「地方の時代」を提唱その他県政推進上多くの新機軸をあみ出している長洲知事のリーダーシップによるものといえるが、これは時代の新しい潮流を賢察したものともいえる。この雑誌では「政策」の研究提言実践ということに力点がおかれ、自治体の国に対する自主性が強調されている。それは自治体の自立自助であり首長のリーダーシップである。だが、私が近頃強調したいのは、国への意識は別として、自治体の住民自身の、自治体からの自立自助である。神奈川のそれは国からの自治体の自立自助に力点が傾く。それはそれとして評価するが、もう一步ふみ込んで住民の自立自助をいう必要があるように思える。そのあたり、地域の政治経済などの特性からくる違いがあるようにも思える。国から独立できるところ、国からの自立をいえるところの違いもあるう。

3月11日（月）

九州工大情報工学系新学部について

九州工業大学の情報工学系新学部の飯塚市への誘致問題がなかなか踏ん切りがつかないので、地元地盤整備着工で困惑している飯塚市長と共に期成会々長の私が市長、県企画開発部長同席で井上九工大学長に促進方要請のため戸畑に行った。62年4月オープンの予定なので61年中に建設工事、60年度中に市による地盤整備の工事が必要という。文部省は、新学部設置にはスクラップアンドビルド方式を取入れるため、現九工大の学内改革を要求しており、これを九工大の内部ですんなり受け容れえぬ学内事情がある。これまでの学科を大学科系にまとめ、若干のスクラップが要件とされているが、教授会で個別利害があり、学内のまとまりがえられず、もたついているというのが実情らしい。学長には61年度政府予算決定のためには今年の6月頃文部省の概算要求の骨格がまとまる頃までに間に合わなければならないことを十分計算に入れてほしいと強く申入れておいた。九工大は、もてこの計画が動きはじめた時（8年前）スクラップアンドビルドではなかったのに、3年ほど前からそういう方針が表面化したため、問題がこじれはじめたという。県議会では三木清が、すべて知事が悪いといわんばかりの質問をした。私は胸の中で、三木がやれという気持ちだ。

3月12日（火）

「私」を切り込む秘書室の態度が腹立たしい

年度末補正予算の審議が八日からずれ込んでいるのを、今日は議了するのかと思ったが明日になったという。「税金泥棒」篠田発言を何とかやむやにしようとの自民党及び篠田の

画策が議会の空転を呼んでいるのだが、この辺にも「税金泥棒」論があてはまるのではないだろうか。ひとのあらさがしばかりやっている自民緑政の2党だが、今日の秘書室では24日耶馬溪ダム竣工式出席のため前日から豊前に行って泊る予定のところ、土井仙吉氏の退官及出版記念案内状が来て、すり合わせの結果、豊前の後藤、松山両県議に義理立てのため早目に着いてこの県議二人と会食をとということになり土井氏のそれには出席できないことになるという。私は彼等県議にどう義理立てしても石にものいうようなものだと思うといって不満を表明した。万事がこの通りで、篠田にしろ三木にしろ、高山、松山これらにはいい加減な義理立てで終わっておけばよいものを、私的分野を犠牲にしてでもこういう馬鹿げた連中に付合ってくれというのが秘書の考えだから腹立たしい。私的なことならいくらでも犠牲にしようと考えるのはむしろ政治的配慮というよりは官僚的発想だと思う。私があってその上に公があるはずなのに私に切り込むのだ。

3月13日（水）

個人の公共性ということについて

神奈川の「自治体学研究」をペラペラ見ていると住民運動をテコにして自治体を見るという角度からの論議が興味深くみられる。住民運動が時代によりかわってくると、自治体論もかわってくるようだ。樺島君が強調したことだが、公共性論への反省がのっている。国、自治体の公共性はそれとして、企業の公共性論の時代から自分自身、個人の公共性へと論点があつてきているというのである。その最もわかりやすい例が公害問題である。企業立地に対する公共性の強調の必要はおよそコンセンサスができたようだが、個人のそれについては日本人はまだそうした試練をくぐり抜けてはいない。昔は公益といういい方もあった。公園の花をきれいにする、木の枝を折らないといったこと。今は暴走族、空カンなど、企業と無関係とはいえないが、個人的公害の問題が多い。カラオケ、団地でのピアノ等々も、これらについて互いに協力しあわないと共存がむづかしい時代になっている。交通ルールを守ろうなどといわないと、交通事故は大変なのである。関係家族のことを考えるとすごい公害ともいえる。地方自治の問題がこれに深くかかわってくる。

3月14日（木）

若者は逞しく育っているのではないか

中国から青年の代表100人がくる。また日系移民の子弟を県下大学に受入れていた人達が1年間の留学を終えて南米諸国に帰っていく。そうした人達が知事室に来て語って帰る。又、春の選抜高校野球出場選手団が来室する。今の青年には問題者も少ないが、こうして来訪する人達をみていると、若さと希望にあふれ逞しさを感じず。悪いのもいる代わりに立派なのも多いのが事実。だから、もちろんだが何も心配ばかりしている必要はない。子供達は大多数すくすく伸びているわけだ。悪いのが多いようにみえるのは、報道過剰、報道

敏感のせいもある。なるほど統計上問題件数は上昇している。家族がバラバラになり、家庭の教育機能が弱体化している。母親が働きに出ることから、そして子供部屋ができて子供が目の届かぬ所にとじこもるからというような現代社会の諸特徴が、そうした家庭の教育機能を弱体化させる原因になっていよう。子供は昔の家庭と違い家事手伝いをしない。生活水準が上昇し安易に流れがちである。だから非行に走りやすいといわれる。しかし、他方で子供ならするであろう初歩的非行を、周辺が非行非行といいすぎるのではないだろうか。若者は遅く育っていると思う。

3月15日（金）

自民戦後タカ派

昨日から今朝 2 時に及んだ知事保留質問を通じて感じたことは、自民党の連中が自分の考えを知事に押しつけようとする点、労働関係や使用者の福利厚生と互助会<sup>77</sup>依託関係について全く前民主主義的発想しかないのに、これを知事におしつけようとする点である。かなりな年配なら戦後の民主化の波を拒否した者、若い者なら民主主義に背を向けてきた者がこの党に所属している。彼らは公務員関係の中には労使はないという。福利厚生（元気回復）は公務員だけでなく民間一般にも必要だから、「先憂後楽」ということからすれば、公務員の福利厚生は返上すべきではないか、といった類である。自民党や緑教連はたいていこうした考え方をもっているが、今朝までかかった知事保留質問でこの点突出したのが篠田栄太郎と高岡新。どちらも戦後保守タカ派といえるだろう。この連中のいいなりになる世の中になると、戦争への歯止めをなくした時代ということになる。ただ、案外この連中は臆病に違いない。小利口でずるがしこいだろうし、人生に苦をなめたことなく育ったのではないだろうか。利己主義者でひとのことは考えない。

3月16日（土）

奥田県政推進対策会議初の幹部会

午後 4 時山ノ上ホテルに着いた頃にはそれまでの快晴がうそのように小雨になり、夜はほとんど降った。山ノ上では県政推進対策会議の幹部が集まり、折返し点に立つ奥田県政への注文が地公労からどんどん出された。両教組のスト処分を何とかしないと日教組では困っているし、次の選挙での組合員の士気に大きな影響は必至というのが一番強い声であった。奥田県政になってからかえってひどくなったというのである。この裏には自民党が教育委員会を拠点に、奥田県政切崩しを策しているという厳たる事実があるのに、教育委員更迭の人事提<sup>78</sup>にしても知事は自民のいいなりになってきたとの批判がある。関連して、県の人事一般において、亀井時代に出世してきた者がいまだに重要ポストにぬくぬくとおさまっているとの事実があると指摘がつづく。16年間育てられ、トップダウン方式で牛耳られてきた県職員体制は、かんたんにかえられない。自民党と結託している職員が随所にい

て情報資料がどんどん抜けていく。だから人事は大事だとの主張である。この4月には重要人事についてかなり改善されるだろうというのが林県議の答弁。私からは地公労各組合も県民の感情で納得できるものに脱皮してほしいと注文をつけておいた。

3月17日（日）

太宰府天満宮に西高辻宮司を訪ねる

もう遅いだらうと思ったのに、太宰府の梅の花はまだ蕾もあるほどの木もあって見るに値した。参拝客も結構多かったのが昨日の天満宮であった。日本には300種以上の梅があり、その半分以上は太宰府にあるとのこと。あちこちからもってきて植えていく人があって、そのように種類がふえていくという。天満宮の本殿の作りは他に見られぬ特徴があると宮司の秘書が説明してくれた。よく耳に残ってないが、中国の廟の趣きを取り入れられているのだそうだ。説明をきくまではそういうこまかいことは全く気づかない。当たり前といえばそれまでだが、そういうことに気づく程に教養がなくてはならないだろう。ぼんやり見てすぎるとというのが凡人の常である。昨日は西高辻宮司に特に面接を申入れて表敬訪問ということにしたので、それを受けてくれたわけ。信良氏は若い新進の宮司で気持よさそうな人だ。前代の宮司はもう年なのか一寸衰弱気味だったので、息子に譲って休養できているだろう。代がわりしてはじめての表敬という気持から申込んで訪ねたのである。梅見の客にまじって茶店で中食をとった。多くの人が私に注目し、一しょにカメラにおさまってくれというケースが多かった。気易くそれに応じて一時を楽しんだのであった。

3月18日（月）

4月人事異動原案

朝から午後にかけて4月の課長以上の人事異動の話が原案をめぐってとりざたされている。過去の人事で応援団側にかなり不満があったので、こんどはそうならないように工夫をした跡がみえる。今回の場合、課長が浅井氏になっているので、それが梃として作用している。人事課長をかえただけのことはある。それに、副知事、出納長も補強されているので昨年のように、中央から天下りの者による人事の弊を脱することになる。「地ごろ」は「地元のところ」をつかんで事をすすめることができるからである。亀井16年間に培った人間配置が昨年までほぼ貫徹していたのである。報復人事をしないと私がはじめから宣言していたので、それが逆手にとられたといえなくもないのが昨年の人事で、亀井色が奥田をとりまいてるとさえ批判されたのであった。だが私は急いでも事は成らぬと思っている。反亀井が必ずしもよいとは限らないし、組合色の強い人物がよいとはいえない。役人というものは元来どこでも誰れでも器として使う人によって便利に役立つというものである。中には反奥田で旗上げをたくらむ者、自民党に不断に内通している者もなくはない。そんなのは今回の人事でかなりはっきり処理されるであろう。それは当然といわねばならぬ。



3月19日（火）

議会審議がダダッ子のようによく止まる

条例、予算両特別委は審議が始まったり休憩に入ったりで自民党がごねられるだけごねている模様。どちらでもいいようなことを面子にこだわっているらしい。スムーズな審議になると抵抗しなかったようにみえるから強いて問題を投げかけてストップをかけ時間をつぶす作戦が先行しているのが否めない。政権欲のかたまりの自民党があわれにもみえる。44人という半数近い議員をかかえ篠田氏が全くまとめる能力を欠くためバラバラ、まとまった意見をきくことができない。なすがまま、なるがまま、審議不能といって抵抗することだけが罷り通っている。それと、自民のやり口は政策論議というよりは地公労の三組合をいかにいじめるか、知事にかかわらせて支持関係をいかに汚すかに精力を集中している。審議といってもそういうこと以外に取りあげる材料、才覚がないといわれている。教育会館用地賃貸料にしても戦前から今日まで60年近い歳月が流れている問題を、返還要求せよとか、賃貸料が安すぎるとか、数にもものをいわせてダダッ子のような言い分をくりかえしている。訴訟でもしたら、私がいうと、佐々木君は知事からそれはいえないと大真面目に戒める。数にもものをいわせたダダッ子ぶりをヤユしているのだ。

3月20日（水）

著書が続々贈られてくるけれど

いろんな人から、著書の寄贈がある。今日は北九州のケースワーカー経験の「わがケースワーク、わが実存」今村徹著が送付されてきた。——市福祉現業員の体験的哲学的自問——と副題がつけてある。書きためた資料をもとに退職記念に自費出版したとある。又太宰府市にある県看護学校からは県下看護界の先覚者・眞島智茂さんの伝記「緋の肖像」を学校次長さんが届けて来てくれた。すぐ最近では西日本新聞労組委員長の深井健二さんが「自己革新の旅」をもって来た。私に序文を所望したもので近々出版記念会を開くという。その他最近では上原司「シベリア雲の流れるままに」。これは二丈町の観光浄化空カンひろいの時の写真をそえた活動家で戦争体験記。日野原重明「病む心とからだ」、それに田中六助「保守本流の直言」である。田中六氏のは前自民党幹事長の遺言書となったといわれるもの。どの本も読むに値するとは思いつつ、ペラペラながめて終ってしまう。毎日が自分自身を整理するのに追われている身だから他人が文字を通じて訴えることに耳を傾けるひまがないのが残念である。新聞すら碌に読まないのだから。土井仙吉氏がこんど定年退官。漁法の変遷に関する論文集出版をかねた記念祝賀会が24日にある。

3月21日（木）

時の経過に感慨一入

（公務員試験）受験ジャーナルが4月号で知事訪問特集に私の記事をのせ、中味は大変好

意的に描写している。同時に額入り写真送って来てくれた。新京経理学校8期生の文集「白雲悠々」(2月18日刊)ということで最近の大きな本の一つだ。700ページをこす大物、これには私の綴った分ものっている。同室で寝食を共にした加古豊彦が2月3日逝去したとの折込みが入っていてガクゼン。緑園会の世話役高田君たちが長い月日かけて作成した文集でこれは記念だし読みごたえがある。記録的価値が私にとって高いものである。静かに読書する時間が欲しい。今日は肩の荷おろしのつもりで休日を利用して光円寺にまいり、みゆきを空港に送ったあと、具島先生を訪ねた。県政をめぐる諸問題を報告した。もう80歳だから長崎の方はこの3月末で退任するという。田中定先生とく比べると同年とは思えぬ元気さ、県政についてはきちんとした関心の示しようである。県民の会がもっとちゃんとしてくれればよいのといわんばかりであった。健康にくれぐれも注意して下さいとあって別れた。徳本君宅に行った。安東君宅では娘さんが結婚したという。それぞれ老いた夫妻だけの世帯になってしまっている。そういうことが当り前の時代でこの先が案じられる。

3月22日(金)

心と心の照らし合い

教養部の猪城博之氏から「偲び草」という小さな文集を送ってきた。彼が僅か2ヵ月ヨーロッパ留学した折、奥さんからの手紙を集めたものである。昨年3月20日死去、22日密葬の由付記してある。1周忌事業とでもいおうか。昭和51年から8年間のわずらい、うっ血性心筋症から甲状腺腫瘍へと発展したらしい。同じ教養部では野口喜久雄氏が昨日膵臓ガンで亡くなったとき、今日弔電など処理したところであった。猪城氏はヨーロッパの旅日記を私によく届けてくれた。細かい心のくぼり、観察の心得のある人だ。病気の奥さんとは枕許の対話が多かったのではないか。この文集を見ながら感じたのだが、心と心とはよくいったものだと思うのである。こちらの心が光るにつれて向うの心も輝く。そうした関係は案外日常的に忘れられ勝ちで一方的に勝手に相手をこうだと決めてかかってしまう場合が多い。こちらの心が冷いなら向うの心も光らないし、温みをもたない。光らせ温みをもたせるには、こちらから光をあて温めればよい。そういう気がする。猪城夫妻にそれがあったことが文集が語っている。

3月23日(土)

地方まわりの時は地区労に顔を出そう

明日の耶馬溪ダムの竣工式が朝出たのでは間に合わないというので、今日は豊前市に泊ることになった。そうすると、この地方から出ている後藤、松山の両県議には敬意を表して会食でもということになりそのスケジュールを組んだのだが、私の提案で、地区労にも敬意を表すべきだということが追加された。そうしてよかったです。知事選の時はこ

この地区労はよくやってくれた。それ以来一度も顔を出していない。築上館での地区労幹部 30 数人との話し合いは 1 時間しかなかったが、その中で知事の顔を見たい、話したい、さらにはさわってみたいという人が多いのだという発言があった。テレビでは見ているが、それでは満足できないのだという。だったら、私が地区労の人達との話の場の設定の提案は正当だったわけだ。今後は土曜の午後とか日曜とか誰はばかることのない時に、こうした要求には応じていかなければならないと思う。選挙というような試練をへてくると、選挙民にはそのような欲求が湧くのが自然であることがよくわかる。地区労の永吉氏にはほんとうにこまかい点まで世話になったことが思い出される。高教組の、名は忘れたがその人にも大変世話になったわけだ。

3月24日（日）

耶馬溪ダムの竣工式に思う

耶馬溪ダムの竣工式に出た。山国側の一つの支流をせき止め、2100 万 m<sup>3</sup>の水が貯えられる。発電もできる。洪水調節、上水、工業用水にも使える。水没した民家 70 戸余。その補償や大分福岡両県に水をどう分配するかも問題で、それを解決するのに大きな苦労があったときく。水は昔から争いの的になった。全国いたる所で、否全世界で、これは普遍的なことのようだ。人は水を使って生きてきたからである。水により人は結ばれ、逆に争ったのである。この耶馬溪ダムができるについても例外ではなかったらしい。水没した人達がどう補償されたのか定かではないが、近い地域に移ったのであろう。高い丘の上に何戸か見える大きな新しい家がある一つだということだった。故郷を捨て、新しい地に移って幸せがつかめるならそれでいいが、近頃は地権者といい、漁業権者といい、何かの建設事業には補償をめぐる紛争紛糾が多いようだ。日本では土地が狭いせいか、そうした権利への執着が殊のほか強いようだし、それを強固に守ろうとする制度が定着しているようだ。地権と水利権と、そして川の水の変化には漁業権がすべての建設にがんじがらめにまきついている。

3月25日（月）

野口喜久雄につづいて出村洋一が亡くなった

教養部の出村洋一氏が昨朝心臓の何かの故障で急死したとのことで、野口氏同様弔電と花輪で対応した。有機化学の専門でマージャン仲間の一人だった。几帳面な人で、教養部 30 年史を編集する折にきちんと仕事する人ということもわかった。死の前日テニスをしたとか。疲れが出たのではないかとのことだが、まさかとさえ思う。ただ、ある意味ではこのような急死を私は自分のことと仮定して歓迎する。長わずらいはごめん蒙りたいものだ。56 歳というから早すぎる。70 歳すぎると惜しくはないのではないか。その年になってみると早すぎるというのかも知れないが、一般的には惜しくなからう。出村氏は教養部一回生

で私はいわば恩師に当る。深山喜一郎氏も同じ期だが、昨年秋に倒れた。現職教授の死が多い教養部だ。深山氏は今は療養効あって歩ける程度になったときいている。が、脳の故障で言語障害がかなりひどいといわれている。廃人とはいえないようだが、回復がおくると、そして、完全でないなら廃人に等しかろう。高齢化が進むとそうした介護を要する人がふえるが、そうまでして長寿を保ちたくないというのが正直な感じだ。出村君のように、昨日テニスをしたのにとというような死に方を私なら歓迎する。この真面目男の冥福を祈る。

3月26日（火）

学生運動に理解できない自民党（労使関係を民法と刑法からしか理解しようとしな、労働運動がわからない）

自民党が入れ代わり立ち代わり、県議会の特別委員会での組合攻撃がつづいている。そして次々に知事保留として順おくりになっている。教組、教育会館、両互助会、そして梅香会と全くほじくり出しているとしかいいようがない質問攻め。朝日新聞のコラム欄にはかなり痛烈に野党批判がのっていた。知事いじめから転換して知事とその支持基盤の離間へと指摘。1日の議会延長コストは120万円というが、職員の残業費を加えると巨額に達するだろう。組合攻撃の中で県費の無駄づかいと指摘する自民だが会期延長でどんどん無駄づかいを敢てしている。議会の質問では執行部の対応の悪さから議会延長になってしまうと必ず発言してから質問に入る者がある。いずれにせよ汚い汚い自民党のやり口である。会期延長こそ意味があると彼らは考えている。全く貧困な思想内容しかない自民党の連中の攻撃だが、それをいうわけにはいかない。労働組合運動と互助会運動が癒着していると彼らはいうが、結合している方がむしろ自然な姿だということを彼らは理解できない。長谷川喜博というヒステリックな投書魔がこの自民党と手を組んで西日本新聞紙上で大活躍している。

3月27日（水）

安楽死の必要

九大泌尿科にもう4ヵ月も入院、ガン治療中の藤江君のお父さんが主治医に、安楽死を願う文をしたためたという。個室に入っていて一度自殺をはかったので相部屋に移されたとの話もきいたことがある。毎日の闘病生活が耐えられない程の苦痛の連続らしいことはきいている。本人も家族もたまらぬだろう。主治医は不治の状況であることを家族にずっと前から知らせている。だから、生きのびる手段を医術的に尽くして今日まできたのだと思う。丸山ワクチンの話もここ数日出ていて、その利用は本人家族の希望であればOKと主治医はいつているとのことである。医の任務、医の倫理がどう論じられ、こういう場合医師はどうすべきかということは私にはいえぬ。他方には経費問題もあろう。法律論もある

かも知れない。しかし、医術の限りを尽くして延命をはかったとしても、本人と家族の苦痛、とくに、本人の地獄のようなさいなみがあるとすれば、その辺を考えてくだけでもよいだろうと思う。意図的に処理するわけにもいくまいが、単なる延命術を施しているとすれば、そこはもう一寸自然にまかせられないものなのか。治すのではなくて延命ということに少々の疑問を懐くものである。アメリカあたりでは安楽死が本人家族の希望で合法的にできるときいているのだが。

3月28日（木）

#### 亀井時代からの負の遺産（1）

亀井知事は偉大だったと自民党県議は知事質問にあたって私の前でこれみよがしに演説するのが常だった。だが、今会期にはそれがない。むしろその負の遺産の暴露で私を迫る戦法に出ているから亀井礼讃の弁にならないのである。県営住宅家賃の滞納累積、筑豊地域生活保護不正受給、この二件については既に手がけていた。が、土木協力会問題が土木事務所長（塔野氏）の汚職問題とのかかわりで明るみに出た。これも亀井時代からの宿弊であったことは否めない。今議会で、昨年来問題になっていた教職員互助会の役員構成の問題はどうしても解決せねばならぬ宿題である。8億2千万円の補助金が自民党側の互助会役員構成への介入によってしかも議会の決議までして執行保留になっている事柄である。これも亀井16年間手がつけられてなかった問題を今になって自民党がもち出している。これは補助金というよりは県側の福利厚生事業として法によって義務づけられた業務の依頼費である。その依頼先の団体の役員構成が気に入らないからということで決議にまでのせて、役員構成に自民党が介入してきたわけ。教職員互助会は高教組、福教組の役員、処分退職者が役職についているのだが、自民の役員介入には断乎応じない構え。

3月29日（金）

#### 亀井時代からの負の遺産（2）

今議会で急浮上した亀井時代からの負の遺産は本庁舎地階の理髪事業部職員である。9人の従事者がいて、それが全部職員の身分という。私も初耳だが、指摘されてみると事実という。その人件費は正確につかんでないが平均年300万円として2700万円になる。あえて解釈すれば、理髪を福利厚生事業としてやっているといえれば違法とはいえないが、警察棟の理髪部は外部業者がはいっている。教職員には理髪という福利厚生事業は行ってはいない。同じ県の職員への福利厚生事業にこのような不均衡があっているのかという反論はかんたんに成立する。そのほか県の出先機関になると、あれこれ全く不均衡な状況らしい。過去の経緯あり、庁舎新築時の経緯あり、組合活動との関連ありなどで、まちまちの形での庁舎利用がおこなわれているのが実態のようだ。しかし不合理だからといって、今急に直せとせまられても、相手あり経緯ありでそうかんたんにはいかない。是正に取り組むという

答弁でその場を凌ぐしかないが、自民党は鬼の首をとったかのごとく追及し、奥田が悪いといわんばかりに攻め立ててくる。しかし、彼等も亀井時代からの古傷ということで内心はおだやかなのである。

3月30日（土）

自民の自己保存本能

収用委員候補に推した近藤昭三はアカだといって自民の高山がケチをつけた。教育委員に池野京子と秋枝薫子の二人を推したら最初は女二人はいかんといい、池野をはずして西部ガスの今村副社長を推したらこんどは秋枝はアカだといって反対した。高山が池野、今村ならいいといったとか。池野は高山に推されて委員を一期した人らしい。社会党らは、そういうことなら今期教育委員は提案しないということで臨むしかない、そうそう向うのいうままにできないということで、見送りと決った。収用委の方は説得でおさまり、近藤氏は決定した。それにしても、気に入らぬ人物にはアカというレッテルを貼ることによって抹消しようとする習わしが自民にある。これは日本の保守層に共通している傾向でもある。亀井陣営で選挙中奥田夫人はソ連人だといったことが一時あったが、これも同じ手法による。カネでこの世を支配することに危機がおとずれた時、その脱出にアカとかソ連というのを援用してきたのである。教育委員会5人中女二人はいかんという理由は、女の進出に脅威を感じる自民の体質をあらわしている。女は平等を重んじ清潔を好む傾向が強い。自民にとってそれは自己の存立基盤をおびやかすことになるからだ。自己陣営の防衛本能からきている。

3月31日（日）

孤独と腹心の部下

自分はひとりだ。孤独の存在だ。自分以外に誰もいない。そんな気持になることが時にある。“大いなる人間模様”と名をつけた本を出した。それほど大勢の人に、否無数の人に支えられて今日まで来たことを否定すべくもないし、両親や兄弟と何の偶然か生をうけてきた同胞がいるのに、それが何だったのか、大したことではないと思うことがある。自分が自分を決めずして誰が決めるのかと思うと、自分がひとりでしかないと思うのである。体調がよくない。それは自分のことであって自分以外に誰の責任でもないし、対人関係で失敗を反省する、こんな時も自分のことである以外にない。このような孤独は絶対的である。テレビで死の前にある老婆があの世界に行った夫に早く会いたいと叫んでいるシーンが出た。もちろん作為があろうがそのような心境になるのも当然だろう。そう叫ぶかどうかにどことなく作為が感じられるが、気持はおこるだろう。孤独を打破する基本は配偶者、親子、兄弟を求める点にあるだろう。腹心というのがそこからでてくる。腹心の部下がなければ大事な時に仕損じる。県知事などという仕事は腹心の部下を見つけるという要件が

求められる。その自由さえ奪う敵がある。

## MEMORANDUM

“2月議会を顧みて、

今回の「2月県議会」もまた再三の会期延長で混乱をつづけながら、当初予算は無修正で通過した。行革は結論を秋に持ち越し、教員互助会補助金（実質は福利厚生事業の県からの依託費）が59年度執行なく60年度予算計上せずという奇形が生じ解決を将来に持ち越し、県職互助会についても理容師の職身分問題も指摘をうけたままになり、第三に教育委員会委員の二つのポスト任期切れのまま新任議決を見送って5人のところ当面は3人体制ですませるほかないという三つの大きな問題を残したままに期限切れ問題先送りとなったという傷痕は残った、が昨年とくらべ、まずは順調に経過したということであろう。自民党は明らかに次期選挙を見すえて、私の失点をできるだけ多くしようと努力してはきたが、ほとんど全部が亀井時代にもあったことの踏襲されてきたことであり、今更問題化するにも筋が通りにくいものを無理に問題化しようとしたように思えてならない。従って資料提供など要求難題をもちかけて会期を延長しただけで何ら前進した成果をあげえなかったようだ。これも遠藤氏の作戦の能力不足と自民県議の個人プレーの浅薄さを露呈したものといえよう。私自身、自民の攻撃の理不尽さを知っているから全く気にならなかった。むしろ、教職員互助会補助金問題のように、組合憎しの感情の余り突込みすぎて失敗に終るということがあって、彼等がいきり立てば立つほど失点になるということが誰の目にも明白になる。

### 【「4月のスケジュール」欄への記載】

付きの秘書は佐々木正躬氏より大石昌弘氏へ交替

4月1日（月）

新任者への知事訓話

今日は新任幹部への辞令交付。311人に1人1人辞令を交付して40分同じ姿勢で立ちつづけ、歩きにくいほどに足がこわばった。こんな経験ははじめてである。ひる少し前こんどは看護研修所で130人ばかりの新採用者への知事訓話を行った。どちらも近頃のない長時間、後者は50分をかけた話になった。課長たちへの話はどことなく遠慮があるが、新任者への話は学生に話すような気分になって、ずいぶんと違う。彼等には県政の重点など話してもどうでもよいだろうが、人生訓のような、社会人となる基本、県庁マンたる心構えのようなことをさとすことができる。どちらにも必要なのは、知事の顔を直接知ってもらうこと。これは妙にもきこえるが、案外知らない人、見たこともなかった人が多いものだ。ジカに見たい、テレビで見たのとは違うという人が多いものだ。それから、課長たちにし

る、新任者にしろ、知事の腹の中をさぐろうとしているようだ。信賞必罰といえるような言葉があれば、他の美辞麗句よりもやる気がおこるらしい。今日はそういうことを考えながら久しぶりに長時間の立んぼうの役を敢て耐え抜いた。彼も人、我も人、そして人と人の組織、それを動かしていくのに、いかに他の力と自分の力を合わせるかだ。

4月2日(火)

行革が迫られているが、態度のポイントは何か

行革について明確な方針を出すしかないという気持で、庁議後の行革推進本部会議でも、午後の行革担当職員会議でも、私の方針を明言した。行革の中味が何であれ、それが時代の流れとして不可避であることはいうまでもないし、私の場合、最初の議会で「福岡県独自の行革をやる」という言明をしている。その手順はよかったと思うが、自民党はそれを疑い、自分達の考える行革を押しつけようとする。他方、職員組合側からは、行革を警戒し、反対とすら表明している。だから、その両方に対し、いずれでもなく、われわれはこれで行くという「独自」のものを旗幟鮮明にする必要が生じている。この両方は行革とは人員削減に他ならないと短絡する。それなら昔行政整理といったのを別の言葉におきかえたものにすぎない。行革という別の言葉を使う必要はないはずだ。もう一つ問題なのは、自民党議員らが主張する点すなわち OA 機器の導入によるメリットを全部人員削減にあてようとする点である。機械化の利益は労働者にも消費者にも経営者にも分配するという立場を取るべきなのに、自民党は人員削減に全部まわそうとする発言で私に迫ってくる。欲深い自民党だから、これにどう切り返して正論を守るかがポイントだ。

4月3日(水)

ブラジル福岡県人会の人達の郷愁にこたえるために

桜がもう2分咲きぐらい。どんどん咲いていく。一斉に、何の意思もなく自然は整然として動いていく。明日ブラジルから県人会々長らが来訪するというので、ひまにまかせて色紙を書いた。年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからずとの中国の古詩の一部がその内容。これを見て何十年ぶりかに故郷に帰って来る在伯県人の人達はどう思うだろう。新たに設置された国際交流課、その上に立つ企画開発部新次長一宮氏の話では、この秋には知事に是非ブラジルに行ってもらいたいという。県議らが向うへ行行って約束したこともあるが、移民75周年を迎えるブラジルでは、県人会の人々の故愁がかなりつのっているらしく、知事の来伯を熱望していることが事実らしく、明日の県人会々長もその事について強く要請するようだ。他県の知事は行った例が多いらしい。南米に行くには片道29時間かかるという。行くなら13日も必要だという。そんなに長い間県を留守にするわけにはいかないとのことで躊躇していたが、明日は日程は切りつめブラジルだけとし、ハワイと組み合わせた日程とすることで決意せざるをえないのではないかとの気持ちに傾きはじめた。八月下旬



から9月上旬を考えている。

4月4日（木）

ブラジル移住75周年記念式典への知事招請について

昨日の欄に書いたブラジル行きについては、近藤副知事から今後の政治課題との関連で今回は見送った方がよいとの意見が強く出て、それなら取り止めて、どちらかの副知事で対応しようと腹固めして今日の在伯県人会々長中村氏らの移住75周年式知事来伯要請団に対応することになった。自民党が6、9両議会で何をしでかすかわからないし、一期目に行くのはまずいと近藤氏はいふ。それに行革で必ずかなり大きい問題がでてくるに相違ないと判断しているようだ。それに県人会会館その他で荷物を負わされるに違いない状況もあるらしい。今日703会議室で墓参団、県費留学生、県人会々長、サンパウロ市議その他30余人が集っての知事招待要請式があった。私へのみやげ、サンパウロ市会議長、勲章、私の方からは墓参者、会長、市議らに色紙、旅費その他記念品を贈呈したが、ブラジル訪問の確答はさげねばならなかった。移住者の中には成功した人もいるが、残念にも失敗した人も少くなくはなかつたはずで、それぞれ、三代にわたる辛苦の体験をかかえており、故郷日本、福岡県に寄せる期待にはわれわれが想像できないほど大きなものがあるに違いない。経済大国日本だから何かしてほしいと思うはずである。

4月5日（金）

日本赤十字福岡県血液センター新出発に際して（知事は日赤県支部長）

福岡県血液センターの竣工式があった。筑紫野市に5階建ての新しい医術の粋を集めたものだ。来る15日に今の須崎から移転を完了し、業務を再開するという。今日血というものが成分輸血の時代になり、又様々な副作用を克服する技術が発達し、保存上の技術も加えられ、高度な医療剤となっていること、全国的なネットワークによって制度が高められているなど、そうした諸条件を具備した全国最新の血液センターができたのである。亀井県政の末期に建設計画が成り、私が知事になって起工式をはじめて行った建物といえる。東京から林社長も列席、主要市町村からもとくに太宰府、大野城など隣接市町から医療機関、日赤各病院、県民生部、衛生部、県立病院から祝賀にかけつけていた。血というものがいかに大切かは、治療にゆくとほとんど血液検査されることからわかるし、古来これをいろいろの意味で、実際体内を循環している血液以外のたとえに用いられて来たことからわかる。血筋の意味は広く、血のけとか血の出るようなとかの用法も面白いが、昔の人が血液の本質を洞察していたからではあるまいか。医師たちの話をきいていて、そんな感じがした。

4 月 6 日 (土)

仲好会のメンバーと会う

10 時から 12 時まで「交通マナーを高めよう県総決起大会」を都久志会館で開いて後、暫時日銀前で街頭行動をして後、教育会館に会館事務局、福教組、高教組、社会主義協会を訪ね、久しぶりに関係者と顔を合わせ。1 時から県職労本庁支部役員と福新楼で中食こんだん会、5 時から仲好旅館で仲好会の人達と鍋をつつきながら会談をした。いずれも「ガス抜き」といえるものである。平素知事はこうした支援者団体の幹部と会って打ちとけた対話をする事が無いので、いいたいことが一杯たまっている。そのはけ口を作っていなかった。今後はつとめてこうした場を設けることが必要ということである。仲好旅館は知事選挙の時は大いに利用させてもらったところだ。メンバーの名もここから取っている。今日集ったのは、荒牧、西井、衣笠、八丁、岩崎、岩元、内田、徳本の諸氏で、秘書室から森山が加わった。「ガス抜き」と大げさにいっても、特別な注文があるわけではなく、平素から県政について思っていること語り合うだけである。ビールをのんでわいわいやればよい。ただお互いに、例えば県庁の内と外にいて県政についても感じ方、受取り方が違うので、その違いをたしかめ、改むべきは再認して改めるというのがメリットといえるだろう。私の側からは、仲好会の人達は、県政のプレーンとしての自負をしたいのではないかと想像するが、実際上のプレーン組織を作ることは仲々容易ではない。が、こうして接触を続けているうちに、いい知恵も浮かぶだろう。

4 月 7 日 (日)

花の京都で妙な問題が二題

京都も福岡と同じくらい桜は 8 分咲きだ。朝のうち少し時間のゆとりがあったので同行の佐々木、森山それに林室長の 4 人でこの都ホテルからほど近い南禅寺の境内を散歩した。小雨のためホテルから傘を借りて出た。傘は全く苦にならぬ。南禅寺は二度目と思うのだが過去の記憶はほとんど残っていない。市が課税する態度ということで、そうなれば一般の拝観を拒否する旨の立看板が京都には多く見られる。そうなると観光客でもてている京都の活況が失われるという問題に加え、観光税を徴収することを寺側が拒否するとのことなので、誰が徴収するかの問題が残るらしい。今日の京都福岡県人会は東本願寺がもっていた渉成園枳殻邸で行われたが、これを寺側がある不動産屋に 10 億円で売ったことに同門宗教家たちが反対して争いになっているといわれる。こんな立派な市中心部にある庭園を買う方も買う方、売る方も売る方だと思う。国、府、市のいずれかが資金に困っている寺と相談して買収するという方法はなかったものなのか。常識的に考えられぬことが花の京都でおこっている。

4月8日（月）

安田利政氏のこと

大阪事務所の車がずっとついてくれて、西本願寺を訪ねたあと乙訓郡大山崎町の国鉄大山崎駅近くの妙喜庵下に姫高時代の安田利政氏を訪問した。大山崎という町の存在は全く知らなかったが、天王山近く史跡豊かな地であり、かつ環境絶佳である。交通また至便。安田君は見るからに若い、元気。教育界を一途に歩んできた人だ。姫高卒業以来40余年ぶりに会ったわけ。途中のブランクを僅か2時間で埋めるべくもないが、一ぺんに距離が縮小したように感ずる。何の縁で彼が高校の先生になり、私が大学の研究者になったのかわからない。どちらがいいといっているのではない。縁というものの不思議さを思うのである。彼は高校時代からおとなしい性格と思った。今もかわらない。人に先んじて騒いだり、いたずらをするような性格ではなかった。が、さりとして率先垂範方でもないようだった。それでいてシンは決して弱くはないし、男らしくないということでもない。大事成就とはいえず、堅実型といえる人だ。いわば間違いのない人である。私からいわせると（私を尺度にしていうと）少々物足りなさを感じず。やってみようという気があって少しは乱暴でも冒険でもやる方がよいのではないかと思う。しかし、一つの器として社会が要求する型もある。

4月9日（火）

無言、有言のあいさつ

午後、日展を見に行った。会場内で知事さんですか、こういう場に来られる暇がとれてよかったですねという婦人がいた。私はどう答えようもなく、有難うございますといってしまった。絵を見ながら大声で話すわけにもいかず、長話もできない。ただそういう声をかけようとするこのご婦人の心根に感謝の気持が沸いて、有難うという言葉が出た。多忙きわまることをこの人はよく知っているようだ。そして時間がとれて日展を見に来ることができたということ自体をよろこんでくれているのである。だから、そのことが有難いのである。もちろん、そう思っても声をかけない人もあろう。会釈して行き交う人もかなりある。その態度に大小の別はあるが、ひとが私を注目していることは確かである。そう思うと、襟を正していなければならないとも思う。近頃はそれが当然だと観念している。が、大阪に行った時など、誰も知らないし、注目もしてないと思うと、中華料理店に行っても少々街を歩いても若干横着さが出てくる自分に気づく。よしあしは別として、そのどちらが必要だろう。車に乗っていて、窓越しに会釈する人に目が合うことがある。愛嬌をふりまくわけではないが、当方も会釈する。

4月10日（水）

永井副知事の辞意は固い

桜花も今満開。スオウ、レンギョウ、カイドウまさに百花繚乱。永井副知事が6月までの任期。再任がよいというのだが、本人の辞意がどうも固そうだ。近藤副知事が上京して自治省と打合わせたりしたが、今のところ次の手を考えねばならないらしい。第一は慰留の線。それがだめなら自治省に私がたのむという線である。2年前、知事交替のとき、永井氏は辞表を私に出してきたが、亀井と共に去った1人の副知事は仕方がないとしても永井氏まで去られると困るので辞表は返して2年間つき合ってもらい、その間一年余、新たに近藤副知事ができ、やれやれと思っているのに、又1人欠けることになる、自民優勢の議会で又もや内紛のタネができることになる。紛議を待ち構えている中での副知事人事はそう簡単ではない。永井慰留はそのことから選択肢の一つである。ただ彼は鼻炎のせい、いつもカゼをひいたような状況だし、自民工作を中心とした県議会対応に神経をすりへらし、疲れ切っており、こうした奥田県政に嫌気がさして、閑職を求めていることは事実だ。又奥田県政への不満もなきにしもあらずで、辞意が強い理由は理解できる。

4月11日（木）

田川郡の合併問題が出る

筑豊の再浮揚がにわかに県の大きな課題となってきた。今日田川の9町村長が揃って来県60年度予算で県が特別無利子貸付金制度を設定したお礼にということだったが、とくに田川郡の町村財政は今行詰ってきていることは確か。ついでの話で糸田の藤本町長が田川郡が合併してもいいといい出した。そして滝井田川市長の理解、知事の協力が必要という。こんなことは私の方からとても口に出せないことだと思っていただけに意外だった。合併で各町長は立候補して争わず退くことは平気だという。共同で事務をしている分野が、火葬、消防、水道その他があるが、まだまだやっている分野が多かろうが、議員たちが各自反対するだろうし、職組も反対だろう。病院は赤字であえいでいるが、これまた職員は賛成しないかも知れない。それぞれが炭鉱あと及び避病院あとを引きうけての町立病院をもっていて、統合した方がいいにきまっている。自治体の合理化という意味をもっているのが問題が具体的に上げられるとすれば、現地はもちろん県庁内も紛々たる議論がまきおこるであろう。いずれにせよ、筑豊地域がもっている旧弊が少しでも改善されるのに役立つならいいことだ。

4月12日（金）

甘木線の第三セクターへの転換が一つのテストケースになる

4月5日の協議会で甘木線が国鉄から第三セクターへ、レールバスとして転換するという線が条件つきで承認された。残るは資金調達と今後の運営責任である。甘木市が責任をもつということが基本である。甘木線存続については私も基本的に賛成であった。正月休んでいる時に塚本市長中島県議ほか十数人で私のうちにやってきて私の方から激励したり、中

島県議とは何回か会って存続の方向で努力してくれるように意見を伝え、県としても応分の努力をする旨約束しておいたのである。その後地元民も燃えだし、「守る会」が発足するなど前向きになったが、何しろ資金集めに今以て苦慮しているようだ。県がもっと出してやればよいかも知れないが、交通対策課その上の企画部がどうも否定的だし、両副知事も前向きではなかった。塚本市長の長期入院も盛り上がりには水をさした形となった。しかし地元はかなりもえた。それは小郡その他沿線市町の冷淡さをしのぎ、基山町の反対を凌駕して存続の「地元熱意」を運輸省、協議会に認めざるをえない「認定」へ傾けさせた。「県民総立ち」のテストケースとして、これから勝負という所に来た。資金集め、赤字対策、「俺たちのルール」として今後どう守っていくか、育てていくかが試されるわけだ。

4月13日（土）

知事出版物の土台はできたが……

八丁君が来庁してこんど出版予定の原稿の大半を要約して私に手渡した。250枚ぐらいになっている。3回にわたる座談会を私の筆になるように形をかえたもので、東定君がテープ起こしで要約し、八丁君が加筆し編集方針を立て、衣川君が目を通し、それを私が見直し、訂正加筆したものを、佐々木や樺島にコピーして素読してもらうという。いずれにせよ、コンセンサスをあらかじめ多くえておこうとの趣意である。夜になって原稿に目を通しはじめたが、一寸、このまま活字にできない未成熟なものである。東京のある書店から出版するので話は急ぐと彼はいうが、私も多忙、かんたんにはいかない。この原稿のほか200枚ほど、私の方から追加を考えている。それらをどう盛り込むことができるのか、いつでき上がるか今のところ不確実な要素がまだ少ない。焦点は「県民総立ち」の解説とその具体的事例の紹介の仕方にあるのだが、まだ若干時間がかかりそうだ。県政上の課題が行革、筑豊問題、対話集会のあり方、情報公開、国際交流など、次々にもち上げられているのでその対応が大変な現時である。

4月14日（日）

八丁君の言動への批判が内外から起こっているようだ

県政に比較のおちつきがでてきたかと思うと、こんどは知事の背後であれこれ渦巻きが感じられて心配である。今年の人事異動はかなり評判がよく、職員の間でもやる気をおこす空気にあるといわれているのに、どうも応援団側にとかくの確執があるようだ。総じて八丁君の出すぎからきているようにもみえる。彼が知事側近の幹部職員の異動に意見をさし挟んでいることを感<sup>アツ</sup>ずいている者がある。大坪君は協会の側から島野に役割を与えようと努力し、林県議や岩崎がこれを歓迎するかと思うと、八丁、近藤副知事が反撥している。大坪には林批判がある。八丁批判はかなり強い。知事ブレンぶっている点が気に入らないのであろう。八丁は自分だけがいい子になろうとする傾向があり、しゃしゃり出ること

が多く、協会の者はこれに反撥している。近藤の島野への拒否反応は、近藤の島野への拒否反応は、八丁にしる島野にしる、外的意見が県政内部に直接入ってくることへの警戒である。いずれにせよこうした人物が相互に淡白に連携してくれるならいいのに、複雑に絡み合って相を牽制批判しているのだから、いつかは爆発するのではないか。

4月15日(月)

中国との交流密になる

中国の現代国際関係研究所から7人のスタッフが呉学文氏を団長として長崎経由で来福。当方は西日本文化協会が受皿となって対応してくれた。溝口氏が世話役、永倉氏がキャップ。今日の新三浦での夕食歓迎会には私、進藤市長、九大、九工大、教育大の学長ら、吉本商工会議所会頭、銀行筋など大物がずらり並んでの歓迎である。研究所は中米、中ソ、中日、東亜、南アジアなどの諸問題を扱うようだが、中国では重要な研究機関として最近注目されるようになってきた機関のようだ。こうした機関からの往来が最近かなりひんぱんになってきた。中国総領事館の福岡設置については、12日先遣隊の来福以来、当分はホテルで執務することが明らかになったらしい。4月下旬にはそうなるだろう。総領事館設置が要望されている間は要望切なるものがあったが、いざ決まってしまうと、こんどは事務所建設について、その警備について、一苦労も二苦労もある。今夕の席では田中九大学長に中国からの留学生について、親切に遇する道を考えてほしい旨伝え、県としてもできることは手伝うと約束しておいた。県の対応が必ずしも十分でないのも気懸りだ。

4月16日(火)

日中の福岡からの定期航路開設に当っての障害物

今日午後東京に来て、経団連の花村仁八郎氏に会い、中国と福岡との間に定期航空路開設についての要望を22日以降北京に行って伝えるから日本航空会長としてもその点よろしく了解してくれと頼んでみた。花村氏は福岡県人会の顧問として関心を寄せてくれているが、彼のいわく、この問題は、全日空や東亜航空がなかなか承諾しないのでとの所見をわれわれに伝えた。板付から中国へのとばし方については、板付—長崎—上海、北京というコースが考えられるが、その際、長崎までの旅が東亜、全日空にとって奪われることになる云々が理由のようだ。外務省、運輸省筋では板付に台湾機が来るので、中国民航の同時滞在には国際関係としてトラブルの原因になるから二の足をふんでいるのかと思っていたのだが、その辺のことは台、中の中で見て見ぬふりをすれば、現代は問題が一方から提起してこない限り問題化することはないだろうという観測で、この点には自信はあるようだ。むしろ、日本側の航空会社間の確執らしい。花村氏は時間をかければ何とかなるといっていた。この感触をもってこんど北京筋に折衝してみようと思う。

4月17日（水）

新宿御苑観桜会

ふくおか会館の周辺の若葉若芽が美しい。応接室からお濠端を見る。桜花も満開時より、花を残し、若芽が萌えはじめた今がかえって美しいように思える。プラタナス、ケヤキ、イチョウなど一せいに、静かに新しい生命をわれわれに見せはじめた。全くしなやかに。このたびは総理の招待で新宿御苑の観桜会に上京したのだが、桜はもう遅いのではないかと思っただが、どうして、これは全く凡人の考えることだった。何十種という桜花があり、八重ものはこれからということで、実にすばらしい花見の会であった。ツツジはこれから、海棠は花ざかり、広々として18万坪ほどの美しい公園が東京のどまん中にあること自体がびっくりである。保存に努力し、手入れをし、造園に力を入れてきた人達の努力に感謝しなければならない。中曽根首相が11時にあいさつしたが、耳を傾けず、ひたすら広い園内を散歩した。半日あっても見おうせないらしい。佐賀県知事、大牟田市長に出会ったがあとには知らぬ人ばかりの雑踏だった。東京事務所長が奥様同伴だったらよかったのにと。彼女は行きたくないと言って来なかった。私は強いた勧誘はしなかった。チャンスは生かした方がいいと思う。今日のような快晴の新宿御苑に出逢うことは又とないのではないか。

4月18日（木）

永井副知事の辞意は固いが絶対的理由はない

16日に自治省石原氏に永井副知事再任について協力を要請したが、辞意は固いとの場合でのこと、二人の話で新たに出たのは自民党はじめ野党に働きかけて辞意をひるがえすべく工作をしてはという事になったので、昨日は帰福後早速林県議、近藤副知事に電話したら、それは有力な方法ということであった。永井氏をわれわれとしても再説得しようという事になり、その方法につき近藤、林出納長らと協議した。私は永井氏が固辞しているのは「二君にまみえず」との筋を通してなのであって、絶対的なものではないから、そういうことにこだわらぬでもいいではないかというふうの説こうということで、石原、林、近藤らみな同意見である事が確認されている。ここで踏んばらないと、自民党ら野党は、あと他のどんな候補をもち出しても反対し、奥田県政を再び窮地に追いこもうとたくらむことは必至。永井氏なら自民党ら野党も否決する理由はないはず。それ故、われわれとしても永井副知事再任に執着するほかないわけだ。永井氏の固辞は①疲れた、②知事が代わったからには前知事に採用された者が次の知事に任命される訳にはいかない、というのが理由。石原次官はこの②には当然の筋があるという。私は当然ではあるが、絶対的理由とはいえずというので、これが他にも納得されている。

4月19日（金）

折返し点に立つ奥田県政についての取材終る

新聞テレビの各社が、奥田県政折返し点に立つということで私に取材を求めてきた。TNCを最後に、今日ですべて終わったとのこと。東公園のつつじが、並木の低いので今が満開。ジュータンの如く、次々に咲いていく。2年前の初登庁の頃が思い出される。この時点での感想は、次期出馬にそなえて、健康そうですねといったことを各社ともきいてくる。アッという間にすぎた。出馬のことなどその時の県民の反響をみて考える、お蔭さまで病気がなくてというふうに答えている。社によっては後半の県政の力の入れ所はともきく。地方自治の再生、自立自助をより強く訴えよう、リーダーシップというのがこれから試めされるだろう、筑豊問題に本気で取り組めるとよいといったような返事をする。当面は、行政改革と情報公開の制度化が重要課題でこれに全力投球せねばならず、次期選挙など考えておれないと答える。さらに中期課題としては国体をどう消化するかが大変重くのしかかっている。カネはいくらあっても足りないし、人を減らせといわれても容易なことではない。OA化交渉で職員組合との話し合いは遅々として進んでいないようだ。問題山積。

4月20日（土）

2年前におこった「お布施事件」を思い出す

2年前の4月19日諸岡氏の買収容疑による逮捕からはじまって「お布施事件」が急に大さわぎになった。20日には奥田夫人も事件に関与するということが発展した。18日に近藤室長が予定どおり初対面（於パーソナルホテル）、21日には大名のマンション借用を決定し、23日初登庁ということであった。大さわぎのルツボに投入され、報道陣にもみくちゃにされることになる。森数君や今吉さんがよく手伝ってくれた。自民党中央の手まわしによって、酒井県警本部長がよく踊ったわけ。右翼がそれに歩調を合わせたから騒ぎに拍車がかけられた。今日報道陣は、知事もなれてきてそつがなくなったというが、すべり出しがああだったので、違いがくっきりするのであろう。自民党は遠藤や三原が中心になって次期知事候補さがしに奔走している。永倉ら財界の人達とスクラムを組んで、九州知事会のリーダーたるにふさわしい人というキャッチフレーズをもっている。つい先日北九州の谷市長のかつぎ出しを試みてことわられたという。永井副知事をという声もあるだろうが、今日の近藤、林との話し合いの話題としては、永井の線はうすいという。最短距離にあるのはいぜん遠藤政夫である。

4月21日（日）

私の日記記帳について

毎日の日記は、その日のうちに書いてしまうのと、翌朝出勤前に書くのと半々ぐらいだ。翌日にも書けないことはほとんどない。2日ほどの旅行だと、2冊のうち1冊は身につけていてなるべく負担を軽くすることに心がけているが、旅行が長びくときは、書きだめすることになるが、できるだけ中味を確定するためにメモ用紙に書きとめ、旅行から帰ってか



ら書くことになる。多忙な毎日なので、寸暇を惜しむような書き方となる。読みかえす時間はほとんどないので書きなぐることになる。脱字誤字があるだろうし、文脈が変なことも多々ある。時に読みかえし見ることがあってそれに気づくのである。その時その時の感じであり主観だから、後に、こんなことを書いてと異議をはさみたくなることもある。何のために書いているのか、自分でも説明はつかない。特に目的があるわけではなく、惰性と意地で書いているように思う。大変な努力と辛抱なのにそれだけの価値があるのかどうか誰にも説明できない。日記をつけ出してもう20年近くになるのではないだろうか。書齋を整理して全部まとめておかななくてはと思うのだが、書齋ではぶち込んだままである。

4月22日（月）

北京にやってきた

北京に来て、現地時間4時半人民大会堂で国务院の姫鵬飛閣下が一行33人を接見した。来てみないと日程がわからない状況であったので、これには一寸びっくりだった。定期航空路の開設については一歩前進の力ができると思われるが、2年ぐらい見ておかねばならぬだろうか。夕食は向うの手ちがいで現地時間午後8時になり、結局泊地の釣魚台国賓館の8号館でとることになった。昨年も姫氏の招宴で、ここで中食したと思う。高級ホテル・レストランでわれわれが泊ったり、食べたりするのは厚遇に属する。ついでにメニューを訳してもらったので、内容を記録しておこう。熱菜——1.汽鍋酸辣烏魚蛋湯（むし釜酸辛味のイカ卵のスープ）、2.焼三鮮（あわび、魚の浮袋と筍）、3.碧緑虾球（青菜とエビ肉ダンゴ）、4.生炸鸡腿（にわたりのももの肉）、5.草茹龍須菜（アスパラガス）、6.冰糖銀耳（白きくらげの冰糖糖づけ）、7.点心（菓子）、8.水果（みかん）。この歓迎夕食会は国家旅遊局長韓克華さんの主催されたもの。中国側の通訳は昨年もついでくれたし、今年100人の中国青年代表団のうちの一員として来日、来福した馮愛珠さんだった。定期航空路問題が少しずつ私にもわかって来たし、今後の前進の見とおしもついた。

4月23日（火）

ほこりっぼい北京市街

北京での仕事は今日が山場で、中日友好協会、中国民航総局、農牧漁業部、外交部の5カ所の訪問と夜の人民大会堂を借りての答礼レセプションの開催であった。しかし、スケジュールには無理もなく、その間時間のあきは少なくなかった。春盛りの北京で感じたことは自転車が多く、歩行者が車の運行にしばしば差支える横断をするという交通混雑。でもすべてのんびりで福岡のようにせっかちさが見られないということ。第二は、緑が多いようで少いことである。楊柳、ポプラ、プラタナスなど若芽をふき出し、ライラックはまさに満開であちこちの庭を美しく飾っていて、役所をなごませている。ここ釣魚台にはよくみるとスマレがたくさん咲いていてかわいい。しかし、少くない松の葉が白くよごれてい

る。近よってみるとあの黄塵万丈という黄塵が松葉にしみついているのだ。少々の雨では流れ落ちないのであろう。そのこともあってか、柳絮舞うということもあってか、街の空気が少々ほこりっぽい。せっかくの若芽の季節がこうしたほこりですがすがしさが消されてしまう。鹿児島市の桜島降灰が大変だというのと似ている。

4月24日(水)

北京までの自由時間

1日のリザーブ。北京見物に一日ということだが、残った仕事の一つに日本大使館へのあいさつまわりがあった。このあと、日壇公園と雍和宮に行って午前中は終る。中食は晋陽飯荘で久しぶりに自由な中食となる。紅旗の運転手君に同席を誘ったが向うから固くるしいと思われたのであろう固辞された。午後は、中食にひまがかかったので、その他まわらないことにし、ホテル釣魚台に帰って休もうということになった。が、途中、一寸友誼商店に寄ってみることにした。天壇公園の中で燕京書画社に寄ったとき、店主にすすめられて、硯を二個買うことになった。タンケイとはいうが、そのねうちの程はよくわからない。天壇公園はさすがに広く、ひとも多かった。雍和宮といい、ここの祈年館といい、中国の王のすることは規模雄大である。柳絮の舞うさまが記憶に残る。ホテルに帰って原稿を見る時間にあてていたら佐々木氏が八達嶺見物、友誼商店の買物から帰ってきた。白土課長と二人で朝から、われわれ池田企画開発部長、副島氏らと別行動をとっていたのであった。今朝は県議団と別れを告げ、夕食時には市執行部側と別れを告げた。県議、市議の連中はあと五日、25日まで旅行する計画だが、よく疲れず、あきずだなあと思う。

4月25日(木)

福岡空港から中国への定期航空便の開設について

朝から一日中帰路に時間を費した。午後六時頃福岡空港に降りたら記者たちがフラッシュの攻勢。一寸照れた。何がそんなに問題なのかといたいだが、空港での記者会見は、福岡空港と中国を結ぶ定期航空路の開設見とおしが焦点であった。22日の人民大会堂で姫鵬飛氏が、開設は日中両国の利益であるので、関係方面に連絡をして条件を検討させようといったこと、23日に民航総局の胡氏が5月の日中交渉に議題としたいといったこと、それがこの問題の今後の展望を明るく一歩ふみ出したと見ていいという趣旨で私は記者にのべておいた。昨年も中国総領事館の開設問題につき、胡耀邦氏がその旨約束してから情勢が大きく展開したので、今回もそれと一寸似た感じがするのである。その意味では、行ってよかったということになる。今回のように大阪からということになると、福岡大阪間が経費の点でも、時間的にはさらに大きく損失になる。チャーター便をとばすか、長崎まで足をのばすか、そのどちらも大変である。福岡からの便は経営の上でも長崎よりはるかに採算に乗ることは誰もが知っている。ともかくこのように新聞にも大きく報道されるようにな

った以上、県は近い将来、運輸省、日航、外務など早急に折衝する必要がでてきた。

4月26日（金）

藤の季節になった

うちの藤も満開に近い。藤見したらいいとはいふ。しかし、誰を呼ぶか。誰でもいいというわけにはいかないし、私にのんびりできる時間がない。今日は花にめぐまれた。悲しいかな雨の一日ではあったが。まず九大付属病院の入った左側の花壇のツツジ。それから柳川全県市長会が開かれていたお花の洋館左の藤棚。これはきれいだった。花見のもう一つは、安川邸、その隣の西日本工業倶楽部の庭、どちらもツツジが主体で築山の萌え出づる若葉が美しかった。飯塚の麻生邸もいいだろう。福岡県にはこの程度の佳景がある。福岡城趾、大濠、西公園もいいだろう。私邸としては安川と麻生かというふう考えた。今日の安川邸の園遊会での話。——邸が広いので泥棒がしばらく住みついていたのに気づかぬ程だ——少々誇張だろうが。4月から5月にかけてのこのよい季節、もう少しでいわゆる飛石連休がはじまる。多くの人が外国に遊びに出るという。もったいないことをするものだ。周辺にいくらでも楽しめる環境があるのに。子供たちを連れてこの連休に家族づれで動くとなればたちまち10万といわぬカネがいる。子供を連れまわらねばならぬ人達は大変だろう。わが家の藤棚を誰にも邪魔されないで静かに、独言でもいえる数時間がほしい。

4月27日（土）

県政推進懇談会の第2回会合

月に1回ぐらいは支援団体役員との話し合いをという要請をうけて行う会合が今日で2回目になる。この前は山ノ上ホテルで、たしか3月はじめだったろうか。月に一回というどひんぱんに感ずる。この前は知事への要請の噴出のような会になったので、今日は知事のほうから当面の懸案を話してくれという。県庁跡地利用や中国との定期航空路の開設については、奥田に点数をかせがせるな〔江口利雄〕というような声が野党に根強くある。政策というよりは政略である。行革については、定数削減をめぐって今後の争点になろう。情報公開はマスコミが背後にいることや、答申がよくできているので野党も反対しにくいだろう。互助会問題はこちら側が負けて勝つという結果と評価できる。教育委員会2人欠員という事態についてはやむをえないことだったが、6月議会で一つの争点になろう。残りの3人で互助会問題を含め、辛苦をなめたがよい。折返し点通過ということで、自民党は候補者の選考にあれこれアドバルーンをあげている。すぐまとまる話ではなさそうだ。アドバルーンこそが必要との声もある。奥田人気上昇中とマスコミも書いているので、やきもきしているのが自民党の近況、みんな締めていこうということになった。

4月28日（日）

執中無権猶執一也

牧坂氏から言ってきた書展の揮毫が気になり、少々時間をつかった。その中で孟子の「執中無権猶執一也」の語を選んだ。中を執りて権なくばなお一を執るがごときなり、と読むわけ。今日仕上げた夏出版予定の著書に、県民党を解説した部分が原稿にあることを思い出していた。県民党というのは執中ということと同義である。でありながら、自分が学者時代に形成した思想信条は個性として厳とあると書いているがそれは権ありということと同義である。人は県民党というからには、大学時代のお前は放棄したのかとよくきく。そうでないというどちらが本当かという。どちらも本当だという矛盾じゃないかという。執中有権というのが真実である。揺れつつ動かないスタンスという表現をつかったこともある。中も権も両者・矛盾なく統一されている状態が好ましい。ただどのように中を執るか、権を保ち一を執らないか、具体的事象にあてはめると大変むづかしい。自民党は決してこれを理解しようとしな。支持団体の人達はよく話せばわかってくれるように思う。面白い言葉に出合ったものだ。これだけでも今日の収穫である。ひまがあるということはいいことだ。

4月29日（月）

楽哉無一事

楽哉無一事というのを私が色紙に書いて、県職福岡支部とその互助会がタオルにそれを刷りこんで配布したら、組合の混同ということで高岡新が3月県議会でわいわいやった。今日は文字通り楽哉無一事の日であった。無一事といっても何もしないのではなく、拘束された仕事がないという程の意味にとりたい。ところで私は先日の職労青年部の集会（知事と語る、グリーンホテル）でもこのことにふれた。自民党は互助会と職労が役員兼務など癒着しているという事を問題にするが、それは組織内独自のことであって、外部からとやかくいう筋のものではないし、共同でタオルを作ったからといって両者の名を併記していることがいけない訳ではない。共同で事業をするのは当たり前というべきである。別個にするよりもよい。自民党は互助会ならいいが、職組なら悪だという前提でものをいっている。こんな低劣な認識の持ち主が日本の政治をにぎっているのだからお粗末というしかない。私は癒着が悪いのではなく癒着の仕方に悪い所があれば、素直になおしていいのではないかとっておいた。楽哉無一事という気持から、互助会問題、自民党批判にまで及んでしまったのだが、自民党がもう少し向上してくれないと……。

4月30日（火）

21世紀を考える福岡研究会懇親会

今夕、県庁裏玄関に近い波多野で福岡研究会が懇親会を開き、これに出席してあいさつし

た。企画調整課が主管する分野で長期計画を新たに作成する仕事があり、この長期ビジョン作りに、東京研究会と福岡研究会をもち、かなり作業が進んでいる。ところが、福岡研究会はメンバーの顔ぶれが気に入らぬということなのか前の課長古賀一成氏が、福岡研究会を開きたがらなかったと八丁氏は批判していた。なるほどそのように、この会のメンバーは私の好みはずい分入っている。岩元、白石、安東、八丁、徳本、原田（統）など、一見いわゆる左翼教授が名をつらねている。内田一郎にしても、自治体問題研究所々長ということでヒモつき左翼である。古賀一成が、このメンバー表を明るみに出すことをきらった理由がわかる。彼が左翼嫌いかどうかではなく、自民党方面に遠慮したであろうことは容易に想像がつく。でも、亀井時代は亀井好みでやったはずである。今日ひる、近藤副知事が、27年9期やった収用委員高田源清氏を今回やめてもらうことにした点で、高田本人から奥田に会いたいと言っているのだが、と私に言ったので、私は会いたくないと伝えてくれと答えておいた。高田のようなのが27年間も収用委員で会長をつとめていたことが不思議なほどだ。

#### MEMORANDUM

県議会の野党が、あれもこれも問題になることは何でも取りあげて知事攻撃をする。当たり前といえばいいが、議員族のこの習性は修正されないものかどうか。楽哉無一事ということが問題になった。高岡新がどう読むのかということも質問内容にしたのだが、私はひとりである時が、一番楽しいという実感を知事になってから以後ひしひしと感ずるようになった。煩わしいことがあまりにも多いからだろう。「県民のため」ということが外向けにはいわねばならぬことながら、あまりにもそれが多すぎると、「県民のため」が自分を殺すことにもなってしまう。高岡にそのようなことを説明せねばならないとは情ない。この人一寸変な人で、私が答えたら一寸学問的なことにわたる点ではそれ以上追及しない。ともかく楽哉無一事こそ私の実感をこめた言葉なのである。ひとりにさせないことが秘書の役目なのかも知れない。便所に行くにも知事室以外では出てくるまで秘書が気にして外で立って待つ。そうなれば用便の時間の長短さえ、こちらが逆に気をつかわねばならぬ不自由さである。それだけならまだしも知事の勤務は土曜、日曜をふくめて実に長い。10時間から12時間がふつうでひどい日は16時間にさえ及ぶ。私生活がそれだけ侵蝕されることになる。たまには私生活にゆとりができる日もある。しかし、うちへ帰っても、夜なら女房はテレビに興じている。それも当然かと思う。なぜなら私の行動に尺度を合わせられたらたまらないだろう。自分には自分の時間の使い方があり、彼女には彼女の時間があるだろう。そこで私はできるだけ書斎に入ることにしている。彼女を妨げることに若干遠慮もある。しかし、私にとっては家庭に帰ってもひとりになることを好む傾向があることはいなめない。この時こそが楽哉無一事を実感として味える時間帯となる。時には読みもせぬ本を引き出してながめる。

仕事に関係のない無目的な本の位置をかえてみる。にわかには揮毫の体制に入る、等々。しかし全く少い時間帯の大部分は日記書きにあてられているのではないだろうか。なぜ日記を書くのか自分でも説明がつかない。目的があるというのでもない。義務感があるとも思えない。惰性が多分であろう。書かないと自分への忠実さがなくなるであろうことを恐れているみたいである。自分への義務感というのかも知れない。そういうことを反省しながら一ページも残すまい欠落を作るまいと思って何かを書いている。手先を書くことによって動かすことが一種の健康法という人もいる。私はそうした目的意識では書いていない。自慰的な衝動といわれるかも知れない。とにかくにも書くだけだから。しかも、インク、つけペンの形式を守っている。旅先にもそれを持ってまわる。そして無心で書く。作句でもできればいいのにと思いつつそれは面倒で、とにかく感じたことを出まかせに書いている。その瞬間が楽哉ということになっているのである。

5月1日（水）

メーデーに訴える

メーデー福岡、北九両会場とも用意された原稿を読まずに別途勝手にあいさつした。朝起きて、メーデーのはじまりにふれたがいいと思って、しらべものをし、メモをポケットに入れておいた。1884年8時間労働要求のゼネストが企画され、86年にシカゴの血のメーデーになった。第二インターパリ大会の決議により1890年第1回の世界的メーデーの歴史が始まる。1886年シカゴのヘイマーケット事件から数えて今年で100年ということだ。この間日本では戦後基準法が決まってから8時間労働が最長ときめられたが、シカゴ事件以来60年以上の歴史が流れている。しかもいまだ日本の成長産業では残業が常習化して実質8時間労働は守られていない。日本では何の進歩があったか。今日汗ばむメーデー行進になるだろうが、行進しながらそれを反芻してほしいと演説したのだった。春闘30年、比較的に地についてきたといえるが、労働時間がまだ長すぎる。時短なしには労働者の生活の質の向上、文化生活は望むらくもない。物から心へという時代になっている。心は時間からだ。県庁職員が残業していることについて、昨今私は残業せずに帰れとはげましている。知事もそれをしなくてはなるまい。

5月2日（木）

八女の献茶祭に行く

夏も近づく八十八夜。今日は黒木の霊巖寺での献茶祭に出席した。農政部長は八女市でおこなわれている同様の行事に行っているとか。八女は豊かだと思う。自然に恵まれ、現金消費に気をつけさえすれば楽園といえないだろうか。誰でも現金収入を追いかけすぎるからいけない。それが十分でないから不満が出る。そして、県が悪いなどという発想に結びつけていく。昨年の茶の品評会でも八女の玉露が日本一の折紙がつけられ、八女茶は徐々

に名声を高めつつある。熊本の細川知事が日本一運動を提唱しているというマスコミはたたえている。日本一なんか目ざしても仕方のない目標なのに、なぜそれがマスコミの話題になるのかわからない。努力して自然にそうなることがよいのであって、それは努力こそが大事なのではあるまいか。ではなぜ努力ということをいわないのであろうか。3位だって10位だって、前よりもよくなったらそれでよいのではないか。いずれにせよ玉露で八女茶が日本一であることは大変力強い。霧深いことが地形としてはよいようだ。この地方に工場誘致などしない方がいいし、しなくても食っていけるようにしなければならない。地域の特産があるのだから、それが売れるように宣伝する必要がある。大体県下全般に宣伝が下手なのだ。

5月3日（金）

日本国憲法の意義をかみしめ直そう

憲法記念日とはいうが、戦後制定されて38年、その精神は風化し、風化させられている。東京その他主要都市では現行憲法を守ろうとの意味で大衆集会が開かれているが、その数も規模も取るに足りない。右翼の車が明治憲法にかえれと叫びつつ福岡市内を徘徊している。2台見つけた。東京ならもっとすごかろう。自民党など保守の系列では、改憲を叫ぶ集会の憲法記念日だ。今の憲法に反対するのを憲法記念行事というにふさわしいかどうか、明らかではないだろうか。福岡では私の大学時代綜合法律事務所の前田弁護士など熱心に動いて開かれた憲法集会が今日も大手門会館で開かれた。300人ほどの集まりだが、それがなかったらどういうことになるだろう。これで9回目という。社共代表と知事があいさつするという形はついているが、勢いが足りない感じだ。どんたくもいいが、戦後40年というこの時点で、民主主義と自由、それに平和の意義をもう一度かみしめ直すこうした集会がもっと盛大にあちこちで開かれてもよさそうに思うが、右翼に押されてか、平和になれてか、どうも勢いが足りない。そのうちに、戦争への足音が、だんだん高くなってきているように思えてならない。

5月4日（土）

博多どんたく

どんたくは雨にたたられるというジンクスがある。昨日今日晴れといえ、こんな年は早魘になるのではないかと反対の心配さえおこっていた。それが今日の夕方から雨になった。それでも博多は町中どんたくで狂ったようだった。明日全国警察音楽隊の演奏会が国際センターであるというので、それとの関連で今日目抜き通りをどんたくパレードに同調して警察音楽隊が各県ごとに吹奏パレードをやったらしい。市民はそれに熱狂したらしい。夜は競艇場ですごく盛大な花火大会がおこなわれ、どんたくの終止符をうった。みんな夜は室内で打上げの宴をはっているのではないかと。祭好きの博多っ子というが誰でもひとが

浮かれると自分も浮かれるのが自然というもの。むしろ勢いであろう。ひとを巻きこみその雰囲気の中に呑みこんでしまうのであって、そういう中で孤立を好む人は少い。それにしてもどんたくは西日本一の市民祭りだという。祭る神様か何かあるのかというと、そういう信仰の対象はない。みんな仮装し、うたと三味線で行列し踊る。著名士のうちや事務所役所をまわって何がしかを頂戴する。それがもらえないと去ろうとしない。今年のパレードは大企業の宣伝ものが目立ったとか。若干批判がでている。もっと大衆的な雰囲気を重んずるがよい。

5月5日（日）

さだまさしローカル線コンサート

さだまさしローカル線コンサートが飯塚市民運動場でおこなわれた。国労の主催で同種のを北海道鹿児島東京などで国労がやってきた。2万人の予定だったが昨夜来、午後までつづいた雨のため半分ほどしか来なかった。それでも舞台の前の方は、ぬれた土の上に腰をおろすわけにもいかず、立錐の余地もないという表現ができるほどに、みんな立って詰めかけた。もちろんみんな若人ばかり。どこがいいのか有名歌手にはみんなあこがれる。一目みたい、触りたい、できればサインがほしい、歌をきいてしびれを感じたい、そういう気持だろう。主催者の国労はローカル線廃止反対の気持を分ちもってほしいということだろうが、それはわかっている、そんなことはどうでもいいということで、むしろ歌を、さだまさしをということできているのだ。博多発新飯塚行の列車が臨時便で仕立てられ、われわれ秘書ら一行もそれに乗ったが客は多かったとはいえなかった。雨の心配が影響しているのであろう。でも飯塚の一寸はなれた所に万人集めた歌手の人気たるや驚きである。楽団一行50人、その舞台装置も大変なもの。帰宅して「落花随流水」の5文字を揮毫した、その気持。

5月6日（月）

捨てもしないで何故に保存するのだろうか

書齋を整理していると限りなく時間がかかる。知事になってから、いただいた本がどれだけあろうか。どんどんたまっていく。書棚が欲しいが置き場がない。単に積んでおくだけ。いつの日かと思うが、そういう日は来ないだろう。にもかかわらずもっている。処分しきれない。そのために、書庫を作ったりして使うカネは余分とさえ思う。今日も郵送されて来る新聞雑誌約1年半分を山と積んでいたのが気になり幸い時間もでき、暖くもなったと思って書庫の中で仕分けに時間を費した。読みもしないのに、なぜにこういうことをしなければならぬのか、自分にも説明がつかない。丁度毎日日記記帳に時間をかけることの意味を説明できないのと同様である。不合理といえはいるが、そうしないと自分が納得できないのである。揮毫した書きつづしの紙もこれ又山と積んでいる。多くの方はそんな



ものは都度捨ててしまうだろうが、私はなぜか捨てない。紙だから何かに再利用できるだろうとの下心がある。役所でつくるおびただし書類も、不用になっているのに、裏紙として利用すべく保存している自分が、これ又同じ姿勢なのかも知れない。育ちということだろうか。

5月7日（火）

反亀井を貫いて退職した人たち（7人）と語り合う

県職員で退職勧奨に応じないでがんばり、今年60歳で退職したが、30年勤続表彰をうけられなかった人達に色紙を書いてくれと森山君いつてきていたのに、揮毫してあげたのだが、その色紙を額に入れ、それを贈呈する会が、今日ひる広州酒家でおこなわれた。県職労の中村委員長があいさつ。7人出席者全員が反亀井の線で断乎がんばったのだという。その人達の話を書いていると、亀井の悪口ばかりいう。いわばつむじまがりのような人達。もちろんそういう反骨者は役付になれないままの退職である。退職後は何をするかきかなかったが、勤労協の話も出ていたので、それぞれ、職のあるなしにかかわらず、地域でがんばっている模様。もちろん、在職中も反亀井で奥田選挙を推進した人たちである。だから職場には敵も少くなかったようだ。こういう人達が、どんな時、どんな所にもいるものだ。いいか悪いかはともかく、自分で納得すれば、それなりの人生である。役付きになることさえ拒否した人があるわけだ。組合運動の精神がこんな所に浸透しているのだなということを感じさせられた。損な人、不幸な人という評価もあるだろうが、自分が納得できればよい。

5月8日（水）

死を選ぶ自由があってもよいように思う

藤江君の母が乳ガンの診断をうけてかれはショックをうけている。父の膀胱ガンの入院が長期化し、つねに看病する身であり、死も遠くないという時に、同時に手術入院ということになり難いということになる。同じく九大の泌尿器科と外科というから近いには違いないが、看病人を他に探すとか、手術中に一方が死亡というような厄介なことになって困るのである。小倉の安田伊三男両親が同時に同病院で死の床についたということもあったが、こういうケースはまれだろう。どうせ死ぬしかないのに徒らに永らえさせ治療費と家族の苦労は嵩むばかりというのが、今日の医術の行きつくところだが、かといって、死なせていいという結論にもならない。その辺に家族の苦悩がある。看病だけでも大変かねがかかる。佐方の父の場合も3ヵ月はそういう状態であったが、藤江君の父の場合もっと永いようにみえる。本人は何度か自殺を試みたらしいが、この頃は監視もきびしくて自殺など思いもよらない。自殺の自由もない。何と残酷なことだろう。何回か思ったことだが、苦しみなく、あってもごく短時間で、まわりの人も死に目に会えないほどあっさり死ん

でいるという状況が最も望ましい。今年亡くなった美濃部亮吉氏は椅子にかけたままの往生だった。

5月9日（木）

秋枝蕭子さんの句集から

女子大の定年退職者秋枝蕭子さんが今日句集と退官文集を届けてくれた。今日は幸い時間があったので句集をぺらぺらめくり読んでみた。目にとまったのでこれぞと思うのを次のように拾ってみた。

一輪の椿を生けて書を繙く  
花吹雪新入の娘等眉清し  
唐津路や菜畑麦畑市松に  
君子蘭絢爛その名ほしいまま  
垣越えて溢れ溢れてつつじ燃ゆ  
武蔵寺や尺余の藤房競艶す  
藤棚の下アベックは花も見ず

なるべく今の季節に近い感じが出ているものを選んでみた。句をひねる人は、絵をかく人と同様に、対象を主観的に一つの構造として瞬間的にかつ動的にとらえ、これを客観的にひとにも、自分と同じ主観の世界に引き込む表現技能にたけている。17の字の中にあらわさなければならぬので、かなり鋭い観察と表現技術がいる。それは熟達を要する、つまり修練しなければならない。私のように雑事に多忙な生活の中からは句が生まれにくい。そうした時間、ゆとりがないと駄目だ。

5月10日（金）

古くて新しいものの追求があっていい

筑紫野から夜須を通過して小石原への旅が楽しかった。安野焼窯元はまだ歴史は浅いというが、焼物をつくづく見ることができた。小石原で蹴ろくろでの型づくり実演を見せてもらったし、工芸展も見ることができた。何百年かの伝統をつぎながら、どこかに現代色が加えられるのであろうが、こうした工芸品をひんぱんに見ていると、わかるようになるだろうが、今は何が何やらわからない。文様が窯変によって作者にも予測できないほどの不思議さででき上がるということだけはわかったような気がする。もう10年も前だったか備前焼を見に行った時も窯の作用の不思議さについてきかされたものだ。過疎地といわれるこの小石原に、こうした焼物産業があることは幸せというべきで、何もない山村とはこの点がすぐれている。十分に生かしてほしい。高松宮が、日常生活に役立つもの、欲しいものを工夫して作らにやだめだろうとっておられたが、日常生活をしている者の感覚を生産者がかみ取ることが大切だということだ。伝統工芸といえば古きを守っているというこ

とと同義にとらえられるなら、それは衰亡の道を選ぶことになる。古くして且つ新しいと  
いうことの難しさがここにあると思うのである。

5月11日（土）

8月15日3句

玉音をききいし戦友<sup>とも</sup>ら声もなし  
炎天下玉音ききて「虚脱<sup>きょだつ</sup>、しぬ  
孟宗<sup>たけ</sup>竹許せぬわれ軍刀の初切りぞ

（宮崎海岸防衛隊にいて）

大阪のマルホ社長高木二郎氏が万葉俳句募集というので、応募した作品。1945年8月15  
日をよんだ俳句を募集する、知事は特別にのせるというのであった。満州815部隊の同期  
生かなと思ってしらべたが別人だった。815部隊は8月15日に通じて妙である。この日天  
皇の特別放送があるというので、その時刻12時ちょうどに内野宮さん宅においていたわれ  
われの経理班は庭に集ってラジオをきいた。神妙にきいたがなんであるかは予知されてい  
た。暑い暑い日だった。その時の気持を上記3句にまとめてみた。句になっているかどう  
か自信の程はないが、ともかくああいうことで、庭のラジオ周辺には当時帰郷と称して自  
分のうちへ帰り戦争に役立ちそうな家財道具を思い思い持ち帰り、それを集めて山なすガ  
ラクタがあったが、そういう努力が空々しいほどに無駄に見えた。すでに一定の時期をこ  
えた戦争の継続がかえって自壊を早めていたのであった。

5月12日（日）

高松宮の若さにびっくり

高松宮とつき合って疲れたろうと人はいふ。たしかに緊張はするが、それ程でもなかった。  
三笠宮妃、その息子さん、どの人ともそれぞれざくばらん。皇太子夫妻もこちらがそう  
思わなければそう気のはる人ではないだろう。三笠宮息子さんなどスポーティなスーツで  
股を組んでタバコをふかし、かわったメガネをかけてその辺のあんちゃんみたいな姿での  
応接である。高松宮は天皇の次の次の弟さん。もう80歳というが、どうしてどうして若い  
若い。済生会二日市病院の記念行事の日、終って午後小石原村に焼物をみに行った。村の  
人達が日の丸の旗ふったりして歓迎する緊張の中、案内役の二日市病院長のすすめにした  
がわず、蹴轆轤の次に隣にあった上り窯<sup>かま</sup>の方へこっちを見ようよといって勝手に行ってし  
まったりの逸脱ぶりだし、夜の大丸別荘での懇親会のあと9時半頃から麻雀をしようとい  
うことになって、済生会がお相手したらしい。その翌日は夜須高原ゴルフに出かけ100ぐ  
らいで飛ばされたという。私は70歳とっていいほどの若さを感じる。それなりの健康法  
を守っておられるのだろうが、ごちそうも酒もある程度はつき合っておられ、お付きの医  
師がいるわけでもない。天皇とくらべて、かなりな年齢の差を感じるのである。一般に人

が思うよりは、はるかに自由な見である。

5月13日（月）

敗戦後の正月前後を綴った日記をよむ

自由な時間がほしいとつねづね思っているが、今日の如き、帰宅が午後7時、それからはとくにすることもなく書斎に入って机辺を片付けていたら、古いノートの中から、昭和21年正月前後の、あの「虚脱」と無聊の日々を綴った日記が見つかって、若い日の未熟な頭と筆跡を残した自分の一片をみつけることができた。全くの偶然であり、なぜあのノートが机辺に今あったのか不思議なくらいである。茶の間ではテレビの音がするので、帰宅してもできるだけひとりになりたいのであるが、こんなノートが見つかるとは思ってもよらなかった。裏藪を耕し、山に行つて柴刈りをし、友をたずね師をたずねて時間を費したが、敗戦後の全く仕事のない時代である。繁之助の死から間もない法事もあった。佐方で牛を盗まれたことも書いている。幸のことはあまり描写していないが、それどころではなかったのだろうか。宮崎に行ってしまうことになるのだが、心のやり場を求めていたからでもあった。やり場がなかったらもっともっと苦しい日々を送つただろう。失業の苦しさ若さが二重になってあの日々があったのだろうと思う。初治氏との呼吸はうまく合っていなかったが、心は通っていたはずで、間もなく、九大の大学院特別研究生になって福岡にくるのだが、これも初治氏のすすめが大きく作用したためだ。

5月14日（火）

偏狭固陋

今日は中国在福岡総領事館開設祝宴が広汎な関係者を集めてグランドホテルで開かれ、中央から宋之光大使夫妻も、北海道の総領事、札幌市長もかけつけた。その反対を叫び朝から右翼愛国党らが県庁、大濠仮事務、天神付近をマイク車で遊べした。言葉の中には奥田攻撃もきかれたし、秘書室まで面会を求めてやってきた。警察機動隊も管財課員もそれなりの対応をした。頭が固いの一語につきる。そういえば今日は労働組合の同盟の役員と知事になって初の懇親をもった。伊藤労働部長の骨折がバックにあったのだが、これ又奥田批判で頭が固いというか、どの党派もそれなりに頭が固いといえはいえないことはないが、同盟は総評の政治偏向を批判して、それを内部矯正するならよいが、とび出して別集団を作り、批判しつづけるとなると、これ又一个のセクトになってしまうのだが、これ又政治偏向一党派といえる品物であつて、そのことに気づいていない。労働運動の進め方にしても民社支持、自民との連合、労使アベックという面にしてもその臭いが強く出る。しかも反総評というから総評がすること何でも反対で、県評が推す候補だから反対、知らない人でも反対という偏狭固陋さをもちつづけている。今日の懇親でどこまで直つたかだ。

5月15日（水）

労働運動の自己点検を提言

昨日の同盟との話し合いの中で、私は労働運動の在り方の大転換時代に来たのではないかと提言した。世は飽食時代といわれている。労働組合の組織率は30%を割るに至っている。労働組合のあり方に魅力を感じない、組合費を払うに値しないとの価値観の変化を組合幹部は深刻に受止めなければならない。私は、労働組合というものが賃金労働者の生活を協同で守るという原則に立ちかえり、それを労使関係に限定せず、組合員の自己自助努力、地域住民生活の中での自助努力にも目を向けるべきではないかという事を示唆した。又、労使関係の中でも、時短問題は今日の最大の課題であり、年間2100時間の労働は少なくとも欧米先進国より10%は長時間労働であるから、20年計画ぐらいで1800時間ぐらいにまで短縮する年次計画を立てて実行に移す努力をしたらどうかと提言した。右だ左だ政治偏向だというような非難のし合いばかりやっていると所詮自滅の道を選ぶことになるのではないかといておいた。彼らは、それならわかるとってはいたが、総評系にも同じ提言はしてみるつもりでいる。労働運動の自己点検を急がねばならぬ時点にきていることは確か。

5月16日（木）

木梨弁護士が新しく事務所を開いて初の訪問

市中央区役所の隣のチサンマンション2階に、はじめて木梨さんの事務所を訪ねた。私が知事になる前だったかその後だったか、彼は福岡綜合法律事務所から出て、ここへ独自の事務所を設けたのであった。彼はキャップの位置をどうして去ったのか。綜合法律事務所内をまとめるに不向きになってしまったようだ。われわれが関与していたのに、ローフレンドの会（今も私が会長）と地域政策懇話会がある。その二つを木梨氏は実によく世話してくれたが、地域懇の方は綜合法律事務所にとって重荷のように感じられていたようだ。それが嫌われの一つだったのではないか。もう一つは、彼の長女が私の知事選のあとすぐ死去し、そのあと、彼は信仰にかたまっていき、それが同居の弁護士たちに嫌われるもう一つの原因になったのではないだろうか。今は彼は地域懇のことを、この事務所で扱ってくれている。知事選後、労金を理事長から退いた花田守氏が熱心に地域懇にかかわってくれるようになり、その今日を支えている一つの力になっている。今の木梨氏の事務所には、私の揮毫した南無妙法蓮華經のタテ書き表装した掛物が出来上って二枚おいてある。彼は立派に弁護士稼業を成功させているようだ。

5月17日（金）

自民党福岡県次期知事候補の選考を急ぐ

今日夕方久留米地区労が県市政報告会を開き、私も出席あいさつを行ったが、自民党の知事候補のしぼり方にふれてこれを批判しておいた。本四橋公団総裁高橋氏、北九州市長谷

氏らがうわさされ、この15日の西日本新聞には公営企業金融公庫総裁首藤堯氏に絞ったと報ぜられた。その場合選考基準に、①九州のリーダーになりうる人物、②行政経験が豊かなこと、③福岡をふるさとと呼べる人物という3条件をあげている。民主主義も自治も自民党県連の選考基準には全く見られないが、私はこの点を重視するというのをのべておいたのである。九州のリーダーである必要があるだろうか、又行政経験がなぜ必要なのか、その根拠は全く理解できない。島根であろうが神奈川であろうが、知事には共通な適任基準があつてよいのに、九州のリーダーをどうして福岡県知事に求めるのか。行政経験のない農業者、医者、学者、芸術家など立候補の資格はないというのか。6月になると政経懇談会を開く自民党(会長は遠藤政夫)県連はなかなか知事候補が見つからぬので、首藤氏を打上げて関係者の心を抑えておこうとの思惑があつてのことで、首藤氏自身は色気はともかく、知らぬ存ぜぬといっているらしい。

5月18日(土)

いわせておけば皮肉が平気にでてくる

昨日から福岡会館に泊っていて、今朝は啓二、直美を呼んで朝食を共にし、あと、皇居一周の散歩に出た。出る直前に、食堂で波多江夫妻親子4人に会った。筋萎縮ジストロフィーの2人の娘さんは今九大文学部の大学院ドクターコースに在学中とのこと。このこたちが私に一つの皮肉を語ってくれた。九大学生は奥田知事について、教授としては政治的にすぎ、知事になって学者的にすぎるといっていますよ、と。波多江俊一氏もかなりの皮肉屋だから、それが娘にも伝わっているのではなかろうか。皇居一周の散歩をしたため、今日は万歩計をつけはじめて半年余になると思うが、はじめて1万歩をこえることになった。青葉香り、汗ばむ散歩であった。中食を啓二たちにとらせたあと私は東京県人会総会に出席し、県政報告を行った。あとのレセプションで誰だか名は忘れたが、これ又皮肉発言をきいた。それは、近頃の県人会もようやく知事を安定的にみるようになりましね、以前は四面楚歌でしたからね、知事も成長されました、と。このような発言はあらずもがなである。一面的な見方でもある。四面楚歌とは何かと反論したかったが、そこは勝手にいわせておけというほかない。ここでも県人会婦人部の人達がスナップ写真ポーズを盛んに求めてきた。

5月19日(日)

只今ゴルフ入門中

城西ゴルフセンターに打ちっ放しに行った。平和台陸上競技場の今日の身障者体育大会は雨中決行で大変だったろう。身障者の完全参加・平等のスローガンはいいとしても、無理があつてはならぬし、逆におろそかにされてもいけない。しかし、今日の出場者の入場式の姿を見ていると、何だか無理を強いているように思えてならない。そう思つてはいけな

いだろうが、心の底ではそう思ってしまう。ともあれ身障者の自主意識を育て、その発露として今日のような体育大会が開かれるようになってほしいと願った次第であった。ところでゴルフ打球の練習についてだが、もう人目をしのぶ必要もあるまいが、正直いってまだ人目をばかすることなきにしもあらずだ。それにもう6~7回もクラブを握る日を迎える。1回に100~150球を打つ。体がこわばらないかといわれるが、それはない。しかし、150球打つと1時間余。かなりぐったりする。快い疲労感に見舞われる。少し無理をしているかも知れない。なかなかフォームが定まらないためか、うまく当たらない。とくにウッドになるとどうもうまくいかない。フォームを早く固定するようにならないと、いけないと思う。回をかさねるほかないのだろうが、体が固いせいもあるう。

5月20日（月）

県行革がよいよ動き出す

今日の会談で県行革に関する各部長との話し合いは農政部を除いてほぼ終わった。行革の真意を示せというのが過ぐる県議会での野党の質問に多く出る問題であった。彼等は行革とは人員削減と同意義と解し、効率化スクラップアンドビルドで新規ニーズにシフトがえすることだということ、それは当然だし、毎年なすべきで特に行革という必要はないとまでいいきる。人員削減を明確にできなければ理念なきニセ行革だという。私たちはさきに、人員削減だけを行革というのはニセ行革だといってきたのだが野党は真反対のもののいい方をする。県民にも野党的考えをうえつけられている人が少くない。そこでこうした感情を幾分でも満足させなければ県行政が議会のあおりをうけて混乱するだろうということで人員削減は不可避と私はいいつづけてきた。各部長には自分のところの削減数は明示できないだろうから、他の部分は自主性により行革案を練るべきだが、人員削減については各部一律ではなく、知事の方から各部毎に数字を案として示すから消化に協力してほしいとっておくことにしている。職組対応が山場になるので、その点は社会党県議とくに林幹事長に万事よろしく依頼することにして進めたい。

5月21日（火）

減債ということについて

太宰府の年金保養センターで夕方から財政問題について勉強会を行った。佐々木補佐と四方財政課長、力丸総務部次長がメンバーだった。県財政の見とおしは依然よくない。財調金の取崩しがなお100億円は必要のようだ。経済活動が活性化しないと、必要経費が伸びるからである。もっと大きな原因は、中央政府が借金財政の基調で、地方にもそれを強要し、公債償還期がきたため、公債費が大幅に伸びているためである。この体質はなおらない。公債は諸経費のうち最大シェアを占めるに至っている。私は2月議会で問題になった減債基金の積立てについて、そもそもこのような情勢の中で減債ということができるの

かねと財政課長に問うてみたが、要領よい返事がえられなかった。県議はわかっているのかねときいてみたが、わかっているとは思えない、常識の域を出ないのではないかとのこと。アメリカでも日本でも国債はどんどんふえている。その幾分かを地方につけまわしているにすぎない。公債というものには償還困難という宿命があるのではないか。償還できるかの如くいうのはいつわりではないか。一時糊塗口実でないか。

5 月 22 日 (水)

増税の必要な時が来ている

福田タケオ蔵、同首相が、石油ショックをのりきるためと称して国や県の借金財政の雪だるま方式をはじめた。そして、その矛盾からのがれるために、土光臨調が「増税なき財政再建」などと称して行革というシワ寄せ方式を考え出し、中曽根内閣がこれを推進しているのがここ数年の財政の特徴なのである。国債 140 兆円、地方債 50 兆円にふくれ上った今日、13 兆円というその利子は、一体誰の収入になるのか考えてみるとおそろしいことではないだろうか。この利子が投資先が見つからねば国外に逃避して高利を探すだろう。アメリカの高金利がその場になっている。生産なき利殖が国の体質の一部となり、償還の見込みなき公債の膨張が財政の体質として組み込まれてしまっているのである。県の財政難は行政水準を切り下げるほか現実処理が困難となりつつある。減債基金の積立てというような恰好のよいことが論議されるほど悠長な時ではない。問題を少しでも緩和する方法はかねのあるところからの増税以外にない。土光臨調のよって立つ哲学を崩し去るしかない。土光は増税体制を準備するためにそういつているのだとの皮肉説もあるが、私はそうは思わない。増税なき増益が彼らのねらいなのだ。

5 月 23 日 (木)

県民の会の「グリーン 21C」の庁内配布について

自民の武藤が決算委員会で知事保留をし、それが今日になっているから知事は待機してくれという。結局は周囲から、前例のない決算委知事保留など止めよとの強い働きかけでやめることになったようだが、自民党は多数をもっているからどんなことでもできるかのように錯覚していて、これが 2 年たった今でもつづいている。しかもその内容が県民の会の機関紙「グリーン 21」の庁内配布を止めるよう知事が県民の会に強く要望せよという自民の意見に、知事がそうしますと答弁してほしいという意味の知事保留であった。自民党は団体活動というものに対する理解が全くない党で、そういうことを独立の団体に公的立場で公式の場で知事がそのような答弁をするかのように考えているところに根本の問題がある。気の毒なほどに、人の団結という民主主義の基本要因についての理解がない。県民の会は知事の支持母体だから知事がいえばよいという論法だが、知事はそのメンバーでもないし、役員でもない。どういう立場でビラをくばるなといえるのか。私的に県民の会



の役員のうちの知人に、そういうことがあったと話すことはできても知事が議会答弁でそれを OK することはできない。坊主にくけりゃケサまでというのかも知れぬが、その所の筋ぐらいは分ってほしい。

5月24日（金）

瓦林潔氏を病床に訪ねる

福大病院に九経連会長だった瓦林潔氏の病気見舞に行った。昨日会長は永倉三郎氏に交代したばかりで、いわば九州経済界のドン交代で、瓦林氏の時代は終わったわけ。九経連は代々九州電力の社長が襲っているようだ。もちろん最大の資本だから、この経済界トップに象徴される九州の財界は当然ながら、保守の牙城であって、「革新知事」には強く反撥している。訳があってではない。ものを考えずに衝動的にそうなのである。瓦林氏が亀井の五選出馬に反対したが果せず亀井敗北の責を負う立場に立った苦境も理解できなくはない。7階の病室で私は瓦林氏の手を握って健康回復のげきれいをした。すでに彼は財界のドンではなくて人間そのものになっていた。カネも名誉もいらない、健康が一番大切、現役中はあまりにも多くの役割を担いすぎた、という意味のことははっきりとした口調で彼は私に説いた。当然のことを行ったまでだろうが、彼が今の立場と状態でそういうところに意味がある。でも社会は、九州で九電社長 OB にそのような肩書や仕事を与える。否応なしにそうならざるをえない。知事にしても似たりよったりである。自分の健康は自分で管理する以外にないことがわかりながら、それが困難なような状況に追いこまれていく。残るは強い意思だけ。

5月25日（土）

県人会は何なのか

関西県人会に出席した。第1ビル内中華料理店畳の間だった。120人ほど出席したろうか。県人会というものが今もってどういうものなのか正体がかめない。福岡からは私のほか県では東京、大阪事務所長、佐々木補佐、岡本県会議長、福岡進藤市長、桑原助役、北九谷市長が出ており、参議院から遠藤が来た。東京の場合もそうだろうが大阪の場合も何十万人もの県人がいるだろうに、会員と称するもの、そして出席する人は百人ばかり。実業界の大物というよりは中堅どころの古参が実際世話役をし、東京又は大阪事務所が大いに事務的な世話をしている。大阪あたりは以前は全く亀井後援会のようなようだったが、今はその空気が薄くなったといわれるのだがどうだろう。推すべき人がいないのでこわれるかというところ。何とか人物が入れかわりながら県人会という体を保ちつづけている。東京にしても大なり小なり似ているらしい。年よりの懐旧の念で、郷土福岡のことをききたい語り合いたいとして集まるのはよいが、これが保守の政治土台として作用してきたし、それが当り前とされているなら困ったものだ。そういう空気があるから遠藤のような我田引水の保

守がりがりの祝辞がとび出すのだ。

5月26日（日）

後援会というものの考え方

昨日は晴久宅で兄弟中心の夕食会になった。市議の田中が一寸も後援会としての役を果たしてくれないとの九一の発言があった。その昨日、田中後援会が奥田八二をはげますツアーを企画して50人ほど福岡県庁に訪問、みゆきがこれに対応した。が、九一は田中を計算に入れるなという。秘書の大石はこれに対し、後援会が奥田票になるように福岡県人と連絡してくれることだけを考えて、田中は役に立たぬとの判断になるから、奥田の支持者が姫路にこうして固まっているということによいのではないかと発言した。私はこれに賛成した。福岡にいても輝国は心の支えにならない。むしろ敵がいる。佐方も禎子が快く受け入れてくれないので、みゆきが行きたがらないので章の家もわが出身でありながら、心の支えにならない。もっといえば、帰るところでない。そうしたら、ここの、この場だけが、私の心のふるさとなんだと私はいった。九一は吉田繁太郎ほか曾左の同窓生すら福岡県人の名簿をくれないと嘆くので、それをあてにするなど私はいった。票でなく、帰って話す所があればいいのだということなのである。小学校の同窓生も、中学校の同窓生も、刀出・打越の親類のグループも、みんな福岡で票を拾ってくれなくても後援会足りうるのだと思う。

5月27日（月）

記者たちと筑豊問題を語る

筑豊のマスコミ記者たちと、筑豊問題を語る会を筑豊ハイツで開催した。西日本新聞ほか9人が集った。この種の企画ははじめてのことだし、記者達はよろこんでくれた反面、かなり緊張していたようだ。会食をしているうちに気分もほぐれてきて、本音が出はじめたが、記者の目も私の見解と異なるところはないというのが結論である。誰かが血を出さないと片付く問題ではないという人がいたが誰かが血を出しても片付きそうにないというのも一致した見解のようだ。石炭産業撤収時の国の爾後処理に甘さがあったという点でも意見は一致した。「今なお国の責任」という現地の人達のいい方はすでに通用しないという点でも意見は一致していた。それではどうすればよいかという点になると、誰もが名案をもたないという点も共通していた。精神論ではどうにもならないのに、精神論に帰着する点も共通していた。ハレモノでなかったのに、年月がたつうちにハレモノになってしまったのである。暴力と詐欺と怠惰の背後にあるものはタダガネである。それは国が安易に流し込んだ石炭政策費の集積、蓄積である。どこかでこの悪循環を断ち切るしかない。ゼロから再出発すべきだろう。

5月28日（火）

社会党に必要な若い血

国際センターで社会党結成40周年レセプションが行われ中央からも石橋委員長も来て約2000人で祝宴をはった。岩崎隆次郎氏が司会、私の揮毫した萌の字をすり込んだ扇が配布され、宴会はアトラクションを含め6時から8時ごろまでつづいた。中央の幕には護憲平和の二文字がくっきりと刻まれていた。石橋委員長が40年になるその40年前のことを考えてみたくれと訴えた。日本の今日の繁栄はそうした社会党の頑張りがあったればこそともいった。私は乾杯音頭のあいさつの中で、このような伝統の血にこれからの若い者が好む新しい血が織りまぜられる必要があることを訴えた。そして委員長のいうニュー社会党が建設されることの必要にふれてみたわけだ。一般に社会党は老化している。どんどん若返らなくてはならない。そのためには若い人の血が必要である。問題は、どうすれば若返るか、若い血とは何かということである。そういうものが具体的实际的に、現実の実践の展開の中から求められなければ、抽象的一般的に存在するはずがない。社会党を支持する労働組合にしても、その現実処理の中で若い血を探し求めるのでなければならぬ。

5月29日（水）

出版物の初校はできたが……

昨日は福岡が、今日は東京が一日中雨だった。南九州は例年より三日早く梅雨入りという。しっかり降った今年だが、まだ降るのだろうか。赤坂御苑での園遊会だが雨の中、歩くのは極度にひかえた。今回は天皇の姿を見るだけで、話しかけられることもない位置にいた。今年も皇后陛下の姿はみられなかった。東京事務で協会の衣笠、八丁、中川の3人にしばし打合わせの時間がとれた。衣笠氏は例の日ソ交流の30人の団長として訪ソし、今日成田に着いたばかりで時差ボケの時間帯だ。八丁君らが東京事務所に来たのは、私と、出版物の打合わせのためで、6月1日に東京の出版社から福岡に来るといっているので、その設営を準備する必要ができた。彼がいうには今日初校を受取ったので、6月中に出版が可能になるかも知れない、県民の会が6月末に総会を開くというから、できればそれに間にあえばという。そうならば校正を急がなくてはいけない。本の名前、見出しのつけ方、県議会の野党の目など配慮が必要な課題がたくさんある。何千部印刷するかも考えてみなければならぬ。日程がぎっしりある上に、もう一つ大きな荷物がでてきた感じ。指の関節が痛む。

5月30日（木）

同和会の松尾会長

全日本同和会の会長松尾正信氏の経営する松信園にご本人を訪ねた。助信県議が一度行ってあいさつしてきてくれとしきりにいっているので今日夕方わざわざ時間をとった。今年になって2度目である。解放同盟に対立する自民党系の部落運動の指導者である。松岡県議も交

りがある。林県議もだろう。自民党の三原、浜中など、又麻生太郎、それに共産党の小沢和秋氏も関係浅からぬものがある。彼の応接室には大平元首相や田中角栄の書や写真が飾ってある。県知事選には今度は奥田を推すということを自民党の連中にも吹いてまわっているらしい。白島は危険であるし、腐い諸関係をもった事件で自分も反対だったが、事態があそこまで進むと後にひくこと自体が大問題をひきおこすから、前に進めてもらって知事に感謝しているともいっていた。この冬ゴルフクラブセットを託し、数日前はウィスキー(ナポレオン)1打を送付してきたし、今日は又マグロや牛肉の冷凍大塊を車に積み込ませた。私の方でこの種のものには処理できないし、個人的に受取るわけにもいかないので秘書室長に処理方法をまかせてしまうしかない。大きなことをするので心地が悪いわけ。われわれははるかにウブなのだ。

5月31日(金)

正副議長ポストをめぐる醜い争い駈引

臨時県議会の日。正副議長の選出その他の議会構成を決定するために今日1日が予定された。なかなか開かれず長時間知事室で待たされた。おかげで原稿の校正はできた。ふつうの常識をこえた県議会のあり方だが、大別して二つ問題がある。第一は正副議長はなぜ一年しかさせないのかである。立派な人が議長になるなら4年の任期全部やっていいのに、1年きりでタライまわしをする。それほどに、議員族は議長ポストに執念をもやす。権威や物的利益があるようで、それに群がるための取引。だから4年を4等分して少しでも多くの人にそのポストを分けようとする。汚いといえば汚いやり方である。第二はこれと似ているが、副議長のポスト争いである。議長は最大会派が取ることにほぼ異存はないようだが副議長ポストは最大会派の自民が独占したり、これを他の会派に譲ったりの駈引の材料にされる。過去1年は自民が2つを独占。今年は他会派に。知事選を目あてに譲歩するための駈引である。そのため、緑政連と民社は野合して一つの会派となり、第二の勢力を誇示。その中の民社出身石橋が副議長になった。そんな駈引で今日も深夜に及んだ。但し、一日で終わったのがとりえといえはいえる。

## MEMORANDUM

議員族の情報公開が必要

県議たちは何だか偉そうな口をきくが、さっさと議事をすすめて予定された時間どおりに議会を運営するなら、莫大な県費が節約できるのに、意識上、日当、旅費、手当かせぎがあるのではないかと疑われるようなダラダラ審議、ゾロゾロ出張をやる。審議が時間オーバーになるだけで、拘束される職員に苦痛を与え、残業手当など県費の浪費があっている。それを全く気にしない。議員が外国にゾロゾロ行って何の役に立つのかと疑問を持つ県民は少くない。なのに、議員はとくに外国に行きたがる。国内出張も勉強の効用はない

とはいわぬが、多すぎるし、長すぎる。その特権行使に気をつかう。民主主義とはカネのかかるものといわれるが、必要なものは仕方がないにしても、ここでいいたいのとは不可避でないものへの出費が多すぎるということだ。こういうカネを使って低い教養は少しは高くなるであろうが、それほど役に立ってもいないようだ。こういう事情があるのに、選挙民がそれをつまびらかにできないということが問題であろう。情報公開が議員たちの身边にも及べば、選挙民の判断もかなり違ってくるだろうし、議員の態度にも変化が期待できるのではないだろうか。議員は奉仕に徹するという考え方を導入していいのではないか。

6月1日（土）

九工大飯塚新学部誘致の遅れをめぐる三木発言

九工大の新学部飯塚市への誘致促進期成会総会がグランドホテルで開かれた。県議からは自民の三木、社会の岡松の地元二人が出席した。三木はひとりで発言し、会議を異色なものにした。誘致が長びいているのは知事が動かないからだ、県議会で私に噛みついた三木が、こんどは九工大に噛みついた。それは知事が動かないからだといった前言とは矛盾するはずなのに、それはおかまいなしだ。九工大が動かないからだというのだから、実際彼も文部省あたりに当たってみて、新学部誘致については九工大の内部になかなかまとまらぬ状況がつづいたということをも文部省から指摘されたためだろう。奥田が悪いという前言をここで暗に修正するかのようである。それならその前言が不用意発言だったということをも認めねばなるまい。公式記録に残っていることなのだから。いずれにせよ、何か意図が別にあつてこのような強い発言をするように思えてならない。大学の内部事情への理解が足りないということで井上順吉学長も三木発言には少々頭にくるものがあったようだ。それにしても九工大はやっとまとまりを見せてきた。

6月2日（日）

「県政ひとすじ」の輪郭ができた

昨日午後第一書林から山岸秀雄（代表取締役）が来福。私の出版物について、黒田荘で、初校を前に、書物の構成などに関し討論をした。八丁、東定の二人が来た。書物の名を論じたところで、「県政ひとすじ」にしようということになった。これは私が提案したものが採用されたのである。300ページをこすのではないかといわれる。今年のはじめからまずは座談会の形で意見を出し合ったのをテープにとり、それを東定君がおこし、八丁君が手を入れ、さらに私が手を入れて4月末にやっと出来上がったのが主体となって新規原稿とされ、それに私自身が補論的に加えたもの。それ以外はどこかで話したもの（県民大学、朝の放送など）の記録など既存の原稿、資料が加えられている。はじめは原稿の量が足りないと思われていたのに、かなり加わったので十分な量になった。県民党、県民総立ち、地

方自治論（地方自治の本質論）が主流をなしている。他に類をみないものができるのではないかと自負している。県議会の右翼自民党がこれを見てどう思うかということがまず念頭に浮ぶ。あげ足をとるだろうと思ったり、ざまみろと思ったりである。

6月3日（月）

官界で“上り”になった人たち

磯矢水産林務部長、長谷川建築部長らこんど県を去るので例のごとく稚加築で部長会が送別会をした。思うにまだ彼らは若い。この六月末には永井副知事も任期が来て県を去っていく。永井氏はまだ行く先も、これから探さねばならない。県では彼らは“上り”つめたわけで、これから第二の人生に入っていくわけだ。彼らの肩書きをもってすれば、早めの停年とひきかえに、外郭団体などあれこれ無理をいって拾ってもらふポストはないわけではない。それが官界のならわしになっている。いずれにしる、この若さでと私には思える。しかし、一万人もいる職場で、下からポストのあくのを待っている人がひしめいている。どんどん任命更新という手を使わないと糞詰りになってしまう。士気が沈滞するという結果になる。そういうことで、長い間の知恵で外郭団体というものができ、そこに天下りすることになっていく。そのシステムは官界創造物といえよう。外郭団体では、県と市が分け合う場合もある。県がカネを出している場合、両方が出している場合等々いろいろある。天下られる方はそれなりの辛抱をしてポストをあけているようだ。天下りのなれの果ては知らないが。

6月4日（火）

身辺雑記

今日は大変ねむい一日だった。近頃睡眠不足がつづいている。時間が足りぬというよりは、眠れないというのが正確だろう。ひとが疲れた顔にみえるという。熟睡しないのだ。理由がわからないので困る。会議中にうとうとしてうわの空ということもある。ひとが元気ですかと問うので、まあまあと答えることが多い。病気ではないがさすがにしくもない。病気ならそれ相応の手当を開始すればたいがいのは治療できるだろうから今のところ大丈夫と思うから、まあまあと答えるのである。トシのせいだろうかと思うが、誰しも元気ではつらつとしているようにみえる。生活に時間のゆとりがあって、床の中の遊び時間を苦にしないでぼんやりすごす気持があつたらよいのではないかと思う。サツキの時期は盛りをすぎ、クジャクサボテンが見事に咲いたので玄関に置いて飾った。周辺が急に明るくみえる。温度も上がったので近頃は書斎で机に向かう時間が多い。自然机辺の整理はできて自分ながらすがすがしい。書籍をおくスペースが今の2倍は欲しい。どんどん新刊本をひとからいただくので、それだけでも最近のものを一カ所に一覧できるようにしたいのに、すべて積んでおくということになっている。

6月5日（水）

生活保護行政の姿勢に問題がある

小倉での新北九州空港期成会の帰途、今日は早目に仕事が終わる予定だったので昨日から連絡の上、箱崎の北筑前福祉事務所に立寄った。保護率 33%という高さ、この数年間、上昇中だった。がこの数ヶ月間減り気味。それは生活保護を受けながら自動車を保有しているケースにつき指導強化中との理由があげられている。福岡市でも近頃上昇中だが、近頃のケースは昔のような炭鉱閉山ではなく、母子世帯としての新傾向と指摘されている。夫婦別れがかんたんに行われ、生活保護で食っていこうとのことであり、その知恵をつける者が背後にあるともいう。こんなの、なんとかならないかと思うが、かんたんではない。福祉事務所がしっかりしてくれるしかない。職員の士気がもう一つたるんでいるようにも思える。組織的に職員を働かせる工夫が上の者に欠けているし、下の者も上の者に意見をいう態度に欠けているように思える。保護を受ける側にも支給する側にも、経費の使用についてのきびしさが足りない。私は慈母のように、やさしさの中にきびしさがなくてはならない旨訓示した。ケース管理がいい加減で保護開始、支給の指導、保護打ち切りの各段階におけるきびしさがどうもいい加減にみえる。

6月6日（木）

公金にたかっていく構造的腐敗

北九州で病院グループが看護婦、医師の水増し帳簿を何年も利用して医療保険費を詐取（50億円といわれる額）していたことが暴露され、この何日か連日報道の大きな話題となっているが、県の監督責任を問われる一方、県職員、九大など各大学の医師の病院グループとの癒着が当局によって明るみに出され、問題がひろがりつつある。筑豊に鉱害、失対、生活保護の腐敗があることは、この二年間かなり問題にされ、そのような精神風土が矯正されなければ痛感されている矢先、それが北九州に、病院にというように飛び火しているのである。あぶくガネというか振替所得、政府資金に権力、行政を媒介として寄りたかる構造が一般の風をなしているといつてよい。筑豊に限らず濃淡の差はあっても北九州にも、そして福岡県全域に、そして、おそらく全国的に、そうしたたかり詐取の風が培養されているのが今日の一つの特徴だろうか。自民党政治の一側面といえはいすぎかも知れぬが、権力と利益がからみ合う構造の成熟については、自民党政治のあり方に一半の責任なしとしない。カネでひとを釣るやり方、しかも国民の税金でそれがなされていることに気がつかない仕組みがいたるところにできているわけだ。

6月7日（金）

篠田が議運理事長とはおそれ入る

今日の野党懇で新たに議運理事長になった篠田栄太郎が、執行部は、今後要求された資料

提出をもっと早くしてくれと発言した。おそいから議事がスムーズに流れず1日につき県費200万円も無駄づかいになるといわれることになる。顧みて他をいうという言葉があるが、この篠田発言はその好例といえる。自民党は審議の中で突如不意打ちの資料要求をする。本来的な審議とさほど関係のない例えば対話行政の知事発言を全部資料として出せといいはじめ、それが出るまで審議ストップとなる。それを作るのに全庁職員におそくまで残業で手伝ってもらっても2日はかかる。そんな資料はなくてもよいし、必要としても資料ができるまでその問題は棚上げにして他項目に入れればよいのに、出来るまで審議ストップにする。第一、知事いじめ、第二に事務局いじめの悪意みえみえであり、第三に、議事進行を故意に遅延させる作戦で委員長が裁断しているに違いないのである。そうした結果生ずる県費の増嵩を議員たちのためになったといわず、執行部側の資料提出がおそいからだという。いんねんづけともいえる。篠田のようなのが自民党の幹部となり、又議会運営の要となるのだから、こっちも、かなわんといいたい。

6月8日(土)

はじめてゴルフ場に出た日に書いた

今日のはじめてゴルフ場なるものに出た。なかなか思うようにとばないといたら付いていた大石君が思い余るからいけないんですよという。場になれるように回数をこなすしかないと思う。キャディのおばさんたちが、奥田知事がといて集まり、握手を求めてきた。どこへ行ってもこうなるから気がひけるわけだ。——生の松原ショートコースでの話。中沢貞治先生から雑誌薔薇に手紙を入れて送ってきた。雑誌には先生の小学校の時の先生のこと書いてあった。手紙には最近彼の出身城大予科時代の古い友人と懇親会をもったことがあれこれのべられていた。中村周さんもその一人らしい。先月猪城博文氏のヨーロッパ旅行記(単行本)をペラペラ繰ってよんだのだが、この先生は特別としても中沢先生もなかなか記憶が達者であるのに驚く。猪城氏はこまかいメモをたんねんに取るのであろうか、実にこまかく状況描写をする人だ。メモだけではない。知識もまた豊富、筆もよく走り周到である。こういうのを文才というのであろうか。私の場合、万事あまりにも忘れっぽく、日記は毎日書いているにしても中味は実に散漫である。それだけの才能というのであろう。散漫ながらともかく毎日何かを書くというだけのことである。

6月9日(日)

環境週間行事、海岸ゴミ拾い

新宮及び古賀海岸に「ゴミ拾い」に出た。海岸侵蝕と松食虫駆除問題で住民の住から、知事に直接陳情があるかも知れぬということだったが実際はなかった。海中砂採取による侵蝕防止と、スミチオン撒布による公害反対である。後者は医学部助手が指導している住民運動だ。白砂青松の海岸がいずれにせよ破壊されているので食い止めねばならない。新宮



では離岸堤の工事がおこなわれ、侵蝕は小康状態のようだった。古賀の松食虫の被害は相当なものを見た。他方海岸のゴミ公害も小さくはない。この辺一帯は海水浴に適しているが、空缶・ビニール袋・縄その他拾えばきりが無い程にある。海岸に来た人が残っていたというよりは波に打上げられた物がほとんどを占めているだろう。それは川にゴミを流し海に流入し、それが漂流して他地区に波のとき打上げられるのである。家庭から出たと思われるものが多い。生活廃棄物である。環境週間と銘打って町民が何千人と出てきてゴミ拾いするのだが、年に一度ではなく、3度4度とやればいだろう。日曜日の子供連れ、子供の教育にもなる。

6月10日（月）

日本の仏像のことなど考える

登庁の途次車の中で猪城博之さんの「ヨーロッパ秋の旅」を何ページか読んだ。彼の描写が綿密なのと博学なのに驚かされる。今日読んだ部分に、アテネの美術館を訪ねたくだりが出てくる。その中で、ギリシアの彫刻にふれ、日本のそれとの違いを書いたくだりがある。ギリシアでは、それはヨーロッパの淵源ともいえるが、万事芸術も合理性があり又人間的だ。それに比べると日本のは情緒的である。向うは動的だが、こちらは静的である。そういう違いは肉食生活と菜食生活の風土の差からくるのかも知れないが、こういう比較文化論をやると面白いことだと考えてみた。同じく宗教の分野でもキリスト教者の礼拝する十字架を背負ったイエスと、仏教徒の礼拝する蓮花の上に正座する釈尊とはまるで違う。向うは大へん現実的で動があり、こちらは彼岸的で静しかない。そういえば今年の夏福岡美術館にパキスタンのガンダーラ美術展が来た時に案内されて、向うの仏像の紀元的なものをみたのだが、その動的な、にぎにぎしさに異様な感じをもったのを思い出す。ギリシアもオリエントに紀元をもつというが、同じオリエントのものが東の極日本にくると日本的になるのだろう。

6月11日（火）

田川の松下は筑豊風土病にかかっているか

筑豊問題につき、私の「恥部」発言についてJCが、又「精神風土」発言につき筑豊解同の松下が問題化しようとしているとのこと。又今日帰宅してみると、具島先生から本を送って来て、真宗の下川という僧侶が私の言動が仏の教えに反しているから読めということで、届けて来た書物だと書いてあった。いずれも頭にくる話である。JCや僧侶は割合にあっさりしているが、頭に残るのは松下の態度。14日に予定される解同の「対県交渉」で私がこのことにつき弁解せねばならないという。解同には手なれた同対局長の今泉氏でさえ、精神風土発言は問題だという。松下は切札のように「筑豊差別発言」として攻めているらしい。私は松下のいうように、筑豊すべてが問題になる精神状況だというはずはないのに、

松下は私を敵視するが故に全員だめというように言ったと私の発言を解釈するのだ。これが私の主張だが、今泉は筑豊のすべてがそうだと受けとられても仕方がないと松下を弁護する。私は怒って、そういうように曲げて受けとるのなら、筑豊問題に取り組むのはもう止めだと捨てセリフを吐いた。大石や佐々木ら秘書連中は、怒ってはダメ、筑豊問題を放棄できないのだからという。しかし松下のようにいうなら、私はやる気をなくしてしまう。

6月12日(水)

福祉事務所の総立ちを思う

3日つづけて各福祉事務所のケースワーカーたち4人ずつ12人宛の懇談会を県庁で開催し、今日で3回目を終えた。みんなの表情は明るくてよい。が、福祉にやられたらもうおしまいという気持ちをもつ人がかなりいるらしい。人事交流をどんどんやらねばなるまい。もっとも、専門職としてのプライドも維持してもらわねばならないから、経験をつんでもらうことも必要。未熟な若い人については、練達の人を組み合わせること。又一个の事務所が機動的に協力して動けるように執務体制を建て直す必要があるのではないかとの感想をもった。又ケースワーカーが生活保護という手段をもって一つのケースを指導するには限度があり、他の手段を併用する場合、役所の横の連絡が起ってくるがそのあたりうまくいってないようだ。若妻の離婚、覚醒剤乱用者、関西方面からの出戻り、サラ金被害者、二、三世保護受給の精神的退廃者、暴力団がらみの受給者等々、ひとすじ縄ではいかないケースを処理するには職場の全力が注がねばならないだろう。事務所の体制の刷新が急務のように思えてならない。

6月13日(木)

いつまで権利か、国の責任か

昨日は健康と生活を守る会が知事に合わせよということで、庁議室で接見した。今日は筑豊の三福祉事務所を歴訪し、職員に訓示してまわった。この頃「福祉」づいてる。憲法25条の権利ということをごだけきいてきたかわからない。権利権利といっているうちに権利がひとり歩きするまでになったとさえいえる昨今である。長い間、権利意識の成長のために、多くの論者と運動家が努力してきた。他方高度成長の中で政権党は譲歩に譲歩を重ね、権利意識を腐敗にまで徒長させた。筑豊問題は今やもう石炭の後遺症ではないまでになったと思われる。産炭地という言葉がふりまく魔力は自己破滅の力になってきた。産炭六法の延長は田中六助先生の努力のおかげと筑豊の人達は思っているだろうが、感謝に値する結果かどうか自己反省する必要があるのではないか。生活保護を受ける理由に、仕事がないといえれば十分であるかのごとく考えるケースワーカーがいる。我も我もと生活保護をうける風潮がありはしないか。仕事のないことを人のせいにする。また他方、仕事を作るには工場誘致をと短絡する。県が悪い国が悪い、県がせよ国がせよといっているうち

に自己破滅の日が近づいている。

6月14日（金）

「精神的風土」発言は勇気ある発言といわれる

はかた会館での道路建設業協会総会・パーティ出席後、大石君のすすめで、帰路別府橋こえたすぐの左側にある焼鳥屋に寄り、藤江君も呼んでしばらく気焰をあげたのであった。大石君は私の「精神的風土」発言につき、今日の解同交渉で逃げの姿勢で事をすませたが、知事のこの発言は亀井知事ならできなかった勇気ある真実を衝く発言として感服しているといった。ふつうの「革新」知事ならいえないし、また保守でも言わないだろうと彼はいう。亀井知事は、いいたくてもヤケドしては損だ、財源ある限り投げ与えておけば事なくおさまると考えたに違いない——私はそれで糊塗することはできない。だから、「精神的風土」発言が問題なら、それはわかってもらわねばならぬし、それが嫌なら、筑豊は自滅してもらうしかないというのが私の考えである。ひとは嫌がるかも知れないが、これは敢えて問題にするしかない。大石君はそのような知事を見直したと、今日はほめてくれた。ただこれは大事業を提起するほかない。県民総立ち論は、ケースワーカーにも福祉事務所々長にも、生保家庭にも解同にもあてはまる檄でなければならない。この音頭がいつまでつづくか、自分ながら不安になってきている。

6月15日（土）

“たかりの構造、

“あと山、での記者団との懇親会の席でも某記者は先だってからの「精神的風土」云々発言について、奥田知事しかいえないし、できぬことだからがんばってほしい、声援するとの対話シーンがあった。記者たちははじめのつく何かをやってほしいし、県民にアピールして価値あり県民の注目をひくものであれば、よろこんで記事にするとのことである。北九州病院グループの問題にしても然りであり、福祉の自動車保有生活保護適正化にその後の報告がないのが残念だとさえいつていた。記者たちにも正義の味方という意識があるわけだ。今朝、風土という言葉を辞典でひいてみたりしたが、土地の状況、即ち気候、地味などという平板な解釈しかでてないが、たいていの人はこの指摘をよく理解してくれているようだ。“たかりの構造、という表現で批判する人がある。戦後の民主主義の発展期がすぎ、高度成長期に至って、支配階級と支配政党が政治的妥協の産物として、このような風土の形成を助長したといえる。同じ産炭地でも全国で筑豊だけに“たかりの構造、が助長されたところに問題がある。筑豊が戦前から特異な産炭地となり、周辺に比して大きすぎたという要因が加わったためであろう。

6月16日(日)

体調について

ゴルフの本コースにはじめて出て気分のいい一日だった。しかし、心配なのはやはり体調。近頃もう半年ばかり睡眠薬の使用であるが、それでも毎日が十分に眠った感じがしない。糖尿の方は相かわらず。肝臓の方は最近の定期検診では、1年前とくらべて平常に戻っているとのことである。右小指が先の関節に赤ぼったいハレが小さくできて、整形外科の診断ではリウマチではないが、とって軟膏をもらって塗っているが、依然圧すると痛い。左の人差指も若干同じ傾向にある。又インキンのように、股の奥にかゆみがあって軟膏を使っている。その他皮膚の皮、とくに足、手に水虫よりの皮むけが生ずる。足の指についてはこの頃異常はなくなったようだ。それから目。何年も前に目やにがついたように感じ、心配になって浜の町病院でみてもらったら、糖尿ということだった。その後、最近少し異常を感じ済生会病院でみてもらったが糖尿との関係はないとって目薬だけはくれた。すっきりしない目ではある。どことなく異常があると思うのである。体重55kg、選挙当時とくらべると6kgほどふえている。ゴルフ場での感じは足は軽くて調子は悪くない。何とか当分やっつけていけそうだ。

6月17日(月)

病院の問題について

梅雨というのに晴れの日がつづき、冷房が入っている場所の方が気持がよい。降らないが、先立ってかなり降っているので田植その他心配はないようだ。山際はもう田植が終わっている。機械うえだから、昔日のような田植風景は見当らない。機械で植え残った部分部分を補っている姿がみられる程度だ。北九州市のアドレス不詳の品川友子という看護婦経験のある女性から知事あての手紙が来た。北九州病院グループの問題が大学医学部にも波及してさわぎが拡大している今日、彼女は、この問題の根の深さ、幅の広さについて訴えている。一方に古い法律の統制があり、他方で医療競争が激化する現在、医療費の水増請求はどこにでもある一般現象で北九州病院グループに限られたものではないと彼女はいう。昨日の新聞には病院の倒産が多いという記事が報道された。倒産する病院は競争での敗者か、不正請求をしないまじめな病院か、機械貧乏といわれる内容をふくむ放漫経営かのいずれかであろう。姫高会の野村氏が「なぜ医者だけがいじめられるのか」といつていたのを思い出す。

6月18日(火)

筑豊の精神は絶望に近い

先日の部落解放同盟の田川の「精神的風土」発言に対すると同様、今日のJC田川は「恥部」発言に抗議にやってきた。いずれにせよ多く弁明する気はないが、差別発言だの、侮辱発

言だのとの抗議であるが、私が頭にくるのは、抗議すればなんとかなると思うその根性である。筑豊問題に取り組もうとすると、このような発言に含意される批判的態度が必要だと思うのである。だが、他方で、筑豊にもいい面がある、よい者もいるのに、筑豊みんなが悪いようにいわれると反撥したくなるとのいい分はある。今日も JC の諸君は筑豊のいい面を伸ばすべく努力をしているのに知事が「恥部」発言をしたから抗議するのだというのである。今の筑豊に対し、よい面を強調して対応できる局面とみるか、悪い面を強調して対応すべき局面とみるか、いずれかを選ぶとすればむしろ后者である。もちろん両方が必要だが、後者を選ぶというのは、筑豊には自浄作用が期待できない状況があると思うからである。この二つの抗議そのものの中に、外からの批判を嫌い、内からの自浄に熱のないことが示されていて、絶望！

6月19日（水）

五ヶ山渇水ダム建設は高価につきそうだ

五ヶ山渇水ダム建設に対する協力要請のため、福岡市助役（山本氏）、県土木・企画両部長ら一行で佐賀県知事、東脊振村長、那珂川町長を訪問した。福岡・佐賀両県にまたがる水没部落が生じ、貯水量 4000 万トン工事費 1000 億円という規模の大きさと、近くの南畑ダムの 8 倍という。渇水ダムだから、渇水時にしか放流しないので、大変割高につく。いわばぜいたくな事業なのである。3ヶ所の事務所をまわって感ずることは、一様に補償はもちろん、何か地元の役に立つ“お土産”をもってきてくれないかとの態度であった。気持はわかるし、そういう口ぶりになるのは当然だろうが、どうもこうしたことが、政治の体質になってしまっているという事実にいささかがつくりさせられた。東脊振では福岡だけが人口増で水をくれというのは納得できない、住宅をこちらにもという議員がいたようだ。その気持はわかるが、さりとてどうするかである。国道 385 号を早く立派に完成し福岡に出やすくしてほしいという具体的要望もあった。いずれにしても高価な水仕事になるようだ。

6月20日（木）

猪城さんの「ヨーロッパ・秋の旅」を読む

何日かかったろうか、猪城さんの「ヨーロッパ・秋の旅」をやっと読み終えた。哲学、倫理学、美学など各分野に精通していて、その上敬虔なキリスト教徒ときている。又この描写のこまやかさからみて、すごくたんねんにメモをしたろうし、頭、記憶力がすごくよく、切れ味がある。2ヶ月間のヨーロッパ大陸の旅日記を 300 余ページにわたって書いているのだからよくも書けたものだ。60日間だから1日分に按分すると 5 ページになる。儒学、日本文学などについてもいたるところに出てくるから驚きである。「後記」にも書いてある通り、「私の五十年」として発表されたものの“続き”の意味のもの、そして「記録と芸術」

誌に一部連載されもしたものである。1976年秋の彼の経験だから、今から9年ほど前のことになる。彼の綴ったものを私も大学にいた頃、折々小編の形で贈呈され、（コピーで）読んで、そのこまやかな描写に感心し、彼にもその感想をのべたりしたことがあった。私にはわからない部分がある。さすが哲学者だと思う。又彼がドイツ語など曲がりなりにも駆使してヨーロッパ大陸ひとり歩きした能力にも敬意を表したいと思う。

6月21日（金）

代表質問はじまる

前半の答弁は元気がなくみんな心配だったが、後半は声に張りも出てよかったと、今日の本会議代表質問に対しての私の答弁に違いがあるとの指摘があった。前半の井出善来（自民）には嫌気が出て、自然にそうなのであろう。後半の古賀次夫（緑政）には好意がもてたとはいえないものだったが、何となく、井出は好かん度合が大きい。高岡新が前列の席でギイギイわめいていたので、私は睨んでやった。どうして自民にはこうも好かん奴が多いのだろうか。何が何でも知事に咬みついたら手柄のように思っている。人を呪わば穴二つのことわざどおり、井出も自分で墓穴を掘るたぐいだった。県産品愛用というのが掛声だけとくってかかるが、いわんとするのは農業振興策であって愛用運動ではない。こういう取り違いを平気で井出はやったのである。自民は一般に産業振興をやれというか、君が代日の丸で教組攻撃をやるか、それ以外に県政への理想などもってはいない。日の丸は愛国心 教育に不可欠との自説をはき、教委にその答弁をさせて満足している。緑政の古賀も似たりよったりだが、ファッションをファッションといいまちがえなど愛嬌の部類に入る発言が多い人だ。

6月22日（土）

国鉄問題は新しい岐路に立っている

国鉄総裁の仁杉氏を杉浦氏に突如更迭した中曾根首相、分割民営化を是非推進しようというのであろう。北海道、本州、四国、九州の四島ごとに分割すると同時に新幹線だけは別途中央でにぎろうという。どういう経理になるのか、本州以外の各島がどうしてやっていけるのか、統一してやれないものを分割してやれるのか、さっぱり意図がつかめない。今日総評社会党ブロックで大手門会館大ホールでこの方針に批判的意見を集約しようというシンポジウムが行われた。あいさつに立った私は、①交通弱者を切捨てる、②負担増をどう受けとめるか、③安全交通をどう確保するか、という三点からこの問題を考えてほしいという意味のことを述べた。安全交通というのは、モータリゼーションの基盤にある石油が、国際エネルギーという観点から、不安材料だという意味で、国鉄がなくなればみんなが困ることになるが、それでいいだろうか。国防的意味がある、それは米問題と同じという意味である。各線ごとに運賃を引上げて経営を成り立たせるということになれば負担から

逃れる国民は経営破綻を甘受することになるだろう。

6月23日(日)

手の指の痛むところ



6月24日(月)

[このページ6月25日分]

大雨が降る

入梅後ずっと降らなかったのに、ここ三日ほど降りつづき、今日は昨夜からじゃんじゃん降りつづいた。対馬など770ミリ、福岡でも180ミリ降ったと今朝発表された。1時間50ミリクラスがざらにあるらしい。人身被害はない模様だが、ガケ崩れ、田畑冠水、床下、床上浸水家屋などであれこれ被害が出ている。今日の一般質問では、雨水利用の質問が期せずして出た。公共建物の雨水利用、下水に流れ込む雨水の利用などが考えられるが、誰もが考えることは同じで、流れてしまうのは勿体ないという気になる。日照りがつづき水不足を経験すると、発想はそうなる。質問者は国技館の例をもち出しもした。気持はわかるが、そのようにするにはコストがかなりかかる。水道の水が出るものと仮定すれば、雨

水利用施設をするなど、建築コストはふやす必要はないわけで、なるべくしてなかなか実行しにくい問題である。ほんとうにこの雨で流れる水を見ると、この水は何とか保存しておけないものかと思うのも当然である。道の両脇は側溝の上を川のごとく流れ、下水溝もあふれ出る状況である。恐らく各地の雨がそのダムを満水にしていることであろう。

6月25日(火)

[このページ6月26日]

藤田茂令のアホ

自民の藤田が今日の一般質問のトップバッター。「お経読み」とみずからいう口調で、しかもにくにくしげにいやみたらたらに知事攻撃をする。八幡製鉄の研究部門が撤退し、従業員9000人体制になると、下請は火が消えたようになって北九はさびれる。知事はどう対応するのか、何にもしないではないかという論調。対話行政など利のないことをせず、利益になることをやれという論法。そして、再質問、再々質問に立つ。私の答弁中、前列のスピッツ、高岡新がキャンキャン目をむきながら野次るので、私は「やっとります」を4回、声を荒立ててくりかえした。藤田はだまりこんだが、あとで民社の豊沢が知事発言は不穏当だといひ出して、午後の審議は3時間近くその收拾のためおくれた。結局、議運で知事に議長が「答弁は感情的にならないこと、的確な答弁になること」と注文をつけ、知事もこれを了承するというシナリオで事は終わった。藤田が立つと空しい時間つぶしに終るのが常。他の人はもっと中味のある質問をし、答弁もしてよかったとの満足感があるのに、藤田には腹立ちだけが残る。心賤しい人だと思う。

6月26日(水)

[このページ6月27日の分]

自民も「たかりの構造」の中で太っている

昨日藤田茂令が、知事は総立ちというような利益にならんことに力を入れているが、北九の倒産社救済のような利益につながることをもっとやれといったのには驚いた。この人地方自治ということが全くわかってないみたい。同じ高田新の今日の質問、大牟田の浮揚不況対策を強調するが、ここは三井ががんばっていてどうしようもない所、有明漁連も港の再開には障害になっている。大石は圃場整備を主張するが農民自身がいろいろ邪魔になっていることを知った上でのいやがらせ発言である。筑豊の生活保護をめぐる不祥事、鉾害屋の存在、北九州病院グループの医療費の水増し請求、どれをみても自民党の集票政策、つまり、税金を使って相手にタダガネをやれる仕組みで票を集める仕掛けに、悪賢い者が便乗しているのだが、農業にしる、地域開発にしる、これまたひとの税金で自分達がもうけようとする政治構造に便乗するという点では似たり寄ったりではないだろうか。企業誘致に便宜を与えよという自民の主張も同じ。要するに自民党は県議団に至るまでこういう



発想で固まっており地方自治だの民主主義だの基本的な人権だの、全く考えない集団としか思えない。

6月27日（木）

〔このページ6月28日の分〕

県勢活力の根源

ステーションプラザで開かれていた県中小企業団地協議会総会後の懇親会に出席しあいさつをのべ、酒肴の席に20分ほどいて対話をかわしたが、団地代表の者ばかりで知事出席につき大へんよろこんでくれた。ここはその直前に出席した産炭地域振興促進協議会の雰囲気とは全く対照的に感じられた。後者はブスツとしていて、知事をむしろ仇に思っている。何もしてくれないじゃないかといったげだ。前者は県が少しばかりの高度化資金を予算化したことについて、有難うと感謝の念をもって見る。自分たちで汗水流して働き食いぶちをかせいでいるのである。後者は棚ボタばかり願っていて、いくら注ぎ込んでも不平が去らない。北九も大牟田もだ。県議がそれを代表して叫ぶ。とくに自民がそのチャンピオンである。中小企業のここに集った人たちはそれにくらべると、かなりあっさりしている。自分で食っていこうとの努力が平素ある。こうした人達の努力に援助し、むくわれるような県政こそが望ましいと考える。それにしても、中小企業団地が多いのにはびっくりした。県下あまねく存在している。これらこそが「活力」の根源であると私はあいさつに込めた。

6月28日（金）

〔このページ6月24日の分〕

永井滋輔副知事の任期満了

6月24日の分が書かれてないのに、次々とページを埋めていて今日気づいた。24日は月曜、代表質問の二日目。平穩無事に流れていった。しかし執行部は、永井副知事後任人事をスムーズに運ぶため、議会工作に心を砕いていて、各党派代表との懇親会もていねいにくりかえし、なるべく異論のでないように努力している。今回は自治省にたのむのが無難というねらいを定めてずっと前から中央に向けての折衝もそれを貫いていた。自治省の石原次官は、福岡県が大事な県であるとの認識のもとに、地方自治の運営に精通した人を物色してくれている。若すぎてもいけないとなると、福岡県の出身者でなくてもいいということになっているようだ。永井氏はわれわれの留任要請を固辞しており、来る6月28日に任期満了。固辞の理由は「もう疲れた」というだけであるが「二君にまみえず」の気持があって、亀井時代の任用だけに、あとの2年余は気持の整理ができなかつただけではなく、激動の中に身を沈めざるをえぬつらさもあつたのであろう。あとは信用保証協会の理事長に専任として就任することで了解がとりつけられつつある。

6月29日(土)

玄羊展

第14回の玄羊展が市美術館で25日から30日まで開かれた。今回は県文化会館が修築中で、市のギャラリーを使用したらしい。出品したらという誘いがあったので、何とはなしに書いて出したのだった。知事になって以後は私は顧問という位置にまつり上げられ、最初は扁額で「一波万波」を書き、それは今うちの座敷にかけている。去年は平凡な漢詩、今年易経から「剛中而柔外説以利貞是順乎天應乎人」というのを書いた。「作品の題にふさわしい強弱の調子を表現されていて秀作」と評に表現されているが半分はお世辞だろう。今晚の玄羊会懇親会のあいさつに立たされ、「自作の前に立つと顔をそむけなくなる」という感想をいったのだが、それでも今年のは我ながらまあまあという出来ではなかったろうか。今日はひるすぎまで私的時間があり、9月に長崎で行われる総領事館開設記念孔子廟書展への出品作を書きあげて岸本先生に見てもらおうべく手渡した。中味は中庸からのもので、「極高明而道中庸」という半切ものである。かんたんなのがよいと思ったし、今回と同様自分の気持によく合う。

6月30日(日)

第二回県民のつどい

午後一時から駅裏のスターレーンで第2回県民のつどいが開かれた。県内産品の即売は昨年どおりだが、今年近々発行する「県政ひとすじ」(第一書林刊)の前宣伝が行われた。県民の会代表は具島さんから内田一郎さんに代わった。「折返し」が意識され、第二期奥田県政を狙うという意味でも昨年とは違っていた。会衆は昨年より500人ほど多かったのではないかと。控室をのぞいてみたら、婦人連中がいて、知事は横にいる奥さんのこともあいさつの時にふれないといけませんよといわれ、そうです尤もです反省しますと答えておいた。テーブル一つ一つまわって参加した人達と握手を交わしたし、県産品で開店してくれた人達にもあいさつをしてまわった。知事は気さくで話しよいいという声が一般的になりつつあるようだ。私が病気がなく元気ですということをあいさつに入れたので、みんなそのことをよろこんでくれたようだ。日曜のためか子連れ若いカップルが少なかった。あまりかわりばえのしない「革新県政」だが、それでも全く違う空気ができてきたという意見が多い。どことなく全然ちがってきたといえるならそれで満足せねばなるまい。

## MEMORANDUM

一寸だけのひまをみて、知事室の窓から外をながめ、ぼんやりしていることがある。茶を運んで来た藤本君が、外をながめるとき知事は何を主に見るかを問うたことがあった。私は空港ですよと答えた。ほんとうはそうであったりなかったり。でもやっぱり空港の飛行機の発着が一番目につくのはたしか。志免の炭鉱のボタ山たたずまいを見ることもあるし、

新幹線の列車のゆききが目にとまることも少くない。飛行機にしろ列車にしろ、動きは1～2分間で、視界から消えてしまう。それに比べ鈍く、動いているのかどうかわからぬほどのものが在来線吉塚駅を見るとき列車である。全く停車したままではないかと思われる場合が少くない。これでは国鉄の経営がそのままあらわされているようである。日蓮の銅像の黄緑と黒のまだらに汚れたカブよいたたずまいがすぐ近くに、その右手の方に亀山上皇の敵国降伏像がみえる。円形を小さくしながら積み上げたこの公園のシンボル像は日蓮が動的なのに対照的に静的に感じられるし、銅像を取り巻くツツジが開花の5～6月は色とりどりですばらしく美しい。銅像のところまで何段かのかなり多い石段があって、青年が運動の目的で上り下りする姿がよく見られる。中食時間だと、県庁職員であろうと思われるのだが、この亀山上皇銅像を大きく取り巻く公園の歩道をジョギングする者が少なからず見うけられる。夕方には近くの中学校の女子が課外としてであろうバトンガールがするあのリズムカルな動作の練習にかなりな時間をかけ、亀山上皇がそれを見守っているような形になる。子供たちのこの練習姿はとてもかわいいし、見ていて飽きない。時には窓の外をハトがすっとよぎる。日蓮さんの下には宗教関係の施設があってその庭には鳩がたくさん群れ遊んでいる。そのうちの仲間であろう、目的があって飛んでいるのだろうが、何をするのだろう、ある日鷹が2羽天空高く、大きく円をかきながら、それも両者無関係のごとく離れ離れに滑空しつづけていたのが見られた。高くて鳩の比ではない。ゆったりとまわっているが、何かを目ざしているようで、それらしい動作に移らないのが不思議でならず、飽かずというよりもこんくらべのように見ていたが、とうとう鷹の姿は数分の後に窓枠の外に消えた。ほんとうに何をしているのであろうか。えものを探しているというのであれば……だが、この吉塚かいわいで、地上にえものが発見できるとでもいうのだろうか。でなければ、鷹は何を目あてに、この市街地の上空を旋回しているのか、さっぱり想像できない。鷹はよく目がみえるといわれるだけに、この状況が不思議に思えたのである。飛行場の向うの一連の丘の右の端でいつも煙が高く上がっているが何の煙だろうかと長い間不審に思っていたのだが、最近車で通ってわかったのは、あれは粗大ゴミを焼く煙、しかも業者の仕業。廃品回収業者の煙のようだ。

7月1日（月）

藤江君今日から住宅センターへ

1年の半分が過ぎた。これから盛夏に入る。空はすっかり夏。気温もこれから上昇に向うという気配である。藤江君が今日から住宅センターに勤務するというので背広ネクタイなどピカピカの出で立ちだった。試用期間一年ということで給料の点で不満があるらしいが辛抱するしかないのではないか。知事の家に住まない方がいいと理事がいったらしいが、そこまで介入すべきではないだろう。手取り10万円そこそこでは、アパートに住むとしても3万円以上住居費に、そして中食を含めて5万円は飲み食いにかかるだろうから、とても暮

らせない。確実に職をもつ女性を早く見つけて結婚でもするのが早道という意見が出る。二人で20万円あれば、何とかやっつけていけるわけだ。藤江君にはまだその気はなさそうだが、そのうちに、内的要求がでてくるだろう。もう31歳というから、そろそろ決断していいはずである。藤江君が出て行ったらあとどうするかという問題を心配してくれる人がある。その通りだが、みゆきはまだ現実のこととして考えていないようだ。その時になって問題が出されるだろう。こちらからはいわない方がよからう。

7月2日(火)

遠藤が指揮する自民県議の動向

県議会は人事をめぐる(副知事、とくに教育委員)水面下工作を別とすれば順調に進み全員特別委員会の審議は一先ず終了した。出席者は大変少いらしい。大阪県人会の江崎氏が来訪し、さきの(5月25日)大阪での県人会の時に遠藤があいさつの中で私についてふれたいやごとが後に県人会幹部の中でも指摘され、遠藤本人が江崎氏に、奥田にことわりの言を伝えておいてくれといったという。彼はいつも私と会う度に必ず一言は嫌なことをいうことにしているらしい。低級な男である。その指揮をうけて自民県議が県議会で踊るのだがこれが成功したことがない。攻撃のための攻撃、反対のための反対をして自派に有利にそれを転じえないのである。今日教育委員の候補につき、こちらから提案予定のうち一人について文教族中心に反対の合唱をはじめたので知事側も出し方に苦慮しているのだが近藤副知事と相談した結果、持駒をかえることなく、最後まで根まわしをするが、見通しが立たねば、その分は放棄し、以後ずっと欠員のままで通し、次の選挙の争点に持ち込む構えをとるということになった。これは自民好みの教育委員会にとっても痛手となろうし、次の知事選においても不利な点になるに違いない。人事一般に今後はもっと厳しく臨むことになる。

7月3日(水)

遠藤発言の意味

教育委員の人事につき両教組はどうしても当方からの推薦者一人を入れてほしいと執着するが、自民の方がOKといわないので県議会の行方は5日終了を前にこんとんとしてきた。城野さんで最初の切札にと考え岩崎らを内諾とりにやり私は夜の時間を迎陽亭で待機していた。内諾はえられた。浜中、林の二人が来て、作戦が悪いという。そこで明日出なおすことになった。ところでこの待機中の話で、5月25日関西県人会の時の遠藤発言で江崎氏が昨日私にことわりをいいにきたとの件について、林出納長いわく、あれは京都の宮崎さんが、遠藤氏にその発言の直後、知事に向って何ていういい方だとたしなめたらしい。わざわざ関西まで来て知事攻撃する必要はなかろうかと。あの時遠藤は「知事は企業誘致につき東京に専任次長をおいたの、県庁内に専任課を作っただのいっているが熱意がない。

もっと先頭に立ってやらないと……」と発言したわけ。「何もしない」を強調しているこの遠藤発言方式は今の県議会自民党の知事質問の随所に出てくる相言葉アヘになっている。林出納長、近藤副知事は、遠藤は結局は次期知事選に出馬すべく動いているんだという。党内に敵も多いのに、今は首藤でとポーズとりをやっている。

7月4日（木）

教育委員の人事で議会は一服

県議会の水面工作で城野節子氏をこちらから出す前提条件としての池野、脇山の相討ち取り下げが進む予定にしていたのに、今日はそこまでいかずに終わった。高山グループが池野に固執していてなかなか退かないということだ。脇山にはマンモス訴訟の原告という新しい難くせが明るみに出たため当方は断念。城野に代えるわけだが、池野をなかなかひっこめないので困っている。明日は相討ちで断念してもらうしかなくなるのだが、時間が少々かかりそうで、このため議会は明日予定どおり閉会に漕ぎつけることができないのではないかとの観測が出はじめた。当方では城野氏の略歴など書類は用意していつでも出せるようにはしたものの、チャンス未到来というところだ。脇山など「傷もの」を出して来て……という声もあるが、池野と相討ちにするのにかえってよかったのではないか。もし秋枝を出してこれが池野と相討ちになり、次に脇山が出てきていて欠点があばかれるなら大変なことになっていたかも知れない。脇山が早目に出てきたということがケガの功名といえるかも知れない。自民党内には、執行部の推す人物を一人ぐらい入れてもいいのではないかとの声も出てきているといわれる。明日事が明るみに出るだろう。

7月5日（金）

何とか円満決着で終りにこぎつけた六月議会

午後11時20分頃県議会が終わった。今日までが予定の期限。延長必至と一時は思われたが、マスコミの批判を気にしてか、かなり無理をして今日期限内に議了した。教育委員候補の出し方に当方のまずさはあった。現在の議会勢力分布からみて到底無理と思われる人物を打診対象にしたことである。脇山さんという元校長がそれで、スト参加で処分を受けた経歴がある。これくらいと考えるのが常識で、その常識が通らないのが現県議会である。それに、あとでわかったのだが、彼女はその後マンモス訴訟に今も名をつらねているということが、次いで判明。スト参加ぐらいはということで弁明してまわっていた副知事も、まだ訴訟をしている人だといわれてガックリ。候補をさしかえざるをえぬ破目に立たされた。急遽城野さんに変更したのだが、自民、緑友ら野党からいわせると、人選がズサン、野党を軽く見ている、だったら城野さんも危いという評価が出てきた。一時はどうなることかと心配され、教育委員は二人のうち一人だけで臨むしかないとも考えられた時点もあった。が、急転直下解決に向い、副知事1、教委2という今議会の山場をなす人事案件は円満決着

となった。

7月6日(土)

小石原「村おこし」について

今日は小石原村で「村おこし」について大いに語り合って満足できた。大分県平松知事がマスコミにうまくのせて専売特許のようにしている問題である。小石原村にもそうした試みがあり、先日は福岡のスポーツセンターに「村」総出でやってきて製品の宣伝を行い、約2万人の客を集めた「ふるさとフェア」が成功だったということで村人は気をよくし、その反省会みたいになったのが今日の知事との「対話の集い」であった。失敗するかも知れぬと思いつつ短い準備期間ながらもやってみて大成功だったということだから、野上村長を先頭にみんながやる気をおこしたのが成功のもとだといわれている。私は「村おこし」の「おこし」とは何をおこすことなのか、ということを中心に、この集会であいさつした。それをつづめれば結局「やる気をおこす」ということになるということではなかろうか、と一種の精神論みたいだが、私の信念を吐露した。多くの参集者はこれに納得してくれたと思う。筑豊ではこの「精神的風土」が育ちにくいといえる。山あり、川あり、耕地ありで、こうした精神的土壌はある。筑豊は土が荒れていて育たない。やる気をおこすには物的媒介が必要であることは論をまたないが。

7月7日(日)

落花流水に随うということ

昨日小石原の京屋旅館で村おこし集会の打上げ宴会を夜の10時すぎからやったのだが、その時若い陶芸家の間で、陶芸が大衆的日常性を帯びるべきか否かで論議しているシーンにでくわした。私はその間に入り、日常性をもたせた方がいいのではないかと私見をのべた。陶芸家にとっては孤高を保っても芸術性は失いたくないとの気持がある。それは理解できるが、富者が丸がかえしてくれるのでない限り、孤高にこもっては自分を保つことができないのが今日の社会の実態だろう。芸術性に目をつむっても、作って売ることが必要な側面がある。少し前お隣の伊藤さんが私に依頼した揮毫の中に、落花随流水という五文字があった。その解説に禅問答のように落花が主体者か流水が主体者か、どちらに解釈するのもいいが、できれば落花がやはり主体者だと解釈したい、というのがあった。私は議論していた二人の小石原の陶芸家にこの五文字を示して、流水は大衆であり、世間の動きと解し、陶芸家は落花のごとく、流水にしたがうことを通じて、その芸術の芸術たるゆえんを研いてゆくことができるはずと説明したのであった。

7月8日(月)

新旧女性教育委員

教育委員に新たに任命した今村さん、城野さんが辞令交付にやって来た。城野さんはなかなか連絡がつかず今村さんが 10 時だったのに、2 時半になってしまった。城野さんは 70 歳という。教養部でずっと一しょだったのだが私より 6 歳上とは思ってもみないことだった。大正 3 年生れ、教養部発足時は男子学生からもあこがれの的だった。大塚商工部長、力丸総務部次長らが当時の思い出を一端話してくれた。しかし今はもうずい分老化がみられる。しばらく会わなかったが、今日見たところ思ったよりも小太りしている。明日は城野さんの前任者池野さんに会う日程になっている。私には会うのがつらい。そういう日程を組んだ秘書は思いが足りないと思う。池野さんは高山県議が推した人で、再任を希望し、最近までその運動したといわれ、それを退けた私の立場を秘書は理解していない。池野より城野がいいというのではないが、そうなるのが政治の流れというものである。その池野さんが、城野さんに辞令を交付した次の日に私に会うようにセットした秘書の心づかいのなさには驚いた。何にもていねいに臨めばそれでよいというものではないのに。

7月9日（火）

再び落花随流水

午後 8 時半発の最終便 ANA で上京。機内で「翼の王国」（ANA 機内誌）をみていると、佐賀県選出の山下運輸相と柿右衛門さんの対談（佐久間良子さんを加えた鼎談）が出ていてハッと思い当たるものがあった。山下氏「色鍋島がかっちり完成される以前は民芸調の素朴なものがかかなり長い間あったとか。柿右衛門の様式が明らかになってくるのは何代目くらいからですか」「伝統が輝きを増すということは、古いものを守っているだけでは進歩はないわけですね。それにプラスするもの……をあなたは努力しておられる。……あなたはひとつの工房の責任をとると、自分の個性を出すのと、本当に矛盾したことを解決しておられるわけだから」柿右衛門「まあ、あまり自分勝手なこともできませんし、かといってあんまりそのままでもいけませんしね」——小石原での青年陶芸家との話が思い出される。今日書いて渡した 2 倍色紙に私が落花随流水の五文字をしたためていたのをみて秘書の森山君が、これはどういう意味かどう読むかと問うので、先日の小石原でのことを話して解説した。この色紙は大牟田地区労にあてようと彼はいった。この前の日曜日の都議選で社会党が惨敗の歯止めをかけきらずにいるとの結果がでたので、「労組依存」批判の議論にこの五文字はいいということであった。

7月10日（水）

企業誘致構想の転換が必要

日航の機内誌 Winds は「生き生き神戸」を特集し、その中の劇作家内海重典と深田祐介の対談のところで、神戸のポートピアの話のついでに、兵庫県の「緑の回廊構想」というのがでてくる。そこのところの注に、次のようにしるしてある「兵庫県が坂井知事のもと推

進している構想。県内を縦横断する国土幹線道路を、単に物流の動脈とみなさず、人と文化が交流し合う「現代のシルクロード」と位置づける、従来の経済開発先行型の地域開発から脱皮し、まず自然環境を保全し、教育、文化、レクリエーション等の施設を先行整備する「緑と文化、先行型の新しい地域開発の手法……」とある。福岡県の県議の、とくに野党の「先生」方が二言目には企業誘致はどうしたと、知事を攻めまくるのは雲泥の差。この注をみて、私が知事就任当初企業誘致には疑問があるといったことをとらえ、議会、マスコミ、県幹部すらもがこの発言を問題にしたことを思い出す。経済政策は国のすることという私の発言を、「企業誘致は国のすること」とひんまげて書きまくった新聞もある。これまでの団地造成、助成金準備が企業誘致だと考えてきた県政の基本は兵庫県の緑の回廊発想に遠く及ばない。

7月11日(木)

山笠の台乗り

午後4時頃、千代流れの台乗りをした。昨年に続いて山笠の台乗りはこれで二度目である。博多に40年余住んだのに、山笠をまのあたりにみたことはこれまでなかったのに、知事になって、台乗りするのである。台乗りは余程の者でないと許されるものではない。私が千代に住んだというのも一つの因縁かも知れぬが、知事にならなかつたら、この博多山笠の味わい経験はなくてすんだであろう。知事室で洋服を脱ぎ、まわしを締めに来る二人の男に山笠姿に衣裳がえしてもらい、エレベーターで階下に降り、千代小学校の出口まで歩んでゆき、公園入口道路との合流点で台乗りし、そこから県庁正面玄関まで、往復の区間の台乗りで、玄関でご祝儀をもらって引揚げる。カキ山笠の一行におつきあいするというだけのことだが、この短い区間だけでも山笠の勇壮さを味わうことができる。ある意味では幸いというべきであろう。沿道の人達が桶に用意し、ホースで水道の蛇口につけて勢いよくぶっかぶせる水に当たると勇壮性が倍化するように思える。私が山笠の意義やいわれを知っているならもっと感動するはずだが、知らないために、意義が薄れて相済まない思いがするのである。

7月12日(金)

筑後川が育てたもの、圃場整備をどう考えるか

今日は一日かけて浮羽、甘木、朝倉をかけめぐった。筑後川が生んだ県下の農産物の宝庫である。筑豊地方と違って、こちらは生活保護など全国並みで健全である。総合庁舎、町役場、その他の県施設、民俗歴史資料館などにもそれがあらわれている。浮羽には立派な柿が今ぐんぐん実りをましているのが見られた。稲は日ましに青みがついていくし、用水の水は富かに土地をうるおわしている。昨日私は浮羽地区県民の会の集いのとき、この地区は福岡県が全国に誇るに足る宝庫であり、県がこういう土地柄ばかりであったらとすら



思うとのべておいた。ただ、今日農村も豊かになり、若い人の価値観も変ってきたことは確かだ。人々は都会に対するあこがれを強め、農業をしたがらなくなるらしい。仕事を他に求めるから、失業観をだんだん強くもつ。三輪町での話によると、圃場整備は100%進んだ。大型農業機械が急速に普及した。そうした生産性の向上に比例して耕地面積はふえない。人々の失業観は大きくなるばかりで、兼業農家が圃場整備に歩調を合わせて進んだという。人々は都市的労働を求めて動くのである。圃場整備はたしかに必要であろうが、兼業農家をふやすために国家的投資が進んでいるわけだ。

7月13日（土）

大牟田地区県民の会の、知事と語る集い

一昨日は浮羽、今日は大牟田、県民の会が知事と語る夕べを開催してくれた。浮羽は4人で知事を励ます卓語をしてくれたが、大牟田では知事に注文するとの前ぶれで要求項目も予め通告しており、嫌な会になるかと思っただが、主催者側と十分打合わせをしてくれたため、要求大会にならないですんだ。県議の長谷川氏が、前座でかなり時間をかけて県議会をめぐる県政の状況、予算にみる大牟田への県行政の配慮などについて説明してくれたために、形がずいぶんよくなった。本吉敬治氏ほか5人が知事への注文意見発表をしたが、失対、非核宣言、老人福祉、地域開発、雇用確保などにつき問題提起があったが、いずれも困難な問題ばかりであったので抽象的な答弁でしかなかった。それでも予め打合わせであったせいもあり、質問の二の矢もなく、平穩に集会は終わった。それでも2時間かかった。ある意味では大牟田は話がわかる所だから、私も気を許してのんびり語ることができ、時間的に間のびがしたといえるかも知れない。県民の会の運動が会費年1000円ということで、近頃全県的に労組を中心にだんだん取組みが進みつつあるようだ。

7月14日（日）

失対事業65歳線引きをめぐって

ふくおか会館で夕食をしながらのはなしに、昨日の大牟田集会のことがでた。高齢者福祉、失業対策、年金問題、企業誘致等々、あれもこれも自民党政権が、大衆運動の頭をなでなで無原則的にやってきた施策の矛盾が、いまあらわれてきた側面が大きいものが目立つ。政権維持のために税金をそれにあてたともいえる。県政についてもまた同様のことがいえる。失対事業65歳線引反対という気持はわからないではないが、労働部長がいうように、65歳をこえたものに対しては高齢者という観点からの就労、社会参加の施策は大事であっても、「失対事業」の中で処理してきたことへの反省をきちっとしなければならないのではないか。今は80歳をこえて失対就労している例すらあるという。生きがい対策、年金政策などで十分に対応し、失対で対応しないようにすべきであるのに、これまで20年間をみてもその辺にけじめがつけられていなかったのである。20年前の昭和40年に50歳で失業し

た人が20年間失対就労しつづけ、今65歳線引きとなると反対という。知事に答弁を求められても、線引きしようとする政府を非難する立場をとることへの納得できる理くつがない。高齢者対策(年金、生保、生きがい)が十分できていない限り、「反対」の気持をむげに退けられないのである。

7月15日(月)

健康な体と健全な精神と

完璧な夏空。昨夜の雷雨は若干被害をもたらしたようだが、九州も東京も梅雨明け宣言となったようだ。今日は東京で予算陳情活動の第一日。皇居周辺をジョギングしている姿をみるとよくやるわいと思いつつ、この猛暑の中でもやりにやいかんのかと思う。秋枝蕭子さんの父秋枝原児氏の「句縁曼陀羅」を開きはじめた。氏は明治19年(1886年)5月生れという。満99歳、白寿記念の出版らしい。蕭子さんからいただいた本だ。まえがきのところに、氏の生命管理モットー3原則がしるしてあるが、誌的、芸術的であれという一項があり、それに基き、今も私宅で作句指導を春秋句会と原児会の二グループに分けて行われているという。俳句の縁を通して人生への悟道をさぐるうという、心のおき方に一つの人生観をすえてあるのがよくわかる。ひとにも作句をすすめるのはそのため、といてある。皇居のまわりをジョギングする人は、肉体を鍛えると共に心も鍛えているのであろう。肉体と心とどちらが先か、健康な体に健全な精神が宿るとは昔からいわれてきたが、その逆のいい方もできるように思えてくる。皇居の周辺を走ろうという気持は誰でももてるものではない。気持だけが先走るといけませんが、気持ちを堅くもつことなくでは走れるものではない。ましてこの猛暑の中である。

7月16日(火)

「増税なき財政再建」という呪文が土台無理なんだ

どの県も次年度概算要求に向け陳情に精力を傾けていて主な役所は入れかわり立ちかわり分秒を争うように幹部の部屋に団体客が出入し、廊下はごったがえしている。議員会館も自民党の各室への陳情客が目白押しようだ。陳情に意義を認める人認めない人それぞれあろうが、今のような政治の仕組みを前提とすれば、認めることになるろう。来た来ないで政治家、役人の人情が微妙に動くだろうし、現段階のように窮屈な予算になると少しでも取り勝とうとの心理が掻きたてられる。昨年につづいて高率補助の補助金一割カットが来年もつづくだろうといわれているが、一年限りということで導入されたものが来年も、その次の年もつづくとなると、地方財政はかなりいびつなものにされてしまうだろう。自民党の三塚政調会々長代理は「増税なき財政再建」という枠がはめられ、他方で制度的な財政需要の当然増があり、税の増収に一定の限度がある限り、やりくり以外に逃げ道はないから来年度も一率<sup>カット</sup>は不可避だし、他に求められる唯一の途は解散総選挙、そして新

しい道を求めるフリーハンド以外にないという。「増税なき」ということ自体が土台無理な前提であることは誰もが知っているのである。

7月17日（水）

全国知事会議のこと

全国知事会。午後一時半から水戸プラザホテル 2 階瑞雲の間で会議に入った。当然に補助金一率カットは 60 年度限りだよという強い意思表示がなされたが、反面、61 年度もそれがつづき、地方財政事情は更に悪化するだろうとの見透しものべられ、それには特にどう対応するか論議は出なかった。意見の中で多く出たのはむしろ地方行革大綱についてであった。中央政府以上に熱心にやってきたのに、とか、全国一律では地方自治が死ぬとか、新規ニーズは無限にあるとか、という意見である。いずれも真である。行革といえば「切る」と同義語に使う人があるが、ビルドの側面も考えないといけないという声も当然に出た。議会でもこうした意見が自由に出るようならいいが、県では「切る」のみが支配的で、情なく感ずる。こういう所では我が意を得たりという空気だが、各県の議会ではどうなんだろう。樺島君もこの意見開陳をきいていたので意を強くしただろう。それにしても先進県では税収が 10%以上伸びているのに、福岡県では 6%ほど。それだけに、来年度予算編成は全国並みにできない。一割カットの影響は県で 343 億円といわれ、来年はもっとこれが大きくなる。心細い来年度予算編成である。

7月18日（木）

科学万博を見て

つくば科学万博に行った。全国知事会というイベントとの組み合わせだからこそ行けたのだが、平素のスケジュールならとても時間がとれないし、また行く気にもならないだろう。東京、大阪、沖縄、神戸というようにここ 20 年ほどの間にオリンピックその他博覧会というような世界的規模のイベントがあったが、大阪のは児島さんが事前に見せようというので見るチャンスを得ただけで、他は行ってない。それほど衝動が湧かないのも理由の大なるものであった。それに科学万博となるともう一つ興味がわからない。仕掛けの奇抜さに圧倒されてしまう。夢を無限にひろげるのはいいが、チンプンカンプンだ。今回は映像技術のマジックにとらわれたようで、むしろ、1 本の木から 2000 個のトマトを実らせた不思議の方が魅力的だった。チェーンで回転式に台をまわしながらの水耕栽培のレタスも見事だった。人間は工夫すれば巨大な力をもつものだと感心した。水とは何かのテーマも科学——太陽との関係分析——で再考させるやり方が気に入った。もっと考えてみたいところだ。子供達がどんどん来るが、これは遊び半分だろう。それでも近頃の子の科学興味はわれわれの想像をこえている。

7月19日（金）

国際交流の一齣

夜、ホテルチッチで、ここに泊っているブルネイ青年たち10人と、ホームステイに参加してくれるホストファミリー20人その他国際協力関係団体県国際交流課関係60人で歓迎パーティー（県主催）を行い、2時間ばかり楽しい時間をすごした。ブルネイといっても通常日本人は知識をもたぬボルネオ北部の国である。人口20万人ほどの王国。石油と天然ガスの供給を受ける点で日本と深い関係ができています。男7人女3人だったろうか。回教という閉鎖的な習俗があって、酒類、肉類は食べないようだが、顔は東洋人で中には日本人とみましがえられそうな人もいます。日本人の祖先と同根といえるかも知れない。今日からホームステイを2日予定していて密な接触が始まるようだが友情が深まるだろう。相手方は英語を話すので、何とか通ずるだろう。ホスト希望家族は勇気がある。敬意を表したい。今後の交流の一助となると思うと、大変有意義なことだ。今日午後の時間に8月の「朝の放送」について広報の人達と話し合った時私が主張したのは、平和の基礎は国際理解であるということ、相互に相手の立場を認め合うことだということであった。民主主義と同じもので、平和=民主主義を説こうとっておいた。

7月20日（土）

佐賀線廃止につながる協議会に県評が反対している

昨日届いた「県政ひとすじ」は西日本新聞に早速取り上げもっていかれた。25日一せいで発売に向けて新聞で十分PRしてもらおうための点検を前もってさせておくがよいと安達がいう。2~3日読んでくれれば用意万端といえよう。ひる前、朝日新聞社の国鉄分割民営答申に向けての取材に応じたが、実のところ答えは明確なだけに、そして政府側に何の対応も準備されてないだけに、取材に応ずるのは逆に困難な面があった。なぜに分割なのかなぜに民営なのかな答申は単に猪突猛進の感が強い。国鉄問題についていえば、この7月後半になって第二次廃止ローカル線がようやく俎上にのぼせられ、まず漆生線が、次いで明後日佐賀線が協議会でとり上げられる段取りになったところで県評からかなり強い反対の声が出てきた。知事の協議会参加は住民の声をさかなですることになるとの言い分。又反面、交通対策課の方でも、これまで出席していなかった知事を今回について出席させるよう対応してきた点も理解に苦しむ。反対だけではどうにもならないのだが、要はいずれとも面子を立てようとしているわけだ。半分以上あきらめで、何の対抗策もないままに経過しているみたいだ。佐賀線にはまだかなり複雑な問題が残っていると思う。

7月21日（日）

極高明而道中庸

長崎の孔子廟で中国総領事館開設記念書展をするので月末までに出品するよというこ

とで、以前から用意していたものを岸本先生にみてもらうため届けていた。牧坂氏の話では、先生からもう一度書いてみていい方を出すことにしたらとの意見だったというので、今日それに挑戦した。出しているのは行書体だが、こんどは同じのを草書体にした。いい文句を探したが、前のと同じになってしまった。極高明而道中庸というのだが、中国古典明言事典からとったものだが、中庸の編に出ている。四書五経からというのが約束だったし、意味内容もこれでピッタリと思ったのである。この意味は高明を極めることを常になしつつも、具体的現実的には中庸によるべきだとのこと。自分に言ってみてきかせる言葉のようにも思えるのである。理論と実践というか理想と現実というか、その違いを明確にいいあらわしている。違いつつ、違ってはならないということでもあろう。先日土井仙吉氏退官祝賀姫高会するとき、（於玄海荘）で岡田武彦氏も来ていて、中国古典の話をお私からもち出し、それが世界の名言すべてを含んでいるように思うといったら、岡田氏はそうだそうだとよろこんでくれたのを思い出す。

7月22日（月）

第二次線佐賀線について

佐賀線対策協議会が柳川のお花であり出席した。出席そのものが一もんじゃくあったが、会場前で国労の組合員が二十人ばかりピラマキを行い、国鉄当局に抗議文を出した程度で会そのものは円満に進められた。佐賀線は中に駅が10もあることをはじめて知った。全長24キロメートル。国鉄は小まわりがきかない鈍重な組織だから、これ今日の危機に出くわし、のたれ死に寸前になったように思えてならない。佐賀線の場合、瀬高一佐賀間を走するのに45分前後かかる。駅を一つずつ間引いて30分ぐらいで走らせることはできないのであろうか。又、柳河、大川のような主要駅だけ停車する快速列車を走らせるなら20分で走るのはないだろうか。国鉄当局はそういう気がないのか、どうでもいいと思っているのか、工夫をしようと思わないように思える。他線についてもこのことは多少ともあてはまりそうだ。利用しやすいように地域の住民がよろこぶようにとの考えがあるとは思えない。硬直した運営、運行、運賃で住民に対応しているように思えてならない。自動車の時代になってもこの車社会に取り残される交通弱者（老人、病人、高校生など）がいるわけだから公共交通機関としての役割をもっと自覚し、収支の改善に心を砕いて小まわりのきく経営にかえてほしいものだ。

7月23日（火）

筑後川流域の頼もしい生きざま

大川市の一農家が来訪し、ペピーノという果物を試作したとして実物を届けてくれた。ウリとナスのあいのこのようなナス科の植物という、味はもう一つ改良の必要がありそうだが、その心意気には敬服する。ニュージーランド産のものようだが、何でもやってみよ

うとの<sup>ママ</sup>気概は大いに買いたい。今日又甘木に行き柿50億円突破記念大会に出たが、園芸連の武井会長は農家の若手のやる気の必要を力説していた。ついでに見せてもらった加工工場でキーウワインをいただいたが、巨峰ワイン、紅乙女を作っている田主丸の林田さんのところで試作しているという。このワインは巨峰ワインのように甘ったるくなく結構評判もよいらしい。北九州、福岡、久留米、大牟田にはそれぞれ都市のあり方についての工夫がそれぞれに必要だろう。豊前、筑豊もまた同じといえるだろう。がこの筑後川流域の農業社会には、他のどこよりも好ましい将来へのバイタリティをはらんでいるように思える。逞しく頼もしい。筑豊にも豊前にもそれなりの強さはあるが、弱点がむしろ大きい。筑後川流域のこの生きざまを福岡県の誇りとしたいものだ。

7月24日(水)

章夫妻のこと

お盆明け8月16日に龍中同窓会が龍野であるというので参加の計画をもち、この時を利用して佐方への墓参を考えた。2月の「やまとやしき」での福岡物産展では真田先生がそそくさと帰ってしまったので多忙の為だろうと思ってこんどは先生にも会うことを思いつき、そのためには松田貞夫君の意向はどうかと考え、夜電話した。真田先生はOKだからと早速の返電があった。その時の松田の電話で、章夫妻のうわさがひろがっているが、大丈夫かと彼はいう。先日法事があってみゆきが帰郷した時はどうこうということにはなかったが、禎子は相かわらず、無あいそうきわまりない態度だったという。松田の話では章が嫁にひっぱられてか、ありがねを使い果たしたり、向いの田んぼを売ったりしていることが村中で評判になっているというのである。およその推測はつくものの、だんだん悪い方向に進んでいるようにも思われ、このことがわが家でも夜の話題になった。誰も嫁のことを悪くいいたがるので一方だけのせいにはできまいが、困った女だということには異存はない。「お婆ちゃんがかawaiiそう」と近所の人もいっている。その通りだろう。

7月25日(木)

重い夏の義務の数々

暑中見舞状がくる。中元の品が届けられる。今はそのまっさかりの時期である。毎日来る暑中見舞状にどう対処するか気分上の大きな荷物である。今日県民の会の山口氏が来て暑中見舞状を筆で書いてくれというので求めに応じた。之を凸版印刷にして、これから知事の暑中見舞状を出す仕事にとりかかるという。7月中に出すことができるだろうなといっておいた。少々遅い取組みである。県民の会には県民の会なりの取組みがあり、秘書室には秘書室なりの取組みがあつて、それで、暑中見舞状がすまされる。秘書室では初盆の取組みもやっている。8月上旬に実行する知事行動計画にそれが入れられる。それでも、私は私なりに独自に取組まねばならぬ暑中見舞状のこと、お盆の迎えようがある。せねばなら

ないがやはり知事でなかった時の気軽さはない。たいぎに感ずる。しなくてすむならしな  
いのにと思うとよけいたいぎに感ずる。今日は中元のお礼状、暑中見舞の返信をいくらか  
書いた。こうした義務感をなくしてしまうには数日がかかるだろう。暑い夏の夜はもっと  
ゆっくりくつろぎたいのに、油断もスキも許されない思いがつづく。

7月26日（金）

大島村の努力

山の小石原村、海の大島村といった感じをもった今日の大島村視察だった。村長さん中村  
氏はまだそう年をとってないと思われるが自立努力を強調。村営の牛、しいたけの生産を  
おこし、主婦たちの仕事場を作ろうとしている点で敬意を表するに値する人だと思った。  
前から私もいっていることなのだが、やる気もちその努力をしている向きには大いに共  
鳴し、行政の助力を惜しまないが、やる気もなく、県にねだってばかりいる向きには全く  
助力の気がおこらないということだ。大島は小石原と姉妹関係を結んで交流することも考  
えているらしいが、清き交流として大いに賛意を表したい。島には若い女性が住みつか  
ないという。男は仕方なく踏みとどまるのだが、女は身軽だからであろう。収入もあり文化  
俗化のひどい都市に行ってしまう。いわゆる嫁がいなくなる島の実態である。大島では若  
夫婦のための住宅も建てている。船の大型化近代化に、農村でいう機械貧乏と同じような  
苦勞が漁業経営につきまとうようだ。これに対し、魚市場は依然商業側に支配権があつて  
魚価は低迷、漁業者環境は苦しい。嫁さがしに苦勞するというのに二重の理由がある。村  
長はこの問題に挑戦している。

7月27日（土）

物の近代化が心の荒廃を呼ぶのだろうか

昨日は大島、今は地島、相島をまわった。相島の俗化がかなり強く印象に残った。島の問  
題は消波堤の築造とゴミ処理場の建設ぐらいで、あと近代化の問題はほとんど解決されて  
いるといってもいい程行政投資が進んでいるようだ。大島には少年非行など全くないとい  
われるが、相島は港に上陸するや否や非行の芽をつもうという村の掲示が目についた。島  
内視察ではし尿処理場、学校、水源池、診療所など、近代化の現場案内があつたが、私は  
それよりもナンバープレートのない車が少なからずあり、自動二輪や自転車の放置され赤  
さびが来たのが至るところに放置されたままになっているのが目についた。その他表現に  
困るようなガラクタが路傍のあちこちに放置され雑草が生い茂っている。これではいくら  
近代化が進んでも、人間の荒廃化が同時進行しているといわざるをえない。何のために漁  
業漁村の構造改善をしているのかわからなくなってしまう。地島も対岸に近い関係もあり、  
近代化は進んでいるようだが、相島に次いで人間の荒廃化が進入している。こういう傾向  
が県政への依存意識を高めているわけだ。

7月28日（日）

ボーイスカウト運動も脱皮の要

ボーイスカウト福岡県連60周年記念大会が久留米岩田屋のホールで開かれ、夕方3000人集っての野営合宿大集合に出席してあいさつした。3泊4日の野営訓練3泊目になろうとしている時点。汗をかき入浴もできない生活、それに蚊や虫に攻められるキャンプである。子供たちは小学6年から中学3年までというが、みんな疲れが見える。このような疲れが訓練の中に計算してあるのかどうか知らぬが、疲れすぎでは意義が減殺されるであろう。きまった訓練方法科目があるわけではなかろうからである。同じ疲れでも、今ピークになろうとしている夏の甲子園高校野球出場への予選その他のスポーツ、みんな汗を流し熱狂し、叫び、乱舞し、涙を流す。そうした感動と目標が明確であるイベントの方がましなのではないだろうか。ボーイスカウトの場合、感動と目標がはっきりしていないようにみえる。誓いと掟はあるし、団体行動も訓練されるが、高良台での大集会をみても感動や目標が見えない。日の丸の旗をかざして行進しても何だかオールドスタイルに固執しているように見える。それに、大人が行事に干渉しすぎる。子供たちの行動に自発性の余地がない。ボーイスカウトも、ニュースタイルが要請されているように見える。

7月29日（月）

教育委員選考過程で問題になって消えた人を慰労

大町県議の仕掛けで教育委員になれなかった池野（前教委）、元校長の脇山、元女子大の秋枝の3人を知事招宴ということで西中洲の小林に集った。いわば女傑ばかりである。池野氏は今回のナイロビでの世界婦人大会に出席してもらっているが、彼女は教育委員をつづいてやりたかったのにやめさせられてと私に苦情をいった。秋枝、脇山の二人は教委候補として名を借り自民党ら野党の反対で実現に至らなかった人である。池野氏は自民党の高山県議が再選にかつぎ出す関係もあって、わが方も自民内部にすら異論があって、再任には無理があると判断せざるをえない人である。3月末2人の教委が欠員になるとき、池野氏を含む二人の女性候補（秋山）を準備しようとしたところ、自民内部から知事はかっこよすぎると反撥が出てうまくいかなくて、男性一人を代えて出そうとしたが、議会のなりゆき上、この時は教委改選については見送りをせざるをえなかったという問題があった。秋枝氏は異論あり、脇山氏に至っては組合活動歴があるとの理由で反撥が強く立ち消えになった人である。今日はその後始末の会。

7月30日（火）

週休二日制を体制的なものにした

明日九州地方開発促進協議会が開かれるが夕食懇親会がニューオータニで福岡市のホスト役ということで開かれた。知事会の会長鎌田鹿児島県知事が客の筆頭。ローカル線（第二



次) 廃止問題で水を向けたがもう投げの姿勢。それでも形だけは反対を貫くしかないという。代替バスを走らせても同じというわけ。それでは地域公共交通をどうするか確信ある答が頭の中に浮んでいないことになるが誰も処置なしということのようだ。日曜もない毎日の多忙さについても同じらしく、日曜は出ないという原則だけは立てているが、いつもその原則が破られるので困るのだという。これ又いつでも同じである。副知事を代理に出したらどうかとのことであるが副知事もつまっているし、代理のきかない出席要請も少くない。大体に、日本人は日曜の行事を多くしすぎるのではないか。日曜は休むことにきめている欧米では行事は多く土曜に行われ、そのために週休二日制になっている筈である。日本では週休二日制がまだ、そうした欧米的な意味で理解されず、日曜は安息日というよりは一般的な行事の日となっている。それなら仕方がないから月曜日を休みにしてくれるならよいのだが、それも逆に月曜日の来客は少くない。こうした首長の多忙さについて夕食の話はずんだのであった。

7月31日（水）

裏庭を見ながら思うこと

今日は早目の帰宅でくつろごうとしていたら、佐々木補佐が追かけるようにやって来て、ビールをのみながら庭をながめての談議。藤が伸び放題に蔓をのばしている。垣根にふうせんかづらが群がり昇り若い実をたくさんつけ、白い花をぎっしりつかせている。佐々木君が実を届けたので蒔いたものだが、彼自身のうちのものよりぐっと育ちがよいとっていた。セミしぐれですねという。朝からそれにおこされるほどセミが鳴く。命の限りと鳴く。相かわらずここは蚊が多く、外に出るとその襲撃にあう。洗濯物を干すには蚊取線香をたきながらでないと大変な目にあう。以前は線香たきながらでも外の仕事をよくしたもんだが、知事になってからはほとんど無縁になってしまった。庭がもっと広ければいいが、とは思う。県会議員はもちろん、大労組の委員長など、よく訪ねる人達は立派なうちに住んでいるが、それとくらべると我が家の何と貧弱なことだろう。それでも今住んでいるところがやはり自分にとっては一番いい。こうした狭い住み家の中で自分が思うようにふるまっているのが一番いい。高野切第一種を臨書しているが、そうした時間がたっぷりほしい。ひらがながすらすら書けるといいなと思う。

## MEMORANDUM

『県政ひとすじ』の出版

昨年はどうにも条件が整わなかったのが今年こそと考えていた知事出版であった。もう少し早く店頭に並ぶかと思ったら7月25日になってしまった。10000部出したという。7000は八丁君が労働組合を中心に消化できるとふんでいる。県の地公労ほか県評傘下の主要単産である。出版元の第一書林が県内各地の主要書店に置いていくのが3000という。欲目に

みて、もう少し出ると思うのだがどうだろう。本書を作成するについて、問研との間に早目に合意ができ、八丁、東定を中心に内容構成につき高い関心を寄せてくれた。2月以降それに具体的に取り組んだ。進行するうちに、安達（広報）、樺島、佐々木（秘書室）もしっかり補完的な仕事をしてくれた。4月一ぱいに原稿を仕上げようとしてたいてい努力した。

“県民総立ち”が本書の訴えの的であった。六月県議会で大石（緑政）がそこが理解できんといってしつこく喰いさがったのを思い出す。自民系の連中が理解しようとしなない理由は要するに理解しては困るからだ。それだから私は文字に表現し残しておきたかったのである。もちろん彼等は必ず部分を読む。そして又衝いてくるであろう。記者達にしても似たりよったりである。それでもないよりはるかによい。何よりも、県民の会系統の、支持者たちが文字を通じて理解してくれるならそれが一番いい。できたら来年も一冊出版したい。

8月1日（木）

大濠のこと

大濠の花火大会があったというが、中国総領事など招待しようと思っていたのに、西鉄幹部との懇親会が入りこんできて残念ながらダメになった。花火といえば以前は那珂川畔でもやっていたが近頃はそのはなしをきかない。危険を伴うからといわれている。柳川では川下りをかねて昨秋白秋 100 年祭ということで招待されて行ったが、それこそ頭の上に灰が落ちてきて危くないかと思ったことを思い出す。大濠といえば、今日の県政勉強会で悪臭を放つので浄化するか埋立ててしまうかどうにかせよとの声が出ている。藻類の繁茂とその腐敗などが原因らしいが、近頃は海との関係が断たれ海水が還流しないし、湧き水も十分でなく単に湛水しているからである。浄化装置をそなえてやるにしても 10 億円近くかかり、それが 3 年ほどしかもたないといわれる。投資価値があるかどうかである。年間 3 億円近くかけても……ということだが、それなら埋めてしまえという意見も出ている。が、この対応については市民感情が許さないだろう。現に県が埋めてしまうと考えているときめてかかる新聞投書がある。奥田県政攻撃の材料とする投書だった。政争の具にする県議は橋詰。

8月2日（金）

山本辰雄氏の写真熱

野党 3 党幹部自民は後藤、緑民は山本（辰）、公明は酒匂の三人を招待し三光園で当方三役による懇親会をもった。大塚副知事がこういう席には初めてということ。社会の林はおくれて加った。今日の会では山本氏の話が面白かった。こんなに日照りがつづくとも稲ができすぎて困るほどという。彼は自慢の写真を大きく B4 版ぐらいにひきのぼしのを 20 枚ぐらいもってきていて、それを窓際に並べてみんなの鑑賞に供したが、立派なものばかり。南

部九州の10月末の風景ばかりであった。写真好きというかカメラ狂というか、常人では考えられぬ程度、撮ってとってとりまくり、その中からいいものを選ぶ。それをのぼし、残していくとのことである。前にもその話をきいていたが、女の足とか唇とか無数にとっているとのこと今日もわれわれの前で仲居さんの唇を撮っていた。カネがかかるでしょうというと、ぜいたくしていることを思うと高くはありませんよとのこと。何ごとによらず、趣味は費用がかかるが、他の贅沢をおさえて結構やっていく。そういう人は少ない。他人の側面からはとても考えられぬほどそれに凝りカネを注ぎ込む。その点彼は常人ではない。

8月3日（土）

少年の船解団式に参加して

RKK（琉球海運）のえめらんど号のデッキで第18回福岡県少年の船帰港解団式が午後3時から行われ、あいさつに行った。夏休みに入ってすぐに第17回のが出発する時を見送りにも行ったがどちらも子供たち600人、世話する大人70人という構成。小学5、6年と中学生の年齢ばかり。さきのお発の時曇空だったが今日は炎天下。儀式は30分以上かかるが、疲れた子の中には倒れる者もいくらかあった。出迎えの父兄が子供たちをつれて一ぱいである。子供たちは最後に泣き出す。別れを惜しむのであろう。さまざまな感想、思い出が別れという契機に泣きの表現をとるのであろう。4泊5日（船中が2泊）、沖縄の海や空、現地の子供たち、水族館、南部戦跡、対馬丸遭難、船中訓練、船中まつり行事など思い出を一ぱいつめこんで、泣くのである。思い出の噴出である。この年頃、みんな伸びざかり、かわいい。何でも白紙のように吸い取る。少年の船はこの子らにたくさん貴重な体験を脳裏に焼付けるのにより役割を果す行事であるに違いない。ふと、修学旅行とくらべてみる。はるかに有意義なのではないだろうか。県が補助してできるのなら、もっと多くの子に経験させたいものだ。

8月4日（日）

くるめ水の祭典

ひる頃久留米に着くようにということで出発したが、早目についたので、国鉄久留米駅に直行して甲子園高校野球出場のため出発しようとしている久留米商業ナインを見送り激励することができた。3～5日がくるめ水の祭典で見送りもそのにぎわいを反映したものであった。何日か前に近見市長に会った時、この水の祭典に知事は一度顔を出してほしいということだったので、今日の日曜OKした次第だが、今年は第14回ということである。5日の水天宮夏祭りは伝統的なものようだが、この水の祭典は近年市長の音頭で創ったものようだ。市民があげて参加する祭典で数々のイベントが市民、各町、各学校、商工団体、消防、自衛隊などそれぞれの努力によって考案され参加していく仕組みで、商工会議所、

市役所はそのバックとなる。3日間の各種企画は実行委員会を組織して調整している。今日は午後一時から六ツ門広場で開会式のあと。明治通りがパレード展開の祭典場となる。パレードは1時半から5時まで100団体といわぬ多くの組が次々と繰出していった。3時半頃までしか見なかったが、すべての市民のふれ合いが可能な点に長所がある。博多どんたくは型がきまっている。

8月5日（月）

社会新報まつりで小柳ルミ子が来て

忙しい忙しい、暑い暑いで今日も暮れたが、どこまでが公用であるのか判断しにくい毎日である。今夜はマルベニでの地域懇とスポーツセンターでの社会新報まつりにつき合った。後者では小柳ルミ子ふるさとで歌うということでの人集めで、私も花束贈呈という役をもった。顔みせといえど顔見せだが、別の角度からは仕組まれて踊るということでもある。ある意味ではしんどいことだし、他の面からは、これが政治である。この面からはみんなよくやってくれと感謝せねばならないが、なんでこうもしなくてはならないのかと思う。3千人くらいの観衆だったろうか、そのうちの多くが、私が出ることを歓迎してくれる。有難いことではある。歌手の世界は違うなあとつくづく感じた。彼女の一行40人という。これだけの人が一人の歌手の演技の裏舞台で働いているわけで、その費用だけでも大変なことだろう。これは感覚に訴えて、徹底的に大衆を魅了することに全てを集中する。その中に政治的な効果をねらって私が顔見せに登壇する。あまりとけ合った雰囲気でないことだけは確かだ。それでも社会新報まつりだから出るわけだ。

8月6日（火）

行政にたかる体質が随所に

県政に関してあれこれ勉強するうちに、何だか妙な感じに襲われる。大和町干拓地の地盤沈下の話が今日改めて話題になったわけだが、国営事業で有明海を干拓し、入植者が賦払いでそれを分譲してもらって農業を営んでいるうち、有明炭鉱のせいかわからぬままに、一メートルほどの地盤沈下が生じ、農民達は賦払の滞納で復元せよと抵抗している。炭鉱側は採炭のせいではないといい、国側は復旧作業のいかににかかわらず、賦払金を納めよという。県が農民から納入されたものを国に賦払いする形式をとっていて、県に対し、農民と国から何とかせよと責任を追及しているというのである。鉱害というなら炭鉱側は否定の立場で法廷に出ると主張している。国は、自然現象なら沈下の復旧責任はないという。県は県民の福祉のことだから何とかせねばとっている。大和町は知らん顔をしている。近頃思うに、人々は、行政に責を帰すことばかり考えている。板付飛行場の地主は国への土地貸借料坪当たり2万8千円をもっと引上げるとがんばっている。1億円以上の地代収入のひともいるという。おまけに税金をまけよとの要求を一しょにつけた陳情をしてきて

いる。

8月7日（水）

ぐっすり眠りたい

定期検診で血糖値が 265 ということで高すぎるといわれた。180 程度にとというのが医師の目標らしいが、なかなかそうはならない。高すぎると様々な余病を併発するに違いない。もう 15 年にもなるこの状態で自覚的には一進一退。テストテープでみても+3 はいつもかわらない。それで余病は何だろうか。目の調子がたしかによくない。選挙前からそのことであれこれ（通信病院、佐世保病院など）みてもらうが、済生会福岡病院でも、これという特別の治療を要する状況といえないようだ。眼鏡をかえてみたらということで処方箋はもらっているが、自分ではその切実さを感じないし、眼鏡は高価なのでまだその処方箋を使わずじまいである。知事選前後は体重が 40kg 台に落ち込んだが今は 54~55kg になっていて、体調に異変は感じない。残る異変はねむりが足りない日がつづいていることだ。毎日主治医の方で処方してくれた安定剤をのんで眠る。そうしないとねつきがととも悪い。夜明けに小用で起きる。そのあとうとうとしながら必要時刻まで就床している。もっとぐっすり眠れたらどれほどすっきりするだろうと思う毎日である。

8月8日（木）

停年後の生活に入った同僚たち

昨夜は児島、土井の二人を拙宅に招き入れて 11 時半まで飲みかつ語った。最後に龍中の校歌を一しょに歌ったが興が乗って姫高寮歌集によりながら次々と歌った。私はこうして現職にかわって多忙をきわめているが、彼らは今無冠である。土井も今年春で停年になって今は何も定職をもたず、馬に乗る楽しみをさえ味わっているという。江嶋寿雄氏だったと思うが、停年とはこんなにいいものかと、なってみてはじめて知ったと語ったのを記憶していたので、それを土井に伝えたと、その通りだという。年金もそれなりの生活の支えになっているので多くを望まないなら何とかやっつけていけるわけだ。土井の話だと、今は政府は次々に「恩典」をなくしてしまっていくので、5 年ほど前とくらべると、退職金も年金も必ずしもいいとはいえない。民間の大手とは比較にならぬほど低い賃金でやめていく。30 万円足らずの年金ではあるが老夫婦二人だと何とか食っていける。退職金ではうちも建たない、マンションの一角も買えない。なるようにしかならないと思う以外に考えようがない。人生 80 とすればあと 15 年ほど、こうして暮らしていくことになる。社会的にももつたいない話ではある。

8月9日（金）

北九地評の役員との話合い

北九地評の三役クラスの人達と小倉弥生会館で夕食懇談会を当方の申入れによって設営した。三役は昨年から交替し、若返り、いずれも新しい新しい感覚をもっているようにみえる。話題がプロ野球誘致にまで及び、私から1万円株30万が必要なのだとすると、それはできる、県民球団にすればいい、楽しみ夢を県民に与えることが必要だと彼等はいいだした。私も同感で話は<sup>ママ</sup>いた。核になる企業はないのか、小倉の井筒屋はどうかとすら私がいった。西鉄は過去があるし、岩田屋は庭球だし、玉屋はでは小さすぎ、九電、福銀は公共的性格が強いし、ということできずれも不適當。舎川議長に電々が民間に仲間入りしたのだから九州支社はどうかねということまでいいだした。話によると、一時中断していた九州への誘致問題が近頃又ひそかに話題になりつつあるらしいともいう。夢のような根拠のない話題だが、そういうことで話はずむ今日の懇親会だったが、北九地評は県評を常に別建てで意識していることは依然かわりない。県評批判もよくやっている。それだから、北九地評には県評とは別に義理だてしておかなくてはならないと心得ているわけである。

8月10日(土)

お盆シーズン<sup>ママ</sup>初まる

昨日今日台風の影響があつて若干は涼しく感ずる。雨も部分的に一時的に降ったようだが、全体としてまだ炎暑つづきというところ。一雨降ってくれないと、並木道のつつじなど、かなり枯死している。去年はこれどころではなかったが、今年も雨なしの日々が25日ぐらいつづいたのではないだろうか。おかげで稲の成長は実によく豊作の前兆十分である。冷房が普及しているためだろうが、人々は働いて働いて、この炎暑下でも休まない。でもお盆をはさんで一週間ほど連休制にしている民間企業があれこれ見うけられる近年ではある。今日は小倉から博多まで新幹線を利用したが、お盆の期間の人々の動きを反映してか、国鉄ばなれといわれるこの頃であるが、子供連れの乗客で駅はごったがえしていた。子供天国といえようか、親苦勞といえようか。先日児島、土井の二人が拙宅に来て夕食こんだんした際、土井のいわく、孫が二家族で4人も遊びに来て、奥さんはてんてこまいの多忙さというにわか変異。こうなると、しばらくだろうが若い母親天国、ばあちゃん地獄である。今日からはじまったお盆シーズンの感慨である。

8月11日(日)

お盆の礼に光円寺に参る

食事前の夕方天神の光円寺にお盆まいりに行った。円日成道住職はいろいろ出版物の形でその道を説いて信者に送付してくれる。平素のその活動への御礼ともいえる私どもの義務感からである。せめて盆正月にはと思つて行ってあいさつすることにしている。いわゆるお布施事件と深い関係があるのと、何か家系伝来の宗教的なものをここに求めようという気持もあるからである。住職の説明では昨日は8月14日にわれわれが<sup>ママ</sup>参詣したという。ギ

リギリだったのと比較すると今日は若干でも早かった。又県会議長の田中久也氏も門徒だという事だ。精神的なものが大いにある、これで肩の荷が一つ降りたような気になるものだ。住職には「県政ひとすじ」をあらかじめ贈呈していて早々と礼状が届いていたので、今年は一寸余分に念を入れたことになる。宗派的な特別の信仰がそうさせるのではないが、これ又公的な立場にある者の儀礼的な務めであって、今年の盆はこれでやっと肩の荷がおりたことになる。初盆まわりは13日にまだ若干残っている。

8月12日（月）

空にういた戦争物語の教訓

戦後40年、今年こそは画期的なあの8月15日以前と以後の日本社会の違いをとくに平和と民主主義の意義を新たにかみしめ直す時に来た感を深くする。マスコミは連日のごとく戦争や原爆関係の話題をとり上げている。だが、戦争体験の風化が云々される今日である。マスコミの報道や教師の語りは歴史上のこととしてしか受けとらないだろう。人類は太古より戦争をし、その悲惨残酷さは話として誰しも体験しているが、それ以上でありうるかどうかかなり疑わしい。核家族時代だから今の中学生以下の子供達に語る親たちは戦争を身をもって体験していないし、子供に語る気持は薄かろう。語っても真に迫るものが弱かろう。祖父たちはさびしく別居というケースが多いわけだ。そんな時、今、中曽根首相は靖国神社公式参拝と防衛費の1%枠撤廃の態度を国民の前に表明し物議をかもしはいるものの、押し切ってしまうかの如き姿勢であり、そうなっても国民の間に大きな反対も抵抗もおこりそうにない。まさに「風化」の時代だといえる。ただわれわれは、まさか核のボタンをおすことはあるまいと期待するだけであるが、ボタンを握っている人が正気を失わぬという保障はゼロだ。

8月13日（火）

日本航空羽田発大阪ゆきの群馬県境墜落事件

昨夜は8時頃ひまになり、ふくおか会館の宿所でテレビを見ていたら日航機羽田発大阪ゆきが524人を乗せたまま長野―群馬県境に墜落炎上というニュースでもち切っていた。10時すぎ就寝したがニュースはひっきりなしに関係報道にかかりつきりだった。今朝も同じであった。4人の子供達が生存で見つかり、あとは絶望のようだ。有名芸能人としては坂本九氏があった。カクマルが爆破声明をしたとの流説があったが信憑性はたしかでない。それにしても通常では考えられぬコースを飛んでいるし、尾翼の故障で操縦不能になること自体がどう考えてみてもミステリーということと考え合わせると、カクマルの犯行に関連なしとはしない。それにしても不思議なことが多すぎる。乗員を含む524人中4人が存命というのがせめてもの救いである。この事故は史上空前といわれている。日航社長の報道陣の質問の矢の第一発が、責任をどうとるつもりかと社長にきいていたが、非常識きわま

る。責任は一ヵ月後でも問いうることなのだ。文明の発達は事故を不意に大規模なものにする。

8月14日（水）

わが家の周辺を見て思う

1 昨日からうちの鈴虫が鳴きはじめた。涼を確実に知っているようだ。30尾は籠の中に動いているだろう。昨年同じ籠の中で砂に卵を生みそれがかえたのである。昨年は留守の時に伊藤さんに預けていたら猫が籠をひっくり返し、鈴虫が被害をうけ、傷ついたのが数尾残ったにすぎなかったもので、今年はダメかと思っていたのにうまくかえたのである。これから3ヵ月近く、夜うるさいほどに鳴くことだろう。外は相かわらず蚊が多く、出ると必ず襲撃される。天気がつづく夕方打水は鉢物には必要である。西側の庭のコケにも必要である。藤江君が百合を掘り出していたが、今年のは例年になく粒が小さくまた数も少ない。何やかや一ぱい植えているので十分に育たないのであろう。元々ものを植えすぎるのである。草抜く人もいないので庭は雑草の生い茂るにまかせている。蚊がいるし、暑いので放置することになる。昨日浜中県議の初盆におまいりしたが、手のあるないにかかわらずきれいに手入れしてあった。考えてみればわが家は貧相なものだ。しかし、今さらこれ以上立派にしようとは思わない。夏草が茂るのも自然でよかろう。

8月15日（木）

8月15日朝刊

早朝の涼しさが有難い頃になった。それでもあまり早く床を出るとその日1日は調子がよくないので7時すぎまで横になっていた。起き出て新聞をとってくる。日航機の事故原因は尾翼の損傷とトップ記事。離陸後13分パーンと爆発音が起って機内が真白になったと乗務経験をもつ乗客生存者落合由美（26）が語っている。なぜという理由は依然不明。阿修羅の世界が現場群馬県御巢鷹山腹に今なおつづいている。昨夜まで100ほどの遺体が搬出されたが、まだ400も未処理のままである。今日15日、福岡県評は新聞1ページ全部に「平和」戦争政策反対の大きな広告を掲載した。中曽根内閣の靖国公式参拝が今日正式に行われるが各方面からの批判が沸いている。参拝して一礼するだけだが花代などは公費支出という。それなら違憲でないという政府と、それでも違憲という批判側。他面政府は従来の解釈を今年から変えたと説明している。西日本新聞では半ば興味をひくように、1年半後にせまった知事選で自公民結束の動きが三原自民会長を中心に始まり、社共側は県評中心に国鉄分割民営反対の165万署名運動で奥田の再選の始動としていると書いている。

8月16日（金）

龍野中学校時代の旧友たち



午後1時から3時間ばかり、龍野鶏籠山上の赤とんぼ荘で同期の集りがあった。関口、広田、三輪、嘉ノ海、田中（一大）あたりが世話役である。昭和10年入学だから今年で満50年。大学教授や自営業以外はすでに第二の人生ないし浪人余生の人生に入り、みんな白髪になっている。200人の同期生のうち59人が死亡し、今日の出席者は50人余であった。足立、平木、加茂、山本など姿が見えなかった。すぐ見てわかる者もいたがむしろ例外的で、名乗ってもらってはじめて思い出す人、名乗ってもらってすぐ又忘れ去る人、いろいろで、半分ほどは宴がすむまでわからずじまいであった。それぞれがよく勉強をして、戦争の苦労をなめて、戦後の時流に乗って人生の旅をしてきた。戦争の犠牲者や最近まで歯の抜けるように亡くなっていった人があるわけで、戦争と無関係に若くて病死した者も十指をくだらないようだ。私は四修だから、入学五十年ということでテーマなしの文集を作ってはどうかと提案したら幹事たちはそれを受けとめてくれたようである。だんだん年をとってくると過去が懐しくなるのは誰しも同じ、中学も入学当初の思い出が一番鮮明ではなかろうか。卒業五十年というあと5年、そのうちに死ぬ者もあろう。だから今入学50年ということで鮮明な記憶で文集を作ろうと私は提案してみたわけ。

8月17日（土）

「知事との対話」を本にしたら

「県政ひとすじ」は売れているのか、増刷するという話がきこえてきた。ほんとうだろうか。まずまずの評判なのでホッとしている。来年は第二弾をと思っているが、この場合「知事との対話」ということにしたらどうかと考えている。昨年半ばから民生委員、ケースワーカー、地域おこし、等々話題がかなり多く出されてきた。今日は環境浄化について地区役員に来てもらって実践活動例を出してもらった。これもなかなかいい話題である。空缶、合成洗剤、乾電池など、今日では個々人が被害者から加害者へと公害のウエイトも変化しつつあるが、それへの対応は、行政よりむしろ個々人の総立ちにまつところが大きいとされる時代になってきた。今日の話の鍵はまさに「県民総立ち」である。そうした実践例は次々に拾えば一冊の本になること明らかである。検診率の引上げについても地区役員一人一人の努力に負うところが大きいと説明された。台所から出てくるゴミも燃えるゴミと燃えないゴミどころかもっと区分けしていけば、ゴミ公害もかなり防ぐことができる。人々は贅沢になった役仕末をみずからやらないといけなくなってきたのである。

8月18日（日）

真田義一先生のこと

8月15日龍中同窓会出席のため佐方に帰省した折松田君をわずらわして真田義一先生と3人で相生の（那波港）魚一で夕食歓談した。その先生が今日重ねて塩味饅頭を送って来て、中の手紙にていねいな御礼の言葉が書いてあった。もう満で72歳という。昭和十年に私が

佐方に行った年の1～3月の間、補習勉強の場として、先生のうちの2階で、教えてもらい、かつ遊びのチャンスを与えていただいた。大変寛大に遇して下さって感謝の程を知らないくらいである。弟の忠二君は20年7月17日にミンダナオ島で戦死ということだ。中学校を私より一年上で卒業、造船所に勤めていたが、敗戦要員として比島に派遣されたのであろう。忠二がいたらよろこぶだろうにと書いてあった。戦争のことで愚痴をいっても仕方がないが、もう半年も早く降伏していたらずいぶん死なずにすんだ人がいたに違いない。それを思うと龍中同窓生も然り、ずい分多くの友が無念の犠牲者になった訳だ。初治（養父）が私の身のふり方について真田先生にかなり相談したらしいことをあの夕食の席で話っておられた。私を姫商にやろうとしたらしいが先生は中学の方がいいとすすめたとか。

8月19日（月）

知事後援会は休眠をつづけている

田中光夫氏に連絡したら今日午後のあき時間がよいということで福島泰氏を伴い来訪（森山書記も同行して）。話題は知事後援会のことであった。後援会というのは名はあるが実がないし、事務をしているかの如く、してないかのごとくである。女性が1人いるというが仕事の成果は何なのやかわからない。問研に寄って今回の出版物頒布状況をきいたが労組ばかりが名を連ね、社共両党も後援会もこの書物を読ませる努力は何もやってないようだ。後援会はこんな時にこそぐっと前に出て書物の頒布活動をするのが当然だろう。だのに何もやっていない。センスもなければ事務能力もない。事務長格の森田則一氏は病気がちのようだし、諸岡氏は何を考えているのかわからない。二人ともダメですよと田中氏はいう。私は不平はいくらでもあるが、陣頭に立っていうまいと思う。であれば誰かが陣頭に立たねばならぬのにその人物がいない。暑中見舞状もいい加減な点検での出しっぱなしのようで300通ほど拙宅への返却便がある。事務の知恵も統一性もできないままで推移しているのだ。

8月20日（火）

次期選挙を意識して自分で一日を多忙にしている

次期選挙を意識した新聞記事、又それを意識したこちら側の言動である。何もかもがそうになっているみたいだ。後援会がどうあろうとかまわないのにそれが問題意識に上る。暑中見舞がどうこうのと、それにふりまわされた動きを私自身とっている。アドレス帳を整理したり、こまかく手紙を書いたり、色紙その他の揮毫を引きうけたり、すべてさに非ざるものなしとっていい。業界その他の会合に顔を出して意にそわぬ愛嬌もふりまく。知事室への来訪者にもていねいに応対する。そのようにして一日の時間をつぶしていく。滅私奉公という昔の言葉を今又自分で肯定して実行しているのである。大変損なことだと思う。そんなにまでして次期選挙を考えねばならぬのであろうか。否、それを考えずとも知事の

座そのものが客観的に要請されるものも多くふくまれているから、すべてがそうとはいえない。次期を考えない進藤福岡市長の行動をみていると、今はそれがはっきりでている。そうあってほしいと思うのに、やっぱり12時間労働を秘書室が組んでくるのを当方は甘受してしまっている。体が二つあってもいいと思うほどに動いている。健康だからこそできるのであろう。こんどは出馬しないぞとやってやりたい。

8月21日（水）

後援会活性化について問研からも提起

八丁君が時間をとってくれというので、中食前2時間をとって衣笠氏同席で話し合ったが、話題は先日から気にしていた後援会の活性化ということであった。天神の浜の方に事務所を構えたという後援会（清進会）がほとんど機能していないということの問題にし、今のうちその活性化に手をつけないと次期知事選の苦戦が思いやられるという。太田薫氏の線で都庁にいた島野房己氏を福岡に呼ぶことにした。大坪—岩崎ラインに、八丁—近藤副知事が応じなかったのだが、結果として島野氏を後援会にはりつけ、森田則一氏、諸岡氏らがそれに協力するという形で女性書記を一人おいて事務を進めているらしい。私は暑中見舞や年賀状などをきっちり出せるようにすることが基本だと思うが、うまくいっているとは思えないのと、今回のように、「県政ひとすじ」が出版されたら後援会活動として進んで取扱い出版記念行事を企画するなど絶好のチャンスとなすべきなのに全く知らん顔をしているというこの二点を指摘した。八丁君は後援会立直しには彼等にまかせておけないから知事自からやってもらえないというが、それはどうだろう。どこから手をつけるか。

8月22日（木）

産炭地と高齢化にどう対応していくか

昨日今日の太宰府年金センターでのサマーインのテーマは高齢化問題と産炭地活性化問題であった。二つとも県政の重点テーマに入っている。産炭地問題ではこういう言葉を使いつづけること自体にも疑問が投げかけられた。先立って筑豊で私が自立を強調しすぎたとの批判がでたが、それは当然との確信が高まってきた。ぶらさがり主義をどこでどうチェックするかである。直方や飯塚ではすでにかなり「産炭地」からの脱却がみられるが、田川がいけない。自治体も群小割拠でまとまりがつかずジリ貧に向っている。何回でも自立を強調する必要がある。他方、高齢化問題についてだが、それは僻地ではいろいろ対応がなされ実例にも事欠かないが、むしろ都市部に、都市問題として深刻化しつつあるというべきだろう。地域福祉といっても、都市ではコミュニティの再興はいうべくして困難きわまる。高齢化にどう対応するかは回答は誰ももっていない。今後研究会を作っているいろいろ考え、実験してみて試行錯誤をいとわず、行政指導していくしかない。国、県、市町村の守備範囲と住民の自立とを多様性をもって明らかにしていくしかない。決った理くつはな

い。

8月23日(金)

陳情

飯塚市長、市議会議長を含め県の企画開発部長その他課長ら、大挙して今日一日陳情団として東京の官庁を駆け抜けた。問題は九州工大の情報系新学部の飯塚市への誘致につき、従来の開設準備費を創設費に格上げしてくれということである。各省の概算要求原案がほぼまとまるのが今時。そして月末までに大蔵でそれが政府原案にまでもってゆかれる。そして年末までに大きな政治課題として綱引きがくりかえされる。文部省筋では国立大学、学部の新設はスクラップを前提としてのみ新設がゆるされるという基本方針が貫かれているために、こんどの情報系新学部の新設という話は極めて困難な例外ということになり、それだけに「政治」の産物という以外には実現しそうにない。国立大学のことで知事が奔走せねばならぬのはこの「政治」のせいであり、何かの可能性に向けてあちこちの「立候補」地がしのぎを削った陳情合戦を展開するのである。支配政党はそれが目的と考えているのかも知れないが、万事がこのようにして、「政治」の産物として実現していく。新幹線の新設はもっと巨大な政治課題になっている。防衛産業もだ。

8月24日(土)

体調があまりよくない

近頃とくに眠りが深まらない。もちろんねつきも悪い。薬の連用のせいかも知れぬ。何か心配ごととか、考えごとがあるかというとなんもなし。ねたかどうかわからない状態。いつでも目がさめ、いつまでも眠れないような状態がつづき、常に睡眠不足感がある。朝6時起床、一番機で上京というような日程にはとくに不向きで、こんな日は一日中不機嫌である。早くねむりに就いたらいいのかも知れないが、そうとも思えず、いつも11時か12時になる。途中必ずといってよいほど便所に起きる。そのあとはねつかないが、そのままだも7時ごろまで床にいた日なら調子は通常であるが、目がさめているからといってそれ以前に起き出してしまえばその日は一日中調子が悪い。低血圧ということだろうか。毎月の検診では70台と120台である。たとえば78と112といった具合だ。それから近頃は運動量が大変少ない。夏の暑さのゆえでもあろう。万歩計は1000とか2500とかいう日が少くない。7000歩という目標に対し、暑くなる前なら5000とか4000とかを記録するのが通常であるが、この暑さの中で1000前後というのであれば明かに運動不足というほかはない。それに近頃、さきに治療した左上奥歯4本が調子が悪い。

8月25日(日)

高齢者はみずから組織的に動き出すべきだ

今日来た木原半祐氏は70歳という。頭はまっ白だが元気そのものだ。先日の松田貞夫君の話によると、腰がまがったり指や脚の形がかわったりするのは年ともに骨がすり減るからだということで、あまり使いすぎぬのがいいとの意見であったが、木原氏は全くしゃんとしている。奥さんも同じで若くみえる。長男は一彦より一つ上という。彼の話では元気であるだけで体をもてあましてすることがないというのが正直なところしんからの訴えのようだ。近所の人が年寄付合いをせよというが気分的にいやだとのこと。だからゲートボールに誘われてもいかんという。俺は年寄りじゃないんだぞというのだそう。先日太宰府でのサマーインの話題にも出たのだが、こうした元気な高齢者を遊ばせておく状態は、木原氏の言葉を借りると「国家的損失」ということになるのだが、さてどうするかとなると、組織も地位もカネもない者にはいい知恵は浮ばない。木原氏は「失対事業を近くで見ることもあるが割り込むわけにはいかんしなあ」という。私見では高齢協ではないが、何か組織を作って解決に乗り出したらと思う。その力で行政を動かすことだ。

8月26日（月）

忙しい中で出版（「県政ひとすじ」刊行1ヵ月後）

「県政ひとすじ」がRKBの28日の生放送に予定されている。シナリオの一部に、忙しいからだでも原稿が書けますねとの部分がある。忙中閑という言葉があり、忙是揮毫静奕棋ということもある。「県政ひとすじ」はこの4月中国旅行のとき、素稿をバッグにしおぼせ北京の迎賓館釣魚台の一室で手を入れたり努力をつみ上げてできたものではある。ひまがあればできるというものではない。皮肉にきこえるかも知れないが忙なればこそできるのである、とさえいえる。中学校の時も十分時間を与えられている人よりも自分のように農業の手伝いをやってこそ学習を積み上げたといえる経験がある。ひまがあればかえって遊んでしまうだろう。今の知事職は激務といえる。しかし、心がけいかんでは出版することは不可能ではない。「県政ひとすじ」は初校が売れ切り重刷となるようだ。何となくいい気になって、来年も何か出版を考えたいと思っている。それには忙か閑かの区別はわからない。強がりのようでもあるが、協力者をえることによって可能となる。「県政ひとすじ」も数人の人が実によく協力してくれた。協力者がえられるのも誠意の産物である。

8月27日（火）

社会正義の実現に臆するな

県営住宅の家賃滞納82ヵ月に及ぶ某氏につき、昨日午前福岡地裁の執行官が強制執行の通告に行った。彼は古美術商で25点が差押えられたという。9月25日以前の退去を言渡されたのに対し、滞納分は支払う、たちのきはしないといったという。同種の件で県は131人をリストアップし、すでに76件を提訴、28件につきすでに勝訴の判決をえている。28件についても順次強制執行にふみ切る方針。家賃を払わずそれが長期に及ぶということは

民間では考えにくいだらう。県側の倦慢もあろうし、借家人側の横着もあろう。この両者のかもし出す精神的風土は実にけしからんことだ。払えぬなら出て行くか、延納請願をするか分払賦払いを申入れるか、何らかの誠意を示すべきだらう。昨日強制執行された某氏は「県は取りきるもんか」「強制執行などしきるもんか」と近所の人に使っていたとか。国や県からは取れるものは何でも取れ、払わなくてすむものなら払うまいという考えが多くの人々の心底にある。北九州病院グループの基準看護料の詐取、生活保護の不正受取など例は少くない。それでは社会正義が許さないだらう。県は社会正義の実現に臆することがあってはならぬと私は主張している。

8月28日(水)

左の耳によくきこえる鈴虫の音

RKBが内部人事の入れかえがあったためか、今日9時55分からの「情報ボックス955」という自からの番組に私を出演させ、出演料まで払って「県政ひとすじ」その他の宣伝をしてくれた。今はもう鈴虫のシーズンで、うちでかえらせたのが今2ケースに分け、台所と応接室で不断の合奏をやっているの、小さいもう一つの籠を買ってきて分巢し、これをスタジオにもち込んで演出の手伝いをさせた。話題がこの鈴虫から入ったので雰囲気はなかなかソフトだった。もう一つ孔子廟展入賞という知らせのハガキと出品作の下書きももち込んでいたので、話題が砕けたものになって、後刻評にしても、とてもよかったという。快感を呼ぶような旋律は左の耳で聴き、不快な騒音は右の耳がはねのけるように聴くということを最近何かで読んだのであるが、昨夜は今日RKBスタジオにもち込む虫籠を寢床の右2mばかりはなれた所に置いてねたが、鈴虫の断続する旋律をよくきいていると、先入感があるためか、左の耳が受けつけているように思われてならなかった。いい声は左から、悪い声は右からというのは議会に出た時を連想させるねと、今晚山ノ上ホテルでの社党県議政策担当の白石、長谷川両氏に雑談のうちに話すと、議会でもそのジェスチャーをとって見たらどうかねと、これまた冗談。

8月29日(木)

会議などの雰囲気はやわらかに

26日から3日の日程で「地域づくり青年交流日米会議」が大分県下で開かれ、今日は各県に2~3人ずつ米青年が分かれて行動。本県青年代表らと交歓するため、来庁したアメリカ青年は3人、うち日本人系三世というのが二人いた。庁議室に招じ入れて30分話し合い、6時半からは城山ホテルで県主催の交流レセプションを行った。固くるしい話はやめようと言って、「地域づくり」日米課題みたいな話はしないよう訴えた。これが大へん米側青年にうけたようだ。米青年にとっては地域づくりといっても、あまりピンとこないようであったので、私が水を向けたのである。日本人はどうも話を形式的に、儀式的に、理論的にも

っていこうとする。外国に旅行した時に、理くつづめの話はどうも面白くないのに、それを日本人は知ろうとしない。私は、話は固い程敵を作り、軟いほどき味方を広げていくと  
いった。また、有効交流時間の三分の一は固い話でも仕方がないが三分の二はやわらかい  
話にしたらいいともいった。そうしたので、場の雰囲気はとたんになごやかになった。米  
青年たちは知事がなごやかに青年に接してくれたと感謝の意を表してくれた。

8月30日（金）

筑豊のJCにも乞食根性が

飯塚、直方、田川の3青年会議所の連合で6時半から9時まで知事と語る夕べを開催、あ  
と市内鯛吉で懇親会、10時半に切り上げて筑豊ハイツに宿泊という執務後のスケジュール  
になった。この企画は広報室の対話にものせてはあったが、青年会議所主導のものである。  
この夏福岡で青年会議所の者たちが集った際私が、「恥部」発言をし、「精神構造」(風  
土)の発言も記者会見でやったのが引き金となったこの集会である。筑豊の青年たちは自  
分では真剣に自立のために努力しているというが、今日の集会でも、予算を取ってこいだ  
の、自治体財政援助をどうしてくれるのだ、知事のイニシアティブがないだの相かわらず  
の依存主義にもと<sup>て</sup>ずく発言が多かった。「棚ボタ」を考えるなということもどこかで私は  
いった。すべて問題発言というのである。がすべてが実態の一部でも表現する特徴をつか  
むのに適切な発言と私は今日ここに来てすら感ずるのである。そのような精神風土を生活  
保護や失対のみならず、これらJCの諸君にも強く感じるのである。彼等は大分の平松知事  
をベタほめにする。自分たちがやっているのに奥田知事は「総立ち」をいうだけで自から  
何もしないと非難する。JCも乞食根性が身についてしまっている。自分でやる気をもつ以  
外にないのだが。

8月31日（土）

台風13号で被害

雨らしい雨が1ヵ月以上降らなかったのに台風一過という文字通り3~4時間でかなりの雨  
がもたらされ、万象うるおった。一息というところ。しかし今回の台風13号は暴風をとも  
なった。木々は吹きちぎられ、看板はとばされ、小さな被害も集計できるなら、かなりの  
額に達するであろう。農家のビニールハウスも被害はでている。作物にも出ていよう。農  
協あたりから何とかしてくれとってくるかも知れない。商家あたりは看板が倒されても  
何とかしてくれとはいってくることはない。漁業の被害も出たようだ。海で行方不明も何  
人かある。降らねば困るし、こうして暴風雨だとまた困る。自然とはこういうものかも知  
れない。千代町の借家からも屋根がとんだと訴えてきた。修繕費が家賃より多いという悪  
循環のくりかえしだ。わが家の方は植木鉢が全部ひっくりかえった程度だが、台風とは無  
関係に、わが家創建以来の松が枯れた。植木屋が切り込みすぎたのではないかと思われる。

惜しい。静かな雨風が五風十雨という間隔で降ってくれればと願う。台風12号がまわり道をして13号の次に追っかけてきている。

## MEMORANDUM

筑豊JC反抗でこっちにも同感がなくなった。

最近ほんとうに頭にきたのはJCの者たち、とくに筑豊のJCが私の「恥部」発言に反撥を示したことである。これが自負心を傷つけたであろうことはよくわかるが、そういわれる実態があるということも前提にものと考えてほしいのだ。産炭地六法だの地域改善政策だのといって、政府や県の施策により、生活保護行政や失対事業により、つまり振替所得により、いいかえれば非生産的な方法で、筑豊の所得のかなりな部分がまかなわれているとすれば、そのことは当面の処理としては必要かも知れないし、善政かも知れないが、決して根本的な解決策ではないことは明かである。その上筑豊にはそのような振替所得に寄生している(ピンハネしている)部分が少くない。詐取、脅迫、ワイロその他あれこれの手段で、かなりなカネがこれら振替所得から横に流れるカネが動いている。それは一部のことで決して全体ではないといえる。しかし一部をもって特徴的に表現しなければならぬこともあるわけだ。指さきほどの腐った部分のあるリンゴでも、このリンゴは腐っているというのだから、こうした状況を筑豊の「精神構造」ということもできるわけだ。それがタブーになったら筑豊は救いようのない淵におちこむ。勝手にせいといいたい。そういう気にさせたのが筑豊JC反抗である。

9月1日(日)

高野切を臨書している

今日は終日在宅して揮毫などに時間を費した。ハワイゆきのために色紙を60枚準備した。そして時間が余ったので高野切第二種を練習した。半紙に10枚ほど清書したことになる。第二種の半分ぐらいのところまで書き進んだ。7月と8月この2ヵ月の間に、第一種と第二種の半分書いたことになる。この分なら今年中に第三種まで全部一とおりに清書し残せることになる。まだまだ運筆の滑らかさ、速度の点で幼稚さは免れない。第三種は以前やったことがあるからそこまでいけばかなりよくなる。こんなことで余暇利用はいいのかなと思うが、一応はひらかなを手本どおりやらねばなるまい。そのあとかなまじり文に入ろうと思っている。どこまでいってもこれでよいという到達点にいかないのだからどうしようもない。読みたい本、小説などいくらでもある。今「幾歳月」に書いている自叙伝的記録も気になっていながら進んでいない。できるだけ暇を見つけて書いていかないと不完全さが残ってしまう。いままだ龍野中時代にとどまっている。記憶が少いので進まないわけだ。今日のように時間があれば、こうもしたいし、ああも考えたい。



9月2日（月）

嘔吐してしまった

官約移民100年のハワイ県人会祝賀のための訪問が2日から7日までの日程で、今日午後2時すぎ板付発で総勢100人で出発となった。ところがどうしたわけが、団長の私が板付出発直前出発式の時になって嘔吐するなど思いもよらぬ事故になってしまった。5月にも一寸した嘔吐があった。従来胃腸の調子はよいとはいえないが吐くようなことはなかったのに、今年になって、しかも近々2度目。食あたりなど考えられないのに、どうしたことだろうか。日航社は板付でも成田でも、ハワイへの機内でもていねいに処遇してくれた。出発前の記者会見（2社）のときに気分が悪くなった。カメラのライトもいやだったが、朝日系の質問がまた嫌味たらたらのものであったので、気分的なものも手伝ったのかも知れない。それよりも昨日は休みもせず、固定した姿勢で高野切臨書を長時間やって疲労が出ていたせいもあるだろう。ともあれ、体がデリケートになっていることを自分で忘れていたようだ。中食のトンカツ定食のあと50分ぐらいの事だからそれが自分に合わなかったのであろう。嘔吐が十分でなかったのが苦しき百倍、板付では汗びっしょり、シャツとパンツは新規に着がえ、ワイシャツはアイロンで乾燥してもらった。

9月3日（火）〔ハワイ時間9月2日〕

コナでの県人会100年祝賀会

ハワイ官約移民百周年の公的なものとしては実行委員会形式ですでに6月20日にホノルルのアワク知念公会堂で行なわれ、これには永井副知事が参加、全国的にも各県、政府関係者が参加した。福岡県ではこれとは別に知事を団長とし、県会議長、豊前市長らを副団長とする祝賀訪問団が編成され、今回の訪問となり、コナ、ヒロ、カウアイ、ホノルルの4つの県人会で歓迎祝賀の会が行われ、県からは御祝儀、記念品、高齢者へのお祝状記念品がおくられ、知事は別途色紙を書いてさし上げるという形をとった。その意味で官的移民100年というが、あくまでこれは県レベルでの行事である。新聞（朝日）ではいや味をこめて訪問団が多すぎて県費の無駄づかいという記事を書いたが、それは解釈の仕方で、実際、開拓者たちの苦勞から始まり、今日の政治経済の隆盛までの100年を、敬老の意をこめて回想祝賀し、姉妹関係にある県の立場をかみしめ直すということは十分意味のあることだと思った。とくに、コナなど県人会の人達はわれわれ訪問団を迎えて、真の祝賀の気分になってくれた。今日のコナ、そしてマナゴホテルでの宴会はその意味がよくこもっていた。県人会長をしている真子さんの経営のホテルなのだ。

9月4日（水）〔ハワイ9月3日〕

ヒロでの上村雅一さん

前回訪問のときは私はいけなくて、みゆきがハワイ島はいい所だといっていたのを思い出

すが、その通りだ。ヒロはホテルも一流。海岸近くの公園もとくに気に入った。ホノルルのように雑沓がないだけでも大変にいい。景色も抜群である。夜、除隊クラブハウスで移民 100 年のヒロ県人会祝賀会があった。ここではハワイ島県人会顧問という上村雅一という人が少し長すぎたがあいさつした。奥田知事が少しほめられすぎたということかも知れない。県民党でやれということも言った。それに対し、自民党の県議が一寸やじった。亀井のことにふれなかったということもあろうが、一般席は感じがよくない印象を県議たちにもったに違いない。上村氏はそれでも党派をこえてと強調した。郷土を常に思い、その繁栄をきくとうれしいといった。実にすなおな表現ではないか。自民党の連中は対立すべき場と共感すべき場を区別しないでいる。奥田をほめすぎると感じはよくないかも知れないが、そこは抑えて、共感の中でなぜ沸こうとしないのか。下劣な人達である。上村氏はハワイ島でいろいろの役をしている古老の一人だ。「修身」の教科書がよかったと素直にのべた。日の丸も必要といった。だが軍国主義的な意味では決してなかった。彼はひたすら日本人としての共感を求めて強調していたのである。

9 月 5 日 (木) [ハワイ 9 月 4 日]

ハワイで竹中組長逮捕されたというニュース

ホノルルでは前回同様リージェントホテルがわれらの泊地。今回の訪問では目新しいものはなく、又求めてあちこちをまわることもなかった。総領事館を訪ねたが総領事は留守、田中陸が対応。彼は福岡県出身の若い外交官だ。一和会と抗争中の山口組の竹中らがホノルルで、オトリ捜査によって逮捕されたということ盛んに話題にしてくれた。田中領事はくわしく知る立場にある。竹中は山口組の 4 代目組長、逮捕されたのは 3 人。現地時間 2 日午後ホノルルのホテルで覚醒剤・ヘロインを所持しているところをハワイ警察捜査員が踏み込んで逮捕したという。麻薬取締当局、税関、移民局、入管、警察らが協力して「おとり捜査」の成果としてのこらしい。日本ではできないことをアメリカがしたわけで、日本へのつらあてでもあろうかといわれる。香港も舞台とした大がかりな三角行動範囲の取引きで、自動小銃、ロケット発射装置、殺し屋依頼なども大きく問題になるだろうという。百数十億円にのぼる取引きを全く気づかれぬように最後まで相手をだましつづけて化けの皮をはぎとってゆき、抑えたという。一年も前から周到に準備された捜査劇らしい。大がかりな国際暴力を企画する方もする方、おとりで対応する方もする方。びっくり。

9 月 6 日 (金) [ハワイ 9 月 5 日]

カウアイ (KAUAI) 島を瞥見

短い時間ながらのカウアイ島訪問は実によかった。但し昨夜は 3 時ごろ便所に行った後腹痛のためよく眠れず不調がつづいていて心は晴れではなかった。自然がよく残りまた来てみたいのがカウアイ島である。ワイキキビーチではなく、ハワイ島、カウアイ島がどれほ

どいいか、来てみた者にしかわからないだろう。ワイアレアレでのボート遊び、バンドつき土民の踊りで退屈させず両岸の景色のすばらしさ、中間点（折返し点）で上陸、シダの洞窟に行き、「結婚式」をした。ハワイ島もだがこの島も火山島でハワイ群島の中では一番古くから発見、来島者があったといわれている。生活手段は貧しいのかも知れないが、こういう所に来てしばらくでも住んでみたいという気がした。島を行政上 county と呼び、長を mayor という。トニー国村さんがその人で、小太りながら好人物である。有吉知事と並び、州議会で有名だったらしく、その行政手腕は島内で高くかわれている。この島への訪問は今回 19 人来訪した県議のうち議長の田中氏と野原幹事長の二人だけだった。二日つづけてゴルフに行ったという県議もあったが、ハワイに来てまでゴルフをしなくとも、現地の野趣を十分に味わってみようという気持はわからないのだろうか。

9月7日（土）〔ハワイ9月6日〕

ハワイでもらったレイ

9時45分にホテル発、荷物は旅行社におまかせだ。このホテルに着いた時、日本航空と白木屋から花と果物の籠がとどけられており、とてもわれわれ二人で消化できるものではなかったので、事務側に少しは処理してもらった。ハワイはどこでも客を迎え敬意をあらわすのに花環（レイ）をくれる。私は残念ながら花の名を知らない。カーネーション、ハイビスカス、プーネリア、パラカラ等々その他あれこれある。赤、白、黄緑、大、小、密疎さまざまであり、ものによっては大変な手数を要するものである。もちろん年中花はあるらしい。しかし中には少しずつ冷蔵庫に取りためて保管貯蔵をしないと、数がとても間にあわないものもあるという。日本に帰る時、別送（機内もち込み）箱の一部として、コナでもらった生花があったので、その中に、まだ新しいだろうと思われるレイを何本も入れて持ち帰った。成田の税関で没収されればそれまでと思ったのだが無事通関できたので、一彦のうちにその箱をもってゆき、開いて、一家全員揃っての写真撮影のとき、レイを首にかけて撮った。いい匂いが横須賀まで運び込まれ、みんながそれを楽しむことができた。

9月8日（日）

横須賀での「全員集合」

昨日ハワイから成田に着き、荷物は太石君に処理してもらってわれわれは横須賀の一彦のうちに寄った。太石君と代わった佐々木君が送ってくれた。啓二、ライヤ、直美も来ていてみんなで夕食するのを待ちかまえていた。久美、麗衣の二人は少し前羽田まで呼んで会っているのでびっくりはしなかったが、二年も見ないうちに、すごく大きくなり、久美はもう大人とっていい。小学6年と4年。もう何でもひとりでやって手がかからない。夏休みはかなり泳いだのか黒くやけて元気そのものだ。全員集合という形になり、みんなではしゃいだ。ただ私は腹の調子がもう一つ十分でなく快活になれなかった。ハワイからの

みやげに花輪レイがたくさんあって、それを各自首にかけ、入れかわり立ちかわって写真をとったりして一時楽しい時間をすごした。みやげのコーヒーとチョコレートは直美がちゃっかり三等分して、それぞれ持ち帰ることになった。10時半頃啓二直美は引揚げた。旅費がかさむのでわれわれ夫妻が上京するのが「全員集合」には一番費用が安上がりになる。福岡にということでは誰かが遠慮してしまう。こうした「全員集合」は2年ぶりぐらいではなかろうか。今後はあれこれ条件が加わるからますます困難になるだろう。正に一期一会である。

9月9日（月）

野村証券、総研からの情報

企業適地（工場立地）説明会が日本橋の野村証券本社の会場で行われ、122人の客の参加を得て盛大裡に終えることができた。この県の行事には野村証券、野村総研がいろいろと援助協力してくれて有難かった。福岡県のPRに大いに役立ったと思う。われわれはこのごろ県政活性化の面で県が大いにポテンシャルをもっていることを強調しているが、今日の野村総研の上野氏の講演でもそれが指摘されたと思う。上野氏は臨海型の時代から内陸型への傾斜についても指摘していた。重厚長大が臨海型とすれば、軽薄短小は空路と高速道路によって立地価値が高められ中央指向型からもはずれるわけだ。福岡県をもう一度見直そうということで、今日の説明会、講演は勇気づけになったと思う。それから上野氏の話で面白い指摘と思ったのは、近頃企業のベンチャー化が進み、従来の企業と製品の結びつきが一定してこなくなったことだ。私は近頃、宇部興産は何をする企業なのかといったことがある。東レが例に出た。それほど企業の製品が多様化しシフトがえがおこっている。新しい結合体がおこっている。製品またしかりで、この方面の情報はしばらく時間をおくともう古くなってしまうのである。

9月10日（火）

ハワイ官約移民100年記念福岡県人会慰問旅行の意義

ハワイのみやげをさげて県記者クラブ室に行き雑談したが記者たちはあまり興味なさそうにきいていた。私はハワイを観光、新婚旅行地というように表面だけで捉えるのではなく、日本人移民100年の歴史的足跡という観点でとらえるべきだということを付言しておいた。夕方アメリカ総領事館にモーフォード氏を訪ね帰国報告をしたときも同様のことを付言しておいた。ハワイでは単に官約移民100年という形式的祝賀というよりは、この100年が何を語るかということについての咀嚼の仕直しがこの際必要ではないかということをおは強調したのである。砂糖キビ畑での奴隷同様の労働からの立ち上がりであり、太平洋戦争期の迫害、戦争への駆り出し、そしてヨーロッパ戦線などでの勇敢な戦闘歴を残した日系人の足跡は特筆すべきものをもっている。そして今日の有吉州知事の実現、州議員の活

躍。そうした解放、活躍、自由、その上に今日のハワイがあるということを考えてみる必要がある。又ハワイ州のおかれた環太平洋諸国との交流関係の位置、役割。こうしたハワイと州県姉妹関係に立つ福岡県なのである。決して朝日新聞がというような観光旅行ではなかったのである。

9月11日（水）

自民党県議ハワイ訪問者の反モラル性

県会議員の中には思い上がったようなのが時にいる。とくに自民党の1年生議員がそうだとされる。それが今回ハワイ訪問の時にもあらわれ、事務系の者から輦蹙をかつている。他面、ハワイ州知事レベルでは強い不快感をまき散らし、日米親善にマイナス作用を与えたのは確実である。とくに私のあいさつの時にヤジを入れることが多かった。日米という立場で、又は福岡県とハワイ州という立場でものをいっているシーンの中で、何が県議会の与野党なのか、それをわきまえないのだ。こういう場で亀井が奥田がという比較をもち出すべきでない。向うの人にきこえるようなヤジの形でなのである。自民党議員の二人ほどがワシントンプレースの知事招宴に招かれなかったという。多分、県議会で私にハワイとの交流についての質問中「朝貢」外交ではないかと発言したのが向うにチェックされていたからではないかと推測される。あるいはハワイより韓国をといた発言も問題にされたのかも知れない。定かではないが、有吉知事夫人がワシントンプレースの来歴を招宴の席でとくに説明したが、「年の割に厚化粧して」といったとか。そこには有吉氏の息子、娘もいてきこえていたとのこと。最低というしかない。それが事実だとしたら。

9月12日（木）

病院の経営難

自治体病院（県立、市立、町立）の経営難は今日軒並みである。今日、市町立のその経営難を県費でみてくれないかとの陳情が、市町村長、病院長など揃って要望にやってきた。いわば厚生行政、医療行政のしからしむるところであろうし、医療機械が不断に革新されていく今日、それに追付けない「機械貧乏」ということでもあろう。厚生省は医療費を切り下げる。医師不足で人件費は高騰する。医療機械のおくれた病院には患者は寄りつかない。患者は療養費払いの強化で負担を嫌いニーズを落としている。公立病院だけでなく、民間医療機関にも同じ環境はある。公立なるがゆえに、民間ほどには「うまく」立ちまわれない、又は経営におおまんさがあるという差はあるだろう。しかし、市、町から県に助けてくれという要請はあっても、よろしいというわけにはいかない。要請する側は公共医療、地域医療の確保に県は責任があるはずという。正論ではあるが、では、というわけにはいかない。どうするかということについては審議会のようなものを設置して結論を出してほしいと思う。そうすることによってコンセンサスがえられたら、どうするにしてもし

やすい。県立病院も含めて考えてほしいのである。

9月13日（金）

暴風雨被害地を視察して感じたこと

台風13号が去る8月31日に暴風を伴い九州西部を縦断したが、その際、かなりな被害を残した。天災の少ない福岡県ではあるが、昨年の干害もそうだったが、小さな天災はつづいている。さけられないといえはいえなくはないが、やはり人間がどこかに残している弱点が衝かれたのである。今日行った柳川昭代干拓地の稲の潮害も満潮で打ち上げた潮が風に散って稲にかかったといわれるものであるが、あと1メートルも堰堤を高くしておけば防げたかと問うと、防げただろうとの答であった。それでは実際に干拓する時に1メートル高めに堰堤を築けばいいかという、そうはしなかったであろう。自然は人間のその常識を乗り越えるのである。常識的な堤の高さというものが、理論上あるだろう。又、今回被害をうけるような所まで稲を作らずに、もっと手前のところでとめておけば被害はなかったかも知れないが、平常はギリギリまで稲を作り堤で一応安心している。柿やぶどうの被害も人間の欲が、意欲が、そこまで伸びきっている、その所をこえて今回の暴風が果樹に損傷を与えたのである。だったら、被害はリスクであり、共済で解決するしかない。

9月14日（土）

鯉田地区の人達との対話

鯉田公民館で「地域づくり」実践者の方々との「知事との対話」集会をもった。40人ほど集ったろう。幹部ばかりで、地区清掃、老人・青少年対策、身障者ふれ合いなど組織的にいろんなことをしている。地域福祉振興基金からモデル事業地区としての指定をうけ補助金もうけている。帰りに老人・子供で一しょに作ったものということでサツマイモを頂いた。又中食は、せっかく行ったのだからカレーライスでも食べながら幹部の人達と懇談もしたいという私の提言が入れられ、老人給食をボランティアでしている人達が手料理の弁当（老人向き）を作ってくれていて20人ばかりでそれをつつきながらの懇談になった。昔三菱炭鉱があったところだが、今はその面影は見られず、地域の人達の表情が実に明るいと印象をうけた。一般に筑豊では依存主義が横行していると思っていたのに、鯉田はまるきりその逆のように思えた。筑豊の他の地域でも、やがてこうなるだろうと思うし、今日の対話の時も、筑豊の将来をどう思うかとの質問も出たので、内陸型工業の時代がやがてくるだろうから歯をくいしばってがんばってくれとはげましておいた。鯉田地区は真にモデルと思う。

9月15日（日）

敬老の日

不思議といたいだが、毎年九月半ばになると涼気が感じられる。満洲などでは急に寒くなったものだ。冷房なしで夜をすごし寝ることができる。裏庭はそれでも蚊が多くて尋常ではない。ふうせんかざらがだいぶん色づいてきた。これは緑の方がいい。鈴虫は二籠に分けて台所と客間においているが、終日虫の音の中で暮らしているようなものだ。少し劣えすら感じられるこの頃である。庭の雑草が伸び放題になっているのも、いかにも初秋らしいではないか。今日敬老の日は、例年同様、市長が総理のお祝状を満百歳の人に伝達する。市長、知事のお祝状も同時に渡す。マスコミの絵になるようにか、同時同所がえらばれ、今年は那珂の廣田松次郎という方が対象だった。背筋がしゃんと伸び、玄関まで送って下さる元気ぶり。奥さんは89歳になったという。二人揃ってのこの高齢ぶりはうらやましい程だ。奥さんの方は、入院中だったが、この日の為に一時退院とのこと。少し弱っておられるようだ。年寄りに敬意を表し、大事に対応することはいいことだ。長男70歳ということだが、居合わせた家族の方々に、「大事にしてあげてください」といって廣田家を辞したのであった。

9月16日（月）

つくば博の終幕

つくば博 EXPO'85 科学技術博というのが今日6ヵ月の会期の幕を閉じ、盛大なフィナーレの式典の数々がおこなわれた。48ヵ国から参加入場者2033万人という。毎日11~12万人の観客が詰めかけたことになる。人気あるパビリオンには人々が殺到した。七月の全国知事会するとき、富士通と茨城県博とテーマ博の会場だけ見せてもらったが、その時に別入口から入ったわれわれから見ると、暑いのに一般入場者は開門を前に長蛇の列を作り開門によりくもの子を散らすように思い思いのパビリオン目がけて殺到する子供たちの姿を見たのが今も印象的だが、我先にと走り込まないと時間がかかって仕様がなくなるとことをみんな知っており、走ると汗かくことを知りつつも先を争うのだという。ともあれ、先端技術を駆使して子供好みの未来の夢、技術の驚異を争って展示しているのが多いようだが、私ら、人気パビリオンで不思議に酔うのもいいが、ゆったりとした考えさせるパビリオンもあるのではないか。その方があとに残るのではないかと思う。私は富士通の極大極小の世界を見たのだが、驚き以外に何も残らなかった。あれでいいのかなと思った。教育はなく、ショーであった。一瞬の驚異の世界への遊びだった。

9月17日（火）

自虐

大手門会館7Fの大会場で拙著「県政ひとすじ」の出版記念パーティが開かれた。大学、法曹界、労働界、県庁役職員、婦人団体など200人から250人の集会になった。県庁関係では副知事、部長、秘書室、広報室など15人ほど来ていた。木梨さんが司会、具島先生が代

表してあいさつされた。九大とくに教養部の人達も少なくなく、高教組ではコーラス隊を準備してアトラクションを提供、最後に私ら夫妻に花束が贈られ、私が出版に至る感想をのべて謝辞とした。八丁君の話では 12,000 部がほぼ売れてしまう状況だそうだ。増刷がこれ以上ありうるかどうかはわからない。でも、よく売れた方だろう。具島さんは知事一期目で 2 年過ぎた時点で出版物を出す知事は前例がないのではないかとのことであったが、さて、それはどうだろう。私は毎日新聞の家令総局長が「総立ち」(福岡評論 9 月 16 日)の中で日本人は少々自虐趣味があると書いているのを引き合いに出しながら、私も少々どころか大いに自虐性がある、それゆえ忙しいからだでも出版までできるものだとの方の疑問にこたえうるという話をしたのであった。みゆきはひとに「何時そんな仕事をしたのか知りません」と同じ家にいてもわからないと説明している。自虐の産物だろうか。

9 月 18 日 (水)

森林資源を守っていくにはどうすればよいか

今日午後宝珠山村々民センターでおこなわれていた甘木農林事務所管内の林業振興研修大会での知事のあいさつの中で、森林資源の重要性を訴える部分に、近年世界的にみて毎年 2000 万 ha の緑が砂漠化しつつあるというくだりがあった。今年は国連の国際森林年でもあり、県でもフィリピンへの「ラブグリーン」植樹団が派遣されたばかりである。この砂漠化は植樹や管理に手抜きしつつ他方で濫伐が行われているからであることは明かだ。資本主義といってしまうとそれまでだが、森林ないし緑が資本主義にさらされないようにする体制もありうるのである。他方で木材価格の停滞、林業不振、林業農家の苦境、後継者難が叫ばれている。この両方からのアプローチがわれわれが自分で自分の緑の環境を守るのに必要なポイントではないかと思う。土地所有、山林所有制度がその基礎に問題として横たわっているであろうが、それでも政治行政の力で資本主義を抑制すること、山村の住民、山林所有者が、資本主義にどっぷりつかってしまわないこと、この二つの手だてを補助手段に使う必要があるだろう。小石原や宝珠山は福岡県では森林資源に富んでいる地域だ。車で通りながらこの緑を残すには政治、行政と住民山林所有者が資本主義に犯されぬようにしたいものだと考えてみた。

9 月 19 日 (木)

ラブグリーン帰国報告をうけて

中島県議が団長として「若人の翼、ラブグリーンを比島にとばし、向うの青年と交流、植樹をしてきた」といって早速その報告にみえた。(午後 3 時に会見した)。ミンダナオ島などオイスカの仕事の連携もあったようだ。ラワン材の濫伐がひどく、荒れ放題になっている現地に、植樹の大切さを吹込んできたという。自分たちにもそれを心でいってきかせることにもなったと団員の一人はいった。私には昨日の林業振興研修大会のことがまだ鮮かに



頭に残っていたので昨日帰国したばかりの“翼”の団員がということがひどく感銘的にきこえた。昨日は資本主義と書いたが、商業主義的というのが適切だろう。世界はそれで荒れていっている。ドルがほしいのにドルをかせぐ源資がないので森林を荒らしてまでラワンを濫伐する。あとに植樹すればいいのにしないのだ。木と緑は水源にとっても絶対に必要である。緑を保全するためには軍備と比較にならぬほど公的投資の要がある。木は育つのに30年はかかる。30年先の収入を見込んだ投資をするほど今日の人はゆとりをもたない。だったら植樹と林樹の管理は公的義務に属する。私的所有とそれで生活しようとする制度、体制にそもそも無理がある。

9月20日（金）

不愉快なことがある

あまり面白からぬことがつづく。朝一番に自民党の高岡新が有明ののり漁協の幹部を連れて来た。分裂組合の一方の代表で、のりの小間の分け方に漁連幹部がわざと不公平を決定したので知事が忠告をしてくれという陳情である。自分たちの自治の問題なので知事にできることではない。次に消費生活審議会の委員の辞令交付と委員会があったが、その中に高田源清がいた。私が会議室（庁議室）の各委員席をまわりながら辞令を渡す形をとったが、そして各委員の大半は留任の形なのだが、高田源清はひったくるような感じのする受取り方であった。今年の春彼を収用委員の任期満了に伴い、27年もの継続の老骨の故をもって再任しなかったのだが、どうも今日の態度はその腹いせのように思える。1昨年の夏知事選の直後の混乱期に奥田知事解嘱署名運動の筆頭代表だった高田であり、県の行政委員会の数多くに居すわっている高田である。その一つくらい解任されたとして自分の立場を考えれば了とすべきなのに、なぜ再任せぬかと文句をたらたら並べ立てたらしい。とんでもない野郎で今回も民生部から相談があれば私は重任に反対したはずなのに相談がなかったのは残念だった。県政に敵を懐く奴に委員をさせていいことがあるはずがない。

9月21日（土）

県知事を知性と感性とでみたとき

北九に行った時間の余りを利用する形で学者・文化人と称する人達と弥生会館で懇談会をもった。知事選後はじめて会うという。遠慮する人が多いのだ。今日の集りも弁護士、北九大の教授ら26人だが、みんな遠慮してか自分達の方から知事に会おうというのではなく、当方秘書の側から知事が北九に泊るので集ってみないかと誘いかけて成立した集りである。もっとそちら側から要望してくれと私の方から水を向けておいた。話の内容は、ひるま、農業をしている婦人達（生活改善グループ）との「知事との対話」とくらべ、はるかに固いものになってしまった。前者は知性をおし立てての懇話になり、後者は感性による知事との接触になった。知事の仕事はいうまでもなく知性も感性も、むしろ両方の面から理解

されなくてはならない。むしろといえば感性の方が勝っているかも知れない。だから後者の場合よかった、よかったという結論になるが、前者の場合は、どうも割切れない、わからないものが残るということになる。現実の対応からすれば割切れないものが残るのが当然ということにもなる。学文というがむしろ「学」的であって、保守か革新かが問題で、革新ならこうなくてはならぬという角度から知事を見ようとする。私の方からの説明も理解されにくい。

9月22日(日)

孔子廟書法展に入選して

長崎の孔子廟で中国総領事館開設記念ということで、「孔子廟書法展」があつて今日行った。この夏岸本先生から私も出品しないかとのすすめがあつたので、何とはなしに出品してみた経緯がある。四書五経の文言が望ましいということだったので、中庸からとつた、「極高明而道中庸」という内容である。はじめ行書体で書いて岸本先生に見てもらったら、もう一回書き直してみたらどうだろうといわれたのでこんどは草書体にしてみてもう一回見てもらったらそれにしようとするめられて、先生におまかせした。あとでよく考えてみると文中「而」を書き落した作品になっていた。あえていえば許されるだろうが、大変な落度である。しかし出してしまったものは仕方がない。それが1200点ほどの出品のうち1/10ほどに絞られた中に私のが入賞したという知らせには驚いてしまった。知事だからオマケだったのでらうと思っていたのだが、審査は名はふせて厳選されたというのである。大賞には至らなかったが孔子廟賞の上位入賞ですとの説明である。今日は賞状もいただいた。孔子廟歴博当局の話では私のを記念として石彫にして残すということであつた。はずかしいことになってしまったが、それもひとさまにまかせるしかないと観念した。

9月23日(月)

「陶魂」揮毫

小石原焼の窯元▲梶原藤徳氏が庭先に巨大な20トン余の石を搬入し、以前から私に碑を建てるからこの石に揮毫してくれといていた。2ヵ月も前からその文字と大きさを注文してきていた。この五月十日に高松宮来福の折(日赤血液センター竣工式のため)小石原のこの窯元に行かれ、私もお伴したのであつた。だから文字は高松宮宣仁殿下御座処碑ということで書は奥田八二、建立主は梶原藤徳、施行者柳瀬重光という中味。そして一文字60センチの大きさに陶魂と書くことになっている。この文字が従来にない厄介もの。穂先12cmもある特別の太筆をそのためにおろした。中国に行ったときに、こういうことがあつてもいいように買ってきていた筆である。日本で買えば何万円するだろうか。中国旅行中だから向うでどれだけしたのか覚えてはいないものであつた。全紙を何枚も使って書き直しつつ遂に仕上げることができた。墨摺りも大変だったが半分はみゆきが手伝ってくれた。ほ

んとうに大仕事といわざるをえないが、今日の休日、これだけのことができて意味があったと思う。ただ、これまた好きでないとできないことだろう。まだまだ頼まれている揮毫が残っていて気掛りだが今日は措こう。

9月24日（火）

無性に書いている日記

明日から9月議会の代表質問。久しぶりに早く帰った。夏ぶあつい手帳をもち歩くことをやめていたら、ブランクがたくさんできていた。そのままにしておこうかと思ったが、日記と同じ気持ちで埋めるのがよいと思い、古い記録など探しながら埋めていった。思うにそれが何ほどの価値があるのか、時間をかけてだ。それでもブランクを埋めようと思う。なぜなのか自分でも説明がつかない。理由なく書いている。日記の場合、毎日かなりな精力投入である。書きなぐる、どんどん書いていく、いい文章にしようなんて毛頭考えない、何でもいい、その日のページを隅から隅まで埋めつくさないと気がおさまらない、それだけの理由で書いている。ただ、何かの役に立つに違いないと思う。昨年と同じ今日、啓二・ライヤが帰京している。日記にそう書いている。偶然の一致だろうし、今日それを読んで目にとまった。書いているからわかったのだ。しかし、それが判ろうと否と、どうでもいいといえばそれまでなんだろう。が、わかっただけ、それをみゆきに話すと、「そうだったの」とびっくりしている。互いに記憶がどんどん消えていく。消えていてもよいが、書き止められているともっといい。ただそれだけのことだ。こういう衝動的な記帳行動がどこまでつづくのか、わからない。

9月25日（水）

左の目に新しい問題

暑さ寒さも彼岸までという通り、昨夜あたり薄いふとんではもういけない状況になってきた。9月県議会の代表質問が今日から始まったので7時起床という日程がつづく。そのためではないが、近頃十分にねむれない。熟睡はしているとは思いますが、朝方便所に起きてあとがねむったような状態と思えない日がつづいている。便所といっても納得のいくような量の小便が出るわけではないのに、覚醒の小用、尿意がおこる。健康とはいえないわけだ。それに2~3日前から右のまぶたに何かはれぼったい状況がでてきた。目薬をと思って使ってみたが、ききめがあるわけでなく上下のまぶたが少し赤味を帯びてふくらんだようにみえる。黒味を帯びたという表現も加えた方がいいかも知れぬ。済生会福岡病院の田原医師が目の異常について訴えると、私の糖尿併発懸念を否定し、「メガネがうまくあわないせいだ」と診断、その更新をすすめ処方箋を書いてくれた。4ヵ月前のこと。近頃それを新天町ハナブサに行って新規注文することになり、今日出来上ったのを受けとったが、老眼の度が進んだものとなっており、価格74,000円。それでも右目がどうもいけない。これは以

前からの目やにみたいな気色がするのと違った新しい目の問題である。議会が乗りきれんかが心配である。

9月26日（木）

住宅の不満あれこれ

雨がはげしく降ると玄関洗面所前あたりに雨もりがする音がきこえる。又寝室の天井は以前から天井板に巣くった虫が糞をいたるところに落として寝台の上、近くにかけた洋服などを糞で汚した。この両者につき一昨、昨日と二日ばかりで藤江君が対応してくれた。私は大工など呼んで天井の張りかえや、瓦の葺きかえをしたらいいと思っていたのだが、藤江君の薬液を買ってきて天井に塗布したりして対応している。うまくいけばよいのだが。15年もたてば住宅もあれこれ不満な点がでてくるものだ。千代町の借家の屋根板が台風13号で飛び、これは藤江君が早速兄弟と連絡して瓦を全部葺きかえてくれたので、今は立派になっている。住宅についていえば、今はもう少し広い敷地のあるところが欲しいが、建てかえるわけにもいかないの、客の手前貧相とは思いますが、このまま辛抱することにするしかない。書物の整理など狭いのだが、今は、もう建てかえの気はおこらない。それよりか、不要と思われる書物は整理して、スペースをあけた方がよいだろう。生活に密着してきた古いものには愛着があつて、なかなか処分できないものだ。狭さ、古さと闘いながら住みつづけよう。

9月27日（金）

自民、緑民、公明の知事攻撃に思う

9月県議会は一般質問に入ったが比較的平穩である。自民、緑政、民社、公明の野党各派は知事攻撃の意図を隠さない。以前より問題が少くなり、攻撃しにくくなったことも事実だ。ただまだよくヤジをとばしている。緑政の大石、井上（勝）あたりがあくどい。自民の高岡もぶつぶついつている。自民が公明を説得して、次期知事選に首藤を担ぎ出そうとしているが、県議会でもそうした背景が反映している。首藤が応諾するには、自公民の合意が必要で、その線で県会議員も何らか牽制をうけて動いているように見える。彼等の知事攻撃は、県勢の停滞の責任一点にしぼられ、その応用として企業誘致、財政調整基金の取崩しを俎上にのせている。革新知事では県勢は衰退するばかりだという論法である。彼等は自民党政府の補助金カット自治体への負担転嫁や軍事予算の聖域化（予算突出）を問題にしない。君が代、日の丸の末端学校での強要も首相閣僚の靖国神社公式参拝、それに対する中国からの批判、秘密保護法の制定策動を何とも思わない。県民の無言の批判をうけるに相違ない。

9月28日（土）

産炭地田川地区に蘇生の展望はあるか

田川地区住民会議主催の産炭地域危機突破田川地区住民総決起大会が文化センターでひらかれた。産炭法の期限切れや地域改善法の期限切れその他産炭地域に所得を上積みしていた国の各種施策がこのままでは終りになるために、地域の焦燥感が高まっている。県も市町村も財政危機に立っており、独自の施策をする力はない。国の方では何千億という資金投下にもかかわらず地域浮揚の効果は出ず、国の財政もかなり窮迫しているので産炭地域所得を上積みしてきた公共事業をこれ以上できないとの態度である。故田中六助氏がこうした公共事業の創造に大変功績をもつようだが、功ありすぎて、田川を中心とする産炭地の自立心を育てえなかったのではないだろうか。この時点に立って、もはや従来のような「おんぶにだっこ」の甘やかしは不可能だ。自立の意識改革が必要だとみんな強調するようになったのは結構だが、過去の田中政策の批判をこの際、基底におくべきではなかろうか。筑豊炭田一帯とりわけこの田川地区には、生きていくための自立心が育ってないが、今後育つのかどうか。苦悩にみちた一つの時代がしばらくつづくのではないかと思われる。

9月29日（日）

整理もされずに、どんどん書斎にものがたまっていく

昨日今日少しひまができたので、書斎にいる時間ができた。雑然としていた身边が少しは整理ができた。毎日3時間は自分の時間が欲しい。それがあると、机辺が少しずつ片付いていく。知事という仕事にまつわる書類が余程秘書の方にまかしていても自然にたまってくるし、手紙類、雑誌（定期刊行物）新聞類が次々と積まれていく。捨てればよいのに、以前からのもの、新規なものを含めて捨てえない心境はいかんともし難い。知事なるが故にふえる単行本、案内本など数多い。いずれ、県立図書館あたりに寄付したいと思うが、まとめるにも暇がない。そうする時間をとりたところだ。揮毫の下書きも捨てればよいのに、特に捨てないでいるからかなりの嵩になっている。但し、この種の古紙はあれこれ他に用途があるように思えるので、大事にとっておきということになっている。名刺、手紙、ハガキもどんどんたまっていく。これ又捨てるにしのびず、あちらにおき、こちらにおきしながら積もっていく。私がどうにもする能力がなくなった時、誰かが、惜しみなく捨てるだろう。これら新聞、雑誌、手紙などそのようにして処理されるに違いない。

9月30日（月）

色紙を書いていく

色紙、扁額、条幅など、書の注文がどんどんくる。たいていの注文には応じることにしている。扁額や条幅は荷が重い、色紙だと割に軽い。知事立候補以来3年近い日が立つが1000枚の色紙は書き、配っているのではないか。一波万波というのが中味として一番多い

が、他にあるにしても、全く同じようなことばかり書くことになってしまう。書き崩し(書いたあと気に入らぬ出来のもの)は3~40枚に一度はあるだろう。又書いてはいるが、できることなら使いものにしたくないというもある。森山君の話では、この頃、RKBに出演したあと、どんどん来て、その注文をことわるのに困るとのことである。多いのも困るが、なるべくならことわずらわずに書いてあげたい。近頃は仮名の練習もしているが、仮名がすらすら書けるようになったらいいのと思う。色紙にすらすら書いてみたい。そこまで到達してみたい。筆をもつこと自体苦にはならないが、何でもこだわらずに書けるわけではないから未熟さにとまどいがある。今日は又20枚ほど仕上げて秘書室に明日届ける。気に入らぬのも何枚かあるが、相手の顔が見えないので、少しぐらい気に入らないのも数の中に入れてしまうことになる。

## MEMORANDUM

〔直美のこと〕

直美は3月に専修大学を卒業してしばらく遊んでいたが、東京でなんとか暮したいといい、5月に住友生命新宿支社に外交員として採用になったらいい。福岡に帰って父の許で何彼と家事手伝いもしてほしいと大石秘書もこの春すすめてくれたが、どうしても東京がいいという。逆に福岡では知事との関係で見られるのが嫌ということのようだ。専修大の先生も東京での就職なら自信をもって推薦してあげられると学部長先生が私にいったことがあるが、直美はそれも頼まなかったらしい。私の知事職と何か関係があることを嫌っているようだ。その点、一彦も啓二も同じようなことを感じているように思える。親が知事ならかえって傘に着的人も少くないのに、うちの子達は逆のようだ。人からそういう目で見られたくないのである。私からいわせると、その気持は理解できるが、程度もので、うちの子は度が過ぎていいるのではなからうか。就職をお願いしたりするぐらい、別段どういうことはないだろうに、と私は思う。悪用とか濫用は困るが適宜利用する方が、される側にもよるこぼしいかも知れないのである。遠慮しすぎというべきではないだろうか。私も大石氏がいうように、直美が福岡で、膝下にいてくれるとどれだけ助かるか知れないと思う。ただそれを彼女にいうと、身勝手にきこえるだろうから私はとりたててはいわないことにしている。思うようにすればいいし、自分のすることは自分で責任をもてばいいと思っている。親の子に対する期待は期待として、これ又私の方で勝手にもっていいのではないか。11月1日に上京のとき電話してみると、月収は10万円ぐらいで、これでは生活するだけで精一ぱいとのことであった。仲間はどんどん新陳代謝するだろうといったら、かわる人が多いねといていた。でも同じ外交でも法人相手に大卒をこんど初めて試用するというケースなので、いわゆる保険外交員とは同じく考えてもらいたくないという。法人リストがあって、ペアーを作って勧誘するという仕事のようだ。私としては何でもいい、他人の中でもまれば、それだけ自己研修になるから、それでいいと思う。私も実は研究生になっ

て収入も少なかった頃生活の糧に2～3ヵ月、保険外交員をしたことがあるが、それなりに勉強になった。馬鹿くさくなって程なくやめたが、保険会社としてはどんどんやめてくれていいらしい。直美は来春年女という。24歳になるわけだ。常識的には結婚を考えねばならぬ年なのに、彼女は27—28歳までこのままでいたいといっていた。そういうものなのかも知れない。親が思うほどには気にしてないようだ。これ又干渉がましいが、彼女にはどういふ夫がいいかなと考えるし、誰かに頼んでおこうかとも思ってみる。本人は全くおかまいなしである。これ又本人の責任だと思えばそれきりなのであるが、私には気になる点であることはたしかだ。ともかく、しばらくそっとしておくほかない。（11月6日記）

10月1日（火）

足をとられる夢

近頃睡眠が十分でない。朝方小用に起きたあとほとんどねむれていない。それだけではない。よくない夢をみるからだ。それが3～4ヵ月か半年に一回か、同じような夢をみる。それは靴をどこかに置き忘れ、どんなに探しても見当らず、苦悶する夢で、型にはまった情景になる。どこかに置いたのに、その靴が、時間と記憶の断絶があつて必要なときにどうしてもみつからず、あせっても探しても出てこないというのである。そのうちに覚醒するが、問題が解決しないという点に何か不吉なことがあるのではないかと、寝ざめが実に悪いのである。ないものを探すあせりと絶望その苦しさが当面はやりきれないが、不吉な予感もよくない。それに近頃は健康に何となく不安が感ぜられるようになった。体に張りがなくなったようだ。シンがない。老化が一段と進んだのではと心配する。70歳も80歳も生きる人はこの辺の折にどうだったのだろうかと思う。今の自分のように生気を失うことはなかつたらう。別の面からいえば、今の自分の、この調子なら早目にいくのではないかとすら考える。ゆっくりし、ぐっすり眠って、張りのある体調を味直せるときが来ないだろうか。

10月2日（水）

那珂川や杯<sup>ツキ</sup>かたむけて月を待つ

「かわさき」で県信用保証協会と県の首脳懇親会があつた席、ここの主がススキを生けサツマイモを供えて月の出を待つしつらえをなしているのに気がついた。こんな時に句でも出てくるならいいがと思って酒を交わしていたら出て来た句が「那珂川や杯かたむけて月を待つ」はちじというのが出て来て、これを書いて主に渡してきた。「はちじ」としたのは、今日の月、去る9月29日が十五夜ということであるから居待の月ということになり、午後8時ごろに出るといふので月を待ちつつ、満つる潮を那珂川にながめながら、かつ飲みながら月を待っていて、それがその時刻まで待ちきれぬという気持をあらわそうと思つたのであつた。「かわさき」は那珂川に面し、そこが満ち潮の最中であり、なかなか風情が

よい。こんな時、妙句がすぐでてくるためには、平素から心の動きがそうになってくなくてはならないのに、そうはいかない悲しさである。平素からゆとりがいかに大事であるかを痛感した次第である。主は室見の方まで行ってススキを切ってきて、われわれ客を迎えてくれたのである。サツマイモの代わりにダンゴでもいいと思ったが、やはりイモでいいのだそうだ。月見の会でもしたらよかったにと反省した。

10月3日(木)

私の海外渡航回数の問題

知事は外国旅行が多すぎるということが問題になっているとの声がきこえる。それで11月にブラジル移民75周年とグアムサイパン墓参の二つが重なり合って日程に上ってきているが、はじめ、墓参にはやむをえないのではないかとこのことで日程表にのせていたが、今日林県議が来ての話では近藤副知事も林出納長もまじえて、私がどちらにも行かないのがいいという結論になった。新聞屋、自民党あたりで知事就任以来何回と数え、それは亀井より多いというような議論をなしはじめているらしい。もっと内政に力を注げとかいっているらしい。ハワイに2回、中国には2回、そして商談会と青年の船を加えるとこれで6回、それに比島への墓参があつて計7回ということになる。年3回というのでは一寸多いことは確か。しかし、好んで行っているわけではないし、行きたくもない。議員族はやっかみもあつてのことだろう。そんなに海外渡航が気になるのだろうか。ブラジルの件は議員団の中に、知事が行くべきだと意見開陳する者もある。今日の新聞には中曽根首相が福岡県知事選出馬に首藤氏を説得したとあり、もう選挙への心を用い、外国には目を向けられない方がいいと社党県議の多くは主張しているらしい。

10月4日(金)

失対65歳線引きに反対する人々

失対事業65歳線引きという政府方針に反対ということで、最近拙宅に全日自労系の人達からの反対直訴のハガキ、手紙が続々寄せられている。全部労働部長に手渡してはいるが、かれこれ2週間とはいわぬ長期にわたって毎日配達されてくる。200も300もになるだろう。線引きなら300万円の退職金を、元気で働きうる間は働かせてほしいという内容でほとんど一率同じようなことが書いてある。ほとんどが婦人で、70歳~80歳という高齢者も少くない。筑豊、大牟田の人が多く、誰もがいうように、失業対策と生活保護は福岡県では他県にくらべようもないほど特殊な重みをもっている。ハガキ、手紙は知事ががんばれということも書いてある。1昨日だったか、その人達が県庁前~東公園でその趣旨での決起集会を開いていた。知事に出てこいとはいわなかったが、労働部が対応しただろう。70~80歳になっても老齢福祉年金だけでは生活できませんとも書いてある。家族関係がどうなっているのかわからないが、おそらく子がいないとか、子は親の面倒を見ないようになってい



るとか、バラバラになって扶養関係がこわれているのであろう。問題は誰がこわしたかにある。行政への甘えが多分にある。そのような行政がつづいてきたことも確かなのだ。

10月5日（土）

小児ガンを子と共に闘った母親の記録

高橋和子著「聖子は鳥になった」という250ページ余の本が届けられたので、今日北九州、久留米にとんで教会場のあいさつをする車の中で読了した。7歳の小学校の女子が神経芽細胞腫という小児ガンにかかり、母親がその子と共に体験した闘病記である。子供との闘病生活2年余、その疲れは大変だった。家族も大変だった。それが詳細に綴られている。その綴る能力を私は高く買いたい。誰しも経験しうることながら、誰でも綴ることはできないだろう。浮羽郡吉井町の人で千年小、久留米医大病院が舞台である。ガンと闘う、何パーセントかの確率の中での闘い。和子さんが書いているように、闘っているうちに、効く薬が発見されるならと願う。何パーセントの中で闘うということと、闘ううちに妙薬が発見されるというその二つに願かけて闘うのである。誰しも同じだと思った。小学校の女子としては、できすぎである。死に直面すると誰しも死んでなるものかと闘うだろう。奇蹟を信ずるだろう。何回も何回も自己を反省するだろう。人間がそれなりに洗練される。しかし終りには、精根つき、静かに眠る。ガンの場合は、その区切りが明確に誰にもわかる。和子さんはわが子と共にほんとうに一心同体のように闘病つづけていた。

10月6日（日）

叙勲祝賀会

北岡幸太郎氏の勲三等瑞宝章叙勲祝賀会が国際センターで行われた。7000人もの人を集めた。彼は市議9期、その間保育界、環衛界とくに料飲業界、それに水道界など幅広い活動をしている。保守・革新をとわず政界、行政界の大物（地元出身）が今日は見事にずらり並んで祝意を表した。亀井前知事が一番はじめに祝辞をのべた。県、市の幹部元幹部がすべて顔をみせた。衆参両院、県議、市議も多数出席した。料飲業界からは多数動員出席していた。この中で一彦が（啓二が）お世話になった順和保育園の木村さんが顔を出していた。ともかくびっくりする程盛大だった。亀井氏が知事を退いて後勲一等をもらって祝賀会があり、これには私は出席せず、永井副知事が行ったが、県の幹部が多数動員されたという。昨年の話。どれくらい盛大だったのか知らぬが、今日の亀井氏のあいさつは原稿なしで堂々たるものだった。政界の者でないと、こんなに盛大な祝賀会はしないであろう。動員にあたった事務裏方さんは大変だったろう。選挙運動にも匹敵する活動を要しただろうと思う。遠藤氏が、首藤氏の知事候補決定で自分が指名されずにすんだと私に話しかけてきた。

10月7日(月)

今日もち出された話はどれもカネ食いだ

カネのいる話ばかりが持ち込まれる。久留米に予定の青少年科学館につき市長と豊島市議が来訪し、現在の構想を2~3倍に(床面積15,000m<sup>2</sup>)して、それこそ日本一といえるようなのを作ってほしいという。40億円ぐらいの積りを100億ぐらいにと。教育系の話だから何ともいえないが大きな話だ。商工部長は中小企業の技術情報センターに類するサービスを行うのに、国が8億出すので県で4億ほど出せないかという話を持ち込んでくる。社会福祉協議会では、今の会館の土地を護国神社から借りているのを県で用地購入してくれという。地代が今400万とか600万とか、その費用を節約したいというのである。又今の中国技術研修生の受入れを来年度も続けてほしいという話も出た。いくらでもカネのかかる話が続出してくる。予算がとても苦しいというのに、次から次へと話がでてくる。行政ニーズというものはこういうものかと思うが、行革ではないが、どこかで基本的にやり直す必要があると思う。今出てきたような話はもちろん結構な話だ。4年後の福岡市主催のアジア太平洋博への出品にしてもカネ食いだ。際限のないニーズにこたえるには、どれか縮減しなければなるまい。

10月8日(火)

美しい秋ながらカネのかかる話

金木犀が強い香を放っている。いつもは10月はじめなのに一寸おそいといえる。うちのは日陰のせいか花が少ない。マツタケのシーズンで料理屋では茶碗むしなどに出され、これは山の状況が悪いので貴重品らしく、一本2千円もするらしい。秋らしい情景はいくらでもあるが、身辺はこんなものだ。郡部にいくと、もう穂波は黄味がかっている。秋野菜もぐんぐん伸びている。県議会が11日までの予定で、最終段階にかかると緊張もふえ、秋の味どころではなく、非情なものだ。今日は保留質問待ちであったが、明日にもちこされたので、その間に、第五学区高校新設誘致の陳情団が来訪してきた。宗像郡、粕屋郡、東区あたりである。古賀町が第一候補だという陳情である。現在東区香住ヶ丘に建設中だがもう一つということである。この地方一帯一致して古賀にという勢いになっている模様。62年度開校ということのようだが、これまた大変な県費が投入されねばならぬ。秋というが、こういう頭の痛い話ばかり。小西県議が来て、中国との交流の話の中で、天津と県との友好関係を結ぶべく今準備工作に入っているという。これまたカネのかかる話の持ち込みである。どれも結構な話ではあるが、どこからカネを出せというのだろうか。

10月9日(水)

何が目あてなのか井手宗夫さん

井手宗夫という県議は何をする人だろうと、休憩に入った委員会の間の時間に控室で近く

の職員にきいてみた。小郡市代表というのだが、よくもこんな人が選出されたもんだとただただぼうぜんである。自民党にとくに、この種の人が多いようだ。不動産業じゃないかと誰かがいった。今議会で自民党がケシキばんで問題にしている千代1丁目の土地取得問題に井手は知事保留の条例委のトップバッターに立った。県費の無駄づかい、議会にはかからずそれをしたというのがいい点で、知事答弁と管財課長答弁がくい違っているがという点からつついてきている。彼の一般質問ですべて答えているが、ここでもう一度知事に違いを「陳謝」させようというのが彼のねらいである。その質問をするのに、財政硬直は奥田の責任ということから、説きはじめ、何回も何回もこま切れ質問をして自分の教養のなさをさらけ出していた。大牟田の高岡新にも似た点があるが、高岡の方がいきり立つだけかわいさがある。井手はにくにくしげにゆっくり話しかけてくるが多く自民党議員にあり勝ちのように、何をいおうとしているのか焦点が明確でなく、知事攻撃の言葉がいたずらに並ぶのである。近頃は私はこんなのに腹立ちすら覚えなくなったようだ。

10月10日（木）

筑後川治水100年

筑後川101フェアというのが石橋文化センターで開かれた。明治17年に政府事業として治水にとりかかってから101年という。九州地方建設局では今年の100周年に企画が間に合わず101年としたそうだが、こういう区切り方も悪くない。次の100年に挑むスタートの年という意味があるからである。治水、水害、流域物産、生棲淡水魚その他「きのう、きょう、あす」を示すさまざまな展示があつて興味深かったが、とくに水害の絵、写真など生々しかった。また、淡水魚を水族館のように展示してあるのも美しく感じた。ウナギやナマズも改めてまじまじと観測できた。もっと時間が欲しいが、立場上こうしたフェアへの立入り時間は僅かしか与えられず残念であつた。治水事業については、よく展示を見るひまさえなく、理解しないままに終ってしまった。ダム群については、平素の知識を加え、およそ理解ができたが、フェア実行委員長の九電永倉会長が話していたように、昭和28年の大洪水と夜明ダムの関係、下笠、松原ダムと室原氏との関係など、いろいろ後世に語りつぐ価値のある話があることをつくづく感じた。いずれ100年史が出版されるとき。期待したい。

10月11日（金）

知事保留質問

予算・条例の両特別委員会での知事保留質問に手をあげて残ることは議員にとって名誉であるかのようにみえる。とくに、一問一答といえばきこえはよいが、さほど重要でもないことを質問して議員は立ったり坐ったり、そのたびにこちらも立ったり坐ったりする。質問の趣旨がよくつかめず、とくにポイントがわからぬ質問には手こずる。多くいえばどれ

か当るだろうと思ってあれこれいねいに言っていると、長すぎるとか書いたものを読まんかとの野次がとぶ。「〇〇をどう思うか」というようなのは、とくに、どう答えてよいかわからない。通告が明瞭でないから用意した答弁を単に読んで答弁になるような質問をしてこないから困ってしまう。相手も、知事は何をいっているのかといい、当方も何を質問しているのかといいたいことが少くない。ともあれ今回は条例委で井手宗夫、大石正紀の二人、予算委では山本辰雄、北原守、藤田茂令、井上勝、古賀次夫、牛島巖、板橋元昭の七人が質問に立った。井手は二日にわたる質問、予算の方のトップバッター板橋は1時間余、この二人が長々とどうでもいいような質問をもったいぶってやったものだ。とくに敵意をむき出しにして。山本、藤田はわかりよい質問だった。

10月12日(土)

県産品愛用フルサトフェア開かれる

昨年につづいて太宰府神社でのフェアが今日明日2日つづけられる。雨だったのでオープニング式は社務所内講堂でおこなう。加地県商工会連合会長の式辞のあと私と市長とが祝辞をのべた。御土産品の即売市で生産者に勇気づけを行うとともに、買い手にふるさとの味を通じてそのよさを知ってもらうのが狙いである。当然食料品が多いが、手工芸品も結構あった。式典ののち、私は傘をさしてはしめというくりかえしをしつつ、各テント(各町村部屋)をまわって、あいさつ、激励した。商工会の青年部婦人部の人達がそれぞれ似た形ながら固有の文字を入れた法被を着て(私も)威勢よく客を呼びこむのだが、雨のため、客足は少なかった。私はほとんどの町村のテントをまわって、店員たちに握手をした。県広報室のカメラがあれこれ注文して、その都度ポーズを注文した。青年部の諸君が障害者施設へのチャリティバザーも開いていて、私も風鎮、バスタオル、茶器の三点を買ってバザーに協力した。思うに、こうした大きな企画は何何大会というような人が集まるイベントと時、所を同じくできるなら、効果もあがると思う。今年は雨にたたられたので、来年はその点一考を要すると提言してみたい。

10月13日(日)

コミュニティなき結婚式

上岡亀弘氏の子息弘二氏の結婚式がニューオータニであり、列席スピーチをした。自民党衆院議員一区3人をはじめ、公明党衆参両院議員、主たる県会議員、創価大学長、創価学会役員、その他清掃業界親戚等々、友人を含め350人が参加、豪華な披露宴であった。粕屋郡の全町長も参加していた。つまり、友人、業界、政界あげての結婚披露宴であった。スピーチも延々つづき、祝宴の実が始まるまでに一時間はかかった。そうした中で気付いたことだが近所の人というのがテーブル名列に一人もいない。これは近頃の結婚式宴会には常識になっていることで不思議でないことであろう。昔田舎では村をあげての、もちろ

ん近隣もふくめての披露宴で3日ぐらいの日程であったろう。今日このごろは、350人といっても3~4時間だから合理化されているとあってよかろう。しかし、近隣者はどうなのか。おそらく別の機会に改めて披露がおこなわれると考えてよい。がこういう祝いごとに、近隣者が来ないということは、「隣は何をする人ぞ」という言葉にあらわされているように、コミュニティの崩壊を意味しているように思われてならない。コミュニティの蘇生がはかられてもよいのではなかろうか。

10月14日（月）

ぎくしゃくしている陣営内部

大石君が免許証書換講習で、中食等森山君がついた。森山の話では奥田後援会がうまく動いてないという事例がいくつか出された。岩崎、八丁、大坪、中川、高崎などどこもうまくいってない。それらが社会党との連携も、そして県議団、嶋津らとも、すべて相互の関係がぎくしゃくしているという。例を「県政ひとすじ」にとってみても嶋津が「われわれに相談なしに八丁がやった」というような表現をしたというのである。出版記念会にしても学者文化人系の狭い範囲にしぼり込め岩崎はそうせざるをえない事情があったという。後援会はカネが集まらない。森田則一氏では顔がきかないし、東京から来た島野には違和感があちこちにあるようだ。社会党にも問研にも。だがどうなっているにしても私には、あれこれ指図する資格もないし、口をはさむ気もない。もたもたしているのも、ぎくしゃくしているのも気にはなる。でもそれはそれとして見ておくしかない。大きな問題に当面すれば泥縄的に一致が見出せるようになるだろう。「県政ひとすじ」にしてもあちこち相談して出すようなものだったかどうか、にわかに判断しかねる。相談すべきであったといえ、そういうこともあるかなと思う程度で、ねばならぬことではなかろう。

10月15日（火）

計画とビジョン

今日の総合開発審議会においては牛島議員から、県の新長期計画の実現の年次別計画をもっているのかとか、記者会見での産炭地域発展計画大綱に関する知事発言についての脱産炭地宣言（いわき市の場合）のような夕刊記事とか、これらは計画なるものの位置づけにわれわれとの認識の違いがあるように思えてならない。県の計画というようなものはこういう場合は単にビジョンといいかえた方がいいのではないか。つまり政策と組む場合の方向づけであって、「脱産炭地」といっても、その年次計画、あるいは企業誘致、道路網整備などによって「脱産炭地」が実現するための投資政策が年次別に示しうるはずがない。県の長期ビジョンの場合も年次的に数値で示すにはなじまない。青少年の非行防止といい、ガン死亡率の抑制といいビジョンの方向性であって、年次別の数値で示しうるとは思えない。あくまで施策の重点であり、それに向って努力するという程度のものである。そうし

た意味を理解してもらわないといけない。大綱とか計画という場合、こうした分野次元についてはビジョンという方が適切ではないだろうか。

10月16日(水)

高野切第二種を一通り終った

朝1枚書いて登庁し、帰宅は少々おそくなり、阪神タイガースのセ・リーグ優勝のテレビを見て入浴後に又1枚書いて、高野切第二種を書いてしまったことになる。8月17日から始め丁度2ヵ月かかり56枚になった。どれを見ても満足でなく下手くそと思うけれど、思えが何となく仮名もなれてきたと思えるようになった。第1種のスタートが7月2日である。下手なりに貯えておくと次書くときにどれほど上達しているかわかるだろう。第2種は誰にもあまり好まれない手本のようなのだが、56枚も書き進んでいくとなれて、これでいいのではないかとさえ思える。これら今貯えているのは、書き方として、まず一枚を臨書する。半紙の中での字配り上の欠点も加えて二枚目で訂正していく。ほとんどが2枚目で、次へ進んだものである。同じのを2度書くというやり方で進んできたわけ。多忙ではあるが、次は第三種に挑戦しようと思う。年内に、同じようなやり方でこれも一通りは終りたい。第三種は以前岸本先生に習っていた頃書いた経験があるから、前二度とくらべると馴れているのではないかと思う。できればこの三冊をもう一通り一巡書いてみたい。それができると、短冊などにも書いてみようかと思うかも知れぬ。今はとても……

10月17日(木)

元気でなくなっている

多くの人が知事は元気だ、こまめにまわるといつてくれる。もちろん好きこのんでまわっているわけではないし、元気だとの自覚はない。カラクリ人形のようにまわされているにすぎないといえはいいすぎだろうが、これが政治というものだろうか。毎日12時間勤務に等しい。自分の時間がほしい。家族の対話は最後の犠牲になる。それに、はた目のように元気でない。トシを感じることがしばしばである。老木が枯れていくように、あちこちに衰えがみえる、感ずる。目や歯はもちろんだが、スタミナ、活力のなさが自覚される。だから元気だといってこんなにあやつられると、疲れを覚えることがしばしばで、時にものをいいたくなくなる。そんなとき秘書の大石君は知事ご<sup>アキ</sup>気嫌悪しという。もういい加減にしてくれといいたくることがしばしばである。毎日の日程にしてもアキがあると期待していたら、近くせまるとそのアキがつまってしまう。そういうとき<sup>アキ</sup>気嫌が悪くなるのは当然だろう。孤独な時間がほしいのにそれがほとんどない。便所だって、ひとが待っているという形では落付かない。朝の出発前にすませない大便は、結局一日たまってしまう。こんなのは健康に悪いと思うのだが、外で待たれた身では、それが済ませられぬ。

10月18日（金）

12月県議会における野党攻勢を計算して

知事になってやがて2年半。公約に盛り込んだ情報公開はこの9月議会で見送らざるをえなかった。12月議会にもちこされた。知事になって直後の6月議会で言明した「県独自の行革」が直面する大きな課題となっており、これ又12月議会で決着づけなければならない。となると補正予算中の人勧給与引上げ、教育会館退去請求などとあわせ、これらが12月議会の焦点になる。どれも野党に都合よい攻撃材料を与えることになる。それだから情報公開だけでも早目に片付けておこうとしたのだが果たせなかった。しかし考えてみれば大きな問題が山積されている方が議会は乗りやすい。少くとも気分の上でそうなのだ。荷物が少しぐらい軽くても野党攻勢はかわらない。自民党は首藤氏に次期知事候補をしばり込んだとして氣勢があがっているようだ。だが実は外観ほどにまとまりはないようだ。三原、山崎たち国会議員の系列で首藤がしばられたようだが、遠藤筋は冷いようだ。ともあれ、12月議会は反転して対決ムードが煽られそうだ。ブラジル移民75周年には林出納長が、グァム・サイパン慰霊巡拝には大塚副知事がということで知事の外遊は、そのため引締めの意見が支配的。

10月19日（土）

依然やかましい国鉄の車内放送

久しぶりに特急寝台なるものに乗ったが、もうだめだという感じ。時計の秒を刻む音が気になるというので平素枕許近くに音のする時計はおいてない。古い柱時計のコチコチ刻む音も気になるので、あれを止めてしまってから久しい。そのことを思うと、寝台車などともじゃないが合わない。安定剤をのんでも駄目。それでも4時間余りは何も知らずに列車は走っていた。名古屋から京都まではそれとはなく感じたが、それから広島までは気がつかなかった。眠ったのであろう。それにしても国鉄の駅及び車内の放送のなんと嫌なことだろう。同じことを何度も、どうでもいいことを放送する。余分の深切といいたい。むしろ迷惑である。もちろん昨夜の寝台車では朝まで車内放送はなかったが、六時半になるとガンガンやり出した。やめる、やめて、しないでと言ってみたくなる。駅の到着時刻や屑物入れや車輛編成や、みんなわかっているはずである。わからせたいなら、車の中のわかりやすいところに書いておけばいい。盲人のためというなら、放送はツンボの人のためにはならないではないか。いずれにせよやめてほしい。発車ベルもないほうがいいと思う。

10月20日（日）

まだゴルフに気分が乗らない（今日、セブンミリオンでコンペあり）

ゴルフを始めよとの周囲のすすめで何とかやっちはいるが、何だか年齢の限界みたいなも

のを感じず。フォームが安定しなので成績はあがらない。ハーフを終るとぐったり疲れ後半の成績がさらに悪くなる。済生会病院の小川先生は、やることに意味があるからやったがよいという。ボールは何箇所も持っていて、ロストになったらポケットから出して平気ということでもいいではないですかという。でも、チームを組んではひとに迷惑をかけるわけだから気がひける。何回も回数を重ねているうちに、幾分安定してくるだろうから恥をしのんでやるしかないだろう。それでも今日なんか、できれば願い下げにしてほしかった。1万7千余円のカネがかかったがそれが惜しいというのではないが、今日で三回目のグリーンだが、何とはなく気が重い。労働組合の指導者は批判的だったが、最近はその傾向がなくなっていて、かなりゴルフをするようになったらしい。そのためであろう、ゴルフ人口はすごく多い。全く普通の遊びになってしまった。私の場合、こういうものには必ずひとよりおくれる。車の免許証は遂にとらずじまいである。ステレオ、ワープロなども手おくれになってしまっている。その意味では、もう過去の人間になっているのだ。

【欄外記入】

セブンミリオンゴルフ場で殺されたのは輝国二丁目（同じ町内）の大島氏

10月21日（月）

ハワイ県人会の訪日ツアーの人達

ハワイ州のホノルル、コナ、ヒロの県人会の人達約40人が訪問してきた。カウアイの県人会の人達は別行動で11月に訪問してくるといふ。コナで巻ずし、ニギリメシ、アンパンその他で中食を作って歓迎してくれた上村氏などなつかしい人達在中にまじっていた。日本語は話せないという若い人もいたが大部分は日本語もわかる。しかし二世であろう、心の中に故郷が消えずにあるということを知りもいっていた。福岡は変わっただろうとの印象をきいてみたかったが、はじめての訪日の人も三人に一人はあったようだ。そのことを思えば変わったも何もない。こんなものかということではわからないわけだ。夜の懇親会の時に出た話に、対外関係をずっとやってきてくれた企画の一宮次長がよくしてくれて、自分の故郷の縁故者を探している人のために、探し当ててくれうれしかったとのこと。縁故者を全くうすうすしか記憶によみがえってこない人もいるわけである。それならどうでもよいといえなくはないが、ルーツがここで、こういう人と縁があるということがわかっただけでも来日の意味があるというべきなのであろう。こういう外国人との付き合いが県政の現実と何のかかわりがあるかを問う人もいる。

10月22日（火）

共産党県委員長との懇談

誰がいいだしてのセットなのか共産党県委員会田中委員長、高、塩塚両県議らと迎陽亭で奥田県政を俎上に夕食懇親会が開かれた。当方は佐々木秘書がつき相手は4人。田中委員



長は「県政ひとすじ」を読んだがとしつつも、県民党、県民総立ち論に疑問を呈し、同和行政、失対65歳線引きなどに注文をつけて問題を投げかけてきた。当初不愉快な気もしたが、だんだん打ちとけて私もかなり論じた。高県議は次期知事選をいい、田中氏もそれにつき、近々社会党と協議に入るといつていた。知事選の前哨戦として位置づけられる北九州市長戦についてはもう話合いははじめているという。私は社共の話合いがどう進むかには関心を示さなかった。それにしても田中氏が県民党に疑問を呈し、総立ち=自立論に行政逃避の疑いを投げかけたのには私の方が驚いた。社会党の人達にもよくあることだが、もう、そういう点は賛成でないにしても理解はしてくれていてもいいはずなのに、それが無い。今日の話合いでやっとわかってくれたのではないかと思える。同和問題での解同批判も、これを知事に投げかけてくるのだから困ってしまう。私は相手が違うと指摘した。

10月23日（水）

筑後地方をまわっての一日

広報室の事業で今日一日筑後地方をまわった。一様に農林業の不振という前提に立っての若人の訴えをきかされたが、こちら聞きごたえがあり、激励すればよいので気持ちは楽だった。今時の人は情報落差の少ない農村に住んでいて、都市にあこがれる傾向がぐんと強くなっている。車社会にまきこまれてしまってもいる。だのに、生産物競争、シエーレ現象が、だからこそ、大きいといわざるをえない。今日の主目的はいわゆる「地域おこし」対話だったが、「地域おこし」といっても、農村部がそういう環境におかれているとの自覚に立って自己を律するしか対応の仕方はないのではないか。解決策はないのではないか。それがわかってほしいと思うのである。わかっているようでわからないのが通常である。森業で食えないならどうするかといっても生きざまを考え工夫をこらして食っていくしかないし、誰かに説教されなくとも、誰しもそれをやっている。ただ、平素の不満を誰かにぶっつけたいのである。今日はそういうことの再確認の日だったようだ。若い者はみな遅しかった。それに総じて筑後はめぐまれている。豊かな地方だといってよい。

10月24日（木）

知事選再出馬を既定のここのように誰もが発言する

夜になって兄から電話があり、首藤とかいう対抗馬がきまったそうじゃないかという。私が再出馬するとは決まってないのに、既定の事実のようにひとはいう。あまり気にしてないし、せねばならぬとは思わないと電話に答えたら、それをきいて安心したと兄がいう。大変なことだと思ふのだと彼はいう。気になるらしい。森山が来宅し、先日の西日本新聞にのった自治研調査団の福岡革新県政批判の記事の裏資料を私に見せた。福岡県本部の河野敬典あたりが書いた報告によるものだと森山は指摘した。県民党はわかりにくいとか、奥田のリーダーシップの不足が決定的だとか、誰が政策を決めているのか政策決定の機構

が明らかでないとか、決定に関与するキーマンが置かれねばならぬとか、ちらちら見ただけでも、そういうことを書いている。政治を知らぬ河野だと二人で笑った。幼児が母親の顔を書いたように、自治労県本部の副委員長河野が奥田革新県政を画いてみせたものようだ。そういう話を森山とかわしているうちに、つい私自身、再出馬を肯定しているかのようなもののいい方になっているのに気がついて自嘲的に思ったことだった。

10月25日（金）

地域福祉論の位置づけ

九大の公開講座で講義した。テーマは福祉政策の展開というのであったが、21世紀に向けては地域福祉の視点を織込まないと福祉は全うできないという事を主張の基本にすえた。高齢化、労働力構造の変化とくに婦人進出が一般化するするだろう。そういう段階に来るが他方で家庭及び地域が従来のような機能を果しえなくなるので、新しい観点から福祉を考えねばならぬ。その補充の発想が地域福祉であるというのが論旨である。個人の努力、自治体の努力それに国の努力が相関関係に立たねばならぬが、集団的努力の観点、コミュニティ再構築の観点を入れてこないと、21世紀に必要な福祉社会とはならないというのである。県として集団によるコミュニティ再構築へのさそい水を出しはじめた。それが「ふれ合いのある町づくり」である。それはどういうものかというのが講義の流れであった。県民総立ちの考え方が、これの土台をなすというか、補強となるというか、そういう話もしたが、十分とはいえなかった。聴講生がわかってくれたかどうか一寸疑問であるが、この論法は今後ともくりかえし訴えていく骨格としたい。

10月26日（土）

遺族大会に思う

終戦40周年記念福岡県戦没者遺族大会が午前中市民会館であって挨拶に立った。参院の遠藤政夫が会長、県議坂口勝也（緑政）が主たる役員。1000人は参加していただろう。国会議員の自民筋からも来賓、祝電がよせられた。戦没遺族も戦後40年となるとほとんどが高齢者である。今日の日本の繁栄の基礎に戦没者の犠牲があったという祝辞があちこちから寄せられたが、私にはその論法が定かに理解できない。戦争は無茶だったことは肯定し、再びこのようなことがあってはならないとの叫びはあるが、この犠牲者の加護によって今日の日本の繁栄があるという。加護といえばそれでいいが、太平洋戦争したが故に今日の日本の繁栄があるということになると、無理があるように思える。それに、中曽根首相が靖国神社への公式参拝を8月15日に決行したという事をたたえる祝言が二人といわぬ来賓から発せられた。中国の青年たちが北京でこれに大反撥のデモをしたわけだが、いやあれは平和の誓いをこめたものだと言訳している。軍備だけをどしどし強める中曽根内閣だが、これも平和を願えばこそその軍備増強で、遺族たちはこれを支持するとなると、あれこれこ

じつげの運動のように思える。

10月27日（日）

労働組合運動にも発想の転換が欲しい

福岡中連の定期大会に出席し祝辞をのべたのだが、中連は知事選に際し積極的に支援してくれた組織である。セメント、食品、電機、保険、ゴム、石油などに有力産別をもって、労働運動の戦線統一を考える際には無視できない存在である。が組織人員がそれほど多くないので決定的な力をもたない。春闘も当初からその一翼を担ってきた。むしろ社会党支持が多い。これからの労働運動ではME化をはじめとする時間短縮・雇用が当面の課題だろうが、年金など政治的課題もかかえている。高齢化社会をどう迎えるかということになると、定年延長と年金の増額で対処できるかのように考えているふしもあるが、こうした労働組合の主張には年金会計がもつ決定的な収支問題に対する配慮が欠けていて説得力が強い。企業内労働組合の弱みといってもいいかも知れない。私は、高齢化問題を、従来の労働運動の延長上におかず、発想を転換してもっと未組織一般大衆の中に「ふれあい」を求める工夫がいるのではないかと、今日は訴えておいた。従来の組合運動力の枠から勇気をもって出ていくほどの気構えが必要である。

10月28日（月）

景観形成懇の発足にあたって

いつの計画か県では景観形成懇談会なるものを組織し今日その第1回会合がガーデンパレスで行われた。今後の対策のマスタープランを2年後に作るという。史跡や街並みの保存、自然環境の保全、顕彰をふくむ広範な内容がふくまれている。街路の清掃もその中にはいる。建築物の美観についても配慮する。そうした観点からの条例を用意しようというのである。おそまきながら大変立派なことだと思う。ただ私は、川を三方コンクリートで固めたり、機能主義一てんばりの高層建築を建てたり、密集「文化住宅」を作ったりした過去への反省はまだ十分でないし、又、何よりも都市の街路が汚なすぎると思う。西洋の先進国はそうした点にもっと深い配慮がなされている。停留所でのタバコ吸殻のポイ捨て、車からの空缶の路肩への投げ捨て甚だしいし、何よりも街路、建物の看板、広告のはんらん、電柱への貼り紙など日本は三等国水準であるというほかはない。この点、私はいつも言っていたのである。商業主義も便利主義も手伝ってであろうが、公德心の欠如が何よりも問題であろう。景観形成はよいとして、心の形成（啓発）が先行すべきではないだろうか。

10月29日（火）

救い難い国鉄経営

平和経済計画会議が国鉄の分割民営化問題をめぐって知事アンケートをよこしたらしく、

佐々木君が私に意見をききに来た。分割民営化してよくなるものなら賛成したいが今の国鉄ではどうにもならないだろう。国が面倒を見ればいいという意見にも、だからといって、ならないことも確かだ。今日大牟田の石炭政策確立市民総決起大会に出たとき、市を縦断する鉄道にデモはさえぎられ、その時に見る西鉄大牟田線は乗客が詰まり、国鉄の特急(多分有明号)は全くパラパラ、空気を運んでいるといわれるがその通りである。大牟田福岡間は特急で西鉄が750円、国鉄は1800円だとか。今日の決起大会に来ていた古賀誠代議士が「国鉄は字の通り国が金を失う場」とひやかしていた。東大エリートが支配してきた国鉄だが、全くやる気がないというか、運賃面にしろ、列車接続時間表にしろ、乗客が逃げるように、赤字になるように努力していると思えて仕方がない。ローカル線を本線から分岐する時間表は本線に合わせないで、なぜか四〇分も五〇分も待たせるようにしている。先日名古屋から特急寝台で帰福したが、航空運賃よりかなり高がつく。特急料なるものをとるのが本来誤りなのである。

10月30日(水)

九州は一つだろうか

こんどの九州地方知事会議は、初の九経連との意見交換の場を設定した。「九州は一つ」の合言葉がこれを実現させたのだが、皮肉をいえば、一つでない現実が、このような合言葉を生んだらしい。永倉九経連会長もいうように、九経連は北部九州の経済界のためにあるのかと他の方からいわれる。福岡を見て他県からそういわれると同様のことが知事会の雰囲気にもきちんとあらわれた。この会では、4年後に企画される福岡市でのアジア太平洋博への各県協力を私の方からも永倉氏の方からも他県に依頼する発言をすることが申合わされていたが、それがうまくいかなかった。この博覧会は福岡市制100年記念と銘うったものであるが、市制100年は、長崎、熊本、鹿児島など九州にはたくさんある。それをなぜ福岡のために協力せねばならぬのかという反撥である。何か一しょにしようということになると、福岡が中心になる。それは対抗心からして許されない。むしろ、航空路がそうであるように、どの県も目は常に東京を向いている。だからある意味では九州は一つなんて偽りであるというしかない。今回のこの九経連と知事会の意見交換も今後どう実るかは甚だ疑問といわざるをえない。

10月31日(木)

東京一点集中で地域の自主性は崩れる

幼い頃からの印象では福岡とか鹿児島ではなくて、それらが一しょになって九州という言葉で表現された。九州男子とか九州弁といった。福岡に行くでなく九州に行くといった。別府阿蘇など九州旅行といった。四国とか関西とかいう言葉以上に九州という言葉にまとまりがあった。東京でのある会で私が熊本のことをいうと、「彼をよく知っている。お

帰りになったらよろしく」というような言葉さえきいた。全くびっくりで、福岡に帰って、どうして熊本の人によろしく伝える機会ができるだろうかと思うのが当然なのに、そういう感覚の人は少なくないかも知れない。しかし、今は全く違っている。九州各県は相互のつながりよりは、一点東京にそれぞれが繋がれていて、むしろ疎遠なのである。私は大分に行くよりも東京に行く方がはるかに回数が多い。一般民衆の生活においてもその傾向はますます強まりつつあるに違いない。中央集権であり、経済力の東京集積でもある。その力量の強烈さに、今更ながら驚かされる。われわれは、平素の心の持ち方の中で、もっと近辺との接触を考えるようにならないものだろうか。地域おこしなどといっても、隣は何をする人ぞではどうにもならない。

## MEMORANDUM

1人1人がいつでもリーダーになれるチームを組むことが、いい仕事を続ける秘訣だ。

(日航機「内誌 Winds NOV.1985 より)

インタビューで、ダークダックスのゲタ君の答えである。「4人いつも一緒にいますから、しょっちゅう会議をしているようなもんです」とも彼はいう。「みんなハーモニーが好きなんです。ハモる、このズンとした感じが忘れられなくて、いまだに追求している。それが長もちの秘訣かな」とマンガ氏の言。4人が慶大在学中から足並みをそろえている。プロとなったのが1955年というから今年で30年だ。めったにありえない人のハーモニーの例だろう。この記事が一寸私の注目をひいたのは、「県政ひとすじ」の中で人は石垣ということ为例にひいたグループダイナミックスとの同異性についてである。あそこでは石のそれぞれが違いつつ、一つのリーダーシップによって強力な一体をなすというのであったが、ここでは誰でもがリーダーたりうるということである。ハーモニー又は一体という点では共通なんだが、その中身が違うということになる。私の場合、むしろ石垣の例の方がいいと思うが、ゲタ君のようないい方もありうるということだ。今後は、さらに小グループの場合に、このような例示も参考になると思うので、ここであえて特記した次第である。マスコミあたりで知事のリーダーシップ論がよく話題になるが、これは論外としよう。

11月1日(金)

65歳になった今日

社会党の結党40周年パーティが帝国ホテルであるので上京した。なるべく動きたくないのに、こんなふうで今日65歳の誕生日は家にいないわけだ。朝出勤一寸前に直美からメロディ入りの祝電が届き、みゆきが涙していた。東京で夜直美に電話した。住友生命の新宿支社に勤めて4ヵ月になるという。収入の不安定な外交員だから、頃を見てやめさせねばなるまいと思う。登庁したら、県庁の入口の総合案内所の古賀さんが鈴虫を借りているお礼といってバースディデコレーションケーキを、そして秘書室の藤本、丸本、加賀の三人娘

がネクタイをお祝いに贈呈してくれた。女たち4人が祝ってくれたわけだ。上京の直前地階で国勢調査の集計事務をしている123人の人達にごくろうさんの声をかけに行ったが、国調が大正九年に第1回スタートしたから私と同じく65年になるということ、今日が私の誕生日であるということをつけ加えて話しておいた。こんな日は家にいてゆっくりしたいのに、公務とか義理とか上京せねばならぬとは酷なものだ。社会党は今、ニュー社会党という方向で新しい楫を切ろうとしているが、党内で論議を呼んでいる。石橋体制で党をどころがしうるか、これからだろう。

11月2日（土）

孤独な時間が欲しい

樺島君が休みもなくて大変ですねという。今日の土曜も明日の日曜も一ぱいつまっているし、明後日の代休日も一つ行事が入っている。一般には連休というのに、こちらは連勤で追いまわされている。済生会の小川先生はポカンと口をあけて居眠りするような時間がほしいものだといわれるし、樺島はふとんの中でゆっくり何も考えずに過ごせる時間があればいいという。私は孤独がほしいと思う。つとめて孤独を追求しているつもりだが、それでもその時間が少なすぎる。ひとりしていると、何か身の辺のことを整理できるし、ぼんやりすることもできる。それが次の活動のエネルギー再生にもなる。いつもいつも何かあり、誰かいる。神経はそれですりへらされていく。活力の再生にならない。そういう意味では、東京ゆきの往復の機内は少しでもそれに役立つ。遠出の車の中もそうだ。だから、出張はそんなに苦痛ではないわけだ。機内で読む週刊誌も雑知識の源泉になる。うつうつすともう到着しているということにもなる。機内誌は固物だが立派な編集だし、なかなか参考になることが多い。日航のWinds、全日空の翼の王国である。持ち帰ってよいというので、今回はWindsをカバンに入れて帰った。

11月3日（日）

久留米絣技術保持者の文化賞受賞に思う

西日本文化賞（第44回）の受賞者の中に「久留米絣の伝統技術の継承と発展に尽くした功績」ということで重要無形文化財久<sup>ママ</sup>留米絣技術保持者松枝玉記、同一（ひとし）夫妻があった。大木町長が推薦の辞をのべたが、その中に、昔はどの農家も機（はた）を織り、衣類を自給しており、織仕事は女の一つの教養でもあったというくだりがあった。その時私は母のことを思い出していた。母は村でも織上手といわれる程の腕をもっていたと仄聞している。小学校の2～3年の頃だと思うが、母が一ヵ月もかかって織っていた絣で、七二兄と私の着物を縫うてくれて、それを学校に着て行った記憶がある。それは丈夫そのもので、何年もの着用に耐えたようだ。その後その着物がどう処理されたかわからない。村に紺屋があって、そこで糸を染めたようだ。どうやってシマ模様の絣ができていくのか知らない。

勿論受賞の松枝夫妻の技術はそうした農村織物工業の粋でありその頂点をなし、今日まで70年ばかり保持し、かつ今に後継者を養成してきているのであろう。久留米緋という伝統工芸にまで花を咲かせた一人であらう。これを業として生活していくには多くの苦勞が必要だろうとは思ふ。その苦勞など知るよしもないが、それらの一端を知りたいものだ。

11月4日（月）

青少年のつどい大会

福岡県青少年健全育成対策推進本部という長い名のものが県庁内部に作られており、一般には福岡県青少年団体連絡協議会、福岡県青少年育成県民会議（これは団体法人）があって、この三者で今日は市立美術館横の広場で青少年のつどい大会を開いた。県ではこの程毎月第1日曜日を福岡県青少年の日と定めたが、今日はその一環としての行事で、実際は昨日開くべきなのが今日になったわけ。今年はや国際青年年でもあるので、このつどい大会は第一回である。子供や青年がいろいろな催物を試みる。これに大人が手伝ったり援助したりするのはいいことだ。今日の子供たちは合理主義、科学主義の産物ばかりを相手として時間をすごしている。今日も広場の一角で竹トンボを作っていたが、全くぎこちないやり方しかできない。いろんな手作り作業に馴れさせることが必要なわけで、こういう場を体験することが必要で、隣りで竹馬も作り乗っていたが、昔われわれがごく普通に毎日やっていたようなこの種の遊びや作業を通じて大人になってほしいと思う。大人たちがもっと身近かで子供達にふれ合う場を作ってくれるといいと思う。その種の機会と集団が育つことをねがっている。

11月5日（火）

婦人問題で注文があった

婦人問題懇話会からの提言と、福岡女子大学長からの女子教育拡充の要請と、今日は婦人問題について二つの注文がつけられた。国連婦人年の最終年でナイロビ集会など多くの行事を消化してきた婦人活動家たちの意気は上っている。男女雇用機会均等の法制定、条約批准も終って条件はずっとよくなってきた。あとは婦人が自己の意識改革と能力向上にどれだけ前進できるか、男子がこれにどれだけ理解を示すかにかかっているが、現状は男女ともに「婦人問題」についての自覚と理解の度はまだまだ低い。偏見が双方から示され、これがかなり根強い。現状に立って「女は家庭に帰れ」とか元来「弱い」とかの発言が多く、現状肯定者が少ない。女の幸せというような発想もずいぶん根深い。私が「女が幸せになる県政」というのはもちろんこの「幸せ」論とは違う。いずれにせよ懇話会の提言はまともで、行政指導を強く要望されているので、とくに今後の市町村指導には留意すべきであらうし、小経営者の女子雇用についても労働行政上力を入れなくてはなるまい。女子大からの要請も県財政が許しそうにないのが難所である。今の国の財政問題が、今後県

財政の好転にどう影響するかこれを待ちたい。

11月6日（水）

東京にいる子や孫たちのこと

1日に来て今日又東京に来た。明日労働省に失対関係の陳情が予定されている。直美、啓二、一彦の順に夜電話した。直美は正月帰省の航空券を手に入れてくれという。啓二は松下電器関係の翻訳のことで大阪に行っているという。ライヤで電話口に出た。来年3月22日の出産予定でもう胎児が動いているとのこと。一寸カゼをひいているとか。横須賀は美可がでているいろいろ話した。10日ほど前に軽四輪を買って10余年にぎったことのないハンドルを握り、カンをとりもどしているところだという。小六の久美は反抗期で一寸困っているという。麗衣は思いのほか消極的な子で、直美に似ていると美可はいう。それはみゆきに似ているのではないかと私はいった。啓二が大阪から帰って10時すぎにふくおか会館に電話してきた。われわれ二人がけんかしないように願うと彼はいう。別にけんかなんかしてしてないのに、彼にとっては二人の気分の不整合が気になるらしい。子供が産まれるので五体満足であってほしいといっている。又子供にとって、祖父母が元気で孫にいろいろ話してやってくれることが教育上必要ともいっていた。佐方の父母を彼は思いおこしていたようだ。美可に、百人一首をおぼえさせてくれと私がいったら、久美も麗衣も少しはおぼえているらしい。接触がすでにあるというので、それはいいことだといっておいた。

11月7日（木）

白鷺会に出席して

こんどの上京で偶然ながらキャピトル東急で開かれた白鷺会に出席することができた。8時から9時半までの朝食会である。5回の山本省三（共栄商事）氏がいつものように世話役で、河本敏夫氏が卓話者という形である。神戸市長にこのごろ5選を果たした宮崎辰雄氏も同じく5回で出席。今日の場合、20回理甲の関本忠弘（日本電気）氏が宇宙開発とその展望と題して短い講演をし、宇宙工場という展望について話したのが有益だった。われわれのように、生臭い身近かな話、今日陳情に行ったような失対事業65歳線引き反対というような現実とおよそ縁遠い夢みたいな話ではあったが、時にはこういう話をきくのもいいものだ。私と同期の左近（共同石油）と藺村（帝都高速度交通）の二人は来たのに岩田は来なかった。岡庭先輩が私の横にいて、岩田はクーデターみたいなことを試みたり、カネの無心をしたりして評判が悪い要注意人物だとのことであった。自動車工業会の中村俊夫はこなかった。河本氏が福岡の三原朝雄氏と会い、三原氏から奥田知事はなかなか現実的な行政をやっていると評価していた発言をきいたと私に告げてくれた。みんな私のその辺に気をつけているらしい。



11月8日（金）

県政の一つの盲点

夜山ノ上ホテルで自治労県本部の幹部と話し合いをした。組合側の調査では奥田県政になってよくなったと答えた者は18%とか。期待を裏切られたとの印象が強いことは確かだ。県議会の与野党関係がこうだからということがわかりつつも、もう少し何とかできないのかといういら立ちがかなりあるし、市町村では管理者側が奥田知事すらやっているじゃないかと処分を悪用してくるのが組合にとってがまんし難いという。しめつけがかえって厳しくなった面すらあるとの指摘である。これに関連して、県の地方課が昔の内務官僚ばりに国の管理体制を市町村におしつけてくるというのだ。その限りで、地方課も奥田も自治省も同じではないかとの印象を与えているというのだ。それだから、地方自治がひどく侵されているという。これを逆にいうと、奥田知事が地方課を何とかできないのかということになる。これは、要するに人事配置の問題になってくる。以前は地方課にもいい人物がいたのに、近頃はそれがどこかにとばされてしまっているというのだ。この問題は少数与党の問題とは関係ないから改善するはずである。人事が大事ということがはっきりしている。今度は早目に注意を喚起しておきたい。

11月9日（土）

人間としての再生産ができていない

8時出発、登庁して辞令交付その他の仕事をしてのち、飯塚にとび、県の農林水産まつりの諸行事に参加。中食後、築上郡にとび、新吉富村と大平村を視察。大平村の愛山荘で夕食。そのあと新吉富村住民センターで7時20分から2時間「ふるさと対話」に出席し、今日は愛山荘泊。明日は豊前市で午前中の仕事がある。このようにみると、ほとんど土日は公用の日程がつまっております（前回、次回の日曜も）、かつ平日もおおよそ12時間以上の労働日ということである。8時間労働を基準に考えると、1.5倍+ $\alpha$ ということである。土、日が加わるから1.8日分かも知れない。健康だからいいという人もいるが、自分でとくに意識していないにしろ、相当疲れているに違いない。うちに帰ってからも半公用の色紙書きその他の他への奉仕に要する時間がかかなり必要である。これでは労働力の再生産の状況にないことは確かである。知事は労働力の再生産は無用という考え方が成り立つのかも知れない。が、昨日のように、自治労の人達と話していると、再生産ができてないことが現実の問題としてはっきりしてくる。こういう状況から脱却できる日が早くこなければならぬ。

11月10日（日）

県庁跡地処理由について江口の作戦には乗らぬ

県庁跡地対策につきつい先日福岡JCから、県都の中心にふさわしい町づくり構想が提言された。このことに関し、県自体も独自の構想をもって諸提言を消化できる構想を練りたい

し、そのための研究費を予算化しているが、その用途について、江口利雄（跡地対策委員長）が、何の彼のと文句をつけて実行に移すことを妨害しているし、対策局は江口の前にはへびににらまれた蛙のごとき恰好になっているのが事実のようだ。何でも江口は「奥田に跡地施策の名声を立てさせたくない。次期知事奪回まで引きのぼし作戦でいく」と豪語しているらしい。これにつき私は二つの作戦をもっている。1は周辺からの諸提言をすなおに受け入れる態度をとり江口を孤立に追い込む。もう一つは、江口のいう通り跡地を次期知事選まで放置し、それを江口の責任になすりつけるキャンペーンを用意するというのである。江口が政争の具にしようとしているのであればあくまですればいいではないか。江口の思惑のように「奥田は何もできん」ということにならぬようにキャンペーンを張る自信はある。あんな政治屋に負けるようなことには決してならぬようにするつもりである。

11月11日（月）

知事にはもう一つの面からみた政治性が求められる

かなり冷え込んできたので、休みにしている今日は来客のためにもストーブをたいた。ポツカリあいた休業日で朝から色紙、扁額用揮毫、手紙などを書くことができた。手紙は6通、色紙は20枚というふうに、先日の築上巡視の旅で背負い込んだものをふくめ今日は全部書くべきものは書いてしまった。身辺はまだ片付いたとはいえないが、気持はすっきりした。こういう一日がやはり週に一回は必要なのである。竹村、八丁の二人が来て、知事の仕事をめぐる諸問題をさらけ出して話してみるようになった。わが陣営もよくみれば四分五裂とっていい。私をとりまく日常は行政用務が主であるが、その行動には政治的なものが確かに多い。その大部分は側近、とくに秘書室のスタッフの“政治的、配慮によってきめられる。しかしその“政治的、配慮が、ほんとうに政治的かどうかとなると、社会党、労働組合、社会主義集団、民主団体などからみた場合、必ずしも適切とはいえない。だから、これらの例からみると、秘書室等行政側からだけ判断した政治性に多くの不満が残るわけだ。この調整を当面の課題に追加しようとの話になった。

11月12日（火）

次期知事選にひたひたの動きが感じられる

昨日の竹村八丁の2人との話のつづきで今日は県民の会の山口氏を呼んで昼食を共にしつつ二人で懇談した。山口氏はこの10月でいよいよ県評を退いて県民の会で全力投球することになった矢先で、私が呼んだことに彼にとっては意義があったらしく、タイミングがよかったわけだ。県民の会は共産党、学者文化人の会、社会党の大別すると三者構成なので山口氏が社会党の線で表向きは動けないが、表と裏を使い分けながらやはり社会党の線を出すしかない場合がしばしばあろう。そういう使い分けが必要ということであった。又、知事の奥さんに、もうそろそろ動いてもらおうとの要請があちこちにあるらしいので、無

原則であるわけにはいかないで、山口氏に采配してもらうのがよいと私は提案した。山口氏は大へんいいことをいってくれた、やりやすくなったという。周辺はもちろん奥田再選の線で動いているし、自民党がかつぐ首藤氏はごく最近総裁を退いて候補として動きはじめているという。私が自分でどういうわけにはいかないが、全力投球することですごしていくしかないと考える。再出馬するともしないともいわないし、又いえない。知事の奥さんに動いてもらおうとか、知事は、もう少し内まわりをといわれても否定できないでいる。

11月13日（水）

中国総領事館の敷地問題について

中国総領事館の建設敷地が未決定である。今日総領事の県側招宴があったが、この機会に何らかの見とおしをもって対応する必要があると指示しておいたら、国際交流課長から福岡市側の対応経過及び県側のそれへの考え方について話を伝えてきた。市があっせんする手持ち土地については中国は不備を表明。市側はもうないとして匙を投げた形となっている。他方、中国側は百道の県の研修所敷地を所望していることが明かにされている。いろいろ問題を解決していけば、県も中国側のこの希望に応ずることができなくはないが、それぞれの問題がうまくクリアできるかどうかである。しかし、終局的にはこの上地に的をしぼって解決をはかるしかないのではないかと私も課長に意向を伝えておいた。市に対する県側の感情のシヨリが若干残る——それは市側が総領事館誘致には北九州市と綱引きをやっておきながら、敷地については努力の払い方が不十分ということである。福岡市は何かにつけて県に責任を転嫁して自分だけうまい汁をすおうとする。そのようなそぶりが随所にみうけられる。水対策にしてもそうだ。この際市の敷地問題解決の責任を明かにしたいと県側は考える。

11月14日（木）

農業での過保護体質行政は積然としない

知事査定でいつもひっかかるのが農政部の農家補助予算である。私はこんな過保護をどこまでやる積りかという、赤保谷農政部長は保護であっても過保護ではないという。今日の話は肉用牛飼育農家が5000万円をこす借入金をしている場合に8.5%の利子を払わねばならぬところを、農業金融機関及び県が5%分を補助してやるという問題である。長期借入に対する長期利子補給である。農業金融機関が県が出すなら出そうということで、県の資金、県農業団体の資金が誘い出される仕組みである。私が今年の牛に対してするなら来年の牛に対しても同じことをするのかという、今現在の借入金についてだけだという。そこがよくわからない点である。今の借入金なら来年も再来年も新規借入金ができる仕組みはないのかときくと、それは問題にされていないという。今回限りみただし、そうでな

いみたいである。肉用牛は毎年新規に仔牛として入れられるのではないか。しかも今日赤字なら年々そういう状況がサイクルとしてつづくのではないかという、その辺の答があいまいである。釈然としないままOKとせざるをえない。対象経営農家42戸というからますます行政介入に疑問が生ずる。

11月15日(金)

「つき」と突然の死を思う

上杉佐一郎夫人の告別式が福岡斎場で2時から行われた。わずか一時間のことながら式場は大変豪華にしつらえてあった。マサ子夫人である。ガンだったのだろう。11月10日死亡、66歳になる寸前とか。平均よりかなり早い。私も何だか突然に、自分もいつ死ぬか分からない身だなと思った。死んでも不思議ではないと思った。大往生といえる生涯だったかをふりかえる。夜、県行革審の答申起草委員の先生方の懇親会に招かれた。この時、奥田行革なる言葉がでて、奥田さんしかやれないと委員の多くが知っているとの説明があった。私からは逢坂会長を念頭において、よい答申を出してくれて有難く思うといい、誰かが奥田さんは「ついている」といったのを思い出し、そのことを起草委員の皆さんに話した。そのついでに、私は短い時間ながら、自分の生涯は「つき」の二字に表現しつくされるのではないかと考えてみたりした。九電の永倉三郎氏が「無我の人生」という本を届けてくれた。三回も応召した戦争の思い出を綴ったものだ。彼も生き残り「つき」に恵まれたようだ。私はついている。ある日突然「つき」から見放されるようにも思う。一昨日測定で血圧127-80、脈拍58と出る。

11月16日(土)

賀状シーズンになって

山口氏が嶋津氏を伴って来宅した。年賀状の季節になったので、県民の会のレベルでの知事賀状を今回どうするかということとの関連で住所録の相談をしようというのである。以前こうした事務所は暑中見舞と賀状だけしかしていないということをきいて不思議に思ったことがあったが、いざ実地に考えてみると、それだけで手一ぱいであることがわかる。どれだけの部数を出すかにもよるが、こんどの暑中見舞にしても3~400枚返送されてきた。逆にある人は2通も3通も来たので無駄じゃないかという。山口氏にきいてみると、主たる団体に分担させて出しているとのこと。有名人、共通人が2~3通受けとることになる理由の一つがこのやり方の中にある。返送されるのは住所変更又は宛名書き不正確のためである。後者は宛名書きアルバイトがいい加減な書き方をするためにおこることが多い。アルバイトは不審あれば正すべきなのに、いい加減にやってしまうことが多い。住所変更は「最近のアドレス」を追求する事務努力が足りないためのことが多い。この努力をすれば

半分は防げるだろう。九大や県庁の職員録でもずいぶんかわるものだ。つねに最近の住所録を求めねばならない。日本独特の風土かも知れないが、賀状書きはともかく大変な仕事だ。

11月17日（日）

実に人間くさい政治の世界

この前の月曜日夜の結論として、今日夕方から第1回の藤の会を開いた。近藤副知事、林、白石、長谷川の三県議、竹村社会党県本書記長、八丁と私の7人で県政の重要問題について基本的な点で意思統一をしておこうという会で、私宅で行う。この部屋は両側に藤棚があるから、隠語の気持で藤の会という名称をつけようというのである。自民党が首藤で次期知事選を走り出したらしいのでこれにぬかりなく対応しなければならないのに、多くの点で不十分さが感じられる。同陣営でありながら、意思疎通がなかったり、対立したり、手抜かりがあったりでは困るので、そういうことのないようにというのが今日のねらいである。まず、県職幹部の人事配置、知事日程の了解、各種委員会の人事選任問題、来年度当初予算の目玉政策、当面の重要課題などが話題にのぼった。清進会なる後援会組織が十分機能していないので、全面的に洗いなおすこと、島野氏の処置が中途半端だから断念させるならばはっきりとそう決めよう等々も話になった。どの時代にも政治の舞台ではこれに類することがあったに違いないと思うと、政治がいかにかかわらぬ人間臭をもったものかわかる。

11月18日（月）

福岡綜合法律事務所15周年

綜合法律事務所の15周年祝賀会（ガーデンパレス）に九大事務の本田氏がきていて、首藤陣営から九大職員録をくれと行ってきましたよという。同じ席で原田鹿三、木村、西岡らもきていて、西岡氏が、首藤の出馬は形式のととのえにすぎませんよともいった。あちらでもこちらでもかなりこの問題に関心があることがわかる。又原田氏は、田川の建設業界は奥田で固まるでしょうともいう。こんなことわざわざいわなくてもと思うが私にいうのである。他方、前原の諸岡氏は、同席で、一度来て下さい上原さんが待っています、と。うちは湧き水でおいしいお茶が飲めるので奥さんを連れてきてほしい。私は、行けたらいいと思うと答えておいた。昨日来た連中は、清進会をやっている者は何しているんだといっていたが、その中に諸岡氏が入っている。諸岡さん、森田則一さん、これらはもう感覚が古いのかも知れない。綜合法律事務所のこの祝宴には、右も左もごったまぜに来ていた。当然なのだが、左と思う人はそう思い、右は右でそれでいいと思っているのであろう。それでいい。今日は帰宅してみると、テレビのうつりが悪くなってしまったところだった。一彦が就職して初のボーナスで買ってくれた受像機、15年になるだろう。歴史は流れる。

自分が年をとったことをいつも忘れ勝ちなのはなぜなのだろう。綜合法律事務所も15年だ。

11月19日(火)

県職労定期大会に出てあいさつをする

夕方あわただしく上京した。その前に石橋文化センターで開かれている自治労福岡県職労大会に出て祝辞をのべた。県職は今、人勸完全実施、11級制の導入反対、医療職給与表(2)、(3)の導入反対などの旗のもと闘いの姿勢をとっている。女子職員とくに看護婦などを中心に、この10日間ほど毎日、組合の指示による陳情ハガキがどんどん私のうちに投げこまれる。500枚も800枚も同じ趣旨のハガキが積み上げられている。職員課の方にもって行って見てもらっている。そうした中での組合大会への知事のあいさつである。情報公開のことはおくとして、この12月議会に提案しようとしている行政改革と給与改訂については、県執行部方針に対し組合が反対していることを知りつつあいさつに立たねばならぬ立場はつらい。しかし、私は職員の日常の労をねぎらい、これらの方針について県職員の協力納得が必要である旨を強調した。それと同時に、今日中食をはさんで都ホテルで県評中小共闘の人達との話合いの中でのべたように、労働組合もイメージの転換をはかり、大衆から愛される組合になるよう従来の組合運動の埒外にあったような運動もやってほしいと提案した。県産品愛用、名刺利用の県課題PR、作文コンクールなど。組合側は次期知事選を意識していたこと確かで、私のあいさつ行動を歓迎してくれた。

11月20日(水)

「いつまで石炭か？」

石炭鉱業審議会が第8次石炭政策でかなり後退する答申を出しそうだというので産炭道県(北海道、長崎、福岡)で政府陳情するため、今日一せいに行動した。でも一方で「いつまで石炭か」という声が業界、政界で高まっていて、この陳情はもう一つの盛り上がりがない。北海道の横路知事は欠席していた。経済界のエネルギー観がかなりかわってきたわけだ。国内炭は外国炭に価格面でとても太刀打できないらしい。高い石炭を使わせる電力、鉄鋼、セメント業界は一せいに反撥しており、石油業界も冷い。関税をとられてそれで石炭業を保護するいわれはないと主張している。その上最近は円高が定着しそうな傾向である。夏ハワイに行った時1ドル240円ぐらいだったのに今は200円の声すら出ている。この辺で定着するだろうといわれる。今日の新聞は202円でまだ上がりそうだ。アメリカの貿易不均衡への是正圧力がこのところ大へんに強く、円高が200円程度まで行くしか止まらないだろうといわれ、そうなると、石炭をめぐる環境はますます厳しくなるわけだ。安い石油に押され政府はそれに対応する政策を出すしかないだろうからである。われわれも陳情していて、このような事情を知れば知るほど、「依存体質」の矛盾を感じるのである。

11月21日（木）

福博の商工界で首藤氏が知事選出馬を表明したという

大塚商工部長が一寸話しておきたいことがあるとやってきた。ふんふんといってうわのそらでできたので精確に頭に残ってはいないが、先日商工業界の会合の席に、三原代議士が首藤氏を連れて来て紹介、首藤氏は、自分は福岡県に生れ育った者で県のためにこれから働きたいと、暗に次期知事選出馬のあいさつをした。大塚氏の知る限り、首藤氏みずからこうははっきりわかるように発言したのははじめてではないかと思うとのことであった。彼の私への話はそれだけ。首藤氏はもうはっきり動いているとのことである。昨日終わった県職労大会では奥田再選を期すと執行部は明確に方針を出し、首藤氏の立候補が明らかになったが、これは亀井県政の分身でもはや過去の人と批判的見解の表明したことが新聞に報じられていた。保守一本化が成れば悔れないが、そうでない限り、勝利はわれにありといった県職労の姿勢がでている。私がこうしたことに云々することはできないが、もう人々の関心は公然とこの問題に向けられている。12月議会にどう臨むか、今日は与党懇、明日は野党懇だが、取沙汰される問題の裏にはこれがある。今から1年半こういうことばかりに気がつかって過ごさねばならないと思うと気が遠くなる。はっきりいえることは、政治は人々の気持が決めていくわけで我个人の気分でもうにもならないということである。

11月22日（金）

七二兄ガン手術（1）

和代からと九一からの電話が相つぎ七二兄が今日胃摘出の手術をし、ガンの診断がおりたと<sup>ママ</sup>こと。胃を全部とって大腸と食道をつないだようなことになったらしい。この夏に電話があり、一度そちらに行こうと思っているというので来るかと期待していたのに、その後音沙汰がなく、そのままに打ちすぎていた。その頃は食物が通らなくなり、ソーメンばかりを食べ今はもう栄養失調のようになっているとのこと。5年ほど前に同じく胃の手術をして胃が小さくなっていきいていた。その後細々と食べ、まずまずの健康で当方知事選などわがことのように福岡に来て活動してくれた。お布施事件の渦中に入ったことも記憶に残るし、又その後も福岡に来て関係の寺まいりをしたことがある。多くの兄弟の中で唯一人の兄ではあるし、一番濃いスキンシップで育った兄であるのに、今日の電話では手術は成功したらしいがガンで胃全部摘出ということならもはや寿命かなと思うしかない。見舞にといいことも考えなくはないが、明日の休み以外には今のところ日程のとりようもない。今行っても集中治療室に入れられているようだからどうしようもない。わがことのように案じられる。ガンというだけに。

11月23日（土）

七二兄のガンの手術（2）

ほんとうに兄弟は年齢に近いほど育つ過程で意味が大きい。ガンの知らせがあった七二兄は、あと長くないのだろうか。2歳上で小さい時は犬ころのように何もかも一しょに育ったように思うし、兄の影響ははかり知れないものがある。とくに、小学校の時代にそれがいえるように思う。昔の学校の唱歌、国語の教科書、算術、私はあれもこれも兄のマネをしておぼえた。逆に、兄は何もかも私にはオープンだった。かくすことなく、尻込み思案もなく、学校生活の全体を私にぶっつけてきた。私はそれに刺激されて成長した。日常の遊びも亦測り知れぬ影響を受けた。常に彼のあとをつきまわった。他とのケンカにつき合うこともあった。川や山野をかけまわるのも又兄のひきまわしによった。彼はガキ大将でもあった。彼の敵は私の敵でもあった。そういう仲で成長した事に私は深く感謝する。妹や弟はこの意味では関係は異なる。私は衣類も彼のお古を着ることが多かった。寝るふとんも同床そのものであった。妹や弟はそうではないし、七二兄も私と一しょでは受ける影響は又違ったであろう。二つとない縁であると思う。その兄がガンだという。気の毒であると同時に、自分もその仲間入りをするのではないかとさえ思えてくる。

11月24日(日)

大相撲11月場所千秋楽

表彰状

千代の富士貢殿

あなたは昭和六十年度大相撲十一月場所においてよく健闘し、優勝されました。よって福岡県知事杯にその名を刻し、永く栄誉をたたえ表彰します。

昭和六十年十一月二十四日

福岡県知事 奥田八二 印

今日九州場所千秋楽。14勝1敗で千代が優勝した。上の表彰状は昨年以来のもので、今日は中国大使館からも表彰状が出されていた。中国ははじめてではなかったろうか。力士を近くに見ることができた向正面の通路脇のマス席を与えられて2時半から約3時間の観戦であったが、テレビで見るのとはやはり違う。小錦の太いこと、本当にあきれるばかりである。肉体がどうにかならないかと心配するほどで、今日も押しの一手で勝って11勝4敗の好成績を残した。一列後のマス席にアメリカ総領事のモーフォード夫妻ら観戦していたが小錦がハワイ州オアフ島出身とも関連してあれこれ感じたに違いない。国技といわれる通り、日本ならでのスポーツである。外国からの表彰はチェコ、アラブ連邦もあった。大分県が椎茸、八女市が茶を贈るなど福岡市以外の自治体からもあるわけだ。

11月25日(月)

冬がかけ足でやってくる

夕方から人間ドック。ひまがあらうからと思って読み物2冊を準備。1冊が新歳時記、昭和



45年（第25版）。めったに見ないのでこんな時にと持ち込んだ。11月の項を見る。今時の者には古い、生活に合わない自然、社会、人、心の動きがたくさん盛ってある。農村社会は崩れ、耕作は全く機械化されてしまっている。今の人が新々歳時記を編纂したらずい分違ったものになるだろう。それとも今は今ですであって出版されているのを私が知らないだけなのかも知れない。それでもいいのがこの本にたくさん出ている。陰暦の10月初亥の日に万病を除くため亥の子餅を搗くとあるが、これなど今の人にはわからない。しかし、

博多川<sup>さより</sup> 鱻の遡る小春かな 清三郎  
からからと落葉追ひ来て追ひ越しぬ 立子  
蹴ちらしてまばゆき銀杏落葉かな 花蓑  
独楽二つぶつかり離れ落葉かな 立子  
水底の岩に落つく木の葉かな 丈草  
はつしもや吉田の里の葱畑 虚子

こんなのは私にもよくわかる。少しものを見つめる者なら今の若人にも理解できよう。冬がかけ足でやってくる。今日快晴。板付の空、山、里は光っていた。

11月26日（火）

ほぼ健康といえるだろうか

人間ドックに入って健康状態を観察してもらった。血液からみて糖は空腹時にまずはよいが肝臓に少々問題が残るということだ。これは疲労のあらわれかも知れない。血圧は78と127ぐらいであり、脈は62、心電図に異常なく、CTで内臓、脳にも異常なし。膀胱の委縮は以前よりよい方向と見てよいとのこと。体重54kg、あとたいてい順調だが、腹部に腸内ガスが多すぎるということと胃から十二指腸までの出口に炎症があることが問題として残るとのことであった。この炎症は時間の都合さえつけば胃カメラ検診を実施したほうが実態をつかみ易いので、その可能なチャンスを考えようとのことであった。ガス対策は、第一は食物、第二は運動、第三は朝コップに一杯水など飲んでみることに、第四は胃壁を強くする薬の服用によって対応してみようかどうかとのことである。又大便の用足しの時間をゆっくりとって、大便を残らず出してしまおう努力をすとか、ウォッシュレットを利用して肛門を洗うなどしてみる必要もあろうとのことであった。まあ、何でもいい、できることから努力してみよう。水を飲み、運動に心懸けることから始めてみようと思っている。ともかくまずはおおむね健康とのことだったので安心した。

11月27日（水）

当面する二つの政治課題

夕方若干時間があいたので森山、安達を呼んで二つの問題を投げかけてみた。一つは、来年出版しようと考えている著書について、メンバーを考えるなど、作業に入ってくれとい

うこと。それは「県政ひとすじ」が7月末に出版されたのだが、それより一ヵ月は早く第二弾を放ちたいという品物のことである。「県政ひとすじ」には「総立ちが始まった」として若干の例をあげたが、次のは、総立ちがかくもひろがっているという事例の紹介で一そう読みやすいものにしようという構想を実現できるものである。出版の手伝いについて問研にまかせておくことに社党県議控室あたりで不満があったようだから、第二弾目のはその種不満を少なくする配慮が必要かとも思う。いずれにせよ、頭の中で準備に入っほしいということである。第二は、すでに始った自民党側知事候補首藤の動きの中で、予想した通り、彼は県勢浮揚というか「雄県」をぶち始めているが、当方で「雄県」とは何か亀井が残した雄県の実態を明らかにし、首藤がねらう雄県論を当方からも十分に批判できる準備が必要だが、行政レベルで、それをするスタッフがあるかどうかを考えてみてくれということだ。私はそれなりの批判はあるが、一つの勢力にせねばならないと思う。

11月28日（木）

中間派の反奥田は色濃い

午後2時、労働党の役員たちが面会旁々激励そして県下の知事選状況をこうみるということ報告した。彼等なりにあちこちまわって県民の反応をさぐっているようだ。それはほぼわれわれが知っているのと食い違いはない。私が足まめにあちこち歩いていること、対話をしていること、離島、農村では大変に評判がよいし、保守層の者でも革新奥田ということではじめにもっていたイメージをかなりすなおに変えつつあるようである。ただ中間層の分子でも幹部になると（例えば浮羽の大石県議）（などの）反応は反奥田で貫くといっている。大牟田の民社の石橋も又同じである。自民や経営陣はもちろん反奥田をはっきり表明することを遠慮していない。また、革新陣営と思われる労働組合員及び幹部の中には奥田に幻滅を感じるといふ者もあるといわれる。およそそういうことを報告しておきたいといって帰った。私はそれがまともな反応だと思っている。中間層に幻想や期待をいまくのはやめなければならない。せいぜい反奥田の旗を明らかにしないようにできれば成功であろう。それよりも無党派をどう引きつけるかが大切で、その限りかなり成功してきているように思えるのである。

11月29日（金）

婦人の地位向上について

昨日は農協婦人部協議会総会があつてあいさつに立った。婦人の地位向上がスローガンになっていたし、国連婦人の10年の最終年ということがバックにあることは明らかだった。今日農業労働力の60%は婦人が占めているので農家における役割は大きい。中小企業、ことに商家でも同じことがいえる。家事、育児、教育の分野においても婦人の地位はまことに重要である。であるのにまだ、一般に、男は職場、女は家庭という観念が根強い。国連

婦人の10年のねらいは、平等、参加、平和のスローガンのもと、女はもっと職場に政治に、男はもっと家庭にという運動方向を目ざしている。がその場合、「男と相携えて」ということも必須条件にあげられている。今日の私のあいさつではこの条件を強調しておいた。ともすれば婦人運動には女ばかりが集る。女ばかりで気えんをあげている。しかし、重要な条件たる男女相携えてということがもっと配慮されないといけないのではないだろうか。こういう席に、もっと男を呼び込む工夫をしたほうがよいのではないかということでもある。女の解放なくして人類の解放なしとか、女の問題は男の問題でもあるといわれるのだが、そういう点の強調が今求められているように思うのである。

11月30日（土）

もう知事選の前哨戦がはじまったのか

ひるをはさんで県評傘下の単組、地区労の役員たちが知事と写真を別々に撮るといふ会をもった。機関紙に正月用として用いるのが目的。話し合っているなかで、先日産炭地の浮揚のための陳情団に加わって地元選出国會議員を訪ねたら……という人がいて、遠藤政夫の部屋に行ったら遠藤がいきなり「筑豊を浮揚させるなら知事をかえんとどうにもならんよ」と陳情団に対し叫んだのでびっくりしましたよともらした。誰にでもこんなことをいっているんですかね、東京では知事選の火ぶたは切られていますねと彼はいう。そうかと思うと、ここ数日来福して財界や野党筋へあいさつまわりをした首藤は意外に冷たく応待されてがっかりして帰ったと安達、森山がいう。保守はまだまだ一本化してないらしい。グアムの巡拝団のなかで井上昭和民生部長が奥田何するものぞと飲んでしゃべっていたとか。他方首藤が亀井残党は用いないと早や当選気分でものをいったので「残党」らが彼に反撥の電話をかけてきて首藤陳弁の幕があったとか。井上も残党なんだろうが、この同類は青くなっているともいう。同じグアムで橋詰が奥田もいいところがあるといったら、新宮がそんな評価はいかんと、同じ自民党内で割れている所をみせたとか。

## MEMORANDUM

済生会福岡病院の病室で人間ドックの一夜、新歳時記から拾う。（11月25日）

掃けるが終には掃ず落葉かな 太 祇

東京ふくおか会館で中食をとりながら庭を見ていたらこういう情景があった。いいではないか、全部掃き集めたり掃き捨てたりしなくても落葉はかわいいものである。紙屑ではない。どこかに消えてなくなるだろう。生垣の上には掃きもされず薄積りしたままになっている。どこかに消えていくだろう。

旺んなる落葉に向ひ立ちどまる 壁の花

にぎやかにからたちの葉のくゞり落つ 里 石

掃き止めて暫し落葉の降る下に 大 東

梢より銀杏落葉のさそひ落つ	虚子
散りしきし柿の落葉や裏表	雅一郎
物いうが如き枯葉を顧みる	虚子

このように落葉だけでも11月を十分に味わうことができる。「木の葉」の項にこんな説明がある。——木を離れて了ふと単に木の葉としての存在となる。それと同時に散り残った乏しい木の葉も亦木の葉という感じが強くなる。——ふくおか会館の応接室から皇居の方を眺めると、すぐ窓の下にプラタナスの並木が目に入るが、残り葉が風にひらひら動いている。今にも落ちそうで落ちないでいる。しかし、落ちた葉は残り葉よりも一そう風に敏感に大急ぎで吹き飛んで止まり又吹き飛んでいく。

#### 出版の意図あり

私は先日安達君に二つの宿題を出していた。一つは「雄県論」批判の諸資料をそろえておくこと、もう一つは来年予定しているもう一冊の出版物について準備構想をととのえておくことである。前者については、首藤が先日来福して「雄県復活」をぶったということもあり、知事選には必ず重要論点になるということが理由。安達の話では樺島がこの仕事は引きうけてくれるだろうということだ。出版のことについては岩崎隆次郎に相談してそこから社会党及び社党県議にもちこんだ方がいいのではないかとのことである。「県政ひとすじ」が問研を中心として、八丁、安達、樺島、佐々木らの手をわずらわせたという事実に対し、県評や社会党が好感をもたなかったため、販路にも制約をうけたので、次の時はその点を注意しようとの発想が前にはじめているのである。同陣営内とは思っていてもやはり俺が俺がという人が少くないので片方立てると片方が立たないということになる。人類永久の問題のようだ。その辺カジの取り方をまちがわないようにすることもまた政治の部類にはいるのである。次の出版の構想はすでに「総立ち」実態紹介ということで、読みやすく一般向けになるようなものというのが私の考え方であれこれの資料はもうできているとあってよい。出版の時期は来年の秋から夏にかけて早い時にと思っている。5月のはじめが理想的である。

12月1日（日）

かな臨書

一日休みで時間がゆっくりあった。「日日是好日」の条幅を揮毫仕上げにこぎつけ、つづいて高野切（第二種）の2回目の臨書に入った。先月27日から入ったのだが今日は10枚書いて一寸疲れを覚えた。第一回目とくらべると、かなり馴れてきたように自分では思う。でも連綿がまだ自由ではなく筆の早さそのものに問題が大きく残っている。どこまでの連綿でどうなめらかでなければならぬかがよく見きわめられていないので、止ってはならないところで止まって手本を見てしまう。これでは十分とはいえない。今年中に第三種まで第二回目を書き終えたいと思っているが、そうできるかどうか。何だかこれも又執念み

たいになっている。第三回を終るようになると、他の手本にかえてもよいだろうが、三回ぐらいはたどってみたいものだ。年をとると手がふるえるというが、それが、字にどう出てくるか、何歳ぐらいで出てくるかそれが心配。何のための練習かわからないことになるが、それが一生ということかも知れない。執念とはいうが、それは楽しみでもあるわけだ。楽しみながら生涯を終るのであれば、これほどいいことはない。

12月2日（月）

12月県議会はじまる

今年も12月を迎えた。今日12月議会初日、提案理由説明の演説。今朝出発前に素読はしていたが、読みまちがいが数箇所あったらしい。重要箇所一つについては紙片がまわされたので、演説を終えて直後に訂正の発言を加えておいた。どうしても読み違えるものだとつくづく思う。それはそれとして、こんどの議会から審議の方法が従来の予算、条例二つの特別委員会審議方式にかえて、常任委員会ごとの審議に切りかえられたので、それが審議の進行にどのように影響するか、今回は試行錯誤、テスト・ケースになるとのこと。それにしても今回は、行革、情報公開その他総務常任委員会に付託される重要案件がひしめいているので、「総務」が大変だということになる。野党側も知事候補を首藤に絞ってきている手前かなり突っ張りを見せるだろうと予測されている。行革大綱は先日発表したばかりだが「手ぬるい」との批判があり、情報公開については「答申からの後退」が云々されている。もっともこうした前評判はマスコミの強意するところで、野党がここでどれほどねばり攻撃にくるかわからない。彼らには面子というものがあるから、尋常には引きさがることはなかろう。

12月3日（火）

婦人問題への将来展望

RKB 県の買取番組県政サロンの録画取りで、RKB の山下さん、北九州社会教育委員の富安さんが知事の手相手という鼎談の形で13分ほどの長さ。今年国連婦人の10年の最終年それも12月になって、これをどうしめくくるか又は次に向けてどう出発するかという趣旨での鼎談である。富安さんは「婦人の翼」でオーストラリア、ニュージーランドに行ってきた人でもある。これまで婦人の地位向上について県はどう対応し、今後どう対応しようとしているかが問われるのだが、私としてはまず庁内人事での婦人の登用を少しは無理でももっとやりたいし、今県施設として婦人総合センター構想がかなり熟してきているのできうべくんばその建設に早く着手したいとの願望がある。今年福岡女子大に図書館が新築成り、その一角に女性生涯教育資料室なるものを設置したが、その開放的活用を大いに期待している。国連婦人の10年の最終年は「新たな出発」の年として位置づけされているので、従来、国際レベル、国内レベルでさまざまな地ならしが制度的にできたのだから、こ

れからは、それに内実をいかに盛るかが課題であろう。今日はそういうことを中心に話し合ってみた。

12月4日（水）

年賀状をどうするか

年賀状のシーズンになったため、あちこちから喪中につきという書状が舞い込んでくる。中には誰某死亡のためと明記してあるのがあってわかりやすいが、多くは喪中とのみ書いてある。当方がわかり切っているのはいいが、そちら様のどなたが亡くなったのか不案内なもの、さらには、この発送人が誰なのか全く記憶に出てこない人も少なくない。知事という位置にいと、どのルートかわからないが相手には当方が住所録などに記載されていて、当方には記載されていないのがあるし、当方の住所録にも記載されているが、忘れてしまっている人もある。こんなのはどう対応してよいかわからないのが現状である。年賀状はどうしますかと秘書はたずねる。さあ、今年は出すまいかと思うと答えはしたものの、それでいいかなと不安になる。実は今私の住所録は県民の会にあずけっ放しになっている。県民の会では私の住所録を見て全部、県民の会としての賀状を発送するだろう。そうなると、私の方から同じ住所録による賀状を出す必要はないのではないか。否県民の会の賀状内容と私自身の書く内容とは当然違った味のものでなくてはならないとしたら、やはり私自身の賀状を出さなくてはならないように思う。心はゆれ動いている。

12月5日（木）

笑顔と会釈はそうそううまくいかない

中食は特別会議室で、自治労県職本庁支部の新役員たち5人を相手に懇談のうちにおえた。本庁支部だから、一番身近にいる人達である。エレベーターの中で、廊下で、知事の笑顔がもっとあっていいのではないかというような声が出た。こうして対談していると知事には笑顔がよいのだが、廊下で会ったりしたときは一寸おっかない顔だという。いつもにやにやしているわけにいかないのは当然だが、誰にでも語りかける、会釈をするという心懸けが必要ではないかというのである。思うに、そうはいつでも、なかなかそうできるものではない。相手がどう反応するかわかっているならよいが、全く反応しないのに、こちらだけが米つきバツタのようにペコペコしたり、何もないのににやにやしたり、とんでもないあいさつをするというわけにはいかない。反応いかんによっては調子がよくないものである。703号室あたりで、表彰状又は辞令渡しがあるとき、名を呼ばれた者が次々に立つ。そのとき知事は正面のテーブルから見ている。呼ばれて立つ人の中に、立って会釈する人が多い。それに当方も会釈でこたえるのはいいが、こちらが会釈するのに相手がムッとして立ったままであれば一寸調子が悪い。ひとがいうようには笑顔や会釈はできるものではないのである。

12月6日（金）

代表質問の第一日

代表質問の第一日、自民の水戸と緑民の西原の二人が、ひるをはさんで質問に立った。水戸は質問事項は事前に通告するとの議会内申合わせを実行せず、ずっと雲がくれて、答弁書づくりができず、私を困らせようとした。そして質問に当たってもあれこれこまかく項目を分けて矢つぎ早やに攻めてきた。私はメモをしたが半分ほどしか書きとれず、半分は答弁もれだとせまってきた。彼自身のメモを再質問のとき私に示し、もれているのは〇印だといってすたすた壇を下りていった。実は、そんな態度で困らせようとした方が逆にみんなの笑いものになった。私はメモのひまがなかったのと、暗に通告のない質問であることを壇上でいい、もれていたものを答えていった。議席から通告なしにというヤジもとんだので笑いものになったのは彼である。返り血という形である。一寸脳足らずの感がある。西原は全部通告したもので質問したが、その演説の中に、知事はバカだの何のという罵言をまじえての発言だった（財政難についての批判）が、これまた気取りすぎの感があって効果の少ない質問であった。水戸の質問への答弁の時、例のチンといわれる高岡が又前例にならない大声でヤジったので私も声を高めて答えたわけ。

12月7日（土）

水問題怨念

田原代議士をはじめ、筑後川からの福岡導水に苦勞した当時の人達を、県市が呼んで山ノ上ホテルで夜懇親会を開いた。九地建関係者が来賓でOBもまじっていて総勢25人。当時の苦勞話が当然話題になるのだが、漁民の説得に一番骨が折れたと誰しもいう。来ていた近藤副知事は大牟田に勤めたこともあってか、有明漁民は三井鉾山から札束でなでられる体験があるからよけいに骨が折れたのだといっていた。もちろん筑後大堰という大事業は流域外導水という一寸問題のあるやり方をするのだから、少しは抵抗があるのは当然といえようが、当今漁業補償といえば粘り勝ちの観がある。この粘りによって今は三池港の新規開発が絶望的になっているともいわれている。これは苅田港の改修に際しても宇島漁協ががんばっているケースについてもいえるし、犬鳴川のダム建設及び宮田工業団地導水について山田水利組合がとっている態度についても似たようなことがいえる。昔から水を治める者は天下を治めうるというが、水問題はそれ程に人々を動かす力をもっている。この二年つづきの少雨の中で福岡市の水ききんが昭和53年当時のようにならなかったのは筑後川導水のおかげだと、今日はみんなに感謝した次第。

12月8日（日）

次回出版に赤ランプ

午後仲好旅館に集ってもらって次回知事出版について論議してもらった。「県政ひとすじ」

について、問研主導型になったことについて、県評さらにとくに社会党が冷淡な対応をしたので、次回出版についてはその点配慮すべきだと思ったからである。岩崎、八丁、衣笠、嶋津、安達の各氏を呼んだ。八丁がいうのは、販売と代金回収は、こんどは思うようにいかないのではないかと、「県政ひとすじ」の在庫1200冊を例に、慎重論のトーンであった。政治資金を投入するなら別だが、と彼はいう。私は次回出版の計画のあることを大要のべた。でも誰もが、次もやろうとはいわなかった。次回もやるべきだとの空気は全体としてはあるが、どうすれば実行にうつせるかについて、社会党を中心にもっと打診すべきだろうという程度でそれ以上の積極発言はなかった。この問題だけではない。社会党総評ラインといってもひとが納めた会費だけに頼って動いてきた歴史を背負っているためか、自分で汗を流そうとする人は少い。「県政ひとすじ」は1万2000部刷ってまだ2000部近く残っているらしい。積極的に売ろうという人がまだ足りない。次回出版に赤ランプがついている。

12月9日（月）

県議も“おんぶにだっこ”論に立脚している

ほんとうに冬になったといえる空気の冷たさ、空の雲模様である。代表質問の二日目。社公の二人で、明日からが一般質問。平穩に今日も終わった。但し、酒匂（公）氏の最後の演説は一寸頭にきた。農漁業の問題をとりあげた中でカメムシ対策、有明のりの赤ぐされ不作などについて質問したのはよかったが、私の答弁が終ったあとで3分間といって「要望」に立ち、知事はこうした農漁民の被害に対する同情の念や対策姿勢がないと演説したわけ。もちろん県は何もしなかったのでもないし、何もしない予定でもないのに、具体的にこうしますといわなかったから、吐いた捨てセリフであったのだと思う。私が常々いっているように、農漁業に対しては行政は過剰といえるほどに対策をしてきている。酒匂氏の発言をきいていると、被害が発生したら救済策を立てるべきだとストレートにいっている。県民の誰だって、自分の生業を営む上で、あれこれリスクを背後にもっているわけで、中小商工業者もまたそうである。だのになぜ農漁業者が損害を被ったら直ちに県が救済せねばならないのか私にはわからない。融資の道もあるわけだ。この“おんぶにだっこ”の発想がわが国の政治的権力の体質化しているのが問題ではないのか。

12月10日（火）

情報公開条例にケチをつけることに懸命だ

ほんとうに寒くなった。しばらくこの寒さはつづくといわれている。一般質問の第一日、11時から5時半までという日程。議員も不勉強なのか答弁資料が前夜にそろえられなかったり、今日になって質問が変更になったり、事務方の苦労は大変である。頭を下げ下げでの対応に奔弄されるのである。行政改革を議会運営にもばっちりもち込みたいが、そこは



立入禁止。この今期から運営の基本がルール変更になったことは事実だが、どれだけ審議促進に役立つやら。自民の橋詰はプライバシー保護条例が同時提案されないなら情報公開条例は棚上げしたいという。これは自民党全体の底に流れているもの。同党高橋は、これは奥田の選挙公約というが、亀井知事時代にも問題になったことがあるので知事の専売特許みたいに言うとか、先行県のマネばかりしているもので福岡県の特徴はないとか、審議会の答申から大幅後退しているから効果はないとか、あらん限りの悪口をいってケチをつけている。情報公開条例案を彼らが否決できるかといえ、マスコミの手前具合が悪い。個人情報開示の項が落ちているからということで修正に出てくるか、審議未了で一度は先送りするか、何とかケチをつけようと彼等は懸命である。

12月11日（水）

県政の力点が物におかれた考えが支配的

一般質問の2日目。トップの江頭氏が技術振興、テクノポリスについてふれ、大分平松知事はよくやっているのに奥田はという調子で矛先を向けてきたので、答弁で、平松知事のようなことを私がいえばご満足でしょうけれど云々といったため、江頭氏は怒った。俺は知事を激励する気持でいったのに、そういう答弁があるか、取消せとせまった。私は取り消すとはいったものの、議事録にはどう残されているだろうか。野党の連中は今日の松山にしてもそうだが、あまりにも物質主義的に県政を考えすぎると思う。二言めには企業誘致であり、公共投資である。松山など土建屋がうるおうような県政であればどんなことをしてもいいといわんばかりである。中央政府がマイナスシーリングの予算しか組まないなら、県独自で公共事業をおこせといい、農業土木、道路、住宅、港湾などの事業増を訴え質問した。あけてもくれても物物物、カネ、カネ、カネである。県政というものを地方自治とか民主主義とか公正、正義というような観点から論議しようという者が少い。自民、緑政というのはその固い塊りであるであるといつてよい。もちろん首藤という次期知事候補ができ、それが物、物といっているから、その観点から攻めようとしているのであろう。

12月12日（木）

「いじめ」の問題

「いじめ」がこのところますます話題にのぼることしげくなった。小学校、中学校の子供たちの間で、又教師の子供に対する暴力の形で、さらには教師の間でというふうに、さまざまな集団の間で同様のことが、問題にされている。もう二年ほど前、いやもっと前から問題にされてきたものだが、この頃は新聞テレビに出ぬ日はないといった具合。暴力、物かくし、仲間はずし、物品、金銭の強要、なぶり、等々いろんな形態がある。もともわれわれの子供の頃にもこれら諸形態のことはあった。しかし、そのゆえに、自殺、報復放

火などの大さわぎをおこすような深刻さはなかった。いじめられて登校拒否をおこしたり、ノイローゼになるような程度のことにもならなかった。というか、そうした事例は稀であった。県議会でも質問の中に、今日も二人がとり上げた。何が原因なのか、どうすればこの問題が克服できるか、誰もが正確な解を出せないでいる。中央行政でも対策を論じはじめたようだ。全国どこにも共通しているが、九州にとくに多いと今日の質問では主張していた。事実かどうか知らないが、社会の、とくに大人と大人との、大人と子供の人間関係のどこかに狂いが出てきたのである。「奥田いじめ」とマスコミが指摘したことが今日の質問に出たのでユーモアをまじえて答弁しておいた。

12月13日（金）

技術立県を宣言したらどうだろう

午後はNTTのお世話で今日東京に設置した来年度予算陳情に関する対策本部と当県側とのテレビ会議をやった。このあと八幡西区の三井ハイテク工場の見学をし、ICの金型製造の模様をつぶさに見学、あと料亭千草で社長、組合長と夕食懇談した。こうした一連の今日の体験の中で来年度は技術立県福岡というアドバルーンをあげたらどうかとふと考えた。退官したばかりの工学部清山教授がわれわれと共に見学したのだが、車中往復同席した氏に、九大を中心とした教授たちを集めて来年早々県側と会合をもちこのアドバルーンをあげてみようという話になった。筑豊はもちろん、北九州も八幡製鉄の頭脳集団の千葉への引きあげに伴い、火が消えたようになることが明らかで、どうにも手のうちようがない。県議会では選挙がらみもあって、自民、緑政の連中が企業誘致をギーギーとなえてからんでくるが、この明治以来100年余の近代日本を支えて来た石炭と鉄の今はさびれゆく両地域を、一度きれいにさら地にして出なおすしかないとは私は考えている。そのためには三井ハイテクのようなのを手本にして、自生の、しかも技術で勝負していく姿勢がこれから必要と思うのである。

12月14日（土）

九大関係者3人を病氣見舞して

深山喜一郎、田中定、小林栄三郎の3人の病氣見舞で今日午後は夕方まで時間をつぶした。知事をしているとつき合いの見舞が多いのだが、今日の3人は個人的な見舞ともいえるものであった。深山氏は昨年9月教養部長辞任のときに、倒れて以来、私は早く見舞をと思いつつながら伸び延びになっていた。左側の脳に故障が突如おこったという。右手足の故障と言語に障害がおこっている。回復は困難といわれている。小林栄三郎さんは私の前に社会問題研究所の所長をつとめてくれ大へん助けられた人。西洋史専攻で、九大退官後は福岡歯科大で教養部の責任者となっておられた。脳こうそくということで、私が病院にたずねた時も口をあけて昏睡といった具合で、かなり容態が悪そうだった。私が見舞を認めるこ

とはできたらしいが、言葉を交わすまでには至らない。こうして3人を見舞い何か妙な感じになってしまった。自分は果して健康なんだろうか。いつ何んときこういうことになるかわからないのではないか。こういうことになるのなら一そう早く死んでしまった方がいい。夫婦のうち女の方が元気でいてくれるこの3人のケースは有難いが、これが逆だったらどうなるのだろう。若い世代がうちにいてくれなくては困るなあ等々……

12月15日（日）

三池闘争25周年の集い

大牟田労働福祉会館で三池闘争25周年記念集会ののち、プラザホテルで懇親会があった。私は後者に参加した。最多の時は1万6千人もあった三池労組だが、今では300人そこそこに減っている。石炭の役割にも今昔の違いが生じたのである。あいさつに立った私はみいけ10年、みいけ20年と二冊の運動史を執筆したことにふれたが、健在ならみいけ40年を書くべき時になっている。今日の25周年はいわば懐古の25年であるといっている。先日組合長中原一氏の名でみいけ闘争資料集を送ってきた。昭和34年8月から36年1月までの機関紙「みいけ」と、日刊情報1～270号（35年1月から12月まで）のコピー集である。「三池闘争の記録」となっている。宮川組合長は今亡い。三鉱連がたたかをやめたので、三井では三池労組だけが孤立し、それを炭労・総評が包んで300日の闘いとなった。炭労・総評が包んだので「総資本対総労働」当時はいったのだが、三池には第二組合ができて闘争体制は崩壊していった。しゃにむにおさえこまれた形になったが、労働組合をつぶすと同時に、三井資本も崩壊していった。闘争後二度の大事故がおこり、みにくい経営史になったわけである。一つの懐古である。

12月16日（月）

北九州工業をサラ地に作りかえる発想が必要

重厚長大から軽薄短小へと急速に社会は移行しつつある。筑豊の石炭がなくなってから既に20年。こんどは八幡製鉄に代表される北九州地域及び大牟田の重化学工業に大きな変化があらわれはじめた。第二の筑豊化がおこっていると見なければならぬようだ。今後10年間この事態がどう進むかは県政にとって重大な問題である。八幡の下請企業群がこれまでのように下請に甘んじておれなくなると、倒産するか自己転進するしかない。消えてなくなることも考えられる。北九州の人口は減少をつづけていて、次の国勢調査では100万を割り込むかも知れない。県会で自民党などはこれも知事の責任のようという。八幡製鉄の研究陣が千葉に移転する。2000人減ること間違いないが波及して小零細企業にもこれがひびく。5000人ほど雇用減になるかも知れない。知事が悪いからだというのだが、経済のこのような動きを知事がどうにかできるはずはない。私は記者たちに、来年の県政の目は技術振興に向けられねばならない。産学官共同でこれまでの下請群に独自技術応用の行政

行動が必要になってきたと強調しておいた。筑豊問題を通りこしてこの問題が主要県政課題になってきたような気がする。

12月17日（火）

再立候補は自らに忠実な道ではない

正月用というので各社がインタビュー、録画を求めてくる。ラジオ、テレビ、新聞の区別があるから応ずるだけで大変である。そうした中で共通に問うてくるのが、次期知事選への私の意見である。「まだ、何ともいえない」というのが答である。肯定も否定もしない。立候補には自分でセリ出る場合、かつがれてやむなく出る場合、その中間と、各自の性格によって違いがあろう。私の場合、セリ出ることにはありえない。自分の納得いく人生を考えると、知事職のような私的側面を殺さねばならぬ激職では、良心が許さないからである。あと残された人生を良心が納得するように生きるには立候補をことわるしかない。知事を2年半余りやっていて面白いと思ったことはなかったかとの問あり、また、役に立つと思ったことはなかったかとの問があるが、まれな経験だから、役立つ経験、有難い経験はありえたことには違いがないが、そのために求める必要はないと思う。私の周辺では、いつ再立候の声明を出すかというようなことをひそひそやっているようだし、再立候を既定のこととして、人々は動いている。私はそれを肯定も否定もしない。多分ことわれないような状況になっていると思う。

12月18日（水）

新北九州空港の建設はだんだん困難さが増している

新北九州空港建設のための陳情。一つは朝食会に県内企業をもつ在京幹部らと当方期成会役員との懇親の形式をとり、あと期成会の役員が運輸省に事務次官を訪ねの陳情である。政府は全くカネがないのでかたんにOKをくれない。成田、羽田、新関西の大規模な空港整備計画をもっているのもそれで精一ぱいとのこと。われわれの北九州の場合、その重要性がずっと下位になってしまうおそれが多分にある。名古屋が伊勢湾方面に新空港を展開しようとしているので、そのあとにくるかも知れない。新北で有利なのは、すでに周防灘の中の苅田沖合に形ができつつある土捨場があるということだ。北九の地盤が急に陥没しただしたので空港を作るメリットが薄らいでいる。自民党は知事が革新だからそうなるというが、北九市長が自民+民社で20年間固めてきても陥没してくる。これは大牟田にもいえる。首長が何であろうと、経済界のこうした動きはどうすることもできないほど強大なのだ。どこまで本気？ と私に疑問を投げかけた人がいる。だって私は空港建設促進期成会の会長だし、やるだけはやらねばならない。しかし、だんだん情勢は悪化に傾いていることは否めない。

12月19日（木）

見られているのと会いたがっているのと

知事はみんなから見られている。つくづくそう感ずるようになっていたが、みんなが会いたがっているということを知るようになった（自覚した）のはむしろ最近である。感知できるようになっただけで、事實は、はじめからそうなのであって、気のつき方がおそいだけである。亀井氏もこうだったのか、今の秘書室のさばきが私をそうさせてしまうのか、そこはよくわからない。ともかく、一つの客に相手していると、秘書室の者がドアを開けて入ってくる。彼は自分の時計を見つつ、もう時間が来たといわんばかりのそぶりをする。当方から打切るようにして客に帰ってもらう。次の客が別室で待っているという。その前に一寸レクとって私は次の客の来意をきき、それへの対応の示唆をうけ、その次に客のいる部屋に行く。すました顔で、にこやかに、大きな声で歓迎の意思表示をし、おもむろに来意をきく。こういうことを繰返す日が多く、便所にもいけないことが多い。いったとしてもゆっくりできないので便秘はいつでもといえる。多分、こんな状況は健康によくないに違いないが、人から監視されているような中では便もおそろしがつてかスムーズに出てくれない。ひとに見られてない時間は在宅の時だが、毎日12時間労働ではそれが又短かすぎる。

12月20日（金）

賀状書きのシーズンが来たけれど

秘書室の方で年賀状3000枚とっておいたといってもって来た。今頃になってとは一方では思いつつ、今年はどうも自分でも書く気がしないている。住所録は県民の会に任して、私が書くべき分は県民の会がしてくれているように思うし、行政レベルでは秘書室の仕事として消化してくれているはずである。以前はアドレス帳をもとに予め出し、来た年賀状を照合すれば、年賀交換の一貫性相互性が保たれる自信があった。今はそうではない。来る年賀状を出したか出さなかったか確かめようがない。年賀状に大変工夫をこらしたものがあるが、そういう真心こめたことは到底できない。それよりも失礼にならないように来たものには出すというのが精一ぱいである。が、今はそれすらできない。きけば2通も3通も来たという人が時にある。これは或意味では失礼にすらあたる。考えもせずがいい加減に出したことが暴露されるからである。なお、返送される年賀状の数もおびただしい。夏の暑中見舞も400も500も返送されてきた。今回の年賀状もそれを覚悟しておかねばならない。当方の意思が通じてないのだが、これ又出す側にかなりの欠陥がある。いい加減な書き方、アドレスの不備、転居未確認など。要するにこの種慣行への対応は頭痛もの。

12月21日（土）

痛し痒しの選択

延々と議会が開かれていて、帰宅午前1時半となった。午後8時に全員特別委員会における知事保留質問が終ったので、そのあとは私は全く待ちの姿勢にあって知事室にいただけ。この間、議会側は全員特別委員会と分科会をあれこれ開いて審議の結論をさぐっていたようだ。深夜の帰り際に大石君のいうには、行政改革と情報公開の二つについては、審議未了、継続としたようだとのこと。野党としても痛し痒しということであろう。この二つ気にくわぬが通さねばならぬ。通せば奥田の点かせぎになる。どうしたものか。これが今日ののろのろ審議をなした底通である。自民党は元来情報公開には反対である。だからあれこれケチをつける。その上、公開の反面プライバシー保護を同時に条例化すべきだとか、自己情報の開示が同時におこなわれねばならぬとの注文をつけている。行革については、人員減をもっと行うべきだとか、年度ごとの人員削減計画を示すべきだ(条例化すべきだ)といっている。今日の分科会(総務)でどういう結論がでたのかよくわからないが、この二つは審議未了になるときく。県民一般がこれで納得するかどうか。自民ら野党にとって、県民の反撥は必至と思うのだが……

12月22日(日)

小林栄三郎先生の死

20日の午後7時、小林栄三郎先生が入院さきの白十字病院でなくなった。脳こうそくがもとで入院、今回の死因は急性肺炎とのこと。77歳。語学にたんのうな人だった。ドイツ近代史、特に労働運動にもくわしい人である。チャーティスト運動を研究してきた山大の古賀氏は彼の弟子だったろう。昭和37年に社会問題研究所が発足した時彼はその初代所長となり、12年間よくカじをとってくれた。彼がいなければ私におはちがまわってきたかも知れなかったが、47年に九大を退官し、福岡歯科大に転じ、49年の秋私が第2代の所長になるまで12年間、所長としてよく研究所をまとめてくれた。14日に白十字病院に見舞に行った時、言葉を交わすことはできなかつたし、もう目はウツロに見えたので、永くはないだろうと予測はできたものの、まだもてると思ったのはたしかだ。それだけに「やっぱり」との感はまぬがれない。いつもにこにこして相がよかった。協会の集まりにもよく顔を出されたが、向坂先生には怯することなく直言するシーンもあった。歯科大で所長兼務は都合が悪いといって所長を退かれた。

12月23日(月)

12月議会終了

午後七時半議会本会議が終り、やっと12月議会にけりがついた。情報公開制度と定員条例の二大案件は次回送りになって、ポツカリ穴のあいた12月議会になってしまったが、ともかく終えて、恒例の政府予算をめぐる陳情のため上京の途につくことができた。議員さんたちあれこれ言うけれど、勉強不足で、議事録に残るなら醜態をさらすことになるだろう。

私もよくわからなかったが情報公開とプライバシー保護とが同時に条例化されなければ、一方だけでは片手落ちだというような結びつけをして“反対、論をぶつのがその一例である。尚早論は又根拠をもたない。定員条例案にしても5年間に5%減というだけで年次計画をふくめた条例にしないと実行が危ぶまれるという因縁づけもまた同じ。どのような計算で5%になったのかとか、それでは少なすぎるというのも同じく何の根拠ももたない。要するにここで知事側に花をもたせてはいけない、何かつけるべきケチはないかといった類である。ともあれ二件先送りで12月議会は終わった。

12月24日（火）

整備新幹線を作って採算が合うだろうか

昨夕来年度予算の政府（大蔵）原案が各省に内示され、28日にそれが本決まりになるまで復活陳情が霞ヶ関かいわいを沸かせる。昨夜おそくふくおか会館に到着。今朝から行動に入った。まず朝食会（全共連ビル）が九州知事会と九経連との合同で「九州はひとつ開発推進大会」名づけて行われ、午後は18都道府県に及ぶ範囲での整備新幹線早期着工実現総決起大会が赤坂プリンスホテルで開催された。この後者には2000人近い人達が集った。緊縮財政といわれる中で全国各地から上京、上京で陳情をくりひろげる。この数日何万人かの人々が、つめかけてくる。朝日の倉成記者が新幹線着工のこの大会のあと、こんなどう思いますかと話しかけてきたが、合理性で割り切れないところに政治の分野があるのではないだろうか。新幹線を札幌や鹿児島まで延長してはたして採算の立つ経営が可能だろうか。鹿児島の人には大阪や東京に用件をもち移動するが、そのときは多くは空路を選ぶであろう。福岡への用件にしてもそうだ。だったらその他の中間都市に行く人の数は微々たるものだろうから、整備新幹線は明かに赤字つづきになりそうだ。だのにこれに熱をあげている。

12月25日（水）

復活要求陳情の波

連日東京の空は冷えて青い。福岡よりは暖いですね、東京の冬はからっとしておだやかでいいですねと口々に感想を交わしている。陳情行動のあいまをぬって宿の自室で外をながめると、すがすがしいの一語につきる小春日和である。昨日と違って今日は風もない。イギリス大使館をここ4階の窓からながめていると時に小鳥が視界を横切る。大使館は古式の建物、二列で7~8棟あってすごく広い。ところで今日は県選出の国会議員を招いての朝食会（自民・民社）、中食会（公明）、夕食会（社会）をおこなったが、いずれも早目に終わった。国会も多忙のようで、どの議員もそわそわして落付かない様子である。昨日の整備新幹線早期着工決起大会は1500人くらい集ったし、今日午前中の農水省陳情も廊下には各県からの陳情団でごった返しであった。昨日朝日の倉成氏が私に陳情して効果があります

かときいてきたが、一つの儀式でもありますねと答えたに止まった。陳情を受ける側も1分そこそこで次に交替。要望をきいてくれたのかどうかもわからない。それでも陳情する。不思議な現象ではあるが、すべてが巻きこまれている。

12月26日(木)

巨大な公共投資が次々と計画されている

23日の夜になされた61年度政府予算案をめぐって、復活陳情が今日をピークに展開されている。われわれは午後、運輸省を駆けめぐった。新北九州空港の建設を目ざしてである。山下運輸大臣にも陳情することができた。曰く「佐賀空港の方が先だよ……冗談だがね」。しかし、今日空港建設の要望は全国的に大変高い。人口100万に達しない佐賀ではあるが何とかならないかと考える時代になったのである。壱岐、対馬、アムミ大島、石垣島など離島にすでに空路が開けているのだから、佐賀も島同然と考えると空港をもとうという希望をもつことは決して不思議ではない。今の日本はそれほど豊かになったのである。片や高速道路、片や新幹線と考えると、すべてが贅沢ばかりといいたくなる。建設する側にとって採算はすごく長期の展望をもたないとできない巨額の資本を固定せねばならない。関西新空港、東京湾横断道、本四架橋など巨大プロジェクトが着々進められているが気が遠くなる話。

12月27日(金)

国会議員の居城

衆参の議員会館というのがあって議員は皆居城をかまえている。2部屋で奥まった方に議員が机、椅子、応接セットをおき、入ったところの部屋には秘書核の人が執務している。秘書が一人という場合は少く、何人かがいつもいるようだ。所せましと机、椅子、応接セット、書類がおいてあって、その上、果物、菓子、ケーキなども机におかれている。どんどん人が入れかわり、立ちかわり出入する。陳情者が主だろう。他方、行っても留守で誰も番人のない居城もある。こういう議員は不景気なのではなかろうか。人の応接は自分の意思でというよりは、周囲によって規制されるであろうから、人がどんどん訪ねてくるならば秘書が配置はりついてなくてはいけない。家族秘書というのも少なくないようだ。がそれすらいないで鍵がかかったままというのは議員が国許で行動しているからであろうか。それでもこちらは留守にしておけないのではないか。いずれにせよ、議員族というのは大変のようだ。勘定元がどう切りまわしていくのか、不思議な世界ではある。

12月28日(土)

“1年をふりかえって、あいさつ

御用納めの庁議が12時すぎからあり、かんたんに私の方からあいさつをして一年間の協力



を謝し、来年も事しげき年だががんばってくれるよう激励しておいた。今年1年をふりかえると、中国領事館が発足したこと、生活保護の適正化、県住の家賃滞納にけじめをつけるようになったことなど大きな成果があがった反面、努力したのに行革と情報公開の二大事業が12月県議会で次期送りとなって気がかりだが、来春は是非既定方針を進めたいし、そのためには具体的にたくさんの仕事が残されているので一そう奮発してほしいと訴えた。他方2年がかりで言いつづけてきた「県民総立ち」が徐々に浸透している事実はよろこばしいことだと付言した。61年度政府予算では九工大の情報工学部の飯塚での新設と国際研修センターの北九州での開設が暮おしつまって決定したことは県にとって明るいニュースであるということも付言しておいた。記者会見では、今年はよい年であったが来年は苦難の年になりそうだとおいておいた。ニガ笑いをする記者がいたがそれぞれに思うところがあったのであろう。

12月29日（日）

暮れのあいさつ

暮れの知事あいさつまわりの今日は北風清松創価学会副会長、玄海町の鎮国寺、浜中県議、住吉徳光、松尾正信（老人ホーム）、岡野正美（国際問題懇話会メンバー岡野バルブ社長）という名列である。秘書室では公明党系統にかなり気をつけている。先日は鬼木県議宅にもあいさつに行っている。それと自民党の川筋グループにも気を配っている。社会党系は三役の他の者が行ってもいいから、知事はこうした方面に顔を出しておくようにということだ。又同和系の松尾（全日本同和会）氏には礼をつくしておくべきだということ。それでバランスを保つために明日は解同の上杉佐一郎氏（二日市）を訪ねることにしている。松尾氏は会うなり上にあがれといい、われわれは奥田を支持するから云々というのだが、あとは何がでてくるのか彼のいっていることは定かに理解しにくい。仕方がないからウンウンと合槌はうつが、そばにいた大石君も何の話ですかねと理解しかねているようだ。これも政治の世界といえればそれまでだが、何か交換条件があるに違いない。県の係の者によくきいてもらわないと困ることになりはしないかと心配する。いずれにせよ、政治がらみのこうした動きは嫌だなあ。

12月30日（月）

七二兄を見舞う

姫路駅南の程遠くないところにある中央病院に入院中の七二兄を見舞いに行った。11月15日入院という。もう45日の入院で、正月は外泊するが又入院にもどって1月の15日頃には退院できるのではないかといていた。胃の全剝手術をして危篤状態だったという。8年前に胃ガンの手術をして又今回である。意外と元気な顔だし、口軽くおしゃべりをするので外見安心できそうだが、主治医がしてくれた話ではあと永くないのではないかと思わせ

る容態である。食道と大腸をつなぎ、途中は全部剔出してしまっているという。食道と胃のつづきの箇所がガンでふさがってしまい、食物が胃に入らなくなっていたということだった。8年前は早期発見早期治療できたが、今回は発見がおそすぎて、今回は脊柱のうしろの方までガンがまわってしまっていて、全部とり出しえないというような説明だった。再発の確率が高く、再発した場合の治療は不可能に近いということのようだ。本人は一度退院しても又もう一度来なくてはならないということを知覚しているし、この次はもうあきらめねばならないと知っているらしい。こんどはまいったよといていた。案外ほがらかなのが救いである。

12月31日（火）

明年の最大の課題

一向に年末のような気がしなかったが年越しそばを食べみんながテレビに吸いつかれ、あたりが静まり返ってくると年の暮れかなと思うようになってきた。一年をふり返るよりは来年がどんな年であろうかと思う方が先立つように感ずる。昨日大石君が知事は再出馬の意思をそろそろはっきりすべきだといっていたのが思い出される。新聞も首藤氏の立候補表明を大きなニュースと数え上げていた。そういうものだろうかと多少訝るが、多くの人がそのように事態を見ているのであればそれに従うしかないのかも知れない。彼がいうのは、「やらねばならぬ仕事をたくさん抱えているので是非出馬したい。そのためには周囲の人の支持が条件となるのでその要請があることを期待している」というような意味のことを早目に言うべきではないかというのである。そうかも知れない。再出馬は既定のこのように多くの人が動いている。マスコミもそう考えている。しかし、それを自分の方からいうにはどうかと躊躇がある。本心は引退したいのだが、周囲の状況が許さないことは確かだ。その状況に従わなければならないことは覚悟せねばならぬ。年明けなるべく早い時期に宣言せざるをえないであろう。

一年をかえりみて

1985年（12月25日）

正月に甘木から塚本市長ら大勢で甘木線の存続について拙宅に陳情に押しかけてきて年が明けたのだが、今年もあわただしく過ぎていった。でも今年はどういう年であったか思い出そうとしても鮮明に記憶がよみがえってこない。記憶力がずいぶん衰えてしまっている。よろこびも苦労も憤りもたくさんあったのに、ほとんど忘却。だからこそ日記をつけているのだが、それがないと記憶のたどりようもないほどだ。しかし、忘却は幸せにつながりそう。苦しみや憤りをいつまでも鮮明によみがえらせることができるなら、たまらなく苦痛だろう。あと何年生きるかわからないと思ったことは何回もあるが死ぬ前には、ほんとうに何もかも忘却してしまうに違いない。県では3役もそろい、間もなく永井副知事が

退き代わって自治省から大塚氏を迎えたので、知事は少しは楽になるかと思ったのに、一向に楽にならず、相かわらず毎日の日程はびっしり詰っている。ゴルフの練習をはじめなるべく道具も一揃え九一君が調達してくれたが、コースに出たのは3回だけで、打ちっぱなしの練習も10回ぐらいなものでしかなかったろう。多忙が苦痛と思ったことが何回となくある。腹立たしく思うことすらあった。こんなに多忙なら自分がかawaiiそうにすら思ったものだ。考えてみると、朝は8~9時に出勤し、夜はまた8~9時に帰宅する。もっとおそくなることの方が多かったらう。いわば12時間勤務（12時間他人の中にいる）わけで、ざっといえば一般の人の1.5倍働いていることになる。こんなことをつづけているとおのれの再生産すらできないわけだ。だけど今年は問研の八丁、東定が手伝ってくれて願望の出版「県政ひとすじ」ができた。ひとは何時原稿を書いたのかと不思議がるが、寸暇を惜しんでと答えるほかなかった。秘書室系では樺島、安達、佐々木らが出版に至るまで別の側面から手伝ってくれた。5月に出版したかったのだが、7月下旬になってしまったのが少々不満足である。5月には待望の中国総領事館が福岡でオープンした。板付から中国への定期航空路開設は宿題として残ったが、これはわれわれの力量では動かし難い関所がまだいくつありそうだ。12月議会で定数条例と情報公開条例の二大案件が継続審議として積み残されたのは、政争の具に利用されたとはいえ、大変残念であった。知事になって何回かの県議会に臨んだが、このように議案が積み残しになったのははじめてである。もちろん、苦にすることはないが、「少数与党」の悲哀をつくづく感じさせられる。社会党の県議たちも別の立場からではあろうが、同じく「悲哀」を感じたに違いない。出なおしてこの二件に臨むなら別に痛痒を感じずることはあるまい。

ところで今年は周辺の者が、新聞記者連をも含めて、次期知事選をひどく意識した年であった。4月には折り返し点という言葉が使われたし、12月の議案二件の先送りも次期知事選がらみであることはいうまでもない。この夏自民党は中曽根首相を引き出して住宅金融公庫総裁をしている首藤堯氏を次期知事選候補に推戴することになり、秋口以降首藤氏はそのつもりで政財界をひんぱんに動くようになり、11月には総裁を辞任し、選挙活動に集中することになった。これに対し、記者たちからどう思うかの質問が幾度か投げかけられたが、私は、残る任期一ぱい全力投球するだけといい、首藤氏については全く知らない人だと答えるだけであった。これは作りごとでも何でもない。私のいつわらざる心情である。次期に向け再出馬するということを前提での話であるからだ。私の周辺は再出馬を既定のこととして諸事動いているが、私の方からこれを否定も肯定もできないし、したくない。但し、再出馬を予定しての行動は周囲に促されてとらざるをえない。たとえば、新年号の団体機関紙などに提供する写真撮影など要求されるままにポーズをとって撮影させているし、スケジュールの中に所々そうした行動をはさみ込んでいる。後援会の件だが、清進会と名づけた団体は今年もほとんど動いてないようだ。諸岡、森田の諸氏がやっているようだが、資金集めができてないようだ。県民の会の方は山口が中心で僅かに動きがあるよう

だ。共産党が参加していて、何事につけ協議する中で共産党との妥協が必要で思う存分動くということにはならないらしい。県評もふくめ各傘下労組も同じ方向で動いているが、来年のメーデーあたりが一つの山場でその頃には再出馬の意思表示をせざるをえないだろう。学文系統では例の仲好会がそのように動いている。内田、岩元、土井、岩崎、衣笠、八丁の諸氏がそれである。

【PERSONAL&NOTE 欄への記入】

夏の朝紺碧の空やビル光る 60.7.16

村おこし燃ゆ小石原杉木立 //

猛宗竹許せわれ軍刀の初切りぞ

宮崎海岸を思出して

(20.8.15 日のこと)

## 1987年

### 年頭所感

今年は何事選挙の年、もちろんそれが岐路になって年間の経過が違ってくる。投票のゆくえを予言できるはずもない。十二月二十七日の第三回県民の会一万人集会での出馬声明では思いきり歯切れよいあいさつをすることができ、会衆は沸き立ってくれた。演出も申し分なくよくできた。この雰囲気そのまま選挙につながるとよいと思う。十一月には選挙事務所も用意でき、出馬表明の日の午前中に事務所開きもおこなわれ、選挙への始動となった。もちろん秋から相手の田中健蔵候補は盛んに動いているのだが、自分で意外なほど気にならない。自分の方だけうまくいけばと勝手なことを考えている。健康についていうと、十二月の定期検診では血糖、尿糖ともに高い数値が出ているが、自覚の程はない。誰も私の健康を案じてくれる。又それが賀状にもあらわれている。食べ物には更に注意するべきであろう。睡眠がいつも十分と思えないのは、一つは年のせいであろうし、年中多忙で十分すぎる時間がとれないからである。これがいつも気になる健康上の問題である。四月までは選挙でキリキリ舞いの日程がつづき、選挙の十二日以降は人生すっかり変わるかも知れぬ。そうした今年である。全力投球あるのみ、万事苦痛にせずやっぺいこう。

### 1月要記

例年同様、一月は各団体の年賀会、名刺交換会、旗びらき、消防の出初式など盛りだくさんの行事がひしめいている。それに今年四月の知事選がらみの集りにも顔を出さねばならない。それからもう一つ、七日から九日まで三日間、中国民航の福岡空港への定期便開設（四月上旬）がほぼ決ったことへの御礼訪中旅行がはさまったのが特徴。こうしたことで、余計に忙しさが増してきた。加えて、いわゆる二月議会の準備がもう一月下旬からはじまる。統一地方選知事選の年なので、暫定予算になるが、それだけに異論の余地の少ないものにしておかなければならない。物事を苦しめないでさばいっぺいこうと思うので、そのように成行きが運ばれることを望む。中国民航の定期便就航が十二月中旬にほぼ確実視されるに至ったことはビッグニュースである。これを確実なものにまで結実化させる努力がいま一步求められているが、これに多忙な一月のうち三日間を費すことは決して苦痛なことではない。残る一〇〇日快心の投球をやっぺいこう。そのスタートが一月だ。

### 1月1日（木）

#### 元旦雑記

元旦、快晴。年賀の電話があったのは一彦一家。そこには啓二一家が行っていてみゆきがいろいろ話し合っていた。ハワイに行っている直美からは向うも元旦を迎えたことを告げる

電話があった。それから牧坂氏。二十六日には書初めの会があるといっていた。年賀状が山ほど来ていたが、その内容は些細にみるひまはなかった。あと一〇〇日で知事選である。十時半に選挙事務所に行き、総評系各幹部二〇人ほどの前で、頑張ろうとあいさつした。電子電報年賀が三通来たが、一番乗りのものは選挙事務所にもって行って事務所の壁にはりつけた。来所の人達のはげみになるだろう。管崎八幡宮に行き、必勝祈願をしてもらったが、私が「必勝」と書いて申込んだら、祈禱の時も知事選のことを理解してくれて、ノリトの中でそれらしい脈絡のことをのべてくれていたので感心した。

1月2日(金)

隣家の部屋を用意

色紙は八五枚出来上ったのを藤江君が押印してくれたが、扁額など揮毫する必要があったので、今日はそれに時間をあてた。昨日牧坂氏が知らせてくれた尚文堂習字教室の書初展への出品の準備もせねばならない。十時半頃から五時頃までそれに費し、一応出来上ったのでやれやれだ。みゆきが明日に備えて隣家の部屋の整理を終え、一度見てみないかというので行ってみた。ガスが解約になったままなので不満は残るものの、他は来客に備えておおよそ出来ていた。四室あるので割にゆったりしている感じだ。一番奥の部屋はまるまるあけてあり、玄関入って左の小さい部屋には本が一ぱい詰めてあり、縁側には蘭の鉢がぎっしりおかれている。これから選挙運動期に入るので、フトンを持ち込んで泊り込むことができるし、少しは作業をしたり、場合によっては集会、会議に利用することもできる。大いに利用されることが望ましい。

1月3日(土)

杉本勝次氏の死

昨朝(七時四〇分)元知事の杉本勝次氏がなくなり、今日七時から密葬があって参列した。氏はバプテスト教会の信者、九十一歳だった。戦後の混乱期に衆院に当選、二十二年から二期福岡県知事をつとめた。社会党県政を担ったので有名。福岡市長選、北九州市長選にも保守系から出馬したが敗れ、久留米市長を二期つとめた。社会党から右へ右へ行った人といわれた人だが、キリスト教信仰と関係があったのかも知れない。私が当選してしばらくしてから知事室に私を訪ねて来てくれた。もう足許も不自由な姿だったが、大学教授、知事という経歴の類似性も手伝ってか、私をはげましてくれたのが印象的だった。三年前だから八十八歳の時といえるだろう、西日本新聞に「聞き書き」シリーズ欄で紹介されたのが、今夜の葬式で牧師さんから引用されていた。天寿を全うしたとの表現されており、老衰だったようだ。

【欄外記入】

来客

社会主義協会

衣笠、八丁、高崎、大塚、城島、山本、林、熊谷、馬原、ほか一人

秘書室

中村室長、佐々木、古沢、森山

1月4日（日）

会場の空気をよく知っての発言が効果的

今年は今日から動き出した。小倉市民会館で共産党の活動者会議があつて祝辞を送つたが、その中で共産の県議候補十二人を是非当選させてもらわないと県政もうまくいかないと訴えておいた。私の先月二十七日の国際センターにおける出馬表明の発言が実によい調子であつたとほめてもらった。実際私も、よく調子に乗れたと思った。県評の岩崎もいい調子だつたといつてくれた。あの時は秘書室か広報室で用意した草稿があつたのだが、中味が堅いと思つたので、草稿を見ずにやった。理くつも現状説明も抜きにして、参会者の今もっている気持ちに訴え、それをもち上げるにはどうすればよいかを中心に想を練つてみたのであつた。そして夜須町の青年が、あの時山芋をもって来て、これを食べてねばり強くやってくれといつたので、その発言も利用して発言に加えたので、一そう引き立つたようだ。今日の共産党でのあいさつも、この時のように、よくできていたと、後でほめてもらうことができた。

1月5日（月）

警察と暴力に注意すべし

夜は八丁君たちが拙宅に来て公約づくりの議論をした。あとスシを食べながら懇談したが、その中でわが陣営がとくに用心しなければならないのは、一寸したことでの警察の選挙介入と、政治暴力の問題だという話が出たのが印象的であつた。警察は一寸した選挙違反にも手を出して選挙民のうけるわが方のイメージダウンを策すかも知れない。岩崎氏などひっぱろうと狙われていると見なければならぬ。投票近くなると何がとび出すかわからない。暴力は下手人に巨額のカネを積んでやらせる手口、事務所破壊事件が以前にあつた手口、又、候補への暴力に雇われる人がいないとはいえない。田中陣営が不利であればなおさらその可能性が出てくる。この、警察と政治暴力には十分すぎるほど警戒すべきだとそれぞれが主張した。警察はデッチ上げも平気でやるとみなければならぬ。近藤前副知事の事件をみても、奥村組小林は、どうみても正常とは思えないからである。

1月6日（火）

田中健蔵氏の動向

新年会に一しょになつた遠藤政夫氏が私のところに寄つて来て、田中陣営について冷やかな説明をした。彼は宏池会で、亀井・太田と同系。亀井は今はないが、山崎拓に対抗している。田中健蔵が山崎拓と永倉の強い推しで知事選に出馬することになつた点に遠藤は反感

をもっているようだ。田中は全県下にビラ貼りを精力的にやって氣勢をあげたが、その割には浸透がいま一步のようだ。県議候補のビラも貼られはじめたので、田中の影は薄まっているともいえる。田中は企業選挙に徹しているが、企業の上層部には強引に浸透しているものの、下部の方は無関係といった状況のようである。四日の杉本勝次氏の通夜に田中は来ていたようだし、今日の全日空での土工協の新年祝賀会にも来ていたようだ。私と面が会うのを避けるべくつとめているようで、近頃は顔を合わせていない。RKBの三好は昨日、私と田中を対談させるべく野心をもやしているが、私の方からは彼の顔を売ってやるようなこの企画にはかかわるまいといっている。

1月7日（水）

福岡—中国航路定期便（中国民航）開設のために

朝五時すぎに起きて六時半板付空港に集合、七時五分大阪に向けて出発。北京空港に着いたのが三時八分（現地時間二時八分）。八時間かかったわけだ。この間大阪でまるまる三時間待った。これを差引いて五時間、福岡—大阪間正味往復で一時間半、だから直通で福岡・北京間は三時間半ということになる。大ざっぱにみて半分の時間ですむことになる。今日の北京訪問は、この時間短縮の実現が四月上旬とみえてきたので、その過程における中国側の努力への御礼と将来に向けての交流の一そうの前進を祈念する意味をもっている。知事選もいよいよ本番に入ったことだし、三日を費すことは惜しいとの考え方もあったが、名古屋空港にとって代わられては大変ということで、念を押す意味もあり、選挙のことは次の問題ということで、北京訪問を決意したのであった。決意は二週間前の暮の予算陳情のあわただしい最中であつた。手続的に難点もあつたが、すべり込むようにして今朝の出発に間に合わせてもらった。小西平太郎氏や岩崎隆次郎氏が一度断念していたのを復活させるという経過もあつたのである。

1月8日（木）

訪中の主な日程消化

北京の朝は靄が深かった。一日中そうだった。七時半モーニングコールがあつたが、その前から覚めていて、今日は一日寝不足気味だ。北京飯店食堂で朝食ののち九時に中国民航を訪ね、胡、刘、浦の各氏が応対してくれきわめて友好的で、福岡との定期航路も決まったのと同然。友誼商店に行って後一〇時半外交部を表敬。ここでも友好的に対応してくれた。中食は北京飯店の別室で中国民航側の祝賀招宴。これが二時までつづいた。三時に中国総工会を訪問。福岡県評、武漢総工会の友好関係のつながりで、中小企業レベルの福岡中国の連携が今後とれるかどうかについてさぐってみた。五時に農牧漁業部から来訪あり、（李仁培外事副司長、農学会段修廷副秘書長）、福岡県研修生のことで要請があつた。六時、東来順飯荘でシャブシャブ料理を主とする夕食会が、中日友好協会の招宴として行われた。孫平化氏が



ホストである。日本の資本進出が欧米諸国にくらべ遅鈍であるとの評が話題として私の注目をひいた。財界の姿勢があらわれているようだ。

1月9日（金）

今回の訪中は成功だった

朝の六時半から夜の六時半まで、旅の一日だった。これが直通なら半日で済むわけだから、四月以降に期待がもてる。大阪に着いた時、午後四時ごろだったが、大阪事務所長らが出迎えてくれて、今日の新聞各紙のコピーを見せてくれたが、西日本には昨日の外交部、民航局訪問の時のことが一面中ほどに大きく書かれていた。北京現地にいる寺崎記者と話合って了解していた通りのことが書いてある。又、畑中課長が北京から福岡へファックスで送った内容がかなり忠実に各紙に出ている。今回の訪中はタイムリーで大成功であったということになるらしい。それが関係各人の反応である。行くか、行くべきでないか、あれこれ思案した結果での今回の訪中ではあったが、先方では大歓迎してくれるし、当方現地では大成功といってくれ、これほどいいことはない。疲労の一日の旅ではあったが、福岡空港に着いて記者会見したあと、うまくいったといってもらって、疲れもふっとんでしまった感じ。帰途県民の会に寄ったが、ここでも「よかった」といってくれて安堵した。

1月10日（土）

中国との技術提携の一つの途

好天にめぐまれ、気温は平年以上といわれるが、それでも冷い空気が感じられる。正月明け不景気も手伝ってか一服気味。免税店で買ってきたウイスキーをもって記者クラブに行き、雑談の中で県評次長の坂本氏が託した総工会への手紙に関連しての両国の技術提携の話をしたら、早速西日本の夕刊にそれが出ていた。総工会側には交流センターがあるので、福岡側にもそれに匹敵するセンターを本年中に作って両者の提携で技術交流を具体的にやったらどうかという構想なのである。当方のセンターは中小企業団体や労働団体その他の友好貿易関係者によって構成する民間団体とし、これに県ができるだけの援助をしてはどうかということになる。福岡空港への定期便が中国との間に開かれると、早晚そうした問題が議せられることになろうが、今日はそれを先取りした形での記者談話になった。岡部重幸氏ら機械金属業界が積極的にこの話に乗ってくれることが期待される。

1月11日（日）

新年子どもかるた会

大牟田笹林公園での新年消防出初式は快晴にめぐまれ、予想に反して寒くなく、ひるすぎには一路篠栗総合社会教育センターでの県子連の新年子どもかるた会に向った。二時には現地に着いた。去年の雪による欠席多数と打ってかわって今年はこのびのびやっている。決勝戦

終了式ともに列席することができた。「犬も歩けば棒にあたる」「骨折り損のくたびれもうけ」「京の夢大阪の夢」「えてに帆をあげる」「負けるが勝」「頭かくして尻かくさず」「出る杭は打たる」「よしのずいから天のぞく」「花よりだんご」・・・子どもたちの手は速い。自分がこの子たちの頃はこうだったかろうかと思ってみたりする。何回も何回もくりかえし、毎年毎年やっていると、自然とわかるようになる、身についてくる。人間の社会が何百年かかかって結晶させてきた社会の原理が脈々と親から子に伝わっていく、心にしみこんでいく。このことが大切であるし、こうしたことを覚えていく人間関係が大切なのである。子どもたちに話してみたのであった。

1月12日(月)

新年会、旗びらき

小雨が風を呼び雪となり、アラレが舞った、荒天の一日であった。新年会が各所で展開され、今日は四時半から五カ所もまわった。どうして日本にこういう風習が定着したのであろうか。よしあしの評はしないにしても、一つには豊かになったせいだろう。違ったグループだろうが年末には忘年会もやったはず。忘年会はしないから新年会はやるというものもある。業界はとくに盛んにやる。名刺交換会ともいう。事業の前途のためにこうした形式がいいのであろう。今年は統一地方選挙の年でもあるので、候補たらんとする人は、こうしたチャンスを逃がさずとらえる。田中健蔵候補が私と顔を合わさぬようにつとめながら、同じ会場に顔を出しているときいたことが何回もある。集会をやる方も何故かこういう政治的利用を好む傾向がある。指導的地位にある人がそれを積極的に肯定するのであろう。労働組合では旗びらきと称して同じようなことをする。こうしてその年が動き出すのである。

1月13日(火)

選挙協力依頼について

起床して積雪をみた。七時発で坂道及び練堀町の上り下り車も危なかった。七時半から八時半まで共産党国会議員雇用問題調査団と都ホテルで朝食会をした。この調査団は後に副知事が対応することになる。午後は私の方が上京、東京は晴天だった。県民の会(小野社党委員長、堀井共産党委員長、白石県評議長、山川県評政治部長)の代表と総評、社会党、共産党の本部をそれぞれ訪問し、次期知事選につき協力を要請した。これは選挙体制づくりの一環だが、それぞれの団体に特有の選挙関係の問題があるようだ。きいて一々なるほどと思うが、現実には事ほど左様にややこしいものようだ。社会党に対しては土井たか子委員長を福岡県に派遣してほしいと要請してはみたが、それもなかなか容易でないようだ。小野参議がそのことで強い不満を表明していた。土井委員長は地元兵庫やつまらんマスコミサービスで個人人気だけをとりたがっているといった類である。明日は中央大単産をいくつかまわるが、社会党サイドの一せい動員力もぐんと低下しているといわれている。

【欄外記入】

調査団

工藤、藤原

1月14日（水）

労働組合の力量が落ちていることが頭痛のたね

今日は午後中央単産まわりをした。全日自労、全通、自治労、中立労連、及び電機労連である。私鉄総連は行くひまがなく中止した。中立労連は前回よりも精力を注ぎ込むとってくれた。自治労は前回同様事務局員に挨拶するチャンスを与えてくれた。中曽根、山崎ラインで自民党が今度の統一地方選で、福岡県知事選に全力投球してくるということは中央単産レベルでもよく理解してくれている。永倉が「首をかけて」といい、中曽根が「政治生命をかけて」といっていることは周知のことである。全閣僚を福岡に投入するともいっているようだ。福岡知事選が天王山になるということはもはや公然たるものになっている。どこに行っても「負けられぬ」とはいうが、それだけの用意があるかというとまだまだのようだ。日教組は委員長問題で動きがとれないようだし、国労に到っては末端まで崩壊してしまった矢先だ。国労の崩壊は前回の知事選とくらべまっさかさまの事態である。労働組合が全体として力量を落していることも否めない。重大岐路だ。

1月15日（木）

選挙演説

成人の日で休日だが、一日中北九州松本洋一氏の市長選挙運動との連動行動で暮れた。随行の石川君が帰りに車の中で、夜になってますます元気が出ましたねという。私のあいさつは約十分間、松本氏をはげます内容となる。一万人集会だった総合体育館の場合も、昨年十二月二十七日の出馬表明の時と同じく、比較的歯切れよく話すことができたし、今日最後の折尾市民センターでの地区市民の集いにいたっては、選挙カーに乗っているときみたいに、聴衆にお願いするのてんばりの話しぶりになった。その方が元気があると石川君はいうわけ。中味も何もあったものではない。つまり理くつはほとんどいわない。北九市長選と福岡県知事選は連動しており、中曽根首相ら自民党が、今年の統一地方選の最重点に福岡知事選を位置づけているから、われわれは絶対この二つの選挙は負けられないという点だけをくりかえしくりかえし訴えつづけたのである。それでいい。元気があり、やる気ありと感じてくれればいいのだ。

1月16日（金）

選挙体制の不備

まだ新年あいさつがつづいている。自分から出かけたのはマスコミ関係で KBC、読売、時

事だった。話が選挙戦に及ぶことは避けている積りだが、ついにそれになる。評判はいいですよといってくれるので有難い。又、夜の記者クラブ新年会でも田中陣営は今一寸息切れ気味ですよという。資金面と本人の士気についていえるとのこと。資金についてはこれから問題になってくるのではないかという。もちろんわが陣営のことは本人知らずである。体制がまだととのってなく、始動しているとはいえないという人もある。でも、それなりにやっているのではないかと思っている。記者クラブとの会合のあと、林出納長と一しょに近藤前副知事宅に行った。夜もおそかった。林氏は近藤氏に戦いの列に裏方として加わってほしいとの要請だ。県庁の部長クラスの大部分が、まだ日和見しているし、外郭諸団体についても相手から先を越されている状態だという。その点向うの息切れより、こちらの体制不備が心配される状況といつてよい。

1月17日（土）

新しい境涯を切り開いた努力の人

昨朝起きたときノドが痛く、又みずばなも出たので、カゼだ。済生会病院に行ってみてもらう。へんとうせんが少しはれていた。井上傳氏の叙勲祝賀会がサンパレスで開かれ出席。花卉組合を育てた人。私はあいさつの中で、北欧ではアパートの窓という窓に花が出してあり、日本のアパートではフトン干しが行われる実情がある。花よりダンゴという言葉はあるが、今や飽食の時代、フトンに代わって花が出されるようになるだろう。そうして井上さんが先駆者としての価値が高められるだろう旨を述べた。戦後の苦しい時代から、農業で食っていくため、農学校を出た井上さんは畑にカーネーションを作って食えるよう努力したとのこと。今日は又ニューオータニ内和多伴に北田（ベスト電器会長）さんを招いて中食会をしたのだが、この人も立志伝中の人、今や世界に飛翔をしている。恩を社会にかえすためできることは協力しますといってくれた。自分で開拓していこうとする人は頼もしい。県民栄誉賞に値する人である。

1月18日（日）

大衆課税の売上税

福岡では市議選も統一選挙のうちに入るので今日あたりから選挙へのエンジンがかかりはじめた。北九州市長選も、ようやく動きはじめた観がある。動きはじめが見えるとき、それはもう終盤の追込みといえる状況である。市議、県議の事務所開きや集会に私も参加して挨拶することになって引っぱりダコの大忙しとなる。こんな多忙の中、風邪気味で微熱もあるというので困ったものだ。夜、ニューオータニで歯科医師会々長堀尾氏の叙勲祝賀会があって、パーティテーブルで私の隣にいた全国会長の山崎氏が歯科治療器具への売上税は免除になったといっていたが、数日前のLPガス協会新年会の時の山崎拓の話と同じで、売上税そのものへの批判というよりは、自分たちのかかわる物だけは対象外にするよう運動する

のが、保守の考え方である。同じ論法で、有力なプレッシャーグループ関連の物だけが除外され、一般大衆の生活にかかわる物に課税されるという仕組みになっているのが、売上税だということになる。

1月19日（月）

県下遊説第一日

午後四時から七時半まで筑紫路を走った。春日、大野城、太宰府、筑紫野の四市を駆けめぐったのである。全七箇所これが計画遊説の第一発だ。最終会場である大野城中央公民館には、約八〇〇人がつめかけ「励ます集会」となった。外は急に寒さも加わっており、集まるだけでも思い切りが必要だろうに、二〇〇人ぐらいは後の通路に立っている。私の顔をみたいとだけ思った人もあるだろうが、誰がこんなに多人数を集めたのかと驚くばかりであった。京町保育所では暗くなった寒空のもと園児達も足止めをくってか、合唱のなか私を迎えてくれ、保母、父兄が園庭につめかけていた。遊説第一日だが、気運は全体として盛り上がっていると見える。もちろん、これらの人々だけの支持では届かないだろう。上っすべりといえることもあろう。それでも、よく組織化が進んでいるといえよう。お互いが励まし合うことによって、熱気が湧いてくれるならいい。今後に期待する所大きい。

1月20日（火）

田川郡市を駆け足でまわる

三時半から田川入りで地区県民の会にすべてがまかされていた。全日自労、大城歯科、中村産業、中山組、太陽基準家具、新生工務店、全失労、石橋組、光工業、林工業、水谷建設、夕食を魚安でとったあと「励ます集会」、赤池町、及び金田町対話集会と分刻みであいさつをしてまわった。田川青少年ホールでの励ます会には八〇〇人がつめかけ、田川郡市の熱気の程がみられた。途中滝井市長が合流し、あちこち引きまわしてくれた。後半は、こんど中村邦臣氏のあとをうけ継ぐべく県議に立候補の手嶋氏も一しょに行動した。赤池町では商工会館に町長、議長、商工会、青年会議所の面々が二〇人ほど集まり、知事への要請集会という形をとった。ここには非支持者も来ていただろう。その他の会場は支持者の相互刺激の集会だった。八箇所の事業所については滝井市長らが掘り起こしているものといえる。

1月21日（水）

下から、上から

もう県民の会のスケジュールが主体といってよいこの数日である。今日は糸島での地区「励ます会」（伊都文化会館）に行った。八〇〇人ほどにも達する人達がつめかけており、私の出馬表明の場みたいになった。私自身よりも、県民の側の方が燃えているみたいだ。その意味では有難いことだ。前回知事選の時も正月明けに正式行動に移り、糸島がトップを切って

の立ち上がりを示したことを思い出す。田中健蔵氏の方では政策発表を行った。中央直結で県勢の浮揚をといっている。中央直結という点を除けば、ほとんど争点らしきものはない。面白くも何もない。だが相手方は上からかぶせて来る戦法である。企業レベルも住民レベルも上からである。町内会長が上から動かされる。薬業界も上からおりてくるといった調子で、その点どこまでかは機敏に動いているように見える。こちら側の大衆動員方式とは逆であることは確かだ。

1月22日（木）

社共共闘は全国的に珍しいケース

県民の会の些細はよく知らないが、表面的には社共とも譲り合っか、うまくかみ合っているようだ。裏の話はよく知らないが両党とも固有の事情をもち、自分の党を表面に立てたがり、それが衝突してギクシャクする面も少くないようだ。社共が一つになっての選挙は北九州市長選、福岡知事選の二つで、全国に他に例がないようだ。まれなケースみたいだ。私の知る限り、選挙を担う実力部隊が県評にあり、傘下の労働組合の中では社共支持がそれぞれにあって、組合費を選挙に投入する場合、共同して推せる候補が見つければ社共共闘のパターンが成立しうるが、そうでないなら共闘は不可能。今の北九と福岡県の場合は共闘ができる例であるようだ。社会党は独自候補を立てたいのはやまやまだが、さらばとって選挙資金を、組合から離れて別個に調達する力量に欠けるといのが実態のようだ。このままでは両党ともジリ貧になるだろう。国政レベルでそれが実証されている。

1月23日（金）

体調が崩れた

ここ数日、なかば公務、なかば政務という日程のとり方がつづいていて、私にとっては疲れの連続である。風邪気味の体調が一週間つづいているので、疲れはさらに大そうになっている。朝起きが早く、夜の就床が遅いことも疲れに拍車を加えることになっている。風邪がいつとれるか、疲れでまいってしまうのではないかが気になる。時に三七度を越すことがあるし、鼻声、鼻詰りの状況がつづき、人前に立って話す時に口がかわき、ねばねばして言葉がはっきり出ないことがしばしばある。済生会病院の小川先生の話では、すぐには全快しないだろう、この時期に風邪をひいておく方がまだ、ましではなかろうか、もっとあとにやられたら政情からしてもっと大変だったろうということだ。それにしても、昨年七月は帯状疱疹、この一月には風邪と、体力がよほど減退したのではなかろうかと自問してみる。とにかく近頃は元気がない毎日である。ねばねばは糖尿病の進行かも知れない。

1月24日（土）

北九州市長選の本番スタート

小倉の香春口で十時から行われた市長候補松本洋一氏の出陣式。ここでは鏡開きとダルマの目入れは行われなかった。時間的余裕がないとのことでもあったが、形式にこだわった儀式はやめようとの配慮があったのだろう。そういえば私の時も四年前はダルマの目入れはしなかった。片目ということが身体障害者には納得されぬとの理由もあってのことである。式の半ば松本洋一氏が決意表明に立っているとき、相手方（末吉）の選挙カーが叫びながら通り抜け、松本氏の話が一時きこえぬ場面があった。末吉陣営の故意の妨害だろうと思う。北九市長選が本番となった今日の情勢は「こんとん」とか「五分五分」といわれている。末吉陣営が企業選挙に徹し、かなり浸透している模様。これに対し松本陣営は大衆に訴えるしがなく、幹部の方でも、これから追抜くんだといっているほどである。新聞では知事選に連動と明白に指摘している。

1月25日（日）

今一寸物足りない

日曜だが、県民の会の車で三橋、瀬高を朝のうちまわった。教員組合が中心になって引きまわしてくれている。三橋中央公民館の「はげます会」は大変盛り上がった。地区労議長河野氏が引きまわしてくれ、自分の宅にも主婦たちを呼び集めてくれたりした。みんながこのように動いてくれるとすばらしいのだが、まだまだ呑気さが一般に蔽っている。行く先々一寸も悪くはないが、全体としてはまだ盛上っていない。田中陣営は町内会長やPTAなどを通じて浸透をはかっている。昨日の北九市長選の出陣式では田中は列席し、鏡割りに参加したが、演説させてもらえなかったということが話題になっている。そのように田中は北九では、市長選後ということか、又は、九経連が北九州保守陣営に弱味をもっているということか、浸透が今一つははっきりしないといわれている。福岡では永倉がかなり強引にやっているという。トップ・ダウン方式なのだ。

1月26日（月）

浮羽地区をまわる

今日は県民の会浮羽地区の引きまわしで三町をかなり駆足でまわった。母木園の奥園氏と地元有力者金子先生がぐんぐん各施設、役場など引きまわしてくれた。コケシの高倉さん、焼物の丸田窯元にも行った。知事候補という肩書きで引きまわしてくれたのだが、すでに相手がきまっていることもあり、目にみえぬ抵抗感があることも私の膚に伝わらないわけではなかった。自分がそう思っているためなのか、やはりどこことなく抵抗ありげである。知事という肩書きならまるまる受取っても、候補の一人となるとそうはいかないはずである。それでも町役場の職員たちはよく歓迎してくれたと思う。ひとの顔色をうかがいながらの応接というのが、この分野では比較的に少ないように思えた。ポスターが街路にはりめぐらされている。田中陣営の動きがそれによってだいたいわかる。上からの圧力はかなりなものら

しい。

1月27日(火)

朝倉郡市の「はげます会」

今日は川の右岸甘木朝倉地区を走り抜け、夜の市町村会館での「はげます会」に出席した。会場一ぱいにつめかけた人達の数は四〇〇～五〇〇人はあったろう。三笠君の父、藤江君の母なる人が名乗って出てくれた。七人の代表が演壇に立ってスピーチしたが十二月二十七日の時の山芋青年と同じく、トツベンながらよく気持を表わしてくれた。私は県政は県民のもの、この弁士たちすべてに知事になってほしい旨を話した。県民の一人一人が知事の気持になり、知事が県民一人一人の気持になれるような県政が望ましいと思って三年九ヵ月努力してきたし、今後もそのつもりでやっていきたいと述べたのであった。昨日の浮羽以上にこの集会に来た人達には背後に牽制があったようだ。万能ネギをもってきた人は抵抗をふり切ってはせ参じてくれたらしい。地域に波紋がおこれば、それもまた一つの成果といえるだろう。感謝に値する。

1月28日(水)

選挙遊説型になった日程

午後は夜の九時まで完全な選挙遊説であった。県民の会、地区県民の会の車で小倉、八幡西、福岡、津屋崎を走り抜けた。二〇〇〇人をこす人達に語りかけることができた。各会場とも一〇分から二〇分程度で次の会場に移るのである。一〇分の時間を与えられるとかなり語りうるものだ。小倉では市長選たけなわ、松本候補はよくがんばっていて相手の末吉氏を第一リードしているといわれるが、相手の追撃は急で油断ならぬところ、五分五分とさえいわれている。私の話は県政の民主化、開かれた県政に力点をおいている。売上税の話もあちこちでは取入れている。高校増設や婦人行政など成果をあげたらいいともいわれるが、あげればきりがないので、成果の方はついおろそかになってしまう。婦人の声はすなわち県民の声として大事にしたいということを説いているが、反響はいいように思う。一日二千人と合くと仮定すると、あと七〇日、十四万人。一〇〇〇人だと七万人の計算である。

1月29日(木)

久留米の決起集会

公用車と県民の会の車とか入れかわり立ちかわり私を効率的に運ぶ日々である。今日は筑後と久留米。行政と政務を使い分ける必要があるからで、行政は森山、政務は石川が秘書役。運転は是松と蜷川ということになっている。頃もよく、各地で行政連絡会議があり、それが主たる公用となっている。夜は「はげます会」が企画され、この二つに付随したそれぞれ訪問先が加えられ、結構日程ぎりぎりつまって分刻みの行動となる。「はげます会」は社共が



うまくかみ合っていることが大切で、どこもだいたい成功のようである。かみ合うだけではなく、社共が黒子に徹してくれるとうまくいく。が今日の久留米のは社共が表に出すぎたきらいがある。こういう場合、一般市民には若干違和感が生ずるはずである。久留米の場合もう一工夫あってほしい。他の点では久留米地域は今回もよく盛り上がっていた。筑後市は来月に入っての「はげます会」だが両市とも街頭ビラ貼りはよく行われていた。

1月30日（金）

原田種夫氏受賞祝賀会への出席

今日は飯塚にピストン往復のような日程になってロス時間と多忙が重なった。飯塚に行ったあと原田種夫氏の創価学会インタナショナル（SGI）平和文化賞受賞祝賀会（於ニューオータニ）に出席して又飯塚での「はげます会」に出席するというような順になったからである。創価学会にいい顔をしておくべきだとの配慮が、そうさせたのだそうだが、一面ヒクツ、一面無駄なことであった。私は創価学会はそっとしておいた方がいいと思うのに、顔を出しておけという人がスケジュールを作ってしまったのである。票になるとの心づかいだろうが、そんなにしなくてもよいのではないかと思う。それにこの祝賀会は、「財界九州」誌の主催するもので、永倉とか福田とか顔を合わせたくない人物が出席するようになっている。一たんはこの会への出席をキャンセルするよう意見をのべたのだが、そういわないで出てくれというのが、秘書たちの声。いやなことをさせるものだと腹立たしい限りであった。原田氏にどうも思っていることではない。

【欄外記入】

熱なく風邪は完治した

1月31日（土）

一日走り回る

田川郡、直方市、鞍手郡歩いて歩いて一万二千五百歩。こんなに歩いたのは全くまれ。平素は三千五百とか五千五百とか、少い日は二千歩ぐらいなのに。恐らく身体の方が驚いただろう。ぐっすり眠れるかも知れない。朝九時頃から夜の八時半まで選挙運動がすべてであった。こんなのは滅多にない。何千人の県民と顔をあわせ、握手をしたことか。ひと前とはいいながら私も愛嬌をふりまくし、求める握手にはみんな応じてくれる。演壇に立つと民主県政や婦人の願いや売上税のことを話題とした。いうことがきまっているようだが、十分十五分の演説ではこれくらいが一番いい。前回の選挙では豪華知事公舎問題が人々を沸かせたが、今回は匹敵する話題がない。売上税はかなりの関心があるようだから、これは話題に入れることにした。「本物の奥田です」というのも人を笑わせるのにいい。テレビで、辛い顔ばかりお目にかけて来たので、子供の声ではないが、それが案外笑いの種になる。ほがらかに笑いをさそうのがいい。

## 2月要記

1月半ばから風邪気味だったが休むことなく所定の仕事をこなした。声がわりがしたのと、若干熱が出たので平素のとおりでなく、周囲にも心配をかけたが、二週間足らずで平常にもどったのでやれやれだ。風邪もひかんと人に自慢するほどだったのに、又、風邪を呼ぶ原因も心当たりがないのにとすると不思議でならない。昨年の带状疱疹といい、我が体調に過剰な自信をもってはいけないことは確かだ。さて二月だが、議会、これは例によって辛抱で乗り切ろう。かなり敵意をもっての攻撃が来ると思うが、時間をかければ通過するだろう。心は選挙一色である。田中陣営が、北九市長選（二月八日）の結果を見て、総力をあげて来るに違いない。北九市長選がどう決着するかが一つの山場になる。今は松本が首ほどりリードしているとか、全く互角とかいっている。中央から大物が乗りこんで来て末吉陣営に加担するので、それが怖い。その結果で二月の様相が違ってくる。売上税で巻きかえそうとする当方の攻勢がどれほど市民にうけるだろうか。

## 2月1日（日）

## 北九市長選を憂う

西日本新聞の朝刊は北九市長選一週間後にせまった今日、情勢分析の調査結果として「末吉先行松本追う」と発表した。五分とみていただけに当方ショックはかくせなかった。保守陣営の動員力は保育所、隣組、同業界その他あらゆる名簿を利用してすごいものがあるのに対し、当方はどうも気の合う者がダンゴになって氣勢をあげているにすぎないのではないかと懸念が私の念頭を横切る。利益で釣ったり強引に押しつけたり積極性がない。そうならないならいいが、その弱さがある。民労協など民社とともに選挙違反など平気で車を動かしまわっている。もちろん警察は見て見ぬ風をする。ともかくすべてが強引そのものなのだ。その気概は買わなければならない。だがまだあとが残っている可能性はある。今日は小倉区の総決起集会在小倉城跡公園であり、魚町を通過して小倉駅まで松本候補と共にデモに参加した。市民は一寸シレッとしている風もあった。

## 2月2日（月）

## 中曽根批判がどころぶか

選挙のことでどこも熱っぽくなっている。熊本県は細川氏が再選され、神奈川県は長洲氏が四選出馬のメッセージをとどけてきた。大牟田市長、筑紫野市長がきまった。前週は久留米の市長がきまり、今日行った糸島郡では志摩、二丈の両町長がきまったばかりだということだ。久留米でも筑紫野でも保守どおしが二分されて争い若干後遺症も残ったようだ。とくに筑紫野では、山崎派が勝って太田派が負けたのだが、太田・遠藤の二人が今後どう出るか、知事選にも影響なしとしない。今日は国会で代表質問が開始され、野党が鋭く中曽根首相に喰いさがったが、国民にどう反応が出てくるかである。売上税については自民党内ですら

反撥があるほどである。ある人はこうした中曾根の失政を、私に有利な情勢といい、ラッキーな奴だと私を見る向きもある。中曾根批判が奥田有利に展開するとみるのだが、果たしてそうだろうか。民社、公明は中曾根批判をしながら、地方選は別なんだといっている。

【欄外記入】

久留米市長

谷口久（中村県議推す）

筑紫野市長

楠田幹人（山崎拓派）

2月3日（火）

柳川、八女、筑後の空気

朝出発する頃になって大雪が降り出した。車が坂の下までしか来なかったし、今日の筑後・八女の行動には往きは西鉄電車、帰りは国鉄特急を使った。高速道は凍って走れないとのことであった。年に一度はこうしたこともあろうかといえる強風みぞれの降りつづきであった。それでも日程は消化した。庁内での仕事のあとは午後早く柳川、そして八女、筑後の三市を消化。柳川は個別の訪問で白井いくさん方にも行った。正先生没後一年半、いく先生も八〇歳をこえ、足腰が悪くて一人ぐらしにたえないということで、子供さんのおられる東京に三月には移られるとのこと。こうして柳川の人口は減る。こうした減り方が今後もちこちにおこるだろう。あとの家屋はどうされるのだろうか。白井さん宅には近所のご婦人たちが何人か集められていてあいさつすることができた。前回の選挙の時にお世話になった人達である。柳川は三月はじめに「はげます会」が開かれるそうだが、とくに今は田中健蔵氏のポスターが目についた。八女、筑後では私のポスターが多く目についたのだが、その点、おくれているように思えた。筑後、八女は私にとってほんとうに空気がよい。

2月4日（水）

東京大阪県人会長に再出馬の意向を伝える

早朝のTDAで上京。県人会幹部の住友建設会長の斎藤武幸さんに面会を求め、私の知事選出馬を報告した。皇居北の丸車寄せに出向き、高松宮死去の弔問記帳を行い、九段会館で開かれている総評臨時大会の午後どっふの来賓あいさつに立ち、羽田から大阪に向い県人会の江崎氏に同じく知事選出馬の報告を行う。斎藤さんは前回のように田中健蔵氏の批評はしなかったが、今日は亀井夫人の「おごり」について批評していた。奥さんが秋田県まで行って家具を買つけた話。大阪の高浪会長はむしろ私に田中氏との関係をきいたほどで関係はうすいようだ。江崎氏は浅沼社長の手前もあって田中氏のことは何もいわなかった。江崎氏は亀井・太田、そして九電出の瓦林氏の関係で、その政治勢力の凋落を気にし、山崎、永倉、田中のラインを冷やかに見ている。この三人の奥さん連中が意気投合しているという

うわさである。自民党派閥の再編成の渦の中に田中が巻き込まれた形。成功すればだが、果してどうか。知事候補に名の出た首藤は遠藤・太田の一派で山崎につぶされた形だという。本四架橋総裁の高橋もか。中曽根がつぶれたら山崎はどうなるのだろうか。まだ根は弱いのだ。

【欄外記入】

斎藤武幸

高浪卓造

江崎

2月5日（木）

北九市長選は今なおよくなっていないらしい

夜岩崎隆次郎氏から電話があり、明日北九州に行くについて、若干注文があるというのでできた。森山との折合わせで、北九選と知事選の連動性をあまり強調せぬ方がいいとのことなのだ。つまり北九選は依然松本がよくないらしいのである。末吉が五～六万票リードして詰まっていないのが現状だということである。連動説はマイナスに影響しかねないとのことである。詰まらないというが、売上税の問題が出てきていて、野党各派はこれに賛成する首長は推さないときめたらしいので、有利になるのではないかと問うてみたが、松本系が有利に展開しきっていないのが現状だということである。ダンゴになってないのかと私がいうとそうだといていた。私も前からそれは見抜いていた。それに共産党が前に出すぎる。岩崎は、安川労組は奥田推薦を決めているのに、いまだ松本推薦を出していない程だということである。この辺が今回の問題のポイントのような気がする。

2月6日（金）

余暇が与えられぬ

帰宅したら夜の十時少し前だったが、石川君が持ち込んだ色紙依頼についてみゆきが強く拒否の反応を示し発言していた。秘書室からもそれ以前にどんときていて、あとで私が要請枚数を概略あたってみたら二〇〇枚をこえていた。書くひまがないのに依頼ばかりが重なって候補は疲れきってしまうというのがいい分。なるほど近頃は朝は早く夜の帰宅はおそい。私も一寸休んで日記を書く。来簡物を一通り見ると寝るだけ、という日がつづいている。ひまがほとんど見つからない。秘書室と県民の会でバトンタッチしながら早朝から夜おそくまで、ひっぱりつづけている。そのことを仕方がないとするなら、色紙の注文もいい加減にしてくれということになるのだろう。私はみゆきほどに強い拒絶反応は示さないが、近頃は選挙運動ということで使い方がひどい。昨日の財界との飲み事など、予めことわっておいてくれるならいいのに。票にもならない連中とつき合うことに秘書室はまだ未だに気がつかっているのである。田中派にきまっている連中とつき合うのはやめればいいのに。

2月7日（土）

北九州市長選最後の日

松本北九市長候補の選挙動最後の日。午後になって門司、小倉南区を中心に本隊車に候補と一しよに乗って流してまわった。どちらも松本人気が高い区ではある。中には手を振ってよい反応を示してくれる者がたくさんあった。そして、マイクで知事も応援にかけつけていると放送すると、本隊車を見かえる人もたくさんあった。しかし門司も小倉もさびれている。人々の顔はさえない。クールな人も少ない。クールな人の大半は松本反対であろうし、他の人は無関心であろう。門司の山城屋の前は繁華街。ここには相手の末吉のポスターを貼っている商店も少ない。こんどは小倉の駅前で演説した。八幡製鉄労組員がマイク車を近づけて来て妨害したし、小倉駅前から京町、魚町、小倉城前までの目抜き通りには組合員が動員されて会社側の立場で企業選挙に立ち並んでいる。会社側の末吉陣営へのテコ入れがすぎましい。アカ攻撃一てんばりである。

2月8日（日）

時間が足らぬ

ねむいねむい、睡眠不足。昨夜は一時すぎに就寝して四時すぎまでねられなかった。おそくまで色紙を書いていたのである。今日は又そのつづきの仕事をした。色紙一〇〇枚を仕上げたのと、前原町解同圃場整備完工の記念碑、経済人余技展出品作成その他も若干あって筆墨の事に時間を大変くわれ、昨日今日の休み時間は完全にとられてしまい、逆に睡眠不足にまで陥ってしまった。もっと要領よくする必要はあるし、色紙の注文には進んで制限を加えねば今のところあまりにも無原則でありすぎるように思う。今日も十時まで黒田荘での記者会見で、帰宅してから小休憩し、入浴して日記を書いていると十二時を過ぎてしまっている。こんなことでは体がもたないので、今後二ヵ月選挙で多忙な毎日とうまく消化すべく一考を要する。

2月9日（月）

一・五次、二・五次産業について

西区のあちこちを山北県議の案内でどンドンまわった。姪浜地区では漁家の関係者によく出合った。花加工をしている職場にも行った。例の花を押して名刺や額縁に飾るような作業をしている所にも行った。精薄者の作業施設にも行った。こうしたところでは、市場がどれほどあるかわからないが、みんな熱心に仕事している。魚の加工にしても立派に一・五次産業ということが出来るし、花を押して美しい模様物を作るのも同じく一・五次産業である。精薄者の作業場では第二次産業ではあるが二・五次産業もありうるし、農産物の加工では一・五次産業（大根加工）ということもできる。私はこれらを見て、市場開拓のことも併せ考えながら筑豊に多い生活保護、企業誘致への寄りかかり思想などを一方において考えつ

つ、竹箒製作の発想も思い出しながら、第一次、一・五次、二次、二・五次産業をもう一度考えなおしてみたいと思った。

2月10日(火)

宣伝に負けていないか

ポカポカの陽気、快晴つづきである。平年よりかなり気温が高いらしい。知事室から外をながめる。東公園、日蓮さんの銅像の上はるか高く舞う鳩も、公園内に散歩する人影も同じく自然のように思え、そう考える私もこうしていながら自然でしかないのではないかと感慨にふけての一時だった。現実にかえる。やはり頭の中を去来するのは選挙のこと、中でも相手がまいているチラシが、巧妙に数字を使いながら虚偽の宣伝をしているという点についてである。そんなことは知事が気にしないでよいとはいいが、やはり気になるし、今日も原鶴の咸生閣で歓談したメンバーの中の高校教師なる人にきいてみても、県財政の仕組みがわかっていないし、このような相手の宣伝はほんとうかと思ってしまうというのである。宣伝力の不足が痛感される。北九市長選での「太いパイプ論」と赤攻撃の奏効が私の頭をよぎる。田中陣営も中央との太いパイプ論をまっさきにかかっている……

2月11日(水)

売上税反対県民集会

県民の会レベルの売上税反対の大集会が県下三ブロックで行われた。いずれも野外集会で久留米、福岡、飯塚の三カ所。北九州は市長選の疲れもあって立ち上がりが無理なようで、後日に改めて行うことになるだろうとのこと。折悪しく今日は朝の十時頃から終日の雨。どの会場も傘をさしての集会。飯塚を除き、天幕の準備もなく雨風の吹き降りにさらされた。それでも各会場二～三千人は集っただろう。今回の売上税問題は中曽根内閣も思わぬ強い反撥を招いていて、やっきになって内部反対を押えつけようとしているが、周辺がおさまるかどうか。福岡県議会でも自民党さえ反対せずには選挙戦がやれないといっている。北九では末吉陣営は、「中央と地方とは別」という口上で逃げ切ったが、統一地方選まであと二ヵ月。別という論法で逃げ切れるかどうか。「戦後政治の総決算」ということで打出しているこの問題が今内閣の命取りにまで紛糾しまいとはいえない雰囲気である。

2月12日(木)

候補者に要求されるポーズと心

あちこち遊説してまわるが、私の出番は十分から二十分ほどの時間。これだけあれば結構いろいろ訴えうるのだが、これが足りぬ、あれは余分、この点は要注意発言というふうにいると周りから注文がつく。いいじゃないかと反撥したくもなるが、どうやら注文に従っておくのがいいようだ。ともかく仏様のように、エビス様のように、福の神のように振舞い

一ズをとっておかなくてはいけないのだ。選挙民をよろこばせ、安心させ、関心をもたせ、頼もしい人物と思わせなければならない。いたるところ、握手を求め、あいさつをし、相手を慰藉しなければならない。女、子供、老人、障害者にはいたわりと同情、信頼感をもたせねばならない。今日は新宮町の福岡コロニーを訪問した。知事になって二度目であるが、すっかり機械化が進み、さながら印刷大工場といえるほどのものである。みんな真剣勝負で印刷機械に取り組んでいるその姿がいじらしくもある。こういう人を勇気づける政策を推進してみたい。

## 2月13日（金）

二月議会で不信案は出てくるのか

今日の二月議会冒頭の本会議がどう展開するか予断を許さなかったため、地方課長に不信任案が出た場合を想定してレクするよう求めていたので、朝登庁しょっぱなの時間に説明してもらうことになった。田川土木事務所の汚職が一月下旬に摘発され、野党側はさらに知事追及をすることは必至だが、不信任になるかも知れぬとの観測も一部にあった。そうした場合、統一地方選挙と日程の上でどうもつれ合うかという点が問題だったのである。結果的には今日の知事提案理由説明後に汚職問題追及という特別のことはなかったが、十七日からの代表質問その他でどう攻めてくるかはまだわからない。地方課長の説明では、会期中にいつ不信任が可決されても、統一地方選での知事選と重なって帳消しのようになるから、不信任の意味はないということであった。イメージダウンをはかる意味で退任要求決議案という選択があるかも知れないという。

## 2月14日（土）

「勝手連」の動きがあった方がいい

「はげます会」が各地で開かれ既に十箇所は消化したであろう。今日は中間・遠賀地区。花田守氏が郡の老人会を引きまわして今日は老人の動員が多かった。社共が前面に出ないようしてくれるといいがと思っているので、その点今日のは大体成功だったのではないか。老人には保守的な人も少くないのである。でも多くの地区では社共が前に出ることが多い。その外側の人居どことなく嫌な思いをすることが多かろうと思う。そういうことで、前回北海道であったように、「勝手連」を目ざす人も近頃はちらほらきく。社共にかかわることなく、自分たちだけで動こうというのである。県民の会、地区県民の会、市民の会などは地区労その他を利用して役員が出入りしているが、一般市民は自発性をもとうとしても出にくいのである。前回は天神の一角に別途小さな事務室を設けて誰でも出入りしてくださいという形にしていたが、今年も、福岡市の場合はそういうのができてくれるといい。九大系も勝手連の動きをしている。

2月15日（日）

#### 青少年育成県民マラソン大会

一〇時からのマラソン大会は今年は春日公園だった。青少年育成県民会議主催である。大濠は工事中〔池水浄化〕であるためだ。春日公園も立派になりつつあって気持がよい。小雨がふって困ったものだと思って出発したのに、出発号砲が始まる頃からは雨はあがった。小学校は一年から六年まで男女別々、私は去年同様一年男子のスターターで、二年男子と一〇〇メートルほど走ってのおつき合いだが、チビっ子たちの早いこと、とてもついていけない。無理をしてはいけないと思ってこれくらいでやめて帰路についた。二〇〇〇人ほどの参加で父兄というか母親たちも多く付き添ってきていた。中学、高校、一般それめかなり高令者も参加していて、このマラソン日和の日曜日を楽しんでくれた。小学校低学年は一・五キロ、二キロ、三キロと、それなりに走る距離も違うのである。春日公園も一周すると二キロほどで大濠公園より少しは大きいようだ。三〇〇〇人ほどの全参加者のある有意義なイベントである。つづけて毎年やってほしい。

2月16日（月）

#### 個性を尊重する教育

明日から福岡市美術館で二紀会四〇周年の福岡巡回展がはじまる。その前夜レセプションが今日六時半から大濠のウェディングホールで開かれた。あいさつの中で私は大川高校の一教師が、図画の先生は高校では冷飯くいにされているとの手紙をくれた例を引きながら、今日のわが国の高校教育が偏差値重視の受験予備校に偏しており、画のことなど個性を伸ばす教育がかえりみられないということを残念に思うと指摘した。教育委員会の指導が永年にわたって全く間違っているわけだ。高校が全人格教育をすることが忘れられているのである。知事として、県教委の守備範囲にどこまで関与しうるかであるが、農・工・商の実業教育とともに今後反省を加えたい点である。多方面から教師たちが生徒を見ながら、その個性なり長所なりを把えてその成長発展のためにつくすなら、どれだけ立派な人格が涵養されるかわからないだろう。今の教育では生徒たちの個性は殺されているといってよい。

2月17日（火）

#### 汚職事件について追加処分を主張する野党

こんどの議会の争点の一つは一月に新たに起った田川土木事務所の汚職事件につき「知事は新たにどのような責任をとるか」ということである。十二月議会で一月から三月まで知事給料の一分をカットする条例を出したのに、又自己処分を追加せよという野党の要求にどう対応するかであり（西日本新聞記者が知事辞職を迫られたらどうするのかとの質問に、私が、論議に負けたら辞職もありうると答えつつ、この三ヶ月の減給処分は包括的なもので、一々の事件に対応したものではないとの立場から、追加処分には論戦に応じて負けはしな



いということをおうとした) 逆説に、あくまで食いさがってこようとの野党の戦術が争点になるというのである。今日の自民山中、緑政の白水の二人ともそれにふれてきたが、割合にあっさり引きさがってしまった。明日の公明伊沢、それにつづく日程の一般質問の中で何人かが、同じことを何回も衝いてくるに違いない。逃げ切りしかない。

2月18日（水）

売上税に「反対」と答弁

売上税について知事は基本的にどういう態度なのかとの議会質問に「反対」と答弁した。昨日から「反対」というのは知事として少しきびしすぎる言葉だということで、答弁資料づくりの面々が苦悶していたのである。今日十時半頃まで社会党側から、今「反対」という絶好機だとの突上げくっていたわけで、私は遂に十一時からの第一質問者白石氏に「反対」答弁することに決断したのであった。北九州市長選でもその他でも反対の態度ははっきり示していたのだが、県議会で公式に「反対」というのは若干問題を感じないわけではないというのが、行政マンたちの言い分であったが、社会党側の強い主張に引きよせられた形になった訳である。党側は知事と自民中央との関係よりも当面は知事選をどう有利に進めるかが大事で、今世間が売上税反対で燃えようとしているのだから、それに対して積極的に「反対」と合槌を打つことが大事だということである。

2月19日（木）

中国からの福岡定期航空便の開設の動きはじまる

選挙の動きの中での議会、代表質問一般質問の中であればこの数日、全くのきりきりまいの忙しさで、夜はねるだけというほどになる。今日も答弁書検討の時間をさいて中国民航の来客に面接することになった。劉さんは東京の総経理、浦さんはこんど福岡に開設される事務所の責任者、すなわち支店長である。二人ともこの一月に北京に行ったとき私も合うことができた。四月四日に第一便が北京から福岡に入り、週二便の福岡間の定期便のはじまりとなる。この日は北京からの祝賀団三〇人ばかり来訪する。福岡からは知事は参加できないが、逆の祝賀団を派遣することになるが、その規模や構成員については今後早急に煮つめなければならぬ。劉さんの話では、北京—福岡間は四月中はもう予約満席で、便数が増えるようになるのも遠くはないと思うとのことであった。私の方からはこの定期便により福岡県が西日本の中心的役割を果すようになること確実と伝えた。

2月20日（金）

売上税問題を公約に入れることについて

中食前に一般質問は終了となり、今日は比較的楽だった。質問者もねばりが少なくてよかった。社会党は今回代表に白石、一般に大町、鳥越を立てたのだが、白石、鳥越は八百丁的な

がら、立派な質問だった。夜、私の公約作りに、佐々木、八丁が加って、共産党県議団への説明討議の集会をもったが、売上税反対を打出せという要望が強く出たため、私の方から折れてこれを加えるため、会が終わってから、佐々木、八丁の両君をわが家に招き入れて原案作成の作業をした。公約というものの中に、今日の中央政治の問題を入れるべきではないというのが、佐々木、八丁両氏の主張ではあったが、私は共産党側の主張に譲歩する決意をした。共産党諸君の主張は、当面選挙に勝つためには売上税反対というような国民的にホットな課題を公約に出してアピールすべきだということである。私は、その挿入の方法によって譲歩しうるのではないかと思ったので、両者相譲らぬ議論がやっとまとまったのである。

2月21日(土)

雑餉隈をまわって

夜の八時すぎまで福岡市内をどンドンまわった。午前中は市議、県議の選挙事務所などの小集会に、夕方から夜にかけては雑餉隈をまわった。この地区の人口増と商店街などのかわりようにはびっくりした。戦後最初に福岡に来た時、新婚時代ともいえる私達が、駅近くの明野さん宅に寄宿していた頃の事が思い出されるのだが、その付近を通っても、当時の面影はなくなっている。高木暢哉先生の宅にも案内してもらい、奥さんにも声をかけることができたが、その家のたたずまいもまるで違ってしまっている。雑餉隈の駅は、今は南福岡と名は変えられてはいるが、形は当時のまま、なんだか浦島太郎みたいな気持になった。渡辺四郎氏の秘書石橋としお氏が主として案内してくれ、近くの町世話人の方が引きまわしてくれたのだが、いや全く、百二〇万人の市内の一点を見たにすぎないことにも呆然とさせられた。

2月22日(日)

人事をつくして……

広い福岡市内を今日も西、南ぐるぐるまわった。共産党系の集会が主だった。昨日も同様のことをしたのだが、いくらもがいても、点と点の努力にしかなくていないことを痛感する。百万都市をそんなにうまく短時間でまわれるはずがない。五〇人の集会を一〇箇所として五〇〇人、平均一〇〇人なら一〇〇〇人でしかない。今日の合計は八〇〇ぐらいだろう。大海の一粟にひとしい。山ノ上ホテルで夕食しつつ、室長にいったのだが、私の力ではどうにもならんよ、ムードが選挙をきめるといってもいいし、でなければ人事をつくして天命をまつというしかないねと。当事者は知らないだろうが、神なら成り行きを知っているのではないかと思う。昔から政治家が宗教に関心をもつのは、「神」のような魔力、神眼を信ずるしかないとの立場に何回もおかれてきたからであろう。北九州も百万都市だし、県下合計で四七〇万の県民がいるわけだ。三〇〇万の有権者に有効に訴える手段はないようだ。

2月23日（月）

筑紫路の女性の集い

大野城市福祉総合センターで女たちの集いがあった。二五〇人ぐらい筑紫路の市町から集ったわが派の人達であるが、女性の立場から切々たる県政への訴えが相次いだ。学校での管理主義に対する非難はきびしいものがあった。高校を新設しても現場がこのようでは困るという。ある学校では双児を妊娠した女教師が休暇を求めたところ、女教頭が、学校をやめるか子をおろすしかないと放言したとの報告もなされた。女教師の地位は戦後向上したとはいうものの未だたくさん問題が残っているとの訴えであるわけだ。又春日市で保育所が公立から民営に切りかえられるということで保母たちが反対に立上がっている話。これは待遇の面からだけみても民営になると長期勤続者で月給に七～八万円の差がつくということで非難に値するし、今後親の負担もふえるだろうから何とか民営への切りかえは防止できないかと訴えているのである。市レベルの臨調行革の話である。

2月24日（火）

ようやく選挙にエンジンがかかってきた？

まだおそくないだろうと思うが、一般の選挙熱もようやく上ってきたように思える。田中派はとっくにあらゆる場を設けて活発な動きを見せているのに、当方はなかなかエンジンがかからないとの見方が一般であるが、今日はローフレンズ系の中小業者がマルベニに集まり、学文系がつくし会館に集った。二十二日には勝手連が天神で旗上げし、近々中洲でも勝手連が動き出すと岩崎隆次郎氏がいていた。売上税をめぐって昨日は商業者が反対の新聞広告を出した。一面全部を使ったもので効果は小さくないが、これが地方選にストレートに連動するとはいえない。これをどう結びつけていくことができるかが今後の一つの課題であろう。田中派は農協、町内会、業界に手広く網をかぶせて活発なのに、こちらはどのようにしているのかと、参議の渡辺氏の奥さんはやきもきし、周囲にあたり散らしているとのこと。その熱意にみんながこたえてくれなくてはならない。

2月25日（水）

挫折感おこる

大坪君から電話で社会党竹村氏に私から選挙事務所にもっと顔を出すようにいってくれと伝えて来た。事務所体制がうまくいっていないことの強い指摘である。東京でやきもきする大坪君だが、福岡の事情が伝わってくるらしい。今日、出納長に近藤前副知事はどうしていると私がきいたら動いてないので再度アタックしてみるといっていた。選挙事務所では社会、共産の確執があるし、事務局関係者もなんだかたるんで見える。宛名書きもアルバイトで無責任さも加わり、無点検のため、出した郵便物がどんどん返送されてくる。届くはずもない宛名のままどんどん投函しているのである。員数仕事である。発送元を私の名にしてい

るので拙宅に返送されるのである。又松友会の集りの試みについて一度案内状を出してすぐ取消しの手紙を出すなど計画のズサンさがひどすぎる。毛利浄賢がクレームをつけ西原忠毅さんが取消したとのこと。こうしたことをあれこれ考えると挫折感が一ぺんに湧いてくる一日だった。

2月26日(木)

憎々しき存在意義

二月議会が今日で終わった。終りに私の方からも、ねぎらいの言葉を議場でのべたのだが、その中で、これで引退する人はごくろうさん、選挙に出る人は全員勝って下さいとはのべたが、私のことは一言もふれなかった。私がいさつに立つや否や、野党の方から「最後」というやじがとんだ。それほど憎々しげな存在だったらしい。私はそのことが、私の「座にいる」意義があると思っている。彼らに憎まれるということ、もうこれで最後よといたい気持ちをもたせてきたということは、彼らにとって私がいかにけむたい存在であったかの証明でもあると思う。議会終了後の記者会見でも私は、箱物などを作る仕事が残っているから次期に挑戦するのではない、民主的な県政を守り推進するために挑戦するのだとっておいた。記者の中で何人がこのことを理解してくれたかわからない。県勢浮揚を問題にした方がいいと思った者もいたであろう。自民、民社、公明が反対することに私の存在意義があると今日思った。

2月27日(金)

総立ちで三冊目の本を書きたい

読売、朝日、西日本、フクニチ、時事と、次々にマスコミ取材があった。一社三〇分でも休憩を入れて約三時間夕方までたてつづけだ。一番いいことは県政の民主化であった。しかし、どの社もなかなか理解してくれそうになかった。ある意味では彼らにとってはどうでもよいことである。自民、民社、公明の各派は私が一番いい県民総立ちについてすべて、つねに否定的である。だからこそ私は執拗にそれをいいつづけるし、彼らが田中を推すからこそ私は敢えて敵愾心をかき立てられるのである。ここは私にとっては肝でありそれをさされれば強く反撥する。汚職を衝かれてもかえって当然と思う。衝く人に憎しみは感じない。でも緑政の大石のように、正面から総立ちにはわからんというならむかむかとする。再選で目ざすものは？とマスコミがきくから、敢えて県政浮揚といわずに総立ちをさらに広めることにあるという。できればもう一冊本を書きたいといい、内容は総立ちの進めということにしている。

2月28日(土)

選挙公約発表集会

今日は福岡と北九州で私の政策発表を行う日。二〇分足らずの演壇でうまくいえるかどうかが一番気になるころだし、その内容にしても心配である。それに、スターぶりがよくなければならない。話しぶり、抑揚、言葉の明瞭さ、マナーそして話術である。どこかで一つや二つは笑わせるポイントは心得ておく必要はある。こうした心配もあったが、二会場ともまずまずの出来ではなかったろうかと自己採点している。ただ持時間をどちらも相当オーバーしたようだ。それに二つとも安達氏の書いた原稿をもとにしたのに、小倉では福岡同様にいかなかった。後で気付いたのだが、小倉の場合、余分のことはたくさん言ったのに、政治倫理条例とモニター制についてはふれずじまいであった。農業高校を地域からの総立ちでよくしようじゃないかという話がどこからともなく脱線が出てしまったが、会場の雰囲気からしてこうした型にはまらぬ話しぶりの方が聴衆を沸かせるのによいと思うのである。要は会場がどう一体的に沸くかが大事だと思う。

### 3月要記

二日から五日まで姫路から雅明が自分の車で応援に来てくれるという。九一もそれに便乗して来てくれるらしい。和代が二月のはじめから来てくれているが、かなり詰めたスケジュールで動いてくれている。雅明は創価学会員を目あてに、自分のスケジュールでまわってくるといっている。公明党は田中健蔵推薦となっているが、創価学会員まではその線でおいてなくて、半々にわかれるだろうといわれている。売上税では社公共闘を中央でやっておいて、地方選では自民公でいくというのが彼等の矛盾なんだが、これがどこまで押し通せるだろうか。三月上、中旬は売上税問題で中央に大揺れがきて、地方選挙にまで手がまわらないということになれば、われわれにとってはこの風はうれしいのだが、自民中央は地方選に向けてどう舵を取ってくるだろうか。かなり大きなカケになるだろう。田中健蔵はひより見する以外に出れないわけだけれど、売上税問題を避けながら、市町村長、町内会長、業界など必死ではいまわるに違いない。当方がこれに対抗できるかどうか勝負どころだ。

### 3月1日（日）

#### 清い水に落ちる汚物

瀬高町での歩け歩け大会に出たあと隊列より先まわりして清水寺に行った。二度目だのに三重の塔に着くまで道がよくわからなかった。寺の住職さんは前の選挙の時からよく知った仲という調子で話してくださった。話が汚職問題にふれ、住職さんは、水が清ければ汚れた物を一寸落してもすぐわかり、水が汚なければ少々のもので汚れはわからないのと同時に、汚職が目立つのはあなたがきれいだからだといってくれた。果してこの論法でひとを納得させうるかどうかにはわかに断じ難いが、とっさに面白いことをいう人だ。たしかに大川市での「はげます会」の時に演説した青年は、亀井時代には県庁建設でいろいろ汚い話が出ていたのに問題にされずじまいになったことを引例していたが、これと話題を合わすなら、

亀井時代には警察の手加減があったのかも知れない。私は絶対に手加減しないし、してももらえない。ということになると、住職のたとえばなしが生きてくる。田中健蔵は「変えよう福岡県」という。その意図は？

3月2日（月）

出版記念パーティ

はかた会館で私の「ニュー福岡元年」の出版祝賀会が行われた。選挙運動とまぎらわしい点ももちろんあったが、表向き出版祝賀会だった。教養部の教官事務官の現役、OBたち一〇〇余人が集ってくれた。わがふるさとに帰ったような気持になって、二時間余歓談することになった。本を買ってくれた人がサインを求めたので半ばサイン会にもなった。私はあいさつの中で、この本の中味、出版の意図などにつき披露した。多くの人が選挙応援のつもりで話してくれた。大西孝子さん達も来てくれ、彼女は別府団地にいるが、知事の評判は大変によいけれど、田中氏側が物量でやってくるところに危険性を感じないわけにはいかないといっていた。ご健闘を祈るというのが、みんなの気持であることがよくよくわかる会だった。福留、押川、衣笠などの諸君が裏舞台で活動してくれていたようだ。OBでは野田、岡田、坪田、江嶋など先輩がかなりたくさん来てくれた。有難いことだ。

3月3日（火）

浮羽の地、耳納山のふもとのよさ

政治はエモーションだ、ということから話しはじめ、「浮羽は好き」という言葉も挿入した今日の浮羽地区の「はげます会」は疲れを忘れさせる盛り上がりを見せた。吉井の文化会館に、地公労を中心に商業者農業者を六～七〇〇人集めた若者の熱気は大したもの、これまでの各地の集会の中で一番興奮の渦が巻いたのではなかったかと思う。すべての通路を上壇、降壇の道中両面の人達に握手してまわったのだが、ガンバッテという声、興奮で私も引きとめられてしまうことしばしばだった。浮羽郡は私が何回も足を運んだ地であったし、この地区の人達は自立心が高い。また山河清らかである。工場誘致ということはいわなくてもこうした地域には自然に適当なものが進出してきて、一体としての魅力ある地域をなしている。いわば県内でもすぐれた「郷土」として誇りうるどころだろう。話もはずんでくる。希望と勇気をもって話すことのできる相手が多い。

3月4日（水）

中国総領事館に晩餐会の招待をうける

実は中国総領事館が薬院に移転していることは知らなかった。県の三役幹部が招かれて今夕はじめて行った。三役、企画の両部長、白土課長の六人が夕食に招待されたわけ。当方の誰もが中国語を話せないのは、ひげ目を感じず。すべて日本語だが新任三ヵ月になる郭総領

事はまだ日本語に十分でないようだ。今川橋の海側埋立地に一五〇〇坪の敷地が決まり、夏に新築着手の予定ときくが、立派なのが計画されているようだ。県、市が少し土地代の助成をしたので、返礼として今日招待してくれたのであろう。六時から九時近くまで雑談に花が咲いた。四月四日に福岡空港に中国民航が初就航することになり、この定期便により福岡との関係は飛躍的に拡大するだろうとの夢が今夕の懇親会の雰囲気をも大きく左右していた。私も全く同感で、県が西日本の中心としての機能を果たすようになることに私の夢がある。

### 3月5日（木）

売上税反対に揺ぐ自民党だが

第八次石炭政策の中で出炭規模縮小に打ちひしがれている大牟田に行った。街はその通り元気がない。北九州市同様である。でも市民は同様に元気を落しているかというところではなさそうだ。田中健蔵の顔びらがすごく目について嫌な感じだが、きいてみると、ビラを貼っている割には浸透してないとのこと。昨日福岡であった業者集団の二五〇〇人規模の売上税反対集会是篠田、中島両県議を窮地に追いつめたそうだが、その余韻が大牟田にも感じられた。自民候補は支持しないぞとおどされたのに、中曾根は「大型ではなく中型」の間接税で撤回しないといているので、篠田、中島のいいわけも地方選がすむまでの、ジェスチャーで、済んだらやむをえないというだろうと、腹の中まで見透されての追及をうけたらしい。今日の朝刊各紙がこれを報じているので、大牟田でも業界ではもっぱらこの話が巷間を走り抜けている。大牟田の活動家たちはこの問題はわが陣営には「追い風」と評している。その通りだろう。県民の会も、やっとエンジンがかかりはじめたとみえる。今日の大牟田集会是文化会館オープン以来（昨年七月）の入りだったという。

### 3月6日（金）

「政治はエモーションだ」をくりかえして訴える

昨日今日集会では、政治はエモーションだということをとくに強調してみてやはりみんながよろこぶのが再確認できた。仁徳天皇のはなしを引き合いに出し、今日のように不況でみんなが苦しんでいる状況下では減税こそ必要なのに、売上税など悪政をぶつけてくるのはけしからんと説いた。築上のこの地区でも売上税への反撥はかなり強い。山崎拓は県議が反対の陳情団を上京させたことにつき、地方選をたたかう上で反対決議をせざるをえなかったとマスコミに語ったというが、地方選が終わったら五月にでも強行突破するということが外ならぬと一般の国民とくに県民は解釈している。このような思いやりのない政治はやめてもらうしかない、と「政治は心」論を展開すると聴衆はよくきいて納得してくれる。よろこんでもらえる政治、思いやりやぬくもりのある政治、ソロバンばかりにこだわらない政治、住民とともにある政治。こうしたエモーションの側面を強調することは、どんな実績を強調するよりもよいようだ。築上の人達は工場誘致などで若い者が地元に住居する政治、十号線の

渋滞を解消する政治も欲している。

3月7日(土)

知事選両陣営の燃焼度

東急ホテルで社会党の国会議員数人と懇談の席をもった。席上、社党県本部の竹村書記長から報告があった。その中で、知事選に関し、八〇〇サンプル調査をした結果の概況がのべられた。時点は二月中旬、田中健蔵に対し、奥田は二%リードしているが、これは誤差の中に入るだろう。だから半々で見なければならぬという。悪いのが福岡市で、田中が一〇%リードしているとのこと。もちろんその後の両陣営の運動の成果や、注目される売上税の反響も考慮されなければならないだろうから、現時点で、こうした数字がどうか変わったかは何ともいえない。田中陣営のこの頃の物量攻勢にはすざまじいものがある。動員してのビラ貼りをみてもわかるし、業者組織を上から半ば強制的におさえてのジュウタン攻勢である。私の周りは、絶対に負けられないとして、ようやくエンジンがかかりはじめたかに見える。もちろんまだまだ燃えているといえない。危機感が足りないし、燃える材料もほしい。

3月8日(日)

奥田事務所オープン

読売ビル横に、やっと奥田個人事務所が、今日オープンを迎えることになった。八丁君が前から強く主張していて、財源問題でなかなか出来ずにいたものである。「県民の会」は社共労の選挙事務所の域を出ることは困難なので、奥田政治事務所が別にいるのだということが痛感されていたのであるが、開設推進役が八丁君しかおらず、資金繰りに打開策がなかったのである。少々遅きに失したともいえるが、それでも十分役立ちうることになる。地公労の役員の方々がやっと腰をあげてくれたのでできたわけだが、その必要性の理解に手間どっらしい。知事の政治事務所として政策立案の作業をしたり、社共労以外の一般の支持者と接触し、その自由な出入りを歓迎する必要、又は「その他」の人達を組織化する必要もあるわけだ。今日四時から社会党地公労の県レベルの幹部がオープン式に参加してくれた。小柳勇氏が指揮してくれることになる。大西孝子さんに電話して事務所のおもりをもらうことになった。

3月9日(月)

岩手県の参院補選で社会党が大勝した

昨夜、岩手県参院補選で社会党の小川仁一氏が自民党岩動氏に対し、ダブルスコア以上の差で大勝したことがわかった。それが朝刊に大きく報道され、朝日、毎日の両紙は夕刊に論評までのせている。売上税がこの結果を生んだこと間違いないという。テレビでも夕刊でも、中曽根首相がそれでも売上税推進の姿勢は崩さず、更に国民にPRをしていくとのべてい



る。七～八割の国民は被害者になるということで全国民が沸いているのが昨今の状況である。今日は三人の記者が私のあとをつけて感想いかんとたずねてきたが、私は、福岡知事選にどう影響するかはにわかには判断できないと答えておいた。岩手では、公明、民社が自主投票し、共産が別の候補を立てていた。福岡県では社共が私を推し、公明、民社は自民と相乗りしている。福岡県では公民は田中につき、田中は自民べったりで、岩手の状況に今後中央がどう対応するかで自民―田中・民・公の協力度がかわってくるだろう。

3月10日（火）

知事選加熱はじまる

知事選、統一地方選への一般的関心がようやく高まってきたかにみえる。拙宅にもはげましの手紙ハガキがかなり来ている昨今である。今日は少々早く帰宅できたので、何通か返信を書いた。陣中見舞いも四件届いていて御礼状を書く。岩手県の参院補選は一般にかなりショックだったらしく、これに関する気持ちをこめての激励状も届いている。片やあちこちまわっていると、これに気をよくして一分の隙も油断してあけてはならぬと戒める人もいる。その通りだと思う。私のビラがあちこちで破られ、裏返されたりしているのが、車で街を走っていて電柱をみて気になる。田中派が大動員でビラ貼りしているときに、又は市民の中の田中派が意図して「妨害」に出ていることは確かだ。中には私のビラの上に田中のビラを貼っている例も若干ある。こうしてたしかにエキサイトしはじめたといえる。彼我ともに若干の疲れを見せはじめたという人もある。だんだん過熱するのが明かに感じられる。

3月11日（水）

灯の消えたような北九州

八幡と戸畑を歩いて歩いて、万歩計は八千六百を記録した。構造不況ということで、方向転換以外に再生できぬ不況にあえいでいる北九州のたたずまいが、一日中焦げつくように私の脳裏にしみこんだ。瓦は落ち、戸板は剥ぎとられ、枠の鉄はあちらでもこちらでも赤錆びである。街角の人影はまばらで商店には活気がないし、人の入りもまばらである。「死の街」とまではいえないが、「あえぐ街」といえるだろう。上海堂、健和会、明治学園など、第三次産業関係はまだしも活況なしとはいえないが、全体としては沈んでいる。末吉新市長は「中央との太いパイプ論」で当選したのだが、太いパイプの内容は具体的に何もなさそうだ。私は北九の中小企業の下請体質からの脱却。自立技術立県を主張してこれに対応している。安川電機などの地場企業の活力も期待したいといってきた。

3月12日（木）

久留米での分刻みの一日

昨日今日連続の強行軍日程で、一寸疲れを感じた。休みなしで事務所、職場をぐんぐんまわ

ってまわって止まるところを知らずである。今日は久留米で、鳥越県議がついてくれたのだが、いつも時計を見ながら時間がない、時間がないといって次の場へ移動していく。どうにもならなくなって一箇所二箇所はキャンセルすることもあるらしい、が、元来予定が多すぎるといいたい。休憩時間の中に入れておいてくれたらと思う。休むのは中食時のほんの何分かである。それでも現地の者からすると、欲ばってできる限りまわしたいばかりであろう。限度があることを知りながら究極のところまでおしこんでいく。今日は聾学校、国立久留米病院で、行革統合は困るといふ陳情を受け、対応には困惑した。老人ホームはいつもこちらが憂うつになるのだが、今日のは元気な老人ばかりでほっとした。女性たちが教会に集って今問題になっている国家秘密法案の学習をしている現場に行った。その真剣さにはおどろかされた。

### 3月13日(金)

#### 四方面からの雇用問題の重圧

午前中、西専と卸売団地の二ヵ所を訪ね、商業者組合幹部と売上税についての意見交換をした。県商工部今泉係長が同行してくれた。この話は商工部が仕組んだもの。いいアイデアだ。保守の牙城に現職の強みで乗り込んだことになるし、彼等を売上税という問題で味方に引きつけたことにもなるからである。知事選で確実に票になるとはいえないまでも、かなりの影響は出るだろう。彼等の話では流通業界の困惑はひどく、三割が倒産する可能性があるという。わが国の経済体質は欧米とは異なり、流通過程に多くの手数料がかかり、それだけに雇用吸収力が大きかった。が売上税の導入により、一そう弱肉強食が進み、雇用力を失うだろうとのこと。農業も雇用吸収力の大きい分野だったが、今日減反問題で急に過剰労働力を生じつつある。構造的不況、円高不況も加わるから、四重の雇用問題が重くのしかかってこようとしている。

### 3月14日(土)

#### 売上税反対で沸いてきた街かど

九大法文系一〇二号教室で、福大教の大会があって、これに出てあいさつをした。私が再出馬するについては、地方自治の推進が基本であるが、田中健蔵氏には負けられぬ気持だということと、加えて売上税問題が大変なので、これに対応するのは田中ではなく私だということをつけ加えた。これで新タイプの十分間演説の骨子ができたように思える。何しろ今日は「子ども劇場」運動の母親たちがやっている街頭キャンペーン(売上税反対署名)＝岩田屋横街頭と、中比恵公園でのクリーニング業界の売上税反対奥田推薦大会、さらには城山ホテルでの大型間接税イヤイヤパーティというふうに売上税反対の集いに出席することになり、巷間売上税で沸き出しているのだから、知事選であれこれの争点について話すなどのひまのないくらいの騒然たる状況になってきているのである。売上税反対に言及しない私の「あ

いさつ」は考えられなくなったというほかはない。妙な知事選運動の発言に傾きはじめてたものだ。

3月15日（日）

勝手連の「ザ大衆団交」に出る

昨日今日は引きつづき、日程の中に平素の組織ならぬ集まりが加えられ、趣向が加えられ、一般の大衆がだんだん四月の地方選挙に沸きはじめていることが感じられてきた。今日は正午、塩原の中央公園の生協主催といわれる「生き生き大バザール」（露天）に行ったし、警固公園では「お祭りサンデー」なる催しがあった。どちらも売上税反対の任意集会である。又夕方は五時から教育会館大ホールで勝手連の「ザ大衆団交」なるものに対応することになった。原子力発電、売上税、天皇在位六〇年記念行事、博多湾埋立、指紋捺印強制、国家秘密法などの問題をとりあげて、知事は適確に対応すべきではないかと知事意見を求めた「団交」であった。もちろん知事選勝利をとという人達の集りであった。森祐行、岩崎隆次郎など心配して会場にかけつけていた。勝手連というのが、六つも七つもできて、それぞれ動きはじめているが、これらが今後どう輪をひろげていくかに世間の注目が集まるだろう。

3月16日（月）

田中問題と売上税問題を加える

田中健蔵側は国際センターでフェスティバルを開き、当方は土井たか子委員長ら社会党中央の幹部が来福、知事選に肩入れ、新天町で演説会を開いた。私はこのあと北九にとんで夕方の社党ブロック集会に臨んだ。私はこの頃再選出馬の決意表明にあたって、開かれた県政、自治の推進、地域浮揚と福祉向上という第一義的基本的姿勢のほか、第二に、田中という人間は許せないという点をあげ、第三に、売上税反対という焦眉の問題に立ち向うということをつけ加えることにしている。田中が人間的に許せないという点については決して公衆の面前では細かくふれないが、私が闘志を沸かせる原動力の一つという表現にしている。売上税については、これが導入されると、県下二〇〇万余の就業者のうち、八〇%が中小零細業に従事し、そのうち三〇%つまり全就業者の二四%、約五〇万人が倒産か失業の瀬戸際に立たされるのだから、これに立ち向う県政であることが絶対視されると説明しつつ、反対しようと訴えることにしている。

3月17日（火）

押せ押せでいこう

県民の会事務所もようやく活気が出てきたようだ。今日立ち寄ったらウグイス嬢たちが特訓をうけているという。二階で握手してきた。岩崎事務局長が当方は福岡市でも鼻の先だけ勝つところまで追い上げてきたといていた。中曽根の指導が目に見えて動揺してきた。か

くしようもない、自民党の内部統制がきかなくなりつつある。首脳陣の中で勝手な発言がおこりはじめ、首相と少数の者が進め進めとやっているみたいだ。田中健蔵がいう売上税反対が選挙戦術にすぎないことは衆目の一致するところとなっている。ネジレ現象をかくそうともしないからである。山崎拓も永倉三郎も対応に困っているようだ。この際我が方は押せ押せでいくほかはない。押しまくる闘魂こそが必須である。今日も昨日の北九につづいて小柳氏が福岡市内で私をあちこち引きまわしてくれたが、多くは自民県議のポスターを室内に貼っている業者の事務所であった。押せ押せでいくと効果はある。

3月18日（水）

政治的に沸かされる

日々加熱する選挙運動で動員される側にも熱がこもってくる。ということは人間は意外と政治的な動物なのである。今の時点では売上税が加熱の材料でもあろうか、毎日五〜六ヶ所の夜の集会をこなすのだが、おそいのは今日のように終って午後十時になったりする。知事が来るというと、一目見たいといって席を立たずにおそくまで来場を待つという心理にもなるのであろう。近頃は会場の人達に握手してまわるようできるだけ心得ているのだが、握手は貴いスキンシップで万言の説教に値するようだ。ここにも人間の政治的性格がうかがえる。前回の知事選と違うのは、単に婦人や青年が沸くばかりか、今日は業者もまた沸きはじめている。むしろ業者の方が一般市民消費者より熱気があるとさえいえる。これまでは自民党を支持したが、今回は自民党の驕りを叩きつぶさねばならぬとさえいっている。こうした雰囲気をごちらにもってきて票にまで結ぶにはあと一工夫がいるだろう。

3月19日（木）

民労協も雇用につき新しい道を模索している

午後六時、八幡製鉄関連企業労働組合の役員二〇人ばかりと八幡中央町レインボウプラザで雇用問題について三〇分ばかり懇談した。彼らは保守で走ってきた連中で、従来連絡なくいわば敵方のものである。このたびばかりは新日鉄の合理化で自分らのクビが完全に危くなってきたので、県になにかいい考えがないのかということで、私の話もきいてみようということ、なのである。民労協、民社系だけでは限界があると思うに至ったのであろう。それも裏工作は県評の坂本隆幸次長が万事ととのえ、表は県の労働部を立ててのことである。私は、北九州の地盤沈下は構造的なもので、対症療法的には何かと政府も臨時にやっているのでも県もそれを必要とは考えるが、根本的には技術立県の観点から北九州の中小企業に自立の力をつけることから始めるほかなく、情報力による市場開拓や先端技術の応用、職業訓練など何でも必要なことは企業と協力しつつやってみたいので、組合の方からも要望をどんどん出してほしいとっておいた。

3月20日（金）

混乱した論調

毎日分刻みの集会あいさつの中では、当面の焦眉の問題たる売上税について訴えるしかないことが多い。今日福岡県知事名で総理と大蔵大臣と衆参両院議長あてに売上税反対撤回の公文書を提出することに決めたが、新聞（夕刊）では、全国知事会事務局で福岡だけがそうしていると書いていた。田中陣営ではそんな意見書を出すのであれば、売上譲与税をもらわないとの覚悟をもって予算を組むべきだといっているとか。そういう考えもありうるかも知れないが反対の意見をもっているなら法できまってもそれに従わないでよいといっているみたいなきこえる。そんな馬鹿なことはないはずである。法律ができるまでは反対する自由があり、できてしまえばそれに従わざるをえないのが法治国というものだろう。民社党の宮田早苗が売上税は国政レベルの問題だから奥田知事が反対したいのであれば国会議員選挙に出てそういえばいいというもの、また似た苦しまぎれの反論というしかない。

3月22日（土）

終盤戦を前にして

各所分刻みにまわっていて、ふと気がつく、吉野桜が一輪もう咲いている。今年はぐっと暖い。そのことを念頭によく注意していると四輪も五輪も咲かせて枝をたらしめている桜もある。柳の芽は日ましに伸び鬼の耳のような形の若芽をつけて伸びはじめ、確実に青味がかってきた。ほんとうは黄緑だ。当たり前なのだが、県内まわっていると日がたつのが早いということに尽きる。十二月二十七日は出馬表明の日。あれから間もなく三ヶ月がたつ。公務と政治活動半々の日がつづいた。夢中である。明日はどちらもない日程で、公示前の調整日。今日は午後八時半で西区の集会を最後に帰宅できた。ラーストコーナーをまわったところを懸命に走っているという形である。あと二〇日、体調をととのえるのが私に課せられた一番の課題であるが、どうしたことか、時間があっても睡眠が十分でないようだ。疲れが積っているせいではないだろうか。周辺は何ともあれこれ注文してうるさいが、それはあまり気にせぬこととしている。

3月22日（日）

告示前夜に

選挙の話が身边でもっぱら、勝てるだろうとの観測が強く、知事はあせらずにゆったり構え、にこにこしておればいいという。それを信じたいが、信ずる材料、判断材料がない。田中派は事業主や保守系議員、何とか会長、市町長などには猛烈にアタックし呼び集めているようだ。それにはカネを湯水のように使っており、アルバイトもたっぷり使ってビラを大量に貼っている。だが田中本人がいうように、風呂みたいに上は熱くても下はまだ冷たいという実態はまだつづいているとの説もある。今日の岩崎の話では中央からも大物政治家が来て、選

挙中は売上税にふれず専ら「浮揚」で奥田攻撃をしようとの戦略を決めたとのこと。当方はその逆、売上税反対の攻勢をかけるのが最も効果的であろう。今日一日休みをとって動いていないが、明日から三週間ばかり、フル回転しなければならない。健康にはくれぐれも注意をと誰しもいつてくれる。

3月23日（月）

知事選告示出陣式第一声

知事選告示の日。選挙事務所での出陣式に始まって豊前市に投宿するまで全くあわただしい一日であった。全県を三日で一周するという。突っ切るといってよいくらいだ。カメラマン（報道陣）がそれを密着取材するという。警察も警備する。とくに前者がうるさい。売上税反対を訴えるため今回は新天町を街宣あるきしたが、カメラマンに邪魔されればなしといていいくらい。それに困るのが雨。左腕を車の窓外に出して手を振るのだから、濡れてしまう。県民の会事務所での出陣式は、前回の一・五倍は参加していたろう。一五〇〇人か。石村善治氏司会、内田一郎代表あいさつ、団体代表は社会、共産、社民連、サラ新党、総評、中立労連、婦人代表の順だったが、業界代表（貝原）友人代表（高橋正雄）も団体代表の前にあいさつに立った。出陣式のあと、すぐ天神行動も行われたが、今日の私は、その後の粕屋、宗像、遠賀、北九（若松、戸畑、黒崎、小倉、門司）のどの集会においても、最後は売上税に反対を貫くには知事選に勝つしかないと訴えることに力点をおいた。福岡知事選が天王山といわれるからである。

3月24日（火）

かなり上々の反応

小雨が降って夕方止んだ。やはり降らぬ方がいい。今日は京築、筑豊、甘朝、久留米、八女という超粗雑な行程でぶつとばすばかりだったが、十箇所ほど車から降りて演説もした。そうした中で印象に残ったのは直方の駅前、久留米の公会堂前。どちらも露天集会。そして八女の市民会館内の売上税反対集会。もちろん他にもいろいろ知事が来るといっているので集会があつたり、沿道の人だかりがたくさんあつた。一〇〇人以上集っているのに、車から降りないで、合図会釈だけというケースが少なかった。反応は概して上々といえる。ひいき目に見ているせいだろうか、行き交う車のドライバーの反応もまずまずよかったと思う。ライトを点滅したりピッと鳴らしたり、ハンドル片手で手を振ったり、運転手以外の方が手を振ったりである。うちの窓を開けてみる人、作業中の人それぞれに手を振ってくれる人も少なかった。それでも、車は一〇分の一か二の反応である。それでも多いといえる。役場、学校などは集団で出迎えのような形になる。直方で一品料理の中食をとったが、食堂など立ち寄る所はきまって支持者のように反応してくれる。

【欄外記入】

夜グリーンホテルで

（ホテル主  
立山大蔵さん  
今村圀彦さん  
ほか五人ほど

3月25日（水）

ムードをわが方に引き寄せるという課題

強風のため髪は乱れ、外に降り立つと寒かった。八女、筑後、大牟田、柳川、大川、久留米とぶっとぼし、夜の部は糸島三町での個人演説会、そして芥屋の、みどり松というところに投宿。今日も夜はおそくなった。大牟田で中食のときNHKから、まわっていて感想はどうかときかれたが、自分で評価できないが、まずはいいのではないかと思うと答えた。やはり売上税についてはきき耳を立ててくれるし、選挙車に大きな写真が電光で出ているので、一般に沿道の人達も、こちらからの呼びかけに応じて反応する人もかなりある。しかしこれはあくまでも表面上のことで、多くの人はまだ決めた態度はとるに至ってないのではないか。売上税が順風であるということと、現職の強味ということに帰着するのではないか。問題はこの三日間駆け足で県内をまわったあとの十七日間、これまでの穴を埋めながら、いいムードをいかに本物にしていくかということだろう。新聞記者あたりが、売上税で雪崩的にわが方に有利になる可能性があるといっているそうだが、その場合、用心しなければならぬのが身辺警備である。暴力に訴える空気ができるからだ。

3月26日（木）

春休みで屈託ない時間をすごす子供たち

桃が咲く。追っかけるように桜がもう三分咲きである。この分なら三月のうちに満開になるのではなかろうか。選挙車でまわっていると、子供が親に連れられて買物に出たり、群をなして快活に遊んだりしているのによく出くわす。やっぱり子供はいい。学年をきくと思いのほか低学年。それだけ体躯が大きいのだろう、栄養がいいから。前回知事選では私の名を覚えやすいように言いまわしてよく注目してくれたのだが、今回はそうではない。歩いていて語りかけ、知っているかときくと半分は知っているという。テレビで見ておぼえているようだ。春休みが楽しく過ごせるならいうことはない。屈託ない日々を送ってくれるといい。が昔の子は家事手伝いに追いまわされたのにくらべ今の子は時間の使い方を問題にせざるをえないような環境である。塾か何かで他律的な時間を与えないと、ついついたずらをして、非行に走るきっかけをつかむようになるように思える。群をなす子供たちを見ながら、フトそう思った。ところで昨日は大学入試合否の決定日。複数受験チャンスがはじめて与えられ、多くの大学で定員割れが出て問題化している。

3月27日（金）

肉体の限度を超えたスケジュール。促がされる方もつらいが促がす方もつらかろう。これが政治というものか

毎日、毎度、マイクを握って、その前と途中に時間がない。長すぎたと注意される。そのたびごとに嫌な思いをする。与えられた時間は三分とか七分とか十分ぐらいであるが、わかっていながら一寸は超過する。芸当するようなわけにはいかない。それにまた、今日はテレビが取らせてくれというと、カメラを前にせねばならないから先入観があつてなかなか思うようにいえないことになる。平素の知事職というのもひとがみていて、たいてい嫌だのに、候補となると、こうした枠の中におしこめられてしまつて一味違った嫌な思いをする。一カ所ぐらい日程から省けばいいのに、結果論として一カ所多くなつてゐる。欲が出ることは了解できるが、所詮有限者なのだから、無理をしない程度にすればいいのに、無理がくるようになってしまふ。夜の日程の終り方にしろ、朝の出立にしろやはり一つは多いから身のくつろぎようがない。睡眠時間も制限されてしまふ。こういう日が三週間つづくのである。いやもっと多かろう。車の中で眠れるだけ眠るやうにと、いいことはいわれるのだが、これ又注文どおりにいかない。演説して興奮しているのにすぐ眠れるわけがない。

3月28日（土）

握手のこと

八幡東区をまわっていると、私が求める握手ポーズに対し、鋭く背を向ける人がいた。二日ほど前にも福岡で、五～六人の男が背を向けて逃げるやうにしたケースがあつた。当然ありうることであるが、握手を避けるにしても、こんなのは極端すぎると思う。余程田中との関係が深い「奥田嫌い」というのであろう。普通の人は嫌でも消極的な手をさし出し気のない握手をする。固い握手、手をゆさぶるやうな握手もある——これらすべて商店街でのシーンをさしている。演説会場では通路になつてゐる会場内を通つて登壇、降壇するときは、近くは別として、二列目、三列目の遠くから身をのり出して握手を求める人が多い。街行く時は子供でも私は握手を求めることにしている。子供の人格を考えるとそれなりの反応ができる年齢の違いが感じられる。偏見先入見がないだけに成人よりも感じがよい。それに、子供達も、うちへ帰つたら家族で話題にするだろうと思う。選挙車で遠くにみえる子供達も反応がある限り、私の方から何か叫んでみたり手を振るだけでなく V サインを出したりして子供を沸かせることにしている。そうした意味で握手は楽しいものだ。

3月29日（日）

現時点での情勢

北九州で二日厚生年金会館に泊つての行動だったが、意外と燃えている感じだ。やはり売上税問題で火がついているやうに思える。首相は黙りこみ地方選の自民系候補は賛否勝手に



表明し、自民主脳は中曽根をはじめ、動きがあまりない。四月十二日の投票日までは寝たふりをきめこんでいるようだ。土井社党委員長は「中曽根は死に体だ」ともいっている（二十八日福岡での記者会見）福岡の状況は、社会党の小野参議にいわせると二〇と一五で当方が有利で、とくに二区と四区でのリードが大きいという。押せ押せの風をおこさないといけない。でないと、四月になったら自民党が大挙全国動員で福岡入りして物量と締めつけで押しかえされるだろうと見られている。だからその押しかえしが不可能になるほどにこちらが先に押ししておかないといけない。永倉が上京して中曽根に会い、金策、人策をやっているらしい。北九州では田中とすれ違ったが、二十八日田中は山城屋前での街宣で聴衆から「帰れ」とヤジられたらしい。でも彼らの側の動員力も小さくはない。民労協もごそごそとやっている。

3月30日（月）

握手攻めで手が痛い

今日は京築、田川、嘉飯、直鞍の各地区をまわったのであるが、そうした中で、やはり握手を求める人が多い。このことは前にも書いたが、今日は、その苦痛について書いておこう。私は今右手小指と左手中指の第一関節が圧力を加えると痛い。老人性〇〇〇というのだそうだが、握手は時に大きな圧力になる。とくに右手につき、男性が固く握手してくるときに「痛い」と感ずる。でも辛抱するしかないというのが結論である。握手をしない訳にはいかない。予防線をはるために、繃帯でも巻くといいが、これでは握手を拒むことに通ずるし、痛々しくみえて欠点となる。がまんできるところまでがまんするしかないのである。ところが逆に今日は子供との握手で感じたのであるが、子供は全く受身で握手し、固く握ることはない。私の方から固く握り返さないかといって要求することしばしばである。子供といっても、それが高校生あたりまで握りが弱い。遠慮があるらしいし、積極性が足りないともいえるだろう。小学校五～六年の男の子が「本物の奥田」とか「テレビそっくり」とかいうのが、かわいいし、面白い。握手のさまざま。

3月31日（火）

ご当地ばなし

各所の演説会ではご当地ばなしを必ず加えるということになっているので、北九州ではもちろん地域の活性化の話をした。工業試験場で昨年 CAD/CAM システムを備えたマシンングセンターをいれたこと。しかし地元中小企業との連携がいまだしであることなどをのべ、二月下旬に KMM でビジネス、インフォメーションふくおかを県がお世話したら地元企業から大変よろこばれたことなどを例にとり、要するに今後は、大企業に依存するのではなくて地元中小企業を足腰の強いものに育成する必要がある、そのための技術水準の向上、マーケット情報の蒐集の両面につき、中小企業が体質的に従来欠けていた点を県が中小企業を

相手としながらこれを補足していくことを商工行政の重点に置きたいと強調してみたのである。小倉、八幡の二箇所の政談演説でこの手法を用いたが、反応は上々であったと判断される。あと残すところ僅かだが、今後もこのことに注意して遊説に当らうと思う。こうした配慮が足りなすぎたことを反省する。田川の社保短、飯塚の情報工学部などいい。

#### 4月要記

ここ十二日までの福岡知事選をめぐる動きの全国レベルから見ての特徴には十分注意をする必要がある。売上税で中曽根首相は福岡に応援に来ることのデメリットを自他ともに認めて、その上に立っての、売上税をそれでもゴリ押しするために福岡での勝利を求めた戦術をあれこれ立てて、東京で指揮をとっている。自民の首脳をはじめ一六〇人ともいえる代議士、公明、民社の首脳を福岡に投入しようとしているのもそれである。公明の場合、なぜ田中推薦を行ったのか不可解とする地元の声もあるほどだが、こうした動きの裏では多額の資金が動いているように思える。上は首脳陣の動きから、下はビラ貼り要因に至るまで巨額のカネが動き、そのロボットの顔が街中の電柱に狂気のごとく貼りめぐらされている田中健蔵なのである。この陣営では、表面カネは動くが下部までは浸透するのに困難があるようだ。売上税がなかなか浸透させないのである。中曽根はそれでいて売上税は撤回しない。彼にとっては万策を駆使して前進あるのみである。挫折が近いとの確率も高まっているのではないか。

#### 4月1日(水)

春を忘れて

とうとう四月になった。もうハダカ麦の穂が出ているし、柿の葉芽も出ている。まるで五月に入ったようだ。桃は満開、梅は八分咲きというところか。でも近頃は天候悪く、今日も雨。気温はひる間で六度という冷たさだ。これが選挙にいくらか影響するだろうか。残り十日になって各地でようやく熱気がでてきた。今日夜の大野城市民会館では会場ほぼ満席一〇〇〇人はいたであろう。福岡市南部の四市一町の人達の集りであわせて久留米市に匹敵するであろう。マスコミも中央からの取材が表面にでてきた。福岡知事選が全国レベルの関心をひいているからである。「選挙でなかったら、これほどの大衆を前に県政の抱負を語るのは楽しいのだが」と私は宿(二日市温泉延寿館)に着いてから感想をもらしたのであった。いつもどう成り行くかが気になってしまう。だから花のいい時期に花をたのしむことのできぬのがいかにも残念である。レンギョウも満開、あちこちのモクレンもだ。睡眠がいつも不足しているため、選挙車に乗っていても一瞬ねむっているのに気付く。ただし今日は雨あり風ありで困難な一日だった。楽しくもあった。

4月2日（木）

福岡知事選の全国的な意義

夕刊を見ると中曽根が自民党三役を揃え、県財界関係者三五〇人を集めての朝食会で福岡県知事選への必勝を願っての檄をとばしたという。県に支店をもつ会社の本店関係者も集ったらしい。山崎や永倉が主訴していた、「もう一步負けている」し、「あと一息燃やさねば」ということである。売上税の話は出ず、そのことで中曽根が来福できる雰囲気がないので、この東京集会になったと解説してある。安川、福銀山下、石橋幹一郎、斎藤武幸など、新九州鉄道の石井社長、経団連の大槻らの顔も見えたらしい。又自民党は投票日までに一六〇人ほどの代議士を福岡知事選応援に投入するといわれている。まさにこの知事選は全国の政情を占う代理戦争化してきたといえる。その熱の入れようは異例とさえいえる。もちろん、国民も似た気持でみている。今日太宰府の駅前で私をはげましに車に寄って来た青年がいて、出身をきくと大阪だとのこと、代理戦争たるの一端がここでもうかがえる。私のあちこちでの集会挨拶も結びはどれもこの点にふれたものとなっている。報道各社も中央から人を派遣している。

4月3日（金）

県議選、福岡市議選の告示により情勢に微妙な変化が生ず

四月十二日の同日投票日に向けて今日福岡県、福岡市議の二つが告示になり、知事選とあわせて三選挙が重なりあって来たわけだ。田中陣営は相乗り候補が目白押しとなり、これをひたすら待っていたようだ。親戚縁者二十数人が手分けして各選挙事務所に相乗りにつけまわったようだ。一挙に得票の掘りおこしをしたようだ。これに対し、当方は沸き方が少ないというのが実感である。私自身いくらでも行く先はあって多忙だが沸き方のひろがり欠けるうらみがある。きくところによると田中は話が上手でないし、言っている内容も自信なさそうである。それでも心にもないこと、支離滅裂なことはいくらでも平気でいえる性分のような。売上税問題で風向きが悪いので、地域浮揚で公開討論会を当方に申入れたり、中曽根に泣きついて東京で昨日福岡県人会三五〇人ほど集めて朝食会を開き首相みずから福岡知事選最重点との激励会を開いたりしている。中曽根の福岡知事選来援は敬遠されているのが実態である。

4月4日（土）

中休みの一日

天神での私の演説は柔軟ですごくよかったと八丁君がいつてくれた。もう堅いのはよくないと思う。福岡と北京を結ぶ定期航空初便のテープカットをした。二十一世紀はアジアの時代といわれるが、福岡が西日本の中心として再び位置づけられるための基本条件がととのったことになる。大変なことだ。平和だから、当り前のことができたのだ。こんな嬉しいこ

とはない。この初便就航式に出席するためのことを含めて、今日は忙中閑のスケジュールになった。快晴で、今日明日が桜の満開という状況でもあるので、学校の休みもあって舞鶴公園など至るところ花見客でにぎわっている。選挙が酣ということだから私は桜見をしておれないのが残念である。原田広報室長が西日本新聞の調査として私に内報してくれたところによると、私の方が五%ほどいい。ただ最悪の場合は1%近くで逆転される可能性が残っているという。福岡地区では負けていて、二区四区でぐっと放しているとのことだ。最後まで油断はできない。

4月5日（日）

順風に乗れ

沢木氏をキャップとする小売業界が自民党に期限付き回答を求めているのに、何ら回答がえられなかったということで、奥田支持を決定したと朝刊は報じている。一四万会員をもつといわれるこの業界が売上税を撤回しない自民党に業をにやしてその推薦する田中を落とすためと称して反叛したわけだ。これはショッキングな話題である。そのためか、今日一日まわった福岡市内の空気は当方にとってはまさに順風で、気分は押せ押せという形になった。さきにはクリーニング業界、つづいて書籍業界、卸売業界、そして今回の小売業界である。三月中旬以降こうした従来の自民系業界の離反が次々におこりつつあるようにみえる。田中派又は自民は大量の大物を福岡に投入して業界の各個撃破に必死という。この攻防がどこでどう落付くかわれわれにはわからないし、従って油断はできないが、残された一週間を何とかこの順風がもちこたえてくれればと思う。

4月6日（月）

まだ楽観的でいられる

ともかく息のつくひまもないハードスケジュールをこなしている。これでよく健康が保てると自分でも不思議なほど。案外呑気なのかも知れない。イライラ、クヨクヨしないので助かっている。周囲がいうままに動いて割切っている。今日は自民党の竹下幹事長が私のコースと似たまわり方を筑後で三箇所やっていたらしい。きくところによると福岡の知事は思想が違うので、自民党推薦候補が勝利しないと九州全体のまとまりがえられないというような見当外れのことをいい、売上税については、国民に事前に理解を求める時間がとれなくて残念だったとの意味のことを演説したらしい。これだと日本をリードできる政治家ではないことがはっきりしている。今日の西日本新聞では福岡知事選の世論調査がでていて、奥田がややリードという。三割が態度不明なので、この部分がどう動くかが微妙と評している。又自民派の巻き返しと公明の動向がカギともいう。残りの五日間でどう流動するかである。

4月7日（火）

RKBにしてやられた三元放送

今日はむしろ当方の失点ともいうべき痛手を感じずる日であった。中国民航の上海からの第一便出迎え式を空港でやったり、その後の仲好旅館での休憩は時間的にもったいない感じがしたし、六時半からのニューオータニでの民航による祝賀訪日団の祝賀レセプション出席も選挙運動とくらべそうプラスといえないと思った。それよりは夜十時からの県民の会と田中側出張場所（古賀）とRKB本社の田中、奥田の政見三元放送は、当方の積極的のなさもあったが、完全に向うのペースに乗せられた放送になってしまった。県勢浮揚論、汚職問題、企業誘致論など向うのペースに乗せられた内容となり、当方から出していた売上税については逃げられ、逆に「共産主義」の宣伝をさせてしまったような形になってしまった。私はこれら内容のやりとりは向うのペースに乗る可能性があるので消極論であったのであるが、向うのペースに乗せられてしまって、後味の悪いものに終わったといわざるをえないものとなった。田中は共産主義攻撃が狙いであって目的を果たしたようだ。

4月8日（水）

選挙人側の燃えを感じずる

浮羽、田川、飯塚、嘉穂は過熱といえるほどに燃えていた。甘朝が今一つという感じだ。選挙民の方が私よりも興奮しているようにすらみえ、各地で沿道に出てくる人にふられる手も握りが強くて痛いが多い。中には「ぬるいじゃないか」という意味の怒りを私にぶっつける人もある。われ先にと握手を求めてくるが暇がなくてひとりの人から次の人にうつるのに、手放してくれなくて困る。ただし、それが人情の自然なのであろう。前回同様姫路から吉田君が来てくれた。こんどは黒川君と一しょである。クラスメートの寄せ書き（布）を県民の会に置いてきたという。私は出回っているので、今回は小倉の立会演説会場まで、今回は嘉穂の山根事務所まで来てくれたのであった。夕食をごちそうになりながら語り合っすぐのお別れであった。新聞の報ずる情勢分析なるものをみて、田中側が大変強いのに驚く。中央から要人が繰込み、企業へのテコ入れが進んでいるのだ。

4月9日（木）

精神的な動揺が何となく感じられる

久留米は三ヶ所を消化したのみで、急ぎ北上し、福岡、宗像、中間、遠賀の各地をまわり、夜は三度目小倉厚生年金会館に投宿という日程。朝からの雨で洋服と靴がぬれてしまい、着替えを取り寄せてもらおうという始末。篠栗や宗像その他高台の団地はひる間のためかほとんど反応が得られないし、毎日新聞には田中派の追上げがきいてきて互角又はそれ以上になったところがあるとの調査結果が報道されたりして、どことなく考え沈むことの多い一日ではあった。それでも夜の集会、中間や岡垣では聴衆が燃えていてかえって勇気づけられ

もした。今日は何故かいつもより眠く感じ、さらには腰の硬直さを覚えもした。一日終わってみると、あと二日しかないので、全く不安になってきたり、済めばやれやれなんだと思って安堵を感じたり、精神的な動揺が激しい一日だった。福岡の知事選が全国的に注目されていて自、公、民の敵方大物が続々来援している。売上税について過小評価する発言が彼らに共通しているし、公民の売上税反対は社共と違うとの主張が特徴的だ。

4月10日（金）

票読みはきびしい

蛭川君が NHK の知人から仕入れたマル秘数字では私がわずか二万票のリードだそうだ。他の情報では四%とか一〇%とかというのがある。四%なら一〇万票、一〇%なら三〇万票と推定される。大きな票差は売上税で県民の判断が雪崩的に私に有利になった場合に限られるので、それはあるまいと思う。二万票との読みについては、最悪の場合は逆転の可能性が残っているということでもある。緩みが出たらそうなる考える人は少ない。自民の側のテコ入れ又は締めつけがどの程度末端まで浸透するかは読みにくい。それほど気にしなくてもいいのではないかとも思うが、多くの人はかなりの影響が出はじめているとみている。だが他面、末端に浸透するには、四月に入って十日間では時間不足ではないかとも思われる。いずれにせよ今回の選挙ではそういうことが気になる。しかしとうとう明日一日というところまで夢中に走ってきたものだと感慨が強い。周囲は大変燃えている。

4月11日（土）

最終の手段

最終日、早朝から深夜までのおつき合いになった。寝不足がつづいているが、どうなってもいいという気にもなる。前回の選挙の時との反応比較をきかれても直ちに返答ができない。九時半、一切が終って後「敢闘式」があり、その際記者がカメラを向け感想を聞くのだが、「前回よりよかったのではなかろうか」としか答えようがない。ただ、現職の強みなのか、沿道での反応はたしかに手ごたえが感じられた。もちろん、それでも判定はできない。相手が物量できているというからである。ここ数日、私は個人演説会でオセロゲームを例に出し、「黒を白に」ということを最後の訴えとしている。相手が「白を黒に」しようとしていることに対応するしかないからである。ドンづまりの今日などは「天神フィーバー」のように、もう説法の段階ではなく、「燃やす」しかないので、燃やし役も必要で、これはオセロの話と違い集団で感動し合うのである。こちらはその点相手陣営に対し勝っていた。むしろ圧倒していた。前回もそうだった。行動様式の違いだ。

4月12日（日）

知事選勝利

投票に出発する姿から、当選で県民の会事務所に出頭の後支持者にもみくちやにされる姿にいたるまで、報道カメラの放列に攻められっ放なしの一日だった。昨夜の天神のフィーバーといい、今日の当選祝支持者の県民の会事務所内のひとだかりといい、興奮の連続で、文字どおり筆舌につくし難い光景がつづいた。求められるままに私は動くのだが、実感が湧かない。握手を求められ、もみくちやにされて汗ばんだ。それに疲れもした。よく味わってみると田中健蔵に勝てたのが何よりの慰めになる。二〜三ヶ月後に知事をやめてもいいとすらいいたいほどだ。あんなのに負けてたまるかというのがいつわらざる気持である。それに、中曽根が特に力を入れて福岡を重視したから、中曽根にも勝ったといえるので、これも嬉しい限りだ。福岡知事選に勝てば中曽根内閣に痛打を与えるとの一般の評価があるだけに、この勝利は歴史的な意義があるともいえるものだ。

【欄外記入】

0時30分 開票 100%

田中健蔵 1135196 (47.3%)

奥田八二 1263123 (52.7%)

計 2398319 (100%)

4月13日（月）

マスコミに翻弄されたが気分は爽快

早朝から放送録画要請に応じ、くたくたにされた。昨夜寝たのが二時で、今朝起きたのが六時、全くねむい一日だった。報道陣の要請に甘すぎるのではないだろうか。一ぺんに共通でやってくればよいのに、一カ所で各社別々次々にやるとか、何カ所かはわざわざスタジオに行くとか、される方がたまらない。それにしても各社とも当確をうつのは、たいへん早くなった。情報処理技術がとても発達したらしい。又、どちらが当選するかによって録画の内容に違いがでてくるし、当確が早く出ればそれだけ番組の順もかえねばならない。反対の場合も又そのようだ。応対にテンテコ舞いするのが当然のようだ。今回の場合、全国的にみて福岡知事選は注目されていたし、激戦といわれていただけに各社はたいへん重く対応したらしい。マスコミには私見をのべなかったが、こんどの選挙では売上税問題を中心に、私の福岡における勝利が、中央政局に大きな影響を与えること必至だから、田中をやっつけて中曽根を叩くことができたという気持で、取材に対し気軽に応じたのであった。

4月14日（火）

敢闘祝賀会

しばらくぶりによく眠った。たくさん電報が来ているが、この祝電は一々読むのが面倒である。百通以上一括して読めるように誰かがしておいてほしい。今日は三つの会があった。一つは奥田事務所問題をふくめ、第二期奥田県政をどう特徴づけるかという協会メンバーの

討議であった。二つ目は大手門会館での県民の会の敢闘祝賀会。県議も福岡市議も当選者がずらり顔を揃えた。活動家が二〇〇人ほど集ってわいわいやった。私はこれらの人々に筆舌につくし難い謝意をのべた。中曽根に負けてなるかということがみんなをふるい起たせたことを意識していた。今日の国会では、中曽根首相は売上税は撤回しないと答弁したが末期的にすらみえる国会状況である。三つめは県の次長クラスの祝勝慰労会で、巳千代での会合。知事選にとくに力を入れてくれた者が十人ほど飲みながら互に慰労し合ったのだが、頼りになる面々であった。

4月15日（水）

東京の人も私の顔を知るようになった。

東京での当選御礼まわり。総評、中立労連、社会党、共産党など。これに逆らうように、今日の国会予算委員会では六十二年度予算案が強行採決され、政局は一転急迫し、ゆくえがにわかには読めるようになった。中曽根内閣の末期症状が明らかになったともいえる。東京では私の顔がひとにわかるようになってきているのに気付く。ハイタク協会の人々のデモの中から（売上税反対のノボリ旗をもった人達）車に乗っている私に手を振る人がいたのでこれにこたえて私も手を振った。道の向う側を反対方向に行くのによく車中の私が発見されたものだ。又羽田空港では福岡の者ですがと名のる青年がおめでとうと握手を求めてくる。さらには、いろいろあいさつまわりをするのに通過する事務所の受付嬢たちが、おめでとうの会釈をする等々。やっぱり福岡知事選は全国から注目されていたし、私の顔もテレビなどで全国的に紹介され人々の印象に残るようになってしまったことがわかる。これからは東京でも行動に注意しなければならないとの自戒心が湧いてきた。

4月16日（木）

敵愾心を秘めて

一日中マスコミ各社へのあいさつまわりに時間を費した。こんなにしなくてもと思いつながら秘書室の作った計画どおりに又分刻みの日程を消化した。マスコミの中で共通のいい分は、奥田が県民党の仮面をぬいで左傾化するのではないか、そうならないようにということと、財界とのコネを改めて強めてほしい、そして福岡の浮揚、九州のリーダーシップをとってほしいという点にあった。余分の心配だといいたいが、そうかそうかときいておいた。こうした杞憂の裏には、一つには私の考え方に対する理解が依然ないということと、二つには田中を推す考えがまだ根強く残っていて敗北の悔しさのゆえに、これから四年間、辛抱する条件として新たに知事に注文しておこうとのこんたんがある。もっと素直に私を理解してくればいいのにと残念でならない。敗北のあとあいさつに行った田中に対し、中曽根が「捲土重来」と励ましの言葉を与えたというのが、敵愾心むき出しにするのが、かえって保守なんだということがこれでよく証明されるだろう。



4月17日（金）

選挙演説が三段階に分けられる

私の選挙演説には前、中、後と三期に分けた力点があった。前半の頃は、四年間の実績、今後の方針、売上税への態度の三つに分けて説いていくというやり方。中期になると、福岡県勢の浮揚の具体的対応策と売上税がそれにいかに妨害になるかという点にしぼったのであった。つまり、実績やその哲学は省略するようになった。そして終期になると、売上税ひいては国政の行方が福岡知事選に賭けられているということ、全国目が福岡に注がれているからそのつもりでたかひ抜こうとの一点にしぼって話した。そういう話し方の特徴が今、ありありと意識にのぼってくる。今夕迎陽亭でマスコミ記者数人と広報関係出納長などの懇親会の席上、私はこのことを披露しておいた。三段階に変化していかざるをえなかったわけである。ところで昨日の済生会病院での血液と尿との検査結果はかなり悪いとのこと。後日の対応が必要のようだ。

4月18日（土）

石狩山荘会談

午後石狩山荘に集まって第二期目に臨む諸課題について、思い思いのことを出し合った。自治労県職の橋口、山本、県評の岩崎、松田、秘書の森山、杉山、広報の安達、あとから来た林出納長などであった。共産党の県議が五人になったことについてメリットデメリットがあるとか、人事は思い切ってやれとか、協会系の県議も五人になったとかいろいろ雑談に花が咲いた。副知事、部長、課長などまず主要ポストについては注目が集まるだろう。組合人事といわれなくないようにしなければならない。林県議が、新県議に早速ながら与党化工作を行っている模様で、議会運営について自民党もやや柔軟になるのではないかとされているので楽観ムードがあった。私の方からは社会党や労働組合側（とくに教組）の柔軟化問題を提起し、さらに選挙中に地域で約束した数点について早速二期目当初から実現に努力する旨いっておいた。

4月19日（日）

金権の中でのしてきた田中健蔵

今日は一日休み。筆をとっていたが、九大事務官の本田敬鵬氏と安田伊三男君がやってきた。本田君の話で、田中健蔵が九電永倉から約四〇億円ぐらいもらって九大の裏経理を作り、好きなように人を動かしていたことが始めて私にわかった。彼のつとめている春日キャンパスでの原子力発電関係の研究に裏金を出したり、アメリカや中国行きを自分でも、九大教授でも、やや人目につくほど派手にやっていたが、それも裏経理を使っていたらしい。自分が学長になるについてどのくらいどうしたのか知らないが、今の高橋を学長にすえるためにも、かなりカネを動かしていたようだ。そのために事務官の枢要をにぎっている部分には反

対がないようによく抑えていたらしい。今度の選挙公報ビラなどにも行政手腕があるとか春日キャンパスを整備したとか宣伝していたが、そう書きたい面があった訳だ。国際交流にも寄与が大きいと宣伝していたが、その裏もあった訳だ。私はなぜ彼の陣営がこんな宣伝をするのかわからなかったが、本田氏の話でつじつまがあうように思えてきた。

4月20日(月)

奥田事務所維持費

西日本新聞が六月上旬の九州地方知事会の折にサミットを昨年に引きつづいてやりたいと申し入れてきた。場所は熊本である。熊日新聞もNHKもこの企画に入るといふ。そう実りのあるものではないが、他県も応ずるようだから応諾することになった。当方には他の用件もあるので、ヘリコプターを利用せざるを得ない。奥田事務所維持について十七日に八丁、高崎、衣笠が来て念をおしていたが、背景には四月七日のRKB三元ナマ放送の際に田中発言をめぐり八丁君が大そう憤慨し、岩崎に面罵していたが、それが二人の仲を決定的に悪くし、岩崎の方から八丁が主宰する奥田事務所のカネの面倒は見ないと態度硬化をもたらした。それで、十七日に私に事務所維持費の拠出の意図ありや否やをさぐってきたようになっていたらしい。森山が今日暗に私にそれを告げた。月給からは出せまいが、退職金を充てたらいいといっているようで、このことにはみゆきは反対の意を表明している。

4月21日(火)

永倉に面して

日中国交回復十五周年記念祝賀訪日団のレセプションが六時から広州酒家で行われた。日中友好協会福岡県の主催であった。団長の王震、副団長の袁宝华、孫平化ら二十二人とこの構成員で、参加者は一五〇人ほどあったろう。松本英一会長はじめお歴々がたくさん参加していたが、永倉、桑原、末吉、進藤も福岡側の参加者であった。進藤前福岡市長は乾杯の、末吉北九州市長は中締め乾杯の音頭をとった。私と永倉と桑原が祝意をのべた。宴に入って末吉は孫氏をはさんで私の隣にいたが、当選おめでとうと心ならずも発言したので、初登庁のあとであいさつに行く旨伝えておいた。それっきりモノもいわなかった。とくに永倉は私の斜前同じテーブルにいたが(中に三人おいて)ジロジロ見ながらも双方モノをいうのを遠慮した。いいようのない敵意がこもっていたのだが、気持は相手も同然だったろう。いわなくてすむならそれでいいと思う。がこうして向い合うとバツが悪いものだ。

4月22日(水)

東尾修投手、美空ひばりさん

今日は珍しい二人に出くわした。平和台球場に試合に来ている西武ライオンズの東尾投手と歌手の美空ひばりさんである。東尾は秘書の古沢がセットしてくれて彼の宿舎である

東急ホテルの一室を借りての面接であった。うちを出るとき色紙を一枚用意して託したのだった。和歌山有田に住む甥の向井清の嫁の筋にあたるということで四年前の私の知事当選に際しても鯛を祝いに贈ってくれた。彼の奥さんは東中洲でポポロという名の飲み屋を営業しているというが、私は行ったことがない。スポーツをしているだけあって肩幅広く、顔色のつやがよいこと、有名人だけあって又マナーがよいこと、感心した。一昨年 MVP に選ばれた時、ニューオータニで祝宴があつて招かれ行ったのを思い出す。美空ひばりさんは腰骨を痛み、公演をすべてキャンセルし、東京での人目をさけるため、上杉氏（弟の方）の世話で済生会福岡病院に入院してきたのが、丁度私の点滴と昨日ぶつかり、今日私が彼女と面接できたわけ。一カ月の加療は必要だとさく。

4月23日（木）

初登庁と国会における売上税法案攻防の勝利

九時半に初登庁。二期目の「奥田県政」がはじまった。一期目と違って、もっと思い切ってやるべきはやれというはげましの言葉をくれたのが、午後就任あいさつに行ったベスト電器の北田会長であった。登庁の時は祝福の大勢の職員が副知事を先頭に出迎えてくれ玄関までの通路、玄関ロビー、ピロティのサジキまで一ぱいだった。記者会見も注目され私の二期目への抱負を述べる言葉は一つ一つのがさずにメモされた。感慨はときかれ「よろこびよりは責任の重大さを痛感する」といった。そして北九州や大牟田の衰退に対応せねばならぬこと、とくに中小企業地場産業の育成の重要性を強調した。しかし、それと同時に内心ぐっと引きしめて思ったのは、選挙戦で田中健蔵に勝ってよかったということだ。夜十時頃のテレビでは、国会で与野党の合意が成立し、混乱国会に終止符がうたれ、予算案を通すかわりに、売上税法案は「議長預かり」となって事実上の廃案に持ちこまれたといわれるが、これも福岡の知事選でわが方が勝ったからで、全国的、歴史的な意味をもつ知事選になったわけで、これが何よりも嬉しいことなのだ。

4月24日（金）

新段階に入った

平井重太郎氏を訪ねた。今度の選挙ではほんとうに親身になってやってくれた。私の揮毫した扁額が立派に出来上っている。平井氏は、四月に入って田中派が巻き返しに出た時一時は危いと思ったという。中曾根が全力投球に入った時である。田中自身つねに勝利を念頭におき確信をもっていたようだともいっていた。山崎拓もそうだったようだ。しかし平井氏は、田中派は下部に浸透しなかったこと間違いないともいった。田中は選挙事務所から指図するようなことも敢てしていたらしい話も出た。永倉、末吉をはじめ、今日も就任挨拶にまわったのはほとんど田中派だった。歯科、薬剤、医の三師会にしてもそうだった。二商工会議所も同然である。しかし、篠田栄太郎が昨日からそうであるように、田中派の誰もが負

は負とはっきり認めた上で、新しい事態に対応しようとしていることは共通している。ただ西日本新聞あたりが未練がましくみえる記事を書きつづけている。昨日今日の挨拶まわりで、事態は明らかに新局面に入ったことがわかる。

4月25日(土)

無意、無常

よどがわが一番いい時期になった。東公園の亀山上皇像のまわりは知事室から見ても今が美しい。西公園もさぞかしよかろうと思う。先日谷公園に入ってみたがよかった。うちの藤がいままっ盛り。丁度土曜日でもあるので今日ときめておいた選挙の打上げ会が、ついでの藤見会にもなった。はじめ石川と蛭川を呼ぼうと申出たら、ウグイス嬢二人、秘書室の女性四人も加わり、秘書室長、森山、中尾、佐々木も来て午後は拙宅大にぎわいになってしまった。負けていたらそうはならなかったと思うと、世の中、流れというものは無常といえそうだ。それにしても知事室から東公園をみていると、人の流れ、車の流れ様々あるが、みんな無意無常にみえる。それぞれが言葉を交わし、意図をもちその方向に動いているようだが、日蓮さんの像の周辺に群がり飛び立つ鳩と一寸も違わないように見えてくる。今日わが家に集った人達も所詮は鳩の群とどこが違うのであろうか。

4月26日(日)

閑中揮毫

一日休みとは全く久しぶりである。でも留守番を仰せつかったというので昨夜から森山、蛭川、杉山の三氏がリレーで側についてくれた。揮毫に時間を費し、その余はあちこち掃除した。どこにもほこりがたまっている。限りなくたまっている。置物は多いが、どれも小さなゴミをかぶっている。気になるので少しずつ掃き取ってみる。家の中にあつて、空気中の微小なごみが、全く一様に降り積るのである。こんなことが問題になるのは閑中ということなのだ。揮毫でもしないと、今日のような状態になると時間の使いようがない。選挙中に私も少しは頼まれたが、他の人達も、選挙が済んだら頼んでやると請負ったのが他にも相当あると杉山氏は言っていた。五月の連休のどの日にか又一ぱい書かされるに違いない。今日は六〇枚ほど色紙を書き、条幅も扁額も四、五枚仕上げることができ、すべての宿題を終え、若干のストックもできるという余裕ぶりだった。

4月27日(月)

保守、財界の私を見る目がかわってきた

今日で県内主要箇所の二期目就任挨拶は終わった。一期目は偶然だとの見方が強く、保守財界側の反撥、二期目への奪還意欲も働いて、どうしてもぎくしゃくがとれなかったが、今回は一応現状是認の上で対応しようとの空気がいたるところで感じられた。二期目はツノつき

合わせていても仕方がないということであろう。六月議会は明けてみないとわからない面もあるが、まずは正常に動きはじめるのでなかろうかと思える。但し、共産党が五人になった県議会で、うまく転がしうるかどうか逆に関心になってきた。筋論で押してこないとも限らないからである。支持者側から、四年間に積っていた不平があってこの際という空気がある。職員の給与問題、周りのことでは八丁君、島野君、ブレーンをおけという声など、処理は決してかんたんではない。又、八丁君のいう奥田事務所も維持は今後容易ではない。八丁君が中心に坐るようなブレーン体制には反撥が強いし、彼自身はそれに執念をもやしている。

4月28日（火）

東京後援会事務所動く

東京で奥田八二福岡県知事後援会が選挙中にでき、高橋正雄氏が名誉会長となり、今日六時から池の端文化センターで「励ます集い」があった。県評の役員もかけつけてくれたし、総評、中立労連、社会党、社民連、サラ新の主だった人物も加わってくれた。二〇〇人ほどの集会になった。土井委員長は遅れて参加、山口社会党委員長、小野副委員長も来た。サラ新青木、社民連檜崎も。そして岩崎隆次郎氏は裏方に徹してしてくれた。福岡の知事選が売上税粉碎の天王山だったことをみんな認め合いその勝利をよろこび合ったのであった。各労組は選挙運動の資金源になってくれたし、福岡に向けての運動員派遣もやってくれた。主要人物が来福し陣頭指揮してくれたのは勿論である。総評議長の黒川、県評の松田（留）次長らも私鉄の春闘方針変更までして福岡の知事選協力をよろこび合ってくれた。自治労では福岡出身の者も含め、町村にはりついて票集めに協力し、町職員平均三〇票目標を達成したともいっていた。東京後援会は今後総評総務局内におき、吉田秀雄氏が担当という。

4月29日（水）

岡茂男氏を訪問

休日ということで、東京での過ごし方は岡茂男宅と三木武夫宅を訪ねることで決着した。啓二や直美に会うのも一案であったが、面倒でもあるので断念した。岡氏も子ども達が成人して夫婦二人切り。武蔵大に特別教授として、学長退任後は静かに自適の生活を送っているという。昨日は奥田後援会の励ます会に高橋正雄氏と共に顔を出してきてくれて、その時に今日の予約をしたのであった。一応の勤めが終り、子供達も育てて出て行ってしまえば、何だか人生目的を失って気が抜けたようになるのではないかと試してみたりする。彼夫婦はインドネシアのバリ島旅行をしたという話が出てその地の土産物など説明してくれた。遠矢政己氏の話も出た。遠矢が岡氏を慕ってよく出入りすることは私も知っていた。彼の死後、難波氏か誰かが遠矢の葦の絵を集めようとしていたのだが、岡氏には何の連絡もないという。私は今知事という激務があって多忙。岡氏は暇があるらしい。

4月30日（木）

国会議員、各省庁への知事就任挨拶まわり

組合としては自治労と私鉄、各国会議員、そして各省庁の大臣、次官、長官につき、知事就任の挨拶まわりを行った。歩いて歩いてほんとうにくたくたになった。多くは不在だったので、名刺をおいたにすぎぬことが多かったので、予定どおり全部消化することができた。RKBが、ふくおか会館で朝食をとるところ、自民党の国会議員を訪ねるところ、通産省や大蔵省の大臣を訪ねるところなど追っかけまわしてカメラにおさめていた。夜福岡空港に着いたら運転手の是松さんが、六時の放映で長々やっていたよという。一緒に行っていた中村室長が、知事の挨拶まわりを県民に知らせてくれるなら有難いことだといっていた。RKB記者は「中央との太いパイプが必要だから」といういい方で私の声をとっていたが、これは勝手な解釈というものであろう。訪問した相手はほとんど留守だったが宮沢大蔵大臣とは会うことができた。売上税の法案が廃案というような結果になったので一寸バツが悪そうだったが、双方ともとくにこだわったということでもなかった。

5月要記

この五月十四・五の両日は改選後の第一回臨時県議会が開かれ、議会の役員の構成が決められた。議長は自民の中村忠和氏、副議長は社会の林武彦氏、これは自社の話し合が基準になったものようだ。四年前とくらべると空気はかなり違う。公明党あたりはこうした自社による議会運営には若干不平があるようだ。十五日には常任委員会の構成と委員長長の決定もおこなわれ、ここでも自社の話し合が頭を出している。今後の議会がこのようにしておだやかに進められるならばよいのだが、ことほど左様にスムーズにはいかないかも知れぬ。ただ全体としては柔かムードが前面に出ている。こうした時に、職員組合などに関連して残っている懸案が解決されるならばと期待するのだが、甘いだろうか。社会党が実質二〇人、共産党が五人、まだまだ与党少数だが、ムードがよければいい。共産党や労働組合の無理ないい分が噴出しなければ、大抵はうまくいくだろう。

5月1日（金）

県幹部の異動

福岡・小倉の両メーデーは傘をさしてのあいさつになった。今年は雇用減がいたるところで行われ、春闘も賃上げ水準は過去最低といわれるほどで未だに決着を見てない組合もあるほどで、意気のあがりにくいメーデーではあったが、統一地方選挙の結果良好だったので、沈滞という空気ではなかった。雨のため皆んな出そびれただろう。県では幹部の人事異動発令、知事訓示を行った。私は職場の活性化ということで義務感・使命感を中心に話した。一風かわった訓示だったとの評判である。夕方、秘書室長交代のため、旧新の永田と中村が来宅した。新しい永田はかなり活動的に采配をふるうだろうと期待している。今回は大幅とい

えるほどの異動だったという。今日講堂で辞令を渡したのが二六一人だった。足が棒になるほどの立ちづくめなのである。県職員がマンネリズムから脱却してくれることを切望している。幹部が若返ったということもいわれている。

5月2日（土）

地域懇の閉鎖について

木梨弁護士と赤坂事務所で落合って彼の話を書いた。地域懇はもう息切れしそうになっているので近々閉ぢたいというのである。彼は地域懇は奥田がはじめたものだし、二期目当選がなかったら又奥田が地域懇の息を吹きかえすかも知れないが、再選されたのだからもう続けることはできないという考えをもっているようだった。五月末か六月はじめに閉会の集まりを開きたいといっている。私にしてみれば、続けうるなら続けたいし、続けるに必要な話題はいくらでもあると思っているのに意外なことをいうものだと印象を受けざるをえなかった。地域懇の趣旨が私と他の人とではかなり違って理解されているようでもあるのだ。赤坂事務所の存続のこともあるし、人材さええられるならば、赤坂事務所でこそ地域懇の仕事を継承発展させてもいいと思えるほどである。県政でいう「地域の活性化」というテーマなど、地域懇の無限のテーマといってもいいのではないだろうか。これは今後の宿題としよう。

5月3日（日）

どんたくの一日

風が強く、寒い一日だった。どんたくのパレードは冷え込んだ。風邪をひかないかと心配した。でも辛うじて雨が降らなくてよかった。今年も二四〇万人の人出でにぎわうといわれている。宮崎や沖縄からもかなりまとまった人数で出し物への参加があったようだ。祭は福岡市ほどの規模で最大級のものとなる。市民が共感をもつイベントがあるということはよいことである。知らん顔をしている人も少なくはないが共通の感覚をもつ人がかなりある。地域の一つのまとまりがえられ、活気が湧く。商人の町らしくこのことで利益を得る者も多い。食べ物をはじめ、写真関係その他、確実に売上げが多くなる者はホクホクだろう。パレードや出し物で同じ服装をするのだから被服や小間物もよく売れるだろう。再来年は福岡市制百周年記念のアジア太平洋博が六ヵ月間も展開されることになるが、今年と来年のどんたくはその前ぶれとして位置づけされ、市当局もその点はり切っている

5月4日（月）

行き詰まることが解決のいとぐちになる

藤江君にサービスしてもらって一日を費し、有田の中西宅へ行った。彼の両親が病床にあるときいて久しかったし、娘さん（ゆみ子）が九大文学部に入学できたときいて何の応答

もしてなかったので、休みを利用して前から行きたかったが、果たし得たわけだ。ドライブは渋滞ばかりで時間がかかった。連休だから車々の列で行楽ブーム。有田は陶器市、長崎はオランダ村が二〇二号線を一ぱいにした。有田まで行くのに四時間もかかったが、鉄道なら半分で行けたはず。人はこういう時に目的、手段、効果がちぐはぐになることに気がつく。有田で陶磁文化館に行くのに徒歩の方が早かった。それでも人は車を捨てないでいる。道路を拡幅したらという解決策もあるだろうが、こういう問題はどうにもならないことを知って、悟った点で、車以外の手段とか、レジャーの過し方とかを変えるようになる以外にはないのではないかと思う。道路政策の他との接点も、その辺にあらう。道路問題に限らず、若い者が音響器具や映像文化、通信電機器具にのめり込んでいる姿を見ても、更に今日の財テクブームを見ても、行き詰まって気づかせるほかに解を求める空気は出てこないのではないだろうか。

5月5日（火）

もっと同窓生に会うチャンスを作ろう

岩崎友四郎が先日ハガキをくれて、選挙に勝ってお目でとうとうというのと同時に四〇余年前の二人の仲を考えたのか、とても信じられないと書いていた。私が二期目の県知事だなんて事が学生時代をどうひねって考えてみてもそうは思われないうことのようなのだ。五〇年近くも会っていないとそう思うのも無理はない。お互いに二〇歳代前半のうら若い男だったのだから、その後の成長についての情報を観念的にしか考えられないわけである。だから私はいつか東京に行った時、暇を作って彼に会ってみようと思っている。岩田（すでに没）や浅尾は私が知事になってから会っているがそれ以外の姫高同窓は文乙の菌村しか会っていない。岩崎は九大時代の学友だが、同じようなのには他に会っていない。いずれにせよ今後は東京、大阪などで同窓にもっと求めて会う方がよいと思う。明日の上京の折に岩崎に会えるならと思ってアドレスをひかえて行くことにした。

5月6日（水）

地公労関係者の処分和解について

新旧の地労委委員に対する知事招宴がグランドホテルで行われたが、席上前会長の三苦氏から公務員の処分問題に付、組合側から訴訟取下げが行われるよう知事から働きかけてくれるよう挨拶があった。四年前初当選以来私に負わされた重要課題ながら、三苦氏もいわれるように、野党多数と過去の経過からして、そして特昇制度がないという現状からして、これは中々困難な問題であるようだ。両政令都市の反応もよくないし、県でもその解決に失敗した経過があるようだ。それに、二期目に入ったばかりの知事が先頭切ってこの問題に口火を切るのは、全く不得策なことに違いない。私は今日の宴席で、公益側委員の誰かが奔走し、地労委の方から再度改めて口火を切ってくれないかと頼んでみた。ただ適任者がいそうに



ないことも事実である。これが解決は福岡県だけが残されているようだし、関係者に怨念ともいうべきものとして残っているのが事実である。

5月7日（木）

白島計画の変更はできないか

石油備蓄基地白島の工事が進捗している中、二月のはじめの突風で、ケーソンがひっくりかえって一〇〇億円も復旧にかかることになり、今は工事がストップしている。この問題で、白島から対岸の響灘の埋立地に移すべく工事計画の変更はできないのかとの発想で先般来大坪企業管理者に下調べしてもらい、今日の白鷺会のキャピトル東急における朝食会では出席の左近友三郎氏に、ついで中食を共にした河本敏夫氏に意見をきいてみたのであった。左近は共同石油の社長だから、もうちょっと調べて返事しようといい、河本氏は響灘換地が可能なら、誰にもキズつかぬような進め方で事が進むのであれば考えて差支えないだろうとのヒントを得ることができた。白島問題は私が前回知事就任時からとかくの醜聞がまつわりついていたもので、今回の突風被害を機に、石油をとりまく国際環境もかわったことだから、もっとすんなり北九州市のためになるよう解決してくれたらよいと思っている。

5月8日（金）

政治の裏

福岡の女性会議の人達が夜日本浪漫座で会食し、われわれ夫妻が加わった。席上私は昨日の河本敏夫氏の「奥田当選は自民の恩人」論を紹介した。つまり、田中が勝っていたら中曽根は売上税で暴走し、国内が反中曽根で湧き立ち、総選挙に追込められ、結果は自民党の半減ということになっただろうに、奥田が勝ったので、奥田が自民の恩人なんだ（春秋の筆法で以てすれば……）というのだった。同じあの日、竹下幹事長に会ったのだが、竹下は鳴崎譲との姻戚関係をのべた上で、私に、四年前のお布施事件にふれ、自分は西本願寺の門徒総代をしているが、あの事件のようなことはよくあることだともいったのであった。つまり、あの事件は「奥田おろし」のためにデッチ上げられたものといわんばかりの説明をしたわけである。後藤田はあくまで悪い奴で、当時の県警本部長酒井は出世したいばかりに操縦され、事件を仕立てた奴であることも明らかである。今日、八丁氏から耳に入ったところでは、前苧田町長でいま衆院議員の尾形智矩は近く逮捕されるかも知れないとのこと。税金の不正使用で。

5月9日（土）

選挙の後仕末

選挙のあと仕末の仕事が延々とつづく。今日は北九地評の敢闘式。考えてみれば共産党県議が二人から四人になった北九では、この方面の意気は上っている。社会党でも危ないといわ

れていた人すらトップ当選、高位当選を達成している。市長選で八万票負けたのに、知事選では四万票近くも勝ったのである。福岡市では負けたのに、北九でぐっと票を引きはなしたのである。みんなよくやったと感動している。だから勝利へのよろこびは北九では殊のほか大きい。敢闘式は選挙後一ヵ月近くもたった今日にのびたが、それでよかっただろう。私は小倉南区のスーパーマルヨシにも案内され吉田社長ら幹部の並ぶ前でお礼をいった。彼らは若狭県議ともども勝利への道をひらいてくれた人々だ。保守、革新ということではなく、気持の通い合いで勝利にもっていつてくれたのだ。選挙のお礼としてはまだ色紙書き、礼状書きなど、私にとって多忙な日常の中でどっさりすることがまだ残っている。気がかりだが少しずつやりとげていかねばならない。必ず仕末をしていこう。

5月10日（日）

運動体の中で県政に対し積った疎外感のはかせ方が問題だ

夜は四時半から十時頃まで、大坪、名田、山本、岩崎の四人が来訪して意見を出し合い、ウイスキー、スシをとって最後は名田、岩崎を加えたマージャン会になったが、この四人にとっては久しぶりにガス抜きになったようだ。反八丁ということでも一致し、政治的な積る要望を知事にぶっつけるという形になった。社会党の竹村書記長を知事はもっと利用してくれというのが眼目であった。又他面、県は政治秘書を抱え込んでもいいではないかとも主張した。彼らにとっては県政の中の政治的視点がほとんど外に連絡のないままに決着づけられてしまっている点に、そしてあったとしても八丁君が表に立って受けとめて独り占めに終っているという点に、さらには林県議に、利用されるという形で処理されてしまうことが多いという点に不満があるようだ。もっと他面からいうと、自分達を使ってくれて然るべきではないかということなのである。疎外感をもって見ている彼等であるから、今後は県政に近づける必要がある

5月11日（月）

マスコミが作った土俵の中での対話

時事と西日本の二紙から、二期目の県政の展望に関する取材要請を受けてこれに応じた。西日本の場合、滝口編集局長との対談という形をとったが、予定質問があり、予定回答が既にあって、その上で私が質問に対して答えていくという形をとった。新聞社の作った枠組みの中で、仕組まれたストーリーとして応答していくのである。「中央との太いパイプ」「県勢浮揚」「財界との対話」など彼らの好きなフレームがあってその中に私を入れていく。私はこのように作られたフレームは好きでないのでできるだけ逃げ出そうと努力する。「保守と革新」についても同様である。ただ、こうしたフレームが一般にはわかりやすいのであろう。私の「対話行政」「開かれた県政」「地方自治」というようなことは相手の耳には残らないようだ。聞こうともしないといっているし、どうでもよいのであろう。マスコミが自分の土俵

を作ってそこに相手をあがらせるという常套手法は私は好きではない。商売したいのだからということはあるが、好きではない。ただ、それでも笑顔で応待せざるをえないところがつらいわけだ。

5月12日（火）

「ヤッタ！」という叫びは何を語っているか

福留君らが中心になって今日の夜 KKR はかたで「奥田知事と語る九大有志の会」を開いてくれた。中味は教養部の現役・OBによる知事選勝利祝賀会で、これに、法、経、工などの人達も少し加わるというものであった。教官が中心ではあったが事務官 OB もかなり集ってくれた。七十五人とか。工学部の森祐行も来ていた。かわるがわる演壇マイクを取っての祝意表明があったが、ほんとうにみんな心から祝ってくれているとの実感があった。それに、売上税の原案を廃案に追込んだという歴史的な意義もみんな共通認識としてもっていることも確かだった。多くの人がいうように、当時の感激は当確が出て、「ヤッタ！」と叫んだ、それである。私はこの「ヤッタ！」をこまかく解説してみるのは必要なことだと思っている。田中陣営では今日浮羽の県議大石がいったように「しれッ！」としているのに対し、奥田陣営では沸いていた。これは共通感覚である。ところで今日の新聞では田中は県庁近くに事務所を構えたとのこと。次の参院選か知事選か？

5月13日（水）

プロ球団誘致は絶望か

八時一〇分の TDA で上京。午後十時に筑後川温泉の新泉荘に着くという旅の一日だった。東京では読売の小松社長に会い、プロ球団の福岡誘致について意見をきいたが、セリーグに新たに二球団作る手しかないし、そのハードルは地元がカネを作る努力と既設球団を説得する熱意がなくてはならないとのことであった。このようなエネルギーをどこに求めるかとなると、ハタと当惑してしまう。福岡の青年会議所は世論としては頼りになるが実力が無い。財界はライオンズを手放す時がそうであったように、まだまだ今でも冷淡である。私は二期目の就任にあたっての記者会見で、県民が共同で何か燃えるものがほしいといい、一例としてプロ野球をあげたのであった。小林社長に今日改めて打診してみたのもそのためであった。新球団のもう一つは四国ではないかとの意見もあったが、こうしたハードルは少々の努力で突破できそうにないと思う。それでは結局諦めるしかないが、ここに来て、ライオンズを手放す時の財界、知事、市長らの努力のなさをかえすがえすも残念に思うのである。

5月14日（木）

二期目スタートの県議会

今日明日が新役員選出のための臨時県議会である。二時になってようやく開会されたが、議

長には自民党の中村忠和、副議長に社会党の林武彦が選ばれた。自社の話合いが奏功したのであろう。中村の方は五人になった共産党が反対したのであろう。林の方は満票であった。私にとっては二期目の最初の議会ということであり、実は一期目とくらべ緊張感が全く違うのが特徴であろう。与党が一八から二五にふえたのでかなり改善されるであろう。尤もそれでも与党少数に達しないので波瀾はないとはいえない。けれども与党側には勝利感がある。意気揚々たるものがある。逆に野党側には負い目があるように見える。こうした感じでのスタートであるから今後の対応を柔軟にやれば、一期目とくらべはるかにうまくいくはずである。予算編成が厳しい条件下にあるという点は依然障害であるので緊張は避けられないが、自粛につとめて乗切っていきたい。林副議長という利点も一年だけながら期待がもてる。

5月15日(金)

工業試験場問題化

大塚商工部長らが県の工業試験場の現状等について午後かなりな時間をさいて説明してくれた。大坪前商工部長も、福岡県の商工部予算が全く少いことを指摘していたし、県の商工行政のおくれは前々から問題であった。なぜそうなったかについては構造的なものがあるかと思う。重厚長大型に偏した福岡県の産業構造に加え、親企業と下請関係でそれが保持されてきたというのが決定的であろう。下請企業は親企業のいいなりになって仕事を待てばよい。自分で市場を開拓する欲求に欠けていた。工業試験場へのニーズもなかった。試験場は亦地場企業のニーズにこたえる姿勢もなくのんびんだらりと年を重ねていてよかった。県の年々の商工予算もそうした事情を反映した。亀井十六年間こうした状況がつづいていたと思う。今になって親亀がこけてしまい、子亀もこけてしまうようになって、ようやく工業試験場が問題になってきたのだ。

5月16日(土)

衰弱の感

「元気ですね」とひとはいう。「そうみえますか」「まあまあですよ」「お蔭様で」「もう年ですわ」「何とかもっています」というのが、これに対する私の返し言葉である。糖尿の心配がつづいていることは他人にはいわない。自覚症状もこれというものはない。しかし、歯はもうボロボロだし、近頃右肩がピリピリするのを覚えるし、マージャンなどして長く同じ姿勢でいると、立つ時にこわばりを感じるし、全体としての足腰の弱体化は蔽い難いものがある。少しずつ部分部分の衰えがあること間違いない。今日はホテル阪神に着いた時、旧制姫高クラスメートの西尾と戸石とが待っていてくれた。兩人とも私からみてやはり年とってみえた。東京事務所の窓から見てプラタナスの青葉がとても美しい。この葉も秋にはすっかり散ってしまうのだ。いつまで盛んでいつから衰えるのだろうかと考えてみる。中曽根首相はもう部分的に、政治的に死んでいるのに、と思ったりする。

5月17日（日）

西本願寺紫雲閣

西本願寺、二条城、智積寺の三カ所、青葉に雨がはげしく降りしきる中、見学してまわった。西本願寺は予め連絡してあったので、賓客として迎えていただき、本殿、紫雲閣などていねいに案内して下さった。お茶もいただき、おみやげには抹茶茶碗まで下さった。秀吉の聚楽第の当時のままだとの説明もきいた。紫雲閣、金閣、銀閣とともに京の三閣の一つといわれるものさうだ。経験不足、勉強不足でこの方面の知識はないので、今後はチャンスをつかんで取り戻さねばならない。見どころの多い西本願寺ではある。本堂の柱の太いのびっくりしては初歩の部に属するであろう。二条城は、石垣、堀、庭園の立派さに見とれるばかりだった。もちろんここは修学旅行の高校生並みの散歩でしかなかったので外見を知ったに過ぎない。京都はいつ来ても歴史の重みをいやというほど感じさせられる。二、三年住んで遊んでみたい。

5月18日（月）

中小工業団地視察

技術立県という目標と、北九州の浮揚という課題を背にして今日、洞海二島及び曾根の二つの工業団地を視察した。構造不況、重厚長大から軽薄短小への傾向の中で、また加えて円高不況の中で、北九州の中小工業群は今全く冷え込んでいる。若松の団地はとくに活気がなかった。融資制度の条件緩和が主訴だった、零細工業群といえる。北九州（曾根）の方はまだ中企業で活況も残っていた。歴史も古くしっかりしている。ここでは雨季の水はけ、小河川対策が第一と訴えられた。私の興味はむしろ鋳物工業の中味にあった。その技術水準のいかんについては論評する力はない。むしろ常識的な領域に属するが、第一は鋳物業が、いかにわれわれの日常生活の周辺に多種多様に応用されているかに今更のように気づかされたということ、第二は、業態が非フレキシブルだということ、及び依然として注文生産の領域にとどまっているということだ。

5月19日（火）

豊前地域での歓迎

知事選で京都築上地区は大変な成績をおさめてくれた。両郡はいずれも私が勝ったし、行橋も豊前も両市とも私が二千票余上まわった。椎田町と大平村でわずか私が負けたものの、その他では私が勝った。この地区は大変燃えた、燃やす人がいた。今日の豊前地区の視察では吉永、恒遠の両氏が付いてくれたが、公の機関の訪問に終わった、が役所の職員は皆私を歓迎してくれた。でも他の一般の人達も私に会いたがっているときく。一日ゆっくりとって対話してほしいといっているようだ。自分達が選んだ知事だから共によるこぼう、歓迎の主体になろうといっているわけである。運動する人達も、田中でははいりにくい奥田でははい

りやすかったなどといってくれた。対話事業に動かされた人が多いとも評された。吉永さんには「戦功」を傘<sup>マ</sup>に着て知事が来いと訴えてみたら秘書も日程を組むでしよう<sup>マ</sup>と私はいっておいた。その点役所の人達は私の視察日程に入りやすくて助かっているようだ。

5月20日(水)

快調感がない

一寸外まわりが多かったので、今日は内側の事務さばきが山積していた。夜は、社会党側と知事選、県議選後の初顔合わせのような知事招宴となった。早朝から夜おそくまで付き合いの日々である。祝勝手紙類への返事がまだ六〇通ほど残っていて、それも気になり、少しずつ書き進めている。睡眠時間はまずは十分に取っているのだが、途中で小便に起きざるをえないので、あとが十分眠れず、毎日が睡眠不足のようである。よくないと思いつつ、どうにもならない。自分しかコントロールできないのに、自分すらできないでいる。水を飲むのを少くおさえればいいのかも知れないが、そこまで踏み切っていないので、夜半に必ず起きることになる。右肩のひりひりはまだつづいている。「知事は疲れている」とひとはいう。多分睡眠不足と多忙が外見をそうさせているのであろう。快調といえる日がほとんどないのだ。

5月21日(水)

岩崎友四郎氏のこと

事務連絡がとれていて、午後二時清芳社の岩崎友四郎氏が東京事務所に訪ねてきてくれた。五年ほど前にタイ国大使館でパヨン氏に共に招待されて以来の面会であった。二期目の私の当選について反売上税チャンピオンということで祝いのハガキをくれていたのでその後会うべく連絡をとって今日会うことができた。岩崎弥太郎の孫らしく特徴あるマユが光っている。が彼の話によると岩崎家は今は全部落ちぶれているという。彼は四五〇人ほどの従業員をもつ清掃会社のオーナーだが、年をとり、一昨年奥さんをなくし、ひとりぐらし(子なし)で、後継者に悩んでいること、独居生活のさみしさにたえられないことなど訴えていた。彼も売上税が実施されると破綻をきたすはずだったといっていた。もともとそうだったが若干ニヒルな話をする男だ。私には知事になるなんて思えぬ変り方だと評していた。老後の淋しさは誰しもかくせないところなのだ。彼だけではない。

5月22日(金)

快調感がない(二)

やっぱり快調感がない。両手両足ともに何となくだるい。右ひじが痛い。又右か<sup>マ</sup>がとの上の内側がどうなっているのか痛む感じだ。もちろん睡眠も十分でなく朝がさっぱりしないので一日中重い。選挙の疲れが今頃に出て来たのであろうか。昨日上京の途次追突されたため鞭打ち症はないかと心配されたが、それは今のところなさそうだ。快調感がないのであれこ

れ意欲が湧かない。そのため身边たくさん片付け仕事が残っている。書齋をもっと機能的に片付けたいのだが、書物、書類が雑然としている。書物はあるべきところに置かないといけないのに全くそうになっていなくて成りゆきにまかしてしまっている。机辺もその通りで秩序がない。あれこれスペースが死んでいる。思えば高野切を書かなくなって一年になる。又下手なゴルフにも出ていたのに一年半はクラブを握っていないだろう。せめて仮名の練習ぐらいはできる身边にしたいものだ。

5月23日（土）

知事選勝利の瞬間のみんなの興奮

もう夏のような気温である。青葉も芽を出しつくしたかの感がある。毎日が多忙であることは依然同じだが、緊張感の比較的少ない政治的休息期間ともいえる。毎日こうして綴っている日記だが、意地で書いているようなもので、内容はペンをとった時の全くの思いつきで始まる。大した内容はないのに書く。書くことに意味があるとさえ思っている。今日の「なかよし会」では知事選完勝をよろこび合うという雰囲気になっており、二度の知事選勝利の采配をふった岩崎隆次郎は鼻高々というところだ。みんなの話題が投票日の午後十時すぎNHKのテレビで山崎拓がもう一寸いっているのにへし折るように奥田当確が出て放送がそちらに移されてしまったシーンとその後の怒濤のような興奮の思えばなしを話す人が多かった。田中健蔵が最近事務所を開いたが、次の参院出馬の準備というよりは、二億円の借金を返済するための事務所にすぎぬとの評も出た。

5月24日（日）

俳句が身边に

湯の宿の低き庇に燕の子

夏立てりみどり子のもの竿にみち

白ありてこそ紫の花菖蒲

先日栗山みつ子という人から「みつ子句集」を送ってきた。天禄商会監査役をしている白桃俳句会同人とあり、八十四歳もの老女である。が見たようであるがやはり知らない人だ。私の身边には多くの人からの贈呈本がたくさんある。先日香川県の前知事前川氏に関する県政回顧録も送られてきたが、私には句集のようなものの方が今は手に取る意欲が湧く。ただ、ひとの句は私にはひとりよがりに見えてわからぬものが少くないが、夏に関して右の三句は私にもわかるような気がする。句は誰がみてもわかり易い方がよいのではないだろうか。

5月25日（月）

佐賀行幸送迎

佐賀県嬉野で全国植樹会フェアがあつての行幸で、今日はその帰り道、福岡県側は鳥栖、福岡空港

間の見送り役であった。一寸でも失敗が許されないということで、何人もが動員され、何時間もゆとりをもって張りつけられる。高速道路もその時間帯は上下線とも一般車通行止めの規制がかけられる。小高い丘にはしげみの中にも警備が立っている。高速上下線の分離帯にも間隔をおいて警備が立っている。(ひざまづいて一行の車を見送る)それはそれは大変な気の使いようである。知事と県警本部長は天皇を機内に訪ね、お別れを告げ、天皇から「ごくろう」のねぎらいの言葉をかけられる。こうして送迎の行動は終るのだが、一生のうちこうした列に参加することすらないので疲れを忘れ有難いことだという人もいる。今日ほどくに蒸し暑かったので、長時間立たされた人はそれぞれの役にあつたとはいえ、疲れたことであろう。済んで緊張は一ぺんに崩れたろう。

5月26日(火)

職員の退職後の共済互助組織

午後パークホテルで梅香会の総会があつて挨拶に行った。長谷部忠士氏が会長で県職員退職者共済互助会である。退職金の利用で老後共済活動をする組織で県職労の流れを汲む。四五〇人ばかりの組織で三〇億円の資金をもっているといわれる。第九回の総会だから八年前の発足である。資金を有利に運用するのが主たるねらいのようだが、私は、進んで就労や趣味、ボランティア、医療相互援助などの活動に手をのばしていいのではないかと、その必要な時代になっている、県も高齢化対策の中でそうした方向を打出したいという意味のことを挨拶の中でべておいた。退職後二〇年や三〇年生きていかなければならぬ時代になっているのだから、未踏の地をかき分けるような気持で進んで行ってほしいし、新しい教訓を残してほしいわけである。退職協が併行組織だそうだが、これが今回の知事選に偉大な働きをしたことを私も知っている。

5月27日(水)

選挙のお祝状に返信を書いていた

知事選挙につきお祝状が一〇〇通は来ていただろう。ひまをみては一枚一枚に返礼のハガキを書いて日が過ぎていたが、今日やっと全部の返礼ハガキを投函し終えてやれやれの思いがする。福原氏はよく書きますねと感心しつつ投函してくれた。一ヵ月半かかって書いたことになる。選挙者の感動がよくあらわれているのが多かった。即日夜書いたのや翌日(十三日)書いたのが多かった。子どものもあれば八〇歳前後の人のもある。返礼を書いて出すと、こんどは向うの方できっとよるこんでくれるだろう。若芽の出かかった頃のものに、今は青葉が目にしみる頃。時間をへだてての返事だが、それだけにもらう方も、音沙汰ないと思っていたのに来たといううれしさがある。毛筆を使うのもいいが、簡略のため、ほとんど黒のボールペンを使った。そしてはじめてと思う分は住所を書き取っておいた。他県からもかなり来ていた。それだけ今回の選挙は全国的に注目されていた。そのあかしにもなるも



のが多かった。

5月28日（木）

企業立地といっても思いの中味はちがう

午後七時から一時間半センターで九州七県合同の第三回外資系企業の立地現地視察会歓迎レセプションが開かれた。地域振興整備公団や九州電力などもふくめ四〇人ほどの客があり、七カ国ほど外国人が来県していた。仏、米、英、独、瑞、加などから二二人の参加である。記者も加わったこと。円高、貿易摩擦、不況などといっている中で外資もどんどん対日進出を考えている。空洞化現象の逆である。レセプション中の対話の中で断片的ながら感じたことは、今は物を作る売るという時代からノーハウのアイデアを売る時代への変化が急速に進んでいるということだ。ドイツからの客は、水の温度を調節しながら栽培漁業に成果をあげているという。全体の空気は工場を建設して製造業をとというよりは、研究施設を九州に設立したいとさえ考えているように受けとれた。われわれ県が企業誘致によって雇用をふやすと単純に考えているのはかなりニュアンスのちがいがあるといわなければならない。

5月29日（金）

奥田事務所の再開方向

奥田事務所なるものを選挙中に赤坂に設置したが、その存続についていろいろ思惑がさくそうした中で、多くの者が存続の必要性を認めながら、八丁氏が左右するような事務所になるのであれば反対という声が一般的であった。それで選挙後一応の閉鎖の意思統一をしながら、なお閉めないままに今日に至っていたが、今日林県議からきいた話では、清進会の事務所を閉じ、その費用をこちらにまわし、奥田事務所として再開する但し、八丁君の采配をふるような事務所にはしないということで、およその意見がまとまったという。では誰がその事務所を主宰するかということだが、長谷部という意見もあるが、そうとは決まっていないという。いずれにせよ、八丁君は出すぎるなということと奥田事務所の再開が決まったという。一段落というところ。あと誰が主宰することになるか適任者をさがすことが次の問題である。

5月30日（土）

玄羊会書展の仲間について

山本先生の門下生が玄羊展の打上げ会で、平和楼に集った。四〇人はいただろう、尚文堂、先生のうち、南区の個人の家、九電、その他のグループに分れてはいるが、一堂に会すれば師を同じくする者として意気投合できる。私も永年その仲間だが、知事になって以来、尚文堂毎週月曜という教室に行けなくなったが、書初展と夏の書展だけはいつも出すことにし

ていて、打上げ会にも出席するようにしている。正会員でないという意味もあって「顧問」という肩書をいつの間にかつけられてしまっている。そして知事が会員のうちにいるということが、何となく他の会員にもはげみになるらしく、私はいつも歓迎してもらえて一寸嬉しい。書展に行ってみると、みんなの出来がよくて、自分の作品の前に立つのがいつも気まぐずいのである。もっと工夫しなくてはならないのに、半日ぐらいで仕上がりと思って出してしまうのでよくないのだ。

5月31日（日）

波津の久世

花田守氏に仲介してもらって、今日一日休みを利用して岡垣町の小役丸卯太郎氏の経営する久世旅館にご厄介になった。久世には十二の棟があって数人の人達が宿泊や会合に使えるようになっている。アベックでもいいし、会議でもよい。もちろん休養に使ってよい。彼の説明では、別荘を個々にもつわずらわしさを省けるように、一箇所に集めたのだという。独立の棟々はそれぞれの工夫をこらした室内間取りがしてある。周辺は緑に囲まれてよい。今日はごちそうになったのでどのくらいかかるのか、料理の内容にもよるだろうが、一寸贅沢しようと思えば利用するのに恰好の施設である。今後この地域はリゾートゾーンにしていくとの計画もありうるし、将来の人との生活を考えれば、先見の明ある試みであると思える。料理は波津の漁港から水揚げされた鮮魚が中心になるので、申分なしである。リゾートゾーンの計画には県もかかわっていくのがよいと思う。

6月要記

どんどん日がたっていく。今月末から来月にかけて県議会が開かれ、今年度予算が審議されるが、今年は政府事情の動揺のため予算事情の確かな見透しがえられず、政策事項も思い切ったものが出しにくい。それでいて五兆円とか六兆円とか一割近い補正予算が主要国サミットに向けた約束実行のために七月臨時議会に上程されるというから、急ぐべきは急がねばならない。中曽根首相は、四月の地方選挙前は「死んだふり」をしていて、今は次期総理の下馬評が出ているのに「生きたふり」をして踏み止まろうとしているようである。それだけにわれわれも何となく見透しが立てにくい。六月のサミットで隠退の花道をつけようとしているらしいが、一寸急降下した中曽根人気も今になって再上昇はじめたといわれている。もはや続投はありえないといわれているが、サミットの結果又事情がかわるかも知れない。経済には弱いといわれる中曽根が今の日本経済を多数国民が苦しむ状況に追いやった責任は重大である。早く経済政策がかわるのを望む。

【欄外記入】

〔サミット六月八日からベネチアで〕

6月1日（月）

雇用問題にどう対応するか困難というしかない

現段階の大牟田や北九州のような疲弊に直面すると、市民達は、以前の炭鉱問題の時のように、何かに頼りたくなるのは当然であろう。数日前の大牟田市からの陳情も、今日の私の大牟田視察でも県が何とかせよとの空気は勿論強い。しかし、炭鉱問題に対応したように、生活保護か失対事業かという発想はでてきてない点に違いがあると思う。県で箱物を作れ道路を作れという。又博物館や図書館を設置してくれともいう。大牟田では商業地域にコミュニティマート構想が進みつつある。工場跡地の再利用に企業誘致の願望もある。工業試験場の設置要求もある。雇用問題への不安は、しかし浮いたままで解が見つからない。労働者の場合、企業が倒産したら規模縮小というとき失業反対、職場よこせというしかないだろうと思うが、それをいったからとて、これが又どうにかなるものでもない。自分で仕事を作るような道はないのだろうか。

6月2日（火）

九州知事サミットは面白そうではない

知事サミットのレクというのが今日、明日をふくめ何回かある。四日に熊本で行われるのだが、昨年につづいて二度目。こんどのは西日本、熊日、それにNHK、TNCなど報道関係が主催し、西日本単独ではなくなったが、西日本の「21世紀委員会」というのが出したプランの下敷により事を進めようとしている。この委員会は前は田中健蔵を議長とし、今は高橋九大学長があとをつぎ、「九州は一つ」を目標に知事たちをその枠内で発言させ、報道機関の売込みをはかろうとしているかに見える。「九州は一つ」といっても、熊本や大分の知事は、我こそは九州の中心なりと考えているので、それにおもねるような形になるほかは一つになりっこないのが現状であると思われる。私の場合、こういう催しにより報道のちょうちん持ちはしたくないとの心情がある。名案がありそうには思えない。自然体で協力すべきは協力し合っていてよいのではないか。

6月3日（水）

福岡いちご祭り

県のいちご祭りが須崎公園で開かれた。米の減反が農家経営に大きな圧迫を与えている今日、水田再編利用の面からもいちご作りは注目を浴びている。福岡県は今一一五億円の年産額で全国二位を誇っている。今年はそれを一五〇億円までに高めたいというのが、今日の総会の決定になる模様である。リンゴより、ミカンより、いちごが好まれるという。今の若い者には皮をむいて食べる手間を避ける傾向があるためだろうか、味がよいためだろうか、いちごだけが伸びているという。このごろ市場をのぞいたことがないので、他からのいただきものはいくらでも食べるのに、それがいくらなのか価格の動向を私は何一つ知らない。いち

ごが特に安いというわけでもあるまい。よく売れるのは、それが扱いよいからではないだろうか。今の若者の世帯のなかには包丁のないのがあるとも聞く。包丁なしで暮らす今の若者がいるのである。人間としてどこかで大穴があくのではないかと思う。

6月4日(木)

ヘリコプターで北九州から熊本へ

快晴でよかった。日赤紺綬会総会をすませたあと十二時、北九州空港に直行、熊本工業大学々長の利用便を復便そのまま借りてヘリコプターで熊本に行くことになった。着地は熊工大ヘリポート。北九州新空港予定埋立地がきれいに見えたし、右に香春岳の石切りあとの姿、左には次いで英彦山がみえた。八女、熊本に入ると農地の整理が進んでおり、ビニールハウスの列が美事である。いかにも農業が盛んであることが上空から推測することができた。これらの地域の今後のあり方は、農業技術(バイオを含む)と農地統合のいかんによるところが大きいだろう。上空から見たこれら地域の山々はまた美しかった。よく手入れが届いているようだ。人工林も多いし、林道もかなり発達しているといえるだろう。ヘリコプターは三〇分ほどで着地した。操縦席の横に席を与えられ、操縦者の動作を見ていたが、なぜこうもうまく飛ぶのかわからないほどに手、指が動いていないように思われた。天気がよく頭から陽光を浴びながら飛んでいたのだった。

【欄外記入】

北九 12:40

熊本 13:10

6月5日(金)

政治秘書の話が出てきた

夕方退庁しようとしていたら県評の山川一義氏が来て話しこんだ。社会党県本部の竹村書記長を更迭するに連動させて、これを知事の政治秘書として県に採用せよというのが今日の彼の主張であった。この申入れは一期目に島野房巳を入れろとやってきた岩崎隆次郎の要請と同種のもので、県の三役や秘書の側ではかなり強い反撥のありそうな話である。島野については近藤栄次郎が困るといって峻拒したいきさつがある。行政担当者には政治がわからないわけではないが、政治勢力の扱いがわからないのである。自分達が政治判断はできるとってはいるだろうが、形のない政治勢力をどう扱うかは理解しない傾向がある。知事がAであってもBであってもどちらでもいい。行政屋はどちらかの知事について各種政治勢力の間をソツなく泳ぐことを心に留めて、AかBかの知事をその中でまわしておけばよい。山川の言いたいのは、AがAのバックをどう泳ぐかということなのである。

6月6日（土）

知事の政治時間

昨日の政治秘書の件について永田室長を呼んで意見をきいてみた。即座に拒否反応が出た。そういうだろうと思っていた。彼にも政治というものが十分呑み込めてはいないし、こちらからそれを望むのは無理だとさえ思えた。県庁はやはり役所であり行政の場なのであって、そこに政治を持ち込むと、無理はきかなくはないにしても、やはり無理は無理だと彼もいう。政治秘書というのは置いて置けなくはないが、反撥が必ずくる。反撥がないように見えてもそれは永つづきはしない。役人特有のソッポ向きが始まる。それなら無理はしない方がいいのではないか。ざっと以上のような話である。だから当面の結論は知事の政治の場は庁外でしかない。それを可能にするには資金が必要だろうし、時間も必要である。だとすれば、まずできることは知事に政治の時間をもたせることだ。ここから始めなくてはならない。私もこうした結論に賛成である。今後は行政サイドからみたスケジュールを再検討しなくてはならないだろう。

6月7日（日）

役人の予算編成態度

矢部川畔の中島の島で環境美化行動のあと、すぐ福岡に帰り、山ノ上ホテルで中食、夕食を共にしながら、社会党県議らと六二年度県予算編成の概要を説明し、検討しつつ意見をきいた一日だった。六月県議会では年度骨格予算が審議されるからである。出席の県議は林、長谷川、白石それに控室の嶋津、門研の八丁、県側は私、林出納長、佐々木、羽根であった。十二時から夜の九時までつづいた。役人はほとんど、機械的に予算を組む。知事が選挙中に何を主張し、公約は何であったか、平素何を強調しているかについてはほとんど関心がないようだ。無視しているかのような予算が組まれている。各部長、課長、総務部長ら、ききに來てくれてもよきそうなのにそれをしていない。このことを私が指摘すると、知事が予めいわないからいけないと林副議長が反論した。「いわない」というよりは、ききに來るものと信頼しているところに問題があるようだ。私にいわせると、一々いわなくてもわかっている筈といたいのだが、通用しないらしい。

6月8日（月）

私学助成への圧力

昨日は日曜だったのかと思う今日である。区別なく動いているからであろう。曜日が念頭がない。登庁して次から次へと客がある。年度予算を決める前段だからである。農協五連も私学協会も予算増を要求してくる。この人達が選挙の時にどう動いたかがおよそわかっているから、いかに年中行事とはいえ、そのずうずうしさにあきれる程である。相手にも潜在意識にはあるとは思ふ。でもいうしかないと思っているに違いない。職務とすら思っているで

あろう。その点林研グループの青年達は、どちらに投票したかは別としてまだかわい気がある。生きようと一所懸命であるし、どことなくすなおさが感じられる。私学系は一度補助金を出すと当たり前と考え、有難いとは思わず、他県と比較して福岡県が低すぎるとさえいう。数が多いので、一寸でも額を引き上げると、次からはそれがベースとなり引っ込みがつかなくなるし、額は巨大になってしまう。財政硬直化につながる。単なる圧力集団で手におえない存在だ。

6月9日(火)

食事の暇さなくて「からだに気をつけて」といわれる。寝る時間も削られる。誰もが「からだだけは大事に」といつてくれる。「それだけが資本」ともいつてくれる。それでいて誰もが知事を酷使する。秘書も、時間があれば「休んで」といつつつ、時間をみては仕事を持ち込んで休みがないようにしてしまう。祝賀会とかレセプションには限りなく招かれる。ごちそうもいくらでもある。しかし、食べる時間を全くといつていいほど与えられない。今日は、ひる教育会館の新築落成祝賀会であったが、かけつけてすぐ壇上にあがってあいさつをし、降りたらあちらからもこちらからも写真を一しょにというポーズ要求が十回ぐらいある。ごちそうに一寸手をつけると秘書が時間ですということで車中の人となり帰庁して用意されたスシを五分間ほどでつまんで直ちに知事予算査定部長ヒヤリングとなる。夜食事は国際ホールで福田利光氏の受賞祝賀会。延々とつづく挨拶を一時間ばかりきいて乾杯まで居れなくて途中で引揚げ、又帰庁して予算査定ヒヤリングを午後十時すぎまでやるといった具合。

6月10日(水)

県庁跡地処理の態度が迫まられている

県庁跡地をどう処理するか、それをこんどの当初予算にどう盛るか。これが当面の最大の注目点となってきた。奥田にさわらせるなといつて押しとおしてきた江口利雄は落選した。これ以上放置することは全く不自然である。RKBと<sup>マ</sup>は跡地を緑地として残すことによつて「さわらせるな」論の変形を進めようと目論んでいる。NHKは跡地に新ビルを建てて入居し、ここを拠点に新技術を駆使する放送体制をとろうと考えていたが、RKBに誘われて、一しょになってアジア太平洋博の用地中央に放送タワーが建つならそこに行くことも考えるといつている。だから跡地利用でNHKを引きつけるにはこの夏の議会で、NHKをキーテナントとする信託方式のインテリジェントビルを建設する方向を決定することが大切といつのが当面のわれわれの課題であつて、この方向をどういふ手順で公然たる論議の場にのぼせるかといふ戦術的詰めが急がれるのである。NHKはビル建設完了を国体に間に合わせたいといつている。

6月11日（木）

産業廃棄物問題をどうすればよいのか

産業廃棄物の処理に、業者というものが発生する。これが所きらわず廃棄を欲する。建築物をこわせば多量にそれが生ずる。これをどこかに棄てねばならないが、適切な場所がない。あつたとしても積もり積もるとたちまち山をなす。だから可燃物は燃やす。臭気が発生する。廃棄物が散乱する。地下水は汚染される。自然環境の汚染は限りなく進む。業者は土地を求めあさる。これを国か県か市町村で規制するしかないが、国は当然に地方の責任にする。県は市町村の責任にしたい。市町村は業者が境をとわず行動するから県に規制をせまる。最後は県の責任になろうかと思うが、県も及び腰である。廃棄物を出すのは都市の私人が多いが、業者に費用を払うことによって責任を転嫁したと考える。何十年も同じことでなやんで来て未だ結論がない。今日は夜須からその陳情があった。

6月12日（金）

共産党幹部との懇親会

共産党の県委員会幹部、県議らを迎陽亭に招待して懇談した。今回の統一地方選で共産党は二人から五人にふえたので意気軒昂たるものがある。議会控室も拡大されたし、代表委員会にも正式ポストが取れ、議案提案権もできて、「一人前」になったので、今日の会合もみなさんの顔は明るかった。私はよく言ったものだ、「共産党も一人前になって欲しいね」と。選挙中にもそれを言ってひとを笑わせ、それがかえってはげみになったという。共産党の態度もかなり柔軟にはなったが、まだまだ硬さはとれていない。政策上のことでは常に中央の指令仰がねばならぬというし、原則反対の態度をつねに貫く。懇親会などワリカンなら出るといったり、料亭ではダメといったり硬い硬い。塩塚（小倉北）と高（若松）が議員歴三、四回、他は瀬川、常守の二人がやはり八幡西、戸畑と北九州から出ている。下川は大牟田からである。みんないい成績で、上手に活躍するなら一つの力として頼もしくなるだろう

6月13日（土）

北京訪問

日中友好訪中団一四〇人が今日北京を訪れた。福岡市側は団員一〇〇人で一週間前から先発していて、北京で合流したのである。今年の日中国交開復一五周年であり、福岡空港への中国民航の乗入れ第一便が四月四日で、この両面からの祝賀訪中であつた。中国民航の定期便開設は北京からと上海からと週二便でしかないが、西日本全域に、中国に対する親近感を与えるのに役立つものである。福岡からだと上海までは東京に行くのと同じ感じである。全く気やすい受けとめで可能である。ビザや通訳などのわずらわしさは残るとしても、時間的にすぐそばということになった。上海に買物という人もできるわけだ。今回の訪中はそのことのお礼まいりであつて、他に用件はない。できれば、人材派遣、技術交流のことも折衝し

てよかったのであるが、土、日の北京訪問では無理な日程というしかない。買物が主たる目的で訪中する人がいるが、それもいいのではないか。私の場合、団長ということになると束縛されていて、そういう興味が湧かない。

6月14日(日)

日曜の北京

団員の主たる行事は万里の長城と明の十三陵の見学であった。夕方の行事に間にあうよう早い朝食で出かけた。私はむしろ部屋にこもっている方がいいと思ってゆっくりしていたら池田企画部長がノックしてきて、ホテルで朝食をしていたら何回か行ったからということで同様にゆっくり朝食をとる人が何人もいた。同行の県議の中にそういう人が多いようだ。ゆうべは早く就寝し、下痢も止まったようだ。朝食後は身辺整理をし、中食後友誼商店に出かけ帰りに王府井に寄ってみたが、日曜のためだろうか、立錐の余地なしという言葉はこんな時にいうのだろうかと思われる程の人ごみであった。チベットから来たという汚れた衣をまとって道わきに坐り込んだ人も中にいた。でも若い婦人の姿はかなり洗練されたものとなっているのに気づく。中国は衣も食も足りてきたようだ。建設が進んでいて街もととのってきたが、もう一つというところだろう

6月15日(月)

外交部副部長の熱っぽいアピールをきいて

午前中は民航、外交部、友好協会の三箇所へのお礼まいりをつづけ、意外と時間が足りなかった。外交部では劉述郷副部長が迎えてくれたが、最近の日中関係に冷い水がさされていることにふれ、緊張した雰囲気すら生じた。京都の光華寮問題と外務省職員の「雲の上の人」発言がかなり中国側を刺戟しているといえる。劉氏は二千年來の日中友好を前置きとしながらも、誤解にもと<sup>つ</sup>づく関係悪化は残念なことで、そういうことが起こらないように自分達は注意しているつもりだから、日本側もそうしてほしいとやんわり注文づけの発言がなされた。私はこれに対し、問題は新聞やテレビを通じて日本人のほとんどが知っている。またたいていの人は問題をきちんと、中国側の今の主張の線で理解していると思う。われわれはこうした波をのりこえて友好親善を深めていきたいと述べ、別れの言葉とした。一行は事の重大さ、中国側の関心の強さに改めて驚いたように思えた。ひとの気持ちをさかなでするようなことをしたりいったりしてはならない。

6月16日(火)

上海雑感

どちらにまわってもプラタナス並木がトンネルをなす上海である。どこまでつづくかと思う。美しい、でも人が多い。それをあまり感じさせないのがプラタナス並木のせいであろう。



戦災といえるものがない。昔のままとっていい小さく区切った商店が延々とつづく。高層化が進まぬとっていいだろうか、それともわれわれが高層化されたところに行かないからだろうか。プラタナスのトンネルのため木もれ日ばかりの街並みで、歩く人の姿も涼しそうだ。価値尺度がどこにあるのかわからない。商業や生産活動がどれほど自由なのかわからない。人々はこのんびりしているようにも見え、忙しそうにも見える。われわれは旅行の中で、一般大衆と接することがないから、価値尺度がさらさらわからない。収入はふつう一ヵ月四〇〇〇円とかいう話もある。一〇倍に引きなおしても四万円。日本の旅行者は誰もが思い思いの、結局はクズになってしまうようなものを安い安いとって買い漁っている

6月17日（水）

「お布施事件」仮処分後四年

昨日はみゆきが公民権停止処分を受けてから四年で、その処分が解除された日だった。森祐行氏がそれを知っていて、盛り花をお祝いにくれた。夕食は私が中国から帰宅した直後だったが梅酒で軽く乾杯した。四年間の公民権停止と罰金二〇万円というのが「お布施事件」の始末だった。他に、未だ法廷で争っている人があるが、那波公明、牧一生氏らだが、その結末はまだついていない。何のことだかまだはっきりしない。信の世界だから、政治の介入のゆえだからなおさらである。後藤田官房長官、中曾根の政略という人もある。昨年の近藤副知事、林県議の問題にしても、わからないままだ。県議会では真相究明のための百条委設置をいい出した方が、その案を否決にもっていくという皮肉な結果になった。この事件もその政略性を感じないわけにはいかない。法廷が行政から独立しているなどといいながら（光華寮事件）都合のよい時だけの話だということが明らか。

6月18日（木）

ふと思うこと

これまで左肩が痛かったのに、こんどは代わって右肩がひどく痛くなって来た。やがて又治るに違いないとは思いつつも、当座はかなり気になる。普通ならアンマ取りをするのが常識だろう。又ひとに頼んで肩叩きするだろう。が、今は辛抱するしかないと耐えている。多忙だったり、マージャンで夜ふかししたり、無理が重なっているからだろうか、昨年は六月末に帯状疱疹にかかったのが思い出される。昨日も知事室の窓から日蓮さんの銅像など東公園をぼんやり眺めつつ、飛び交う鳩に目が向き、無常を感じたものだ。県庁前の公園内の道行く人も鳩と違うだろうか、どこからか現われどこかに消えていく点では所詮同じなのではないかと思ったりした。書齋の本の一冊一冊に何程の価値があるだろうか。所詮どうでもいいし、よかったといえるのかも知れない。もう少し一瞬一瞬に張りがあってもいいのに、そのことがフッと消える時がある。何で努力をするのだろうか。

6月19日（金）

サインを求めて知事室に入ってくる職員

決裁の列ができる。員数仕事のようにサインしていく。理解できてないのにわかったようにサインしてしまう。秘書の福原氏が私に、「ごくろう」ぐらいの声をかけてやってくると、職員は感激するんですがね、という。その通りだろう。氏の言い分としては、知事室に一度も来たことのない、来れないと思っているような職員が、意気こんで入ってくるのだから、知事から一言欲しいのだとのこと。そういうもんかなと再考してみる。けれども部屋に入ってきて来て、説明しようともせず、黙って突き出してサインを求める者も少ない。そういう時に、こちらから、これは何なのかと説明を求めることもある。ただ考えてみると、それもおぼろげに差出しているのかも知れない。遠くの方で「知事はあまり腰が低すぎてナメられている」との声もきこえてくる。要は親切、思いやりがあれば誤なしということではないか。

6月20日（土）

「乾盃」まで時間がかかりすぎる

夕方、久留米「創世」で中村忠和県議の議長就任祝賀会があつて出席した。久留米初の県会議長だとのことで、みんなでお祝いというのである。議長って大したものだと考えられる。会場あふれるばかりの参賀者でにぎわった。しかし、祝辞など演壇に立つ人の話もそれぞれ長々とつづいた。開会してから一時間近く有名人の話がつづき、立食式の宴席に立ちつづけた人もみな疲れただろう。私は前からこうした会の儀式に要する時間が長すぎると思うので、たびたびひとに批判めいた意見をいったことがあるが、今日もまた祝宴に入るまでの時間が長かった。いざ乾盃の音頭ということで登壇した人も亦長々と話して「カンパイ」である。趣旨は来客みんなわかっているのだから、経歴だの人格だのは刷物にして渡しておいて、省略してできないことはないのに、登壇する人がそれぞれやる。一人立てば他を立たさぬわけにいかんということで釣合上多くが登壇するのである

6月21日（日）

岡垣町での「ふれ合い」田植祭

岡垣町原地区での田植まつりが九時すぎから行われた。花田守氏の兄通氏の世話する青空市場三周年記念ということでもあるようだが、田植祭ははじめてのようだ。申込者三九家族、子供達も来て泥田に入り苗をさしてみても、いい経験になったろうと思われる。エンジン付きのハングライダーが上から苗束を落してそれを太鼓の音の合図で植えはじめる。「ふれ合い田植」というから私もその趣旨に共感をもち二〇歳以後やってない田植を一度してみたかったので、参加することにしたのだが、祭りの要素が多すぎて田植をしたという再体験になったとは思えぬ参加であった。それでも地元の人が元気づいてくれればいいし、参加者も来てよかったと思ってくれれば、今は、いうことはない。あとで辻町長が八幡屋旅館に案内し

てくれた時に、私はモチ苗を植えて、年末に餅つき会をしてもいいねといったら、名案だと返ってきた。

6月22日（月）

今後の労働運動に心配の種がある

福島工業試験場の視察を行ったあと、八女、久留米、甘木の三地区労に知事選後初の挨拶まわりを行った。八女だけは地区の商工業者も呼んでいた。久留米では私の方から積極的に意見を出して懇談の時間を費した。内容はこれからの労働運動はいかにあるべきかという事に関してであった。来年あたり総評はその歴史を閉じて全民労協に移行するといわれるし、春闘は賃上げどころではなくなりつつあるし、二年後にならないと選挙という政治日程はないという状況にある。こんどの統一地方選ではみんな湧いたが、今後は湧く材料がありそうもない。空隙が生ずるのである。「組合ばなれ」が進むこと確実である。そうした中での政治動向はどうなるだろうと考えると、心配である。「保守化」が一段と進むとみなければならぬ。そうでなくするには、今回の統一地方選挙の教訓をじっくり反省する必要があるだろう。

6月23日（火）

ファッションの時代

先だって上京した際、プロ野球の誘致問題のポイントを探るため読売新聞社の小林社長に面会した。この時彼は今の時代はファッションが決め手という言葉を一きなり私に説いてきた。織物を売るには女性のスカートを長くしたり短くしたり、デザインをかえてみる必要があると同様に、今日のように飽食の時代には、腹に入れる物を多くすることよりも、食べ物の質を競う時代となっていることを理解することができる。量より質の時代とはこのことをさすのであるとのことであろう。私は彼のこの指摘に直ちにうなづくことができた。経済界が冬の時代なら夏と違って木に年輪ができるように、量の拡大競争から質の深化向上競争の時代になってきたといえる。建物も単に建坪ではなく、同じ建坪の中で用途を多くする。先端技術をそこに用いてみる工夫をする必要が生じてきた。新宿の高層ビルはみんなインテリジェントになっている。

6月24日（水）

土井たか子人気

社会党委員長土井たか子氏はからだのボリュームもある。人気ある演説のツボとトーンを心得ている。はじめての女性党首であるというような要素が揃って、一流のスターである。ために一目見ようと寄ってくる人があるし、右翼が対抗して反土井のデモを事あるごとに行う。今日六時から国際センターで「奥田知事とともに土井たか子氏を囲むつどい」が行わ

れたが、三〇〇〇人会衆をうならせるあいさつをし、乾杯後は会衆の中に入ってもみくちやになりながら愛想をふりまいていた。私もそれと似た流れに入り、汗だくだくになった一夜だった。今日のような集いはとくに何の目的があるわけではなく、二万円会費で社会党がゼニ集めにやったものなのに、女性の来会者がとりわけ多かったような気がする。もちろん全県下で、県議、市議などのバックが中心と思える顔ぶれだった。土井、奥田を使って政治資金集めをした社会党県本部は大成功だったといえよう。

6月25日（木）

社会主義協会も命脈尽きるか

昼食を中山日出子さんと国際ホール横のレストランで共にし、まだ話があるようだったので合図しておいたら、夕食時にも拙宅に来て話込んで行った。私が思っていた通りに、今は労働運動の曲り角を背景に、社会主義協会も社会問題研究所も存亡の危機にあるということだ。先だって木梨氏と話した時、地域懇の幕を引きたいといていたのが思い出される。人材がないのか知恵がないのか、これらの存在意義がないのか……。私が知事になる以前にやっていた運動のそれぞれが今は息絶え絶えになっている。社会主義協会九州支局、そこには大坪、衣笠、芳井、八丁、中川、高崎、馬原らの男と、中山、奥の二人の女性がいる。この運動は昭和二九年から福岡の地に事務所を構えてわれわれがやって来たものだ。今はこうした人間がいてそれぞれが組織維持の力量か熱意を失いかけている。又は反目し合い、ガタガタになっている模様なのである。残念。

6月26日（金）

県工業試験場を見直すべきだ

今日六月議会の本会議で提案理由の説明に一時間を要し、演説疲れを覚えた。がそのあと、四時になって商工部の技術振興課から、工業試験場の改革試案（大綱）ができたので、説明をきいてくれといい、その時間をとったのだが、終るまで三時間もかかってしまった。技術立県を唱えて来た私の思いが、まだよく試験場の職員、商工部の職員によくのみこんでもらえていないということを感じさせられた。去る二十二日に福島工試視察後の感想もこれに似たものであった。試験場には研究員と名のつく職員らがいて、四つの試験場で八八人の者が毎日何をしているのだろうか。その仕事と県の商工行政とどういう関係があるのだろうか。疑問はいぜん解けない。研究員たちは大学の研究と似た感覚で毎日をすごしているように思える。商工部はこれを是認しているようだ。工試は県下の工業人と無関係に存在しているように見えるのだ。

6月27日（土）

何枚も何枚も色紙を書かされる

大牟田での福教組大会から帰って今日は久しぶりに午後の日程があいた。こういう時は、河野さん呼び出してマージャンをしようということになって、今日もまた、何時間もそれに費した。が、色紙も三〇枚あまり書いて宿題を果たした満足感も生じた。何枚も何枚も色紙の依頼があるが、ほとんど辞退しないせいかどんどん注文がくる。県下にどれほどバラまいたかはかり知れない。推測して二〇〇〇枚といえようか。書く内容も同じのが何枚でもできる。好きな言葉、書易い文字は当然にあるが、この両者が重ならない場合もたくさんある。それでも敢えて書くと気分がすっきりしない。今日のように三〇枚も書くと何枚かは同じになる。なるべく違ったのをと思っても、そういう変種がすぐ頭に浮ぶわけではない。今後なるべく変種を作っておこう。

6月28日（日）

泡沫、雲煙と現実と

世間万事如雲煙というのがある。掛軸に書いて誰かにあげたし、五月の玄羊書展にもそれを書いた。泡沫（うたかた）の如しというのもよい。書齋をつらつら見つめたり、身辺整理をしてみると、過ぎ去った自分の行動に関係あるものばかりだが、それらが何の意味をもっているだろうと考えると、泡沫のように消えて何もなかったのとほとんどかわらないことがわかる。一日在宅して揮毫をしたその瞬間は熱も力も入る。夕刻になって前に秘書室にいた三笠氏が夫婦で、生後四月になるという赤ちゃんを見せにやって来た。女兒だが顔は父に似ている。彼等にとって赤ん坊がどう成長するかはほんとうに真剣な現実である。尾形智炬は荊田町財政疑惑をどう乗り越えようとしているだろうか。田中健蔵は二億円の選挙費用の帳尻あわせに努力しているという。これも現実だ。私には雲煙でしかない。

6月29日（月）

身辺のものは自分のこととして整理するしか途はない

書齋の寝台のうしろに、この四月以来袋詰めした雑書類が二個おいてあって、何だろうかと思っていたが、今日、やっと書齋も形が整いかけてきたので、その中味にふれてみた。藤江君が選挙事務所から持ち帰ったものだろうとのみ思っていたら、私が三～四月、選挙運動で帰宅しない日が多かったその頃の来翰その他の集まりであった。こうしたものは平素はやっぱり私が整理していたもので、選挙中は積るほかなかったのである。居間の窓際にたまっていくたぐいのものなのである。中には或いは古新聞と共に捨ててしまったものもあるのかも知れない。ともかく身辺のものは付属物だから自分で整えるしかないのである。ところが、そうしたものの中に二年も前の写真がたくさん束ねるほどにある。日付のないのが多いし、場所も人物も私の記憶にないのがたくさんある。点検し直すつもりでもあるが、裏書きできないものについては捨ててしまうしかないと思う。

6月30日(火)

带状疱疹入院一周年の日

昨年は思いがけなくも带状疱疹にかかり、今日入院したのだった。もしそうでなかったら、道路公社汚職事件で、議会対策に難渋を重ねたであろうに、一ヵ月近い入院で知事代行を大塚副知事にやってもらって、切り抜ける結果となった。病気は別として、ラッキーな奴だといわれたのであった。近藤副知事が事件に巻き込まれて辞職するに至ったのだが、それはそれとして大きな犠牲といわざるを得ない。六月中旬、近藤氏は済生会の事務局長のポストをそれまでの井上陽一太氏に譲ってもらって、一年近いブランクながら、やっと落付いたといえる。近藤氏については黒白が明らかにされないままである。デッチ上げの可能性もないわけではないが、そうだとすれば中央の後藤田あたりの「奥田攻撃」の汚いやり口と解釈される。田中健蔵が知事候補になる一歩前の状況だったのだ。奥田のイメージダウン、ダメージにより、田中で一直線で知事選に走ろうとの読みがあったといわれている。

7月要記

梅雨がいつあがるだろうか。七月になって梅雨らしい空模様がつづいてはいる。三日から本会議代表質問、一般質問が終わるのが十日の金曜日。この県議会は選挙があった関係で当初予算を審議する。二十三日までかかる予定である。議会がすむと中央への来年度予算陳情がある。暑いのに、休むことなく走りまわっているのが日本の風土。ヨーロッパでは夏はどこもバカンスで公的な仕事はありえないようだ。福岡では山笠シリーズ、一日から十五日まで。いなかでは昔夏祭りがあったが、今でもどこも夏の祭りが何らかの名称であちこち展開されているようだ。一種のバカンスなのであろう。役所が休もうとしないのがむしろ不思議なくらい。大学なら七月十日から二ヵ月授業はなく、教授ものんびり自分の計画を立てて、公用なしの何日かをすごすことができる。議会の中に頭を突込んでいるとその異状さに気づかないから不思議である。人がのんびりしている時、こちらはきりきり舞いなのだ。

7月1日(水)

新人類の見本ともいべき学生来訪

九大のミニコミ紙から取材に来たということで四人の学生を引見した。ほんとうに見るからに「新人類」という感じだ。彼らは一人部屋どころか電話をそれぞれもち、キャッシュカードで親のカネを使うことになっている。余暇はテレビ、漫画、そして遊ぶためのアルバイト稼ぎをする。私は哲学を、そして人間、社会、自然の基本をつかむために古典を少しでも勉強してほしいと注文つけたが、いわんとするところをわかってくれたかどうか大変あやしい。もちろん私は今の若人を不信というのではない。それなりに宇宙の基本をつかんでくれると思うし、将来役立ってくれるに違いないと信じてはいるが、何しろ頼りないのである。

九大をどう評価するかであるが、昔のようにある程度エリートの集まりということではなく、なってピンからキリまで幅広になった。親、社会、政治等々に対する考え方も大変バラついた価値基準をもつに至っている。無政府的で一定の評価をしてしまうには危険がある。何かんがえているか不可測。

7月2日（木）

体調悪し

知事選中に小柳氏に案内してもらって協力を仰いだ北九州の事務所に、氏の案内で今日一日御礼のあいさつまわりをした。途中魚町あたりで街頭に立って横断しようとする私に、多くの人達がえしゃくしてくれたのは嬉しかった。だが私の今日の体調は悪かった。どうも近頃睡眠が十分でない。又便秘気味。そして右肩の筋肉痛が車に同乗している小柳氏に悪いほど私が体をよじらせる状況を生んだ。小柳氏は大正元年生れというが、ここでは私よりもはるかに健康にみえる。朝早く夜おそいというのが私には今やニガテになってきた。肩が痛いのと眠いのでガックリだ。今後は意識的にもっと休むようにしなければいけないだろう。今回の体調の悪さはある意味では一つの坂を超えたように感ずる。これはいけない、回復するように努力せねばと思った。誰にもいえることではないので、自分にいつてきかせよう。去年の帯状疱疹で一つの坂をこえ、その後また一年で一そう悪くなったみたいだ。

7月3日（金）

テレビ放映の本会議

今日から六月議会の代表質問がはじまった。当初予算の審議が行われるという議会だから二年前からの慣例としてNHKのテレビ実況放映が全時間にわたって行われ、会のはじまりも放送の都合にあわせて十一時からでなく、午後一時からとなっている。議員の出席率もよし、開会時刻もきっちりいつて申分ない。当方もネクタイの柄まで気を使う有様。ただ質問者が銜ってか、長々と盛り沢山な質問を長時間、そして時間ぎりぎりになることを意識しはじめると、早口でべらべら質問を並べ立てて当方が、その内容を追うことができないほどであった。その意味で質問・答弁ともに今日は合格点をつけられぬ内容になってしまった。自民党の代表質問者井本清助は、自民は完全野党でいくと前置きしてくだらん言葉だけの知事攻撃に時間を費したが、傍聴者、視聴者の響感をかったことまちがいない。議場が写されるので、私にはもっと頭を上げてと注文がきた。

7月4日（土）

高教組の運動方向について注文する

高教組の三役（露口、牧野、田中）と中食をとりながら庁議室でしばらく話合った。向うは二期目の奥田県政にこそ、実損回復など積年の宿願を果たすべく期待しているのだが、労働

組合の側にも、管理職試験拒否や校長着任拒否などの方針を再考する用意があるという。私の方からは組合側の「管理主義」反対をどうやって運動化するかについて、注文を出しておいた。組合が校長に直接対決するというよりは、父母、生徒を巻き込んで、非組合教師も巻き込んで、より良い学校を作るにはどうしたらよいかを話し合う中で、校長の管理主義を是正していくよう努力できないか、そう運動を展開するのであれば、知事も側面から協力しようという意見を出したのであった。三者は組合にもちかえってよく検討してみるといった。福岡の運動が全国の範になるようにやってくれと頼んでおいた。組合の組織率は低下する一方という現状だ。

7月5日（日）

男女雇用機会均等は他人まかせではいけない

梅雨も今日のように晴れると忘れたかのようにすがすがしい。誰もが乾物に気を使うよう都合よく日曜であった。しかし、働く婦人の集会や社会党地方議員団会議というように、日曜だのに出かけなければならないとなると、日本人はほんとうに「働き蜂」といわれるだけのことはあると思う。去年は男女雇用機会均等法が施行されたが、女も「働き蜂」の男に伍してよく働くようにとの期待が強いといわれる。均等というのはよい条件の方に倣わせてこそ本来の趣旨にかなうのであろうのに、その逆であるようだ。女も男と同様に残業や転勤に応ずるよというのだそうだ。そんなのを均等というのだからおそれ入る。近頃の政府がそう解釈したいのだ。だから男女均等、平等というても、政府や経営の都合にまかせた解釈でなくて、労働運動の路線に乗って解釈されてこそはじめて意味があるといわなくてはならない。

7月6日（月）

旧県庁跡地処分の意見が出てきた

昨夜も十分にねむれなかったし、便秘がつづいていて体調はよろしくない。肩の筋肉の痛みは若干おさまったようだ。今日は山本辰雄、薦野健の二人が代表質問に立った。自民党よりはましとはいえ、薦野は知事選の負け惜しみをたらたら述べた。「財界九州」の五月号も同じトーンであることに気づいた。田中は立派なのに、自民の内紛、中曽根の売上税が敗北の要因、奥田は運が強いというのがこの雑誌の言い分だが、薦野も運の強さだけではないかと強調した。熊本、大分などから相手にされず、末吉北九州市長からも相手にされぬ奥田に県政をまかせられぬといたいのだが、と薦野はいう。旧県庁跡地を売却してそのカネで県政の浮揚をはかれと提案した。跡地問題はどうせこの会期に吹き出るトピックスではあるが、今日の二人は共に売却論を押し出してきた。問題提起がなされないのは知事の指導性の欠如のあらわれと会場からヤジを飛ばす自民党議員もいた。跡地はこれから熱い論戦となる。



7月7日（火）

高圧的な鳴海県警本部長の答弁

今日は盧溝橋事件五〇周年という。中国では盛んにこれにちなんだ行事があっている。また、光華寮問題をはじめ、日本の政治主流の右傾化についての中国側からの批判が集約的に問題にされてきている。今日議会在済んで一息ついた頃、中国総工会の三人の表敬訪問を受けたのだが、私はこの人達に五〇周年のことをふれずじまいで、あとでふれておくべきだったかなと反省した。それにしても今日の本会議共産党の高議員に対する鳴海県警本部長の答弁態度は、自民席からは拍手がおこったものの、一般的にはきわめて横柄高圧的で右翼警察国家主義の復活を思わせるたぐいのものであった。高氏の質問は共産党員に対する電話盗聴、監禁的拷問に関するものであったが、盗聴事件は他県のことで関知しないとか、拷問は一片の投書を信ずるわけにいかんとか押し切り答弁で、再登壇の高氏の要請に、無理に立って認識の違いを理由に高氏を蹴とばす答弁をあえてしたのであった。

7月8日（水）

体調が万全であってほしい

センナを飲んで腸の調子もやや正常化したと思うが、体調全体としてはまだ不眠症気味で頭の中がはっきりしない。年相応ということでこれが当たり前ということなら悲しいことだ。一人前じゃないのだから。でも岩元氏がとても元気をなくしているというし、執行、福留両氏の奥さんが悪いとのことで、みゆきは近々見舞に行くといっている。岩元さんにしてもまだまだということではなければならない。酒の飲み過ぎが今になって祟っているのかも知れない。でも執行、福留両氏の場合は理解に苦しむ年齢である。いずれもガンの疑いでみることができるといことになる、われわれ幸いなことである。福岡県は今なおガンの死亡率が日本一という。その仲間にまだ入りたくない。中西弥一郎氏が先日亡くなったが、ガンであった。忍君は眠るように息を引きとったといっていたが、私より一二歳年上である。いずれにせよ、快調な朝を迎えたい。知事というような仕事をしていると重圧だらけだが、それがよいのか悪いのか自分では判断できない。

7月9日（木）

自然の不思議さを改めて感じさせられる

月下美人が二輪咲いた。明日は五・六輪咲くのではないか。十時頃内田秘書が一般質問の答弁案を持って来たので招じ入れ鑑賞してもらった。自然の不思議さは驚くばかりである。あまりにも細工が届いていて完璧である。そういえばもう十日以上前、鈴虫が孵化し、今はもう二つの箱篋の中でうようよするほど活発に動きまわっている。秘書の藤本君も同じ状況にあるといっていた。ここにも自然の不思議な秩序がみえる。夕食をしながらガンなのに医学の力でいたずらに永らえさせられる命について感慨を交わしあった。昨日のページに書

いたほかに、先年隣組の原田さん(私と同年)、藤江君の父その他数えればキリがないほど知人でガンのためになくなった人が多い。私たちもいつやられるかわからない。白水隆氏の奥さんもだ。乳ガンが特に多い感じもする。与えられて永らえている命を尊しとするほかない。自然の不思議さによってわれわれの命もなくなり鈴虫も孵化するわけだ。

7月10日(金)

売上税で勝ったことを外国でも知れわたっているとルクセンブルグ外相はいう  
ニューオータニでルクセンブルグウイーク・インフクオカが開かれた。皇太子、外相、大使などずらり来ての講演挨拶、そしてカクテル・パーティである。英語が自由なら多分面白かっただろうと思った。カクテルパーティの時に私が一人代表で挨拶させられ、又、乾杯後も外相から語りかけてこられた。外相プース氏は、私に当選おめでとうといってくれた。議会で少数派たることも知っており、少しは議員もふえたようだが何%ぐらいかという。売上税で外紙も報じていたらしく、私を社会主義者と外相もいっていた。彼自身も社会主義者で同じなんだといっていた。ルクセンブルグでも少数派なんだが連立を組んでいるらしかった。大胆に話すことができるならとどれだけ思ったか知れない。この頃の若い人は大胆に話す傾向にあるらしい。英語、中国語、朝鮮語ぐらい話せるようになってほしいものだ。受験勉強と文学書を読むだけの英語で通してきたわれわれはプラクティスになるとさっぱりなのだ。

7月11日(土)

北九市長との会談を前にして

梅雨が明けたようで、まだらしい。議会会期中の中休みの感じ。中食をはさんで近々予定されている北九市長との会談の素材について討論した。末吉市長は福岡市長、下関市長、大分知事などと会談を行い、うろろうしているのが現状。「中央との太いパイプ」はどこで使うかわからない。それに、当選後県庁にあいさつに来て、私に「あなたの推していた人(松本)に勝って来ましたよ」と開口一番しゃべったし、別のところで会った時も「新北九州空港の建設頼みますよ、あなたが期成会の会長ですよ」とたしなめるような発言をした男である。これは非常に感じが悪い。できることなら予定している会談も成果のあがるほどのものにはしたくない。「県立海洋博物館」の建設など県議を通じても質問に出すなど、勝手な構想を打上げているが、だからこそ「知らん」というほかはない。しかし新北空港の漁業補償は一〇〇億もの県費を強要されるコワイもの。

7月12日(日)

真夏日の休み

一日あいたら何をするか。外仕事はもちろんできないし内仕事もする気にならない。といっ

て読書でもするかというところという気分にはならない。結局は筆を執って過ごした。晴天でむし暑い、まさに真夏日である。冷房せずにいると、室内で汗をかく。汗をかくほどの方がよいかと思って冷房なしで過ごしてみた。済生会福岡病院の小川先生は肝臓のためには食後横になるようにつとめることといわれるが、平常はそうする状況にない。今日はそれをしてみた。眠ればよいのだが、全くねつかれないのが残念だ。色紙を何枚も書いているが中には全く出来そこない気にくわぬのがあってそれが五〇枚もたまっている。捨てようかなと思うが、まあ、とっておこうと思ってためている。いつか一度に思い切って捨てないといけないだろう。今回の選挙中の未整理資料がまだ身辺にある。

7月13日（月）

早麻氏が県庁舎跡地利用について意見披露

今日で一般質問が終った。はじめの予定では三六人質問者が立つことになっていたが、途中で六人削減して三〇人になったのだが、三六人だともう一日かかる。一般質問四日間といえ、受けて立つ方もうんざりする。しかし一般的にみて、意地悪な質問ときめつけるようなのはなくて、比較的楽だった。終って五時頃県庁跡地対策特別委員長の早麻氏が知事室にあらわれ、四年間不問に付していた跡地利用については、いよいよ決めなくてはならぬ段階に来た。自分としては、地下利用をしつつも上層建物はやめて緑地として残すべきだと思うとの見解も披露した。こうした立場の裏には、RKBを中心としてNHKも仲間に入れての放送塔の建設計画が福岡市のアジア太平洋博の跡地利用として進められているので、NHKが仲間から抜けないようにするためには、それが県庁舎跡地に独自に進出しないよう牽制する必要があるとの事情があるためだとの観測も行われている。RKBが自民党県議の多くを抱き込んだ形だというのだ。早麻氏は素顔でだった。

7月14日（火）

二期目になって、保守の方も坐ってきた

浅沼組の江崎氏が来訪して遠藤政夫のことを告げて帰った。又永田室長が永倉三郎と会って二時間も彼のひとり語りをきいたという。いずれも知事選がらみの話題が主で、今は奥田知事と隔意なくやっ払いこうということだ。又、田中健蔵擁立は途中で断念しようと思ったことすらあったと永倉氏。いずれにせよ二期目になったことだから財界も保守政界も現知事に一物もってやったのではうまくいかないとはっきりいい出したように思える。一般質問もすんだ今、県議会も一期目とは全く違った雰囲気動いているとの専らの評判。課長たちも議員と接していてそれがいえるという。ただマスコミあたりの表現だと、知事の方から政財界にすり寄っていると理解させるようにもっていつている。この時点、いずれにせよ選挙結果の評価もだいたい固まったようだ。それぞれの腹構えも坐ってきている。県議会は「正常化」している。福岡、北九州両市の市長も知事と話し合う席をセットしてきている。

7月15日（水）

総合農試で、体外受精による仔牛と写真をとる

一年前から私が提唱している「技術立県」が各試験場にはかなり刺戟になっていると聞く。予算もそれなりにつけている。知事に来てもらって話合おうという雰囲気もでてきているようだ。私は試験場は地域住民の要望を汲み、それに応えるよう努力するように、職員向け放送の中でも強調した。今日は吉木の総合農業試験場に、牛の体外受精による実験成功例について広報室の側で仔牛と知事をグラフふくおか用に写真をとりたいということで出かけたのであった。いわゆるバイオテクノロジーの好例というのである。あれこれ技術集約を進めてはいるが、これで粗放制をとっている外国の肉乳に対抗できるまでになるのかどうか知らないが、ともかく日本の農業も生きる道を模索していくほかはない。食料の安全保障と自然の保護という観点に目をそむけるわけにはいかない。機械の輸出が、農産物の自由化圧力になっているが、ともかく頑張るしかないだろう。

7月16日（木）

二ヵ月ぶりに森山君と会って中食をとり業績についてきく

森山、安達らとクイーンで中食を共にした。あとで森山は大石課長と一しょに来室した。天神ビルで県物産展示コーナーを設ける話が急速に進んだ。そのテープカットを二十一日にやるまでになった。東京物産振興事務所の汚職問題が出て暗いニュースに蔽われている現代、暗いニュースばかりではないですよということなのだ。思わぬ明るいニュースがとびこんで来たんだという。天神の目抜き通りの一角に展示場を作らないかとの話が舞い込むなんて棚ボタ式ながら大そう拾い物の話ではある。森山は物産観光課に転出して一寸不平ぎみだったが、二ヵ月たった今、実によく動いて満足できる成果をあげているようだ。同じところで抜群の成果をあげるとは限らない。その意味で他課に転出するのも本人にとっていいこともある。森山の例がそれで、今後がんばるように激励しておいた。彼ならかなりなことができるだろう。

7月17日（金）

博多辛子めんたい協同組合設立総会に出席して

博多辛子めんたい協同組合設立総会があり、あとの懇親会が三光園で六時から開かれた。福岡の特産にまでのし上って、今では年商六〇〇億円に達するという。一〇〇企業ぐらいでやっているらしいが今日の組合設立には二五企業が参加したらしい。年商は大川の家具業に匹敵するといわれる。先日朝倉の万能ネギの話では、年商二六億円ときいた。めんたいは北海道、韓国、ソ連あたりから原料は入れるらしい。大したものである。福岡空港、博多駅の土産物店では抜群に売られているという。東京その他への土産品としての人気がすごいわけだ。今後、ソウルオリンピック、福岡博、国体とビッグイベントがつづくなら、人気はさら

に上昇していくだろう。それにしても「ふりかけノリ」が福岡でできないと思い込んでいるノリ業者の無気力さにはあきれている。挑戦する気力が大切ということが辛子めんたいの例でよくわかる。

7月18日（土）

ローフレンズの第九回総会に出て

知事講演の要望があつて久しぶりにローフレンズ総会に出席した。大手門会館七階、第九回総会という。九年前からずっと私はこれの会長ということで今日に至っている。ホームドクターに似たホームローヤーがあればという願望を生かし何でも法律相談する気になるよう弁護士が日常的に一般市民に接するチャンスを作ろうとの趣旨でできている。いま私が強く関与してきた社会主義協会、社会問題研究所は形骸化し潰れかけているし、地域懇は木梨氏がひとり支えてきたが彼も力尽きたとして活動を停止している。この種の団体は常に時代の流れに鋭敏に反応していかないと組織維持は困難である。団体経営に秀でた人がいるかないかが事柄を大きく左右する。ローフレンズは綜合法律事務所の辻本、白坂、前田など弁護士がそれなりに努力しているようだが、組織維持は必ずしも楽ではないらしい。

7月19日（日）

石川、城島両夫妻来訪

選挙中、候補秘書として付いてくれた石川君が今回嘉穂福祉の職場に帰るのでということで子供二人奥さんをつれて挨拶に来た。県職書記長の城島君も奥さん同伴一しょにやってきた。石川君の子供は五才と三才というからそういえば、彼も啓二と同視すべき程の年である。今日は休みでのんびり過ごせたので、こうしたお客さん相手や手紙書きをして有意義な一日であった。城島君のいうのに、現時点での県議会の問題点は副知事人事だから一連の人事には頑張ってくれという。林出納長を副知事に引上げる案が熟しつつあるが、その後任を誰にするかが問題である。野党とくに自民党は、元民生部長の井上昭和をとの声をあげている。これは反奥田をあちこちで叫んでいるので反対というべきだとの線で、早く別の候補をさがさないと時が迫っているとのことであった。

7月20日（月）

給振問題で県議会は終日空転

今日議会は常任委員会が予定されていたが、明日の給与日をひかえ、銀行利用の振込制へ切りかえられるはじめてのケースであるのに、組合費や組合の利益になる団体生命保険料の引去り業務成果まで電算機に打込んであるという事実野党がにわか反撥しはじめ、新制度への切替えは延期できないかといい、できないとの返事に、後始末をどうするか問題をかかえたままでの新給振制への移行は許せない。執行部の対処を求むということで自民、農

政、県民クラブの三派が申入れをしてきた。三時すぎだったが、それまで常任委は開かれず、又その後も執行部の返事待ちで空転をつづけた。もめることなく、明日の給与振替に移行すれば組合費や生保料引去りに反対してきた手前、メンツが立たないというのが真相である。執行部からは早急に問題点をクリアすべく検討する旨の返事をし、やっと六時頃ケリがついたが、常任委はほとんど開かれぬまま。

7月21日（火）

修正させずには措くもんかとの執念

県議会はまる二日おけている。今日も土木事務所に事務職所長をあてた三事務所につき、早急に技術職に戻せということでしたもんだして副知事総務部長がかなり自民党筋からしぼられ、結局十月に旧に復する約束をとられて、ケリがついた。副知事は済まんことになったとあやまりに来た。社会党の助信氏も仕様がなくて肩をもってくれなかったのどこぼしていた。議会が、こうしたこまかい点で人事介入することを許さない方がいいと思うが、昨日の給与振込控除問題といい、何か修正させたいというのが野党の執念で、これが今議会の特徴となっている。「四年間予算は無修正で議会を通過した」と今回の知事選でわが陣営が宣伝してまわっていたのが頭にきているので、何か修正させてやろう、数で、審議ストップに追い込むという方便を使えばできるんだとの底意が見え見えである。あと大詰め予算について修正を持ち込む可能性が残っている。

7月22日（水）

余暇を筆をもつことに使うように心がける

八月一日の朝の放送につき、議会の待時間を利用して録音した。その内容は、なるべく連続休暇をとって夏の暑さに負けぬよう体を養うと同時に、できるだけ趣味を生かし深めるように努力してほしいという筋書きである。その中に自分について、できるだけ筆を持つように心懸けているというくだりがある。安達氏が原稿を作ったので、原本を尊重することにして放送の中に入れてののだが、毎日できるだけ「かな」を書こうとの今の気持を自己規制したことになる。余の時間はできるだけ…というのが現下の気持であることは確かで、それは文字通り自己規制に等しい。半紙に五枚ぐらい「かな」練習をして取っておくというのだが、できる日よりもできない日の方が多いだろう。残念だが仕方がない。県知事の仕事など全く自己犠牲なのであるが、ひとにいわせれば好きでやっているから仕方がないではないかとのこと。そうならないようにできるだけ努力するしか途はない。

7月23日（木）

頭を上げない方がよいのではないか

知事保留質問に入って、これを終ることができた。自民の井本、とくに井手が意地悪質問を

した。この二人あまり頭のよい男とは思われないが、数をたのんでちょっぴりひねったいたずらをしようという知恵だけはあるようだ。質問をこま切れに刻んでひとを小馬鹿にしたように扱い言葉尻をとらえてひん曲げ、自分を誇大に見せようとする、頭を下げるほど尊くみえるというが、井手宗夫はその逆で、必要以上に自分の頭をあげ、問題のないところに問題を作ろうとする。今日の予算特別委員会はそのため一たん休憩に入るという異変がおこったが、どう転ぼうと絶対に大事に至らないと私は思ったので、周りはヤキモキしたかも知れないが、私は悠然と構えていたつもりである。予定では今日一切議了のはずだが、人事案件に思惑がからみ一日会期延長となった。

#### 7月24日（金）

「六月議会」終る

「六月議会」は今日一日延長日を消化して五時には終わった。明るいうちに終るとすがすがしい。議場ではしゃちこぼった議員も、コチコチになって発言し、異情な状況を呈する議員も議場から出ると常人になる。笑いも出るし頭も下げる。議場というところは特異な雰囲気醸し出すところではある。今回の議会は比較的すいすいと運ばれた。ただ、人事案件で、副知事と教育委員は見送ることになってしまった。野党筋から、こちらが OK できない人物を推して来たため、これを消すためである。「なぜ出さんか」との代表者会議での質問もあった（自民の早麻）が、出してもめたり否決でもされるようなことにならぬ方がよいから出さずじまいとなった次第である。監査委は別だが、他はすべて満場一致で可決。一寸珍らしくよい結末となった「六月議会」であった。上々の首尾。

#### 7月25日（土）

今なお有難いことに私の再選に多くの人に関心をもっている

六月議会が終ってしばらくは新しい心境で次の県政への抱負をめぐって頭を使うことができるようになった。隙があれば次々にスケジュールが入ってきて困るのだが、今は甘木鉄道と社会党県本大会そして東京経由で石川県の山中温泉へ、それも久しぶりに温泉につかってゆっくりできると思ったのに、羽田空港落雷事故とかいうことで温泉に着くのがおそくなってしまった。それにしても、ホテル翠明に着いたら小沢辰男氏らが拍手で歓迎してくれたのにはびっくりした。自治体問題研究所の自治体学校に招かれて明朝講話することになっているのだが、これは福岡の研究所の宮下氏が私を呼ぶよう企画に仕込んだものらしい。ともかくこんどの統一地方選では福岡知事選が全国の注目を浴び、それが私の招待、そして今晚の拍手での出迎えとつながっていることに改めて感銘を覚える。今日福岡での社会党県本大会にしても私のあいさつに多くの代議員が同様に関心を寄せてくれた。有難いことというしかない。

7月26日(日)

#### 草の根民主主義

山中温泉での自治体学校の講話につづき、夜は新潟で協会員に集ってもらって談話会をもったのであったが、両者に共通して「草の根民主主義」を力説したのであった。それは地方自治をまともな姿にしたいという思いからではあるが、今回の統一地方選のように、わが方の基礎票八〇万に対し、相手の基礎票一四〇万という状況の場合に、「草の根保守主義」を「草の根民主主義」にとり代えていく以外に勝ち目はなく、その努力を福岡でやったのだということを強調したかったからでもある。奥田丸に土井たか子という帆をあげ、売上税という風が吹いての勝利と表現された今回の福岡知事選ではあったが、その奥田丸の中味の最たるものは「草の根民主主義」の追求だったということにある。しかしこのことも分析すれば未だ甚だ頼りないのである。対話事業をひんぱんにやったことはやったが、まだまだ足りないし、知事と職員、知事と市町村及びその住民という点でとらえなおしてまだ不十分さが痛感されるのだ。

7月27日(月)

#### 問研・協会の危機

新潟の協会員的主要メンバーには、昨日の私との懇談がかなり衝撃的であった由、随行の高原氏が私に語ってくれた。以前にソ連に同行した市議の内田女史も夫妻で来ていた。高教組の人達も、一つ考え直してみようということになったようである。田鹿氏は代表格だが同様に衝撃を感じてくれたものと思う。福岡では問研、協会ともに財政的に行き詰りつつあるとか、労働組合の組織率がどこも低下傾向にあり、若者の組合ばなれが進んでいく。こうした事情は組合に入るメリットを感じないからおこっていると考えざるを得ない。そのような状況下で、問研や協会は自からの在り方を思い切って反省してみる必要があるだろう。その方向転換の模索ができないところに行き詰まりがあるわけである。二年後には全国的に労働戦線の大再編があるといわれている。このままでは問研も協会もいよいよ進退を決めなくてはならなくなる。いい知恵がほしい。

7月28日(火)

#### 予算編成のための陳情に来て

東京の空は晴れわたり、緑あふれる街並みはいつものように美しかった。しかしここしばらく大変むし暑いようで、今日も例外でなく、福岡よりも暑いではなかつたらうか。緑が多いのは他都市に比類ない。江戸の町づくり、大名屋敷などが、近代化に取り入れられ残されたためだろう。世界的にも誇れるものだと思う。われわれはこの点先達に感謝したい。それでも東京一極集中ということが今いわれていて、人が寄ってくる。資金も物資も寄って来て、ところによっては今にも飽和してしまいそうだ。地価は狂騰に近く、物価も高い。こう



いう所に住むよりは逃げ出したいし、旅行するにしても東京よりも他の地域に、他の地域よりはむしろ外国に出る方がよいらしい。何もかも、そして緑すらが高価なものになっている東京なのである。各県、各地方がどっと陳情に来る。こういう政治ムードだけでも何とかならないものだろうか。

7月29日（水）

国立博物館建設に向けて動き出さねばならない

陳情の最後の段階で、経団連の副会長の花村仁八郎氏及び元文相の劔木享弘氏を訪問した。共通のテーマは、九工大情報工学部の設備協力会に対する協力依頼ではあったが、劔木氏の方は国立博物館設立に関する件もあった。国博については、第三セクター方式ではいかが、という問題提起がされるほどに現実的テーマではあるが、予算問題がからみ何年も実現せぬままになって今日に至っているものである。今の「内需拡大策」への転化の全国情勢からみて、今は国博を九州に、福岡に、ということは時宜をえたものということになる。今日の西日本新聞社説にあったように、その実現に向けては、地元国会議員の蹶起も重要な要素である。私は加えて全国の学識者の動員も必要だと考えている。この二つをどう組織していくかがこれからの勝負どころだろう。地元の九州会議では国博の下絵が出来、八月十二日に陳情するという。

7月30日（木）

ミュルダールの福祉国家論について若干の印象

ミュルダールの「福祉国家をこえて」を時々ページをめくる程度によんでいる。二〇年も前のもので一度はよんだ（その形跡がある）のだが、すっかり内容は頭に残っていないものだったが、今、あちこち参考になることが多いのにびっくりしている。民間の自由な組織がずいぶん発達しているスウェーデンであり、それに国家の干渉、計画に追いついていく、ひとりだけで計画経済化していくということが印象深い。「国は後から」ということなのだ。マルクス主義の革命論とは逆であることは確かである。中国に、国破れて山河在りという言葉があるが、その山河はそれぞれ自由に発達した民間組織と読みかえてみたらどうだろう。今日読んだ部分に参加（無関心の逆）のことが書いてあったが、これなくしてはすべてが形骸化してしまい、民主主義は亡ぶということが強調されていたが、この点もわが意を得たりとの思いで読んで行った。まだ半分も読んでないので、興味は残る。

7月31日（金）

第四〇回県評大会に思う

県評第四〇回定期大会が開かれ、今次大会では役員が大幅に交代する。白石健次郎、岩崎隆次郎の議長・事務局長が引退、坂本隆幸、松田留吉の二人がこれにかわるという。岩崎は二

度の知事選挙を成功させた功労を誰しも高く評価されつつも、内部からの続投の声がなくなり引くことになったのであるが、これが大きなニュースといえるだろう。労働戦線のことは全くわからなくなった私ではあるが、ここ数年のうちに全国的に全民労協再編攻勢の中で、これまで左翼バネを担ってきた総評も、そしてまた福岡県評もこの大会を機に、大きく変わっていくだろうといわれている。右旋回と表現するだけでは足りないだろう。むしろ労働組合の必要性についてすら根本的に問い直される時代の入口に立ったようにすら感じられる。官公労はどうなるのかということも今後の課題である。組合が何としても必要だということも少なくなかろうから、混沌の時代を迎えるのかも知れない。

## 8月要記

睡れない日がつづく。何か心配ごとがあるとか、睡眠時間にゆとりがないということではない。また、多くは就寝後間もなく眠りに就いているようで、ねつきが悪い程には感じない。済生会病院でもらっている安定剤を半錠ずつのんで就床するせいか、就眠には心配する日、悶々する日はほとんどない。ところが、午前三時から六時頃にかけて必ず一度、時には二度、トイレに起きる。覚めるわけだ、そのあとがいけない。浅いねむりか、悶々か知らぬが、熟睡に至ることはまずない。トイレにいったそのまま起きてしまうとすれば、その日は一日使えないものにならない疲れを感じずであろう。こうした不十分な眠りのため、日中は常時眠い。車の中での一寸した旅になる時は、横になって目をつむる。一時は眠っているようだ。それにしても、不十分な眠りのため毎日頭がさえないのには何だか老境とはこういうものなのかと考えこんだりさせられる。他の人達が歩んでいる後姿をみながら、あの人の頭はさえているのだろうなど想像したりする。世界が透明でない状況は何となく淋しい。どことなく終末感に陥る。ねむれるような環境がほしい。

## 8月1日(土)

地域懇は続けたいということだが

夜グランドホテルの松風(地階一階)で夕食会形式での地域懇が開かれた。木梨氏が主導し、娘さんも事務的な仕事をひきつづき手伝ってくれていた。出席者は権藤、石村、内田一郎、佐久間、菅原、上田恵子、河野信子、森祐行、木村晃郎、県立美術館の彼、それから文学部の社会教育の彼、その他全部で常連ともいえる十数人であった。花田守氏も、知らぬ女性もいた。文筆家で教育のことにつききびしい発言をしていた人だ。木梨氏が父娘で事務局を背負ってきたのだが、なかなかうまくいかないでこの一年ほどニュースを休刊したままであり、この懇話会も解散しようかと考えていたのだが、それぞれの意見は、存続が希望で、今日の皆さんの発言も同じトーンだった。木梨氏の内意は、地域懇は奥田さんがいないとやっつけいけない、知事を出しただけでも用済みといえる程だ、事務局経費は続かないということのようだ。それでは、こうした問題を今後みんなで克服できるのかどうか鍵となる。

8月2日（日）

フィンランドからは私達の来るのを待っているという

八月十五日に北欧に出発する予定なのだが未だくわしい日程がわかっていない。今日午後安部寿美子さんがやってきてクオピオのライヤのうちでは心待ちにしている旨を私に告げたが、今のところ答えようがないわけだ。彼女は七月八日から二十八日まで二十日ほどライヤと共にフィンランドを体験して来て大変よかったとって写真など見せてくれた。緑の多いのんびりした風景が写真に多くおさまっていた。当方は厚生省関係の出張名目ですべて公用の内容となり、旅程から通訳までひとまかせなので、自分で組むスケジュールとはまるで違う。ライヤの方では、私が是非来るよう待ち望んでいるし、その日時が早目に知りたいたいとのことである。寿美子さんは至れり尽くせりの応接をうけて満足だったとっていた。向うの夫妻は共同住宅に住み、湖の中にある島には別荘をもっているとのことである。

8月3日（月）

飯塚地区での知事をはげます二つの会

夜の行事が飯塚で二つあってつき合った。一つはのがみ会館で、この地域の人達で後援会を作って知事と語ろうという会である。後援会を作るのは県下でははじめてではなかろうか。商業その他小経営の人達が中心である。前県議の岡松氏も会の中心的役割を果たしているようだ。もう一つは、このあと近くの嘉飯山地区労会館に集った地区県民の会の人達で、地公労の組合員が主要メンバーらしかった。この地区二市八町は知事選で完勝したのですと報告してくれた。私が、教員組合のメンバーの中には、奥田勝利によりかえって組合攻撃が強まったとの声もあると、教育委員会のしめつけ問題にふれてあいさつしたのに対し、この地の高教組の人達は、それをうらみに思っていない、じっと耐えて自分達の力と工夫で教育をよくしてみせますといてくれた。確かに、保守勢力が教委の独自性をよりどころにして反動的攻勢を教育現場で強めているのが事実のようだ。耐えて克ってもらうしかない。

8月4日（火）

久留米水の祭典

やけつくような日照りの中、久留米水の祭典セレモニーとデモに参加した。六ツ門が主な舞台。五日から三日間が水天宮の祭。その前三～五日が、この水の祭典。市民の祭として前近見市長が始めて今回で一六回目。すっかり地についてきたし、有名になり、筑後一円、県下、近隣県にも知られ、かつ国際化さえしてきた。水天宮には神様があろうが、市民の水まつりには神様はいない。市民か水か、何が神様であっても、なくても、どうでもよい。博多どんたく同様に市民がみんな、何かしてさわいで楽しみ、毎年それがくるのを待つという生き様が、みんなの同じ願いであるということに意味がある。その意味で近見市長はいいことを思い立ったものだ。筑後川辺で明日は花火大会があり、この日が水の祭典と水天宮との接点

になるというのも面白い。今はまだドロくさが各行事に感じられるが、だんだん洗練され、伝統性を深まりを増していくのではないかと思う。洪水と旱魃と、生活水、産業用水を考えて水を大事にしたい。

8月5日（水）

田川地区企業立地説明会が大阪で

関西での企業立地説明会は、今年は田川地区に限って、田川郡市の市長、町長らが参加して行われた。つまり田川地区の用地売出しに的をしぼったものになった。客集めも少なくないよう配慮され、一〇〇人をこす人達が参集してくれた。主催は県、田川地区促進協、地域振興整備公団の三者で、三菱総研から高橋氏が一時間ほど講演し、あとは地元からパネラーを五人参加してもらってパネル方式での意見発表を通じて、田川地区のよさをPRしようというのであった。高橋氏の講演は時間不足の感があったが、円高新時代というのが基調であった。今日一ドル一五〇円というのが、一六年前のニクソンショック時の三六〇円とくらべ大変な日米経済関係を招来しているが、アメリカの国際経常収支と国家財政の赤字という双生児と高金利という破綻状況からして円高は今後さらに進みつつ、インフレ前夜の感すら生じているというのが筋で、日本企業の空洞化はさらに進むだろうとの観測である。

8月6日（木）

田中健蔵と三善英毅に合って言葉を交わす

新大阪九時半ごろの列車で帰福したのだが、列車の中はほんとうにのんびりできる。数時間でまどろむこともできた。毎日このような時間が少しでもあるから助かる。長い車の中だと、からだを横たえてねむる。飛行機の中でも少しとはいえ眠る。これがあるから何とかなる。もしなかったらカラダをこわしてしまうだろう。日程がつまりすぎている。一昨日は久留米往復の中の車がよかった。ここでも少し眠っていたようだ。正式の床の中でのねむりが浅いので、このような車中でのねむりが健康保持に役立っているものと思われる。ところで今日は知事選がらみでひょっこり会った人が二人いた。一人は九電新社長就任祝賀会での田中健蔵氏（ニューオータニ）もう一人は報道関係責任者知事招宴（三光園）でのRKB三善英毅である。田中氏は「今何していますか」「あと片付け」「もうすみました？」「うん」「ショックだったでしょう」「そう」と、対話を交わした。宴席でぼんと出くわしたので握手を求めて話したのである。三善は田中がもう一度知事選に出るだろうといていた。

8月7日（金）

管崎宮七夕祭の揮毫式

七夕祭揮毫式があって管崎宮でやった。一生に一度しかないことではある。「寛」の字を選び、草書体で書いた。藁で作られた太筆で三六畳の広さの紙に書く。第一筆が重くて、第二

に、藁筆では筆の運びが思うようにならず、第三に、墨がよく乗らなかった。白い羽織に袴、白足袋、白鉢巻、タスキ掛けと形はよいが、出来ばえはどうだったろう。足首ほどの太さの竹が筆の軸。重くて動かしにくかった。秘書室長のほか、佐々木、杉山ら、みゆき、藤江らが見に来ていたし、親達に付き添われての子供達が、六～七〇人囲りをとりかこんで見物する中、バケツに墨を入れた神職の人達のかいぞえがあった。管崎宮に筆塚なるものがあることはじめて知ったが、その前で揮毫したのであった。「寛」は草書体で書いたが、寛楽、寛恕、寛平など、筆をもって時に書く字であるので、それを選んだのである。藁の筆を、棕櫚に代えることができたならもっと墨が乗るだろうと思った次第である。

8月8日（土）

県民大学講義

今日は県民大学と粕屋歯科医師会と二つの講義が重なって肉体的には一寸した重労働の日であった。二つの講義は同じトーンであったが、後者では地方自治という点に短い時間ながら半分をこれにさくことになった。前者では県政の全般にわたって、私の平素考えていることを体系立てて説明することができた。聴衆は四〇〇以上だったと測定され、みんな終始熱心にきいてくれた。福岡県は今や再出発しなければならぬ時に来た。厚重長大から薄軽短小への切りかえ時代の中にあって石炭なきあと、改めて八幡、大牟田が地域経済の落ち込みの淵であえいでいるが、もはや新しく自分の足で立つべく方途を定めなくてはならないわけで、技術立県、国際化、交通体系の整備という戦略課題を解決すべく「ニュー福岡」を建設していかなければならないというのが大筋の話である。他方自治という視点、民主的行政遂行という課題についても、高令化課題についてもふれておいた。

8月9日（日）

政治的立場を消化する時間が求められている

十時から三時半頃まで来客だった。衣笠、八丁、高崎の三人である。奥田事務所をどうするかが来意だったようだが、これは結局今の赤坂門につづけておいていたのを閉鎖しようということに今日結論が出た。今の私には、行政上の行動があまりにも多く、事務所にかまっておれないという実態のためである。秘書室は、私の政治上の生活のみならず、私的生活にまで食い入るような日程を組んでしまう。毎日奥田事務所に一時間でも立ち寄ることができるようになっていると、事務所をおいておく意味もあるのだが、それができない。それに、今のところ私の代わりをする適任者もない。この三人は私の政治的な立場なり行動がもっと明確になることを強く求めているが、秘書の方はその思いがない。選挙を誰がしてくれたか、ほとんど考えない。この点大きな弱味というほかない。無理がどんどん積っている。外部の不満はうっせきしている。結局私の責任で何とか調整するしかないとは思っているが……

8月10日（月）

家族の転形期におけるわれわれの行動

RKB 報道部長三善氏から家族・氷河期という彼の著書を贈られたので早速、車の中を利用して読んでいます。以前の家族というものが崩壊して今はそれが見定めぬ氷河時代に入っているということがこの本の趣旨のようだ。アメリカの離婚の例、スウェーデンの社会福祉の発達が家族の崩壊に拍車をかけている例など、問題提起がなされて実に興味深い内容ながら、では著者の結論はというとまだそれが見つからない。以前の家族の機能が崩壊しつつあり、何か新しいものがこれに代って見出されなくてはならぬという問題意識には私も賛成だが、ではどのように努力すれば崩壊傾向が救えるのかというと、私にも確たる結論はない。必要なのは私どもが進んで社会に警告と道しるべを与えることなのだ。批判はその第一歩だが、そこに止まっていたら評論家の域を一步も出ない。必要なのは将来を見とおした指針を示すことだろう。

8月11日（火）

「とも補償」による減反対応を現地に見る

日本の農業に明日はあるのか。この大きなテーマに取り組もうとして本年度第一号の対話事業が農業士を対象に瀬高町で行われた。三割の米作減反が強いられている現状の中で、農村、農業はあえいでいる。誰が考えてもこの状況に対して名案はない。瀬高町では三ブロックローテーションで大豆への稲転を試みている。「とも補償」という連帯を案出したのである。他産業では協同の減産策はあれこれあるが、農業で一戸一戸が補償し合うという連帯ができるというのは珍しいし、将来への協同の新しい模索であるといつてよい。連帯によって助け合い、厳しい状況をくぐり抜け、新しい農業のあり方を探し求めようというのである。町長は三年たってみないと成果は見えないという。しかし、新しい方式で逆境を切り抜けようとするその途を探り当てたというところに、明日への光明があるといつてよいのではないか。そんな気がする。とも補償の仕方については数字上のこまかい計算があるが、これは措くとしよう。銘々勝手に減反に対処するのと雲泥の差だ。

8月12日（水）

旅券の収入印紙を金券ショップを通して換金していた事件

人事課が旅券発給事務で汚職のあった清平及び旅券を紛失した管理責任追及など、この春以来国際交流課でおこった二つの事件について、処分案をもってきて決裁を求めた。清平はパスポートに貼付する収入印紙を二千万円分ほど一年余にわたってごまかし消印し、金券ショップを通じて着服していたもので、六月県議会で当初から問題にされていたのだが、このほど本人が自白したので懲戒解雇に決定した。これでようやくケリがついたのでホッとした。清平は二十六歳、西南大卒業後県に採用後、三ヵ月後から犯行を重ねていたもので、

奥田知事は自分の不名誉になることだから問題になしえないといい、かつ今までずっと犯行の事実を否認しつづけていたずぶとい男だそうだ。昨秋あやしいとみられ、職場をかえられていたもの。処理がおそくなって言訳しにくい、ここまで来て筋が通ったもの。

8月13日（木）

夏休み

休みとして一日中在宅し宿題になっている揮毫に時間を使う。近頃の天気は曇り勝ちで時にはげしい雷雨となる。日照りが少いので、稲作にはよくない。減反三割を消化するのに農村ではいろいろ辛苦しているのに、不作となると追打ちされるようなことになる、なるべく天災は起ってほしくない。うちの鈴虫はまだ鳴かないが、どこかからもらってきたという鈴虫はもう鳴っていて虫籠共存で夜はやかましいほどという。藤江君が籠を別のところへもって行って睡眠妨害をさけている。まさに夏、網戸をかいくぐって入ってくる虫、開け閉めの時に便乗侵入する蚊など家の中でも虫には事欠かない。蟻やゴキブリも活躍している。カン高い啼き声を出しているのはヒヨだろうか。小鳥、中鳥がかなり多い。緑が多いので虫も多く、それだけ小鳥も寄ってくる。

8月14日（金）

間中至楽

間中至楽という言葉があるが、休みが二日つづくと思うようにできてとてもいい。中食後一時間横になってうとうとした。身边がなかなか片付かないでいるが、これが自分の身边で自然なんだと思う以外にない。安部スミ子さんに電話してクオピオのうちの電話番号など聞いた。改めて更にいろいろのことを知らせてくれた。啓二からも電話があって、要するに先方様によろしくということであった。昨日から旅行用のスーツケースの中味についてあれこれ点検している。北欧はもう十一月の気候と思わねばならぬようだ。若干厚物をもって行くことにした。九泊十日の旅行だが忙しいのか暇があるのか想像もつかない。北欧の福祉国家だといわれて久しいが、行き詰まりつつあるともいわれている。短い旅行でその実態はつかめないだろうが、そうした点にできるだけ注意しながら旅行しよう。

8月15日（土）

北欧諸国訪問の旅に出る

今回の旅行は、国連の身障者の一〇年の中間年を迎えるに際し、世界各国から二五人の専門家がアムステルダムに集って、これまでの五年間の行動を集約すると共に、今後の五年間になすべき重点項目について討議集約し、それを国際的な機関、各国及び各国地方団体に勧告することを目的とする会議が開かれるが、日本からは専門家は参加せず、私が一人だけオブザーバーという形で参加するために、厚生省の依頼を受けて行われた旅行であった。秘書室

長の永田氏が一切事務的に形をつけてくれたので、正確なことは意識しないままに出発した。十七、十八の両日会議に出席し、あとは北欧の福祉施設の見学したり、この際私的に永年の懸案であったクオピオにいるライヤ父母を訪ねることも必要だとされた日程となった旅行であった。国際会議には出席しても発言なく、むしろ資料を十分に持って帰ることが厚生省からも要望されていた。その意味では気楽な旅行なのである。

8月16日(日)

日本人観光客、アムステルダム街並み

アンカレッジからアムステルダムへの旅のなか、私の顔を知っている人があれこれ同乗していることがわかった。北九州で予備校をやっているという四〇歳台の男性が機内で話しかけてきたし、アムスの空港ではデザイン大学に出席するという若い女性三人に話かけられ、スナップにおさまった。彼女たちは、中食時にもアムス河畔のレストランで再会した。ここでは名古屋のデザイナーと称する人にも会った。知られているのである。夏休みとか円高とか、レジャー時代とかいろいろ説明はつくが、日本人の海外旅行者の多さにはびっくりする。アムステルダムでの感想は、二〇〇年三〇〇年も前の建造物がよく保存され、しかもそれが特別な箇所というよりは日常の街並みを形成しているということだ。中には前に傾き道路に倒れかかるかも知れないと思われるものもある。左右の傾きは少くない。当局が取りこわさせないのである。取り壊さぬ方がいいようにはじめから設計されているのである。立派、立派。

8月17日(月)

水のストックホルム

障害者対策についての世界専門家会議にオブザーバーとして出席するのが今回旅行の目的だが、資料をもらってきてくれればよいというので、今日はストックホルム郊外のLO労働学校(会場)に行ったものの、会議なるものには出席せず、来訪の署名だけをして、むしろ大使館訪問、市内見物に時間を使った。北欧に晴天を運んできたといわれるほどに、今日はポツカリ晴れ、初秋のすがすがしさが満喫できた。海がすべてとあってよいほど海の条件を生かしたストックホルム。地下鉄にも乗った。遊覧ボートにも乗った。バイキングも楽しんで美しく時間をかけて沈む太陽、夕暮れ時の落付きに酔うこともできた。大使はスモークサーモンをすすめてくれ、この国が魚をよく食べることを知った。オランダ同様、十六・十七世紀の古い建物が公共的観点から入念に保存されているのにびっくりする。日本なら明治の建物でも重要文化財になるのに、この国ならそんなのはざらにあるのだ。

8月18日(火)

歴史を保存再現する努力に感銘する



スウェーデンの運輸省につとめている熊田氏が今日一日私・永田の二人をストックホルム市内観光案内に奔走してくれた。ホテル・セルゲルプラッツは彫刻家セルゲルの工房のあとに造成された広場名をとったもので、ホテルのすぐ前がその広場。そこで花市、野菜市が開かれる。少し行って中央駅そして古い市庁舎。ここではノーベル賞の授賞式その他国際的なミーティングが行われる。地下鉄に乗って世界最古の野外博物館といわれるスカンセンに行った。全部見てまわったら一日かかるだろう。われわれが見たのはこの国の中世農村事情をかいまみる諸展示施設。庄園主の威げんが感じられる居住構造が再現されていた。小高い丘の上にあるがここはストックホルム市へ海から入る首ねっこを守る要塞があったといわれる、ユールゴデン島そのものである。日本では明治村があるが、もっと古いものを模造してでも再現し一カ所に集めたものが欲しいなと思った。ヨーロッパ諸国でいつも感じさせられるのはこうした歴史保存への努力である。

8月19日（水）

コペンハーゲンのクリスチャニアのこと

コペンハーゲンにも落ち着きが多かったがとりわけ驚いたのは九〇〇人の住民がいるといわれる解放区が厳存していることだ。一七世紀初めのクリスチャン四世が築いた港の一角にあった陸軍兵舎廃屋あとに、一九七一年ヒッピーたちが占拠してできた治外法権部落ともいべき部分である。立ちのきをめぐり、国や市当局と紛争を重ねたが、一九八六年居住権が認められたという。かつては麻薬、暴力など問題が多かったが、今は平静のようだ。説明によると九〇〇人のうち三割は一般の市中に職をもち「通勤」していい、他の三分の一はこの自由都市内でレストランや自転車修理その他の自由業をもち、残りの三分の一は純浮浪者だという。七〇年代の極左グループの生きざまと平和が結びついてこのような異常が正常にされたということもできよう。この連中にも、家族ができ、自身老化という問題は不可避であろうが、今後を、平凡な形で乗り切るには、問題がどう発展するかが見ものである。一つの社会を作りえても自治体的、国家的権力の問題をどうさばいていくのだろうか。

8月20日（木）

クオピオ郊外の湖畔の島小屋で一泊

今回の旅行の私的な目的にフィンランドのクオピオに行く件があり、今日それが実現した。ライヤの里で、孫サリーを連れてライヤも帰省中なのでそれが叶えられた。二年前彼女の両親が日本、福岡にやって来た返りでもあって、私達には是非来るようにとの強い要請もあった。それより以前、前回知事選の年の夏には行く予定にしていたのに、選挙の結果行けなくなったという経緯がある。今年は安部寿美子さんがライヤに同行してクオピオに先行し、二十日ほどいて先月末に帰国し、私に情勢のあらましを語って予備知識は与えてくれていたのだが、聞くと見るとではまるで違って新鮮そのものだ。みゆきも直美も今年行きたかったよう

だが、安い航空券が入手できないこともあって断念している。私の場合、公用の形と結合させて、こうした思いを叶えるという結果になった。困るのは向うの両親と全く会話ができないことだ。ライヤが中立にする以外全くだめ。でも気持は通ずるので何とかできそう。今日は夕方湖畔の小屋で一泊だ。

8月21日(金)

フィンランドの自然のたたずまい

湖畔の小島でみる自然は、太陽も湖水も赤松も下草もキノコも苔もみんな自然そのもので一所懸命生きようとしているようにみえる。きびしい中で生きられるだけ生きようとしているようだ。日本では人間がわがままに振舞い、自然を壊し、踏みつけ、きこえる音もほとんどが人間的な音であるのに対し、ここでは極大から極小にいたるまで、それぞれが静かに共存している。朝早く湖水に二羽の水鳥が浮び、空とぶ鳥も一羽みられたが、平穏で争いがあるようにはみえない。湖の水は動いているのだそう。南へさがってバルト海フィンランド湾に注いでおり、船はソ連領を一部通るが、クオピオまで遡上してくるという。石油もその船で運ぶし、冬になると結氷してその上をトラックが走るのだという。地元の人も自然に似てか鷹揚にみえる。その点日本人はそわそわ、せかせか忙しすぎる。きびしい自然の中でゆたっとしている。それでいて抜かりがない。フィンランド人がそのように見えたのである。

8月22日(土)

フィンランドとお別れ

ヘルシンキには古い建物が比較的多く残っているがクオピオはむしろ新開地のような印象をうける。しかし急ぎの旅でとかく印象を語ることはできない。むしろ通過点にしかすぎない。日本大使館へも、伝言だけをエイジェントに託したにすぎぬ。永田氏も私をここまで送ってきて、一泊したにすぎない。チャンスがあればせめてストックホルム並みに市内見物でもしたかった。ロシア、ソ連との関係でいろいろ話題をもっているようだ。クオピオにはどんな産業があるのか、よくきかなかったが、機械産業が主力であろうとの印象をうけた。意外と水運が発達しているのに驚く。しかし、物資は豊かとは思えない。北の国だからであろう。野菜はトマト、ギョウリ、青菜類、ジャガイモそれぞれ形も小さく並べてある量も少ない。こじんまり質素に、自然の中で自然と共存しているのがフィンランドだといえそう。驚いたのはクオピオの核シェルターだった。自然に対するより人間に対し不信を強くもっているのであろう。

8月23日(日)

旅行の最終段階、ゲーテボルグで降りてしまって大失敗、とりかえしのつかぬことになることころであった

ヘルシンキ発アムステルダム行きの機に乗り、一時間半ほどして機が着陸し、みんなが降りるので、降りないでゆっくりしている人に気づきながらも私も降りた。てっきりアムステルダムと思い込んでいたので待ち合わせを約束していたピア B なるものを尋ねるが、さっぱり要領をえない。パスポート提示のゲートを出て空港全体を見直したらと思ってパスポートを出し出ようとしたら、係官が私の誤りを指摘し、その指示に従って行くと又もとの機内であった。私の誤りは時差があることによく注意しなかったこと、機が途中着陸することを予め知らなかったこと、アムステルダムの大きな空港にも地方便の着陸する小規模なピア（棧橋）があるんだなど感<sup>アツ</sup>違<sup>イ</sup>いしたことが原因であった。ここはどこですかときいたら日本客が、ゲーテボルグ Göteborg だという。ともかくアムスでないことに気づき、アムス行きに戻ることができたのでやれやれ。最終行程で間違ってしまったら大変なことになるところだったのに、やっと助かった。

8月24日（月）

成田空港で福岡の子供たちにみつかつて

機内はとても熟睡できなかったが、つとめて目をつむっていたせいも、割合に楽な日程であった。八時半に帰宅し、旅装を解き郵便物に一通り目を通し、荷物を整理したら十一時近くになった。福岡空港には出納長、林副議長はじめ県の職員、秘書室、広報室など多くの者が出迎えてくれた。安否を確かめないと明日の予定が立たないからであろう。それにしても空の旅行者は多い。成田空港はごった返していた。サンフランシスコ方面にホームステイに行っていたという県内の中学生の子供たちも、同じ機で福岡まで帰るとい<sup>ク</sup>一群にとらえられ、成田の搭乗口でしばらく求められるサインに時間がかかった。子供たちは「福岡の有名人だから」といって次々に寄ってきた。子供の心理はよみにくいが、面白いと思って気易くサインした。私のメモ用紙を一枚一枚使って書いてやった。誰が指導していたのだろう。わからない。カメラを向ける子供もいた。——成田での一齣である。

8月25日（火）

「負の社会有」

記者会見の時、北欧旅行の印象についてきかれ、「負の社会有」という言葉を使ってみた。教育、道路、下水道等々を「正の社会有」とした場合、高齢者対策、身障者対策などは「負の社会有」で、これに対する対応については、北欧、西欧、米日、その他と今日の世界は四つに分類できると思うが、北欧はこうした福祉問題を社会の共有物としてまことに当然のごとく受けとめ対応している。われわれにとって個人の「負」であっても北欧では社会でこれを共有協同処理をしようということになる——という意味で使ってみたのである。正の社会有には社会資本という言葉をあてはめてもよいが、教育分野や文化には社会資本という言葉はふさわしくない。「福祉の切り捨て」といわれる場合、個人の負を行政が担って社

会有としたものを、もう一ぺん個人の負に返そうとするものである。日本にはそれがあるが、北欧では個人に返すのでなくて、いかに財政の苦面をして社会有として保持するかが問題となっている。当然化されるのである。

8月26日(水)

判断の基準の違いに用心すべし

労働委員長をしていた福大の三苦夏雄さんが、私から感謝状をもらった点につき西労の幹部に、学生運動甚だしかった頃、両者が学生部長をしていて、九大の学生が福大に押しかけた件につき、三苦が奥田に、いやごと注文をつけたことを思い出す、と語ったそう。昔のことを思い出してのことだが、今は感謝状をもらうなんて不思議な縁ということだったらしい。スウェーデンで、乗客の少ない国鉄を指して私が案内者に赤字でも列車を走らせませんかと聞いたら、赤字なら走らせない方がいいとの判断はどこからも出てこないとの返答がかえってきたが、この時私はどきとした。福大と九大では学生運動をめぐり、スウェーデンと日本では国鉄経営をめぐり、判断の価値基準が違うということは明白である。九大は学生運動のある派の動きを監視できないしすべきではないし、スウェーデンでは列車は赤字黒字の前に必要か不要かの判断基準が違うのである。

8月27日(木)

婦人林研グループとの対話集会に出席して

大変むし暑い、晴ればより。農家の収穫に悪いという話と、逆の話が入り組んでいるこのごろである。今日は豊前市の求菩提山麓の鳥井畑地区の林研婦人グループの人達との対話集会。京築ヒノキの育成に挑んでいる人達だ。枝打ちも高所になると婦人労働というわけにいかないが、その他林業を支えるいろんな労働には挑戦しているという。県費の水源の森基金は大変勇気づけに役立っている、この制度は打切らないでつづけてほしいということであった。コンニャクやゼンマイの栽培への挑戦を現地を見たが、これは即成功というわけにはいかない程度のものでしかなかった。こうした山村の婦人達が未来に希望をもち、互いにはげまし合いながら過疎化に耐えている姿を涙ぐましく感得せざるをえなかった。商品生産に(例えば山菜)しているのは結構だが、欠点は市場一般に持続的に供給するという信用を確保するという視点がないということではあるまいか。その体制がとれるかどうかの指導が必要だ。

8月28日(金)

核シェルターの話が思い出される

県議木原氏の葬儀が八幡穴生の青山斎場で今夜から明日にかけて行われる。七時からの通夜に行ったが、読経のあと、坊さんが核シェルターのことを織りまぜて「無常」について話

をした。先日北欧に行ったとき、クオピオで住宅団地に核シェルターが作られているのを見た。中に入ったわけではないが、入口がそれだと指摘され、感慨のあったのを思い出した。日本でもこうした話が何年か前に実に身近かに聞き、読み議論もしたことがあったが、ほんの一部名古屋、横浜あたりに施工されたとか、ドイツのを輸入するとかきいたぐらいで、いつしかこの問題がさたやみになったのをおぼえている。スイスでも盛んに建設されたとかであった。核シェルターまで作って命を落すまいとする熱狂者がいることを当時不思議にすら思ったが、今日の説教でも、その努力が何ほどの意味があるか、何十日かひとより長生きして何になるか考えさせられた。

8月29日（土）

共立病院西原院長らと悠鳳で夕食

共産党の小沢氏の仲介で鞍手共立病院西原院長ほか医師看護婦長さん達と福岡町の悠鳳でごちそうをいただきながらこんだんの夕べとなった（五時から七時まで）。知事選では奥田側を推したという話から始まった。出席医師の中には田中氏から九大を追出されたという人がいて、他にも例があるといい、西原院長自身は一年後輩で田中氏をよく知っているから反対したという。選挙では九大、久留米大、九産大は動かなくなり、田中で動いたのは福大だけだったという。医師会も動いたが、最後の方で、投票日には棄権しないようにとのフレがまわったとのことだった。今日集った医師、婦長たちは応援した奥田知事の素顔を見たくてこの会をもったという。西原氏自身達筆家で掛軸などこの料亭にあちこち揮毫ものが並べてあり溪雲と号する人である。庭にこるともいい、この悠鳳自体彼の好みの造りで設計造園に力を注いだというものだった。関係者の経営だそうだ。医療問題で勉強になる話題が出た。

8月30日（日）

ブランク埋めの北欧の旅日記

日曜日、夕方まで在宅しえて宿題をせっせと片づけることに精出した。一つは手紙、それから原稿、そして北欧旅行中の日記の整理がそれである。こんなことをしなくてもと思う日記だが、やはりもちつづけた意地なのかも知れない。残念ながら記憶が大変不鮮明である。それを記録した分だけでもあとでわかるようにと願って書きつづけている。小旅行だと日記帳をもってまわるのだが、今回のように荷物の多い旅行だと少しでも軽くするため、メモ用紙だけで書き残しておくことになる。思ったこと、感じたことを、そのままにかく書いてみる。主観と印象の一端だけだし、表現方法を十分に考えての記録ではないので、杜撰きわまる記録でしかない。旅行記など書くつもりならよく勉強して事前に知識をまとめておくべきなのだが、今回はそれもしていない。とにかく書くだけは書いておこうということでブランク部分を埋めたのである。明日からは平素にかえることができる。

8月31日（月）

暴風も知らずに眠っていたとは

なんで眠れないのか。いつも途中で起きて便所に行くことになる近況は歎きの一語に尽きる。必ず起きる。ひどい時は二度も起きる。北欧に行ってライヤの家にお世話になった時も全く同じであり、毎日が眠い眠いの連続で、こんな日がつづいている限り健康に有害であるにきまっている。こんな状況の中で、今朝は一時～四時頃台風一二号が吹き荒れて通過したのに、気づかないですぎた。その間はぼんやり熟睡していたらしいのである。風が一寸吹いていることは寝る前に知っていたが、それ以上でなく、朝トイレに起きて一寸吹いている。雨もか、と思った程度。朝登庁するに際し、わが家の玄関に吹きちぎられた木の葉が雨にたたかれて散乱しているのを見て、かなり吹いたんだなと思ったら、随行の福原氏が、昨夜は屋根瓦が飛び、不眠で大事に至らぬよう祈りつづけたという。新聞にも大型暴風であることが報じられていた。知らぬが仏か極楽か。

9月要記

有明海が陥没をおこし、漁業に被害が及んでいるというので、九月三日に視察に行った。六月議会でも問題になった。ノリヒジが立たない。又貝類が不漁になる。要するに漁業収入減につながっている。二メートルも三メートルもの深さ、その面積は広大である。三井鉱山の採炭が原因だといわれ、三井側は年間数十億円を投じて埋め戻しをしているが陥没の進行の方が早く埋め戻しが追いつかない。他方、石炭産業も円高の煽りを受けて外炭との競争で電力や鉄鋼セメント業界の需要側も国策である国内炭の引取りを拒みはじめ、貯炭の山は高くなるばかりで貯炭場すらなくなっている状況。当然に石炭採掘企業は採算を割って閉山の方がましという。海底陥没が採炭との因果関係ありといわれても、海底は鉱害復旧の対象にならないのが今の立法の筋。でも三井は漁民の声により、巨額のコストを費して埋戻しをしているが、それが追付かないという。あとは国が出てきてどうにかするか、漁民の訴えをしりぞけるか、でないにしても決着を求めることをサボるかということになっている。

9月1日（火）

仲間たちの思いをかみしめねばならぬ

お布施事件でみゆきが有罪罰金二〇万円、公民権停止四年の判決をうけてこの五月十六日に公民権回復となった。今日天神「てら岡」で、その「忌明け」を祝する幸夫人を囲む会が催された。私たちが仲人になったペアたちも含めて、選挙で活動した人たち、お布施事件関係弁護士たち、秘書室も含め等々五〇人ほどの集まりとなった。かなり大規模といえる。岩崎隆次郎氏が今日は県評事務局長を引退した初日だがその感慨もこめてこの会の閉会あいさつをした。適任者ということが出来る。九大法学部の石川氏が「福岡の県政は面白くなってきたというのが全国的な評」といっていたが、いろんな意味をふくんでいるらしい。「面

白くしなければならぬ」と私は答えておいたが岩崎氏も同じくそういていた。それにしても、こうした集會に皆さんがこんなに集ってくれるということは何と有難いことだろう。皆さんの思いを十分付度しなければならぬ。

9月2日（水）

県営住宅の家賃の滞納に甘い姿勢が

県営住宅の家賃滞納処理がなかなかうまく進まないということが建築都市部の住宅管理課長から報告された。この問題は二年も前から県議会からの指摘をうけて解決に乗り出した問題であるが、居ずわりを決めこんだ入居者がかなりあって裁判沙汰になっていて、なかなか解決に至らない。滞納はむしろ増えつつあるようだ。今日の報告では「滞納増加のテンポは弛んだ」というようなことである。「取れるなら取ってみろ」とか、「うちまで裁判沙汰がまわってくるには、まだまだ日数がかかる」とか言って滞納解消に積極姿勢を見せない者がかなりあるといわれる。県当局も裁判にまで持ち込むのに手数料がかかるとか、面倒だとかで解決に消極気味とすら見えるフシがある。私は、これでは同じ入居者間に、及び県民と滞納者間に正義感のバランスが保てないではないか、滞納を許すには、入居者の積極的な要請か、許可規準を明確化するか何か尺度をキチンと作れ、でないと督促せよといておいた。

9月3日（木）

漁業権とは何だろう

有明海漁業で問題となっている三井炭鉱々害による陥没海底現地視察に行ったが、海底は鉱害復旧の対象にはならないので三井と漁連の話合いよるしかないが、県は何とかしてくれとの要請をうける。片や有明海区研究連合委員たちとの対話集會では、海苔のコマ賃借料が生産者にとってコスト高になっているので漁業権を生産者に渡すよう県が行政措置を行ってくれとの要請をうける。又、筑後大堰で取水による漁業補償に関連して今後とも漁業振興上の措置をとりつづけてくれと漁連から要請をうける。今日の有明漁業関係視察は「漁業権」というものを最大限に駆使することに関連しての要請攻めに終わったといてよい。漁業権とは一体何だろう。帰りの車の中で反問してみたがやっぱりよくわからない。漁業権が財産としてひとから代償を取るものに固形化している。固形化させた行政措置の積み重ねにこそ問題があると思うのだが、誰も責任を感じてないのが現実だ。

9月4日（金）

東京一極集中

東京一極集中ということがいわれ出してからもう三年にもなろう。今日のサマーイン（山ノ上ホテル）で野村総研の上野氏の講話をきいてその実態が数字で示されて驚き、実感がわいてきた。六本木など二十四時間営業といていいほどのにぎわいだが、その裏には、主要ビ

ルが二十四時間営業する価値があり、それに対応できないビルは建てかえすら検討されているという。だから地価が狂騰するといわれている。坪一億円を越す所もあるのだから、外国の商社、金融会社などが短期間に集中立地する。円高が煽られる。東京のそうしたところに立地して引き合わない団体は引揚げた方がいいし、地上げ屋から立ち退かされる。こうした騒ぎがいつまでつづくだろうかと疑いたくなるし、反動を考えると犠牲者が気の毒になる。地方の中核都市でもその煽りを多少うけているのだが、こうした経済的狂乱の中で、政治はよくなっていない。

9月5日（土）

知事と職員との対話集会

「職員との対話」という行事をはじめもった。二時間たっぷりあてた。対象は各部課長補佐、係長を二名ずつ。一番要になる部分を握っている人達であり、働き盛りでもある。私はこの階層の者の意見を行政執行の参考にすることが大事だと平素から思っていた。集会のテーマは「職場の活性化」であるが、こうした試み自体が活性化になるはずである。対話集会には知事と県民、知事と職員、職員と県民、職員相互という四つのパターンが考えられるが、従来は知事と県民を実行し、職員と県民を推奨することに止まっていた。今週の庁議では職員会議なるものを取あげたのだが、これはある程度行われている模様である。が、魂が入っているかどうか疑問である。これに魂を入れるためには知事と職員というタイプの対話をかませる必要がある。今日の試みには対象者たちはよろこんでいたようだ。

9月6日（日）

多川さんの茶室に招待されて

ニシキおしめで名を高めている多川博氏が昨年末から京風茶室を营造していたが、年末あいさつで行った時、完成したら来て下さいよだった。今日その日になってわれわれ夫妻ごちそうになった。キサクな人で福岡商工会議所の副会長をしていて、役柄十分である。親譲りの業種ながら、一代で名をなした人として、支店経済依存の福岡県としては崇敬に値する数人の中にはいる。茶室をもつことは大なる贅沢である、日常的に、又交友の点で経費のかかることであろう。意義あらしめるにはそうなくてはならない。しかし彼にはその価値があるように思う。ただし今日のわれわれの環境からしてとても日常的に茶の雅もサビもないが、彼にはあるのだろうかと思ってみたくなる。戦塵を洗い落とし、寸暇を清めるのにはいいことであるに違いないが、その余裕すらないのが我が身である。

9月7日（月）

岩崎隆次郎氏県評を去る

岩崎隆次郎氏と二人で六時から浄水茶寮で夕食懇談した。九月から彼は長かった労働組織



の役員の席を退き、浪人の身になっている。県評の議長をしたり、あと事務局長のポスト、約二十年県評にいた（正確さは別）。その前に地区労にもいた。しばらくして出身の NHK にもどるとも聞いているが、福岡の地を動かないというし、私よりエトで一まわり若いのだから通常の職場では間もなく定年ということになる。彼自身県評を去ることはさみしかったらしいし、知事選について、過去何回か失敗しつつも私のことに関しては二度成功して有名になった矢先のことである。政治の読みにも長じてきたが、やはり組織をもたないと力量を発揮できないのだから去るにしのびない気持はよくわかる。次の知事選をどうするかという声も出ているが、次はその時というしかないだろう。いずれにしろ、社会は一面残酷で、余力を使わないまま人を捨ててしまうことが多いものだ。

9月8日（火）

#### 技術立県と営業精神の鼓舞

どうしてか知らぬが、信用金庫の役員たちと中食会をすることになった。場所はグランドホテル。県に対し三項目の要望なるものをもちかけられたが、あとの懇談はやわらかい雰囲気だった。専務という立場の人から福岡県の中小企業の将来をどう見ているかについて提言がなされたのを契機に、私は石炭問題のエネルギー転換、ニックス追上げの産業構造転換、それに貿易不均衡からくる急速な円高という三次にわたる荒波で、福岡県経済は過去の重厚長大及び支店経済による繁栄の基盤はほぼ崩れ去り、それに依存していた県下中小企業も今や他県とは違わない裸の条件で再起していかなばならぬドン底に立たされているので、明るい展望が開けるにはあと数年かかるだろう、但し展望は必ずある、その展望を切り開いていくには「技術立県」と「営業精神の鼓舞」が是非必要であろうと思うと述べた。みんな賛同の気持を示してくれた。

9月9日（水）

#### 体協の体質改善が望まれている

日本体育協会の理事会が二時から開かれ、六五年の冬季国体は岩手県に、夏・秋季国体は福岡県に決定し、決定書を受領したのは県体育協会長の永倉氏、謝辞をのべたのは私知事であった。あと記者会見があつて幕引きとなつたのだが、福岡県庁前では国体シンボルマーク旗の掲揚が行われたし、その後実行委員会の発足会、決定記念祝賀デモンストレーションが予定されている。国体をするということを決めるだけでも昭和五十六年の名乗りから始まって準備局を発足させ六〇年には内定の通知をうけ、そして施設視察で OK を取り、今回の決定通知書に至る儀式たるや大変である。煩雑な手数をかけるこうしたやり方には体育団体のわがまま体協のかたくなさが基本になっているのだが、批判は実に高い。

9月10日(木)

東京二泊で、児嶋、岩崎の二人から便りをもらった

東京ゆきでは児嶋二博氏と岩崎友四郎氏が声をかけてくれた。児嶋氏は羽田まで出迎えてくれて、車中一しよで東京事務所まで夜おそくつき合ってくれたが、つい旧制姫高時代の陸上競技部の人達に話が及んだ。天草卯先生は当時の部長さんだがまだ御元気のようにだ。耳が遠くなって不自由しておられるそうだが、一度あいたいものだ。数学の先生だった。当時授業が終って三時半頃から六時近くまで毎日のように走って走って、ぶっ倒れることもあり、夕食に食欲を失って、やがて蘇生したように食ったことも思い出される。あのような肉体の鍛錬が今日までの健康に役立っているのかも知れない。岩崎は九大の先生のことをきいて来たが、私には記憶がよみがえってこなかった。彼もいつか又会いたいねといっていた。東京に二泊もしたが、時間がとれない。一彦、啓二、直美には電話した。

9月11日(金)

実践倫理宏正会の九州地区総会

実践倫理宏正会九州支部総会に今年も出席した。上広栄治氏の演説(ご講演)を是非きいてくれとのことで、三〇分きかされたが会場国際センターのマイク反響がよくなかったのでほとんど聞きとれなかった。挨拶は私のほか太田誠一、山崎拓、市長代理であったが、田中健蔵氏も来賓として出席し紹介されていた。二階の南側正面に男子が陣どっているほかは両脇の二階、一階全部はびっしり女性が占めていた。それも色あでやかな着物姿でキラキラ。男も黒か紺に統一されていた。拍手や司会者の言葉音調に特徴があり、ひどく統制の強さを感じさせられたが、若い女達がこうして勢揃いすると美しくもあるが何だか恐ろしいようにも思われる。雑誌「宏正」が拙宅にも送られてくる。朝起き運動に力を入れているまじめな集団だが、自民党代議士が多くかかわっているようだ。

9月12日(土)

五カ山<sup>マカ</sup>湧水ダムの建設に向けて

かなり強い雨が降った一日だった。皮肉なようだが、その中を車で佐賀県庁、東脊振村、那珂川町両役場と、湧水対策ダム五カ山ダム建設に協力してほしいと要望してまわった。来年度での調査費計上の時が来ての話である。五三年の福岡都市圏の湧水はひどいものだったが、あれからすでに十年近い日月が流れたことになる。湧水ダムだから、貯水が目的である。四〇〇〇万トン<sup>ト</sup>を貯める。南畑ダムの上流になる。去年は、筑後川導水ができていたおかげで福岡都市圏も辛うじて給水制限をしなくて済んだがまだ危険が残っているので、筑紫野市に筑後大堰からの余分の水を引いて貯水する調整池の建設を計画中だが。加えて五カ山ダムの建設である。ここまですれば一応懸念はなくなるだろうといわれている。都市機能が拡大しても大丈夫とふまれている。それにしても今年は例年の三分の一の日照りという降

雨。農作物は不作になった。

9月13日（日）

地域懇を再興させる人はいないらしい

地域懇をこれからも続けてくれるだろうかと森祐行氏にきいてみたら木梨さんが手放さないようだし、彼にまかせておくとこれ以上熱を入れてやることもなかろうし、自然消滅のようになってしまうだろうとのこと。「ニュース」を発行しなくなってからかれこれ一年たつようだが、活動を再興させようという人がいない。木梨氏は娘さんがなくなってから宗教に没入、三昧の心境で、その限り地域懇にこれ以上の熱の入れようがないと森氏はいう。次の土曜あたりに西島有厚氏が博物館誘致運動の現状について地域懇で話すという通知が来ていたので、再興成るのかなと思っていたのだが、時折こういうのをやってつないでいくにすぎないと森氏はいつていた。集会のテーマは尽きないほどあるのに勿体ないことだと常々思っている。

9月14日（月）

組合費チェックオフ条例を出すか出さないか

九月県議会を目前にひかえ、代表者会議が開かれた。大型補正によって緊急経済対策が行われることが議題の中心だが、衆目はむしろ県職員の給与電算による金融機関への振込に伴って組合費引去りの業務を県が行うことを条例化すると六月議会で知事が約束したので、組合費引去りを反対している会派が、そのような趣旨の条例なら反対否決してやる、組合費は引去らないという条例を出せとっているのだと主張している。この条例を出すか出さないかが、興味の焦点になってきた。今日の公明党の「県政懇」では条例は出すなとっている。自民党・緑政連では組合費を否認した条例を出せとっている。六月議会では諸々のチェックオフの根拠を定める条例を出す知事は約束したのだから「出せ」というのである。こんな反対があるなら条例を出さないに越したことはないとの声が強まった。

9月15日（火）

かんたんに死ぬのもいいのではないか

百歳の老人宅に祝賀に行き帰宅し休んでいたら秘書の方から電話があり夕方又出勤ということになった。県議の関和虎氏の奥さんが亡くなり、お通夜ということだ。久山町山田にある関宅に行った。話をきくと、奥さんは平素病気になることもなく、昨日急に胸の痛みを訴え、明けるのを待って医院に行ったら、もう一つ上の専門医を紹介され、そこで、二週間ほど入院の要ありといわれたそうだが、しばらく苦しんだ後死亡に至り、久山町が九大と協定しているというので遺体を開いてみたところ、典型的な心臓麻痺といわれたそうである。こういう場合、周囲の者にとっては何とも名残り惜しいであろうが、反面短期の看病で済みか

えっていいのではないだろうか。本人も苦しみが少くて安楽だと思う。二ヵ月も三ヵ月も、一年もというように死に体で「医術」だけで生かされる例が多いのに比べてだ。

#### 9月16日(水)

二巡目の国体のスタートに当って

今日リーセントホテルで、第四五回国民体育大会の実行委員会設立総会が開かれ、二巡目の国体に向けての実動が始まった。これまでの準備委員会が実行委に切りかえられたのだが、会場市町はやる気がおこるし、宣伝も一そう声高になっていくであろう。あと三年、県もこれを契機に新規な発展へと楫を切りかえていくことができるならと期待される。しかし国体というものは日本体協にしろその役員、審判団にしろ、形式的なことにこだわりが強く、地元はそのためにいろいろ苦勞する。結果はすべて華美に流れる。だから来年から入る二巡目(京都)を期してスリム化簡素化が叫ばれているが、どう効果が出るだろうかである。中央からの役員審判員の接待が大変だとの苦情が今日の会議で早くも出された。彼らが威張っている、言い出したらきかないともいわれる。国体のまわりもちもいいが開催県の主体性を重んじてほしいものだ。

#### 9月17日(木)

日記をつけた効果が久しぶりに出た

ゆうべはおそくまで金日成主席への親書書きに時間がかかった。八時半すぎに山ノ上ホテルから帰宅し、秘書室で作った草稿を巻紙に毛筆で書く。これは自分らが尾崎陞氏を団長として一九七八年に十日ほど訪朝した経験を書き加えた方が親しきがあつてよかろうと思い、あの時作った帰朝報告パンフでたしかめようとして、身辺をかきまわすようにしてパンフを探すのだがとうとう見つからなかった。朝鮮の地図を見つけ出し、その出版年を手繰って、そこからその年の日記を点検したら訪朝報告原稿書きのくだりを発見し、月日、訪問先の記録をつかむことができた。それをこの親書に追記することができてほっとした。時間がかかったが何かの手がかりをもつことができれば全く忘却の過去を再発見できたのである。日記をつけている効用が今回ほど発現できたのは久しぶりといえる。

#### 9月18日(金)

本土に親近感の強い四国だと思った

金丸副総理の招きで西瀬戸内民活法懇談会が明日松山の県民文化会館で行われるが、これに先立ち、宿泊の全日空ホテルで六時半から愛媛県知事招宴があつた。知事出席は広島県竹下、愛媛県伊賀と私の三人で、高知、山口、宮崎の三県は副知事又は出納長の代理、大分平松知事は明朝到着とのこと。雑談の中でプロ野球誘致のことが出たが、四国各県はまずは誘致に関心がないことが明らかになった。四国は高校野球が盛んなところだが、香川、徳島、

高知の三県は関西球団に関心を、愛媛は広島カーブに情熱を注ぐのだそうだ。考えてみると四国はこうしてみんな関西、本土の属地みたいな性格を強くもっている。「四国独特」というものはなさそうだ。瀬戸内海はそれほど広くはなく、橋三本架けて陸つづきといった感情がある。その点、九州はやはり違う。距離もある。愛媛人は船を仕立てて巨人・広島戦をみに行くという。

9月19日（土）

向坂ゆき宅、向坂文庫のこと

民活懇談会が終わったあと、同行者は松山市内見物（愛媛県側案内）に行ったが、私は予め連絡してあって、文化会館まで迎えに来てもらい、稲生晴氏宅に行った。彼はまた家を新築していた。松山商大の学長はもうやめて、今は教授としてつづけている。彼の話では向坂夫人（ゆきさん）が、もう八〇をこえて、ひとりで鷺の宮のうちを守っていて、ひとの世話にならずやっているが、東京の地価高騰の煽りをうけ、固定資産税の支払いに頭をいためておられるとか。五〇〇坪もの広さがあるので、売却すればかなりなものになるが、他に移転する気はさらさらなく、そこに困難な問題が宿っているという。向坂文庫はいたみがひどく、法政大学に引きとってもらったが、土地も法政大に寄贈するとの意見が出たが、住みつづける限り寄贈はできないことがわかって困っているのが現状と稲生氏は私に語った。地方行政体に引きとってもらって住みつづける方法がありはしないかと私は提言しておいた。

9月20日（日）

晴れぬ日曜だった

朝九時前に出発して夜帰宅すると九時半というような日曜の一日であった。昨日今日空は快晴だが、心身ともに全く快くない一日だったといえる。組合費引去り条例を提案する件が一向にさきが見えない。野党内には六月議会で約束した件だから提案するしかないが、引去り OK の条例では否決するしかない、否定されるような条例なら執行部としては提案するわけにはいかないというジレンマ、これにどう対応するか。二十二日に知事の提案理由説明をすることになるが、その時に執行部がどう出るか、今日午後牡丹閣で三役、与党、職員課、財政課で情勢分析をし合ったが、誰もきめ手があるとはいえない。明日一日が動きとしては大切な時間帯だが、どう動いていいか誰もいえない。今日夜は夜で共産党県委の幹部らと総務庁同和問題啓発指針に対する県の見解なるものに対するニッチもサッチもいけない苦情問答を行った。

9月21日（月）

身体障害者の職業訓練

北九州市にある職業訓練校四カ所を視察した。今やコンピューターばやりでどこにも導入

され、若い人達が熱心に技能習得に取り組んでいる。若松の身障者訓練校の場合、そうした中であって、木彫りの印章に打込んでいる一群に出合った。三文判から職印にいたるまで製作している。北欧に行ったとき、身障者でも国民皆兵の原則で、軍隊にとられるんだとこのことを、スウェーデンできいてびっくりしたのを思い出す。完全参加と平等が国連身障者の一〇年のスローガンであるが、身障者も対応いかんによっていくらかでも社会参加の道が開かれており、軍隊内でも役立つ場があるというのである。甲種合格という日本の軍隊で用いられた昔を思い出すが、どんな人も役立ちうるという見方が基本にあることが望ましい。職訓校では定員がきまっていて、篩にかけられ、入校できない身障者も多い現実だが、余の処置が問題だろう。

9月22日(火)

日中ねむい毎日

やっぱり眠れない。日中のねむ気はひどい。眠るには体力が必要だとの主張を私はもっているのだが、その論法からすれば、体力が衰えたというしかない。ひとに話すと、アルコール類をねる前にぐっとひっかけたらとか、睡眠薬を常用するのはやめた方がいいとかの注意をしてくれる。睡眠薬といっても済生会病院の小川院長が大丈夫といってくれて処方してくれている錠剤を、私は毎日半錠ずつ、指示の半分を服用して就床する。ねつきはいいとはいえないが、まあまあ眠りに陥る、が四～五時間後には必ず用便に起きる。そのあとがよくない。それに、妙な夢をいつもみている。起きなければいけない時刻は七時半か八時頃だが、大変に眠い。結果として日中の仕事の中で刺激の少いレクと称する報告などを長々ときいていると居眠り半分になってしまい、しゃべっている側からきいてくれたかが疑問という苦情さえ出る。こうして毎日がつづく。

9月23日(水)

檀一雄文学碑の建立に思う

休日というのに、柳川に、市内での集会出席に、ふりまわされる一日だった。それに今日はすごく湿度が高く蒸し暑かった。柳川の檀一雄文学碑には次のウタが三本組みのみかげ石に刻んである。有明潟睦五郎の哥、ムツゴロ、ムツゴロ、なんじ佳き人の<sup>カガ</sup> <sup>ホトリ</sup> 潟の畔の道をよぎる音聴きたるべし。かそけく寂しく、その果てなき想ひの消ゆる音 檀一雄 私は文学を理解する能力があるとは思っていない。しかし、一寸でも文学的なものにふれる機会があるたびにいつも感ずるのだが、もし来世人生をやり直すことができるとすれば、文学者になるために努力をしたいものだ、ということだ。散文もよし、短歌や俳句もいい。だがさらに、スケッチができたり、絵に親しむのもいい。実際若い時から経済学を志した理由は自分ながら納得できるが、文学を志すのもまた別の角度からいいなと思う。それで生活を立てる努力は大変だろうが。

9月24日（木）

監査委員会の知事懇談という形での迫及

二時から一時間半予定時間をかなりオーバーして、監査委員と知事との懇談会が行われた。長沼、磯矢に加え県議の井上勝、高橋義治、この四人、去年までは県議は安枝と江口だった。私が知事になってからというか、昨年と今年と、この種の会がもたれるようになった。会の中味は監査の常道をはるかに超え、知事に対する執行方針の非難、詰問に終始することに重点が注がれている。井上、高橋は前の江口、安枝に一そう輪をかけた迫及を行った。今の野党は執行部攻撃を、議会を用い、監査委の地位利用、そして議会の延長した形での教委の配下での教育執行を用いるというやり方によって貫こうとしている。多数でやれることならどんな場をも利用する。むしろ狂奔する傾向がある。監査委員の知事迫及もその一つだが、こうした越権行為は大した果実を生まないのではないかと思う。

9月25日（金）

白石一郎氏の直木賞受賞祝賀

東京から帰ってグランドホテルに直行、白石一郎さんの直木賞受賞祝賀パーティーに出席し、着くや否や祝辞に立たされた。受賞対象の海狼伝の梗概を東京往復の機中で読まされていたので、それが役立ったのであるが、村上水軍のことなのであり、“伯方の塩”という青年たちの機関紙をいつももらっていることもあり、海狼伝には赤穂、室津、姫路も出てくるので、伯方島を根拠地とする海賊たちのことをことのほかなつかしく感じた。そしてとりわけ木津川河口で毛利、織田の対戦があつて毛利側が大勝するあたり、ネルソンか東郷かを思わせるような水軍指揮の描写がととも真に迫って興味をひいたので、こうしたことを織りまぜて祝辞とした。白石氏は八度目の挑戦で受賞にこぎつけ当年五五歳という。知事になる少し前から私は地域懇を通じて話し合える仲になっていた人だ。

9月26日（土）

九月議会をひかえて前門の虎、後門の狼の形になってきた。

ひるすぎになって、共産党の副委員長上田耕一郎氏が来福、知事との会見を申し込んでいて、それが明日夜知事室でというセットになったと秘書室から連絡が入った。総務庁の部落問題啓発指針で解同が反撥し、県がこれに対する意見を出すことになり、指針に対応する形で全市町村にそれを流したことについて、こんどは共産党が反撥し、前の日曜日に私が知事室に出かけ県委員長らと話し合ったが、どうやら中央の共産党レベルで、これで納めぬということになって、上田氏が直接乗り込んで来ることになったらしい。このことで、裏舞台では秘書室、社会党の動きがはげしくなってきた。明後日の本会議では給与振込みの中の組合費取扱いに関する条例案提出について自民、農政連あたりが手ぐすねひいている。まさに前門の虎、後門の狼というかこうになってきた。共産党は代表質問で意見書問題を質すといっ

ている。

9月27日(日)

共産党の上田副委員長、東京より来訪(解同問題)

昨日のページにも書いたように、午後七時から八時半まで、知事室に共産党上田副委員長の来訪をうけ、県の意見書についてのきびしい非難指摘をうけた。県側からは畑中局長、課長、そして永田室長が陪席、共産党側からは高、塩塚両県議、野見山氏らが同席した。県の意見書があまり断定的に総務庁の啓発指揮を否定しているため、上田氏はそこを衝いてきた。基本法制定についても解同に同調し、これでは解同に全面屈伏で、行政の主体性は全くないし、誤った姿勢だという。解同は啓発指針により存在の基本を奪われるからむきになってこれに反対しているのだが、県の意見書はこれに救いの手をさしのべているという、共産党側の主張は解同の主張の全面否定になっていることは明かで、私は部分肯定、部分否定であるべきだということを繰り返し、県の意見書にも批判をのべた。

9月28日(月)

九月県議会の質問の初日から「空転」

県議会は代表質問に入る今日、組合費引去り問題を含む条例改正案を「出せ、出すな」の思惑が入りまじる中で、執行部として六月議会での知事発言の筋から、出すしかないということで、本会議冒頭提案、そのまま休会に入ってしまった、冒頭から空転というところだが、どう扱うかについて、自民党内で意見がまとまらず、農政連は原案反対を崩さず、先が読めない情勢であるため、一日冷却させようということで日程は議事整理日を犠牲にした順送りになることになり、まずはおさまった。自民の中には妥協を選ぶ者、反撥する者こもごもこれをまとめる人がいない。農政連では大石、伊豆の二人が明確に組合費徴収に当局が事務関与することに反対の声を高めてきた。一般にわが国では給与支払い側が組合費から引去って組合費をまとめて組合に渡すのが、戦後の慣行になっているし、今も九割以上の組合がそうになっている。県もこれまでそうしてきたのである。

9月29日(火)

踊る板橋と竹井

代表質問が始まったが、今議会のヤマは給与条例改正の件と人事問題だ。組合費引去りについて「するな」という質問が鋭く出てくることは確実だが、果たして自民と農政連から早くも出てきた。人事はまだ裏工作中だが、二、三日後に、十月はじめにはおよその構想をわかるようにしておかねばならない。副知事の欠員補充とそれにつづく一連の予想人事異動である。これもおよそのところ固められつつある。ただ今日自民の板橋質問で、国体のスリム化と優勝至上主義批判について、教育長が私のこの方向に反対の答弁をしたのには驚いた。



これが新聞夕刊にのった。竹井教育長は優勝こそ国体の目標でなければならぬと答弁したのであるが、板橋は体育団体からつき上げられて、知事と教育長に同じ質問をし、衝突する答弁を引き出すように仕組んだらしい。つまらんことをする奴だ。竹井もまた踊らされているようにみえるし、何でも知事に反対すればほめてもらえると思うチビのようでもある。

9月30日（水）

県庁跡地利用論に一つの区切りが出た

今日の代表質問では県庁跡地について、十二月までに基本構想を出す、売却は行わない旨答弁したため、跡地問題は一步前に進んだことになった。県民クラブの牛島氏の質問に答え、夕刊もこれを報じたのであった。質問に答える形で、もう出そうという合意の上でこの答弁となったのである。牛島氏は跡地を売って県政の浮揚策に、多くの財政窮迫市町村の救済にあてたらどうかと質したのであるが、私は県政活性化論と跡地処理とは切りはなして考えたいときっぱり言ったのであった。六月議会の中でも売却すれば一〇〇〇億円が入る、それを県下四ブロックに分け各々活性化に使いとか、自治体に分けよとの発言があった。県有地は何も福岡市だけのものではないということまで加えて。・・・しかし、売った収入は交付税の計算から控除されるともいわれている。些細は知らないが、そうだとすれば、それは県の為にならない。今熟しているのは、国際交流をふくめ、九州の主都福岡にふさわしい施設建設論である。

10月要記

九月議会では副知事一人補充の人事が注目されていて、林を引き上げたらそのあと出納長を誰にするかで、野党は井上昭和をぶつけて来た。六月議会も同じパターンだったが、井上は反奥田で旗色を鮮明にしているからダメとして六月以来これを引っこめさせるのに苦労したのだが、結局は、反奥田の先鋒三坂をもう一度引き戻して次長とするという線で当方も折れ、林副知事、池田出納長の線で結着がついた。がもう一つ、教育委員選任案につき、北九地区から出してきた芳賀につき、当方も妥協させられた。これも林、池田ラインとの妥協の産物である。芳賀については異論があった、が野党は異論のありそうなのをぶつけてくる。と同時に、教育委員分野は多数をたのんで、野党の牙城とされている。今の竹井教育長の選任に当っても前教育長友野の強引な一方的なやり方のために竹井に決められてしまったのだが、このように教育畑は野党が牙城としている。竹井教育長はとびうめ国体についても奥田につっかかるチャンピオンの役を買って出て永倉体協会長と奥田包囲網の一環となっている。二人とも地位利用の最たるものだ。

10月1日（木）

年を考えて歩くこと

県議会の質問も終え、夕方途中、松本英一氏を見舞に行った。新築の立派な住居は今日の水準を示すものといえよう。彼は九月の十五日に、廊下を歩いていて、つんのめって倒れた。足骨折ということのようで、ギブスをしていた。私と同年という。トシを考えて歩くようにとの教訓をもらったようなものだ。いつだったか昨年だろう、一度二階に寝ることとして一週間ほど実行した私だが、途中便所に起きるので、そのこともあって階段の下り方には余程注意をせねば危険と感じ、二階に寝ることをやめたことがある。万一転んで怪我をした場合、世間のいい笑い物になる。甘木の中島県議が、この夏犬とたわむれていて窓から落ち、二ヵ月入院したという。このような例は少くないのだから、うっかりということのないように百戒を要する。いつ失敗するかわからないから大きなことはいえないが更に、いつも、ていねいに歩むことにしたいものだ。

10月2日(金)

議会の質問姿勢がよくなっている

木犀の香がただよって、十月が来たと感ずる。家屋のまわりには雑草が茂り手当てする立場にないし、木犀の香を楽しみにする暇もない。そんなことでいいかなと思うけれども知事という公職にあればこうした些事にこだわるひまはない。鈴虫もいつのまにか声が弱まっている。たえだえに啼いているようにも見える。県議会の質問がある日程では毎日八時半から答弁資料の検討会が庁議室で副知事、出納長、総務部長、次長、財政課長をメンバーとして行われ多忙をきわめる。十一時すぎに開会される前に二つ三つ来訪者接遇があることが多いのでさらに気ぜわしくなる。でも今議会では質問者はかなりまともな質問で対応してくれて混乱めいたことがないので助かっている。条例、人事で心配は残るものの、できればすいすいってほしい。であれば少々の多忙さには耐えていけるだろう。

10月3日(土)

問研二五周年、月報三〇〇号記念というが

五時すぎから社会問題研究所創立二十五周年月報三〇〇号記念祝賀会が大手門会館七階ホールで行われた。八丁氏が司会し、衣笠所長のあいさつがあつて、祝辞は、私と具島さん、小野参議それから県評の坂本議長が行って、乾杯の音頭は林武彦が行った。三十七年の八月頃から発足の準備に入り一〇月号で創刊号を出し会もスタートした。発足当時から関係した一人としていろいろあったことを思い出すし、よくもつづけてきたものだと思う。私が初代小林栄三郎氏に次いで二代目の所長、私が知事に出て衣笠氏が三代目の所長である。今は亡き向坂先生だが、こうした地方研究所、地方誌のスタートには賛成してもらえず、これが協会分裂の一局面をなしていたともいえる。だから社問研は向坂協会の側では無関心、無関係が保たれていた。今日の協会、問研はわが方としても労働運動の再編、停滞を反映して一種の危機的な状況にある。問研がいつまでつづくかが心配である。

10月4日（日）

墨を磨っての一日

休みになった一日、やはり墨を磨り高野切を書き、頼まれ色紙の消化にあてた。扁額、軸物の依頼については後日にしようと思ったが暮れてから、やはり今日書くのが最適と思い直して精を出し、それぞれ一枚仕上げにこぎつけた。宿題の圧迫感がなくなるとやれやれと思う。もちろん今回の色紙や軸物の注文は昨日受けたばかりだったので、圧迫感がつづいた訳ではない。日曜日だからこそ仕上がったということになると、秘書室などひと目にはきこえがいいだろうし、自己満足にもなる。反面、宿題注文でもなければ、自分で揮毫することはできにくい。注文は荷物になるがあった方が、適度の刺激になる、高野切はがむしやらに自分に鞭うって書いている。第一種、第二種、第三種とつづけてどんどん書いているが、もう六～七回にはなろう。今日は又第一種に入っている。どこまでつづけたらいいのか、他の手本法帖を使った方がよいのか判断しないままにつづけているのである。

10月5日（月）

県庁舎北側跡地の利用方法につき、今時アンケート調査をすることはもってのほか……

県庁舎跡地の利用をめぐる議会で論議が進んでいる時に、広報の方で、アンケートについて内容まで明らかにしたらしく、これが副議長、副知事あたりで、「問題だ」といい、とくに副知事は、今朝の答弁資料勉強会の中で、古沢広報室長を呼んで、「わしはもう知らん、跡地については一切発言をやめる」と怒り出した。金曜日の山本辰雄県議の質問の中で、利用方法について市町村長や県民の声をきけ、アンケートをとってみよ、とせまったので、その前日九大経済の大屋教授が来訪して委嘱をうけて跡地についても県民意識調査の項目に入れているといったのを私が耳にしていたので、山本氏の質問にアンケートをやることにしていると答えし、その内容が記者にわかってしまい、報道された。議会で知事が箱物建設を唱え理解を求めている（売却論否定）のに、アンケートで売却論を含む県民意識調査をするなどもってのほかとの怒りである。箱物作り「ノー」のアンケート結果がでたら誰が混乱の責任をとるのかというのである。

10月6日（火）

靴がなくなる夢

「夢は願望の達成である」（フロイト）と池田大作氏の「生命と仏法を語る」（下巻）に出ている。最近、靴下がなくなって弱った夢をみた。前から何回でもみる夢に靴がなくなるのがあったが、靴下にかわったのははじめてだ。靴がなくなって探しまわるがどうしても見つからない。困りきっているところで目が覚める。なくなるシーンはそれぞれ違うが定かではなく記憶から消えてしまう。靴下はつい先日はじめてだが困りようは靴の場合と全く同じである。「願望の達成」などといえるものではない。苦悩がどこかにあるのか、将来どこかで

待ちうけられているのか定かではない。苦悩ではなく困惑かも知れない。議会の会期の度毎に困惑の種は尽きないが、このことを別段苦にしたことはない。自分でも意外と気にしないのである。誰か靴のなくなる夢のことを説明してくれないだろうか。現実は何らそれらしき関連は見出せないのだ。

10月7日（水）

武漢からの代表団に仲麻呂の歌を贈る

県評の招きで武漢総工会代表が来訪し、県にもやってきた。昨夜私は高野切第一種で古今和歌集巻九のところに出てくる阿倍仲麻呂の「三笠の山に出でし月かも」の歌をたんねんに練習し、その部分だけを半紙二枚に書き出して落款までしてポケットに入れ登庁していたのだが、武漢総工会の人達のみやげばなしになった時、向うからは対になった掛軸を差し出され、丁度内容がよく似ているということを感じ、二枚半紙の仲麻呂のうたを書いたのを私の贈物とした。対の掛軸は正確には今覚えていないが、お互い、山川を異にするが同じ天をいただいているという意味のもので、仲麻呂のがうまく合うような気がしたのである。二年ほど前県評の岩崎氏らが武漢に行くとき、私が頼まれて大きな紙に書いた対の書が、今も武漢総工会にありますよと、今日の代表者はいついた。その内容は上欄のとおりである。

【欄外記入】

県会難渋復空転 半窓名月三更夢
--------------------

四面有山皆入畫 一年無日不看花
--------------------

10月8日（木）

国体をめぐる反動グルのみにくい知事攻撃

総務委員会で一つ知事保留、その役を買って出たのが中島茂嗣、「国体スリム論をいって知事は教育長や体協に十分相談しないで、自分だけで国体をやれると思っているのか」というのが質問の趣旨。この背景にあるのは、体協そして教育長。それを受けたのが自民党。チャンピオンを買って出たのが代表質問の板橋、知事保留での中島ということなのである。九月上旬中央の体協理事会で六五年国体の福岡県開催が決まったとき、記者会見で二巡目の国体なのでスリム化を考えたいと私がいったのをひっかけて、体協が、経費節約で競技力向上があやぶまれるといい出したらしい。反面では審判員や選手の接待やおみやげがスリム化されるのがこわいということであるらしい。自民ら保守勢力は教育委部分が反奥田の砦と考えているから、教育長の竹井に、知事は教育長に相談しないと云わせている。みえみえの反動グルである。

10月9日（金）

九月議会も一荒れしたがやっと終了

県議会は今日まで会期一日延長でやっと済んだ。でも夜おそくなるとか、待機させられてうんざりするということもない九月議会であった。給与条例改正案が否決されたのは、情勢からいってやむをえぬよい選択だった。修正とか継続審議になると大変よくない。否決されて従来どおり歩めるなら願ったりかなったりである。十二月議会に又問題が残るかが心配だが、これでケリがついたのではないかと思う。ここまでに副知事、出納長、社会党県議で副議長林、幹事長助信らが根まわしということでかなり苦勞した。その間に又秘書室長の永田氏も走りまわった。助信氏は、組合費扱いについて否定するような動きになるなら議会解散もありうるのだぞと、野党の強硬派を説き伏せたい。組合費引去りが、こんな段階で新規に否定されるなら非常識も甚だしいので、私も議会解散の手段を脳裏に浮べていたのだ。

10月10日（土）

三役体制がやっと整った

三役体制がやっとできた。一期目、永井氏一人、近藤氏ができて揃ったと思ったのに、昨年の七月に辞任に追いやられ、再び大塚氏一人という状況になって一年と二ヵ月。野党側はいつもゆさぶりを考えている。同時に労働組合など、支持母体と知事の離間策を追求している。このたびの給与振込制への移行に伴う組合費の差引事務にしても、常識的には問題にする必要のないことなのだ。他の項目なら差引事務をしてもよいが組合費なるが故にいけないなどと農政連の大石がいう。それは便宜供与であり、組合運動への支配介入だし、ゆえにILO条約87号の趣旨に違反し、国内法的にも、職務専念義務に違反するし、県条例の「ながら条例」にも違反するという。彼は京都大学卒業というが、どんな勉強をしていたのだろうか。低級な思考をする人だなと思う。

10月11日（日）

揮毫で暮れる休日

久しぶりの雨。中秋というに値する冷気が、半袖ではおれないくらいに感ずる。連休なので、全国的に行楽客で各地はにぎわっている模様。でもわれわれはどうすることもできないし、在宅してなすべき揮毫の仕事があった。夕方七時頃までに、押印をすませた。明日はどっさり県庁にもって行ってもらおう。読書でもすればよいのだが、時間の少い時でないと読書に気分がでないのはどういうことなのだろうか。近頃健康状態は、とくに心配するほどのことはない。右肩の痛みもほとんど感じない。唯左右とも上の臼歯ががたがたになっているので、いつ、歯科医にかけ込まねばならぬかわからぬほど、硬いものなど噛めない。左上は三、四本同時に抜歯しなければならぬほどにいたんでいる。睡眠がよくとれない状況はつづいているが、時間をかけて床の中にいさえすればまどろむのだろう、疲労感が残らない。

10月12日（月）

国体スリム化論をめぐる意思疎通のための朝食会

県体協と教育長のたくらみで、自民党を通じてのスリム国体への牽制球があった県議会も終って、その始末をつける意味では今日八時から東急ホテルで県三役が、招待する朝食会が開かれた。体協側は永倉以下次々に発言して、スリムを強調しすぎると募金に影響が出てくる、高校や大学を卒業する優秀な選手を無理して県内企業に採用してもらおうとしているのにさしつかえがでてくる、選手の士気に支障が出るなどと私に注文つけてきた。永倉は最後に天皇杯皇后杯が取れなかったら知事の恥とまでつけ加えた。私は、自分もスポーツをやったことがあるので仕合に勝つことが大事だということぐらいは議論しなくてもわかるといっておいた。が、トータルに、今日の朝食会は県とわれわれが意思疎通できてよかったです、ねということであった。ただ、こんな会をもたないとスリム化論が理解できないとは腹立たしい限りである。

10月13日（火）

試写会「ケニー」

山村謙一氏の仲介で昨日午後、アメリカピッツバーグの身障者「ケニー」試写会を見たのが印象深かった。ストーリーは単純だが、両足のないケニーをまともな弟でないのが恥づかしいとして家出する姉をケニーが追い、なぜ家出するのかと質したのに対し、姉はケニーの姉であることが恥づかしいのだといい、出て行ってくれと叫ぶ。ケニーはやはりそうだったのかと部屋を出て行く。姉はすぐ大変すまんことをいってしまったとして出て行くケニーの後を追う。追い付かなくて海に、岸壁から飛び込む。それを物陰からみていたケニーが岸壁に駆け寄る。姉弟が抱き合う。この感動的シーンがクライマックス。欧米の普通のむしろ下級ともいえる家庭の様子がよく出ていたように思うが、それよりか、姉の心理がよくあらわされていて、いい映画だと思った。ただ身障者に対する国民感情が、北欧などに比べると未発達ではなかろうかとの感じがしないではなかった。

10月14日（水）

革新系の三道県知事のパネルディスカッション

秋晴れで横浜行きの機内から黒い富士が実に鮮やかに見え、とても印象的であった。自治研第二二回全国集会の企画の一環として、三県知事のパネルディスカッションが文化体育館で開かれ、それへの参加が主目的だった。三時半から五時半まで二時間かけて北海道、神奈川、福岡の三知事が地方の活性化をテーマに意見を、抱負をのべ合ったわけだ。ただ、北海道横路知事は議会の都合ということで、テレビ、ビデオ参加という形になったのは残念であった。中央直結という従来の思考パターンから一歩ふみ出して地方の、自治体の横の連絡を重要視するときが来た。これが地方の新時代ではなかろうかというのが筋書きで、そのため

職員及び県民の自立、活性化がポイントで、その前提に立って来るべき地方の国際化に対応していこう、民際外交を高めていこう、それが真の平和の礎になるのではないかというねらいであった。案ずるよりは産むが安し<sup>やす</sup>というが、うまくいくか心配し、心配されていたのであるが、スムーズに流れた。自治研担当者たちも、安堵の胸をなでおろしていた。

10月15日（木）

神奈川県視察

秋たけなわというところだ。そこへ晩い台風が来ている珍しいことといわれる。かなり大型のようで、九州が明日夜あたり直撃されるかも知れない。今日は神奈川県が深切に私たちを案内してくれた。工業試験場と研修所（研究センター）の二施設についてである。他県の視察はいい勉強になる。昨日も提言したのだが、県と県との視察交流は意義があると思う。学んでもまねるなということだが、この二つについてもまねのしようもないほどにわが方との懸隔のあることが知らされた。工業試験場では、情報センターの仕事を主として見せてもらった。技術振興にはかなり精力的な取組みが行われているようだ。研修所も五五年から研究センターとして、研究活動にもかなり比重がかけられているのがわかった。福岡では職員はあくまで研修すべきであって研究は無用といわれているようだが、峻別されるようなあり方は勿論よくないであろうが、研究にウエイトをかけることには魅力がある。

10月16日（金）

福岡県警の「奥田潰し」の戦略の話

門司伊川公民館で対話集会をしたあと、大里に出て地区労の役員達と大勝という料理店で夕食会をした。小野参議、松永県議、野原元県議も参加していた。野原氏の豊国学園で警官OBを二人採用しているという話から、奥田県政スタート当時は、これを「潰す」というのが警察の内々の方針であったと、古い警官たちがいっているとの話まで出た。当時の酒井本部長の態度をみても、そうであったことがわかるし、田川の石炭資料館前での知事公用車襲撃事件の時の田川警察官たちの対応をみてもそれがうかがえるのがわかる。あの時の田川署の警官は身を張って暴力団の襲撃をおさえようというのではなくて、彼らが公用車を棍棒をもって一巡しているのをじっと見て見ぬ風をし、又は一步退いてみていたのが思い出される。お布施事件で今日は門司からの市議那波氏はここに来れなかったのだが、あの事件も「潰し」の戦略から出たものであることが明々白々である。酒井の背後で指令を出していたのは後藤田だろう。

【欄外記入】

初議会の時議会棟ロビーでの暴力団の知事襲撃事件の時も、警官はそこにて襲撃犯人を一たんつかまえすぐ釈放したことを今思い出す。

10月17日（土）

ポーランドの子どもたちの目でとらえられた戦争画展

県立美術館で、ポーランドの子供たちにとらえられた戦争画展をやっているのを見に行った。法学部の石川教授夫人らが実行委員会方式で、現地から終戦直後子供たちが画いた絵を借りて来て、当時の悪い紙にかいたものをパネルにして展示しているのである。空襲、ドイツ兵による強制連行、銃殺その他、リアルな、センサイなものが一ぱい並べられていて、感動させられた。日本でいう小学校の三～六年生程度の年齢の者の画いたものに違いないが、われわれが当事者だったとしてもかけなかりと思うほど手も達者である。ポーランドの悲劇がつたわって来た。反戦平和の気持がかき立てられる展示であった。石川夫妻とは下の喫茶部で小休して語り合った。反戦反核運動のグループが一般市民に呼びかけての展示会であることがよくわかった。

10月18日（日）

創価学会インターナショナル世界青年平和文化祭に出席して

北九州市立総合体育館で創価学会主催の第八回世界青年平和文化祭があつて出席。夜の五時半から約二時間、会場がすっかり作りかえられきらびやかな舞台ができていた。出演者四千人観客五千人という。しかも福岡県議も中に入れてもらえず、外での来客案内の仕事に従事していただけという。だから来客はそれ以上というか、お歴々ばかりを集めているとあってよい。創価学会の名誉会長（池田）、会長（秋谷）、その横に私、福岡市長、端に北九市長、反対側に永倉九経連会長などロイヤルボックスに占めたのだった。世界五一カ国から何人かの客演出者が参加したといわれる。演技もマ스ゲーム、合唱などすべて規律ばっしりのマス行動。大した組織力、統制力、演出力と思ったが、背後に絶対の帰属意識があるに違いない。私はこうした演技の瞬間瞬間が、平和そのもので、この長期維持こそが、平和そのものであると確信できた。

10月19日（月）

筑豊サミットを明日にひかえて

私が鉱害復旧について批判し、筑豊恥部発言をしたことについて今日小早川久山町長、県町村長会長との夜の懇親会で話題になったし、明日の筑豊三市長との討論会についての県庁内打合わせでも、それへの配慮が問題になった。前回選挙後知事として筑豊を初視察して直方の「いこいの村」で中食をした時、地元お歴々の前で、私が鉱害復旧に莫大な国費がつき込まれている点につき、活性化のためには、その資金がもっと有効に使えたらいいと発言したら、当時直方選出の坂口県議が住民感情をさかなでするようなことを言ったとあとで強く反撥した。一反の水田の沈下の復旧に一千万円もかかる話が出たので、そのカネの分だけ水田の生産性をあげるのに割に合わないではないかということをおはいいたかったのだが、



今でも、鉱害、生活保護、失業対策に要する国費投下の効用に疑問が残っている。明日のサミットでは、精神風土から変えようということが、共通認識になるらしい。

10月20日（火）

竹下登が自民の新総裁に、お布施事件についての彼の発言を思い出す

朝刊に竹下氏が自民党の新総裁になると報道された。昨夜は安倍だろうと大きな活字で出たのに、一夜明けてひっくりかえっていた。竹下は石川の嶋崎の縁戚にあたるということだったが、私が二期目当選を果たしたあと自民幹事長室に表敬で行ったとき、彼は、奥田さんはお布施事件で迷惑したですなといったのを思い出す。あけすけにものをいう人だと思ったことだった。お布施事件はあそこまでしなくてもということ。あれは後藤田が仕掛けたんだといわんばかりの発言と私には受けとめられたのであった。庶民的な風貌をもっている、が、もちろん私にとっては未知数だ。人呼んでオシンというらしい。宮沢、安倍と並んでここ二週間ばかり中曽根の後継者が誰になるか、全国注視の中、候補が三人に決まり、相互に譲り合わぬまぎりぎりのところで、投票にもち込むことなく、中曽根裁定で竹下となった。三人とも中曽根垂流といわれるが、さて……

10月21日（水）

健康診断

済生会病院の定期検診で、久しぶりに朝食抜きという条件で行われた。血糖値一六七、これは正常者の朝食後よりやや高い数値だということで、依然警戒を要することにはかわりない。血圧など正常で、肝臓に慢性肝炎がみられ要警戒という。自覚的に問題なのは依然睡眠の満足度が足りないということが第一。次は老人性〇〇といって両手の指関節がどれも強い圧を加えると痛みを感ずるという点である。この指は平素の活動には支障を覚えないが、やはり気になる。リューマチにややプラス反応がみられると医師はいう。いずれにせよ一にも二にも睡眠不足感だが、毎日の生活の中で自分で時間を十分にとればよいのと思うのだが、つつい時間とれないことが多いのと、たとえ時間があっても眠れないのだから困ったものだ。更に更に健康には用心しなければならないとは思っているのだが、恵まれてはいる。

10月22日（木）

長崎、佐賀、福岡三県知事サミット

佐賀、長崎と福岡、この西九州三県知事会議をやろうと長崎から提案があったらしく、一ヵ月以上も前から新聞がかき立て、事務方の連絡もずいぶん行われて用意されていよいよ今日長崎市の紅葉亭で三時以降おこなわれた。「九州は一つ」というけれども、私はまず隣県の間で共同の問題があれば共同連合で取り組もうではないかと前から提案していたので、今日の三県サミットは願ったりかなったりのことであった。長崎の高田知事が、日本で陸つ

づきの隣県を一つしかもたないのは長崎県だけで、それほど長崎は他県の影響を受けやすいといったのにはびっくりした。私は三県がつづいていて二つの異なる海域を共同にもっているのはここだけではないかと思うと指摘した。いずれにしろ、長崎は交通と漁業の両面で関心が高い。佐賀は空港建設に強い期待をもっていて、福岡に有明湾岸道路を期待している。

10月23日（金）

オランダ村を見学

三県知事サミットがすんで一泊のあと、有名なオランダ村を視察させてもらうこととし、九時すぎに紅葉亭を出発し、十時半頃から二時半頃までかなりゆったりとオランダ村を見せてもらった。説明者もついてくれたので一般の入場者よりも意義深く見ることができたと思う。パスポートと称するものを持たせられ、そのアイディアの躍動にびっくりした。このパスポートによると、まず浮ぶ船がプリンスヴィレム号、これは最大の帆船という、砲を13門装備している。次は海事博物館、船で対岸に渡ってオランダの村、農家など、又船で帰り、タワー、そして最後にポルセレインミュージアムを見て場外となる。説明ではオランダの隆盛期、東印度会社の活動を背景とした十七世紀の時代をあれこれリアルにできるだけ再現しようとしたという。東京ディズニーランドよりも私は好きだ。

10月24日（土）

日下部禧代子さんが母親大会で講演する

大手門会館での母親大会では、先日横浜で三県知事討論会の時に司会役をつとめてくれた日下部禧代子さんが講演した。彼女は私に著書二冊をくれた。「生きることのフィロソフィー」と「年輪とダイヤモンド」というタイトルである。横浜では私の著書二冊を読了したといていた。軽いタッチで福祉を論じているので面白そうな二冊の本である。前者のサブタイトルに「女性と福祉と教育」と付してあるし、帯には、「男と女」、「親と子」、「老人と若者」とつけてある。高齢化が急に進む中、女は職場にどんどん出てゆく傍、夫に先立たれ、看護の仕事にくたくたになる。仕事から締め出そうという力、女に看護をさせようとする力が社会的にぐんぐん加わってきている今日、子供の教育や公害などに気を配る以外に、容赦なく新しい課題が女性の肩にかかっている。それにどう対応するかが書かれている。

10月25日（日）

みんな動く動くの日曜日

何だかんだあるようだが、みなそれぞれに結構余暇を喜々としてすごしている。近頃の若い者は屋外型が多いようだ。今日は一巡目国体最後の沖縄海邦国体の開幕式があり、天皇病気のため、皇太子夫妻が代役をつとめられた。沖縄らしく君が代日の丸に、歌わず立たずの抵

抗があったようだ。福岡では平和台から志賀島まで一〇〇〇人の三一 km かけ歩きのほか梶栗さんの志賀島老壮年走る大会、これはもう十三回目である。一三〇〇人余が、福岡を中心に全九州、その他の県から参加もあって老いの頑張りを示していた。かけ歩きと昨年も同日だったが、これには子供や女性も多く参加、三一 km とはたいへんな運動といえよう。私は近頃足を使うことが少いから、志賀島では開会式場である浜小屋からスタート地点である橋の手前まで、一 km ほどかけあしで走っただけでも、何だか体が重みを感じるほどの一日になってしまった。

10月26日（月）

女の問題、高齢者の問題が身辺の話題に多いこの頃

先日、日下部禧代子さんがくれた福祉に関する彼女の著書をよんでいるし、今日は遠賀のコミュニティセンターで各種婦人グループのリーダーたちとの対話のつどいに出席して訴えや活動状況をきいたり時間があつた。又、夜は民生部の課長たちと KKR はかたで懇親会をかね私の北欧印象記など話すチャンスがあつた。すべて話題にのぼってくるのが、福祉、老人、婦人の話である。女性が、妻、嫁、娘として仕事、家計、介護、教育にからだをすりへらされ、あるいは一人ぐらしの高齢者として、邪魔になる淋しい、あわれな存在として長命を苦しまねばならぬ・・・そのようなケースがいたるところで問題になっている。そして幸せどころか、悲劇さえもつきものようになっている。基本は個人の問題であるが、家族、そして自治体、さらには国の問題であるのに、現実はどこをとってみても、うまくいってないし、ますますうまくいかなくなるであろうとの見とおしさえ立てられている。知事としても個人としても考えこんでしまう。

10月27日（火）

価値観の多様化について思う

価値観の多様化という言葉が最近あちこちで使われる。ある意味ではいいことだ。経済、道徳、政治、人生設計、家族生活など、どの側面で人生を切断しても、それぞれが個性をもち、他にしばられることなく自分で基準なり人生の意義を見出そうとすることはいいことだ。とくに、戦前、戦中のわれわれの行動、立志、生活設計をみると、他から律せられたものが強く働いていたことは忘れられない。これにくらべて今は誰もがほんとうに自由になった。親は子に、子は親に、個人は団体に、行政に、国家に、ほとんど従属されたり律せられたりすることはないようだ。でもそれだけに個が確立されているかという点、未だしといえる。自分が確立されてないだけでなく、他を確立した個として承認する寛容にも欠けている。そして依然、経済価値や学歴価値が、個人を束縛しつづけている。価値観の多様化はそのような被束縛の面に目をつむった認識と共存しているように思えてならない。

10月28日（水）

ゆとりのなさをしみじみ感ずる

東京は秋晴れ、すきっとしていて全く快い。九州とはどこことなく天気もすぐれているとの感じである。今日帰路の富士は頭部に三分の一ほど雪をかぶっていたが。下はやっぱり黒かった。いつ見てもすばらしい。それにしても何と自分の時間がなく多忙なことだろう。ふりまわされてはいけないと思ってもやはりふりまわされ、ものを考えるゆとりもない。一日十二時間、十三時間が拘束され、その余も、身辺自縄自縛の時間になってしまう。頼まれ揮毫やら日記を書くのがそれである。手紙に対応して返事書きの必要もでてくる。今日も、久しぶりとはいえ東京から帰宅し夕食をすませたところに岩崎、名田の二人がやってきて、浪人生活に入ったので仕事を考えているが、若干県の手も借りたいという。選挙のことなど考えると、それへの対応も一種の債務履行になる。たやすくできることならいいが、頼まれごとでも一寸重いものもあるのだ。

【別紙挿入】

奥田知事殿 S62.10.28

大変丁重なる御奉書感謝いたしております。

本来ならば、私の方から御礼を申し上げなければならぬところ、多忙で動いておりまして、失礼致しました。

文面からご人格がにちみ出ている、御手紙です。心より感謝しております。

この御手紙は永く大事にさせていただきます。呉々も知事によろしくお伝え下さい。

池田名誉会長より

丸岡、~~佐藤~~副会長

宮崎出張中なので

10月29日（木）

創価学会池田名誉会長から私の手紙に対する伝言があった

午後公明党の和田県議が来訪、創価学会の池田名誉会長からの私へのメッセージを伝えたいという。昨日の連絡だったという。丸岡副会長を介してと説明された。内容は、「大変丁重なる御奉書感謝いたしております。本来ならば、私の方から御礼申し上げなければならぬところ多忙で動いておりまして失礼いたしました。文面からお人柄がにちみ出ているお手紙です。心より感謝いたしております。このお手紙は永く大事にさせていただきます。呉々も知事によろしくお伝え下さい」というので、コピーしてこの伝言を私ももって帰った次第。十月十八日に北九州で世界青年平和文化祭に出席したあと、数日して創価学会幹部に私が筆でお礼の手紙を書いたのに対する応答なのである。ほんとうにいていねいな人だと思う。礼をつくしておけば人はわかってくれ、それだけのことはあるものだ。和田県議もよろこんで

くれた。ただあの時、池田氏が私の手紙を握り「軍国主義を防いだ」云々のことをいったが、まだその意味が私にはよくつかめないでいる。

#### 10月30日（金）

小石原における八村サミット

八女商工会議所での労働福祉事務所所管事項を中心とする「対話のつどい」と、小石原コミュニティセンターでの県内八村サミットの二つの外まわり行事があった。どちらも地域活性化が狙いである。が真はこうした行事によって、地域の人達が少しでも刺激をうけ、希望を見出し、精を出してくれることである。こうした過疎地がにわかには活性化する訳ではないにしても、悲観的になってしまっていると困るのである。政治手法は人々に前途の夢をもたせるところにポイントがある。八村サミットでのあいさつの中で私は地域間交流の必要と、それぞれの地域が自からのチャージングポイントを自覚しこれを他に売込む努力をすることだという点を強調した。大島村が村営牧場をもっているが、魚だけではなく、牛肉の焼き肉会をする計画のあることを村長がいていたが、大変おもしろい。ここでは民宿も力を入れるといていた。

#### 10月31日（土）

第三分校、龍野中と二つの同窓会ができた

日韓弁護士協議会に出席したら家の問題で紛争したときの相手側弁護士の原口西男氏が日本側世話役であったこと、それから大阪から平木純二郎が消費者問題で報告者として参会しているのに会ったこと、二度びっくりした。平木は以前から知っていたが全白髪、それにこの協議会には龍野新制高校卒の丸山という人も来ていたので、夜の全日空ホテルでのレセプションのあとでチャンスを見つけてコーヒー歓談をする思いつきにより、土井仙吉氏に連絡したらOKということで、四人の龍野同窓会が実現した。同じこの日、この場所で第三分校同窓会があつて出席することになり全く都合がよかった。第三分校の碑が久留米の自衛隊内に建立され今日ひるま除幕式が行われ、高石文部事務次官も同窓の一人として出席、全日空ホテルでの同窓会にも一寸顔見せした。教官側は私と江嶋、多久和、白水の四人だった。そういうふうで今日は二つの同窓会同時出席だった。

#### 11月要記

尚文堂で岸本教室を共にしていた平田泰輔氏が、十一月四日、菊の鉢をもってきてくれた。私も一年だけ菊を勉強し、彼がその仲間にいることを知った。もうかなりのベテランで空港近くの彼のうちにも見に行ったことがある。最初の知事選に出くわして折角の苦心の作が台なしになった。その翌年平田氏が菊を知事室にもって来てくれ、今回が二度目である。立派に作られた菊は姿が大きすぎて知事室でさえ狭くなるので、控えの室に飾らせてもらう

ことにした。三〇〇鉢といわぬ世話をしている平田氏である。もう疲れるといていたが、そんなに大規模だと疲れるはずである。一年中殆んど休みなしの手入れである。生きものだから油断もできない。出展して入賞しようと思うならなおさらである。旅行する時はもちろん、平素でも、夫婦揃って手入れするほどでなくてはならない。ある意味では夫婦げんかなどしては菊は育たないといえる。蕾が出て一ヵ月ほど楽しめる。その代償が一年の労苦ということになる。

11月1日（日）

六十七歳になる

満六十七歳の誕生日、コウテンリム氏と笹川良一氏が祝電をくれた。毎年のことである。姫路の裕一宅が法事をするというので、みゆきが出席のため行っている。昨日今日は私ひとり暮らしだ。秘書の内田氏が夕食を重箱に詰めて差入れてくれた、赤飯である。お祝いにぴったりになった、二食分はたっぷりある。考えてみると、これはひとり暮らし老人用の差入弁当の感じもする。昨日土井仙吉氏と全日空ホテルでコーヒーのんでの話では、彼は馬術に精出していたが最近落馬して腰骨を痛めて少々休んでいたとか。それに奥さんも悪性できものの疑いで最近いろいろの検査をうけ、今は検査疲れしているとのこと。年とってまさかと思っていて病気や怪我に見舞われることがあるのだから六十七歳を契機に一層各般の注意をしなければならないと受けとめている。決して強くはないのだから。

11月2日（月）

ハワイ代表来福

ハワイから州知事夫妻、上下両院議長ら二三人の一行が来訪。一行は沖縄、濟州島などもまわるらしい。福岡では博覧会出展の調印をし、県には小郡市に大学進出のプランがあるのでよろしくとのことであった。この問題は記者発表までしているが、どの程度まで実現の可能性があるのか、未知数も残っている。州知事は選挙就任以来はじめての来県で、姉妹関係の再確認との意味があったらしいし、二十一世紀は太平洋の時代だからということ強調していた。私に招待の言葉もあった、が、外国旅行については、よろこんでというわけにはいかない。日程が多すぎて休むひま、見物の余地のない旅行になるのだから、心ではおことわりしたい。貿易のみならず、文化・スポーツの交流を深めたいとの希望で、向うは観光収入が主体。アメリカ各州の中で、対外国際貿易収支黒字はハワイ州だけともいていた。旅行者受入れ意欲が十分だ。

11月3日（火）

耳納の市

耳納の市が二日、三日と、浮羽町で開かれた。浮羽郡三町まわりもちで、今年が三回目。そ

して場所は、今後湖底に沈むという合所ダム。ダムは立派に出来上がり、湛水すればいいま  
でになっている。今日は朝からの雨。NHKが舞台を作り、アトラクションに協力してくれ  
ていた。傘さして私も舞台に上って挨拶。そして出店者たちを激励してまわった。洋服はす  
っかりぬれてしまった。みんなよろこんでくれた。元気に活性化にとり組んでいる、その心  
意気が尊いわけだ。車が混雑に輪をかけ、私も現場まで二キロは歩いたろうか、汗だくだ  
くになった。大分からもバスで乗込んで客があった。家族連れがぞくぞくつめかけて盛況だ  
った。雨でなかったらどんなによかったらう。この辺りは富有柿の名所らしい。枝が折れ  
るほどに実がなっている。耳納の市もどうやらこれで定着したといえそうだ。

11月4日（水）

町村長代表とのこん談

町村長会の各郡代表（評議員）と二時間にわたって懇談した。自治会館で、午後二時半か  
ら。主題は国民健康保険会計の危機、農業農村危機、廃棄物処理の三つであったが、いずれ  
も刻下の行き詰まった問題の提起といえる。添田の山本町長は追加的に産炭地問題を出し  
ていた。国保の問題は老人医療に問題のウエイトがかかっている。住民は依存しすぎるし、  
こうした制度にした背後には医師会の圧力がかなり働いているとあってよい。国が制度を  
根本的に改めるしかないのだが、逆に国は地方に負担を重くかけようとしているところ  
に一そう問題の深刻さがある。知事とこういうことで話合いの場をもつことができたとい  
うことで、郡代表町長らはよろこんでくれた。正直いって町長らは奥田知事に保守的いろめが  
ねをかけてみていたのだが、小早川久山町長（会長）先頭に考えを改めてくれたらしい。

11月5日（木）

【表題の記載なし】

秋の九州地方知事会議は九経連との意見交換を併せおこなう。今回は三年目になる。会場は  
長崎の東急ホテル。この種会議は共同事業ということよりは共同陳情に力が入る傾向にな  
る。今回も、高速交通体系の整備につき政府に強く要望するというのが前面に出てきた。新  
幹線は鹿児島ルートもさることながら若干見捨てられ勝ちの長崎ルートも見捨てないで  
ということになった。高速道路網、そして通勤圏整備が加わる。東九州の方は新幹線を  
断念する代わりに、今は実験用に設備してあるリニアモーターカーを存続し、延長し、これ  
を東九州の新幹線とするとの意見がはっきり表明されることになった。時速三五〇キロも  
の鉄道だが、すれ違ったりトンネルに入ったりした時の風圧やカーブをどう越えるかなど、  
技術的に克服すべき問題が尚未解決らしい。ともあれ交通は地域活性の鍵なのである。

11月6日（金）

マンネリの知事会議、それ以上にマンネリの列車内放送

知事会議は終わったが、例のごとく政府への共同要望が主内容、それも幹線高速交通網の整備が主。自分たちで共同で自主努力をしようというようなこと、又同じ政府要望にしても文化、教育などソフト面については論議がでなく、何かマンネリを感ずる。財政上の要望もいつもの通り。ただ今回は国民健康保険の公的負担分の自治体への転嫁反対が重点要望となった。マンネリといえ、今回の長崎旅行で往復とも鉄道を利用したのだが、特急かもめは二時間余、便利だ。しかし車内放送が長々と繰り返しかましきいには閉口。なんで降りる時は忘れ物のないように、網棚や吊りホックや座席のまわりをよく確かめるよう放送しなければならないのか、又停車駅とその時刻をいわねばならないのか。誰しも承知の上で乗っているはずだ。又ホームの番号、接続線、時刻、上下線など放送のききっぱなし。・・・みんな知って乗っている。他人の事は聞く必要もないだろうに。

11月7日(土)

女性の奥田観

そんなに気になるわけではないが、他人の私への評である。それも女性からの評である。先日長崎での知事会の時、前夜夕食会の際に仲居の女性芸妓が、知事選の時は、姉が馬鹿じゃなかろうかといった程に福岡の奥田を応援したんだという。きさくでこんなに話しやすいとは思わなかったという。そして、横の芸妓さんが、かわいいもんねという。これと同じようなことが今日姫高会(九州寮歌祭のあと)の会場「くいだおれ」(大名)であった、仲居のねえさんが盛んに、知事に会えてこんな光栄なことはない、前々から応援していた人にお目にかかり話せるなんてうれしい限りという。多くの場合写真に一しょにうつってくれとポーズを要求される。側に坐る。こうしたよこびはすなおに受取るべきだし、仮にお世辞であるにしてもうれしいことだ。県庁に見学にくる女性の中にも似た反応がある。私が小さいせいか、かわいいという女性もいる。茶目つけがあつていいという人もある。

11月8日(日)

老化を思う

昨日の九州寮歌祭に集った人達、「みんな一年ずつ年を重ねていく」という共通観念、久しぶりに合う長野薫氏も頭が白くふけてみえる。姫高会の面々みんな老化の話になってしまう。年を重ねるだけならとくにどうということはない。でも職探しという人もある。医者をしている野村さんは後継ぎがないとこぼしている。老化すると頭がぼやけてくる。目も耳もといえるが判断力、視野が衰える。物忘れがひどいのも、一つの傾向であるが、あらゆる反応が鈍くもなる。視界というか視野が漠然としたものになる。階段上下の足の運びも、意識が弱くなりその弱くなった意識以下になる。階段だけは注意しようと思って、常に手摺りをもつように心懸けるのだが、それでも危いと思ったことは再三ではない。こうしてすべての能力の減退を老化というのであろうが、何かをする気、やる気があるだけでも有難いと思



わなければならぬ。

11月9日（月）

子供の時に校長先生からほめてもらったのが一つの動機

毛筆がそんなにうまくできるわけではないのに、私は字がうまいと人はいう。でも私は拒否反応はせず、岸本門下生になったのも、牧坂五郎氏の誘いにすぐ応じたものだ。あれから十年になろうか。小学校の四年生の時、放下後クラスの何人かが誰にいわれるでもなく、教室に居残って墨を磨って習字をしたが、その一人に私もいた。校長先生がまわって来て、（坂田校長）、私の書いている「池」の字の右はねが立派だと大変ほめてくれた記憶があるが、これが動機となつてか、私には毛筆に親しむ下地ができたように思う。知事になってから頼まれる色紙を書いているのを見た七二兄（亡）が、「お前は小さい時と同じ字を書く」と評したことがあった。字はそれほどかわらないものらしいが、私は、今日も三光園の仲居さんに「ひとは褒めるべきものですよ」といった。坂田校長を思い出したからである。七褒め三叱るのが適当との論者なのだが、褒めがいい動機になることは確かだ。

11月10日（火）

情報公開への抵抗を示す竹井教育長

県立高校の留年と中途退学者の学校別数につき市内の短大某教授が「情報公開」を求め、拒否されたので不服申立てをしたところ、情報公開審査会でこの程、公開すべきだとの結論を出したところ、県教委はその決定に従わないことにしたと、今日の夕刊に報じられた。竹井教育長の審査会々長九大法学部教授手嶋氏に対する応対について、全く無礼であった事が先日報道されたばかりなのに、今日又拒否の決定をしたとは驚きである。啞然としたというのが大方の感想のようだ。竹井の言い分は学校別に留年や中退の数が公開されると、高校がランク化されるということ、審査会の決定は拘束力がないということのようだ。手嶋教授が答申を手渡しに来たのに、会議があるという理由又は事前にアポイントメントがなかったとして応対もしなかったので、手嶋はカンカンに怒って帰ったのだが、その後今日の拒否決定の報道だ。今後問題化していくだろう。

11月11日（水）

予算案の知事保留という原案がおかしな出し方だ

十二月議会に付議する補正予算原案総務部長査定についての説明をきき、知事保留についても大枠の説明をきいた、あとで、社会党県議幹部とリーセントホテルで同じ原案について、討議したところ、知事保留について知事の政策を示す余地のないような原案になってしまっていることにつき、苦情が相ついだ。つまり財政課の手で、総務部長査定はこれ、というのはいいとしても知事査定についても原課から出てきたのはどの範囲でどういう要求があ

るのかわからないようになってしまい、結果として知事保留の範囲を財政課が勝手に決めて表に出しているのは不当ではないかというのである。その通りで、各部から出てきた補正要求を財政課が勝手に整理し、セレクトしてしまったものを総務部長査定と知事保留に分類したにすぎないという形になっている。これでは知事自身が拾おうにも既に切り捨てられかくされてしまっているというのである。これは是正せねばならないだろう。

11月12日(木)

早大大隈講堂で学生に直面

福岡地区労の二宮氏の息子さんが早稲田大学に行っていてサークル活動をしていることとの関連で、今日はトンボがえりの日程で同大学大隈講堂で「地方自治の現状と未来」(自治の源流をたずねて)と題し、私の講義一時間、学生をまじえてのパネラーを四人を混えたディスカッション一時間と、サービスしてきた。学生が若いこと、テーマの内容について理解があることについては予想外であった。われわれの若い時にはもっとひねていただろうし、こういう面での関心、理解はとても及ばなかっただろうと思う。総理になったばかりの竹下登ほか二人の閣僚を出している早稲田は他の領域でもそうだが政界にも活躍する人が多い。「在野」魂が建学精神ときいているが、本当に立派な大学だ。若山牧水や北原白秋、森繁久彌、鈴木茂三郎、浅沼稻次郎、それに今衆院副議長の多賀谷真稔、引退した稲富稔人も早稲田、そして中野正剛、緒方竹虎もである。今日の印象はこうした早稲田の活気である。

【欄外記入】

参集学生二七〇人

11月13日(金)

疲労が重なっている模様である

知事の顔色がよくないとか、疲れていますねという職員がある。ほんとうに早朝から夜おそくまで拘束されて、ねむれないときているから客観的にそう見られる状態になっていることは否定できまい。昨日は帰宅が九時半、今朝は出発が八時二〇分。これでは個人が死んでしまうか、からだがまいってしまうほかはない。在宅中でも家族だんらんという形にはならない。夕刊に目をとおし、手紙などに対応するだけでも時間がかかる。つまらん手紙もありうるし、見たくもない雑誌、その他も封を切り片付けていかななくてはならない。こうしたことでも従来ひとまかせにしたことはないし、今後ともそうしたくはない。一日十二時間より少ない在宅では身は律しきれない。問題はそうした状況がつづくからいけないのである。今日一日の在庁公務もぎっしり詰まり空隙ができると「臨時」と称するのがこの空隙を埋める。決裁が毎日のように出てくる。ふりまわされるだけ。

11月14日（土）

商工勤労主婦に訴える

商工会連合会の婦人部の意見発表の会が大博多ビルで行われ、会長の栗川タツエさんが激励してやってくれといったので、私は小商業家の主婦を念頭において、家事、育児、営業などに汗を流す婦人たちの労苦をねぎらう話をした。商家を支えている支柱とっていいほどの勤労にはげんでいるのが彼女たちである。その点、農家とほとんど違わない。OLのような余暇はおそらくなかろう。今日は講演をきいて、数人が「主張者」として意見をのべるような集会だが、勤労主婦としての立場がはっきり出されるに違いない。私は、まず健康に注意すること、次に賢い勤労者になるようにとっておいた。健康を損うと家庭も経営も崩れてしまうだろう。又平凡な毎日の中にも社会の動き、中でも営業の内外の動きを賢明にとらえて対応すること、あふれる情報の渦の中で何が重要かを見据える賢明さが欲しいということなのである。

11月15日（日）

久留米の櫛祭り

久留米山本町柳坂での櫛祭り、嘉穂町でのふれあいまつりと県南、県央をかけ抜けた一日だった。ハゼは全紅葉には少し早かった。が緑の葉がまだあるくらいの方がいいのではの声もあったほど。しかし全紅葉の写真をみせてもらったが美事なものだ。櫛並木の横に並行して流れる溝というか、小川というか、これもいい。ただ、今はどじょうも鮒もないという。それに空缶があちこち捨ててある。農薬のために川魚が住まなくなったのは残念なことだ。しかし、三面張りの河川工事がなされてない点はまだしもの救いである。現今の河川はなぜ三面コンクリート張りにするのだろうか。山を削ったあとも崖崩れを防ぐためコンクリートを塗りたい。費用を計算してのことだろうが、自然が殺されてしまっている。山や川が子供の心にうえつける故郷の印象は、こうしたコンクリートでは成り立たない。櫛祭りに参加して故郷というものを考えてみた次第である。

11月16日（月）

嘉穂のリンゴ狩り

昨日は久留米の櫛祭りのほか嘉穂町のふれあいまつりにも行き、その帰りには、リンゴ狩りをした。前者は大隈小学校校庭、後者は馬見宮小路の石翠園である。筑豊問題もさることながら、嘉穂ではみんな元気に次の時代に挑戦しているようにみえる。小学校でのふれあいまつりには土、日の二日間、地元の人達も沸いた。私は帰るまぎわに餅つきも手伝った。石翠園にはオーナーとして私と、多賀谷真稔と山根守の三人の名札が隣り合わせて吊るしてあった。宣伝としてもいい試みである。リンゴの品種はふじだそうだが、これはもう晩手で、他は大抵収穫済みであった。味っても「ふじ」の妙味があった。この馬見地区には一三戸の

リンゴ栽培農家があるという。日曜には観光をかねた客がずらり車の列を作ってくれるそうだ。長野に行って学んで十余年の年月がたつという。でもその開拓者魂は敬服に値する。今では宮崎県でも試行している人がいるそうだ。県内でも八女や朝倉に挑戦者がいる。立派なことだ。

11月17日（火）

執行部方針としての県庁跡地利用について、マスコミが現状を知りたがっている

記者会見で県庁跡地利用についての知事見解が執拗に問い求められた。朝日新聞が、知事の初の見解表明とか言明という記事が出て、他社が反撥しているのが現状だが、朝日は自分たちの見解をまじえて断定的に書いている。昨日今日夕刊で朝日の断定的な記事が目をはく。十二月議会で問題になるだろうし、ある程度まで掘り下げた答弁が求められるにしても、この時点で、知事が記者に方針を決まったようにいうわけにはいかないのだから、その線を守っているつもりではあるのに、朝日だけが予測を断定的に書いている。さきの議会の特別委員会では、大別して売却か、緑地か施設かと選択肢を分けたとしたら、「施設」という方向が出されたので、執行部としても、その方向で、こんどはどんな種類のものを入居させるか、のメニューを用意し、その経営主体をどうするかなどについてある程度方向性を検討せざるをえない段階に来たというのが正確な現状といえるだろうが、朝日のように「国際情報センター」などの方針をまだ腹決めしているはずもないのである。

11月18日（水）

有明沿岸のもつ構造的な問題

有明海沿岸の市町の首長たちが地域連携しての陳情に来たし、逆にこちらから大牟田に行って中部有明活性化推進協議会に出席もした。今日は有明地方の日になったわけ。後者では大牟田、荒尾、長洲の二市一町という県境をこえた振興課題のため、熊本知事も出席、民間の企業も代表をくり出していた。いわば石炭、造船、化学、アルミ、亜鉛など、三井と日立の企業の構造不況がこの協議会結成の動因であったが、会長になった九経連の永倉氏は佐賀、長崎の両県も入れて有明海四県に協力の輪をひろげようと提案した。もちろん、将来のこととしてそうしてもいいが、当面はこの二市一町の活性化に絞ろうということになった。沿岸市町の連合の方は、農業、漁業も加えての自治体としての要望であった。有明干拓地の陥没と海底の陥没が問題に含まれていた。これは一寸やっかいな問題だが、自前で解決する努力も必要だろう。

11月19日（木）

来年度予算編成に向けての各部重点施策ヒヤリング

昨日今日各部の、来年度予算要求にからめた重点施策にかかわるヒヤリングが延々とつづ

いた。予算を取りたいとする思いが、盛りだくさんの施策を積みこんだ説明書となってあらわれている。ここまで書類を、作り上げてくるには大変な作業が必要だったろうと思う。どの職場にも最近では頭の冴えた人、アイデアの斬新な人がいるとみえる。職場の活性化という課題はあるが、こうした競争心を煽るようなヒヤリングをすること自体活性化につながることになるかも知れない。企画の方でこの仕事を取りしきっているが、各部とも、書類作りの段階ですでに部長査定で形を篩にかけているのだが、篩にかかる前のナマのものを知事に見せることも必要ではないかとの意見も出ている。職場のナマの意見の中に部長でなくて知事が拾い上げるものがあるかもしれぬというのである。だが、そうすることは逆の面で大変なことだろう。

11月20日（金）

民間労組の「連合」が発足した

労戦の全的統一が問題になり出してから たつたろう。曲折はあったが、昨日二時から新宿の厚生年金会館で民間の六二組織、五五五を結集する全日本民間労働組合連合会（連合）が発足の大会を開いた。民間労組の六割を結集するという。会長には堅山利文、事務局長には山田精吾が選出された。前ぶれとして全民労協が結成されたのが五七年というから、五年になる。全民労協は発展的解消だが、同盟、中立労連はこの連合の発足にそなえて解散、「労働四団体」のあとの二つ、うち新産別も来年には解散、残る総評は一九九〇年解散を目ざしている。総評には官公労の大半が属しているから、その身のふり方が問題になる。総評の主張する「全的統一」が成るためには、この連合の名もかえなくてはならない。官公労の動きとこれからの社公民、社民ら野党が今後どう再編の道をたどるかが、これからの問題となる。たしかに連合の発足は新しい幕明けである。

11月21日（土）

福岡県評、白石、岩崎の二人を送り出す集会

岩崎隆次郎、白石健次郎の二人をはげます会が、三時から大手門会館七階で行われた。福岡県評で岩崎は二期の議長のと六期の事務局長をつとめたあとを松田留吉に譲った。白石は議長を二期つとめたあとを坂本隆幸に譲ったのである。今の県評はベテランがやめ、若返ったともいえる。岩崎には、二度の奥田知事選を勝ち抜いたという自他ともに認める自負がある。それと同時に、支持と不支持が渦巻いているという客観情勢もある。岩崎の励ます会をしようとの空気に対し、白石もやらないとおかしいということで、今日の催しとなったのであるが、それと同時に、歴代の議長についてはやらなかったという思いをもつ人もいる。あれやこれやで必ずしも二人の前途を祝福しての催しではなかったようだ。それに二人とも、前任者のように、退任後の職を準備されてはいない。「新しい船出」との挨拶用語もとび出したが、必ずしも当ってはいなかった。

11月22日（日）

社会主義協会は今後どう歩むのか

秋のすばらしい天気がつづいている。今日の公用は午後には社会主義協会全国大会に顔を出すこと、大相撲九州場所の千秋楽で優勝した人に知事は杯を渡すこと、この二つであった。協会員がホテルリッチで三日間の総会を開いている。全国から約一五〇人、今日の情勢下、運動の展開組織の維持は容易ではなさそうだ。国鉄の民営化の強行で協会の主力をなしていた国労がズタズタに裂かれ、砕かれて労働組合運動は様変わりしている。協会が労働組合運動に依拠して運動をつづける主軸が今完全にゆらいでいる。何らかの方策を編み出さないといけないだろう。国鉄問題だけではなく、民間労組も二十日に連合が新発足し、これが今後の大きな客観条件となるだろう。太田薫氏は連合の「右傾化」を指摘し、左翼系の結集をはかっているが、協会主流が太田氏から離れて二、三年はたつ。今後の協会を見守っていかう。

11月23日（月）

折角の休みも半分はひと付き合いでつぶされてしまうのが常

公用予定のない今日は完全自由だと思っていたら豈はからんや久留米に葬式ができて行ってくれとの電話連絡である。原口久人県議の母がなくなって明日が葬儀なんだが、同仁会関係のことを考えると今日弔問しておいた方がいいと林副議長の発想。それに基づき彼同伴で車で久留米往復することになってしまった。幸い所要時間は往復で三時間余で助かった。しかし、私の家庭内でのあき時間には、マージャンをしようではないかとの発議がみゆきなどから出て、当方も快諾というわけで、河野氏を呼んで夜はそれに熱中することになる。夜は一ぱい使って半チャン区切りで往復三回ほどすると疲れも出てきて限度を感じおしまいということになる。十二時ぐらいの深夜まで熱闘をくりかえす。昂奮でねむれないかとの心配もあるが、意外とねる。常に問題となるのは用便に起きてあとの睡眠である。限度を守りつつ楽しもうというわけ。

11月24日（火）

知事ブレーンの設置構想について

二子石総務次長と佐々木人事課長が、知事室強化の発想のねらいは何なのか直接ききたいと行って来たので、午後三〇分余時間をとって私見を述べ、対応を求めておいた。底にあるのは知事個人の指導力の強化であって、三役の組織や機能をかえようとするものではないということがまず第一、そして知事個人の能力はそのままでは限界があるので、たとえていうと、知事の日や耳に、望遠鏡や顕微鏡、補聴器を、さらには頭脳の中にコンピューターを仕込むというような役割を果たす人材を知事周辺におく方針とっておいた。そして置き方は特別の部屋や机を準備するのではなくて、企画監のようなポストにおいて日常の仕事

をさせながら、常に知事の必要に応じて動きうるような自由なポストとしておくこと、それを週に二度、三度きまった時刻に知事室に来てもらうような事もあっていいと伝えておいた。社会党からの要望もあっていることだ。

11月25日（水）

八幡製鉄の冷え込みに対応した話がどんどん出はじめた感じ

夜浄水茶屋で北九地評の舎川議長同伴で、新日鉄八幡労働組合の衛藤辨一郎組合長と夕食懇談した。この人はこんど地労委の委員にもなったんで、杉山君と同じ山田高校出身という。知事選をめぐる一寸したわだかまりが双方になかったとはいえないが、そうしたものをのりこえて、今日は北九州の活性化問題を中心にざっくばらんに延々三時間もいろいろ話をかわすことができた。労働組合が右傾化するとか現実路線を経営側と共に模索するというか、こうした雰囲気の中での話であるから隔意なく対話することができた。今日は新日鉄の本社の方から杉山常務が知事室にあいさつにみえたが、これとは別。杉山常務は十二月四日に八幡の東田地区を宇宙ランドとして再開発することに決めてアメリカのその筋との間に調印式をして懇談会とするから知事の出席をという申入れなので、こちらは具体的な実務上の、話であった。北九の活性化への思いは同じ。

11月26日（木）

九州歴史博物館を作って古代をきわめていくと「建国の日」という政治上の制度の基礎が崩れるのではないか

先日田村円澄先生からいただいた「大宰府の春」を読んでいるのだが、今日はその関連でひょっと思い付いたことがある。それは文部省が福岡に国立博物館を建設したいというわれわれの永い念願に対し、どうも鈍感な対応しか示さないことは前々から感じており、その一つの因子に、最近では「奥田に名をなさしめるな」との思惑があるのではないかとうたぐったりしたことはあったが、今日の直感は、又別であった。われわれの目ざす博物館は大和朝廷以前の日本民族の歴史に関するテーマをもつとされているが、大和以前には国家が明確に定まっていない、とすれば、どうきわめようが「紀元節」「建国記念日」を二月十一日とする今の国の方針に一致しない事実が、あれこれ主張されることになる。二月十一日は神話だと言い切れない人々にとっては大和朝以前を問題にする博物館を作らないで、建国をあくまでウヤムヤにしておきたいだろう。田村円澄さんのものを読んでも日本の国家形成はもうろうたるものなのだ。

11月27日（金）

もっと多くの時間かけて眠ろう

毎日日程がぎっしり詰る、朝起きが辛い、身辺整理がままならぬ、その連続で一番こたえ

るのが寝不足のようだ。熟睡できないからであって時間はほぼ満足できるように取っているのに寝不足を感じ、毎日日中の業務消化に、半分無自覚なほど意識が明確でない。こんな状況がいつまでつづくのだろうか心配でならない。それに目と歯がかなり弱ってきた。眼鏡はこれでいいのかとの疑問が時におこる。両上小臼歯ががたついている。もう何年かになるが、これはどうにもならぬところまできて歯医者に行こうと思っている。それに足腰だ。これもかなりガタついているように思う。運動不足といえるだろう。これではいかんと思いつながら、いい対策が見つからないままに過ぎていく。以上のように自覚される健康不安、これまでと違って今後はあと一時間ほど就寝の時間を多くとってみなくてはなるまいと思っているところだ。

11月28日（土）

県評三十年史の序文を書く

県評三十年史ができるので、序文を書いてくれとのこと。少しおくれたが今日休業を利用して二〇〇〇字分書いた。昭和二六年のスタートだから、三十六年にもなる。昨日「花ノ木」でワインのヌーボー試飲会があったとき会った岩崎隆次郎氏の話では、前回知事選で、知事公舎に入らぬというところまで書いたよといていたので、五八年まで、だから三十二年分にわたっていることになる。県評は一五万から一六万の組合メンバーを傘下に入れているのが常であるけれども、最近、国鉄労組の解体や日教組の弱体化、その他合理化の進行があちこちあって傘下組合のメンバー減はつづいている。「今時労働組合か」という疑問すら起こりかねない情勢の中で、一五万のメンバーを維持するには努力も大抵ではなかろうと思う。年中行事が次々にあつて、県評はやはり必要ということなのだが、主体の側から、県評は何をなすべきかと問いかけると、はたして積極的に、これとこれをという返事がなかなかかえってこないのが近況である。一つの曲り角なのだ。

11月29日（日）

古賀武夫先生の送別会

西南大学長をしていた古賀武夫さんが、東京に移住されるというので、そのお別れ会が十一時から山ノ上ホテルで開かれた。木梨吉繁氏が世話役で、社共系というか学者文化人の会というか、安保懇話会系というか、そういう人達が三〇人足らずだが集って中食を共にしつつお別れ会をしたのであった。具島、両内田をはじめ、三上、土井、森らも来ていた。裏辻敦子さん、第一法律事務所での方面の事務局的な位置にいた中島さんも来ていた。今は全国で唯一の社共路線で革新知事を取った福岡県という表現が、この人達の間で使われているが、県政の実態はこういう表現では適当でないことがあまりにも多い。社会党県議など、共産党県議とソリが合わないこと甚だしい。県評もだんだん反共色を強めていて、県民の会は今や開店休業、年賀状を出すのが精一ぱいで、「グリーン21」も最近はお出せないらしい。古



賀先生のバックには社共を織りませた状況はほとんどなくなりつつある。

11月30日（月）

年をとってから、故郷を捨てて生きがい作れるか

古賀武夫先生が東京に移住される。徳永喜久子さん、それに最近は白井いくさんも東京に移住された。子息の職場が東京にあるので、年をとるとその方がいいということである。福原君が感想としていうには、それでは人間が死んでしまう、東京という檻に入れられたようなもので、永年住んだ故郷を捨てることになる、できればそうさせずに、不自由かも知れないが、故郷を捨てずに生涯をすごすようにしたいものだ。私もそれに同感である。去る人を押してとどめることはできないが、何とかならないものだろうか。人は単に生きているのではなくて、人と人とのつながりの中で、故郷の山や川、地域のあれこれの施設や場の中で暮らしてきたのであって、今から特に活躍のない老人が住み馴れた所から移住するのは、とくに東京のような大都会に移るのには、土地関係も人間関係も、これまでのものを捨ててしまし、新しく作りうるのは困難というほかない。死ぬまでここで、という気持ちをもつのが順当だと思うのだが……

12月要記

このところ、明るいニュースがつづいている。「はかた地どり」の開発成功、筑後市農協梨部会の天皇杯受賞、それに八幡東田地域へのスペースワールドの建設である。新日鉄内部でも八幡にこの計画をもって来るか否かが大問題になったらしいが、東田なら製鉄の発祥の地でもあるし、土地代が新規にいらぬということで、鉄冷えで苦悩している東田への立地が決ったという。アメリカのスペースキャンプ財団との特別契約で一〇〇億ほどの建設費を投じ、二年後には宇宙旅行実験などができる青年向けレジャー施設が完成する。年間一〇〇万人の来客を予定しているという。実験には三泊ほどの時間がかかるので、宿泊施設も予定されている。これで北九州市にも二十一世紀に向けての一つの夢が芽ばえたわけだ。とびうめ国体に間にあうので、国体も一段と活況を帯びるだろう。七日には上京してサントリー社の宮田工業団地進出について、敬意を表することになるが、これが実現すれば、又一个明るいニュースが追加される。サントリーのイメージもまたいいからである。熊本県立地のうわさもあるから是非かちとりたい。

12月1日（火）

RKBの作戦に乗らない方がよい

十一時からの日程に入れられていた RKB の取材が昨日の三役会の話の中で取り消しになった。県庁跡地について知事意見をということではあるが、県議会で論議の対象になるにきまっているこの問題を RKB という一社だけを相手にとりわけにはいかない。それに

RKBの三好は取材したもののうち、自分の主張にうまくかみ合うように勝手に部分放映したり、都合の悪い部分については自己見解をおし売りするように解説付きで、あたかもニュースであるかのように見せかけて放映する癖があるから拒否するのが順当である。予定日程に組み込んだ広報室、秘書室は、取り消しに苦慮するだろうが、それを予見するだけの見識をもってほしかった。RKBは福岡市のアジア博の用地に建設されるビルに放送塔を建設する案で、これに他社も誘い込みたいが、NHKが県庁跡地をねらってRKBの仲間入りを渋っている。このNHKを跡地に行かせないために、跡地緑地化を主張している。

#### 12月2日（水）

東南アジア諸国の技術研修生の新春こんだん

十二月は県議会や政府陳情など多忙なのに、各方面から「新年用」と称しての取材に応じなければならぬ特別な季節である。今日は日本庭園で東南アジア技術研修生五人を相手に新春放送用の録画があった。私は羽織袴姿で対応した。フィリピンと中国は正月は年間で重要行事というが、マレーシア、ネパールではむしろ宗教上の日程が大事で正月はとくに行事をしないようだ。ただ、中国は旧正月をするので、毎年月日が違うという。フィリピンからの研修生は年中三〇度ほどの暖地なので、今日の民族衣装でという要請により半袖で出席していたが、今日のこの寒さで、身にしみたであろう。日本庭園をどう思うかときいたら、その人工美に感心しているみたいだ。自然美を圧縮し理想に応じた形に作りあげた日本庭園であるが、世界の他の国にはないので、彼らには珍しいようだった。福岡について少しでもよい印象をもって帰国してほしい。三月までの研修という。

#### 12月3日（木）

衰えてくる

夜医学部の同窓会館で自治体問題研究所の十周年記念パーティがあつて出席したが、その時、知事の顔色がよくないという人があつた。数日前も秘書室でそういう話が出て、知事健康管理をもっと注意すべきだということになったときく。生活にとくに無理があるようには思えないし、自覚症状もないので、心配はしていないが、昨夜も十分眠れず、毎日のように、日中はねむいことの連続である点が気になるといえば、それが問題だろう。何か心配ごとがあつて眠れないのではなく、四時頃トイレに起きてそのあとの眠りがきまってよくない。確かに老化現象であろうかと思う。話は別だが、あるとき、全く誰にもわからず、自分も知らずに、事絶えているというようなことがなきにしもあらずと、ひょっと、思うことがある。恐怖など全くなしにである。そういうことがあつても別におかしくないのではないかと思うのである。妙な心境ではある。意識が遠く、ぼんやり霞んで、何もなくなってしまうかも知れないということだ。

12月4日（金）

県政推進協の諸氏との懇談で思う

県政推進対策会議の諸氏と庁議室で中食しながらの懇談。社会党、県評、地公労の諸代表がメンバーであった。竹村氏からは知事室強化の要請があった。坂本県評議長からは中小企業振興策について、そして両教組からは教育委員会がする学校現場の管理強化、教師の低賃金を何とかならぬかのアピールがあった。委員選任権のある知事がもっといい委員を選べということも。私の方から県民教育運動を起こしてはと水を向けると、福教組の梶村委員長からは教員組合は地域でも孤立しているので、改善は知事の手でとの反論があった。あとで感じたのだが、この発言はなまけ者のいい分ではないということだ。教師が地域で孤立していてどうして教育がよくなるか、教員組合が強くなるかということだ。非組合員、教頭、校長、さらには教育委員ですら、味方に引き入れるような運動をするのでなくてはとも展望は開けないだろう。この時期に、まだコチコチの頭をもっている。ゼニを出して知事選をしたのだから少しぐらいかえって来てもいいだろうと梶村はいうが、反省不足だ。

12月5日（土）

失業の脅威にさらされている若者たち

県評青年部、社青同の人達三五人ほどと庁議室で中食しながら懇談した。朝食会（小倉ステーションホテルでの北九労組役員）と対照的に、社青同の人達は一様に失業の恐怖について県に注文をつけてきた。元国鉄職員で今は清算事業団にやられているとか、大牟田三井系では事務系でも「窓際族」になっていくとか、二十回とはいわぬ肩たたきをうけたとか、深刻な雇用問題が県下いたるところで展開されている。教育現場では校長教頭の管理主義いつてんばりの対応で現場は荒廃している、管理的立場の教師は足りても現場指導で汗を流す教師の定員は足りないとか、ここもまた深刻である。知事は首切り問題について経営側に注文をつけてほしいとの声も出た。企業誘致の要望も出たが、まだいい方。高校の卒業生の半分しか職が見つからないとすれば当然である。若者がこうした状況で絶望感をもっていることはおそろしい。それにしても教育現場では労使とも焼いても煮ても食えぬ状況になっている模様。

12月6日（日）

丈が伸びた沙理

直美が前からフグをごちそうしてくれといていたので、明日サントリーの佐治社長に会うため上京する機会をとらえ、今夕の約束で午後上京した。啓二夫婦も声をかけたら出てくるということで、ダイヤモンドホテル内の有楽園で、四人、フグ料理を食べた。一彦も電話連絡したが、東京まで出向くのはおっくうとのことであった。八月以来の沙理との出会いであるが、丈が伸びてる。身長はかなりのものらしい。赤い服を着せてもらっているののできい

たらフィンランドの祖母が縫ってくれたのだという。ぴったり合っていて恰好もよかった。ひとみしりをするかと思ったが、案に相違した。片言を盛んにいうが、日本語とフィンランド語のチャンポンの片言だそうだ。ライヤも通訳できんといっていた。ダイヤモンドホテルは半蔵門駅の出口にあたるので、啓二も直美も交通至便であった。東京でフグ料理ができる店も多くないはずなのに、好都合にこの場所がとれたものだ。今年の正月には暮の二十六日頃には彼ら帰福の積りといっていた。

12月7日（月）

サントリー工場の誘致について

昨朝は東京雪で今朝もまだ雪が残っていたが、東京は快晴となった。サントリー社に佐治社長を訪ね、ビール工場の福岡県への誘致を話題にした。同社に進出してもらおうと、県では門司のサッポロ、竹下のアサヒ、甘木のキリンと並んで四大メーカーが全部揃うことになる。熊本県が菊池に誘致するため、強く対立運動をやっている。県では宮田工業団地を第一候補にあげているが、地価と水価格が問題といわれている。サントリーは十万坪を欲しているが、向うと地価だけでも坪二万円の差があり、これを補填するには二〇億円も必要となる。水の場合貝島炭鉱社宅に供給されていた水源を利用して導入するというが、この面でも年間一億円ばかりの補助金を必要とするだろうといわれる。サントリーはイメージをよくするのにいい企業だが、そうまでしなければならぬのかとの声がおこるかも知れない。それだけの価値はある。長期的視点に立てという声も強い。さてどう考えればいいのか。

12月8日（火）

身障者共同作業所問題について

あれやこれや補助金をくれとの陳情がたえない。今日は子ども劇場と身障者共同作業所の二つ。障害者は養護学校卒業後通常の就職ができず、家庭でも扱いかねることが多く、市町村でこの十年ほどの間に続々共同作業所が設立されているようだ。こうした動きに対して行政の対応は一步も二歩も立ちおけているようだ。作業所は、施設、指導者、報酬その他の経費にねをあげている。製作したのも商品として売れるとは限らない。障害者は近年どんどんふえているし、養護学校卒業後症状が悪化するケースも多いという。こうした問題点を実際に把握して対策を講ずる責任はまず市町村にあると私は思う。でも、そうした対応を急ぐよう市町村に促すのも知事の責任ではないかとの見解もありうる。今後まだまだ問題は深刻化するに違いない。どう取組むか、まず実態を、全像を早く知りたいものだ。

12月9日（水）

米ソの INF 全廃条約調印

昨日の午後（日本時間今日未明）ホワイトハウスでレーガン大統領とゴルバチョフ書記長が

中距離ミサイル廃棄条約に調印したことが、夕刊に大きく報道された。六年間に及ぶ交渉の結実とのこと。アメリカのパーシング 2、ソ連の SS20 など、一年半から三年以内に全廃されることになる。その数両国で二六一一基に及ぶ（アメリカ側八五九基、ソ連側一七五二基）。もちろんこれで核が全廃になるのではないが、廃止の話は今後ともつづけられるだろうという。歴史的というほかないが、反面、通常兵器や化学兵器が強化されるだろうとの推測もおこなわれている。又、そうなることによって、日本では逆にアメリカの軍事要求が強まるほか、軍拡への道につながるだろうとの観測もある。よろこびがある一方で心配もつることになる。日本政府当局も軍事費を抑制することにはならないといっているようだ。今日の県議会代表質問の中で社会党の鳥越氏は、県の平和事業の推進について知事の積極姿勢を正す一幕があった。平和を求める努力はますます必要になろう。

12月10日（木）

日記を買い求める

帰途天神の書店に立寄って、この日記の来年度分を買った。何とはなく、その日、思いつくまま、とにもかくにもページを埋めてしまうために書いているのがこの日記である。書くことがとり立ててあるわけでもないのに、ページを埋めるために書いている。昨年もそうしたが、来年もそうしようと思っている。書く時間がたっぷりあるわけではない、考えるひまもない、そそくさとページを埋めてそれで満足する。一たいこれは何だろう。自分でも納得できる説明はえられない。でも時々ポツと開いて読み返すことがある。この日、こんなことを考えていたんだと、その日の我を思いおこすことができる、それだけのこと。もっとゆっくり楽しみながら文を綴ってみたいと思うことが何回あるかわからない。でも、そんな時間があったら書かないかも知れない。やっぱり「ともかくも書く」ということをつづけよう。でも元気でなければ書けないことも事実。書けるだけ元気であることをよろこびとせねばなるまい。

12月11日（金）

岩崎氏の慰労の会

大屋徳本の二人の企画で、岩崎隆次郎を慰労する会が徳本宅（長住七丁目）で開かれ参加した。六時から八時半までお邪魔した。岩元和秋氏も出席したが、病気ががり、げっそりやせてみえた。西南大も来年は定年だから、あと鹿児島に帰るといっていた。この四月の知事選の時は療養中だった。内田一郎氏も今日の会によく参加して下さった。安東、大屋両夫人が台所の手伝いに来てくれていた。岩崎がやめたあとの県評は全民労連の動きとからんでどうなるのかみんな心配していた。社共の関係も、したがって県民の会も、これからどうなるか、あやしくなりつつある。今日の参加者の共通の心配事はこうした点であった。米ソの INF 全廃協定のあとにくるのは、米の軍事負担の日本分が日本にまわってきて、（レーガノ

ミックスが破綻し)、日本の右傾化が進むであろうから、連合時代の運動のゆくえが、やっぱり心配になってくるわけだ。

12月12日(土)

障害者問題に思う

市民会館で第六回「広がる希望のつどい」が開かれ、主催者としてあいさつした。三人の代表が表彰されその体験談が披露された。障害者はもちろん、その家族も大変である。完全参加と平等とはいっても、実際は決してかんたんではない。本人も家族も頭のさがるような思いで頑張っている。生きるだけで意味があるのであって名をなすというようなことではない。生きるだけで普通のひとがやっている「参加と平等」の達成なのである。帰りに、この夏北欧に行った時のことを思い出した。北欧では、ボランティアという形でなく、ホームヘルパーという形で、社会全体が、「負の社会有」という状況に努力している。しかも、家族、自治体、国という方向で責任を負おうとしている。日本の場合は、家族、ボランティアという範囲で解決しようとし、なかなか及ばない。ボランティアはいくべて大変である。障害者問題を地域も自治体もわが責任として受けとめるようになってほしいものだ。

12月13日(日)

野草幽花各自香 野草幽花皆知己

野草幽花各自香というのと野草幽花皆知己というのが出てきた。どちらの句もとつきやすく好きになれる句だが、さてどう解するのが正しいだろうか。知事になった年の夏に遠矢政己(今は没)の葦の絵を直筆で書いてもらった扇子の裏に、私も自筆で両句のうち前者を書いた。そんなのを一〇〇〇本ほど作って中元代わりに配布したのだが、今日後者を発見してハテと首をひねる次第である。皆知己というのは各自が己を知る、ということだろう。他をおしのけて大きくなろうとはしないで、分をわきまえ小さければ小さいなりに、精一ぱい生きようとしているが決して他を犠牲にしてまでのさばり出ようとはしていない。自分の領分、程をわきまえている。それが秩序というものだという意味だろうか。それは各自香とも通ずるような気がする。いいえて妙である。

12月14日(月)

労戦の全的統一と県評、地域運動

県評の松田事務局長が訪ねてきて庁議室で中食を共にしながら労戦の全的統一と今後の県評地区労のあり方について説明をうけた。一九九〇年には官公労も全的統一に参加し、総評、地区労、県評もそれなりに対応する必要が生じ、この流れはさからえないと松田はいう。ただ、選挙(資金)についてはなり行きにまかせるわけにはいかないから何としてでも従来の主体性を保つという腹のようである。独自性を貫徹しつつ政治資金をいかに確保するかが

ポイントのようだった。それから、メーデーの統一についても話題に出た。年明けしばらくすると早速この問題に取り組むことになるとのこと。私としても県評が柔軟に対応してくれること、メーデーの統一など望ましいことで、華やかにのんびりとやったらどうかとっておいた。春闘についても足並みが揃うのがいいと思っている。政治闘争については弾力性を保ちながらも独自性を貫くことが必要だと思う。地域運動でのイニシアティブが大事なことだ。

12月15日（火）

元気がないといわれる

県議会での答弁の声が小さいとの周囲の批判。自分で作為はないのだが、どこか悪いのかとひとがいう程に元気がないのだろうか。組合費の給与からの控除について議会内の抵抗があるため、心配のためではないかという人もある。これも当ってはいない。中食後の答弁では意識して少し大きな声を出してみた。助教授になり立ての頃第二分校で学生が後方から「聞えません」と大声でいったのを思い出す。それほどに成りゆきまかせに話していると、私の声はききとれないこともあるらしい。それにしても、近頃は何故か元気がないことを自認せざるをえない。体力の衰えというのが一番当っているのではないだろうか。からだ全体に張りつめたような勢いがもう一つないのが事実だ。依然としてねむれないし、運動不足で足許がおぼつかない感じだ。トータルではどうもないが、点検するようにしてみると、悪いところが少くない。メガネも近頃は合っていないようだし、両上臼歯もガタガタだ。たくあんが食いにくいほど。

【欄外記入】

指の関節がとくに痛むのは右の小指、薬指、左の中指、この三本である

12月16日（水）

国立博物館誘致のため県選出の国会議員に起ち上がってもらおうということなのだが・・・来年度政府予算対策本部設置のため上京したが、そのついでに、太田代議士、劔木氏、そして西日本新聞東京支社長を訪ねたのだが、共通して国立博物館の誘致に関してであった。太田氏は劔木氏のような派閥の心配のない人にやってもらったらどうかといい、劔木氏は自分のような浪人よりは西日本新聞のような立場の人がいいという。そして西日本新聞東京支社は明後日、そのつもりでニューオータニで朝食会を開く予定という。県選出の自民党の国会議員それに永倉、劔木氏らが寄る予定のようだ。国会議員何人くるか、そのほかどういう人達が集るのかあとで探ってもらうこととした。要するに、「政治力」の結集が必要なところまできているのだが、強力な指導性を発揮する国会議員がいないので、まずは自民党の若干名が集まるようにというのが、明後日の西日本新聞が主宰する朝食会であるようだ。単純に県選出の国会議員に起ち上がってもらおうといっても、それがなかなかむずかしいよう

だ。

12月17日（木）

歳末助け合い募金寄付金

岡垣町の第一・中央両幼稚園児が一円玉募金をするというので何十人が来ただろう揃って庁議室にやって来た。毎年の行事になっている。何万円になるだろうか、十五袋ほどある。一袋一袋がかなり重い。この募金はフクニチ新聞社の事業部に寄進され、そこから助け合いの趣旨に沿うように配分される。子供たちが競って一円玉を自宅からもって来ては貯える姿が手にとれるようだ。全く塵も積れば山となるのたとえどおりである。今日はブリジストンの石橋氏から五〇〇万円の寄贈があり二一の施設に贈られた。一施設二〇万円余であり施設内で共同で役立つものの購入にあてられ、これが十数年つづいている。少しでもいいからこうした寄付があれば有難い。身障者施設、共同作業所などに贈られる。県が仲介役になっていることに意義があるのだと思う。この二つの寄付金は全く違う性格のものだが年末にそれが重なってくるところが面白い。

12月18日（金）

「県民総立ち」といってもよくわかっていない

年頭向けの新聞、テレビの取材、知事挨拶の原稿点検など、同じようなのが次から次へと持ち込まれ、その対応に分刻みともいえる状況である。年頭の職員向け知事あいさつの中で、「県民総立ち」というのがあって、それが秘書室、広報室の者をまじえた中で話題になった。「よく意味をつかんでない」ということである。しかもそれが二方面にあてはめられる。一つは、中心部の職員はともかく、周辺部にいくと、何のことかわからんという人もおれば、さっぱり無関心の人もいるということ。もう一つは原稿を起草する中心部の人でさえ、よくわからずに「ぼーっと」解釈し用語はかっこうよく使うがやはりよくこなれてないということである。例えば県民総立ちで国体を盛り上げるという言葉を使っても、聞いている人もわからんのが多いし、聞き流す人も少なくないであろう。又起草した中心部の職員にしてからが、例えばどういうことをする場合かといわれてみると、自分ではよく考えたことがないのでわからんというたぐいである。ことほど左様に、知事のいうことの消化はむずかしいというのである。

12月19日（土）

県下農業の明と暗 ナシとミカン

福岡の農協会館ではみかん生産者の危機突破大会、筑後市では、ナシの天皇杯受賞祝賀会が開かれ、対照的な二つの会に出席することになった。温州みかんは前年比一七%の過剰生産で、価格は六〇%に暴落、生産原価もつぐなえない。摘果も積極的に行われたのに過剰生産



の圧力が著しい。アメリカの自由化圧力で輸入果実が円高を反映して急増しているという。キロ五〇円での出荷というから農家は食っていけない。県や国への救済予算要求になるに違いない。筑後市のナシは今年の農林水産祭で受賞となり昨年の朝倉町の万能ネギにつづいて二年連続という快挙となったわけである。天皇杯をとったというだけで、このナシは今年どんどん売れたそうだ。背後では何年にもわたる生産者団結、学習の苦労があったといわれる。ハウス施設栽培と無袋栽培、糖分が多く酸味が少ないのでうまいとの評。「二十世紀」の時代はすぎたようだ。筑後ナシは豊水という名称が主流。

12月20日（日）

誰しも同じく老後について考えている

知事選をはさんでずっとごむさたをしていたので、今日は近所の奥さん達に集ってもらってよもやまばなしの懇談ということで時間をとった。家族が散り散りになるこの頃であり、高齢化が進む中でみんなどう考え、何を望んでいるか、身近かの人から意見をきくのもいいと思って、私の方からその方面の話題を出した。親子、夫婦ばらばらの世相は誰しも同様に考えていることがわかった。明日の運命さえ定かならぬ。十年後といえなおさらだ。高齢化は進むばかり。親子がいつまでも一しょに住むわけでない。それは不可能だし、親の方も子の方も同じ釜のメシを食いたくないわけだ。しかも高齢化の中で、なかなか死ねないように医療が準備される。医療費はかさむが親族の介護は期待できない。誰しも養老院のようなものの完備を願い、長期入院できればそれにこしたことはないという。子どもに面倒みせられぬと考えている。

12月21日（月）

議会の予定が狂ってくる

前週の金曜日に終ってほしかった議会の知事保留質問は今日に伸び、かつ今日も文教委員会はとうとう開かれぬまま明日に持ち越してしまった。明日はすべて終わってくれないと政府陳情の上京にもさしつかえることになる。知事保留質問はぎりぎりまで「落ち」が問題とされ、摺り合わせが問題となるので、そのペーパーが出来るまでの裏面での非公式折衝に時間がかかる。勢い待機の時間が長くなる。その代わり表面に出たの答弁は型どおりでしゃんしゃんと終るのである。そこは議論というよりは儀式の場になってしまう。今は忘年会シーズン、議員たちの日程には夕方からそうしたことが多いはずである。議会の進捗はそれとは関係がない。だから必要な議員が不在ということになって進捗はさらに乱れる。われわれからみるとどうでもよいと思われることでも、議員にとっては選挙区へのおみやげということもあろう。それにこだわって知事保留でくいさがってくる人が必ずいる。会派の面子ということもあるらしい。それと付合う執行部もつらいものだ。

12月22日(火)

「幾歳月」も書きつづけなければならない

十二月議会は史上まれに期限どおり終結した。もめなくていい問題にからんで議事を混乱させ、その原因を執行部になすりつける発言を、多数野党が知事に強要し、これに応じて議事が前に進むという形式が今回もとられ、常套手段ながら、これを混えて今回は「まれに」期限内で終了した。終ってすぐ上京である。今回の政府予算陳情には前後七日間をかけることになっている。連続の六泊ということだから、カバンの中には日記や本を六冊もつめこんできた。夜はできるだけ自分の時間をもつことにして、これまで書けなかった「幾歳月」と「句記」を少しでも書き進めえたらという願いである。「幾歳月」を開いてみると、六一年の二月一九日以来書いていない。二年近くも書いてないわけだ。時間があれば「高野切」の臨書の筆を執ったということになるだろうが、これからは、つとめて「幾年月」の方にも力を入れなければならないと思う。明日から気分を入れかえることとしたい。

12月23日(水)

整備新幹線の着工には「政治決断あるのみ」と地元は叫ぶ

今日の行動は朝食会をふくめて九州新幹線早期着工の盛り上げとこれを含む他の三つの整備新幹線着工総決起大会、そして自民党本部への陳情に塗りつぶされた。午後のプリンスホテルにおけるその大会では自民党の運輸関係議員、関係県知事らが整備新幹線の着工という昨年末の自民党と政府の約束を履行すべきだということで、全くの政治集会になった。政治色の濃い演説がつづいて、私もびっくりさせられた。農協の米価集会顔負けの政治圧力を思わせた。「政治決断あるのみ」という発言が多かった。つまり新幹線を建設して採算がとれるのか、在来線は競合上どうなるのか、建設資金をどう調達するのかといった問題は思案していても仕様がな、国土の均衡ある発展のためには整備新幹線五線の着工あるのみ、公党の公約を果たさないということは、政治不信を招くばかりといった発言が支配した。自民党政調会長の渡辺美智雄氏は陳情にこたえて、「考えている」としかいわなかった。

12月24日(木)

六二年県政十大ニュース

広報室が発表した県職員の今年の県政十大ニュースによると、

- |    |       |                     |      |
|----|-------|---------------------|------|
| 1. | 4月12日 | 県知事に奥田八二氏再選         | 二〇七点 |
| 2. | 9月9日  | とびうめ国体正式決定          | 一六〇〃 |
| 3. | 3月31日 | 県二一世紀へのプラン第一次実施計画発表 | 一三一点 |
| 3. | 4月4日  | 日中定期航空路開設           | 一三一〃 |
| 5. | 年間    | 県民あげて暴力追放に乗出す       | 八五〃  |
| 6. | 8月28日 | 飯塚に九工大情報工学部キャンパス開校  | 八三点  |

7.	10月10日	一年三ヵ月ぶりに県三役勢ぞろい	六五〃
8.	2月5日	道路網の整備進む	三三〃
9.	6月23日	国立博物館の誘致本格化	二四〃
↑9.	11月26日	地方自治法施行四〇周年を迎える	二四〃
↓11.	4月4日	その他、玄界高校、高等養護学校、嘉穂看護学校開設	二二点
12.	10月30日	筑後ナシ天皇賞受賞	二二点
13.	10月5日	県政モニター制スタート	二一点

12月25日（金）

整備新幹線の着工について

予算陳情もヤマ場をこえた。整備新幹線着工問題の決着は二十八日までずれ込むだろうとのことだが、辺地への敷設だけあって地元住民の熱望は大変であり、逆に中央では必要性や採算について消極論がホツホツと出ている。財源は巨額であるが、多くは誰かが負担すると思っているらしい。むしろ議論されているのは採算と在来線存続との問題である。新幹線を作って在来線を廃止という意見もあるが、通勤通学者たちは困るだろう。それはバスでもいいともいうが、やっていけるかどうか。それに新幹線の採算は依然覚束ない。毎年の赤字累積で第二の国鉄となるのは必至とさえいわれる。「政治決着しかない」と決起大会では熱弁をふるう人が多いが、政治というものがソロバンを度外視するものだとわかりながらも、大蔵省当局あたりは、そうはさせじと抵抗している。東京周辺の交通混雑解消への投資をする方が優先するとの声は高くはないにしても根強いものがある。政治家たちの選択やいかん。年末最大の山場である。

12月26日（土）

新幹線鹿児島ルート着工運動にしばられた東京滞在

63年度政府予算要望活動のため二十二日以来上京滞在しているが、終始新幹線問題だけが進まず、そのため滞在が延びて二十八日朝までおつき合いの要がある。今日も公式には自民党会館での三十分ばかりの地元関係者の集りで経過と今後の見とおし行動予定の話が出ただけで、あとは自分の宿泊部屋で書き物読み物という日程で経過した。整備新幹線鹿児島ルートについては賛成か否かと記者は私に聞くが、九州は一つとのスローガンを掲げている限り、賛否というよりは、共同の地元知事として行動を共にするしかないというより大きな拘束がかかっている。ややもすれば、博多まできているので、福岡県は冷いとみられ勝ちだから逆の見地から拘束が強いのである。利害が直接的な久留米、大牟田の市長、筑後地方の国会議員ら、それほどに熱ある動きをしていない。地元負担あり、福岡まで特急あり、近いからそれほど強く新幹線を渴望していないのではないかと思う。長崎ルート関連は動きをしてない。

12月27日(日)

向坂ゆき夫人を訪う

朝食後川口武彦氏と連絡し、四時に鷲の宮の向坂邸を訪問することになった。もう八十三歳という奥さんは今はひとり暮しときいていたので、もしや病気とか、訪問者敬遠ということではいけないと思って川口氏にきいたのだが、快諾とのことであつた。顔の小じわすら見えない程の若々しさだし、足許もたどたどしくない。びっくりするやら安心やらであつた。同じ邸内に親戚の嶺夫妻(元東大英文教授)と和気夫妻が住んでるので万一の心配はないとのことであるが、お手伝いさんもおかず、寝食身のまわり一切を自分でされるという。ホームヘルパーもありうるし、用心の上にも用心をとっておいたが、今は自分で何でもすることが、健康にいいのだとのことであつた。川口氏の話によると読書が好きだし、先生の残された来信の整理に力を注いでおられるという。おびただしいハガキ、手紙類を整理されるとは、これ又恐れ入ったことである。執念ともいえるであろう。退屈というものもなく、用心されれば元気な毎日がつづくようだ。めでたいことである。

12月28日(月)

政治的に一応の幕引きとなる

六三年度政府予算原案のゆくえを見守るため昨夜は深夜まで東京に残っていた。新幹線鹿児島ルート着工の見定めをえようとしたのだが、決まらぬままに年を越すことになった。でも福岡の知事が最後まで残って見守ってくれたというので、熊本、鹿児島の関係者にはいい印象を与えたというのである。今朝は早々に帰福して、記者会見や庁議など「御用納め」的しめくくりをすると共に、年末挨拶まわりに市内各方面をまわった。そして、「千太」で打上げ会をしている秘書室の諸君にも一寸顔出しし、「弥生」で納めの会をしている社会党一区内県議の場にも顔を出した。どれをみてもすべて政治的な行事ばかりだが、まずは、いい意味に取っておくべきであろう。秘書室は例年やってなかったが、今年はやろうということになったという。忘年会というのが、どの程度重なり合うのか知らないが、この時点、もう終りかかっているらしい。「御用納め」が終るまでに、だいたいのサラリーマンは各グループ忘年会を終ってしまうらしい。

12月29日(火)

刀出に帰る

予算のことで長期上京する以前から、およそ計画できたので、姫路と連絡しつつ、二泊三日で刀出に行くことになった。年末あいさつをすませ、新幹線で姫路に着いたのは午後六時すぎだった。今日明日は刀出に泊る。いつもそうだが晴久のうちに泊ることになる。随行秘書は車中のみということで、今日も姫路駅で、九一と毅が出迎えてくれ、秘書内田氏は次の列車で帰博した。毅は私が来姫するというので、東京からこの時刻に会いに来て、二日

間つき合うという。サシミやスシを取ってくれていて晴久の家でごちそうをつつきながら歓談した。雅明も和代夫妻も来た。近親者の勢揃いみたいだ。九一とこの真知はこの春結婚し姫路に住み、日赤病院の検査室に勤務しているのだが、今は妊娠し、つわりがひどく来れないという。KBCが作った「この一年・知事再選」のビデオをもって来ていたので、これを映して披露。つづいて晴久が録画していた春の統一知事選関係の画を見せてもらった。苦労もあるが、こういうのを録画しておくのもいいなと思った。

12月30日（水）

小学校の時の同窓生

朝のうち九一宅で餅つきをし午後は田辺と本家に、次いで打越に挨拶に行った。待っているとの連絡なので三時半頃九一の案内で行ってみると、前田元義氏も来ていて、勘十さんの五人の男の子たちが歓迎してくれた。これにはびっくり、持って行っていたビデオも映像して二期目の私の感想などまじえて歓談した。打越でも吉田君らが待っているというので行ってみると、前田重男先生、吉田繁太郎、黒川庸、富永（大坪）好春、岩田あや子、為則（梅宮）初子の六人が待ちかまえていた。この二十六日に東京事務所に江原健三氏が訪ねてきてくれたことを皆さんに披露した。小学校の時のクラスの者ばかりなので、話は六〇年近くも前のことに及んでにぎわった。戦死した者も、病死した者もあるが、まだ半分は生きていよう。黒川がいい出して、四月には姫路で同窓会をしようじゃないかということになった。だんだん過ぎし日の友がなつかしくなってくる。初子さんは二年生の時に私と机を共にした人。山本功氏はよく会うのにもものもいわず知らん顔をしているといていた。

【欄外記入】

昔の曾左小は今中学になっている

12月31日（木）

勢揃いの年末

年末一彦、啓二、直美が全部帰省してきて、うちは大賑わいである。四人、三人、一人と計八人がふえたわけだ。刀出から三時すぎ帰宅し、夕方外出していた直美、久美、麗衣の三人が帰宅した。クミ、レイの二人は丈がすごく伸びていて見ちがえるばかりである。久美は表情が直美に似てきた。麗衣はやはり一彦に似ていると思う。サリは盛んにカタコトを使う。何をいっているのかわからないが、時にバナナとかミカンとかわかることをいう。三人の孫、三人の子が揃うのはめったにないことだろう。去年は知事選があつて、とてもその段ではなかった。反面みんな遠慮したようだ。食べる準備も大変だろうが、食卓は順次交替して使うほかない。寝るところがもう一つ不十分である。啓二らが座敷を使い、一彦らは二階を使う。何とかして寝るところは確保できるが、みんな揃って話し合うような所がない。しかし、ホテルなど使ってスペースはとったとしても、平素自分の周囲のものへの執着があるので、私

はそうはしたくない。狭くてもそれでもましよう。

#### 年末所感

「この一年」ということでKBCが県政上の一番大きな事件のトップに奥田知事再選をあげ、放映したものがあり、そのビデオを見せてもらった。保守側が四年間休みなく奥田攻撃を仕掛け、デッチ上げもいとわなかったようだが、選挙を通じてそれらがすべて奏功しなかったことが実証されたのである。勝ってよかったものの、もし負けていたら証明できなかったこともある。県職員にかかわる汚職事件の中には政治目的をもって「やらせ」たものもあるように思える。それが選挙に勝って、先方が一先ず攻撃の矛をおさめたとなると「汚職」もしばらく聞かなくなる。(ほんとうに、もっともっと長い間汚職の声をきかないことを祈る)。あとは自信をもってあれこれの政策に力を注げばいいし、いろんなことができる。他県におこらぬことが前年度は多すぎたが、再選のあった今年度は、「なぜか」そうした風聞が絶えている。これは不思議だが事実だ。また今後もそうあってほしい。来年度の政府予算案にも期待がもてるし、県レベルでも施策があれこれ進めえられそう。県庁舎跡地の利用計画立案、これは当面の大きな課題だ。再選後のこの八ヵ月、これまでにない前向きのプランが出てきたように思う。あとは「挑戦と実行」あるのみである。

#### 補遺

三月五日

午後三時頃から八時まで五時間の犬牟田行動であった。大地評を起点に社共が選挙につきまわりはじめている。県議候補の下川（共）と県職OBの浦川（社）が、私を市内あちこちを引きまわしてくれた。県民の会の「はげます会」は元の不知火小学校跡（三池労組の前）に昨年七月完成した文化会館で開かれ満員の盛況で、不況に落込んだと思えぬ熱気が感じられ、一昨日の吉井での浮羽地区県民の会集会同様、私にとって文字どおり「はげます会」になっていた。地区労を中心にまだまだ熱気は十分にあると感じられた。炭鉱、化学などの犬牟田特有の産業労働者はどうしているだろうかと気がかりになる。近頃一ヵ月余選挙のことで県内東奔西走の毎日である。公務が入っていて少しは楽ともいえるが分争いの行動がつづいている。夜は帰宅が九時から十時になるケースがしばしば。それに明朝までというような色紙揮毫の注文がくると、寝るのが十二時になってしまうことがある。睡眠不足になってしまうとってみゆきが色紙受注をひどく嫌い、森山や政治秘書たる石川の二人にやかましく固辞の意を伝えていた。しかし、頼む方にも引受ける方にも仕様がないう空気があるのだから、私はできるだけ揮毫してあげようとの態度をとっている。もらう方はすべて違うだろうが、書く方はタネがなくて同じようなことをくりかえし書いてしまう。

三月六日

中曽根は山崎拓、田中健蔵と堅い握手をして統一地方選で全国唯一福岡の知事だけを目標にして総力をあげて攻略すると豪語したのだが私の方は、それだけ武者ぶるいするほどのファイトが湧くし、名誉も感じている。姫路から手伝いに来ている雅明も向うでは専らその評判が立っているといていた。その中曽根に、今、売上税の逆風が吹いて、国会で、ああこう弁解しているが、野党の追及もはげしく、彼自身逃げ場さえ失ったかの観がある昨今である。山崎もその子分の篠田栄太郎も、候補の田中健蔵も売上税への大衆的反撥におろおろしているようにみえる。この雰囲気はどうわが方に有利に展開していくかである。

四月十九日

田中派の選挙資金が一〇億円をこえていることは常識である。ある人は五〇億といい、他の人は中央からの援助を入れると一〇〇億円ぐらいは使っているといわれると主張する。大きな開きのある推測だが、誰も定かなことは知らない。湯水のようにカネを使ったことだけはたしかだ。そのカネは九電・永倉ルートからと中央からとに分かれるだろうが、前者が基本であることは間違いない。昨日石狩山荘での雑談の中で、田中は退職金は投げ出したろうという人がいたが、そんなのは投げ出しても知れている。永倉がまわしているに違いない。田中は九大学長時代に永倉ルートのカネをかなりふんだんに利用しながら権力行使をやっていたようだ。

四月二十三日

夜テレビを見ていて現時点、混乱していた国会はようやく与野党の合意ができたため前に進むことになった。原議長が「売上税法案」の議長預りを双方にのませることができ、予算案は通すが売上税は事実上阻止という線が出たわけだ。野党の結束堅く、自民の三〇四議席の「おごり」がようやく粉碎された形になった訳だ。それでもテレビに映る中曽根は負けたとはいわないし、税制改革は国家のためやらねばならぬとポーカーフェースで答えている。直ちに訪米日程がはいっているようだが、訪米で何の約束をしてくるのだろうか。もはや国内では「死に体」になっており、誰が彼の約束の權威を感ずるだろうか。最も政治を知らぬ政治家になってしまった中曽根である。害ばかり残し、今様ファシズムの見本を残した中曽根であった。

五月十三日

東京に行ってあいさつする対象にNTTの真藤社長があった。昭和九年九大卒というから私より十年先輩である。話しているうちに播磨造船にいたという話が出て那波の社宅にいた話もとび出した。千尋、佐方も、そして「佐方の奥田さんか」とも彼はいった。話はしてみるもんだと思った。一ぺんに彼との距離が縮まったわけだ。今県は天神の教育会館の処分を

する直前にきている。代替の会館が落成すれば、入居者（教員組合）は引越し、今のを取壊して更地にする。この地はNTTが一番欲しがらるだろう。真藤氏は、熊本支社長河井氏に県のご要望に応ずるよういっておくからと私にいていた。代替地を要求するか、売却するか、価格はいくらにするかという諸条件のことだ。

七月二十七日

田中健蔵氏のことばかり書くようで悪いが、新潟に来て、仲間うちでその話が酒の席で出た。彼が福岡の県庁に遠くないところに事務所を構えたのは五月に入ってからだったろうか。参議員を狙っているとの噂もしきりだが、私の推測では参議院に打って出る隙は今のところない。むしろ選挙の後始末のため、死に体を見せず生きた風をしなければならないので事務所を構えたにすぎないのではないか。誰かの話では二億円の負債が残っているとのこと。それを返済するためのカネ集めの事務所と推測できる。又は生きた風をしばらくでもしなければ形がつかないわけだ。負けの選挙になったら、みんな逃げ散らかし、跡始末が大変なのである。田中氏も勝っていれば負債が残ろうとも何とか消し去る方便はあるだろうに、負けたらその方便が極限されてしまうだろう。永倉や山崎が担ぎ出した責任もあるのだから、かなり後始末には努力していようが、彼らも方便が極限されているに違いない。県会議員も一人一億円の選挙費用を使うといわれる今日、勝っても負けても、その後始末は大変だろうと思う。政治の現実だと割切ってしまうればそれまでなのだが、これが逆に現実の政治となってはね返り、行政に、経済に、その流れを濁す要素としてはねかえってくるはずである。私どもはそうした汚れを知らないのだが、実際の渦中の人は大変だろう。

十一月七日

先日、三県サミットに行ったあと、オランダ村に案内してもらった。今回も長崎での九州知事会だ。来てみると長崎もずいぶん都市化が進んでいて、宿の東急ホテルも立派だ。ところでオランダ村に行ったとき、ここは東印度会社全盛時代のオランダをできるだけ現実的に模写しようとしているのだと案内の人がいった。アイディアは誰かときくと社長だという。企業力のある人だと直観した。よくはやって客は万来である。ディズニーランドが幻想をかき立てるのと対照的である。後者は子供たちにいいが、オランダ村は子供にはよくないかも知れない。しかし、一七世紀当初に目標を定め、日蘭関係を少しでも知る人にとっては、懐かしい思いのするリゾートである。

十二月二十六日

来年度政府予算原案編成に向けての陳情が霞が関に渦巻いている。今回はとりわけ整備新幹線着工への圧力集団の行動が目立っている。東北（盛岡—青森）、北陸（高崎—米原）、九州（博多—鹿児島）の三線同時着工への圧力である。大蔵側は待てといい、圧力側待てない



といい、自党内も二つに割れて、二十二日の大蔵原案内示以来收拾がつかぬもつれ方である。公党の約束に何でゼニカネをいうのか、というのとゼニカネをいわないと将来禍根を残すというのと二つのせり合い。「政治的決断以外にない」と大声をあげる方が強くきこえる。

「待て」というには勇気がいる。われわれは圧力側に加わっておそくまで成行きを見守るために在京しているが果していずれをとるべきかについては自信はない。踏み切ったら第二国鉄になる、これがゼニカネの主張である。それでは地元住民が許さないから踏切れ、これが政治の声である。第二の国鉄にしない方法があれば、見とおしが立つならいうことはない。見とおしが立たないから第二国鉄論を出して「待った」をかける。自民党は宮沢、渡辺美智雄ら大物が防戦につとめている。三塚、二階堂、小里らが「踏切る」しかないといっている。今日は推進派は「党を割る用意がある」とさえいい出した。「割れるものなら割ってみろ」と最後の最後まで政府側に立つ大物がふんばっている。今晚、明日（日曜）まだまだ折衝がつづけられる。が私も賛否決しかねている。